

埋蔵文化財調査報告書54

● 朝日遺跡（第13・14・15次）

●
●
2006

名古屋市教育委員会

埋蔵文化財調査報告書54

朝日遺跡（第13・14・15次）



2006

名古屋市教育委員会

例 言

- 1 本書は、名古屋市西区中沼町に所在する朝日遺跡の第13～15次発掘調査報告書である。
- 2 調査に関する調整は、名古屋市教育委員会文化財保護室が行い、現地調査は名古屋市見晴台考古資料館が担当した。それぞれの調査の期間及び担当者は以下のとおりである。

第13次調査 期 間 2004年1月5日～2004年3月31日

担当者 伊藤正人、村木 誠

第14次調査 期 間 2004年5月10日～2004年12月24日

担当者 野澤則幸、伊藤正人

第15次調査 期 間 2005年1月24日～2005年3月11日

担当者 伊藤厚史、田原和美

- 3 本書は、見晴台考古資料館および文化財保護室職員の協力のもと、各次の調査担当者と名古屋市埋蔵文化財発掘調査員、野邊地章太が執筆し、野澤と伊藤正人が編集した。なお、付論ほかにおいて、各分野でご専門の下記の皆様より玉稿を賜わることができた。また、写真撮影については、各担当者が分担したほか、銅鐸鑄型片及び玉作り関連資料などについて、牛嶋 茂氏（奈良文化財研究所）と杉浦秀昭氏（名古屋市博物館）にご協力頂いた。

深澤芳樹、難波洋三、石黒立人、黒沢 浩、樋上 昇、永井宏幸、高妻洋成、降幡順子、堀木真美子

- 4 本書で使用する方位・座標は国土座標第Ⅶ系（世界測地系）によっており、水準値は東京湾平均海水面（T.P.）である。

- 5 出土遺物および記録類は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。

- 6 発掘資料の整理に当っては、下記の皆様の参加を得た。

（報告書作成） 樋上佐知子、稲田望子、野邊地章太、江田仁実、小川敦子

（出土資料整理） 東 夕子、池戸裕子、市橋久美子、川原則子、亀谷真弓、近藤和子、白木恵子

山本雅代、佐々木佳子、東谷桂子、櫻井博美／関田有美子、栗田一宏、間宮千尋、青山涼子、野尻久貴
眞能亮輔、鈴木祐哉（中京大学考古学研究会）／後藤麻里絵、野崎未果、畠由樹恵、喜田川恵里
井口理奈（南山大学人類文化学科）

- 7 本調査の期間中及び報告書作成にあたり、下記の関係各位よりご指導、ご協力を頂いた。記して謝意を表します。（敬称略・順不同）

赤塚次郎、池本正明、磯谷和明、石黒立人、井上洋一、今井晃樹、内田真一郎、江崎 武、長田友也
小澤一弘、小野映介、蔭山誠一、加納俊介、神谷友和、川添和暁、鬼頭 剛、北島大輔、國下多美樹
久保禎子、黒沢 浩、高妻洋成、肥塚隆保、斎藤基生、鈴木正貴、瀬川貴文、田井中洋介、寺澤 薫
永井宏幸、中川真文、難波洋三、贅 元洋、早野浩二、春成秀爾、花谷 浩、樋上 昇、深澤芳樹
福岡晃彦、降幡順子、堀木真美子、松井一明、松田 訓、丸山竜平、宮川禎一、宮腰健司、山本直人
吉田 広、渡辺 博、平田住宅自治会、愛知県埋蔵文化財センター、奈良文化財研究所
名古屋市住宅都市局、名古屋市博物館

目次

I 序章	
(1) 遺跡の概要	(伊藤正) 1
(2) 平田荘の調査	2
(3) 調査区画の設定	3
II 調査の経過	
(1) 第13次調査の経過	(伊藤正) 6
(2) 第14次調査の経過	8
(3) 第15次調査の経過	(伊藤厚) 10
III 第13・14次調査の概説と土層	(伊藤正) 14
IV 第13・14次調査の遺構	
(1) 縄文時代の遺構	(伊藤正) 41
(2) 弥生時代の遺構	42
V 第13・14次調査の遺物	
(1) 縄文土器	(伊藤正) 91
(2) 弥生土器	(村木) 92
(3) 弥生時代 石製品	(野澤・野邊地) 128
(4) 弥生時代 土製品	132
(5) 弥生時代 鹿角製品	132
(6) 弥生時代 木製品	(樋上 昇) 132
(7) 弥生時代 自然遺物	(野澤) 133
(8) 古墳時代～近世	133
VI 第15次調査	
(1) 遺構と遺物	(伊藤厚) 160
(2) 小 結	170
VII まとめ	(野澤・伊藤正) 184
付論1 朝日遺跡出土の銅鐸鑄型と菱環鈕式銅鐸	(難波洋三) 189
付論2 朝日遺跡、変容する景観	(石黒立人) 207
付論3 東日本の弥生文化／朝日遺跡	(黒沢 浩) 215
付論4 朝日遺跡出土土器における貝施紋具・調整具の検討	(深澤芳樹・永井宏幸) 221
付論5 石製銅鐸鑄型の調査と保存処理	(高妻洋成・降幡順子) 227
付論6 名古屋市朝日遺跡出土の赤色顔料	(堀木真美子) 233
付論7 放射性炭素年代測定	(パレオ・ラボAMS年代測定グループ) 241
付論8 朝日遺跡のプラント・オパール	(鈴木 茂) 246
付論9 埋設土器内容物の分析	(藤根 久) 252
付論10 朝日遺跡(第14次)の花粉化石群集	(新山雅広) 255
付論11 朝日遺跡(第15次)の花粉化石群集	(新山雅広) 263

凡例

- ・遺構名称は、方形周溝墓SZ、方形周溝墓の可能性のある遺構SZX、住居跡SB、溝SD、土坑SK、ピットPとする。
- ・本書の弥生時代の時期区分は、朝日遺跡のXI期区分を基本とする。

I期：前期（遠賀川系土器期）	VII期：後期初頭 [V-1期（仮称見晴台式）]
II期：中期前葉 [II-1期・2期（朝日式）]	VIII期：後期前半 [V-2～5期（山中式）]
III期：中期前葉末 [II-3期（朝日式）]	IX期：後期後半 [VI-1～3期（廻間I式・欠山式）]
IV期：中期中葉前半 [III-1～3期（貝田町式前半）]	X期：後期末葉～古墳時代初頭（廻間II式）
V期：中期中葉後半 [III-4・5期（貝田町式後半）]	XI期：古墳時代前期
VI期：中期後葉 [IV-1～3期（凹線文系土器）]	

<愛知県埋蔵文化財センター1994『朝日遺跡V（土器編・総論編）』より>

I 序 章

(1) 遺跡の概要

朝日遺跡は、愛知県清須市^(註1)、西春日井郡春日町、名古屋市西区にまたがる濃尾平野最大の弥生時代遺跡である。大正年間には地点貝塚多数が認識され、小規模な調査や遺物採取が繰り返されてきた。1969年以降、国道302号線・東名阪自動車道等の建設に伴って、愛知県教育委員会や愛知県埋蔵文化財センターによる発掘調査が実施されてきた。その結果、弥生時代中期を中心とした大規模な環濠集落と墓域が検出され、当時濃尾平野の中核をなす拠点的な集落だったことが明らかになった。墓域を含む遺跡範囲は、1994年に県教育委員会が作成した遺跡分布図において、東西約1.4km、南北約0.8kmに及んでいる。残念ながら、遺跡は、中心部を断ち割った道路建設によって大きな破壊を受けたが、その巨大さゆえに広範囲に密な遺構・包含層の広がりを見せている。道路部分の調査成果から、名古屋市域には居住域の東端と墓域（方形周溝墓群）が展開したことが知られていた。過去の調査に関しては、詳述する余裕が無いため、概説をまとめた『愛知県史』と同書の文献一覧以後に刊行された報告書を掲示しておく^(註2)。

図1-2には、現在の遺跡分布図の表示範囲（破線）と平田荘地区の範囲（実線）を示した。愛知県教育委員会や愛知県埋蔵文化財センターによる発掘調査では、中世以前の遺跡は、図示範囲より東方へ広がるとされている。本書で報告する弥生時代墓域も、平田荘敷地の南部を越えて東方へ広がることは間違いないが、具体的な範囲は特定できていない。第11次調査で確認された北東部の古墳時代水田の広がりや、第7次調査でプラントオパール^(註3)の検出によって推定された南東部の弥生時代水田の広がりなど、名古屋市内に限っても、範囲の確定には課題を残している。

註1 平成17年7月7日、朝日遺跡がかかる西春日井郡清洲町・新川町と西枇杷島町が合併して誕生した。

註2 宮腰健司 2003 「朝日遺跡」『愛知県史 資料編2』 愛知県
佐藤好司 2002 『朝日遺跡第11次発掘調査報告書』 名古屋市教育委員会
佐藤好司 2002 『朝日遺跡第12次発掘調査報告書』 名古屋市教育委員会
佐藤好司 2003 『朝日遺跡発掘調査報告書』 名古屋市上下水道局下水道本部

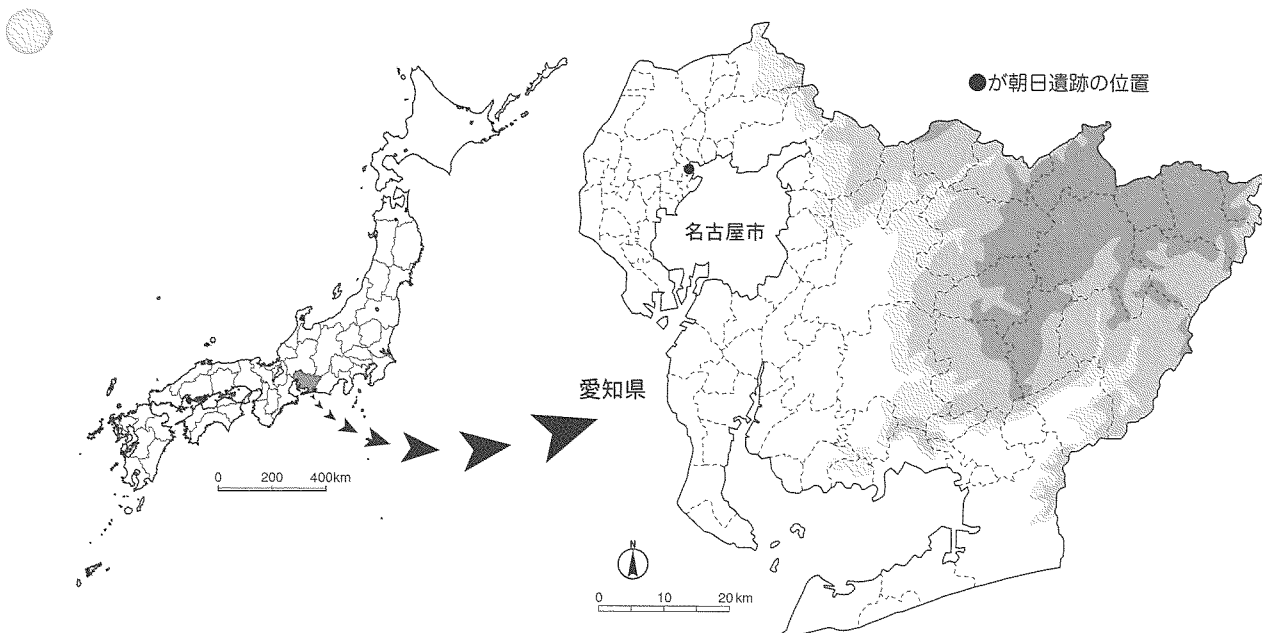


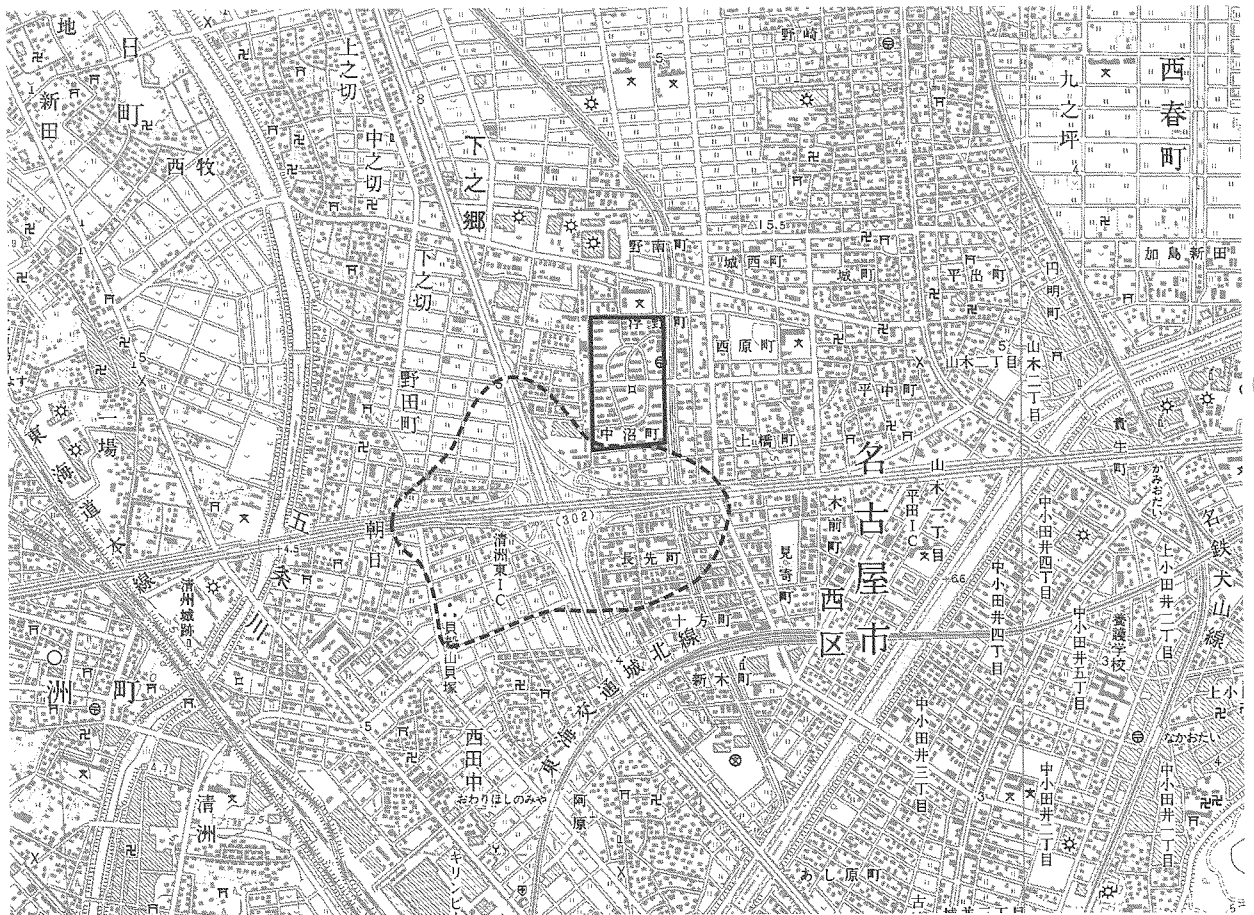
図1-1 朝日遺跡位置図

(2) 平田荘の調査

名古屋市域の朝日遺跡における発掘調査は、愛知県教育委員会等による国道関連を除けば、1978（昭和53）年を最初に、2001（平成13）年の第10次調査までは、市道部分における埋設管関連の工事による規模の小さな調査のみが行われてきた。名古屋市内では、水田地帯であった朝日遺跡東部に、昭和39年（1964）頃から造成が始まり市営住宅平田荘が建設された。当時の清洲町や春日村においては、集落域の地点貝塚が知られ、あるいは調査されていた。しかし、平田荘周辺においては顕著な遺跡の把握はされておらず、埋蔵文化財包蔵地としての認識は持たれていなかった。水田は客土で埋め立てられ、その上に住宅が建ち並んだ。昭和44年（1969）頃から進められた国道部分の調査によって、遺跡の広さや重要性が明らかとなり、平田荘の範囲にも遺跡が及んでおり残存していると考えられた。上記の市道部分の発掘調査は、これを裏付ける成果を積み重ねていった。

市教育委員会は、平田荘の建替工事に際して、全域を遺跡と想定して市住宅都市局に対応を求めた。これを受けて、平成13年（2001）の第11次調査が実施され、密集する方形周溝墓群が発見された。翌年には、第12次調査が平田荘北東部で行われた。この地点では、弥生時代の遺構は見つからず、古墳時代の水路・水田が発見され、土器や木器が出土した。この調査によって、平田荘内の全域に遺構が展開・残存しているという想定が、ほぼ間違いないものと考えられるようになった。

平成16年度には、住居棟2棟等を建設する「平田第3次公営住宅新築工事」「平田第4次公営住宅新築



(国土地理院刊行・数値地図25000名古屋「523666」「523667」より調整)

図1-2 朝日遺跡周辺図 (1:10,000)

工事」が着工予定であった。合計約3000㎡の掘削面積のうち、先行して建設される「第3次」分から平成15年度内に教育委員会が実施可能な面積（850㎡）をまず調査し、残り面積を平成16年度に調査することとした。平成15年度が第13次発掘調査、平成16年度が第14次発掘調査である。

(3) 調査区画の設定

13次調査の実施にあたって、今後予定される平田荘建て替えに伴う発掘調査における共通区画（調査グリッド）を設定した。可能であれば、朝日遺跡全体に対応する区画が、今後検討されるべきであると考えられる。しかし、平成14年4月以降は、測量法改正によって導入された世界測地系に基くことになり、同じ国土座標値が新旧データで異なる地点を示すことになった。朝日遺跡付近においては、X座標が南へ約348.8m、Y座標が東へ約270.9mずれることになった。旧座標値の原点から5m刻み等のメートル単位で割り付けられた従来のグリッドは、端数のズレが生じて、そのまま新基準で使用するの是不適切である。

将来的には、新基準（世界測地系）で統一されることは明らかであり、従来データもすべて新基準に変換して利用する必要がある。従来データとの整合は当面の便宜として必要ではあるが、これを優先して考えるべきものではない。現状での不便はあっても、保存記録として求められるべきは、世界測地系を基本としたデータである。この単純な理解のもとに、平田荘に関わる遺跡調査のグリッドは、以下のように設定した。

世界測地系に基づく座標値の第Ⅶ系原点から5m刻みに区画割りした場合に、平田荘を包括する東西300m×南北500mの長方形の範囲の北東隅を、区画の原点と仮定した。原点の座標値は、X=-85,650、Y=-27,950である。この点から、50m毎に大区画を想定した。X方向の区画にはアラビア数字を割り振り、1～0を用いた。Y方向の区画にはアルファベット大文字を割り振り、A～Fを用いた。これを組み合わせた大区画は北東隅が1A、南西隅が0Fと呼ぶ50m四方の区画である。大区画は、それぞれがさらに5m毎に小区分される。X方向にアラビア数字の1～0、Y方向にアルファベット小文字のa～jを割り振った。大区画内は、10×10の100区分され、北東隅を1a、南西隅を0jと呼ぶことにした。大区画と組み合わせて用

統一名称	調査年	年度	市教委次数	調査区名称	面積 (㎡)	構築物	備考	
ア区	2001	H13	11次	—	890	2号棟	方形周溝墓14基他	
イ区	2002	H14	12次	A区	115	ポンプ室	方形周溝墓1基	
ウ区	2002	H14		B区	1150	15号棟	古墳時代水田跡	
エ区	2004	H15	13次	(エ-1)	850	住居棟	本書	
	2004	H16	14次	1区(エ-3)	357			
	2004	H16		2区(エ-2)	56			
オ区	2004	H16		3区	337	集会所		
カ区	2004	H16	4区	199	ポンプ室			
キ区	2004	H16	5区	107	防火水槽			
ク区	2004	H16	6・7区	982	住居棟			
ラー1区	2005	H16	15次	—	200	雨水管		
リ-1区	2005	H16	(上下水道局)	—		下水管		別途報告

表1-1 平田荘地区発掘調査一覧

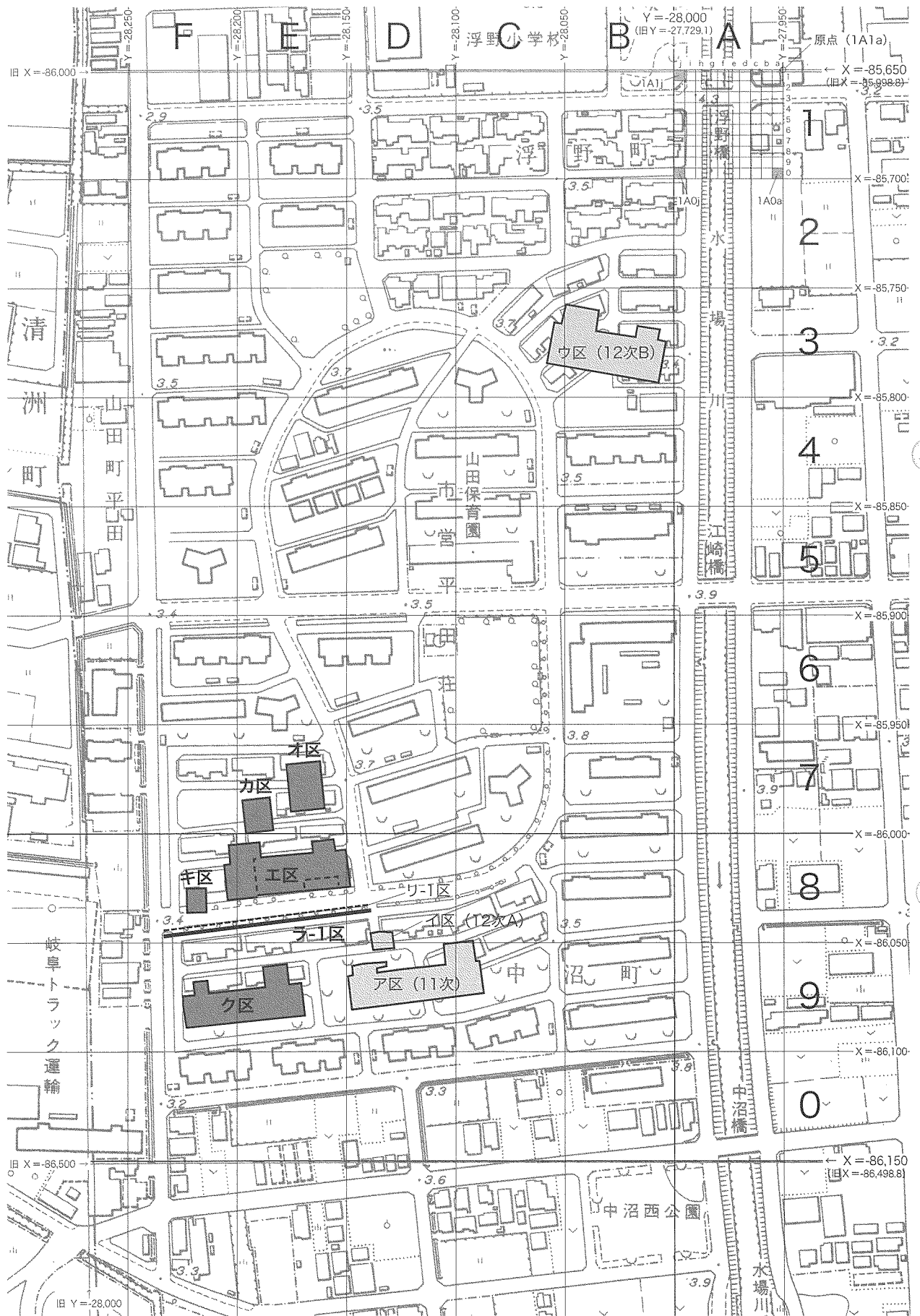


図1-3 平田荘地区詳細図

名古屋都市計画基本図「平田」昭和58年測量（1：2,500）に加筆

いれば、4文字で平田荘内の5m四方の区画を表示することになる。座標値に変換するためには、アルファベットをそれぞれ順に1から10の数字に置き換え、アラビア数字の0を10に置き換えた4つの数字（ABCDと仮称とする）を、次の計算式にあてはめれば、その区画の北東隅の数値を知ることができる。

グリッド名称が「ABCD」の場合、 $X = -85,650 - 50(A-1) - 5(C-1)$ 、 $Y = -27,950 - 50(B-1) - 5(D-1)$ 。例えば、1A1aであれば、ABCDは全て1となり、 $X = -85,650$ 、 $Y = -27,950$ 、第14次調査調査区の南西隅が位置する9F8eは9685となって、 $X = -86,085$ 、 $Y = -28,220$ となる。

今後、平田荘範囲内の調査記録の継続的把握のために、第13次調査に際して、調査区にカタカナ名称を割り振る方針を決めた。カタカナを用いたのは、英数文字を多用するグリッド名称・遺構名称と区別する意図による。この場合の調査区とは、最終的に1施設となる範囲を指す。第13次の時点で、すでに終了した3施設（住居棟2・ポンプ室1）を、調査着手順（11次・12次A・12次B）にア～ウ区と呼称することにした。13次調査区は、エ区の一部（エ-1区）であり、14次調査と合わせて最終的に調査区範囲が確定した。反省点としては、契約関係の便宜のために14次調査当初に設定した14次1～7区名称を、記録時にも用いたため、現場名称と報告名称の単一化を怠ったことである。14次1区はエ-3区、14次2区はエ-2区としてエ区の一部であり、3～5区はオ～キ区に、6・7区はク-1・2区であって合わせてク区と呼ぶことになる。本報告書においても不統一のある点をおおむねおわびするが、今後の記録方針として確認したい。

なお、埋設管等に関連する工事については、河川管・雨水管を「ラ」、上下水管を「リ」、ガス管を「ル」、電気を「レ」とし、一連の施工（調査）範囲に対して「-1」から順に枝番号を振る方針である。第15次調査は、ラ-1区と呼ぶことになる。

遺構名称は、原則として各調査区において通番を付す。複数の調査区にまたがる場合は、先行調査区の名を優先させるが、詳細は個別の判断に任せる。ただし、方形周溝墓の認定については、15次までに確認した区画単位に対してSZの連番を付す。すでに報告済みの11次の14基（SZ1～14）、12次Aの1基（SZ1）を順にSZ01～15として、本書の報告分をSZ16から付すことにする。桁合わせのゼロあるいは00の表記は、任意とする。なお、方形周溝墓の可能性を認めつつ確定できない区画については、SZX01から順に名称として用いることにする。12次A調査区の、SD1南側に想定される区画をSZX01、SD2による区画をSZX02と呼び、13次調査以降をSZX03から割り振ることにする。

Ⅱ 第13次・第14次調査の経過

(1) 第13次発掘調査の経過

平成15年度の調査は、平成16年（2004）の年明け3か月弱を期間として実施した。期間に応じて、集合住宅1棟分（約1200㎡）のうち850㎡を調査面積とした。現地では、平成15年12月まで低層住宅（昭和39年頃築）の解体工事が実施された。教育委員会では、年末に入札を行い、排土工事及び測量委託の契約をそれぞれの業者と結んだ。年明けからおこなった現地作業の概略は、表2-1に示した。

作業は、敷地を囲うフェンスや調査事務所の設置等から始まった。1月16日に市住宅都市局の担当者と掘削位置（調査区）を確認した。調査区は、建物の東部から約850㎡に合せて設定した。調査区は、施設建設のための掘削形状（範囲）から法面を確保した上端形状を決め、面積は上端で表示している。この時点では、建築位置が確定しておらず、東西南北に微妙に動く可能性があったため、調査範囲は同規模建築の第14次調査より、ひとまわり大きくなっている。なお、予定範囲の南東部に電柱が立っており、周辺の掘削ができない状態であった。結局この電柱は3月11日に撤去されたが、調査区を確定するため、1月中にはこの部分の面積を西へ拡張して、電柱周囲は次年度に調査を繰り越すことを決めた。

掘削は、1月19日から着手を予定したが、雨天により1日順延した。調査区付近は、旧住宅の解体により更地となっていたが、地表面の凹んだ部分には水が溜まって引くことがなく、表層水の排水に相当な時間を要した。地下水位が高い可能性や、表層水の集中点となる可能性を心配したが、これは住宅建設時点の造成土に粘性の強い間層があったため、幸い以後雨水の影響は受けても、地下水の影響は懸念したほ



写真2-1 13次（工-1区）表土掘削（南東から）



写真2-2 13次（工-1区）作業風景（南東から）



写真2-3 13次（工-1区）作業風景（南西から）



写真2-4 13次（工-1区）現地説明会（北東から）

日付	作業内容	日付	作業内容
1/5(月)	準備工	3/5(金)	仕上掘削 記録作業
6(火)		6(土)	
7(水)		7(日)	
8(木)		8(月)	
9(金)		9(火)	
10(土)		10(水)	
11(日)		11(木)	▽
12(月)	成人の日	12(金)	▽
13(火)	準備工	13(土)	
14(水)		14(日)	
15(木)	試掘	15(月)	
16(金)	(調査区設定)	16(火)	○ 高所写真
17(土)		17(水)	説明会準備 ☆ 空測撮影
18(日)		18(木)	▽
19(月)	▲ 排水	19(金)	▽
20(火)	表土掘削	20(土)	春分の日
21(水)		21(日)	現地説明会
22(木)		22(月)	▲
23(金)	包含層掘削	23(火)	埋戻し
24(土)		24(水)	
25(日)		25(木)	
26(月)		26(金)	撤去工
27(火)	検出掘削 仕上掘削	27(土)	
28(水)		28(日)	
29(木)		29(月)	後片付け・残務整理
30(金)		30(火)	
31(土)		31(水)	完了
2/1(日)			
2(月)	▲		
3(火)	排水		
4(水)			
5(木)			記録作業
6(金)			
7(土)			
8(日)			
9(月)			
10(火)			
11(水)	建国記念の日		
12(木)			
13(金)			
14(土)			
15(日)			
16(月)			
17(火)			
18(水)			
19(木)			
20(金)			
21(土)			
22(日)			
23(月)			
24(火)			
25(水)			
26(木)			
27(金)			
28(土)			
29(日)			
3/1(月)	排水		
2(火)			
3(水)			
4(木)			
			1ミリ以上10ミリ未満の降水量を観測した日
			10ミリ以上100ミリ未満の降水量を観測した日
			100ミリ以上の降水量を観測した日

表2-1 第13次調査作業経過

どではなかった。

1月22日には、東部でSD1＝近代以前の大規模な溝を検出した。掘削は、SD1の埋土を先行して概略掘り上げた後、西へと進めていった。表土除去（機械掘削）を人力による包含層掘削が、次いで検出掘削が追いかけるかたちで東から西へとおこなった。ただし検出は地山の状況によっては繰り返した部分もあり、仕上掘削については、方形周溝墓の大きめの溝を優先して掘削したため、単純に東から仕上がった訳ではない。SD1や周溝墓の溝下部では地下水の湧出もあったため、こうした遺構の仕上は、断続しつつ後回しになった。1月下旬以降は、包含層掘削・遺構検出掘削・遺構仕上掘削に加え、方形周溝墓埋土に残した土層断面観察用のアゼの実測などの記録作業も随時行った。

3月中旬には掘削作業を終え、高所作業車によって上空からの写真撮影を行った。次いで、クレーンに航空写真撮影用カメラを吊り下げ、写真測量用の撮影を行った。この後、現地説明会（参加者約110名）を開催し、記録作業を終えて、調査を完了した。

（2） 第14次発掘調査の経過

平成16年度の調査は、5月6日に排土工事・測量委託及び事務所賃貸借の入札を実施、工期を5月10日から12月24日として実施した。平成16年度着工の住宅新築工事2件のうち第13次で調査した部分を除く工事掘削範囲が調査対象であった。「平田第3次公営住宅新築工事」は、敷地の北半部を工事区域として計4施設を建設するものである。北半部の工事は、10月着工が予定されていたため、先行して終了させるよう工程を組んだ。発掘調査は、おおむね北半部の記録を終了した後に、南半部の「平田第4次公営住宅新築工事」区域へと移行したので、「北半・南半」「前半・後半」という呼び方をほぼ同義に混用した。記録表現では、位置関係のわかる「北半区・南半区」を必要に応じて用いる。

北半区では、第13次で着手した集合住宅（北棟と仮称する）とその他の3施設が対象であった。北棟部分には13次調査の残りの西部（1区）と電柱があった南東部（2区）の2か所の調査区を設けた。これに加えて、掘削着手順に3区（集会所）、4区（ポンプ室）、5区（防火水槽）を設定した。調査の進行状況は表2-2に示した。調査面積は、2038㎡で、内訳は表1-1に示した。1・2区（エ区）を対象に第1回空撮、3～5区（オ・カ・キ区）を対象に第2回空撮を実施した。

地下水位が上昇し、降雨量も多い時期の調査であるため、13次調査に比べて排水作業の必要性が高まることは予想していた。しかし、降雨日数と台風の接近回数は予想を上回り、これに対して工事途上である現場周辺の排水能力の限界は低かったため、特に北半区の調査では連日排水に悩まされた。調査時点の排水路の処理能力は、小型ポンプ2台分しかないため、複数の調査区を同時に調査するには制約が大きかった。まとまった雨の後には排水のみの作業日を設けざるを得なかったが、場合によってはかなりの期間排水作業と満水あるいは冠水状態のみが繰り返された調査区もあった。地下水位の上昇によって、深い遺構は底面付近から湧水して常時排水に抛らねば作業できない状態であった。特に北半区では、表2-2の表示以外にもほぼ恒常的に排水が続いていた。こうした雨水・地下水が作業工程に及ぼした影響は、非常に大きかった。かなりの部分で遺構が崩れて深部・細部が記録時点には不正確になった事、繰り返しの排水・復旧作業で遺構面が痛んだり遺物の原位置が不詳となった場合があった事、排水等の作業に時間と人員を要した分調査精度の向上が図れなかった事など、枚挙に暇無い。



写真2-5 オ (14次3) 区水没風景 (南西から)



写真2-6 オ (14次3) 区作業風景 (南東から)



写真2-7 エ (14次1) 区南部作業風景 (西から)



写真2-8 14次前半説明会 (キ=5区・北から)



写真2-9 ク (14次6) 区排水作業 (南西から)



写真2-10 ク(14次6)区SB01上部作業状況(西から)



写真2-11 ク (14次6) 区空撮準備 (南西から)

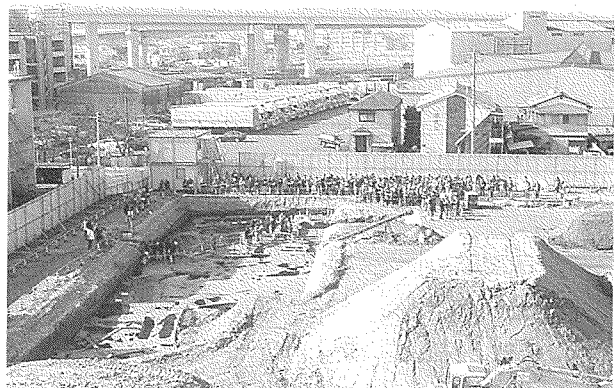


写真2-12 14次後半説明会 (ク-2=7区・東から)

日付	作業内容	日付	作業内容
5/10(月)		7/9(金)	1区:記録作業 3区: 4区:表土掘削
11(火)	準備工	10(土)	
12(水)		11(日)	
13(木)		12(月)	排水
14(金)		13(火)	▲ 5区:表土掘削
15(土)		14(水)	
16(日)		15(木)	検出掘削
17(月)		16(金)	
18(火)	(1区・2区設定)	17(土)	
19(水)		18(日)	
20(木)		19(月)	海の日
21(金)		20(火)	3区: 包含層掘削
22(土)		21(水)	
23(日)		22(木)	1区:埋戻し
24(月)		23(金)	2区:
25(火)	2区:表土掘削	24(土)	
26(水)	1区:表土掘削	25(日)	
27(木)		26(月)	4区: 5区:
28(金)	包含層掘削	27(火)	検出掘削
29(土)		28(水)	仕上掘削
30(日)		29(木)	台風10号接近
31(月)	▲	30(金)	(雨天休止)
6/1(火)	排水 排水	31(土)	
2(水)	包含層掘削	8/1(日)	
3(木)	▽	2(月)	仕上掘削: 記録作業
4(金)	検出掘削	3(火)	
5(土)		4(水)	
6(日)		5(木)	台風11号接近 ▲
7(月)	▲	6(金)	(6区・7区設定)
8(火)	▲ 2区	7(土)	
9(水)	1区:	8(日)	
10(木)	仕上掘削/記録作業	9(月)	▽ (夏季休工) 4区:
11(金)	▲ 押土盛土工	10(火)	▽ (夏季休工)
12(土)		11(水)	▽ (夏季休工)
13(日)		12(木)	▽ (夏季休工)
14(月)	排水	13(金)	▽ (夏季休工)
15(火)	仕上掘削 (3区~5区設定)	14(土)	
16(水)		15(日)	
17(木)		16(月)	3区: 5区: 排水
18(金)		17(火)	
19(土)		18(水)	
20(日)		19(木)	仕上掘削
21(月)	台風6号接近 ▲	20(金)	
22(火)	1区: 2区: 3区: 表土掘削	21(土)	
23(水)		22(日)	
24(木)		23(月)	▲
25(金)	▲ 5区: 舗装切断工	24(火)	
26(土)		25(水)	☆ ☆ ☆
27(日)		26(木)	説明会準備: 記録作業
28(月)		27(金)	▽
29(火)	仕上掘削/記録作業	28(土)	現地説明会
30(水)		29(日)	
7/1(木)	包含層掘削	30(月)	▽ 1区:埋戻し
2(金)		31(火)	▽ 6区:表土掘削
3(土)		9/1(水)	▽
4(日)		2(木)	▽
5(月)		3(金)	▽
6(火)	○ ○ 4区:表土掘削	4(土)	
7(水)	☆ ☆	5(日)	
8(木)	: 記録作業 検出掘削	6(月)	▽ 排水 3区:

表2-2 第14次調査作業経過(1)

日付	作業内容					日付	作業内容						
9/7(火)	▲	6区	3区	4区	5区	排水	11/6(土)						
8(水)		表土掘削				記録作業	7(日)						
9(木)							8(月)		6区	仕上掘削	7区	表土掘削	
10(金)							9(火)						
11(土)							10(水)					包含層掘削	
12(日)							11(木)	▲				記録作業	
13(月)			包含層掘削	4区	5区		12(金)	▲				押土盛土工	
14(火)							13(土)						
15(水)			3区				14(日)						
16(木)							15(月)	▲	排水				
17(金)							16(火)					記録作業	
18(土)							17(水)						
19(日)							18(木)	▲					
20(月)		敬老の日					19(金)						
21(火)		6区	3区	埋戻し			20(土)						
22(水)							21(日)						
23(木)		秋分の日					22(月)				7区	検出掘削	
24(金)	▲	排水					23(火)		勤労感謝の日				
25(土)							24(水)						
26(日)							25(木)						
27(月)	▲						26(金)						
28(火)				4区	埋戻し		27(土)						
29(水)		台風21号接近 ▲					28(日)						
30(木)		排水					29(月)					仕上掘削	
10/1(金)							30(火)						
2(土)							12/1(水)						
3(日)							2(木)						
4(月)			包含層掘削		5区	埋戻し	3(金)						
5(火)	▲					押土盛土工	4(土)						
6(水)	▲						5(日)						
7(木)		6区	3区	4区			6(月)			排水			
8(金)	▲						7(火)				7区		
9(土)		台風22号接近					8(水)						
10(日)							9(木)		6区	仕上掘削			
11(月)		体育の日					10(金)						
12(火)		包含層掘削			埋戻し		11(土)						
13(水)							12(日)						
14(木)							13(月)						
15(金)							14(火)						
16(土)							15(水)						
17(日)							16(木)		○	☆	○	☆	
18(月)		検出掘削				記録作業	17(金)					仕上掘削	
19(火)	▲						18(土)		現地説明会				
20(水)		台風23号接近 ▲					19(日)						
21(木)		排水			復旧		20(月)						
22(金)		仕上掘削					21(火)						
23(土)							22(水)					埋戻し	
24(日)							23(木)		天皇誕生日				
25(月)		6区					24(金)			後片付け・残務整理		完了	
26(火)	▲		3区	4区	5区	埋戻し	25(土)						
27(水)							26(日)						
28(木)													
29(金)													
30(土)													
31(日)													
11/1(月)													
2(火)													
3(水)		文化の日											
4(木)													
5(金)						7区	表土掘削						

表2-3 第14次調査作業経過(2)

着工前の目標としては、8月上旬までに北半区を終えて南半区に移行する計画であったが、以上のような次第で、南半区の着手は8月末日となった。北半区の後半（3～5区）では地元向け現地説明会（参加者約50名）を開催したが、この時点でなお北半区の記録作業は相当量を残していた。

南半区は集合住宅1棟（南棟と仮称）の範囲が調査対象であった。掘削面積は、約982㎡で、南半敷地内で全排土量の仮置きができる可能性はあった。しかし、第14次調査の着手時点では、北半・南半の境となる東西道路付近で第15次調査等の実施予定があり、敷地全体を確保できるとは限らなかった。このため、南半区は、東西に区分（6・7区）して順次調査する計画であった。最終的には、第15次調査は年明けの実施となったが、第14次の作業は、計画通りに6区（東半）＝ク-1区と7区（西半）＝ク-2区に区分し、6区から掘削を始めた。

なお、6月末に着手した北半区の埋め戻しは、排水しながら進める必要があった。前記の通り排水には制約があり、掘削作業の進む南半区の排水を優先したこともあって、北半区の埋め戻しは断続したため、見た目の埋め戻し期間は長期に及んだ。最終的には10月末に整地作業を終えて、建築工事に北半区を引き渡した。

6区の調査に入ってから、天候不順は続き、作業効率は良好とは言えなかった。9月末～10月には、繰り返し台風が接近した。直撃した訳ではないので、大きな被害を受けることはなかったが、雨水による休止と復旧を繰り返し、その影響は全体工程に余裕をなくしていった。このため10月下旬以降は、土曜日の多くを作業にあてて作業日数を確保することになった。

9月17日には、6区南西部の包含層中から擦切り痕のある碧玉片2点が出土し、付近で玉作が行われていた可能性が考えられた。当初より包含層中の石は全て遺物カゴに採取し、調査員が要否選別をするか、できない場合は全て収納する方針であったため、微細なものでない限りは剥片類も採取されていたが、その後玉作に関連する顕著な遺物の集中出土は見られなかった。しかし、住居跡埋土からの針砥石や、小規模な溝埋土からの石鋸の出土など、広い範囲にわずかな散布が認められた。

住居跡周辺は、遺物が多く、遺構密度が濃く、遺構の状況が複雑であった事と、玉作に関する情報を的確に判断・把握する必要があった。余裕を持って調査するため、6区南西部については、埋め戻しを7区と一緒にすることにして、第3回空撮後も6区を対象とした記録作業を継続した。

7区は、11月初めから表土除去に着手し、状況の確認できている6区寄り（東側）から掘削を先行させた。遺物量が6区以上に多く、各所で土器の小規模な集中地点が見られた。周溝墓群の展開は予想通りであったが、住居跡も散漫ながら7区全域に分布する状況であった。またSB04において、玉作関連遺物が出土したため、合わせて作業量は増加することになった。

こうした中で、11月19日、水洗した6区の遺物中から石製の銅鐸鑄型片が発見された。出土遺構（ク区SK01）はすでに調査を終えて埋め戻していたが、出土地点周辺の遺物の確認や、類例検索・照会をおこない、12月7日、市政記者クラブに現地説明会開催と合わせて資料提供をおこなった。鑄型片は、現時点で日本最古級という評価を受けたことと、朝日遺跡からの出土という話題性もあって、大きな反響を受けた。16日に空撮（第4回）を実施したが、SB01・02・04については、この後も掘削及び記録作業を続けた。18日の後半区現地説明会には、約330人の参加があった。22日には記録作業を終了し、直ちに埋め戻して、予定通りの年内に作業を完了した。

(3) 第15次調査の経過

第15次調査は、平田住宅内に新設する区画道路に雨水管を埋設する工事に伴う事前調査として実施した。雨水管は、幅12.0mの東西道路の中心軸線から1m南に振れた位置を中心軸として地表面から1.2m地下に埋設する計画である。今回の調査は、幅約2m、長さ約100m分を対象とした。調査期間は、2005（平成17）年1月24日から3月11日までである。調査区は狭く長いため、10～30mずつ5区に分け西端から東に向かって進めて行った。これは、隣接して北側に下水管埋設に伴う発掘調査がほぼ同時期に計画実施されることになっていたため、西側から調査の終了した箇所を埋め戻した上で調査を実施しなければならなかったことによる。下水管埋設に伴う調査は、名古屋市上下水道局が愛知産業株式会社に発注し、株式会社二友組が実施した。

2月1日から表土除去を開始し、表土除去の終わった部分から遺構検出を行った。西端近くで検出した落ち込みは、第14次調査（キ区）において自然流路の一部が推定されており、その一部かと考えたが、後に溝状遺構であることがわかり、下水管路調査（リ1区）時に掘り直した。9日に清掃、全景写真撮影（1回目）を行った。西端から25m付近で検出した溝状遺構（SD03）は、北壁に沿って東に延び、また南に曲がることから、方形周溝墓として確実であった。

この部分の南壁土層を観察すると、暗褐色砂シルト層が地山上に堆積しており、その上位層褐色シルト層が溝内に流れ込んでいることが認められた。暗褐色砂シルト層は周溝墓の盛土と考えられた。また、この周溝墓の東側では、地山のレベルが徐々に高くなっていくことが認められ、また小穴（ピット）も西端付近ではほとんど無かったことに比べ多い。

15日に清掃、全景写真撮影（2回目）を行い、翌日SD03の西側までを埋め戻した。18日にはSD06内より弥生土器1個体、21日にはSD09からは弥生土器2個体が出土した。遺物は、弥生土器の小片が出土するが、完形の土器はほかにSK17から弥生土器が出土したにすぎなかった。22日には清掃、全景写真撮影（3回目）を行った。24日は埋め戻しと、東端部分から表土除去を行った。規模の大きい遺構としてはSD18、SD19が検出された。SD19は近代の水路跡で、一部を掘削したに留めた。SD18は溝状遺構の一部と考え

られたが、掘削方向は明らかにできなかった。埋土上位は、淡灰青色土に暗灰色土が筋状に堆積していたり、炭化物ブロックを多く含んでいたりしており、一定期間窪地状になっていたようである。3月2日に清掃、全景写真撮影（4回目）を行った。3日には残る東端部分の清掃、全景写真撮影（5回目）を行った。4日以降は埋め戻しを行った。



写真2-13 調査風景 2区SD03付近

Ⅲ 第13次・第14次調査の概説と土層

2章で調査の経過にふれたが、本書は13・14次調査に15次調査を追加するかたちで作成した。このため作業上の制約から、変則的ではあるが15次については別途記述する。

(1) 第13・14次調査の概要

第13・14次調査で確認した遺構は、表3-1～6に一覧した通りである。主体となるのは、弥生時代中期の遺構である。方形周溝墓と捉えて名称を付した区画(SZ)が32基、方形周溝墓あるいはこれに類似する遺構の可能性を考えた区画(SZX)が31基あった。他に住居跡(SB)6軒、溝(SD)・土坑(SK)・ピット(P)・土器群がある。住居跡を検出したのは、ク区のみである。SZまたはSZXを構成する溝または土坑は合計約180基、区画等の想定ができなかった溝または土坑が約20基ある。土坑のうち4基は、方形周溝墓の主体部と考えられる。主体部の痕跡は、他に2基で検出されており、他に断面等で可能性が考えられる区画が4基あった。これらの主体部等計10基は、各周溝墓あるいは区画に対して1基のみ検出され、複数の主体部を確認あるいは推定した例はない。土坑は、様々な形状のものがあるが、主体部と捉えたものは、長方形を基本とした平面形が共通している。この他、幅や平面規模に対して深いものについては、土坑墓である可能性を考えたが、こうした例でも区画の一辺と見立てられるものがあり(例:エ区SK15)、確実な単独墓坑は想定されなかった。

以下、各調査区ごとの概要をまとめる。

①エ区(13次・14次1・2区)

エ区の調査区面積(13・14次の合計)は、1263 \cdot である。13・14次の調査区分は、平面図(図4-3～9)を参照されたい。平面形状は、東西約56m、南北約17mの長方形の北側に2箇所の方形張出し(階段・エレベーター)がある。地山面はおおむね平坦で、標高2.2m前後である。調査区内に方形周溝墓9基、類似区画8基を想定した。他に主な遺構としては、東部を南北に貫く近世の大溝(SD01)がある。

方形周溝墓は、四隅の切れる溝が東西に細長い墳丘部を囲み、東西方向に列をなす様相を示す。SZ16～18・24は、N80°E前後の長軸方位をほぼ共通させており、周溝は近接しつつも切り合わない。SZ16～18の墳丘側周溝下端で測った墳丘長軸長は約12～14mで、13・14次調査の確認例中では1～3番目を占める。これらに次ぐ大きさを想定するSZ19・22は、上記4基とはやや間隔があり軸方位が微妙に異なる。先後関係は把握できないが、以上の6基とSZ20を除いた区画は、これらの溝を利用して、その隙間を埋めるように築造された印象を持つ。周溝墓の先後に関しては、次章で若干の検討を加える。

主体部を把握したのは、SZ18のみである。この他SZX04の区画を認めれば、中央にある土坑が主体部の痕跡と考えられる。想定した区画の内側は、総じて掘り込みが見られず、墳丘盛土がかなり長期にわたって残存し、その後の土地利用がさほど活発ではなかったと推測される。これはエ区に限ったことではなく、方形周溝墓域からの出土遺物は貧弱であった。周溝に転落した状況で土器が出土したのは、SZ19とSZ24のみである。周溝の様子が他と異なっていたのは、SZ18東辺のSD12である。幅が広い割に底が浅めで、底面や周辺に柱穴様のピットが掘られていた。南辺であるSD10の東端でも、同様な状況が見られたが、いずれもピットの時期は不明である。建物や定型的な施設は想定できず、その性格は不詳である。

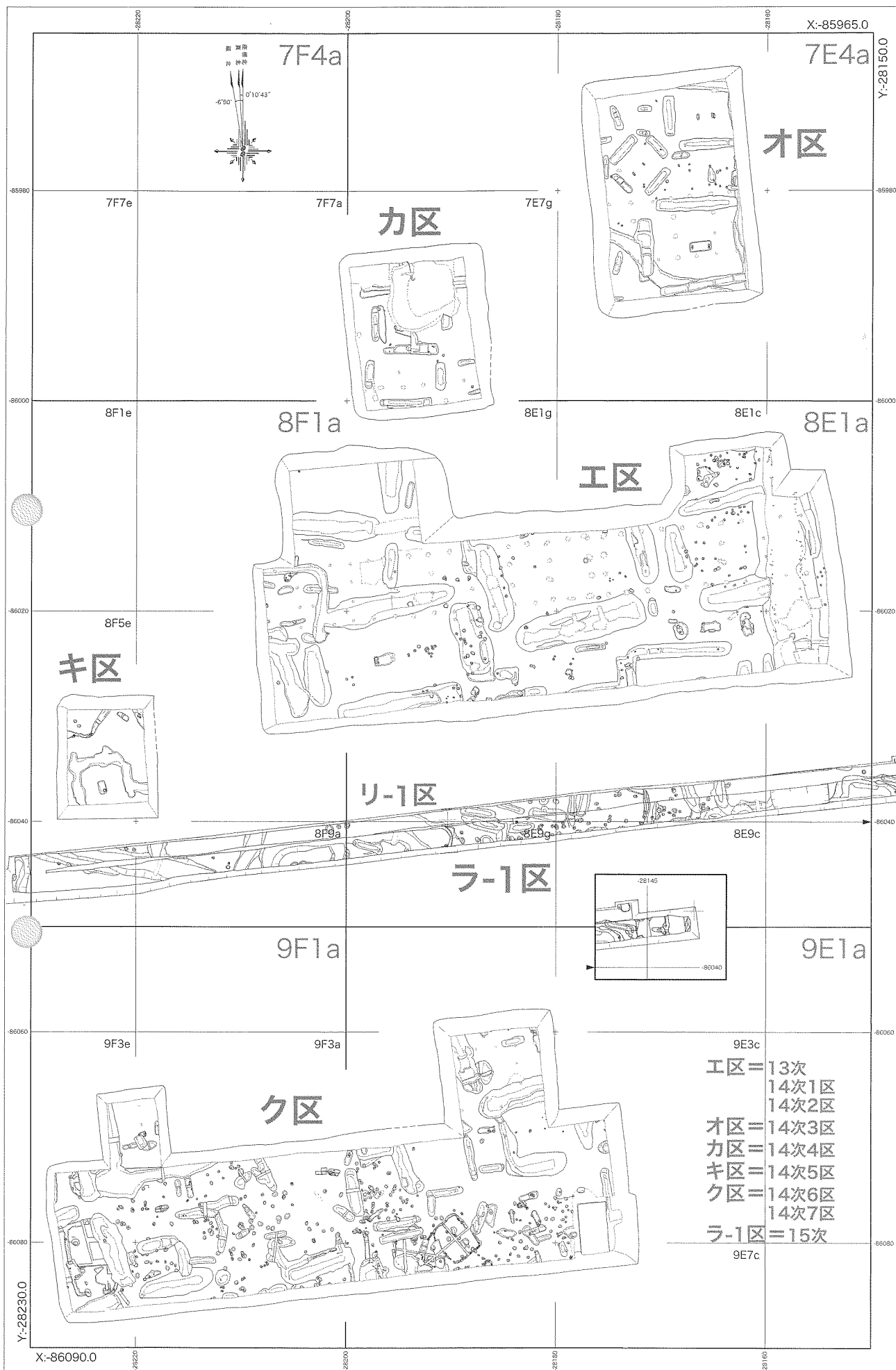


図3-1 第13～15次調査区全体図

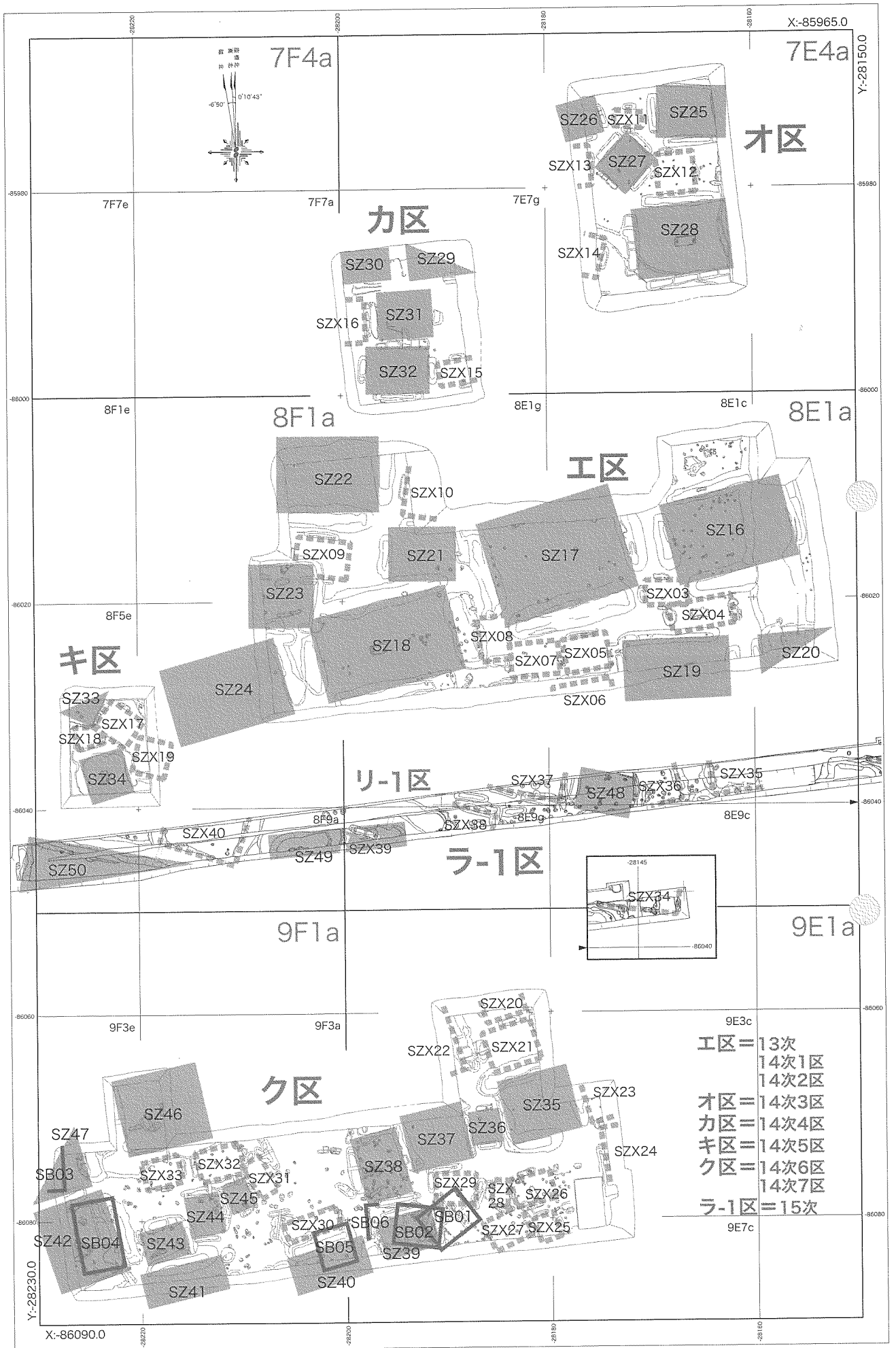


図3-2 第13~15次調査周満墓名称図

表3-1 第13～15次方形周溝墓一覧

調査区	名称	東西軸	南北軸	北(北西)辺	東(北東)辺	南(南東)辺	西(南西)辺	主体部	備考(→は先後の推定)	
エ区	SZ16	12	8	SD04	SD05	SD02	SD03	-	SD02→SZX03・04	
	SZ17	13.5	9.5+	-	SD09	SD06	SD07	-	SD06→SZX08	
	SZ18	14	8.5	SD11・SD36	SD12	SD10・SD22	SD30◎	SK18	SD11→SZ21	
	SZ19	10.5	3+	SD14○	SD21	-	SD13	断面37?	SD14→SZX04, SD13→SZX05	
	SZ20	5.5+	2.5+	SD19	-	-	SD20	-	-	
	SZ21	7	5	SD24	SD17	SD11	SD18・SD32	-	SD24→SZX10, SZ21→SD11	
	SZ22	9+	5.5+	-	SD23	SD25	-	-	-	
	SZ23	5.5+	7	SD28	SD28	SD37	-	-	-	
オ区	SZ24	1.5+	7+	-	SD29(SD38)	-	-	-	-	
	SZ25	5.5+	5	SD12	-	SD11	SD10	p18・19・20	-	
	SZ26	1.5+	3.5+	-	SD14	SD13	-	-	-	
	SZ27	4	4	SD09	SD08	SD07	SD06	p11・12	-	
カ区	SZ28	9+	7	SD01◎	-	SD02	SD03	SK01	SD01→SZX12	
	SZ29	4.5+	2.5+	-	-	SD03	SD01	断面01cda?	-	
	SZ30	4.5	2.5+	-	SD04	SD06	SD05	-	-	
	SZ31	6	3.5+	-	SD02	SD09・10	SD07	SK01?	-	
キ区	SZ32	6	4.5	SD09・10	SD13	SD12	SD11	-	SD13→SZX15	
	SZ33	3.5+	3+	-	SD02	SD02	-	-	SD02→SZX17・18	
ク区	SZ34	4	4+	SD06	SD05	-	SD01◎	SK01	SD01→SZX18	
	SZ35	6.5	6	SD03	SD04	SD01	SD02	断面02de?	SD04→SZX23, SD02→SZ36	
	SZ36	3	3.5	SD36	SD02	SD15	SD13	-	SZ35→SD02, SZ37→SD13	
	SZ37	6	5+	-	SD13	SD35	SD30	-	SD13→SZ36, SD30→SZ38	
	SZ38	4.5	6	SD07	SD30	SD32	SD66	-	SZ37→SD30	
	SZ39	5.5	3.5	SD31	SD25	-	SD08	SX01?	SZ40→SD08	
	SZ40	7.5	1.5+	SD60	SD08	-	SK09?	-	SD08→SZ39	
	SZ41	7.5+	1.5+	SD47	SD44	-	-	-	SD47→SZ43	
	SZ42	4.5+	8	SD42	SD45◎	SD46	-	SK05	SD45→SZ43	
	SZ43	4.5	3	SD48	SD59	SD47新◎	SD45新◎	-	SD59→SZ44, SZ41→SD47, SZ42→SD45	
	SZ44	3.5	4	SD57	SD54	SD53	SD59	-	SD54→SZ45, SZ42→SD59, SZ43→SD54	
	SZ45	2.5	2.5	SD58	SD63	SD64	SD54	-	SD58→SZX32, SD63→SZX31, SZ44→SD54	
	SZ46	4.5+	6.5+	-	-	SD51	SD52	断面01bc?	SD51→SZX31・32	
	SZ47	3+	3.5+	-	SD49	SD42	-	-	-	
	ラ-1区	SZ48	6.5	2+	-	SD22	-	SK12	-	-
		SZ49	13.5	2+	SD03	SD03	-	SD03	-	-
SZ50		13.5+	3+	SD02	-	-	SD24	-	-	
エ区	SZX03	4.5	2.5	SK09	SD02	p74	SK10	-	SZ16→SD02	
	SZX04	5.5	3	SD02	SK03	SD14	SK11	SK05?	SZ16→SD02, SZ19→SD14	
	SZX05	4.5	3.5	SK02・03	SD13	SD15	SK14	-	SZ19→SD13, SZX06→SD15	
	SZX06	5.5+	+	SD15	-	-	-	-	SD15→SZX05	
	SZX07	4.5	3.5	SD06	SK14	SD16a	SK16	-	-	
	SZX08	3	4	SK01	SD06	SK15○	SK02	-	SZ17→SD06	
	SZX09	4.5+	4	SD26	-	SD34	SK20	-	-	
	SZX10	1.5+	4.5+	-	-	SD24?	SD31	-	SZ21→SD24?	
オ区	SZX11	4.5	2	SD15	SD10	SD16	SD14	-	-	
	SZX12	4	4.5	SK03	SK02	SD01	SD07?	-	SZ28→SD01	
	SZX13	-	2+	-	SD19	-	-	-	-	
	SZX14	1+	3.5+	-	SD19	-	-	-	-	
カ区	SZX15	3.5+	2.5	SD14	-	SD15	SD13	-	SZ32→SD13	
	SZX16	2+	4+	-	SD08	-	-	-	-	
キ区	SZX17	4.5	3.5	SD02	SD04	-	SD05	-	SZ33→SD02	
	SZX18	2.5	2	SD02	SD05?	SD06	SD01	-	SZ33→SD02, SZ34→SD01	
	SZX19	2+	2.5+	-	-	SD07	SD05	-	-	
ク区	SZX20	6	1+	-	SD06	SD09◎	断面02c-d	-	-	
	SZX21	4.5	3.5	SD09	SD06	SD03	SK01	-	-	
	SZX22	-	5+	-	SD05◎	-	-	-	-	
	SZX23	1.5+	2+	-	-	SD10	SD04	-	SZ35→SD04	
	SZX24	-	4+	SD10?	-	-	SD11	-	-	
	SZX25	2	2+	SD28	SD21	-	SD19	-	-	
	SZX26	3	2.5	SD22	-	SD26	SD22	-	-	
	SZX27	4	2.5+	SD17?	SD27	SD20	SD18	-	-	
	SZX28	3?	2?	-	-	SD17	SD23	-	-	
	SZX29	4	3?	SD35	SD16	-	SD14	-	-	
	SZX30	5.5	2?	SD70?	SD74	SD60	SD71	-	-	
	SZX31	2.5	3.5?	SD72	SD62?	SD69?	SD63	-	SZ45→SD63	
	SZX32	4	3.5	SD51	SD61?	SD58	SD55	-	SZ46→SD51, SZ45→SD58	
	SZX33	4	2.5	SD51	SD56	SK10	SD50?	-	SZ46→SD51	
	ラ-1区	SZX34	5.5+	1+	-	-	SD14・SD17	-	-	-
		SZX35	7+	1.5+	-	-	SD20	SD21	-	-
SZX36		3.5	2+	-	SD21?	-	SD22	-	-	
SZX37		3.5+	-	-	-	SD10	-	-	-	
SZX38		5	2+	-	SD08	-	SD03	-	-	
SZX39		2.5+	1+	SD05	-	-	SK07	-	-	
SZX40		4.5+	2+	-	SD03	SD02	-	-	-	

軸長は、0.1mの単位で二捨三入した/SD・SKは調査区ごとの連番なので要注意/◎は完形・半完形土器、○は大破片が出た

表3-2 第13・14次遺構一覽(1)

◎遺物の略号：Y=弥生土器，j=条痕文，k=櫛描文，s=小片，J=縄文土器，S=石器類，[英数字]=掲載図番号，+=遺構間で接合

◎土層断面図は「断」と略した。図3-4~17に対応する。

調査区	遺構名	グリッド	埋土	備考・遺物等
エ-1 (13次)	SD01	8E1b~5b	断エ01・04・37	S[253~256]
エ-1 (13次)	SD02	8E4c	断エ05	Ys,S[130~134]
エ-1 (13次)	SD03	8E3・4d	断エ06	
エ-1 (13次)	SD04	8E2c・d	断エ07	Yks,S[135・136]
エ-1 (13次)	SD05	8E3b	断エ08	
エ-1 (13次)	SD06	8E4e~5g	断エ09・10	Yjs[1],S[50・92・137・138・189]
エ-1 (13次)	SD07	8E3h	断エ11・12	Yj[2]
エ-1 (13次)	SD08	欠番		
エ-1 (13次)	SD09	8E3・4e	断エ02cd・13	Ys
エ-1 (13次)	SD10	8E6h・i	断エ02bc・14・38ab	J[F2],Y[3・4],S[57~59・139]
エ-1 (13次)	SD11	8E4i・j	断エ02bc・15	J[F1+SD18],Yj[5],S[2・140・190]
エ-1 (13次)	SD12	8E5・6h	断エ16	Y門s,S[60・141・142]
エ-1 (13次)	SD13	8E5・6e	断エ02ab・18・19	Yj[6],S[86]
エ-1 (13次)	SD14	8E5c~5e	断エ20・21・22	Y[7・8],S[49・143~145]
エ-1 (13次)	SD15	8E6e・f	断エ02ab・23	Yj
エ-1 (13次)	SD16a	8E6g	暗灰褐	Y
エ-1 (13次)	SD16b	8E6g	断エ02ab	S[25]
エ-1 (13次)	SD17	8E3・4h	断エ02cd	
エ-1 (13次)	SD18	8E3・4j	断エ02bcd	J[F1+SD11]
エ-1 (13次)	SD19	8E5a・b	断エ03	S
エ-2 (14次-2)	SD20	8E6b	断エ37	
エ-2 (14次-2)	SD21	8E6c	断エ37	
エ-3 (14次-1)	SD22	欠番	SD10に同じ	Yks,S[65・68~70・87]
エ-3 (14次-1)	SD23	8E2・3j	断エ39bc	s,S[27]
エ-3 (14次-1)	SD24	8E3i	断エ44	Ys
エ-3 (14次-1)	SD25	8E3j・8F3a	断エ39ab・43	Y[9]+SD28
エ-3 (14次-1)	SD26	8E3j・8F3a	断エ43	
エ-3 (14次-1)	SD27	8F4b	断エ38bc	Ys
エ-3 (14次-1)	SD28	8F4a	断エ39ab・42	Y[9]+SD25
エ-3 (14次-1)	SD29	8F6b	断エ40	Yk[10・11],S[66]
エ-3 (14次-1)	SD30	8F5a	断エ41	Ys[12],S[62~64・88]
エ-3 (14次-1)	SD31	8E2i	断エ51	
エ-3 (14次-1)	SD32	欠番	SD18に同じ	
エ-3 (14次-1)	SD33	8F4b	断エ48	Yj
エ-3 (14次-1)	SD34	8F4a	断エ49・50	
エ-3 (14次-1)	SD35	8F5a	断エ47	Ys
エ-3 (14次-1)	SD36	欠番	SD11に同じ	Ys,S[61]
エ-3 (14次-1)	SD37	8F5a	断エ38bc ?	
エ-3 (14次-1)	SD38	8F5b	断エ38bc	
エ-1 (13次)	SK01	8E5h	断エ12	
エ-1 (13次)	SK02	8E5h	断エ17	
エ-1 (13次)	SK03	8E5c	断エ25	山茶碗s
エ-1 (13次)	SK04	8E5c	断エ26	
エ-1 (13次)	SK05	8E5c	断エ27	
エ-1 (13次)	SK06	8E2d	断エ28	
エ-1 (13次)	SK07	8E2d		
エ-1 (13次)	SK08	8E2d	黒色土	
エ-1 (13次)	SK09	8E4d	断エ29	
エ-1 (13次)	SK10	8E4e	断エ30	
エ-1 (13次)	SK11	8E5d	断エ31	S[1]
エ-1 (13次)	SK12	8E5f	断エ32	
エ-1 (13次)	SK13	8E5f	断エ33	
エ-1 (13次)	SK14	8E6f	断エ34	
エ-1 (13次)	SK15	8E6g	断エ35・36	Y[13],S[129]
エ-1 (13次)	SK16	8E6g	断エ35・36	
エ-1 (13次)	SK17	8E6h		Ys
エ-3 (14次-1)	SK18	8E5j	断エ45・46	
エ-3 (14次-1)	SK19	8F4b	断エ52	
エ-3 (14次-1)	SK20	8F4a	断エ39ab	
エ-1 (13次)	p1	8E2c	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p2	8E2c	暗灰褐+地山粒多	
エ-1 (13次)	p3	8E2c	暗灰褐+地山粒極めて多	
エ-1 (13次)	p4	8E1c	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p5	8E1c	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p6	8E1c	灰色+灰褐粒少	
エ-1 (13次)	p7	8E1c	灰褐	

調査区	遺構名	グリッド	埋土	備考・遺物等
エ-1 (13次)	p8	8E2c	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p9	8E2c	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p10	8E2c	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p11	8E2c	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p12	8E2c	灰褐	
エ-1 (13次)	p13	8E2c	暗灰褐	
エ-1 (13次)	p14	8E2c	灰褐	
エ-1 (13次)	p15	8E2c	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p16	8E2c	灰色+暗灰褐塊	
エ-1 (13次)	p17	8E2c	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p18	8E2c	暗灰褐+地山粒多	
エ-1 (13次)	p19	8E2c	暗灰褐+地山粒少	
エ-1 (13次)	p20	8E2c	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p21	8E2c	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p22	8E2d	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p23	8E2d	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p24	8E2d	暗灰褐+地山粒少	
エ-1 (13次)	p25	8E2d	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p26	8E2d	暗灰褐	
エ-1 (13次)	p27	8E3c	暗灰褐+地山粒少	
エ-1 (13次)	p28	8E3c	暗灰褐+地山粒少	
エ-1 (13次)	p29	8E3c	暗灰褐	
エ-1 (13次)	p30	8E3c	灰色	
エ-1 (13次)	p31	8E3c	暗灰褐+地山粒やや多	
エ-1 (13次)	p32	8E3c	暗灰褐+地山粒多	
エ-1 (13次)	p33	8E3c	暗灰褐	
エ-1 (13次)	p34	8E3c	暗灰褐+地山粒極多	
エ-1 (13次)	p35	8E3c	暗灰褐+地山粒やや多	
エ-1 (13次)	p36	8E3c	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p37	8E3c	黄灰色+暗灰褐少	
エ-1 (13次)	p38	8E3c	黄灰色+暗灰褐	
エ-1 (13次)	p39	8E3c	暗灰褐+地山粒多	
エ-1 (13次)	p40	8E3d	暗灰褐+地山塊	
エ-1 (13次)	p41	8E4c	暗灰褐+地山塊	
エ-1 (13次)	p42	8E4c	暗灰褐	
エ-1 (13次)	p43	8E4c	暗灰褐+地山粒多	
エ-1 (13次)	p44	8E4c	暗灰褐+地山粒少	
エ-1 (13次)	p45	8E4c	暗灰褐	
エ-1 (13次)	p46	8E3d	暗灰褐+地山粒少	
エ-1 (13次)	p47	8E3d	暗灰褐+地山粒少	
エ-1 (13次)	p48	8E3d	暗灰褐	
エ-1 (13次)	p49	8E2c	暗灰色シルト	
エ-1 (13次)	p50	8E4a	暗灰褐	
エ-1 (13次)	p51	8E4a	暗灰褐+地山粒やや多	
エ-1 (13次)	p52	8E4a	暗灰褐+地山粒多	
エ-1 (13次)	p53	8E4a	暗灰褐+地山粒多	
エ-1 (13次)	p54	8E4a	暗灰褐+地山粒少	
エ-1 (13次)	p55	8E4a	暗灰褐+地山粒少	
エ-1 (13次)	p56	8E4c	暗灰褐	
エ-1 (13次)	p57	8E4c	暗灰褐+地山粒多	
エ-1 (13次)	p58	8E4c	暗灰褐+地山粒多	
エ-1 (13次)	p59	8E4c	暗灰褐+地山粒やや多	
エ-1 (13次)	p60	8E4c	暗灰褐+地山粒少	
エ-1 (13次)	p61	8E4c	暗灰褐	
エ-1 (13次)	p62	8E4c	暗灰褐+地山粒少	
エ-1 (13次)	p63	8E4c	暗灰褐	
エ-1 (13次)	p64	8E3d	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p65	8E3d	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p66	8E4d	暗灰褐+地山粒少	
エ-1 (13次)	p67	8E4d	暗灰褐+地山粒多	
エ-1 (13次)	p68	8E4d	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p69	8E4d	暗灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p70	8E4d	灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p71	8E3d	灰褐+地山粒	
エ-1 (13次)	p72	8E3d	灰褐+地山粒極多	
エ-1 (13次)	p73	8E5d	暗黄灰色+暗灰褐少	
エ-1 (13次)	p74	8E5d	暗灰褐+地山粒多	
エ-1 (13次)	p75	8E3h	暗灰褐+地山粒少	
エ-1 (13次)	p76	8E3g	暗灰褐+灰色多量	
エ-1 (13次)	p77	8E4g	暗灰褐+地山粒少	
エ-1 (13次)	p78	8E4e	暗灰褐+地山粒少	
エ-1 (13次)	p79	8E4e	暗灰褐	

表3-3 第13・14次遺構一覧(2)

調査区	遺構名	グリッド	埋土	備考・遺物等
エ-1 (13次)	p80	8E5f	暗灰褐色+地山粒	
エ-1 (13次)	p81	8E6f	暗灰褐色+地山塊	
エ-1 (13次)	p82	8E6f	暗灰色+地山粒	
エ-1 (13次)	p83	8E6f	暗灰褐色+地山粒	
エ-1 (13次)	p84	8E6f	暗灰褐色+地山粒+炭粒	
エ-1 (13次)	p85	8E5g	暗灰褐色+地山粒多	
エ-1 (13次)	p86	8E5g	暗灰褐色+地山粒多	
エ-1 (13次)	p87	8E6g	暗灰褐色+地山粒やや多	
エ-1 (13次)	p88	8E6g	暗黄褐色	
エ-1 (13次)	p89	8E4h	暗灰褐色+地山粒やや多	
エ-1 (13次)	p90	8E4h	暗灰褐色+地山粒	
エ-1 (13次)	p91	8E5h	暗灰褐色+地山粒	
エ-1 (13次)	p92	8E5h	暗灰褐色+地山粒	
エ-1 (13次)	p93	8E5h	暗灰褐色+地山粒	
エ-1 (13次)	p94	8E5h	暗灰褐色+地山粒少	
エ-1 (13次)	p95	8E5h	暗灰褐色+地山粒多	
エ-1 (13次)	p96	8E5h	暗灰褐色+地山粒少	
エ-1 (13次)	p97	8E5h	灰褐色+地山粒	
エ-1 (13次)	p98	8E5h	暗灰褐色+地山粒	
エ-1 (13次)	p99	8E5h	暗灰褐色	
エ-1 (13次)	p100	8E5h	暗灰褐色+地山粒	
エ-1 (13次)	p101	8E5h	暗灰褐色+地山粒+炭粒	
エ-1 (13次)	p102	8E5h	暗灰褐色+地山粒+炭粒	
エ-1 (13次)	p103	8E5h	暗灰褐色+地山粒多	
エ-1 (13次)	p104	8E5h	不明	
エ-1 (13次)	p105	8E5h	不明	
エ-1 (13次)	p106	8E4h	暗灰褐色+地山粒	
エ-1 (13次)	p107	8E4h	灰褐色+地山粒極多	
エ-1 (13次)	p108	8E4f	灰褐色+地山粒	
エ-1 (13次)	p109	8E5e	灰褐色+地山粒	
エ-1 (13次)	p110	8E5i	黄灰色+暗灰褐色塊	
エ-1 (13次)	p111	8E5i	暗灰褐色+地山塊多	
エ-1 (13次)	p112	8E5i	暗灰褐色+地山塊多	
エ-1 (13次)	p113	8E5i	暗灰褐色+地山塊多	
エ-1 (13次)	p114	8E5i	暗灰色+地山塊	
エ-1 (13次)	p115	8E5i	灰色+暗灰褐色塊少	Y (後期)
エ-1 (13次)	p116	8E5i	暗灰褐色	
エ-1 (13次)	p117	8E5i	暗灰色+地山多+暗灰褐色少	
エ-1 (13次)	p118	8E5i	暗灰褐色+地山塊	
エ-1 (13次)	p119	8E5i	暗灰褐色+地山粒やや多	
エ-1 (13次)	p120	8E5i	暗灰褐色+地山塊	
エ-1 (13次)	p121	8E5i	暗灰色+暗灰褐色粒少	
エ-1 (13次)	p122	8E5i	暗灰褐色+地山塊	
エ-1 (13次)	p123	8E5i	暗灰褐色+地山粒	
エ-1 (13次)	p124	8E5i	暗灰褐色+地山粒	
エ-1 (13次)	p125	8E4h	暗灰褐色+地山粒	
エ-1 (13次)	p126	8E4h	暗灰褐色	
エ-1 (13次)	p127	8E4h	暗灰褐色+地山塊多	
エ-1 (13次)	p128	8E6g	暗灰褐色	
エ-1 (13次)	p129	8E6h	暗灰褐色+地山塊	
エ-1 (13次)	p130	8E6h	暗灰褐色+地山塊	Ys
エ-1 (13次)	p131	8E6h	暗灰褐色+地山粒	
エ-1 (13次)	p132	8E6h	不明	
エ-1 (13次)	p133	8E6i	不明	
エ-1 (13次)	p134	8E6i	暗灰褐色+地山粒多	
エ-1 (13次)	p135	8E6i	暗灰褐色+地山粒多	
エ-1 (13次)	p136	8E6i	暗灰褐色+地山粒多	
エ-1 (13次)	p137	8E4h	暗灰褐色+地山粒やや多	
エ-1 (13次)	p138	8E6h	暗灰褐色+地山粒多	
エ-1 (13次)	p139	8E6h	暗灰褐色+地山粒極多	
エ-1 (13次)	p140	8E6h	暗灰褐色+地山塊	
エ-1 (13次)	p141	8E6h	暗灰褐色+地山粒極多	
エ-1 (13次)	p142	8E6i	暗灰褐色	
エ-1 (13次)	p143	8E5g	不明	
エ-1 (13次)	p144	8E5e	暗灰褐色+地山塊	
エ-1 (13次)	p145	8E6h	暗灰褐色+地山粒	
エ-1 (13次)	p146	8E6h	暗灰褐色+地山粒	

調査区	遺構名	グリッド	埋土	備考・遺物等
エ-1 (13次)	p147	8E6h	暗灰褐色	
エ-1 (13次)	p148	8E3b	暗灰褐色+地山粒	
エ-1 (13次)	p149	8E5g	暗灰褐色+地山粒多	
エ-1 (13次)	p150	8E6h	暗灰褐色+地山粒	
エ-3 (14次-1)	p151	8E6j	暗褐色	
エ-3 (14次-1)	p152	8E6j	暗褐色	
エ-3 (14次-1)	p153	8E6j	暗褐色	
エ-3 (14次-1)	p154	8E6j	暗褐色	
エ-3 (14次-1)	p155	8E6j	暗灰褐色+地山粒少	
エ-3 (14次-1)	p156	8E6j	暗褐色	
エ-3 (14次-1)	p157	8F6a	暗褐色	
オ (14次-3)	SD01	7E7c~e	断オ08	S[73]
オ (14次-3)	SD02	7E8c~d	断オ04・05・06	Ys,S[74]
オ (14次-3)	SD03	7E7e・8e	断オ07	
オ (14次-3)	SD04	7E8c~e・7E7e	断オ01abde・05・06・07	S[72・89]
オ (14次-3)	SD05	7E8e	断オ15	
オ (14次-3)	SD06	7E6e	断オ09	
オ (14次-3)	SD07	7E6d・e	断オ10	
オ (14次-3)	SD08	7E6e	断オ11	Ys
オ (14次-3)	SD09	7E6e	断オ12	
オ (14次-3)	SD10	7E5d	断オ13	Ys
オ (14次-3)	SD11	7E6c・d	断オ14	木器[249]
オ (14次-3)	SD12	7E5c・d	断オ01efg	
オ (14次-3)	SD13	7E6f	断オ01de	
オ (14次-3)	SD14	7E5e	断オ17	
オ (14次-3)	SD15	7E5e	断オ18	
オ (14次-3)	SD16	7E5e	暗灰褐色	
オ (14次-3)	SD17	7E9e	断オ01bc	
オ (14次-3)	SD18	7E6c	断オ19	
オ (14次-3)	SD19	7E6f	断オ16	
オ (14次-3)	SD20	7E7c・8c	断オ01ab	
オ (14次-3)	SK01	7E8d	断オ02・03	
オ (14次-3)	SK02	7E6d	断オ20	
オ (14次-3)	SK03	7E6d	断オ21	
オ (14次-3)	p1	欠番		
オ (14次-3)	p2	7E6c	暗褐色	
オ (14次-3)	p3	7E6d	暗褐色+地山粒	
オ (14次-3)	p4	7E6d	暗褐色+地山粒	
オ (14次-3)	p5	7E6d	暗褐色+地山粒	
オ (14次-3)	p6	7E6d	暗褐色+地山粒	
オ (14次-3)	p7	7E6d	暗褐色+地山粒多	
オ (14次-3)	p8	7E7e	黒灰シルト+地山	
オ (14次-3)	p9	7E5e	黒褐色	
オ (14次-3)	p10	7E6e	黒褐色	
オ (14次-3)	p11	7E6e	暗褐色	
オ (14次-3)	p12	7E6e	暗褐色	
オ (14次-3)	p13	7E6e	暗褐色	
オ (14次-3)	p14	7E6e	暗褐色+地山粒少	
オ (14次-3)	p15	7E6e	暗褐色+地山粒少	
オ (14次-3)	p16	7E7e	暗褐色+地山粒少	
オ (14次-3)	p17	7E7e	暗褐色	
オ (14次-3)	p18	7E5d	暗褐色	
オ (14次-3)	p19	7E5d	暗褐色+地山粒少	
オ (14次-3)	p20	7E5d	暗褐色	
オ (14次-3)	p21	7E6d	暗褐色+地山粒	
オ (14次-3)	p22	7E6c	暗褐色	
オ (14次-3)	p23	7E6c	黒褐色(カ?)	
オ (14次-3)	p24	7E6c	黒褐色+地山粒少(カ?)	
オ (14次-3)	p25	7E6c	黒褐色+地山粒少(カ?)	
オ (14次-3)	p26	7E6c	暗褐色	
オ (14次-3)	p27	7E6d	暗褐色	
カ (14次-4)	SD01	7E8i	断カ01cd	Y[16]
カ (14次-4)	SD02	7E9i	断カ14	Ys
カ (14次-4)	SD03	7E8h	断カ01da	
カ (14次-4)	SD04	7E8i	断カ01cd	
カ (14次-4)	SD05	7E8j	断カ01bc	
カ (14次-4)	SD06	7E8j	断カ13	
カ (14次-4)	SD07	7E9j	断カ12	
カ (14次-4)	SD08	7E9j	断カ12	Ys
カ (14次-4)	SD09	7E0j	断カ06・07	
カ (14次-4)	SD10	7E9i・0i	断カ07・08・09	
カ (14次-4)	SD11	7E0j	断カ05	
カ (14次-4)	SD12	8E1i・j	断カ02・03・04	S
カ (14次-4)	SD13	7E0i	断カ10	S[31・75・146]
カ (14次-4)	SD14	7E0h	断カ11	

表3-4 第13・14次遺構一覧(3)

調査区	遺構名	グリッド	埋土	備考・遺物等
カ (14次-4)	SD15	7E0h	断カ01da	
カ (14次-4)	SK01	7E9i	断カ08・15	
カ (14次-4)	p1	欠番		
カ (14次-4)	p2	7E9j	黒褐+地山粒少	
カ (14次-4)	p3	7E0i	黒褐+地山粒多	
カ (14次-4)	p4	7E0i	黒褐	
カ (14次-4)	p5	7E0h	黒褐+地山粒多	
カ (14次-4)	p6	7E9j	黒褐	
キ (14次-5)	SD01	8F8f	断キ01ab	Yj[17・18]+SD06.S[76]
キ (14次-5)	SD02	8F7e・f	断キ01bcd・06	Ys.S[147]
キ (14次-5)	SD03	8F6d・7d	断キ01da	
キ (14次-5)	SD04	8F6e・7e	断キ07	
キ (14次-5)	SD05	8F7e・8e	断キ05	Y[19].S
キ (14次-5)	SD06	8F7e・f	断キ04	Y[18]+SD01
キ (14次-5)	SK01	8F8e	断キ02・03	
キ (14次-5)	p1	8F7f	黒褐	
キ (14次-5)	p2	8F7f	黒褐+青灰色砂	
キ (14次-5)	p3	欠番	黒褐	
キ (14次-5)	p4	8F8e	黒褐+灰色砂(カ?)	
ク-1 (14次-6)	SB01	9E6h	断ク31・32・33	Y[20~32].S[81・103・192]
ク-1 (14次-6)	SB02	9E7i	断ク28・32・34	Y[33~38].S[120・224].植物[250]
ク-2 (14次-7)	SB03	9F5・6f	断ク03gh	Y[39~43].S[3・121]
ク-2 (14次-7)	SB04	9F7e・f	断ク65~68	Y[44~51].S[4・8・33・43・51・52・96・122・123・188・193~195・204・205・216・217・42・225・227~229・238~240・243].加工円盤[246].植物[251]・同(米)
ク-2 (14次-7)	SB05	9E7j・9F7a	断ク03cd・40	Y[52~58.54+SD60]
ク-2 (14次-7)	SB06	9E6・7j	断ク03c	Y[59・60]
ク-1 (14次-6)	SD01	9E5g	断ク07	J[B]
ク-1 (14次-6)	SD02	9E4・5g	断ク08	Ykj
ク-1 (14次-6)	SD03	9E4g・h	断ク02de・07	J[E].Yj[61~66].S[148]
ク-1 (14次-6)	SD04	9E4・5f	断ク02ef	S[149]
ク-1 (14次-6)	SD05	9E3h	断ク02cd・04・05	Ys[67]
ク-1 (14次-6)	SD06	9E3g	断ク02cde	Y (上面)
ク-1 (14次-6)	SD07	9E5j	断ク02ab	J[C].Yj[68・69].S[23・117・150・151]
ク-1 (14次-6)	SD08	9E7j	断ク03bcd・02a	Yj.S[152]
ク-1 (14次-6)	SD09	9E3g	断ク06	Y[70].S[153]
ク-1 (14次-6)	SD10	9E5f	断ク02fg	
ク-1 (14次-6)	SD11	9E5f	断ク09	Y
ク-1 (14次-6)	SD12	9E4h	断ク02bc	Y[71]
ク-1 (14次-6)	SD13	9E5h	断ク12	Y
ク-1 (14次-6)	SD14	9E6i	断ク26	Y
ク-1 (14次-6)	SD15	9E5h	断ク10	Yj[72].S[154・155]
ク-1 (14次-6)	SD16	9E6h	断ク24	Y[73].S[77・156・157]
ク-1 (14次-6)	SD17	9E6h	断ク22	
ク-1 (14次-6)	SD18	9E7h	断ク03bc	Yj[74・75]
ク-1 (14次-6)	SD19	9E7g	断ク03bc・21	Ys
ク-1 (14次-6)	SD20	9E7g	断ク03bc	Yj
ク-1 (14次-6)	SD21	9E7f	断ク20	Ys
ク-1 (14次-6)	SD22	9E6g	断ク23	S[93]
ク-1 (14次-6)	SD23	9E6h	断ク24	Ys
ク-1 (14次-6)	SD24	9E6g	断ク13・14	Ys
ク-1 (14次-6)	SD25	9E7h	断ク03bc	Ys
ク-1 (14次-6)	SD26	9E6g	断ク16	Ys
ク-1 (14次-6)	SD27	9E6g	断ク17	
ク-1 (14次-6)	SD28	9E6g	断ク18	Ys
ク-1 (14次-6)	SD29	9E6g	断ク14	Ys
ク-1 (14次-6)	SD30	9E5i	断ク02ab・27	Yj[76]
ク-1 (14次-6)	SD31	9E6i	断ク28	Yk.S[158]
ク-1 (14次-6)	SD32	9E6i	断ク28	Yjk.S[40・159]
ク-1 (14次-6)	SD33	9E6f	断ク19	Ys
ク-1 (14次-6)	SD34	9E6g	断ク15	
ク-1 (14次-6)	SD35	9E6h・i	断ク25	Yj[77・78]
ク-1 (14次-6)	SD36	9E4h	断ク11	Y[79].S[219]
ク-1 (14次-6)	SD37	9E7h	断ク31・32	Ys
ク-1 (14次-6)	SD38	9E7i	断ク30	Yj
ク-1 (14次-6)	SD39	9E7i	→SX01	Yj
ク-1 (14次-6)	SD40	9E7j	→SB02	
ク-2 (14次-7)	SD41	9F7f	断ク03fg	
ク-2 (14次-7)	SD42	9F6f	断ク03fg	Yj.S[32]
ク-2 (14次-7)	SD43	9F6f	断ク03fg	
ク-2 (14次-7)	SD44	9F8c	断ク03de	Ys.S[53・128]
ク-2 (14次-7)	SD45	9F6・7e	断ク65~67	Y[80~83].S[9・80・110・160~162・200・215・237]
ク-2 (14次-7)	SD46	9F8e	断ク03def・72	Y.S[102・163・201・236]
ク-2 (14次-7)	SD47	9F7c・d	断ク60・61	Y[84~90].S[37・164].植物(米)
ク-2 (14次-7)	SD48	9F6・7d	断ク63	Yj.S[127]
ク-2 (14次-7)	SD49	9F5・6e	断ク03h.一部SD50と混	Y[91].Ys.S[42・165]
ク-2 (14次-7)	SD50	9F5・6e	断ク03h・52.一部SD49と混	Y[92].Yjs.S[10・42・165~170・198]
ク-2 (14次-7)	SD51	9F5c・d	断ク01c・48	Yj[93~96].S[171]
ク-2 (14次-7)	SD52	9F4e	断ク51	Yj
ク-2 (14次-7)	SD53	9F7c	断ク58	Yj[97].S[11]
ク-2 (14次-7)	SD54	9F6・7c	断ク57	Yjk
ク-2 (14次-7)	SD55	9F5c	断ク46	Y[96].S[97・172]
ク-2 (14次-7)	SD56	9F5d	断ク47	
ク-2 (14次-7)	SD57	9F6c	断ク55	Y
ク-2 (14次-7)	SD58	9F6c	断ク55・56	Yj.S[173~175]
ク-2 (14次-7)	SD59	9F7d	断ク61・62	Yj
ク-2 (14次-7)	SD60	9F7a・b	断ク40	Y[54+SB05・98~100].S[94・176~181・202].鹿角[248]
ク-2 (14次-7)	SD61	9F5b	断ク44	Yk.S[46・47・54・90・98・118・119・223].鹿角[247]
ク-2 (14次-7)	SD62	9F5b	断ク44	Y[101~104].S[16・45・55・182・203・214]
ク-2 (14次-7)	SD63	9F6b	断ク43	Ys
ク-2 (14次-7)	SD64	9F6b	断ク42	Yks.S[41]
ク-2 (14次-7)	SD65	9E6j・9F6a	断ク39	Ys.S[183・210・212]
ク-2 (14次-7)	SD66	9E5・6j	断ク38	Y[105~107].S[184~186]
ク-2 (14次-7)	SD67	9E5j	断ク37	Y[108~113]
ク-2 (14次-7)	SD68	9F7d	断ク64	Ys
ク-2 (14次-7)	SD69	9F6b	断ク41	Ys.S[199]
ク-2 (14次-7)	SD70	9F6・7b	断ク41	Yk.S[233].赤色顔料? [252]
ク-2 (14次-7)	SD71	9F7b	断ク41	Ys
ク-2 (14次-7)	SD72	9F5b・c	断ク45	Yjs
ク-2 (14次-7)	SD73	9F5d	断ク49	Ys
ク-2 (14次-7)	SD74	9F7a		Ys.S[187]
ク-2 (14次-7)	SD75	9F6f	断ク03fg	S[5]
ク-2 (14次-7)	SD76	9F5f		
ク-2 (14次-7)	SD77	9F5e	断ク50	Ys
ク-2 (14次-7)	SD78	9F7e	暗灰褐.木根?	SB04貼床面.S[7]
ク-1 (14次-6)	SK01	9E3h	断ク05	Y[114・115].S[244]
ク-1 (14次-6)	SK02	9E6f	断ク19	
ク-1 (14次-6)	SK03	9E6i	断ク29	Yjs
ク-1 (14次-6)	SK04	9E7i	断ク03bc	
ク-1 (14次-6)	SK05	9F7f	断ク66・69	Yjs.S[197・241]
ク-2 (14次-7)	SK06	9F7c	断ク59	Y[116~121]
ク-2 (14次-7)	SK07	9F5a	木根?	
ク-2 (14次-7)	SK08	9F7e	断ク66	Ys
ク-2 (14次-7)	SK09	9F7b	断ク03cd	Ys[122]
ク-2 (14次-7)	SK10	9F6d	断ク54	Y
ク-2 (14次-7)	SK11	9F7b	断ク03cd	
ク-2 (14次-7)	SK12	9F5・6e	暗灰褐	Y[126].S[13]
ク-2 (14次-7)	SK13	9F5e	断ク03h	Ys
ク-2 (14次-7)	SK14	9F7e	断ク68	SB04古床面
ク-1 (14次-6)	p1	9E6g	褐	
ク-1 (14次-6)	p2	9E6g	褐	
ク-1 (14次-6)	p3	9E7h	暗灰色+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p4	9E7h	黒灰色	
ク-1 (14次-6)	p5	9E6h	茶褐	
ク-1 (14次-6)	p6	9E7h	暗褐	
ク-1 (14次-6)	p7	9E7h	暗灰褐	Ys
ク-1 (14次-6)	p8	9E6h	暗褐	
ク-1 (14次-6)	p9	9E7g	黒褐	Y?s
ク-1 (14次-6)	p10	9E7g	暗褐	
ク-1 (14次-6)	p11	9E7g	暗褐	
ク-1 (14次-6)	p12	9E7g	暗褐	Ys
ク-1 (14次-6)	p13	9E6g	暗褐	Ys
ク-1 (14次-6)	p14	9E6g	暗褐	Ys
ク-1 (14次-6)	p15	9E7h	黒褐	

表3-5 第13・14次遺構一覽(4)

調査区	遺構名	グリッド	埋土	備考・遺物等	調査区	遺構名	グリッド	埋土	備考・遺物等
ク-1 (14次-6)	p16	9E7g	暗褐		ク-1 (14次-6)	p94	9E6i	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p17	9E6g	暗褐		ク-1 (14次-6)	p95	9E6j	暗褐+地山粒少	Y?s
ク-1 (14次-6)	p18	9E6g	暗褐		ク-1 (14次-6)	p96	9E6j	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p19	9E6g	暗褐		ク-1 (14次-6)	p97	9E6j	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p20	9E6g	暗褐		ク-1 (14次-6)	p98	9E6j	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p21	9E6g	暗褐		ク-1 (14次-6)	p99	9E6j	暗褐	土器s
ク-1 (14次-6)	p22	9E6g	暗褐+地山粒少		ク-1 (14次-6)	p100	9E6j	暗褐	
ク-1 (14次-6)	p23	9E6g	暗褐		ク-1 (14次-6)	p101	9E5j	暗褐	
ク-1 (14次-6)	p24	9E6g	暗褐		ク-1 (14次-6)	p102	9E5j	暗褐	
ク-1 (14次-6)	p25	9E7h	暗褐+地山粒少	Ys	ク-1 (14次-6)	p103	9E7j	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p26	9E6h	暗褐+地山粒少		ク-1 (14次-6)	p104	9E5i	暗褐	
ク-1 (14次-6)	p27	9E7g	暗褐+地山粒少		ク-1 (14次-6)	p105	9E7j	茶褐	
ク-1 (14次-6)	p28	9E7g	暗褐		ク-1 (14次-6)	p106		減 (SX01の一部)	Y
ク-1 (14次-6)	p29	9E6h	淡褐		ク-1 (14次-6)	p107	9E4h	暗灰シルト質+地山粒	
ク-1 (14次-6)	p30	9E6g	暗褐+地山粒少		ク-1 (14次-6)	p108	9E4h	暗褐	
ク-1 (14次-6)	p31	9E6f	暗茶褐	Ys	ク-1 (14次-6)	p109	9E4h	暗灰色	減.Ys
ク-1 (14次-6)	p32	9E6f	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p110	9F8f	断ク03fg	減?.Ys
ク-1 (14次-6)	p33	9E7h	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p111	9F7f	断ク03fg	
ク-1 (14次-6)	p34	9E7h	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p112	9F8c	暗灰シルト (粘性強)	Ys
ク-1 (14次-6)	p35	9E6f	暗茶褐		ク-2 (14次-7)	p113	9F5d	灰色シルト (粘性強) + 地山粒	
ク-1 (14次-6)	p36	9E6f	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p114	9F5d	灰色+地山小粒密	J[A]
ク-1 (14次-6)	p37	9E7f	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p115	9F7f	黒色・やや砂質	Yk.S[226]
ク-1 (14次-6)	p38	9E6f	黒褐+地山粒少	Ys	ク-2 (14次-7)	p116	9F6e	暗灰色+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p39	9E6f	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p117	9F6e	暗灰色+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p40		暗褐+地山粒少	減	ク-2 (14次-7)	p118	9F7e	暗灰色	Ys.S(石針)
ク-1 (14次-6)	p41	9E6g	暗褐+地山粒少	Ys	ク-2 (14次-7)	p119	9F6b	暗灰色	Ys
ク-1 (14次-6)	p42	9E6g	淡褐		ク-2 (14次-7)	p120	9F6b	暗灰色+地山粒多	
ク-1 (14次-6)	p43	9E6f	暗褐		ク-2 (14次-7)	p121	9F5b	黒灰色+地山粒多	Y[127]
ク-1 (14次-6)	p44	9E6g	暗褐		ク-2 (14次-7)	p122	9F6b	暗茶褐	Ys
ク-1 (14次-6)	p45	9E6f	暗褐		ク-2 (14次-7)	p123	9F6b	暗茶褐	Ys
ク-1 (14次-6)	p46	9E6f	暗褐		ク-2 (14次-7)	p124	9F6b	暗灰色	
ク-1 (14次-6)	p47	9E7f	暗褐+地山粒多		ク-2 (14次-7)	p125	9F6b	暗灰色+地山粒多	
ク-1 (14次-6)	p48	9E6f	暗茶褐		ク-2 (14次-7)	p126	9F6b	暗灰色	
ク-1 (14次-6)	p49	9E6f	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p127	9E6j	暗灰色+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p50	9E6f	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p128	9E6j	暗茶褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p51	9E6f	暗灰褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p129	9E6j	暗茶褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p52	9E6g	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p130	pF6a	暗灰色+地山粒少	S
ク-1 (14次-6)	p53	9E6f	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p131	pF6a	暗灰色+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p54	9E6f	茶褐・黒褐	名称重複	ク-2 (14次-7)	p132	9E5j	暗茶褐+地山粒多	
ク-1 (14次-6)	p55	9E5f	暗褐+地山粒多		ク-2 (14次-7)	p133	9E5j	暗茶褐+地山粒多	
ク-1 (14次-6)	p56	9E6h	黒灰色		ク-2 (14次-7)	p134	9E5j	暗茶褐+地山粒多	
ク-1 (14次-6)	p57	9E6h	暗褐		ク-2 (14次-7)	p135	9F7c	暗茶褐	Ys
ク-1 (14次-6)	p58	9E6h	暗褐		ク-2 (14次-7)	p136	9F7b	暗茶褐	
ク-1 (14次-6)	p59	9E6f	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p137	9F7b	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p60	9E6f	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p138	9F7b	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p61	9E6f	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p139	9F8c	暗褐	
ク-1 (14次-6)	p62	9E6f	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p140	9F7c	暗褐	Ys
ク-1 (14次-6)	p63	9E6h	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p141	9F7c	暗灰色	
ク-1 (14次-6)	p64	9E6i	黒褐	Ys	ク-2 (14次-7)	p142	9F7c	暗褐	
ク-1 (14次-6)	p65	9E6i	暗褐+地山粒少	Ys	ク-2 (14次-7)	p143	9F5c	暗褐	Ys
ク-1 (14次-6)	p66	9E6i	暗褐+地山粒多		ク-2 (14次-7)	p144	9F7a	灰褐	
ク-1 (14次-6)	p67	9E6i	暗褐+地山粒多	Ys	ク-2 (14次-7)	p145	9E7j	灰褐	Yk
ク-1 (14次-6)	p68	9E6i	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p146	9E7j	灰褐	
ク-1 (14次-6)	p69	9E6i	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p147	9F7b	灰褐	
ク-1 (14次-6)	p70	9E6i	暗褐+地山粒多		ク-2 (14次-7)	p148	9F7b	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p71	9E6i	暗褐+地山粒多		ク-2 (14次-7)	p149	9F7b	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p72	9E5j	暗褐+地山粒多		ク-2 (14次-7)	p150	9F7a	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p73	9E6j	暗褐+地山粒多		ク-2 (14次-7)	p151	9F7c	暗褐+地山粒少	Ys
ク-1 (14次-6)	p74	9E6j	暗褐+地山粒多		ク-2 (14次-7)	p152	9F7b	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p75	9E6j	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p153	9F6b	暗褐+地山粒少	Ys
ク-1 (14次-6)	p76	9E6j	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p154	9F7a	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p77	9E6j	暗褐+地山粒少	Ys	ク-2 (14次-7)	p155	9F7a	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p78	9E5j	暗褐		ク-2 (14次-7)	p156	9F7a	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p79	9E5j	暗褐	Ys	ク-2 (14次-7)	p157	9F5c	暗褐+地山粒多	
ク-1 (14次-6)	p80	9E5j	暗褐+地山粒		ク-2 (14次-7)	p158	9F5c	暗褐+地山粒少	Ys
ク-1 (14次-6)	p81	9E5j	暗褐+地山粒		ク-2 (14次-7)	p159	9F5c	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p82	9E5j	暗褐+地山粒	Ys	ク-2 (14次-7)	p160	9F6a	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p83	9E5j	黒褐	Ys	ク-2 (14次-7)	p161	9F6a	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p84	9E5j	黒褐		ク-2 (14次-7)	p162	9F6c	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p85	9E6j	暗褐		ク-2 (14次-7)	p163	9F6c	暗褐+地山粒少	S
ク-1 (14次-6)	p86	9E6j	暗褐		ク-2 (14次-7)	p164	9F6c	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p87	9E6j	暗褐		ク-2 (14次-7)	p165	9F6c	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p88	9E6j	暗褐		ク-2 (14次-7)	p166	9F6c	暗褐+地山粒少	土器s
ク-1 (14次-6)	p89	9E6j	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p167	9F6c	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p90	9E6j	暗褐+地山粒少		ク-2 (14次-7)	p168	9F6c	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p91	9E6j	暗褐+地山粒少						
ク-1 (14次-6)	p92	9E6i	暗褐+地山粒少						
ク-1 (14次-6)	p93	9E6i	暗褐+地山粒少						

表3-6 第13・14次遺構一覽(5)

調査区	遺構名	グリッド	埋土	備考・遺物等
ク-2 (14次-7)	p169	9F7a	暗褐+地山粒少	滅?
ク-2 (14次-7)	p170	9F7e	断ク72	SB04出入口,S[36]
ク-2 (14次-7)	p171	9E6j	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p172	9F7a	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p173	9F7a	暗褐+地山粒少	Ys
ク-2 (14次-7)	p174	9E6j	暗褐+地山粒少	Ys
ク-1 (14次-6)	p175	9E6i	暗褐+地山粒多	
ク-1 (14次-6)	p176	9E6i	茶褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p177	9E6h	暗褐+地山粒少	SB01.Y[30]
ク-1 (14次-6)	p178	9E6h	暗褐+地山粒少	SB01.Y[31・32]
ク-1 (14次-6)	p179	9E7h	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p180	9E6i	暗茶褐+地山粒少	Ys
ク-2 (14次-7)	p181	9E6i	暗褐+地山粒少	Ys
ク-2 (14次-7)	p182	9F6a	暗褐+地山粒少	Ys
ク-2 (14次-7)	p183	9F6a	暗褐+地山粒少	滅?
ク-2 (14次-7)	p184	9F6b	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p185	9F6b	暗褐+地山粒少	Ys
ク-2 (14次-7)	p186	9F6b	暗褐+地山粒少	Ys
ク-2 (14次-7)	p187	9F6b	暗褐+地山粒少	Ys
ク-2 (14次-7)	p188	9F6b	暗褐+地山粒少	Ys
ク-2 (14次-7)	p189	9F6b	暗褐+地山粒少	Ys
ク-2 (14次-7)	p190	9F6b	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p191	9F6b	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p192	9F6c	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p193	9F6b	暗褐+地山粒少	Ys
ク-2 (14次-7)	p194	9F6b	暗褐+地山粒少	Yjs
ク-2 (14次-7)	p195	9F6b	暗褐+地山粒少	Ys
ク-2 (14次-7)	p196	9F5b	暗褐+地山粒少	Ys
ク-1 (14次-6)	p197	9E6i	暗褐+地山粒少	Ys
ク-1 (14次-6)	p198	9E7h	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p199	9E6h	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p200	9E6h	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p201	9E6h	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p202	9E5j	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p203	9E5j	不明	
ク-1 (14次-6)	p204	9E5j	不明	
ク-1 (14次-6)	p205	9E6j	暗褐	SB02床面
ク-2 (14次-7)	p206	9E6j	暗褐+地山塊	
ク-2 (14次-7)	p207	9E6j	暗褐+地山塊	滅?
ク-2 (14次-7)	p208	9F7d	暗灰褐	Ys
ク-2 (14次-7)	p209	9F5e	黒褐+地山	S
ク-2 (14次-7)	p210	9F5f	黒褐+地山	
ク-2 (14次-7)	p211	9F5f	暗灰色	
ク-2 (14次-7)	p212	9F6f	暗灰色	
ク-2 (14次-7)	p213	9F6e	暗褐	滅
ク-1 (14次-6)	p214	9E7i	暗褐+地山粒少	S,炭
ク-1 (14次-6)	p215	9E6i	暗褐+地山粒少	
ク-1 (14次-6)	p216	9E7i	暗褐	Ys
ク-2 (14次-7)	p217	9F7a	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p218	9F6d	暗褐	
ク-2 (14次-7)	p219	9F6d	暗褐	
ク-2 (14次-7)	p220	9F6e	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p221	9F6e	暗褐	
ク-2 (14次-7)	p222	9F6e	暗褐	
ク-2 (14次-7)	p223	9F6d	暗褐	
ク-2 (14次-7)	p224	9F6d	暗褐	
ク-2 (14次-7)	p225	9F6c	暗灰色	
ク-2 (14次-7)	p226	9F5c	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p227	9F5c	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p228	9F5c	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p229	9F5c	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p230	9F5d	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p231	9F6d	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p232	9F7d	暗褐+地山粒多	
ク-2 (14次-7)	p233	9F7d	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p234	9F7d	暗褐	
ク-2 (14次-7)	p235	9F7d	暗褐+地山粒多	
ク-2 (14次-7)	p236	9F7d	暗褐	
ク-2 (14次-7)	p237	9F7d	暗褐	Ys
ク-2 (14次-7)	p238	9F7d	暗褐	Ys
ク-2 (14次-7)	p239	9F6c	暗褐+地山粒少	Yks
ク-2 (14次-7)	p240	9F6e	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p241	9F6e	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p242	9F6e	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p243	9F8d	暗褐+地山粒少	Ys
ク-2 (14次-7)	p244	9F7e	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p245	9F7d	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p246	9F7d	暗褐+地山粒少	

調査区	遺構名	グリッド	埋土	備考・遺物等
ク-2 (14次-7)	p247	9F7d	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p248	9F7d	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p249	9F7d	茶褐	
ク-2 (14次-7)	p250	9F7d	暗褐+地山粒少	Ys
ク-2 (14次-7)	p251	9F6c	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p252	9F6d	暗褐+地山粒少	Yj
ク-2 (14次-7)	p253	9F6c	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p254	9F6d	暗褐+地山粒少	Ys
ク-2 (14次-7)	p255	9E7i	暗褐+地山粒多	Yks,S(石針)
ク-2 (14次-7)	p256	9E7i	暗褐+地山粒多	
ク-2 (14次-7)	p257	9F6f	断ク65	SB04貼床土
ク-2 (14次-7)	p258	9F7e	暗灰褐	SB04貼床下,Y[46]
ク-2 (14次-7)	p259	9F7e		SB04貼床土,Ys
ク-2 (14次-7)	p260	9E7j	茶褐	
ク-2 (14次-7)	p261	9F6a	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p262	9F6a	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p263	9F6a	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p264	9F6a	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p265	9E6j	暗褐	
ク-2 (14次-7)	p266	9F6b	暗褐+地山粒少	
ク-2 (14次-7)	p267	9F7e	SB04埋土に共通	
ク-2 (14次-7)	p268	9F8e	SB04埋土よりやや黒味強	
ク-2 (14次-7)	p269		欠番	Ys
ク-2 (14次-7)	p270		欠番	
ク-2 (14次-7)	p271	9F7e	断ク71	SB04貼床下,Ys,S[6]
ク-2 (14次-7)	p272	9F6e	灰色・黒色・地山混成	SD45底面
ク-2 (14次-7)	p273	9F7e	黒褐+地山粒少	SB04周溝
ク-2 (14次-7)	p274	9F6e	SB04埋土に共通	SB04貼床面
ク-2 (14次-7)	p275	9F7e	SB04埋土に共通	SB04貼床面,Ys,SI218・230~232・234]
ク-2 (14次-7)	p276	9F6e	黒色	SB04貼床面
ク-2 (14次-7)	p277	9F6e	SB04埋土に共通	SB04貼床面
ク-2 (14次-7)	p278	9F6e	SB04埋土に共通	SB04貼床面
ク-2 (14次-7)	p279	9F6e		SB04貼床下
ク-2 (14次-7)	p280	9F6e		SB04貼床下
ク-2 (14次-7)	p281	9F7e	暗灰色	SB04貼床面?
ク-2 (14次-7)	p282	9F7e	暗灰色	SB04貼床面?
ク-2 (14次-7)	p283	9F7f	暗灰色+地山粒密	SB04貼床面?
ク-2 (14次-7)	p284	9F7e	黒色・シルト質強	SB04貼床下?
ク-2 (14次-7)	p285	9F7e	暗灰色	SB04貼床下?
ク-2 (14次-7)	p286	9F7e	暗灰色	SB04貼床下?
ク-2 (14次-7)	p287	9F7e	暗灰色	SB04貼床下?
ク-2 (14次-7)	p288	9F6e	暗灰色・砂質	SB04貼床下?,Y[51]
ク-2 (14次-7)	p289	9F6f	暗灰色・砂質	SB04貼床下?
ク-2 (14次-7)	p290	9F6f	断ク65	SB04貼床下,Ys
ク-2 (14次-7)	p291	9F7e	暗灰砂質・掘方地山混	SB04貼床下
ク-2 (14次-7)	p292	9F7e	暗灰色・炭片混	SB04貼床面?
ク-2 (14次-7)	p293	9F5c	暗灰褐・黒味強	空撮後検出
ク-2 (14次-7)	p294	9F7e	暗灰色	SB04周溝
ク-2 (14次-7)	p295	9F6f	暗灰色・地山塊密	SB04貼床下?
ク-2 (14次-7)	p296	9F6e	断ク68	SB04貼床下
ク-2 (14次-7)	p297	9F6e	暗灰色	SB04貼床下?
ク-2 (14次-7)	p298	9F7e	SB04埋土に共通・地山粒密	SB04貼床下?
ク-2 (14次-7)	p299	9F7e	暗灰色・黒味強	SB04貼床下?
ク-2 (14次-7)	p300	9F7e	暗灰色・黒味強	SB04貼床下,赤色顔料
ク-2 (14次-7)	p301	9F7f	暗灰色	SB04貼床下
ク-2 (14次-7)	p302	9F7f	暗灰色・地山粒やや密	SB04貼床下
ク-2 (14次-7)	p303	9F7f	暗灰色	SB04貼床下
ク-2 (14次-7)	土器群1	9F5a	断ク01cd	9F5a北壁東土器群
ク-2 (14次-7)	土器群2	9F5a	断ク01cd	9F5a北壁西土器群
ク-2 (14次-7)	土器群3	9F5b	断ク01cd	9F5b北壁土器群
ク-2 (14次-7)	土器群4	9F5d	断ク01bc	9F5d東壁土器群
ク-2 (14次-7)	土器群5	9F4e	断ク01ab	9F4e北壁土器群
ク-2 (14次-7)	土器群6	9F7・8d	断ク60	SD47南肩部土器群
ク-1 (14次-6)	SX01	9E7i	断ク34	S[222]

ピットの集中は、SZ16とその北方の調査区張出部にも見られた。ただし、こちらは柱穴状というには深さや規模が小ぶりで、また埋土も近世溝（SD01）に近似したものが多く見られた。周溝墓に近い時期を想定するよりは、近世溝の存在と関連する可能性が高いと言えよう。弥生時代（～古墳時代初め）の一連の造墓活動の後、明確な遺構が残されたのは、近世溝のみである。

②オ区（14次3区）

今回報告する中では最も北に位置する。東西15.1m、南北22.3mの長方形の調査区である。地山面はおおむね平坦で、標高2m前後である。調査区内に方形周溝墓4基、類似区画4基を想定した。比較的大型の2基は、長軸がほぼ共通する東西方向を示す。その他の区画も、これに準じた方位軸であるが、1基のみ（SZ27）極端に傾いた軸方位を示す。周溝墓の溝は、全て四隅が途切れており、互いに切り合わない。

転落状況の土器が出土したのは、SZ28の北辺溝のみである。先後関係を明示する部分はないが、SZ27は、他の周溝墓より新しいと推定される。特異なあり方の遺物としては、SZ25の南辺溝底面で出土した木製鋤が挙げられる。主体部は、SZ28の明確な土坑と、SZ25・27で痕跡を認めた。

周溝墓の時期より新しい遺構としては、2条の溝を認めた。SD04は、SZX14の北辺溝、SZ28の西辺溝南半、同南辺溝の中央～西部を繋いで掘られている。周溝の大半が埋没しつつも墳丘が存在する状態で、水路として整えられたものと考えられる。SD20は、調査区の東壁際で肩を検出したもので、埋土の状況や方向性から、エ区SD01と一連となる近世の大溝と考えられる。

オ区の意義は、弥生時代の墓域の北東端が、さらに北東に広がることを明示した点で重要である。

③カ区（14次4区）

エ区とオ区の間位置する東西12.9m、南北15.4mの長方形の調査区である。地山面はおおむね平坦で、標高2m前後である。北半に大規模な攪乱があるが、方形周溝墓4基、類似区画2基の想定には影響無いと思われる。周溝墓の規模は、いずれも小さく、軸方位はエ区北西張出部やオ区の周溝墓とほぼ共通する。転落状況の土器出土は見られず、まとまった遺物の出土は、SZ31東辺の埋土上面のみであった。確実な主体部は認められなかったが、SZ29と31に主体部の可能性がある落ち込みが見られた。

周溝墓より新しい時期の遺構としては、調査区西壁および南東部壁で断面記録した溝状遺構がある。埋土は、エ区SD01（近世溝）に近似しており、時期も近世以降と考えられる。

④キ区（14次5区）

エ区の西方に位置する東西9.4m、南北11.4mの長方形の調査区である。地山面は、北部で標高約2m、南部で1.7mと傾斜している。排水をしないと、南半は常時水没した。方形周溝墓2基、類似区画3基を想定した。水没状態が長く、砂質の地山は水流で崩壊を繰り返したため、切り合いや溝形状は十分把握・記録できなかった。SZ34は、溝内出土土器から、古い段階のものと考えられ、軸方位はエ区の列状をなす主要周溝墓と共通している。SZ34には主体部があり、西辺溝には転落または溝内埋置の土器があった。調査中には南半が全体に南へ下がる状況から、ク区との間に小規模な谷地形（流路）の存在を予測したが、第15次調査の結果、地形として捉えるような流路は存在しなかった。

⑤ク区（14次6・7区）

建て替え後の住居棟としては、最も南西に位置する地点である。エ区と同規模の平面形であるが、北側の張り出し位置は逆になっている。建物の位置が確定していたため、エ区よりもひとまわり小さく、主体

の長方形部分は東西約55m、南北約15mである。南東隅に、旧施設基礎のコンクリート盤があったが、他には大きな攪乱は見られなかった。調査区内に方形周溝墓13基、類似区画14基を想定した。周溝墓は、総じて小規模である。調査区外にかかるものには、やや大型のものがあるが、エ区の規模を上回るものはなさそうである。区画の軸方位は、おおむね共通し、エ区の主要な一群ともほぼ共通する。SZXは、これに比べて軸方位がやや乱れるが、既存の周溝墓等の間に、小規模な区画を収めたことによるのであろう。想定図においては、調査区中央や東部に区画の空白域があるが、こうした部分にも区画範囲を想定しがたい溝や土坑があって、実際には区画の不明瞭な埋葬施設（小墳丘）が存在したと思われる。

ク区では、住居跡6軒を把握した。切り合いを確認した3軒は、すべて住居が方形周溝墓より古いと認められた。また、住居の床面付近に土器（片）が遺棄あるいは残置された状況の住居が5軒あり、これらの土器は今回確認した方形周溝墓の最古段階と同じか先行するものであった。5軒は、いずれも朝日式の末頃から貝田町式の初頭の幅に収まっている。この時期の土器は、ク区の包含層中で土器群として捉えたものも共通し、ク区内のピットが集中する部分とともに、さらに住居跡が存在した可能性がある。

住居のうちSB04では玉作りが行なわれていたと考えられ、SB01や02からも玉作り関係の遺物が出土している。古墳時代以降は、包含層中に土器小片が存在したが、明確な遺構は認めなかった。周壁断面には、炭化物を含む褐灰色土層が、ほぼ地山レベルまで埋没した周溝の上面を覆うように観察された。この層は、オ区SD04（3区溝）で分析された草本炭化物層と共通すると思われる。

（2）標準土層

13・14次調査では、図3-3に示した位置で土層断面図を作成した。断面位置は、調査区周壁と主要遺構の中心付近に設定した。本来、土層注記内容を整理して、下記大別との整合を示し、また周辺遺構・土層との関連について検討結果を明示すべきであるが、本書ではほぼ現場作成のままの図および注記を提示する。整理作業としては未完の状態であり、印象論に留まるが、土層状況に関わる全体的状況をまとめる。

調査区内の土層は、次のように4大別できる。

① 1層群（近現代の盛土・攪乱土）

現代の盛土については、造成の進捗を物語る細分が可能であったが、詳細な把握はしていない。エ区SD01の上層においては、排水溝としてのSD01の機能が、造成がある程度進んだ後も維持改修されていた状況を示していた。平田荘建設時およびそれ以後のカクランは、カ区北半やク区南東隅で規模の大きな施設が見られたが、この他に顕著だったのは低層住宅の基礎杭列程度であり、近代以降の明確な掘り込み（カクラン）は限られていた。埋土等の状況からカクランとして記録した部分には、樹木の根茎等の痕跡が重複あるいは密集した部分や近世～近代の耕作に関わった掘り込みを含んでいる。

② 2層群（近世以降の耕作土）

造成直前段階の水田面は、広範囲で単純に埋め立てられていた。畦は断面で明瞭に捉えられたが、この面では記録は残していない。水田面や畦は、灰色・青灰色のシルト質土であり、その下部は鉄分の沈着によって黄褐色～橙褐色を呈していた。この鉄分の影響は、本来の色調の把握を困難にさせており、2層群と3層群の区分が曖昧となった部分がある。近世面からは浅い凹みのような掘り込みがいくつか見られた程度であった。ク区の南部（南壁）では、灰色土が厚く盛られており、水田がある時期から畑地となった

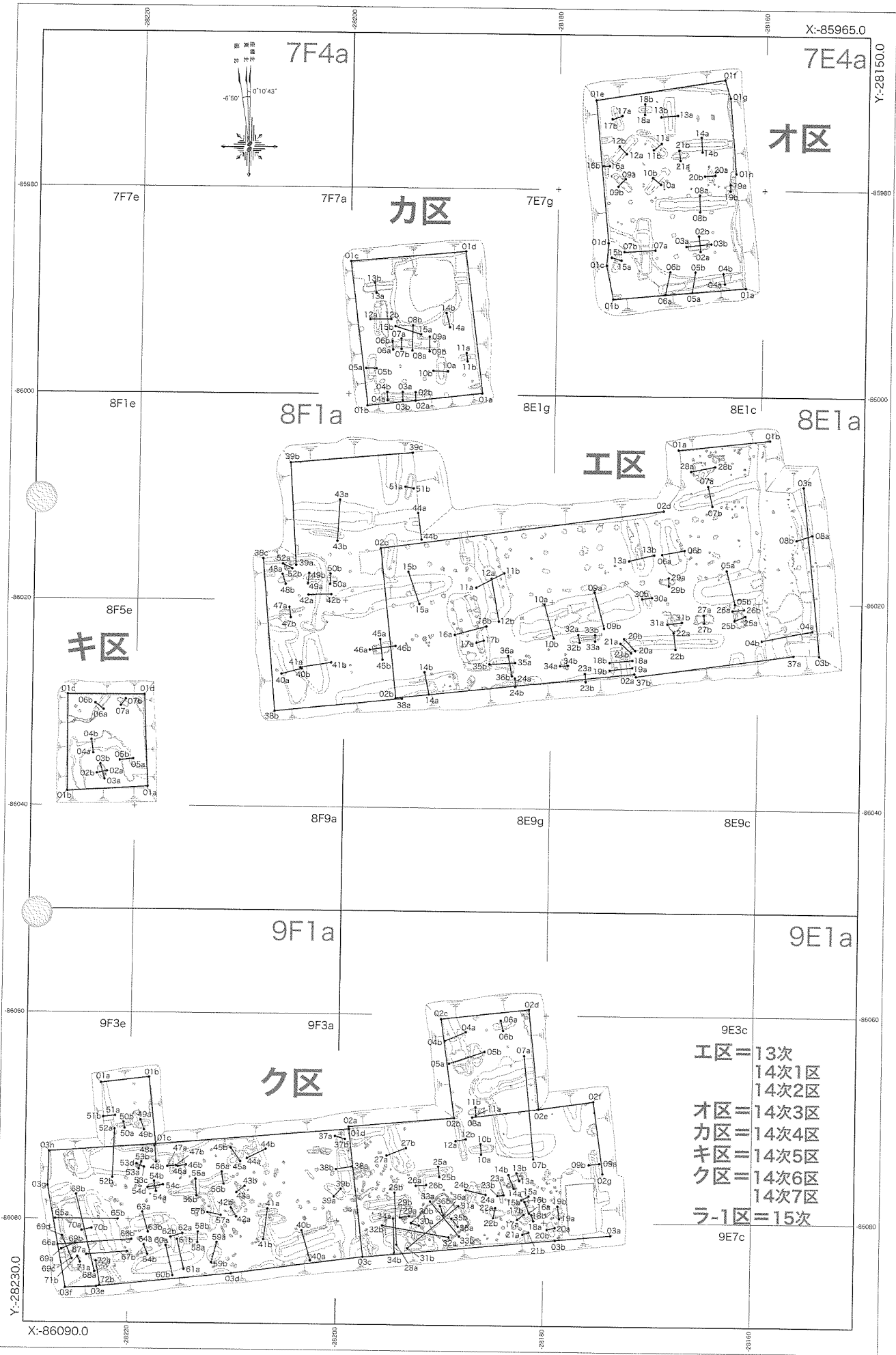
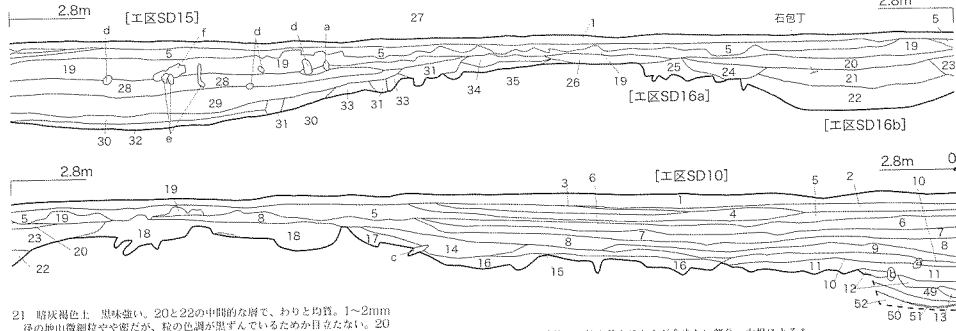
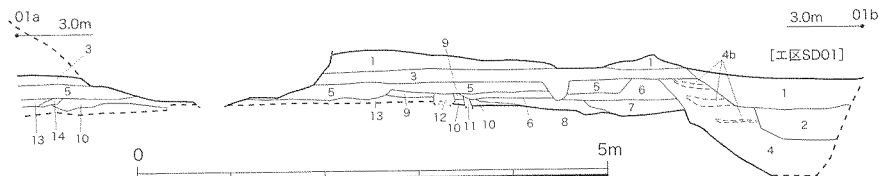


図3-3 第13・14次断面図位置図

【01a - 01b / エ区SE1b~1d北壁】

- 1 明灰色砂 シルトブロック混
- 2 暗灰色土 シルト大ブロック(主体)。砂混じり土。直上の1層直前の埋め立てか。
- 3 暗灰色砂シルト 均質。シルトがら。
- 4 灰黄色シルト 粘性强い。シルトがら。(層分明)
- 5 暗灰色土 中の砂 砂粒部分(数粒の互層が明確)
- 6 暗灰色土 特に中位以下に径数cm~垂大の暗灰色土(黒色)土ブロックをまばらに含む。基調は灰色砂シルトで、3土層3~5cm層は黄褐色に鉄分が沈着。
- 7 黒色土 青黒い暗褐色。黒み強い。地山微細のものごとくおろすか。
- 8 暗灰色土 6・7と一連の層。6とは明確に区分できない。
- 9 暗灰色土 地山(灰黄色砂シルト)に黒みが混入したと思われる。下層とは一連。
- 10 暗灰色土 地山(同上)に暗灰(黒み)が混入。根の跡もかなり入っている。
- 11 根跡か。灰色地山粒。黒色土粒(径数mm~2cm)が混入する。
- 12 暗灰色土 径数mmの地山粒をまばらに含む暗灰色土。根跡か。
- 13 暗灰色土 暗灰シルト。灰色シルトを主体にわずかに暗灰(黒色)シルト。橙褐色シルトをまじえる。
- 14 黒色土 黒み強い暗褐色。数mm径の地山粒まばら。



- 21 暗灰色土 黒味強い。20と22の中間的な層で、わりと均質。1~2mm径の地山微細粒ややまだが、鉄の色調が黒ずんでいるため目立たない。20より黒味。シルト質強い。
- 22 黒色土 シルトがちで黒み強く21とは一連の堆積を示す。地山微細粒は21と同様だが、他に数mm径の砂質灰色地山(微細中心)ブロックを数ヶ所含む。下位はブロック多き砂質堆積層が厚。
- 23 暗灰色土 21・22に本根が集中して区分にくい部分で、根の込みではないと思われる。右側の18と同様な本根の集中であるが、23層右端のラインは、本来この付近まで20の2層の端が伸びることを示している。
- 24 暗灰色土 21に似る均質シルトがら(本根)。やや褐色味(黄色味)おびる。数mm径地山粒をわずかに含む。(単色の土壌?)
- 25 暗灰色土 かなり本根が集中(22と同様)。本来の状況が不明。実態はやや黒味の強いシルトに数mm径地山粒を密に含む単位が連続し、その他地山粒を含まない部分も塊状位に見える。壁手前の土壌層。または単色の土壌層。
- 26 暗灰色土 24に似る。やや褐色(黄色)味をおび。数mm径地山粒まばらに含む。
- 27 暗灰色土 20層に似る20層よりは暗灰に色調が目立たない地山微細粒密という点でやや均質。
- 28 暗灰色土 29とは一連の層。本根を除けば均質な砂がシルトで、地山微細粒(色調目立たない)をまばらに含む。
- 29 暗灰色土 黒味強い。黒色土(青黒)も良いが、シルト質強いシルトで均質。向い地山粒をわずかに含む。
- 30 黒色土 29よりやや黄色味をおび。黒味強い(29の方が青黒い)。数mm径砂質地山粒をまばらに含む。部分的に1cm前後の地山粒の集中が点状する。
- 31 黒色土 黒味強く、地山粒をほとんど含まない部分。本根によるものか。シルトがら。
- 32 暗灰色土 1cm前後の砂が地山粒を密に含む。
- 33 暗灰色土 31に似るが、地山粒(数mm~1cm程度)を不均一にやや密に含む。
- 34 暗灰色土 やや黒味強く、数mm径地山粒まばら(不均一)に含む。26・34との切り合いは不確実。26とも34とも一連で、鉄の色調となる可能性もある。
- 35 暗灰色土 1~3mm径の地山粒を密に含む。上層より黄色味おびる。黄色味だが、下部にびっぴな(未熟)土あり。全体が本根の可能性もある。
- 36 暗灰色土 19とは炭化物粒(2~3mm径)がわずかながら目立つことから区分したが、色調・質とも近似的。
- 37 暗灰色土 36・19とは、やや色調が明るいことで区分した。炭化物まばら。
- 38 暗灰色土 29よりわずかに黒味強い。下層(ピット)があることで区分したのみで、根跡薄。
- 39 黒色土 数mm~1cm径の地山粒まばら。シルトがちで粘性强い。(30層に似る)
- 40 暗灰色土 同上の土に、数mm径地山粒を、非常に密に含む。(32層に似る)
- 41 暗灰色土 黒味強い。シルトがち地山微細粒わずかに含む。
- 42 暗灰色土 41より黒味強く、よりシルトがち。地山微細粒ごくわずかに含む。4とは一連の層を示す。
- 43 暗灰色土 暗灰地山粒まばらで、色調1よりわずかに明るい。42とは一連の堆積と思われる。
- 44 暗灰色土 41に似るが地山微細粒をまばらに(41より多く)含む。29との間隔もあると思われる。図の形状は不明。
- 45 暗灰色土 数mm~10cm径程度の地山ブロックを不均一に含む黒味の強い暗灰色シルト質土。46と同様。灰褐色シルト粒も混入する。
- 46 黒色土 数mm径地山粒をわずかに含む。シルトがち砂シルト。
- 47 暗灰色土 黒味強いシルトがち砂シルト。灰色砂(数mm~1cm径)がまばらに見えるのは植物の根の影響か。
- 48 暗灰色土 41との切り合いは不確実だが、41の方が黒味強い。黒部部分。根跡がびっぴな部分。地山粒の目立つ部分が混在しており、図示以外の根の根跡が強い。根跡が暗黒シルトがら砂シルト。
- 49 灰色シルト 暗灰シルトごくおろすか。
- 50 淡灰色砂シルト
- 51 黒色シルト
- 52 灰黄色砂シルト ベース?水が湧き不評。
- a 暗灰色土 均質砂シルト。
- b 黒色土 地山小粒まばら。
- c 黒色土 地山小粒密。
- d 暗灰色土 黒味強い。地山微細粒まばら。
- e 灰色土 根跡不詳。黒味強い。地山粒密。
- f 暗灰色土 地山粒。不均一。不詳。
- h 暗灰色土 非常に密に含む。

【02b - 02c / エ区西壁】

- 1 北カベ1
- 2 北カベ2
- 3 北カベ100
- 4 北カベ101
- 5 暗灰色土 0.2~1cmの黄灰色土粒を多く含む。
- 6 暗灰色土 0.2~5cmの黄灰色土粒を多く含む。
- 7 暗灰色土 あまり黒味強くない。1~5cmの黄灰色土粒をやや多く含む。
- 8 暗灰色土 0.1~0.3cm程度の黄灰色土粒を多く含む。灰白色。粘質土も含まれる。
- 9 暗灰色土 8に類似し、黄灰色土粒含む。炭化物粒も少量含む。
- 10 暗灰色土 やや淡い色調。0.2~0.5cmのやや細かな黄灰色土粒を多く含む。炭化物粒も少量含む。
- 11 暗灰色土 やや黒味の強い色調。0.2cm以下の細かな黄灰色土粒を散ららに含む。灰白色のシルト塊も目立つ。
- 12 暗灰色土 0.5cm程度の黄灰色土粒を多く含む。0.1cm程度の小さな炭化物粒をごく少量含む。
- 13 暗灰色土 黄灰色土粒があまり多くなく、やや黒味の強い色調。0.3cm程度の黄灰色土粒を散ららに含む。
- 14 暗灰色土 0.2~1cmの、やや大きな黄灰色土粒を多く含む。特に溝の壁に近い箇所の右端に集中している。
- 15 暗灰色土 0.5cmの砂質の強い黄褐色土(地山土)粒をやや多く含む。特に下に多い。
- 16 暗灰色土 0.2cmの黄灰色土粒を少量含む。下層の方にやや多く、そのためか、砂質が強い。炭化物粒を少量含む。
- 17 灰褐色土 0.5~3cmのやや大きな黄灰色土粒を多く含む。あまり黒味強くない。
- 18 灰褐色土 シルト質。灰白色シルト塊を少し含む。炭化物も少量あり。
- 19 暗灰色土 シルト。この層の中に、うすい炭化物層あり。
- 20 灰色土 この層の上位に鉄分の沈着目立つ。やや黄色を帯びるシルト。
- 21 灰色土 シルト。鉄分の沈着ややあり。この層の下端に炭化物層が形成されている。
- 22 灰褐色土 0.3~1cmの炭化物粒をやや多く含む。灰色シルト粒(0.3~1cm)をやや多く含む。
- 23 暗灰色土 あまり黒味強くない色調。0.2cmの炭化物粒。黄灰色土粒を少量含む。黒味の強い暗灰色土粒を少量含む。
- 24 暗灰色土 23に似るとは黒味強い。0.2cmの炭化物粒を散ららに含む。この層の前後には1cm以下の黄灰色土層がやや多い。
- 25 暗灰色土 0.1cmの炭化物を多く含む。黒味の強い色調を示す。灰白色土粒を少量含む。ややシルト質。
- 26 暗灰色土 褐色を帯び、淡い色調。北壁の付近には、淡い緑色の地山土粒をやや多く含む。中央付近には0.3cmの黄灰色土粒を少量含む。
- 27 暗灰色土 淡い色調の暗灰色土中に0.2~1cmの黄灰色土粒を多く含む。地山土粒の多いか、砂質をおびている。
- 28 暗灰色土 やや褐色の強い色調。0.5cm以下の黄灰色土粒を全体に散ららに含む。炭化物粒少量。
- 29 灰褐色土 3~5cm程度の淡黄色地山土をやや多く含む。淡い色調。やや砂質な感じ。
- 30 暗灰色土+淡黄色土 やや黒味の強い灰褐色と淡黄色の地山土が互層状。炭化物粒少量。
- 31 暗灰色土 1~3mmの黄灰色地山土塊を、下に多く含む。砂質な感じに淡い色調。
- 32 灰色土 20と同様な灰色シルト中に、1~5cmの暗灰色土塊が含まれる。
- 33 暗灰色土 やや黒味強く、0.2~0.5cmの黄灰色土粒を多く含む。
- 34 暗灰色土 やや黒味強く、0.5cm程度の黄灰色土粒をやや多く含む。2cmの灰白色土粒もやや多い。
- 35 暗灰色土 0.2cm程度の黄灰色土粒は少しあるが、他は混入する。黒味強い。
- 36 暗灰色土 1~2cmの黄灰色土塊を多く含む。
- 37 暗灰色土 やや黒ずんでいるが、砂質シルトの地山。
- 38 暗灰色土 0.5cm程度の黄灰色土塊を多く含む。地山土はあまり目立たず。
- 39 暗灰色土 黄灰色土に、淡い暗灰色土が少量混入した感じ。
- 40 暗灰色土 地山土に淡い暗灰色土が混入。40より均等に混入している感じ。
- 41 暗灰色土 淡黄色の地山土に、1~10cmの暗灰色土塊がいくつか含まれている。
- 42 淡黄色土 やや黒味強い暗灰色土中に1cm程度の黄灰色土粒をやや多く含む。
- 43 暗灰色土 黄灰色の地山土に、暗灰色土がわずかに含まれている。
- 44a 暗灰色土 0.5~1cm程度の地山土粒を多量に含む。7cmの地山土塊を含む。淡い色調。上層に由来する灰色シルト塊を少量。
- 44b 暗灰色土 やや黒味をおびた黄灰色土中に、黒褐色土・灰色シルト塊が含まれている。
- 47 暗灰色土 0.2cm程度の黄灰色土粒を多く含む。
- 48 灰色土 20より色調暗く、ややシルトがち。暗灰色土の塊状の混入(根状の部分もあり、水の影響?)が不均等にみられる。炭化物粒ごくわずかな。
- 49 灰褐色土 薄い色調のやや砂が砂シルト。48と50の中間的な層。1~2mm径の炭化物粒も目立つ。
- 50 暗灰色土 49よりさらに暗い。49より多量に。同上大炭化物粒わずかに含む(やや大きいものも目立つ)。
- 51 暗灰色土 50より黒味強い。50よりややシルトがち(=49と同程度)。炭化物の混入具合も49と同様。
- 52 暗灰色土 色調は不均一だが、他は51より明るい(やや黄色み)。炭化物粒はわずかに。51よりもやや砂がら。=50と同程度。
- 53 暗灰色土 黄色み強く赤褐色に近い。1~2mm程度の地山粒まばら。
- 54 暗灰色土 やや黄色味をおびつつ黒味強い。シルトがち砂シルト。地山粒はほとんど含まない。
- 55 暗灰色土 52に近い色調だが、数mm径地山粒を多く含む。より砂がら。
- 56 黒色土 54と一連の堆積をなすシルトがら砂シルト。粘性强い。地山粒ほとんど含まない。
- 57 灰色土 SD10層部の地山土。黒色の数mm~1cm程度のブロックと混入する主体は地山土。
- 58 灰色土 SD10層部の地山土。暗灰シルトがわずかに含むがかなり均質。
- 59 暗灰色土 黒色シルトと灰色シルトの層1cm前後の粒まばらに灰色砂が混入。
- 60 暗灰色土 aと同様な土。本根?
- 61 淡灰色砂質土
- 62 灰色土
- 63 灰色砂質土 灰色砂とごく薄い黒色土(62)が10枚程度の互層をなす。右側の60層や南壁の50層とは明確に分けられない。
- 64 南壁の50層と同じ?

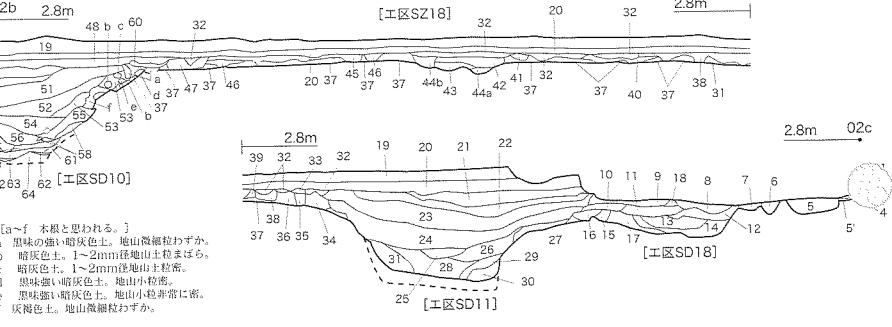
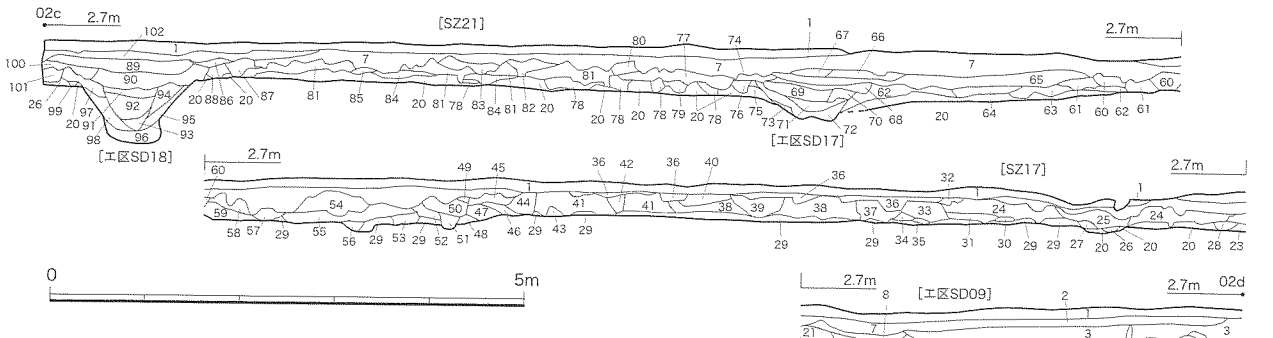


図3-4 土層断面図(1)工区(1)

【02c - 02d / 工区北側】

- 暗灰色土 シルト質、1mm以下の砂粒が少量含まれる。青味の強い色調。
- 灰黄褐色土 シルト。1より砂粒がやや目立つ。この層の上(1)の境界)に炭分の沈着跡あり。
- 暗灰色土 1~2cmの黄灰色土塊。2~3cmの暗褐色土塊を疎らに含む。シルト質。この層の上(2)との境界)にも炭分の沈着跡目立つ。
- 黄褐色土 地山(シルト)。上位には灰黄褐色土塊が少量含まれる。
- 灰褐色土 0.5~5cmの地山土塊。塊がやや多く含む。暗褐色土塊もあり。
- 灰褐色土 4(地山)の上面に含まれる塊が、0.2~0.3cmの黄灰色土塊がかなり多い。
- 灰褐色土 3~5cmの暗褐色土塊を多量に含む。特に下に多い。
- 灰褐色土 あまり黒味がない。0.5cm以下の黄灰色土塊が少量含む。黄褐色の砂粒がかなり目立つ。
- 暗褐色土 あまり黒味強くない。時に細粒。0.2~0.3cmの黄灰色土塊をかなり多く含む。0.2cmの炭化物粒も少量含む。砂質土や砂質。部分的に鉄分沈着。
- 暗褐色土 9に比べるとやや黒味強い。0.2cm程度の黄灰色土塊を疎らに含む。砂粒はかなり多い。
- 暗褐色土 9に比べるとやや黒味が強く、砂粒が多い。0.2cmの炭化物粒も少量あり。
- 暗褐色土 11と同様だが、11よりやや黒味をおびている。砂粒はきわめて多い。0.2~0.3cmの黄灰色土塊もやや多く含む。
- 暗褐色土 褐色味がやや強いが、あまり黒味は強くない。下位を中心に0.5~1cmの黄灰色土塊を含む。上位は粒の小さなものが疎か。
- 暗褐色土 13と同様であるが、黄灰色土塊をかなり多く含む。
- 暗褐色土 1cm以下の黄灰色土塊と暗褐色土塊が混ざるが、前者が多い。
- 暗褐色土 13より灰褐色味が弱く、褐色味が強い。0.5~1cmの黄灰色土塊を疎らに含む。砂粒は多く、0.2cm程度の炭化物粒をごくわずかに含む。
- 暗褐色土 0.2~1cmの黄灰色土塊をきわめて多く含む。上位(図の上の方)には細かな粒が多い。
- 暗褐色土 17のうち、黄灰色土塊が特に豊富な部分。
- 暗褐色土 やや灰褐色味が強い。0.5cm以下の黄灰色土塊が下位を中心にきわめて多い。1cm大の棒状の炭化物粒が含まれる。地山土のせいかやや砂質。
- 黄褐色土 上面付近にわずかに暗褐色土塊を含むが、地山土である。砂質おびたシルト。
- 暗褐色土 褐色味強い。0.1~0.3cmの黄褐色土塊をやや多く含む。5cm程度の棒状の灰白色シルト塊を多く含む。
- 灰褐色土 21より褐色味が弱い。0.2cmの黄灰色土塊をきわめて多く含む。灰白色シルト塊を含む。やや砂質をおびたシルト。
- 黄褐色土 黄灰色の地山土中に1cm以下の暗褐色土塊もやや多く含む。
- 暗褐色土 地山はあまり含まない。1~2cmの灰褐色シルト塊が疎らに含まれる。下位はやや褐色味が強くなる。
- 暗褐色土 24より褐色味が強く、0.2cm以下の微小な黄灰色土塊を少量含む。この層の左側に見られる黄褐色の粗粒砂と灰褐色土が混じる。灰褐色土は1~2cmの粒。
- 暗褐色土 黄灰色土が薄く層状に含まれている。
- 暗褐色土 褐色味あまり強くない。黄褐色土(地山)塊含む。
- 暗褐色土 褐色味あまり強くない。黄褐色土(地山)塊含む。23よりやや褐色味が強い。
- 暗褐色土 やや褐色みをおび、汚れた感じがするが地山土だろう。砂質をおびたシルト。
- 暗褐色土 29よりやや黒味強い。黄灰色土塊(1cm程度)も含まれる。
- 暗褐色土 24より黒味弱い。24~29へ漸移的に変化する中間層のよう。1cmの黄灰色土塊を少量含む。やや砂質をおびたシルト。
- 暗褐色土 2cmの灰褐色シルト塊を含む。0.1cmの黄色土塊をかなり多く含む。暗褐色土の感じは24と同様。
- 暗褐色土 24・31よりも褐色味が強い。0.3cm程度の黄灰色土塊を疎らに含む。炭化物も少量あり。下位はやや淡い色調。
- 灰褐色土 やや淡い色調を呈し、0.3~0.5cm程度の黄灰色土塊をやや多く含む。やや砂質をおびたシルト。
- 暗褐色土 やや黒味強い。0.2cmの黄灰色土塊がきわめて多い。
- 灰褐色土 7と同様に、5~10cm大の暗褐色土塊をいくつか含む。
- 暗褐色土 2~5cmの灰色土塊を黄灰色土塊をきわめて多く含む。0.2cm程度の黄灰色土塊をきわめて多く含む。
- 暗褐色土 0.2~0.5cmの黄灰色土塊をやや多く含む。灰白色シルト塊もやや目立つ。褐色は強くない。
- 暗褐色土 やや黒味が強い。0.5~1cmの地山土塊が5cm大の塊をなして点在している。
- 暗褐色土 38より褐色味が強く、39よりやや淡い。5cmの黄灰色土塊を少し含む。0.5cmの黄灰色土塊、2cm程度の灰褐色シルト塊を多く含む。
- 暗褐色土 淡い色調を呈する。38に近いが、0.3cmの黄灰色土塊をやや多く含む点で区別できる。
- 暗褐色土 41より黒味が強い。灰白色シルト塊含む。
- 暗褐色土 29よりやや黒味強い。灰褐色土中に1~3cmの黄灰色シルト塊を含む。砂質をおびたシルト。
- 暗褐色土 41よりやや黒味強い。0.2cmの黄灰色土塊を全体に疎らに含む。上位には灰褐色土塊がある。
- 暗褐色土 淡い色調。0.3cmの黄灰色土塊が多い。1~2cmの灰褐色シルト塊も疎らに含まれる。
- 暗褐色土 45と同様淡い色調。黄灰色土塊はあまり目立たない。全体に均質な感じ。
- 暗褐色土 淡・暗褐色土中に0.5~0.3cm黄灰色土塊が含まれる。下位はやや砂質強い。
- 暗褐色土 黄灰色土中に暗褐色土塊が少量混入。

- 暗褐色土 淡い色調を呈する。0.3cmの暗褐色土塊を少量含む。
- 暗褐色土 淡い色調。黄灰色土塊は、細かなものを多く含む。黒味の強い暗褐色土塊を少し含む。
- 暗褐色土 54よりやや黒味強い。明るい黄灰色土塊も含まれる。
- 暗褐色土 淡い色調。0.3cmの黄灰色土塊を含む。黒味の強い暗褐色土塊も少量含まれる。
- 暗褐色土 0.5cmの黒味強い暗褐色土塊を含む。明るい黄灰色土も含む。
- 暗褐色土 54より黒味強くないが、下の55よりは暗い色調。0.2cmの黄灰色土塊を全体に含む他、上位には灰褐色土塊を含む。
- 暗褐色土 54より淡い色調。下位を中心に0.2cm程度の黄灰色土塊をやや多く含む。砂質をおびる。黒味強い暗褐色土塊もやや多い。
- 暗褐色土 淡い色調。下位に黄灰色土塊(1cm)を含む。56・53・51はSD8として掘ったものだが、鉋ノビの可能性がある。
- 暗褐色土 48よりやや黒味が強い。明るい黄灰色土塊も含まれる。
- 暗褐色土 灰色シルト塊を多量に含む。0.1cmの黄灰色土塊を疎らに含む。
- 暗褐色土 3~5cmの大きな黄灰色土塊を多く含む。0.5cm程度の地山土塊も多い。下位は淡い色調。
- 暗褐色土 1~3cmの灰褐色土塊をかなり多く含む。0.3cm程度の黄灰色土塊をやや多く含む。
- 暗褐色土 54に近く、淡い色調。0.5cm程度の黄灰色土塊をかなり多く含む。
- 暗褐色土 55に近く、淡い色調。0.5cmの地山土塊をやや多い。
- 暗褐色土 地山の黄灰色土に灰褐色土塊がやや多く混入している。上位は灰褐色土のほうが多い。
- 暗褐色土 シルト。下位には、0.3cmの黄灰色土。全体に0.2cmの炭化物粒をやや多く含む。
- 暗褐色土 シルト。0.2cmの黄灰色土塊を疎らに含む。炭化物粒も含まれる。上のシルトとの境に炭化物層あり。
- 暗褐色土 66と同様だが、やや黄色をおびる。
- 暗褐色土 やや黒味が強く、0.2~1cmの灰褐色土塊をやや多く含む。ややシルト質強い。
- 暗褐色土 68に類似するが、68よりはシルト質強い。0.5~1cmの灰色・灰白色シルト土塊をやや多く含む。
- 暗褐色土 0.2~0.3cmの黄灰色土塊をきわめて多く含む地山土のせいか、やや砂質。
- 暗褐色土 68に比べてやや砂質。褐色味が強い。0.2cm程度の黄灰色土塊を疎らに含む。
- 暗褐色土 71同様やや褐色味が強い。砂質強い。0.5~1cm程度のやや大きな黄灰色土塊を多く含む。
- 暗褐色土 黄灰色土中に1cm程度の黄灰色土塊がやや多く含む。
- 暗褐色土 ややシルト質で黒味のやや強い色調。1~2cm程度の灰色シルト土塊を疎らに含む。
- 暗褐色土 淡い色調の暗褐色土に黄灰色地山土が同程度混入している。上位は灰褐色土のほうが多い。
- 暗褐色土 色調の強い暗褐色土。0.2~1cm程度の地山土塊がかなり多く含むが、75より少ない。砂質強い。
- 暗褐色土 1~5cmの地山土塊をやや多く含む。灰色・灰白色シルト塊も多い。
- 暗褐色土 黄灰色土中に1~3cmの暗褐色土塊が少量含まれる。
- 暗褐色土 1~3cmの黄灰色土塊をやや多く含む。1~2cmの灰褐色シルト塊も含む。
- 暗褐色土 やや黒味の強い色調。0.2cmの黄灰色土塊少量あるがあまり目立たない。0.5~1cm程度の灰色シルト塊もあり。
- 暗褐色土 黒味強く、上位に灰色シルト塊、下位に黄灰色土塊が含まれる。
- 暗褐色土 5cm大の上面からの灰色シルト塊をかなり多く含む。
- 暗褐色土 地山と同様な土だが、色調はやや灰褐色をおびている。1~2mmの黄灰色土塊を含む。
- 暗褐色土 84よりやや黒味強く、暗褐色土の塊を含む。
- 灰褐色土 1~5cmの灰褐色シルト塊をきわめて多く含む。
- 暗褐色土 上位に灰褐色シルト塊をやや多く含む。黒味の強い色調。
- 暗褐色土 85に近いが、やや淡い色調で地山土塊もあまり多くない。淡い色調。
- 暗褐色土 シルト。上面に鉄分の沈着跡あり。0.2cmの炭化物粒を少量含む。
- 暗褐色土 東より(図の右端)で地山土塊の集合が2~3層見られるが、全体としては地山土塊あまり目立たない灰白色シルト塊あり。下位の層より灰褐色。
- 暗褐色土 右側(東側)より黒味の強い色調。左側(西側)ほど地山土塊含まず区別できる。
- 暗褐色土 31よりやや黒味強い。下位に黄灰色地山土塊見られるが、地山土は少ない。
- 暗褐色土 淡い色調。0.2cm程度の黄灰色土塊をやや多く含む。シルト質で粘着感あり。
- 暗褐色土 淡い色調で、黄灰色土塊がやや多く含む。やや砂質。黄灰色土塊をきわめて多く含む。やや砂質。
- 暗褐色土 暗褐色土塊と黄灰色シルトの地山土が同程度混入している。下位は互層状に黄灰色土塊が薄く入る所もある。
- 暗褐色土 1の黄灰色土塊をきわめて多く含む。やや砂質。
- 暗褐色土 97と同様だが、黄灰色土塊が多いが、やや粒が大きい下位が中心。ややシルト質強い。
- 暗褐色土 97と同様だが、黒味の強い色調。地山土は少量含む。黄灰色土塊をきわめて多く含む。
- 暗褐色土 100 全体に均質な感じ。
- 暗褐色土 101 暗褐色土 淡い色調。下位に3~5cmの黄灰色土塊を含む。地山土の量は97よりかなり少ない。
- 暗褐色土 102 灰褐色シルト 鉄分の沈着跡目立つ。暗褐色土ほとんど混入せず。

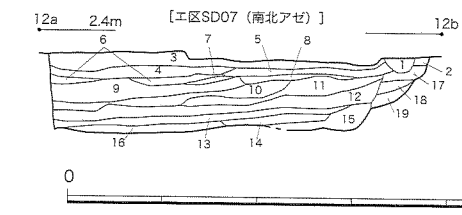


【03a - 03b / 工区東壁】

- 暗褐色土 砂質強い。土は2に類似するが、黄灰色土塊が多く混入。粗粒か。
- 褐色土 砂質強い。灰褐色土塊を上位に多く含む。0.2cmの黄灰色土塊。暗褐色土塊を少量含む。
- 褐色土 2と同様砂質。1cm以下の暗褐色土塊。0.2cmの炭化物少量含む。
- 暗褐色土 3よりやや黒味が強い。土の感じは暗粒。0.2~0.5cmの暗褐色土塊を少量含む。
- 灰褐色土 黄灰色~緑灰色の地山土(砂質おびたシルト)をきわめて多く含む。炭化物を少量含む。
- 灰褐色土 砂質土。2~5cm大の黄灰色土塊をまばらに含む。
- 灰褐色土 6に近いが、黄灰色土塊はない。1~3mm大の暗褐色土塊をやや多く含む。
- 暗褐色土 上位に黄灰色砂質シルト塊を多く含む。下位には暗褐色土塊が集中する。
- 暗褐色土 黄灰色土中に淡い暗褐色土塊がまばらに混じる。木の根か?
- 灰褐色土 4と同様な粗粒の黄灰色土塊をかなり多く含む。
- 暗褐色土 やや黒味が強く、0.2~1cm大の黄灰色土塊、灰白色シルト塊をかなり多く含む。シルト質。0.1cm以下の微小な炭化物も少量。
- 暗褐色土 0.2~0.5cmの黄灰色土塊をかなり多く含む。シルト質。2cm程度の炭化物粒がかなり多く含む。
- 暗褐色土 2と同様だが、明黄灰色土塊(7~8cm程度の塊をなしている。)はさらに多い。炭化物粒も多い。
- 暗褐色土 黒味強い。明黄灰色土塊は少量含まれる。
- 暗褐色土 黄灰色シルトの地山土中に、暗褐色土(黒味強い)の薄い層が2層見られる。
- 暗褐色土 0.2cm程度の黄灰色土塊がきわめて多く含まれている。木の根か?
- 暗褐色土 16と同様な粗粒だが、黄灰色土塊はほとんどなく、黒味強い。
- 暗褐色土 淡い色調で、砂質おびたシルト。下位には黄灰色砂質シルトの地山塊が多く含まれる。これを切ってSD19。
- 暗褐色土 3よりやや黒味強い。砂質強い。この層の下(2)に0.2~2cmの暗褐色土塊。黄灰色土塊が帯状に散在。
- 暗褐色土 2~5cmの灰褐色シルト塊。同大の黄灰色シルト塊。やや大きな黒味の強い暗褐色土塊が含まれ、形状を呈する。量的には、暗褐色土が最も多い。

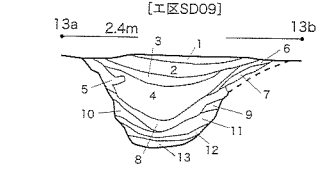
- 灰褐色土 上位の4や3よりはややシルト質。0.2~2cm大の暗褐色土塊をかなり多く含む。灰色シルト塊も少しあり。
- 暗褐色土 やや淡い色調。砂質を帯びたシルト。両溝間に凹みがあるのと同じ土か。
- 暗褐色土 砂質強い。この層の下(2)にも暗褐色土塊が帯状に散在する。中上位にもやや多い。灰色シルトの塊も含む。
- 暗褐色土 5cm大の黄灰色土。3cm大の灰褐色シルト塊を多く含む。両状。
- 暗褐色土 5cmの黄灰色土塊を含む。木の根か?
- 灰褐色土 上の3より黒味強い。2~3cmの緑灰色土塊をかなり多く含む。
- 暗褐色土 灰色シルトをかなり多く含む。粗粒。
- 暗褐色土 30に比べるとシルト質強く、色調もやや黒い。黄灰色土塊が少しあるほか、灰色シルト塊(2cm)をやや多く含む。
- 暗褐色土 28よりやや砂質強く、色調も淡い。この層の中位~下位に0.5~2cmの黄灰色土塊をきわめて多く含む。28・29はSD5埋土か?
- 暗褐色土 やや砂質を帯びたシルト。5cm大の黄灰色土塊、5cmの灰色土塊をきわめて多く含む。黄灰色土塊が斜めに入り込んでいるが、北端付近では鉄分沈着のせいか褐色に淡い色調。炭化物粒を少し含む。
- 灰褐色土 暗褐色土塊を下位に含む。灰褐色土はややシルト質。炭化物小片あり。
- 暗褐色土 30と同様な暗褐色土中に0.3~1cmの黄灰色土塊がきわめて多く含まれる。
- 暗褐色土 やや黒味強い。1cmの黄灰色土塊、灰色シルト塊を含む。
- 暗褐色土 30と同様だが、やや黒味強いが、灰白色土塊(0.5cm)を少量含む。他はあまり混入物なし。
- 暗褐色土 30と同様だが、やや黒味強い。1~2cmの灰白色シルト塊がやや多い。炭化物小片含む。
- 暗褐色土 1~2cmの黄灰色土塊をきわめて多く含む。明黄灰色土塊もあり。

図3-5 土層断面図(2)工区(2)

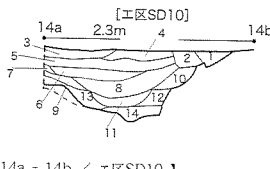


- 【11a - 11b・12a - 12b / 工区SD07】(つづき)
- 20 灰褐色土 0.5~2cmの灰褐色地山土粒をやや多く含む。特にこの層の上位では、0.5cmの粒が多い。炭化物少量。
 - 21 灰褐色土+黄褐色シルト塊 灰褐色土+黄褐色シルト塊がほぼ同量に混ざり、シルト塊はやや砂質を帯びシルトで、径5cm大と大きい。
 - 22 灰褐色土+黄褐色シルト塊 黄褐色シルト塊を中心に黄褐色土(微細な赤い黄色を帯びる)シルト塊を多量に含む。層中では西より(図の左方)0.5cm程度の粒が多い。
 - 23 黄褐色土 地山土とみられる黄褐色シルト中に、3~7cm大の灰褐色土塊が含まれる。黄褐色土はやや粘り強い。

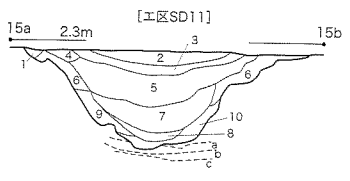
- 24 黒灰色土 6と同様であるが、やや黒味強い。0.5~1cmの灰白色シルト少量含む。
- 25 灰褐色土 20と同様で黄褐色の地山土粒(0.3~2cm)をやや多く含む。地山土のためやや砂質。この層の下位は特に小さな地山土粒が多い。
- 26 黄褐色土 やや砂質を帯び黄褐色の地山土中に、0.5cm程度の灰褐色土が少量含まれる。地山土もわずかに黒ずり大粒。
- 27 灰褐色土 砂質。0.5cm以下の黄褐色地山土粒をやや多く含む。
- 28 灰褐色土 褐色味が強く、よりやや砂質。0.1~0.2cmの小さな地山土粒を少量含む。0.5cm程度の炭化物粒もごくわずかに含む。
- 29 灰褐色土 13と同様だが、やや灰褐色味弱く、褐色が強い。灰白色シルトはあまり含まない。0.5cm程度の地山土粒が多い。
- 30 灰褐色土 0.5~2cm黄褐色地山土粒+塊をきわめて多く含む。特にこの層の下半では大きな塊が多い。混ざっている地山土は、上位はやや砂質、下位はシルト質。
- 31 黒褐色土 14と同様だが、0.1~0.2cmの黄褐色地山土粒をやや多く含む。灰白色のシルト粒もやや多く含まれる。植物の根のようなものが多い。
- 32 黄褐色土 黄褐色シルトの地山土中に、黄褐色砂質シルト粒と灰褐色土粒をまばらに含む。
- 33 黄褐色土 32と同様だが、灰褐色土の混じりがやや多い。特にこの層の下半に集中している。
- 34 黄褐色土 2cm程度の灰褐色土塊が少量含まれている。その量は10層より多い。



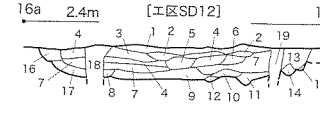
- 【13a - 13b / SD09】
- 1 底色土 きめ細かい砂シルトであり強い。微細な炭化物粒子をまばらに含む。
 - 2 灰褐色土 1より暗灰がやや、やや砂がちな。微細なものを主に数mm程度の炭化物粒をやや含む。
 - 3 暗灰色土 1から一連の堆積、中央はシルトが、層部は砂が、炭化物は2と同様で、2より少ない。
 - 4 黒色土 中央が最も黒味、シルト質、粘性強い。両側は、やや褐色をおびた暗灰色となり、砂がちな。微細な炭化物粒をわずかに含む。
 - 5 暗灰色土 4層部に近い暗灰シルトに径2~5mm前後の地山土粒を密に含む。
 - 6 暗灰色土 4層部に近い暗灰シルトに径2~3mmの地山土粒をまばらに含む。
 - 7 灰褐色土 4層部に近い暗灰シルトに数mm~数cm径の地山土粒を密に含む。
 - 8 灰褐色土 黒味強い暗灰色。4と同様中央部が黒味・粘性とも強く、両側部が弱くなる。地山の微細粒をまばらに含む。
 - 9 灰褐色土 灰褐色シルトと地山の数mm径ブロックが混成。
 - 10 暗灰色土 黒色シルト、暗灰シルト、地山(灰褐色シルト)の数mm径ブロックが混成。各々を主とする2~3層に分けられる。
 - 11 灰褐色土 1~2cm径の灰色土(暗赤に褐色をおびる)砂シルトブロックを主体に、黒色(非常に黒味強い)シルトの1~2mm径ブロックが混成。黒色土は不均一ながら暗赤に強くなり、数粒に細分可能。
 - 12 底色土 灰褐色と、黒色シルト質が薄く混成する。2~3cm径の地山土粒を数mm以下の地山シルトブロック、地山砂、黒色微細粒子が混成する。入り混じった状態で水平的な層相は示さない。



- 【14a - 14b / 工区SD10】
- 1 灰褐色土 1~5cm大の地山土(黄褐色)塊をきわめて多く含む。量的には地山が多い。やや砂質。
 - 2 灰褐色土 0.5cm以下の細かな黄褐色土をきわめて多く含む。やや砂質。
 - 3 暗灰色土 1~2cmの灰白色シルト粒をまばらに含む。炭化物粒をごくわずかに含む。
 - 4 灰褐色土 0.3~2cmの灰白色シルト粒をまばらに含む。0.5cmの黄褐色地山土粒も少量含まれる。やや砂質。
 - 5 灰褐色土 2~3cmの灰白色シルト粒をまばらに含む。0.5cmの黄褐色地山土粒、炭化物粒も少量含む。4と同様だが、比較するとシルト質で灰褐色強い。
 - 6 灰褐色土 ややシルト質。0.5cmの灰褐色土粒が多く、0.2cmの黄褐色地山土粒もやや多く含まれる。
 - 7 灰褐色土 褐色味が強く、やや砂質。0.1cmの黄褐色地山土粒をわずかに含むが、9と比べると少ない。
 - 8 灰褐色土 この層の下位には、0.5~1cmの黄褐色地山土粒がやや多いが、その他の部分にはあまり多くない。0.5~1cmの灰白色土粒もわずかにあり、砂質をおびたシルト。
 - 9 灰褐色土 0.5cmの黄褐色地山土粒をきわめて多く含む。あまり褐色味強くない。やや砂質。
 - 10 黄褐色土 黄褐色土中に1~3cmの灰褐色土塊が含まれる。下位には黄褐色砂質(地山土)塊も混じる。やや砂質。
 - 11 暗灰色土 黒味・褐色味弱。0.5cmの黄褐色地山土粒をかなり多く含む。地山土のために砂質。灰褐色土粒(1cm以下)も少量含まれる。
 - 12 暗灰色土 暗灰色土中に0.5~2cmの灰白色砂質土(地山土)をきわめて多く含む。地山土のために砂質である。0.1~0.5cmの細かな灰褐色土粒もやや多く含む。
 - 13 暗黄褐色土 灰褐色土と黄褐色土が同程度混じり。黄褐色土は砂質。
 - 14 黄褐色砂質土 黄褐色土中に1~5cmの黒褐色土粒が含まれる。量はずつか、土粒にこだけ深く入っている。



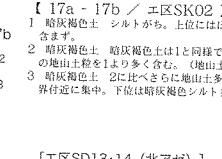
- 【15a - 15b / 工区SD11】
- 1 暗灰褐色土 0.5~2cm大の黄褐色土粒を極めて多く含む。1cm大の灰褐色シルト粒もあり、小シルト含む。
 - 2 暗灰色土 シルト質。1mm程度の細かな炭化物粒を含む。0.5cm程度の灰白色シルト粒もやや多く含む。炭分の沈着が目立つ。
 - 3 暗灰色土 2と同様なシルト。2よりも黒味強い。2mm程度の炭化物粒をばらばらに含む。1~2cmの灰白色シルト塊を2よりも多く含む。
 - 4 暗灰褐色土 0.2~1cmの地山土粒をかなり多く含む。0.5cm程度の灰白色シルトも少量含む。やや砂質で、5より黒味が強い。
 - 5 暗灰褐色土 7と比べるとやや褐色味が強い。1~5cm大の灰白色土塊をまばらに含む。1~2mmの黄褐色土粒もごく少量含まれている。1mm程度の細かな炭化物粒が多い。
 - 6 暗灰褐色土 1~2cm大の黄褐色土粒をきわめて多く含む。黄褐色土粒の径は下位ほど大きく、炭化物も少量含まれる。やや砂質。
 - 6と7と同様だが、やや大きな地山土塊(5cm)を2層に含む。
 - 7 暗灰褐色土 褐色味が強く、やや砂質。0.3~1cmの黄褐色土粒が層全体に散らばり点状に存在している。この層の右の方(図の左の方)には、2cm程度の黒褐色土粒がやや多く含まれる。
 - 8 灰褐色土 黒味強い。0.5cm程度の黄褐色シルト粒をまばらに含む。炭化物粒もやや多く含まれる。
 - 9 灰褐色土 1~2cmの灰白色シルト粒がきわめて多量に含まれる。黒褐色土粒がごく少量含まれる。炭化物も少量含む。
 - 10 灰褐色土 黄褐色の大きな塊と灰褐色土塊が同量くらい混在。2~5cmの黒褐色土塊も少量含まれる。
- a: 黄褐色土をきまむように、この層の上端に灰褐色シルトが帯状にのびている。地山であらう。
b: 黄褐色シルト(地山)
c: 灰褐色土 黄褐色土が少し褐色を帯びた感じ。湧水のためこの層は開れず。地山。



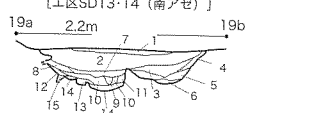
- 【16a - 16b / 工区SD12】
- 1 暗灰褐色土 シルト、3mm大の炭化物粒をごくわずかに含む。白色砂粒もごくわずかに含む。
 - 2 暗灰褐色土 0.5cm程度の地山土粒をわずかに含む。0.5~1cmの黒褐色シルト粒をやや多く含む。
 - 3 暗灰褐色土 1~2mmの黒褐色炭化物粒をやや多く含む。3~5mmの地山土粒を少量含むが、あまり多くない。やや砂質。黒味強い。
 - 4 暗灰褐色土 中央部に5mm程度の地山土粒が集中。土質は3に類似。3mmの炭化物粒少量含む。
 - 5 黒灰色土 5mm~1cm大の地山土をきわめて多く含む。1~2mmの炭化物粒も多い。地山土多いせいかやや粗いシルト質。
 - 6 黒灰色土 2~3mmの炭化物粒多く、そのため黒味強い。地山土は少なく、淡い灰褐色土(15mm~1cm)を多く含む。シルト質が強い。
 - 7 灰褐色土 褐色味が強い2~5mmの地山土粒+炭化物粒をそれぞれまばらに含む。1~2cmの淡い灰褐色土粒も少量含む。
 - 8 灰褐色土 褐色味強い。0.3cmの地山土粒+炭化物粒をそれぞれまばらに含む。7や9に比べると粘性強い。
 - 9 淡い灰褐色土 下位を中心に1~3mmの地山土粒をやや多く含む。そのためか、暗赤をおびる。1~5mmの炭化物粒をわずかに含む。5mm程度の灰褐色シルト粒をやや含む。
 - 10 暗灰色土 数mmの地山土粒を少量含む。灰褐色土粒あまり多くなく、褐色味強い。ややシルト質強い。
 - 11 暗灰褐色土 1cm前後の地山土粒をきわめて多く含む。やや砂質を帯びる。下位1~2mmの炭化物粒を少量含む。
 - 12 暗灰色土 1~2cmの地山土粒を含む。灰褐色土塊も含む。やや砂質を帯びる。
 - 13 暗灰色土 1~10cmの地山土粒+塊を多く含む。地山土由来するらしい砂粒やや目立つ。炭化物はごく少量含まれる。灰褐色シルト粒がごくわずかにあり、砂質を含む。
 - 14 暗灰色土 明るい黄褐色の地山土粒(1cm大)をやや多く含む。炭化物もごくわずかにあり、砂質を含む。
 - 15 黄褐色土 砂質シルトの地山土に5mm~1cm大の灰褐色シルト粒少量混じり。(13~15はSD12層部の地山土層の広がりの埋土)
 - 16 暗灰色土 1~2cmの黄褐色地山土をきわめて多く含む。地山土は砂粒がやや多い。5mm以下の小さな地山土粒も含まれる。
 - 17 灰褐色土 1cm前後の地山土粒をやや多く含む。8に比べると砂質が強い。両側の層付近では混入している地山土の砂がやや多い。8に比べると褐色味が強い。土質はあまり変わらない。
 - 18 暗灰褐色土 1~2mm程度の細かな炭化物粒が上から下までかなり多く含まれる。2mm程度の地山土粒をごくわずかに含む。やや砂質を帯びている。
 - 19 灰褐色土 0.5~1cmの地山土粒が上から下まで混入される。1~2cm程度の灰褐色土シルト粒も含まれる。



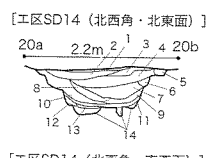
- 【17a - 17b / 工区SK02】
- 1 暗灰褐色土 シルトが。上位にはほとんど地山粒含まず。
 - 2 暗灰褐色土 暗灰褐色土は1と同様で0.5~2cm大の地山土粒をより多く含む。(地山土は黄褐色)
 - 3 暗灰褐色土 2に比べると地山土は多量。2との境界付近に集中。下位は暗灰褐色土が多い。



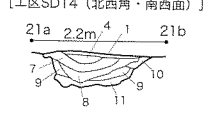
- 【18a - 18b / 工区SD13-14 (北アゼ)】
- 1 暗灰褐色土(暗赤に近い) やや灰褐色(2より強い)。2より砂が、1~6が上層、7から下層。
 - 2 暗灰褐色土(暗赤に近い) 粘性強い砂シルト。地山微細粒をまばらに含む。
 - 3 暗灰褐色土(暗赤に近い) 2と同様で、1~2mm径の地山土粒がやや目のつぶらな、4で一連の層。
 - 4 暗灰褐色土 数mm径を主とする地山土粒を密に含む。
 - 5 暗灰褐色土 2~1cm径を主とする地山土粒をまばら。上層(3・4とも)とはほぼ明確に切り合わない。粘性強い。
 - 7 暗灰褐色土 数mm径の地山土粒を密に含む。
 - 8 灰褐色土 数mm~1cm程度の灰褐色地山土粒。暗灰シルト粒を混成。
 - 9 暗灰褐色土 7とはほぼ同様。黒味は1と同じで、8層との切り合いは違ってもよい。違えば1と一連の上層層。
 - 10 灰褐色土 数mm径の地山土粒を密に含む。暗灰土も混成。
 - 11 黒色土 粘性強いシルト質。地山粒わずか。
 - 12 灰褐色土 数mm~1cm程度の地山土粒と黒色シルト粒が混成。
 - 13 黒色土 数mm径の地山土粒をまばら。11と同様な上。
 - 14 明灰色土 やや青みを帯びた明灰色地山。灰褐色地山の数cm径ブロックを主体に数mm径の黒色ブロックをまばら。
 - 15 黒色土 数mm~1cm径の黒色ブロックにわずかに地山粒が混じる。最も黒味強い。
 - 16 暗灰褐色土 明灰色砂質土(由来の砂質土層)に黒色土粒(数mm~1cm径)をまばらに含む。



- 【19a - 19b / 工区SD13-14 (南アゼ)】
- 1 暗灰褐色土 上記1と同じが、シルトが粘性強い。地山粒をまばら。
 - 2 暗灰褐色土 黒味強い。シルト質(粘性)強い。地山微細粒をまばら。2と同じが、3と同様でシルトが粗くなり、やや黄褐色を帯びる。地山微細粒わずか。
 - 3 暗灰褐色土 数mm径地山土粒をやや、砂が。
 - 5 灰褐色土 上位の地山(黄褐色)ブロックを密に含む。暗灰・灰褐色と混成ブロック土。
 - 6 暗灰褐色土 黒色と灰褐色土ブロックが混成。
 - 7 暗灰褐色土 数mm径の地山土粒をやや。色調は2に似てシルトが。2と一連の層の下部。
 - 8 暗灰褐色土 7と一連が、砂がやや地山粒が7より多い。
 - 9 暗灰褐色土 数mm径の地山土粒が非常に多い。黒味はシルトで、7と同じが、10 灰褐色土 黄褐色・灰白色のややシルトが地山のサブブロック。黒色が見込み。
 - 11 暗灰褐色土 1~5mm径の地山土粒を密に含む。砂が暗灰色(黒味強い)と混成。
 - 12 暗灰褐色土 11と同様だが、暗灰色はややシルトが粗い。
 - 13 暗灰褐色土 12に似る。上層地山の2cm径以下ブロック混成。
 - 14 灰褐色土 灰褐色砂質シルト地山を主体に、中位以上の地山(5mm前後)粒や暗灰・黒色同大粒をまじえる。
 - 15 灰褐色土 灰褐色シルト質がしみ込み状に混じる。(大粒が)



- 【20a - 20b・21a - 21b / 工区SD14 (北西角・2面)】
- 1 暗灰褐色土 黒色ブロック。やや赤味暗灰シルト。塊状(灰褐色)塊をわずかに含む。
 - 2 暗灰褐色土 地山微細粒をまばらに含む。黒味強い。左面4か。
 - 3 暗灰褐色土 黒色ブロック。地山数mm径のブロックをまばらに含む。左面4か。
 - 4 黒色土 暗い暗灰でシルトが。1mm程度の地山粒ごくわずかに含む。
 - 5 黒色土 水塊が。下半は黒味の強いシルト質で、なおお下へもなる硬塊。上半は地山数mm径粒+黒色土粒が混成。
 - 6 暗灰褐色土 数mm~1cm径地山土粒(上面に近いやや上位の色調)。密な暗灰・黒色混成土。
 - 7 黒色土 暗灰とすきか、4よりやや明るい色調。地山粒は1~2mm程度と4よりやや大きく。下半をまばら。4は一連の堆積。
 - 8 暗灰褐色土 シルトが。7よりやや明るい色調。地山粒は立派でない。
 - 9 暗灰褐色土 8と同様な土で、数mm径の地山粒をまばらに含む。
 - 10 暗灰褐色土 地山の1~数mm径粒を密に含む暗灰・黒色混成土。右下部は黒色シルトが。左上部は地山粒が特に多い。
 - 11 暗灰褐色土 地山(塊状に近い)緑灰色。数mm~1cm径粒と、暗灰シルトが混成。黒色粒わずか。
 - 12 暗灰褐色土 同上地山粒(上部のブロックの他、中位以下の砂質ブロックが混成)と暗灰シルトが混成。黒色粒わずか。
 - 13 黒色土 5~10mm径の黒色シルトブロック主体。地山粒わずか。左面2に含む黒色と同。14 暗灰褐色砂質土 地山由来の灰褐色シルトに5~10mm径の地山土粒を密に混成。黒色もわずかに混じる。



- 【22a - 22b / 工区SD14 (北辺)】
- 1 暗灰褐色土 黒味強い砂シルト。微細な炭化物粒をわずかに含む。
 - 2 明灰褐色土 暗灰シルトがしみ込むが、地山であらう。
 - 3 暗灰褐色土 1~2mm径の地山土粒を密に含む。黒味強いやや砂が粗い。
 - 4 暗灰褐色土 黒味強くややシルトが。微細な地山土粒をまばらに含む。粘性強い)の不整形表面(径・幅5mm~3cm)がまばらに見られるが、植物質の採取部。
 - 5 黒色土 シルトが。径1~2mmの地山粒をまばら。
 - 6 暗灰褐色土 3に似るが地山粒が1~5mm程度とやや大きい。
 - 7 暗灰褐色土 中央は5に近くシルトが粗い。両側は1~3mm径の地山粒やや密(中央はまばら)。
 - 8 暗灰褐色土 7右半から一連の状態で、地山粒が密。やや砂が。
 - 9 暗灰褐色土 数mm径の地山土粒をやや密に含む。暗灰土。シルトが。木根が。
 - 10 明灰色土 3~10mm前後の地山(微細な灰褐色)粒と暗灰シルトが混成。下部は地山土粒主体で、上部は暗灰が多い。
 - 11 明灰色土 10に似るが中位に地山の特大ブロックがあり、上部は黒色に近い。
 - 12 灰褐色土 互層。数mm径の黒色シルト粒と地山粒。地山微細粒が互層をなす。黒色部分だけが5層、全体は不均一な10層程度に層分できる。
 - 13 灰褐色土 微細な地山土粒を同質のしまりの良い層。非常に均質で一見地山。
 - 14 灰褐色土 黒シルトの数mm径粒や、縦・横の部分を不均一に、まばらに含む。黒味は13と同様な微細砂質だが、全体にわずかに混入し、シルト質(上部の地山由来)も混じる。

図3-7 土層断面図(4)工区(4)

(前ページよりつづき)

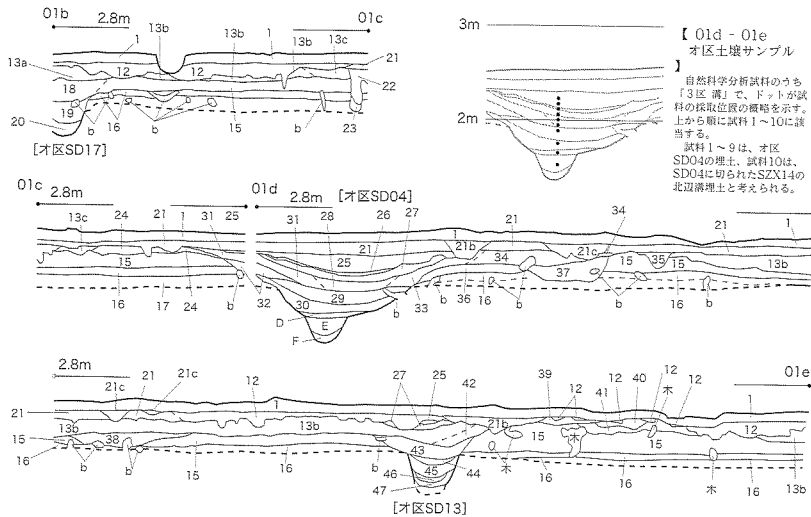
- 15 黒〜暗黒(10Y2/1~7.5GY2/1) 黒点状(シルト)が、粘性や(あり)で16からは漸移的に黒色化している。
- 16 オリーブ灰(10Y5/2) 地中に黒味が浸透した部分。木根や上部からの影響は不均等だが、人高の影響はない。おそらく15層と同様。やや砂がシルト。
- 17 オリーブ黄〜オリーブ灰(7.5Y6/3~10Y6/2) 砂がシルト。16と同一層。

SD20埋土=A~C

- A 緑灰シルト(6GY6/1) 約5枚に細分可。最下部は明褐色の砂質を土まばらに含む(厚約5cm)。その上は暗褐色の黒色シルト。数mm~1cm大ブロックをまばらに含む(厚約5cm)。その上は再び暗褐色を土まばらに含む(厚約3cm)。その上5cm程は灰白ブロックをわずかに含む。上層は上層からの影響が暗褐色をやや密に含む。
- B 緑灰シルト(10GY6/1) 上層よりしまりよく均質な砂がシルト。暗灰・暗褐色などの数mm径ブロックをわずかに含む。
- C 緑灰シルト(10GY5/1~4/1) 上層に比べて青み強くややシルトがちなシルト。粘性やあり。

a=木根(明灰〜暗灰シルト)

b=木根(灰褐色〜暗褐色)

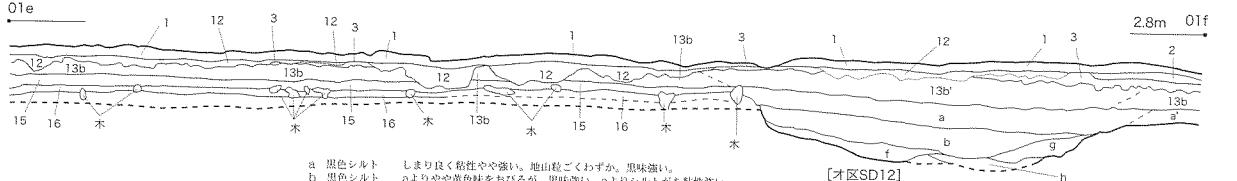


【01d - 01e】 オ区土壌サンプル

自然科学分試料のうち「3区画」で、ドットが試料の採取位置の概略を示す。上から順に試料1~10に該当する。
試料1~9は、オ区SD04の埋土。試料10は、SD04に切られたSZX14の北端埋土と考えられる。

【01d - 01e】 オ区西壁

- D 暗灰色砂質土 aよりやや灰色味をおびたシルト質と灰色砂が混成。数mm~1cm径の地山(右側壁の上・下位=明褐色・灰白色)ブロックをまばらに含む。
- E 暗灰色砂質土 黒ずんだ砂質土。わずかにシルト質をまじえるが、基調は地山の。
- F 黒シルト(10YR2/1) 灰白シルトの数mm径粒をまばらに含む。地山砂質も密だが、しまり良く粘性強い。
- D・E・F=断面付近から西へ続く未命名遺構(SZX14北西溝)断面
- 13c 13bと24の中間的な土。左右の各層間の漸移的变化部分か。
- 18 オリーブ黒(10Y3/1) 15よりもやや色調深い。灰白・黄褐色微細粒(主に1mm径)まばら。1や粘性弱。質は5と同様なクロコク状。
- 19 黒(10Y2/1) 18よりも黒味。粘性強い。灰白粒はやや多いが、まばら。
- 20 黒(10Y2/1)? 19よりも黒味。粘性強い。数mm径の灰白粒。下半にやや密。
- 21 黄灰〜灰黄シルト(2.5Y6/1~6/2) しまりの良い砂シルト。部分的に下層の割増ブロックが混じるが、全体的に均質。1と同様な質。21bは下層(25層)のブロック(数mm~5cm径を不均一に含む)。21cは21bに似るが、ブロックが混入。また21cには5層がなく由來不明。灰白・灰色・暗灰シルトがブロックを混入。
- 22 黒シルト埋土 13c層を基調に、数mm~1cm径の黒色(下層)ブロックをやや密に含む。
- 23 黒シルト埋土 黒色と地山の1cm径前後のブロックが混成。
- 24 黒色上(10YR3/2) 砂がわずかに31層とは異なる。細かい根の痕跡は一つ。下層の黒色粒(数mm径)を混入。しまり良く。
- 25 7層上と同一
- 26 7層下半に相当
- 27 8層に相当
- 28 9層に相当 暗灰色のシルト。1mm前後の灰片まばら。
- 29 10層に相当
- 30 11層上半に相当。下半は上層D・E。
- 31 暗灰色土(7.5YR4/1) 砂がシルト。数mm径の黒色粒まばら。1mm径前後の灰白粒・灰粒がわずか。
- 32 暗灰色土(7.5YR4/1) 31より砂が。1~2mm径の灰白。数mm径の黒色粒やや密。砂質は砂粒に由来か。



- a 黒色シルト しまり良く粘性や強い。地山粒ごくわずか。黒味強い。
- b 黒色シルト aよりやや灰色味をおびるが、黒味強い。aよりシルトが粘性強い。
- c 黒色シルト 地山粒(数mm径)まばらに含む。色調より深い。
- d 黒色シルト 地山粒(数mm径)密。やや砂が。

【01f - 01g】 オ区SD12

- G 南壁sec図のAに似る。
- H 南壁sec図のBに似る。
- I 南壁sec図のCに似るシルト質に、黒色シルトブロック(前落枝)をまじえる。
- J Iに似ているが、黒色・褐色ブロックで灰色シルト質はブロック状にわずか。
- K~M Aの上半を細分したもの。Kは東壁のAとほとんど等質。微妙にブロックが多いか? Iは黒色・暗褐色ブロックをやや密に含む。全体の色調異なっている。Mは1層と何層の可能性もある。しまりのよいや砂がシルト。暗褐色粒がわずか。
- N 13bにGが侵入した部分。地下基の影響か。
- O 黒褐色シルト質土(7.5YR2/2) かなりベタベタ。灰白(地山)数mm径粒わずかに含む。

【02a - 02b・03a - 3b】 オ区SK01

- 1a 明褐色砂質土(7.5YR7/1) 約1cm前後の灰白(10YR7/1程度)シルトブロック(断面付近以下の地山)をまばらに含む。縦粒状。
- 1b 灰白シルト埋土(10YR7/1) 径0.5~3cm程度のシルトブロックを密に含む。
- 1c 灰シルト質土(10YR7/1) 数cm~赤大のシルトブロックを主体とし、灰色砂。数mm径の黒色粒をわずかに混入。
- 2a 灰褐色シルト質土 数mm~2cm径の5Y7/2~6/2(灰白〜灰オリーブ)砂シルトブロック(塊状断面付近の地山)を主体に灰色砂質、砂シルト粒を混成する。0.5cm径程度の黒色粒もわずか。
- 2b 灰褐色シルト質土 2aとほぼ同様な土。地山ブロックの径がより大きいもの(径3~5cm)がわずかにあり。黒色粒はaより少ない(わずか)。
- 3 暗褐色砂質土(7.5YR6/1~5/1) 数mm径の灰白地山・灰緑地山粒をやや密に含む砂がちな土。2mm程度の薄片状赤土(赤土)粒をわずかに含む。
- 4 灰褐色土 灰色シルト(?)をわずかに混入。汚れた地山の可能性あり。
- 5 明褐色シルト質土 灰白(地山)を主体に灰色・黒色粒をわずかに含む。汚れた地山の可能性あり。
- 6 灰色砂質土(5YR5/1~5/2灰〜灰オリーブ) 粘性や強いシルトが。灰緑地山粒と暗灰・灰色シルト粒の混成に見える。
- 7 黒色土 径0.5cm程度の黒色・暗灰粒主体。灰緑粒(木根)の可能性がある。
- 8 暗灰色(5Y4/1~5/1灰〜オリーブ黒) シルトがちな暗灰色土に径0.5cm前後の黒色粒・灰緑地山粒まばら。
- 9 灰色砂質土 数mm径地山粒まばら。不均等ながら砂がちなシルト(木根と考えられる)。

【04a - 04b】 オ区SD02

- 1 黒褐色〜黒色土(2.5Y3/1~2/1) ぬめると2.5~5GY2/1(黒〜オリーブ黒)にも見える。上半はしまり良く、縦溝。地山粒ごくわずか。下半は、地山粒わずかでやや粘性あり。やや黒味強い。
- 2 黒褐色土(2.5Y3/1) 数mm径地山粒やや密。質は1の下半に近いが色調はやや深い・明るい。
- 3 灰色土(7.5Y5/1~6/1) 数cm径地山ブロック主体。黒色土混。
- 4 ブロック混成土 黒褐色主体。黒色(地山)ブロック混成。径数mm~1cm程度。地山粒は下半に密。
- 5 灰褐色土(7.5Y6/1~6/2) 数cm径地山ブロック主体。黒色土混。
- 6 灰褐色土(7.5Y6/1~6/2) 数cm径地山ブロック主体。黒色土混。
- 7 灰褐色土(7.5Y6/1~6/2) 数cm径地山ブロック主体。黒色土混。
- 8 灰褐色土(7.5Y6/1~6/2) 数cm径地山ブロック主体。黒色土混。
- 9 灰褐色土(7.5Y6/1~6/2) 数cm径地山ブロック主体。黒色土混。
- 10 灰褐色土(7.5Y6/1~6/2) 数cm径地山ブロック主体。黒色土混。

【05a - 05b】 オ区SD04-02

- 1 暗褐色〜黒(5G3/1~2/1) シルト主体でしまり良く砂粒あまり目立たない。粘性はあまり強くない。(シルト質土?)1~2mm程度の地山粒及0.1~3mm程度の炭化物粒をまばらに含む。
- 2 暗褐色(5GY2/1) 1と同質だが炭粒に黒味強い。炭化物は不均等分布する部分と混成部分がある。
- 3 暗褐色(5GY3/1) シルトがらで粘性やや強い。地山小粒やや密。黒色土粒まばら。炭化物はほとんど含まない。
- 4 オリーブ黒(5GY2/1) シルトがらで粘性強い。(特に中央)。両側は1cm以下の地山粒まばらに含む。やや砂がらで色調深い。
- 5 オリーブ黒(5GY2/1) 7より砂質多分可。地山ブロックやや密。中央シルトがらで黒味強く、両側が地山多いのは7と同様。
- 6 オリーブ黒(5GY2/1) 7より砂質多分可。地山ブロックやや密。中央シルトがらで黒味強く、両側が地山多いのは7と同様。
- 7 暗褐色(5GY2/1) 7より砂質多分可。地山ブロックやや密。中央シルトがらで黒味強く、両側が地山多いのは7と同様。
- 8 暗褐色(5GY2/1) 7より砂質多分可。地山ブロックやや密。中央シルトがらで黒味強く、両側が地山多いのは7と同様。
- 9 暗褐色(5GY2/1) 7より砂質多分可。地山ブロックやや密。中央シルトがらで黒味強く、両側が地山多いのは7と同様。
- 10 暗褐色(5GY2/1) 7より砂質多分可。地山ブロックやや密。中央シルトがらで黒味強く、両側が地山多いのは7と同様。

【06a - 06b】 オ区SD02-04

- 1 05a-bの1層と同じ。
- 2 1に地山ブロックを密に含む部分と地山が混入した部分を一括。縦溝が木根の形状に近いと推定。
- 3 SD04-02secの6層と同じ。
- 4 SK02の2層と同じ。
- 5 (5GY2/1) シルトがらで粘性強いが砂も含まない。1~3mm径地山粒がわずか。
- 6 暗褐色(7.5~10GY2/1) 5より黒味強く、シルト質(縦溝)強い。同上大の地山粒まばら。炭化物粒がわずか。
- 7 暗褐色(5GY3/1) 数mm径地山粒を不均等に密に含む。総じてやや砂が。
- 8 暗褐色(5GY3/1) 数mm~2cm前後の地山ブロックを密に含む。暗褐色・黒色の同大ブロックも混じる。(ブロックの混入)。
- 9 オリーブ黒(5GY5/1~6/1) 地山ブロック(前落土)主体。黒色シルト質混。
- 10 黒(N2/~2.5GY2/1) シルトがら黒色土に、数mm~3cm大の地山ブロックを不均等まばらに含む。

図3-9 土層断面図(6)オ区(2)



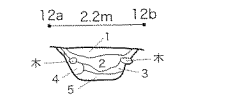
【07a - 07b / オ区SD03~04】
 1 TSD04~021 sec1層と同じ。
 2 1よりやや黒味強くシルトが。地山微細粒・炭化物とも不均等。わずかに含む。
 3 数mm~2cm径の地山ブロックを密に含む。2層と同じ。
 4 3と同様だが下部はブロックがより密。右側壁近くはより粗。
 5 2より黒味強いシルト質土。粘性強い。地山粒はほとんど含まない。
 6 数mm径地山粒を密に含む。砂が少な5層。全体の色調より濃い。
 7 紫色シルト（黒味強い）ブロックと灰色砂質地山ブロック（ともに径1cm前後）が混成。

【08a - 08b / オ区SD01】
 1 灰黄褐色(10YR5/2~4/2) しまりの良いシルトが砂シルト。数mm径地山(灰黄褐色)、黒色シルト粒や密。炭化物微細粒わずかに含む。
 2 黒褐色(10YR3/2~2/2) シルト質。粘性強い。地山微細粒。炭化物微細粒わずかに含む。
 3 黒褐色(10YR3/2) 2層よりやや明るい。特に両側部は黄色味をおび、中央は2層に近い黒味。地山粒・炭化物粒はごくわずか。
 4 黒褐色(10YR2/1~2/2) 黒味は2と同様か、やや強い。炭化物・炭化物・地山粒まばら(2層より目立つ)。2~4層は1~2のシルト質。炭化物(5層中央まで)。
 5 地山ブロック黒褐色土。崩落状の地山ブロックを特に下部に数枚の互層状にはさまる黒色シルトブロック土。黒色シルトは4層以上に見られるより黒味強く0.5~1cm径のブロック状で、暗褐色・黒褐色シルトと混成しつつ主体をなす。両側から侵入積層の互層を示し、中央は4層と同質のシルト層。

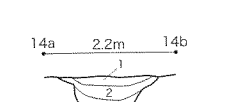
【09a - 09b / オ区SD06】
 1・2 SD08の1・2と同様。
 3 2に近いが黒色シルトが。左側部分。地山ブロック密な部分あり不均質。木根の影響(図示の暗褐色部分以外)で覆っているらしい。
 4 SD07の5と同様。地山粒は下半に密。

【10a - 10b / オ区SD07】
 1~3はSK02の1~3と同様だが1・2層は微細(1mm以下)な炭化物粒をわずかに含む。
 4 数mm~1cm程度の地山粒を密に含む。2~3層と同様な砂シルト。やや砂が。木根の影響(図示の暗褐色部分以外)で覆っているらしい。
 5 数mm径の黒色・灰色・黒褐色シルト質土。

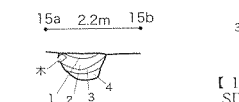
【11a - 11b / オ区SD08】
 1・2 SK02と同様。(SD07に見える炭粒は見えない。)
 3 2より数mm径の地山粒が多く(全体にまばら)やや粘り強い。
 4 SD07の5層と同様。



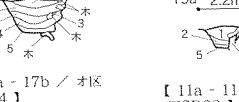
【11a - 11b / オ区SD09】
 1・2 SD08の1・2と同様。
 3 SK02と同様。
 4 地山ブロック主体。(暗灰シルト質土。崩落状)。
 5 SD07の5と同様だが黒色シルトブロックが多く、全体に黒味強い。



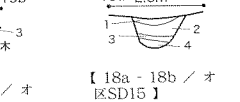
【14a - 14b / オ区SD11】
 1 暗緑灰(7.5GY3/1) しまりの良いシルトが。SK02の1層に似る。
 2 暗緑灰 1よりやや暗く黄色みおびる。シルトがやや粘性や強い。地山微細粒わずかに含む。
 3 暗緑灰(10GY3/1) 2より黒味強いが、基本的に1~2のシルト。微細な地山粒まばら。
 4 緑黒(10GY2/1) 3より黒味強い。数mm径の地山粒まばら。
 5 緑黒(10GY2/1) 4と同質のシルトを主体に、暗灰褐色地山ブロック(数mm~3cm径。崩落状や下の地山)を3枚程度の互層状にはさまる。部分的にやや厚層にはさまる黒色ブロック(数mm径)は非常に黒味強い。1~5の順で黒色部分の黒味が強くより粘り強くなる(ベタつき)。
 6 灰褐色土(灰灰5G6/1~5/1)崩落状地山と同質の粗砂主体砂シルト。ごくわずかに黒色シルト粒を含むがかなり均質で一見地山。
 7 ブロック直成互層 非常に黒味強い黒色シルト(緑黒(10G1.7/1)~青黒(5BG1.7/1)と、層部や下の地山(注:崩落10YR2/2~7/3)の8mm~2cm径のブロックが混成。それぞれが主体となる数層の互層状をなす。



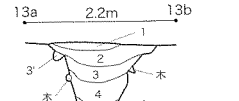
【15a - 15b / オ区SD05】
 1 緑黒(5~10G2/D)SK02の1と同様。炭化物粒は含まず。良くしめる。
 2 緑黒(5~10G2/D)SK02の2と同様。砂粒も含むが、粘性は1より強い。
 3 黒黒(5YR2/1)数mm径地山ブロックやや密。砂が。砂質砂シルト。地山粒は互層状を成すのほわずか。



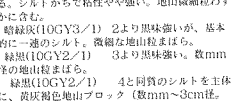
【17a - 17b / オ区SD14】
 1・2 SD08の1・2と同様。
 3 2より黒味・シルト質。粘性強い。
 4 2に近い色調のシルト質に径0.5~1cm程度の黒色・灰色(地山)粒を密に含む。両側壁近くは非常に密。中央は3に近いシルト質。
 5 ブロック直成土。地山を主体に黒色・暗褐色(灰)ブロックが混成。0.5~1cm程度が上。4よりも更に色調が上。



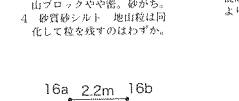
【18a - 18b / オ区SD15】
 1・2 SD19と同様=SK02と同様。2は1より黒味強い。
 3 ブロック直成土。灰色砂シルト(地山)ブロック主体。黒色シルトブロック混成。
 4 ブロック直成土。灰色(地山)・黒色(黒味強いシルト質)・暗褐色(灰)の数mm~3cm大ブロック混成。



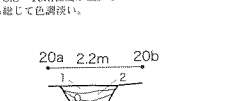
【11a - 11b / オ区SD10】
 1~3 オ区SD11の1~3と同じ。
 4 オ区SD11の5層と同じ。中央上部はSD11の4層と同様シルトが。3層より色調明るい。下半は黒色土と地山ブロック主体が数枚の互層状をなし、黒色シルトは黒味やや強い。
 5 SD11の5層と同じ。最上部はSD11の6層より厚くないが(3cm前後)地山砂質土。以下はブロック主体の互層状をなすが、未読のため不詳。



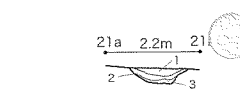
【14a - 14b / オ区SD11】
 1 暗緑灰(7.5GY3/1) しまりの良いシルトが。SK02の1層に似る。
 2 暗緑灰 1よりやや暗く黄色みおびる。シルトがやや粘性や強い。地山微細粒わずかに含む。
 3 暗緑灰(10GY3/1) 2より黒味強いが、基本的に1~2のシルト。微細な地山粒まばら。
 4 緑黒(10GY2/1) 3より黒味強い。数mm径の地山粒まばら。
 5 緑黒(10GY2/1) 4と同質のシルトを主体に、暗灰褐色地山ブロック(数mm~3cm径。崩落状や下の地山)を3枚程度の互層状にはさまる。部分的にやや厚層にはさまる黒色ブロック(数mm径)は非常に黒味強い。1~5の順で黒色部分の黒味が強くより粘り強くなる(ベタつき)。
 6 灰褐色土(灰灰5G6/1~5/1)崩落状地山と同質の粗砂主体砂シルト。ごくわずかに黒色シルト粒を含むがかなり均質で一見地山。
 7 ブロック直成互層 非常に黒味強い黒色シルト(緑黒(10G1.7/1)~青黒(5BG1.7/1)と、層部や下の地山(注:崩落10YR2/2~7/3)の8mm~2cm径のブロックが混成。それぞれが主体となる数層の互層状をなす。



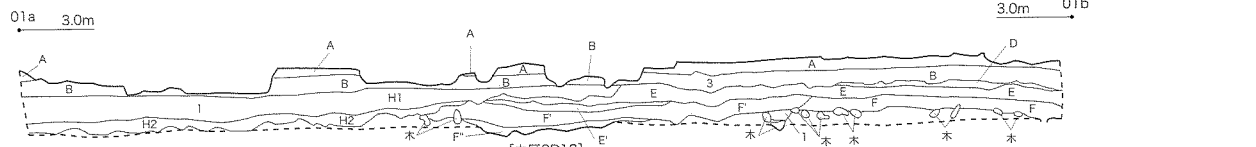
【16a - 16b / オ区SD19】
 1・2 SK02と同様。2は1より黒味強い。
 3 SK02と同様。



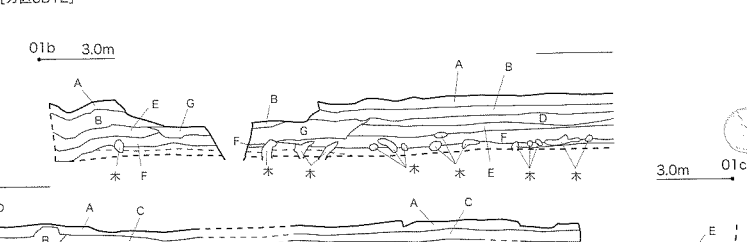
【20a - 20b / オ区SK02】
 1 暗灰~暗オリーブ灰(N3/1~2.5Y3/1)シルトが。良くしめる。地山粒ごくわずか。
 2 色調より(1よりやや暗い)地山微細粒をわずかに含む。1よりやや粘性あり。
 3 2と同様な基調に、数mm~1cm径の地山粒をやや密(不均等)に含む。両側・下部にブロック多い。全体に2より砂が。



【21a - 21b / オ区SK03】
 SK02の1~3と同様。いずれもSK02の埋土よりわずかに黒味が強い印象。



【01a - 01b / 方区南壁】(西・北・東壁も参照)
 1 黒色土。Fと同様に数mm径の地山粒をやや密に含む。ピット?平面的にはピットはすく西のピット直上だが、地山が削られているため断面のみ。直下の「ピット」は木根らしい。
 E 質はEに近いが、色調はFに近い。中間的な層。
 F Fに近いがやや色調明るく、いくぶんシルトが。F図右のとの境は、わりと明確だが、左ほどこでF自体に近づいているかもしれない。
 F' 地山とF(F')との中間的な部分。Fが浸透した地山とSD12の埋土の一部を一括していると思われる。
 H1 灰白・灰色・黒色の数cm~拳大のブロック(ブロックの中にはラミナの明瞭な3区6~7層程度のブロックもある。)をまばらに含む。シルトが砂シルト。5RPG/1~5/1・紫灰。
 H2 Eに近い色調で、Dよりやや暗い。上半は数mm~1cm程度の地山(黄緑)及びブロックをまばらに含むのみで均質な印象。下半はブロックが5cm程度までのものを含むようになり厚くなる。



【01b - 01c / 方区西壁】(南・北・東も参照)
 A 緑灰~暗緑灰(10G5/1~4/1)砂が砂シルト。粘性弱い。しまりは良い。炭化物わずかに含む。部分的・各所に1mm前後の薄い炭化物層(中央の凹凸幅20cm程度が単位?)をはさむ。
 B 灰(〜灰オリーブ) (5Y5/1~5/2)Aよりわずかに粘性あり。しまりは良い。Aの由來となつた影響か。上部2~3cm厚は黄褐色味をおびる(鉄分沈着)。
 C 黄灰(2.5Y6/1) Aより白っぽく、Bよりシルトが。良くしめる。A・Bに比べ粘り強いが、不均質。暗灰や灰白粒をまじえ、(星雲)状に混成する部分がある。
 D 灰(2.5Y5/1) Cに似るが、色調が、色調が、C~D間は両層がブロックをなしてモヤに炭灰(崩落)している。モヤ状部分ほど炭化物微細粒を密に含む。
 E 黄灰(2.5Y4/1) Dに近して均質。しまりよく粘性ややや。Dよりは土壌化。炭化物微細粒。全体にまばら。→東壁6層~3区南壁13層。
 F 黒黒(2.5Y3/1) Eや数mm径地山粒が不均等に散見される。木根等の影響か。基調は黒色土(黒赤)状。黒味も黒色~黒褐色で不均一。右半(北寄り)の方がやや黒味強い。
 G 黄灰(2.5Y5/1) シルトが砂シルト主体。下部は、黒色(F)やDの黒色シルトブロック土。上部にはD~Fなどの数mm径程度。南壁東側の落ち込みは続くか?
 a オリーブ黒(5Y3/1) シルトが。粘性やや強い。植土・炭化物微細粒ごくわずかに含む。
 b オリーブ黒(5Y3/1~3/2) aよりわずかに色調明るい。地山微細粒まばらに含む。
 c 黄褐色砂 1cm径の暗褐色土粒をいくらか含んでいる。やや粗い。
 d 灰オリーブ 地山によるがSD05埋土の一部の可能性もあり。SD05の影響で埋土が厚くなった部分の可能性もある。
 4 灰(GY4/1) オリーブ黒地山(灰~灰黒)が混成。黒土主体の部分、ブロック状に混成する部分あり。不均質。

【01c - 01d / 方区東壁】(南・西・北壁も参照)
 7 灰褐色(オリーブ灰 5GY5/1) 6・8層の間のブロック土が密な部分。黄褐色(地山)ブロック径数mm~3cmを密に含む。径数mm~1cmの黒色土ブロック。数mm径の炭粒をまばらに含む。
 8 暗黄灰(5B4/1) しまりよいシルトが砂シルト。径1mm前後の炭粒。黄褐色粒をやや密に含む。東壁sec7層に似る。
 9 暗黄灰(10B4/1~3/1) 砂シルト。やや砂が。10~8へ移行。径1~2mmの炭・灰白粒をまばらに含む。
 10 暗緑灰(10GY4/1) シルトが砂シルト。同土の炭・灰白粒をまばらに含む。
 11 黒黒~黒(7.5YR3/1~2/1)シルトが。ベタつき。黒味強い。
 12 灰褐色(オリーブ灰 5GY5/1) 6・8層の間のブロック土が密な部分。黄褐色(地山)ブロック径数mm~3cmを密に含む。径数mm~1cmの黒色土ブロック。数mm径の炭粒をまばらに含む。
 13 暗黄灰(5B4/1) しまりよいシルトが砂シルト。径1mm前後の炭粒。黄褐色粒をやや密に含む。東壁sec7層に似る。
 14 暗黄灰(10B4/1~3/1) 砂シルト。やや砂が。10~8へ移行。径1~2mmの炭・灰白粒をまばらに含む。
 15 暗緑灰(10GY4/1) シルトが砂シルト。同土の炭・灰白粒をまばらに含む。
 16 黒黒色砂シルト(7.5YR3/1) しまりのよい均質な層。炭の微粒子。径1mm以下の炭粒。ごくわずかに含む。
 17 暗褐色砂シルト(7.5YR4/1) 黄灰・灰白径数mmブロックを密に含む。

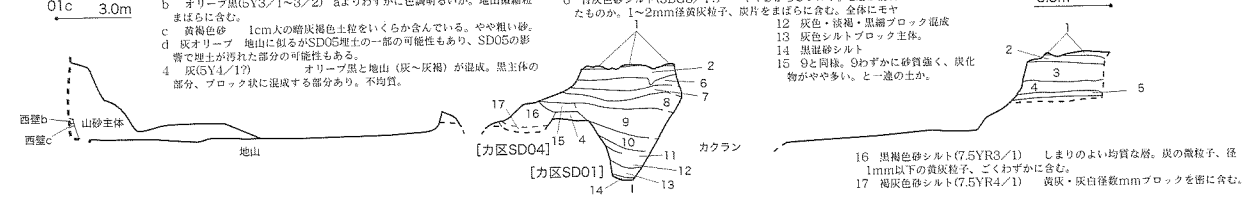


図3-10 土層断面図(7)才区(3)・方区(1)

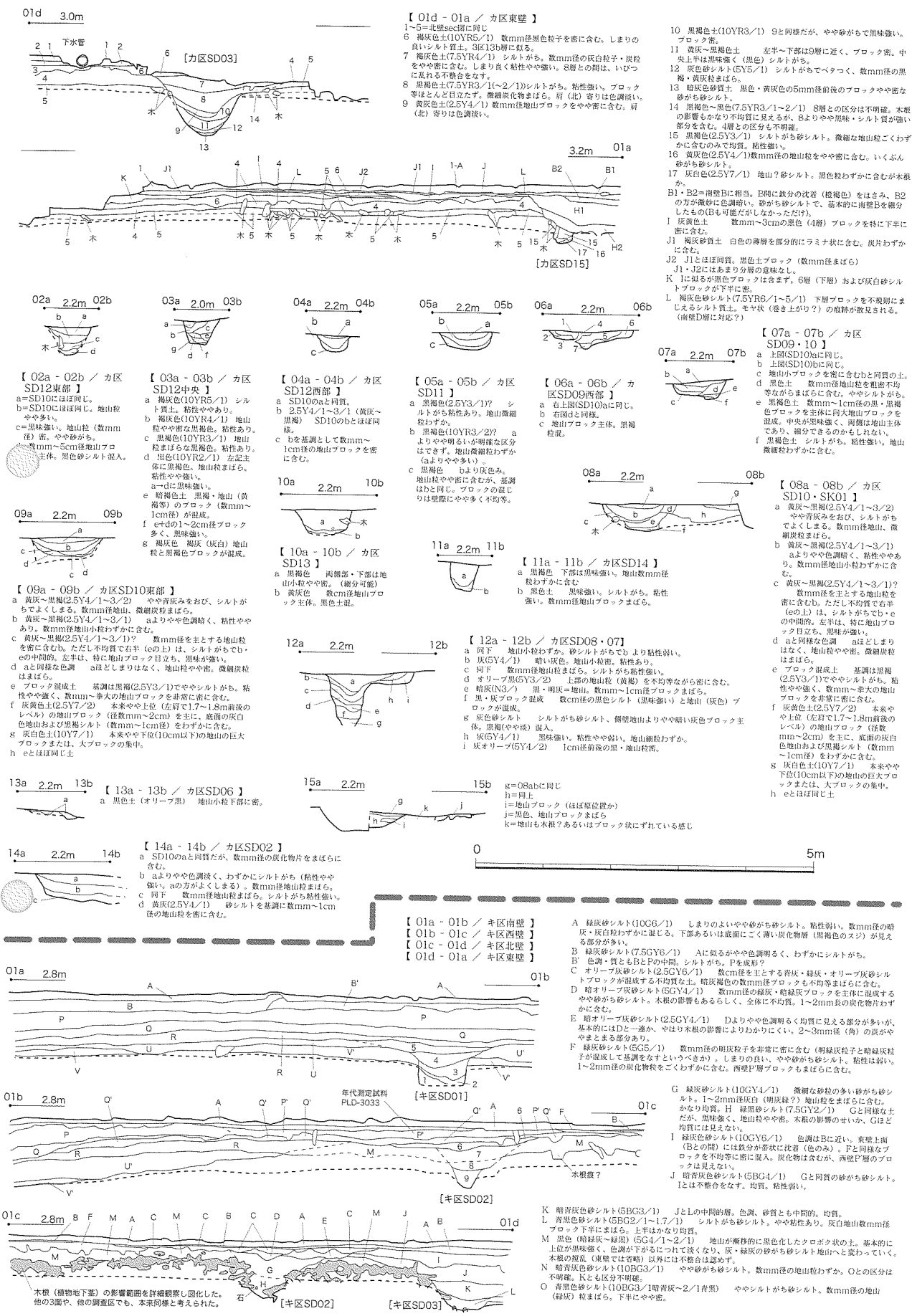


図3-11 土層断面図(8)カ区(2)・キ区(1)

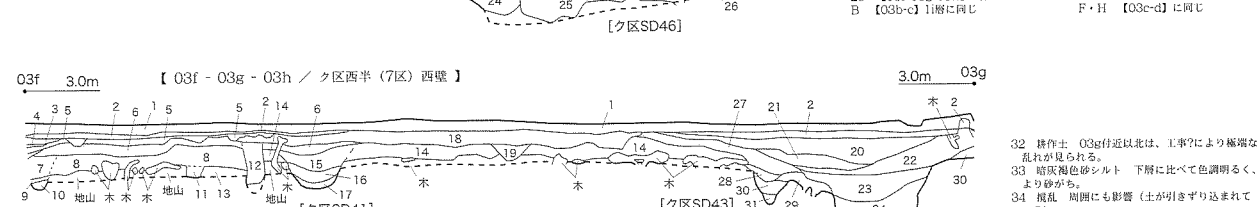
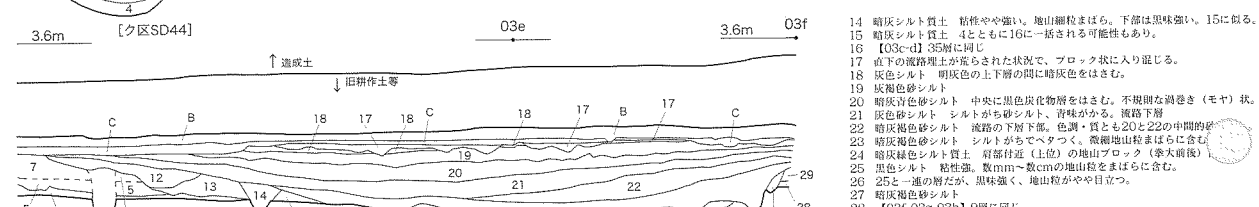
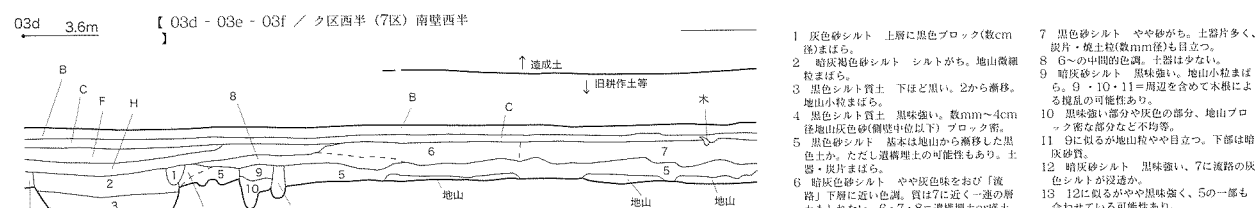
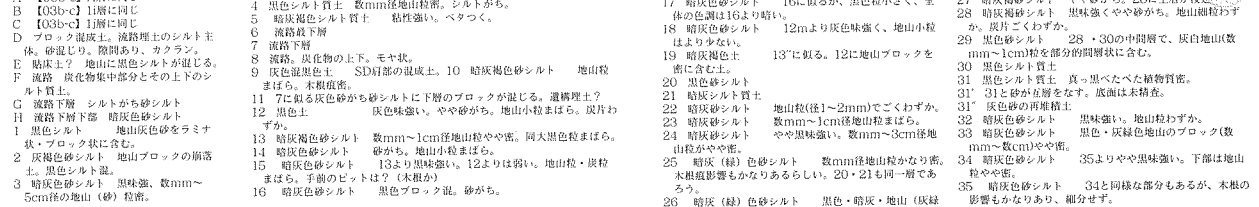
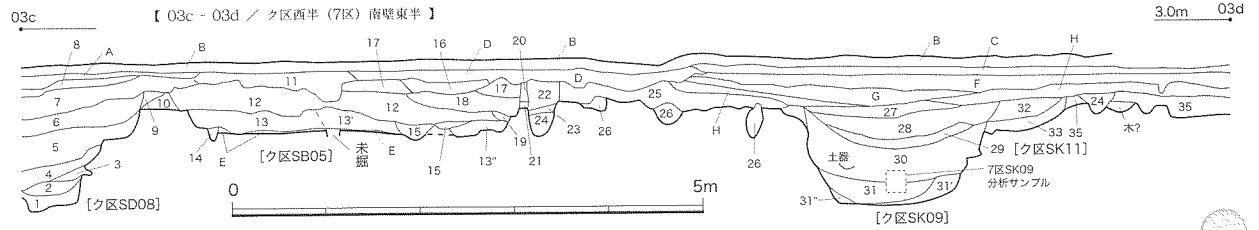
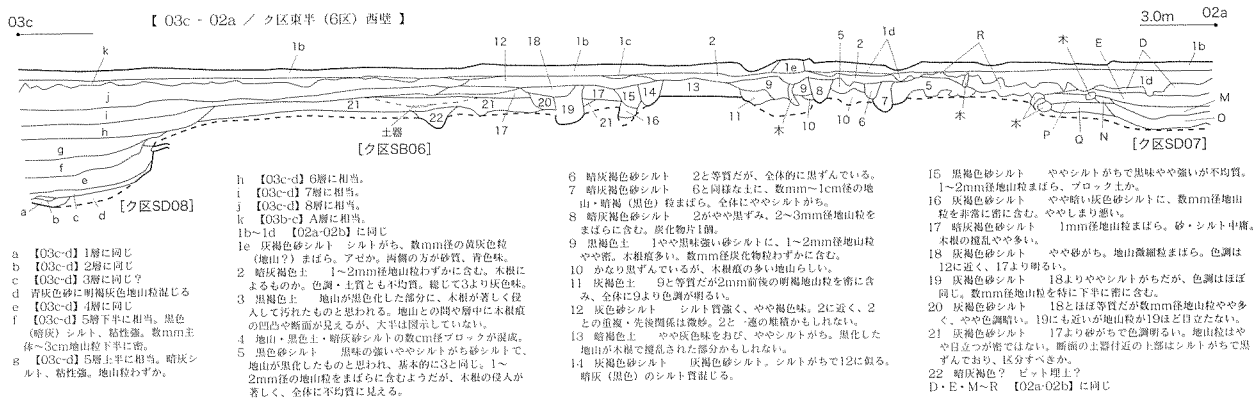
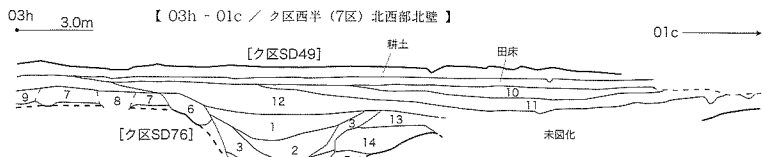
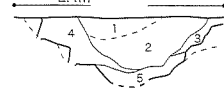


図3-14 土層断面図(11)ク区(3)



【04a - 04b / 区区 SD05】

- 1 灰褐色砂質土 (5Y4/1) かなり均質で、数mm径の黄褐色 (黄道には見られない色調) 地粒をわずかに含む。
- 2 暗灰色砂質土 細分していないが、数粒に区分可能。数mm径黄褐色地山粒を密に含む部分や、黒色シルト質粒の密な部分と互層状をなす。1とともに人為的処理部分と考えられる。
- 3 黒色シルト (10YR2/1) ややシルトがら。1mm径地山粒をわずかに含む。
- 4 暗緑灰色シルト (10G3/1) やや砂がらシルト。1~2mm径地山粒をまばら。
- 5 暗緑灰色シルト (10G3/1) 砂質シルト。中央は側面に近い砂質土。両側は数mm径砂質土 (灰褐色) 層を密に含む。

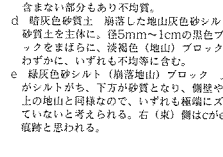


【05a - 05b / 区区 SD05・SK01】

- 1 暗褐色砂質土 3~5mm程度の緑灰色 (地山)・黒色シルト質ブロックや砂。
- 2 灰褐色 かなり均質な砂質土。暗緑シルト質土。
- 3 灰褐色 2に近い色調や明るい。数mm径黒色粒をまばら。
- 4 暗緑灰色砂質土 暗緑~黒色のシルト質と砂が混成。
- 5 灰褐色土 基調は明るい緑灰色の砂だが、5mm前後の黒色および緑灰 (地山) シルトを非常に密に含む。
- 6 暗緑褐色シルト 砂質強く、わりと均質。ブロックはあまり目立たない。
- 7 黒色シルト 砂質強い。数mm~5mmの黒色シルトブロックを主体に緑灰色ブロックも混じる。
- 8 緑灰色砂質土 暗緑~黒色のシルト質と砂が混成。暗緑砂、暗緑~黒色のシルトの5mm~1cmを主とするブロックが不均一に混成。
- 9 暗緑灰色砂質土 暗緑色シルト質ブロック (5mm~1cm) を非常に密に含む緑灰色砂質土。8と一連が。
- 10 黒色シルト 粘性强、ベタつく。色調はやや褐色。
- 11 暗緑色シルト質土 層付近と同様な緑灰色地山の崩落ブロック。
- 12 暗緑~黒褐色砂質土 砂主体、シルト混、均質。
- 13 暗緑色シルト 砂混じりシルト質土。地山腐植層をこくわずかに含む。
- 14 暗緑色シルト 砂がら。砂質土に近い。暗緑砂がらシルト中に径1~5mmの黄褐色シルト・黒色シルトを含む。密な部分、ほとんど含まない部分もあり不均質。
- 15 暗緑灰色砂質土 崩落した地山灰褐色シルト。砂質土を主体に。径5mm~1cmの黒色ブロックをまばらに。淡褐色 (地山) ブロックをわずかに、いずれも不均等に含む。
- 16 緑灰色砂質土 (崩落地山) ブロック 上部がシルトがら。下方が砂質となり、側面や土上の地山と同様なので、いずれも腐植にズレないと考えられる。右 (東) 側はc'の腐植と思われる。

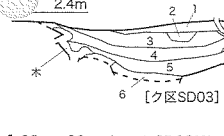
【06a - 06b / 区区 SD09】

- 1 暗緑灰~暗褐色シルト (10G4/1~5B4/1) 砂がらシルト。微細 (径1mm前後) 地山 (灰オリーブ~灰) 粒をわずかに含む。5mm径地山、断面に1個。
- 2 暗緑砂質土 (10YR4/1) 数mm径地山粒 (灰白~黄) を密に含む。暗緑砂質土。一部は木根の腐乱も混成。



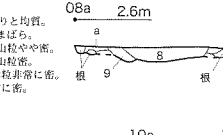
【07a - 07b / 区区 SD05・SK01】

- 1 暗緑シルト (10G6/1~5/1) 砂がら。径1~2mmの黄褐色 (地山)・黒色シルト粒をわずかに含む。
- 2 ブロック崩壊土 3層の数mm径ブロックに灰褐色砂質ブロックが混成する。
- 3 暗緑灰色シルト (5Y4/1) 砂がら。1mm径地山・黒色土粒を密に含む。
- 4 暗緑灰色シルト (5G4/1) 砂がらシルトがら。やや黒味強い。3・5の中間



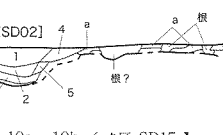
【08a - 08e / 区区 SD02】

- 1 暗緑褐色シルト (5G4/1) 砂がらシルトだが、ベタついた感じの粘りあり。数mm径の明灰褐色 (地山)・黒色粒をまばら。側面 (斜より) は粘りを密に含む。
- 2 暗緑褐色シルト質土 (10Y3/1) やや黒味強いベタついた土。砂も混じるが粘りあり。
- 3 黒色土 1~2mm径地山粒を密。
- 4 黒色土 (10Y4/1~3/1) 砂質シルト。やや粘り強い。径1mmの地山・黒色粒をまばら。
- 5 暗緑褐色シルト 1よりやや黒味強く、ややシルトがら。9と同様な地山粒をまばら (9よりやや少ない)。黒粒はわずかに、9・11の間のシルト。
- 6 11層と同様な灰褐色シルトを基調に、灰色・明褐色地山 (数mm径) を非常に密に含む。
- 7 12層と同様な暗緑シルトに、数mm径の向上ブロックをやや密に含む。
- 8 13層の黒色土 (10YR3/1) シルト質土。ベタつき、粘り強い。9と同じ粒をわずかに含む。
- 9 14層の暗緑シルト 1~2mm径地山粒をまばら。ややシルトがら。
- 10 暗緑灰~黒色シルト 地山が混成した部分で、木根による腐れがかなり多いが、図には表現していない。
- 11 暗緑褐色シルト質土 緑作りによる腐乱。



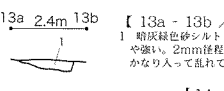
【09a - 09b / 区区 SD11】

- 1 暗緑褐色シルト (10B6/4/1~3/1) 黒味強い。やや砂がらシルト。地山微細粒をまばら。
- 2 暗緑褐色シルト (10B2/1) 同上土に1~3mm径の黄褐色 (地山) 粒をかなり密に含む。1は砂質を感じない。
- 3 暗緑褐色シルト (10B7/1) 黒味強く、1mm~1cm径の地山粒や砂。
- 4 灰褐色シルト 数mm~5cm径の地山 (黄褐色シルト)・暗緑シルトブロックを密に含む。砂質土。付近に小規模な砂層があるらしく、4が砂質なのはそれと考えられる。



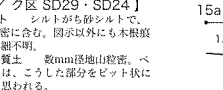
【10a - 10b / 区区 SD15】

- 1 (2.5Y4/1~3/1) 黄灰~黒褐色 ややシルトがらシルト。1mm径地山粒をこくわずかに含む。
- 2 1~3の中間。1よりやや色調弱く、やや粘り強い。微細地山粒をまばら。
- 3 (2.5Y3/1~2/1) 黒褐~黒 黒色シルト。粘り強い。地山微細粒をまばら。
- 4 3と同様だがより粘り強い。ベタつく部分。
- 5 (10G3/1~2/1) 暗緑灰~緑 数mm径地山粒をまばら。砂も混じるがベタつく粘りのシルト。



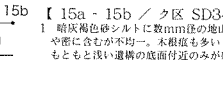
【11a - 11b / 区区 SD36】

- 1 暗緑褐色シルト 数mm径地山粒をまばら。しまり良い。
- 2 暗緑褐色シルト (10G3/1) 径1~3mmの地山粒や砂。砂も含むがシルトがらでやや粘り強い。数mm径地山粒をこくわずかに混じる。
- 3 暗緑褐色シルト 2と同様なシルト質と数mm~5cm径の砂地山ブロック。数mm径のシルト質地山粒が混成。



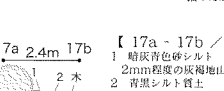
【12a - 12b / 区区 SD13】

- 1 灰褐色シルト (10Y4/1~4/2) ややオリーブがら。径1~2mmの地山粒をまばら。
- 2 暗緑褐色シルト (10G3/1) 径1~3mmの地山粒や砂。砂も含むがシルトがらでやや粘り強い。数mm径地山粒をこくわずかに混じる。
- 3 暗緑褐色シルト 2と同様なシルト質と数mm~5cm径の砂地山ブロック。数mm径のシルト質地山粒が混成。



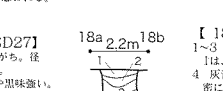
【13a - 13b / 区区 SD24】

- 1 暗緑褐色シルト シルトがら。粘りやや強い。2mm径程度の地山粒を。木根根がかなり入って混成しているが腐していない。



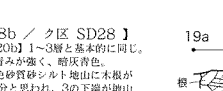
【14a - 14b / 区区 SD29・SD24】

- 1 暗緑褐色シルト シルトがらシルトで、数mm径地山粒を密に含む。図面以外にも木根根が密集しており詳細不明。
- 2 暗緑褐色シルト質土 数mm径地山粒。ペルトの手前 (東) は、こうした部分をゼット状に腐ったが木根根と思われる。



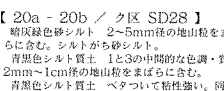
【15a - 15b / 区区 SD34】

- 1 暗緑褐色シルトに数mm径の地山粒をやや密に含むが不均一。木根根も多しらしく、もともと深い層の底面付近のみが残存。



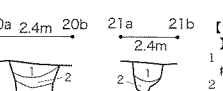
【17a - 17b / 区区 SD27】

- 1 暗緑褐色シルト シルトがら。径2mm程度の灰褐色地山粒をまばら。
- 2 暗緑褐色シルト 1よりやや黒味強い。径8mm程度の腐植片1点あり。



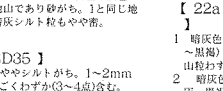
【18a - 18b / 区区 SD28】

- 1 暗緑褐色土 径2~3mmの木灰地山粒や砂。シルトがら。
- 2 暗緑褐色シルト 腐植層の暗褐色砂質土。地山であり砂がら。1と同じ地山粒。暗緑シルト粒もやや。



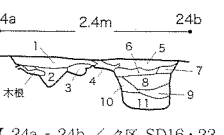
【19a - 19b / 区区 SK02・SD33】

- 1 暗緑褐色シルト 1~2mm径地山粒をまばら。シルトがらシルトで粘りやや強い。木根根によりかなり腐乱している。
- 2 暗緑褐色シルト 黒味強く、地山粒が、木根の影響かもしれない。2~SK02がSD33に付した土ならはSK02
- 3 暗緑褐色シルト 数mm~3cm径地山粒をこくわずかに含む。
- 4 暗緑褐色シルト 数mm~3cm径の地山粒をこくわずかに含む。



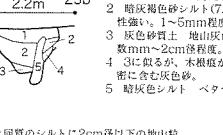
【20a - 20b / 区区 SD28】

- 1 暗緑褐色シルト 2~5mm径の地山粒をまばらに含む。シルトがらシルト。
- 2 暗緑褐色シルト質土 1と3の中間の色調・質で、2mm~1cm径の地山粒をまばらに含む。
- 3 暗緑褐色シルト質土 ベタつく粘り強い。同上の粒を不均等にまばらに含む。一部黒味は、特に強いのは木根根が。
- 4 3~5基本的な下へ上へ黒味弱まり。シルト質シルトへ漸移。ただし全体的にシルトがらで砂は目立たず粘り強い。



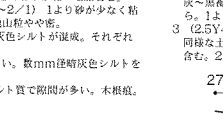
【21a - 21b / 区区 SD19】

- 1 暗緑褐色土 径2~3mmの木灰地山粒や砂。
- 2 暗緑褐色シルト 腐植層の暗褐色砂質土。地山であり砂がら。1と同じ地山粒。暗緑シルト粒もやや。



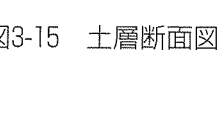
【22a - 22b / 区区 SD17】

- 1 暗緑褐色シルト (2.5Y4/1~3/1) 黄灰~黒褐色 シルトがら径1mm前後の地山粒をまばら。やや黒味強い。
- 2 暗緑褐色シルト (2.5Y4/1~3/1) 黄灰~黒褐色 径1~2mmの地山粒をまばら。1より色調明るい。
- 3 (2.5Y4/1~3/1) 黄灰~黒褐色 2と同様な土に部分的に数mm径の地山粒を含む。2よりやや砂がら。



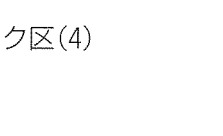
【24a - 24b / 区区 SD16・23】

- 1 暗緑褐色シルト シルトがらで、やや粘り強い。1~3mm径の暗褐色地山粒をまばらに含む。シルトがらシルト。
- 2 暗緑褐色シルト 1よりシルトがらで、上半はやや黒味強い。緑灰色ブロックをやや密に含む。下半は緑灰色シルトブロックがら (?) が、地山を木根が混した部分かもしれない。
- 3 暗緑褐色シルト 木根根が、数mm径地山粒をまばら。シルトがら。
- 4 暗緑褐色シルト 木根根?。数mm径地山粒を非常に密に含む。暗緑シルト質と混じる。
- 5 暗緑褐色シルト シルトがら。1~2mm径地山粒をまばら。
- 6 暗緑褐色シルト 5よりやや色調弱く、よりシルトがら。5と同等の地山粒をまばら。
- 7 6と同質のシルトに2cm径以下の地山粒が非常に密に混じる。
- 8 暗緑褐色シルト質土 粘り強く、ベタつき。径1~2mmの地山粒をわずかに含むが、西側 (石) 寄りには、2~3mm径のやや。
- 9 暗緑褐色シルト やや砂がら。1~2mm径地山粒を密に含む。2mm径程度の腐植層の暗褐色砂質土。地山であり砂がら。1と同じ地山粒。暗緑シルト粒もやや。
- 10 暗緑褐色シルト 数mm径から数cmの地山ブロックに、暗緑シルト質が混成。地山の崩落土と考えられる。
- 11 暗緑褐色シルト質土 8と同様なシルト質土。やや砂混じりで、底面付近は砂がら。数mm径の明灰褐色 (地山) ブロックをわずかに含む。腐植層は腐植に含む。1.5cm径の木灰片1個が見える。



【25a - 25b / 区区 SD35】

- 1 暗緑褐色シルト (7.5Y4/1) ややシルトがら。1~2mm径の地山粒をまばら。腐植層をこくわずかに含む。
- 2 暗緑褐色シルト (7.5Y3/1~2/1) 1より砂が少なく粘り強い。1~5mm程度の灰褐色地山粒や砂。
- 3 灰褐色土 地山灰褐色暗緑シルトが混成。それぞれ数mm~2cm径程度。
- 4 3に似るが、木根根も少しない。数mm径暗緑褐色シルトを密に含む灰褐色。
- 5 暗緑褐色シルト ベタついたシルト質で腐植が多い。木根根。



【26a - 26b / 区区 SD14】

- 1 灰 (5Y4/1) しまりの良いシルト。下半は粘り強い。数mm径シルト。
- 2 灰~オリーブ黒 (5Y4/1~3/1) 1と同様なシルト質に数mm~1cm径の地山粒や砂。
- 3 オリーブ黒 (5Y3/1) 砂も含むがシルトがらで、粘り強い。ベタつき。1mm径前後の地山粒をわずかに混じる。
- 4 オリーブ黒~黒 (5Y1/1~2/1) 3より黒味強い。砂も含むがシルトがら。ベタつき。数mm径の暗褐色 (地山) ブロックをまばらに含む。

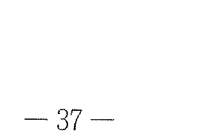
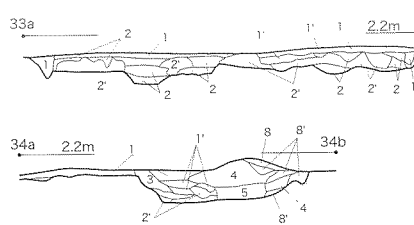


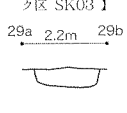
図3-15 土層断面図(12)ク区(4)

【28a - 28b / ク区 SD31・32】 (図は前ページ)

- 1 灰褐色シルト(10G5/1) シルトが、良く混ざる。径1~2mmの灰白地山粒をばらばら。SD32よりの方は、2mm角程度の炭片をわずかに含む。
- 2 灰褐色シルト(10G5/1) 1よりやや色調暗く、わずかに砂がもたるとなるが、1と同様に均質なシルト。地山粒も同様。炭片がわずかに含む。2~6=SD31地上部。
- 3 暗灰色砂シルト(5B4/1) 2よりやや色調暗く、シルトがもたるとなる。地山粒は、2mm角程度のものがやや目立つようになり、炭片もわずかに大きめ(2~3mm角)のものを含む。1~3層は一連の堆積している印象を受ける。
- 4 暗灰色砂シルト(5B4/1~3/1) 粘性強くベタつく暗灰色シルト質に、明瞭な砂質土山粒(数mm~3cm径程度)を混在させる。
- 5 3層に灰白地山粒を非常に密に含む。木根が混入した地山粒も少し見られる。
- 6 木根質 暗灰色砂シルト。地山粒がシルトに不均等に混入。
- 7 SD31の2と同様に炭片が混入しているが、7~10=SD32地上部。
- 8 SD31の3と同様に炭片が、地山粒は少ない。炭化物は同じ。
- 9 暗灰色砂シルト やや砂が砂シルトに灰白地山粒(径数mm~3cm)を。崩れた地山と地山を木根が混入した部分を一括してはいると思われる。
- 10 暗灰色砂シルト 砂も含むがシルトが。粘性強くベタつく数mm径の灰白地山粒をばらばら。数mm角の炭片がくわくわく含む。底面(10の最下部)は1cmほどの厚さで砂質の強い土が重なっている。



【29a - 29b / ク区 SK03】

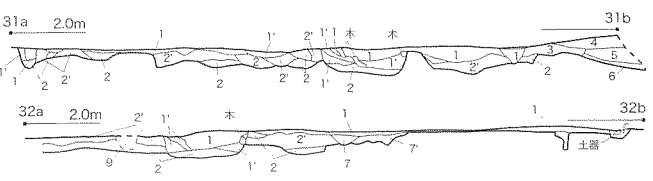


【30a - 30b / ク区 SD38】



【31ab~34ab / ク区 SB01・SB02】

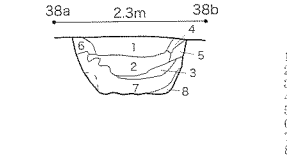
- 1 暗灰褐色土 やや砂質。青灰色砂ブロック(0.5cm大)少量含む。黄灰色砂。
- 2 暗灰褐色土 青灰色砂ブロック(0.5~1.0cm大)層に比べて多く含む。やや砂質。
- 3 暗灰褐色土 褐色土ブロック(0.5~1cm大)を若干含む。青灰色砂が大部分を占める。
- 4 暗灰褐色土 やや粘質あり。青灰色砂質土ブロック(0.5~1cm大)を多く含む。
- 5 黄灰色シルト やや粘質あり。ほとんど、砂・シルト、若干暗褐色土をおびる部分あり。
- 6 暗灰褐色土 青灰色砂と褐色土が互層をなす。
- 7 暗灰褐色土 黄灰色砂ブロック(0.2~1.0cm大)多く含む。炭化物粒(0.2~0.8cm大)少量含む。SD01同層?



- 7 暗灰褐色土 7層より黄色砂地山粒、目立つ。
- 8 暗灰褐色土 暗褐色土と黄灰色砂ブロック(0.5~2.0cm大)が混在している。炭化物粒(0.5cm径)少量含む。
- 8' 8層に近接し、黄灰色砂ブロックがやや多い。
- 9 両側に連なるビツが。

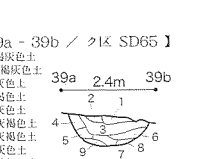
【38a - 38b / ク区 SD66】

- 1 暗灰褐色土 炭分がわずかに多い。黄灰色強い。0.3cmの炭化物粒を多く含む。0.5cmの炭化物粒を多く含む。砂粒がやや多い。
- 2 暗灰褐色土 1より粘質で、炭味おびる。0.5~1cmの黄灰色砂質土山粒を、下にやや多く含む。炭化物粒少量。
- 3 暗褐色土 2より更に炭味強く、粘質。0.5cmの炭化物粒を多く含む。2cmの炭化物粒あり。2cm大のやや大きな地山土塊も少しあり。
- 4 灰褐色土 あまり炭味の強い砂質土。1cm程度の黄灰色地山土粒を多く含む。
- 5 灰褐色土 4と同様の砂質土だが地山土の量は少ない。0.5cmの炭化物粒を多く含む。
- 6 暗褐色土 褐色土強い粘質土。0.5~1cmの黄灰色地山土をかなり多く含む。炭分豊富。
- 7 暗灰褐色土 やや粘質をおびた暗灰褐色土中に、1~10cm大(大ブロックは石手(東手)下部のみ。他は1cm以下が大半。)の地山土をきわめて多く含む。地山土の多い粘質土。0.5cmの炭化物粒を少し含む。木根は太く露出している。
- 8 青灰色土 暗灰褐色土中に、部分的に粗粒が入る。わずかに灰褐色土のしみ込みがある。地山の傾り過ぎと思われる。



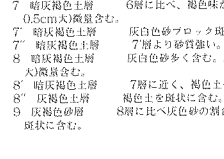
【40a - 40b / ク区 SD60】

- 1 暗灰褐色土 比較的均一な褐色土。やや砂質。
- 2 暗灰褐色土 0.5~1.0cm大黄灰色砂ブロックを多く含む。
- 3 暗灰褐色土 2層より黄灰色砂ブロック少ない。
- 4 暗灰褐色土 1層に比べ、粘質が強い。やや粘質あり。
- 5 暗灰褐色土 0.5~1cm大炭化物ブロックと0.5~1cm大炭化物ブロックを多く含む。しまりなし。
- 6 暗灰褐色土 4層より炭化物多い。しまりなし。
- 7 暗灰褐色土 7層より炭化物少ない。青味を若干おびた砂ブロックが多い。しまりなし。
- 8 暗灰褐色土 褐色土均一。やや砂質。0.2~0.5cm大炭化物
- 9 暗灰褐色土 黄灰色砂ブロック(0.5~1.0cm大)少量含む。6層と同質。
- 10 暗灰褐色土 6層に比べ、粘質が強い。炭化物粒(0.2~0.5cm大)炭質を含む。
- 11 暗灰褐色土 灰白色砂ブロック混在に少量含む。7層より砂質強い。
- 12 暗灰褐色土 褐色土をほとんど含む。炭化物粒(0.2~0.5cm大)炭質を含む。
- 13 暗灰褐色土 7層に近く、褐色土やや多く含む。褐色土を炭質に含む。
- 14 暗灰褐色土 8層に比べ、灰褐色土の割合が多。少量の褐色土を炭質に含む。



【41a - 41b / ク区 SD69~71】

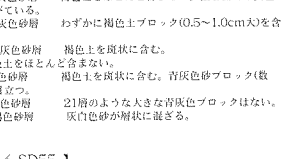
- 1 暗灰褐色土 比較的均一な褐色土。やや砂質。
- 2 暗灰褐色土 0.5~1.0cm大黄灰色砂ブロックを多く含む。
- 3 暗灰褐色土 2層より黄灰色砂ブロック少ない。
- 4 暗灰褐色土 1層に比べ、粘質が強い。やや粘質あり。
- 5 暗灰褐色土 0.5~1cm大炭化物ブロックと0.5~1cm大炭化物ブロックを多く含む。しまりなし。
- 6 暗灰褐色土 4層より炭化物多い。しまりなし。
- 7 暗灰褐色土 7層より炭化物少ない。青味を若干おびた砂ブロックが多い。しまりなし。
- 8 暗灰褐色土 褐色土均一。やや砂質。0.2~0.5cm大炭化物
- 9 暗灰褐色土 黄灰色砂ブロック(0.5~1.0cm大)少量含む。6層と同質。
- 10 暗灰褐色土 6層に比べ、粘質が強い。炭化物粒(0.2~0.5cm大)炭質を含む。
- 11 暗灰褐色土 灰白色砂ブロック混在に少量含む。7層より砂質強い。
- 12 暗灰褐色土 褐色土をほとんど含む。炭化物粒(0.2~0.5cm大)炭質を含む。
- 13 暗灰褐色土 7層に近く、褐色土やや多く含む。褐色土を炭質に含む。
- 14 暗灰褐色土 8層に比べ、灰褐色土の割合が多。少量の褐色土を炭質に含む。



【42a - 42b / ク区 SD64】

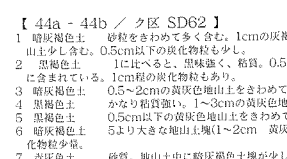
- 1 暗灰褐色土層
- 2 暗灰褐色土層
- 3 灰褐色土層
- 4 暗灰褐色土層
- 5 暗灰褐色土層
- 6 暗灰褐色土層
- 7 暗灰褐色土層
- 8 暗灰褐色土層
- 9 暗灰褐色土層
- 10 暗灰褐色土層

- 9層に比べ、ややしまりなし。やや黄色を帯びている。
- 9層よりさらに灰褐色の割合が多い。褐色土をわずかに含む。褐色土均一。やや砂質。黄灰色砂ブロック(0.5~1.0cm大)わずかに含む。
- 13層よりやや黄灰色砂ブロック多い。13.1層よりやや砂質。黄灰色砂を炭質に含む。16層と同様に、砂質が多くなる。黄灰色砂ブロックが多い。褐色土をほとんど含まない。上層側では黄色土をばらばらに含む。0.5~1.0cm大の黄灰色砂質土をばらばらに含む。青灰色砂ブロック(数cm大)目立つ。暗褐色土層
- 21層のような大きな黄灰色ブロックはない。灰白色砂が層状に混ざる。



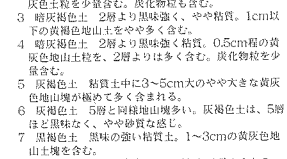
【43a - 43b / ク区 SD63】

- 1 暗灰褐色土層
- 2 暗灰褐色土層
- 3 暗灰褐色土層
- 4 暗灰褐色土層
- 5 青灰色砂層
- 6 暗灰褐色土層
- 7 暗灰褐色土層
- 8 暗灰褐色土層
- 9 淡黄褐色土層



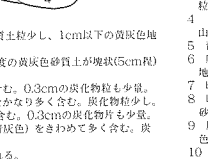
【44a - 44b / ク区 SD62】

- 1 暗灰褐色土 砂粒をきわめて多く含む。1cmの炭褐色土粒を少し、1cm以下の黄灰色地山土を少し含む。0.5cmの炭化物粒を少し。
- 2 暗褐色土 1に比べ、粘質強く、粘質。0.5cm程度の黄灰色砂質土山粒(5cm径)に含まれている。1cm程度の炭化物粒も少し。
- 3 暗灰褐色土 0.5~2cmの黄灰色地山土をきわめて多く含む。0.3cmの炭化物粒も少量。かなり粘質強い。1~3cmの黄灰色地山土をきわめて多く含む。炭化物粒少し。
- 4 黒褐色土 0.5cm以下の黄灰色地山土をきわめて多く含む。0.3cmの炭化物粒を少量。
- 5 暗灰褐色土 5より大きな地山土塊(1~2cm 黄灰色~青灰色)をきわめて多く含む。炭化物粒少量。
- 6 暗灰褐色土 砂質。地山土中に暗灰褐色土塊が少し含まれる。



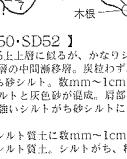
【39a - 39b / ク区 SD65】

- 1 淡黄褐色土
- 2 暗灰褐色土
- 3 暗灰褐色土
- 4 暗灰褐色土
- 5 暗灰褐色土
- 6 暗灰褐色土
- 7 淡灰褐色土
- 8 黄褐色土
- 9 灰褐色土



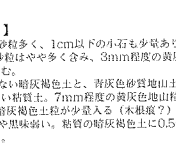
【48a-48b / SD51】

- 1 暗灰褐色土 灰褐色強い。砂粒多く、1cm以下の小石も少量あり。
- 2 暗灰褐色土 1より粘質。砂粒はやや多く含む。3mm程度の黄灰色地山粒を少量含む。赤色の砂をいくつか含む。
- 3 暗灰褐色土 あまり炭味のない暗灰褐色土と、青灰色砂質土山粒が同層程度混在する。
- 4 暗灰褐色土 やや粘質強い粘質土。7mm程度の黄灰色地山粒を多く含む。
- 5 青灰色砂質土山塊 暗灰褐色土に少量混入する(木根混?)
- 6 暗灰褐色土 4層よりやや粘質強い。粘質の暗灰褐色土に0.5~1cmの青灰色砂質土山粒を多く含む。



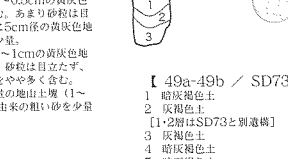
【45a - 45b / ク区 SD72・P120】

- 1 暗灰褐色土 やや砂質。0.3~1cmの黄灰色地山土をごく少量含む。0.2cm程度の炭化物粒も少量含まれる。
- 2 暗灰褐色土 0.5cm程度の黄灰色地山土粒をかなり多く含む。3層の炭褐色土。1より粘質強く粘質。0.5cm程度の黄灰色地山土粒を少し(しまりわずかに目立つ)含む。
- 4 灰褐色土 1に比べ、粘質が強い。1cm以下の黄灰色砂質土山土をきわめて多く含む。地山土の多い粘質土。
- 5 青灰色土 砂質の粘質土。ごく少量の暗褐色土粒を少量含む。
- 6 灰褐色土 1より粘質強い粘質土。1~2cmの黄灰色地山土粒をきわめて多く含む。やや粘質目立つ。
- 7 暗灰褐色土 青灰色の砂質土山土をきわめて多く含む。
- 8 暗灰褐色土 1~2cmの黄灰色地山土をきわめて多く含む。やや砂質な感じ。0.3cm程度の炭化物粒を少量含む。
- 9 灰褐色土 1より粘質強い粘質土。1~2cmの黄灰色地山土粒をきわめて多く含む。地山土の多い粘質土。
- 10 青灰色砂 0.5cm程度の暗褐色土粒を少量含む。地山。



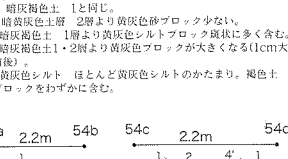
【46a-46b / SD55】

- 1 暗灰褐色土 0.3~1cmの黄灰色地山粒を含む。砂粒やや多い。
- 2 黄褐色土 地山土中に、1cmの暗灰褐色土粒を少し含む。崩落土。
- 3 暗灰褐色土 やや粘質強い。0.5cmの黄灰色地山土をかなり多く含む。
- 4 暗灰褐色土 1~3cmの黄灰色地山粒を極めて多く含む。上層はやや砂質。
- 5 暗灰褐色土 1層に目立つ。暗灰褐色土の割合が層より多い。やや粘質も強い。(地山に木根が混入した部分の可能性あり)
- 6 黒褐色土 粘質土中に、やや粘質強い。木の根?



【47a-47b / SD56】

- 1 暗灰褐色土 0.3~0.5cmの黄灰色地山粒を多く含む。あまり砂粒は目立たない。上層両端に5cm程度の黄灰色地山土塊あり。炭化物少量。
- 2 暗灰褐色土 0.5~1cmの黄灰色地山粒をきわめて多く含む。やや粘質。炭化物粒を多く含む。
- 3 暗灰褐色土 多量の地山土塊(1~5cm)を含む。地山土の多い粘質土。



【49a-49b / SD73】

- 1 暗灰褐色土
- 2 暗灰褐色土
- 3 暗灰褐色土
- 4 暗灰褐色土
- 5 暗灰褐色土
- 6 暗灰褐色土

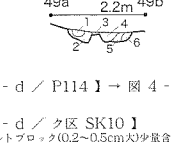
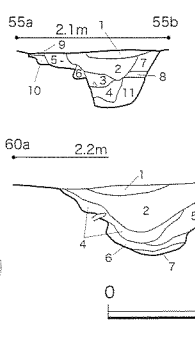


図3-16 土層断面図(13)ク区(5)

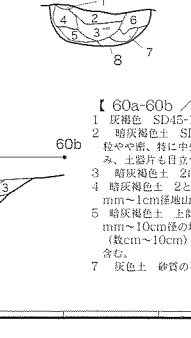
【55a-55b / SD57・58】

- 1 褐色土 やや黒味強い、やや砂質。0.1~2cm以下の地山粒を少量含む。
2 暗灰褐色土 0.1~1cmの黄灰色地山土をやや多く含む。やや粘質。
3 暗灰褐色土 2より黒味強く、より粘質。地山粒を多く含む。
4 暗灰褐色土 1~2cmの黄灰色土を少量含む。
5 黒褐色土 やや黒味強い。0.5cm程度の黄灰色地山土をやや多く含む。
6 灰褐色土 あまり黒味強くない。0.5cmの黄灰色地山土をかなり多く含む。炭化物粒あり。やや砂質。
7 暗灰褐色土 1cmの黄灰色地山土をきわめて多く含む。炭化物粒少量。
8 暗灰褐色土 5より黒味強い。2cmの黄灰色土を含む。やや粘質。
9 暗灰褐色土 黄灰色地山土に1~2cmの暗灰褐色土を少量含む。
10 暗灰褐色土 1~2cmの暗灰褐色土を若干含む。青灰色砂質。



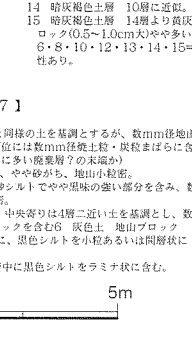
【56a-56b / SD58】

- 1 黒灰色土 やや黒味強く、1cmの暗灰色粘土粒を含む。0.5cm以下の地山粒も少量含む。
2 暗灰褐色土 0.3cm以下の細かな暗灰色粘質土をやや多く含む。炭化物も少量あり。砂粒をやや多く含む。
3 暗灰褐色土 0.5cm程度の黄灰色地山土をかなり多く含む。2より粘質。0.5cm以下の細かな暗灰色粘土を含む。
4 暗灰褐色土 黄灰色地山土と暗灰褐色土が同量程度混じる。中央より暗灰褐色土塊(10cm程)。
5 暗灰褐色土 地山土粒を多く含むが4よりは少ない。青灰色砂質地山土も含まれている。
6 暗灰褐色土 3cm程度の大きな地山土塊を含む。地山土のせいみや砂質をおびる。
7 黒褐色土 やや粘質で、上位より黒味の強い。1cm以下の黄灰色砂質地山土を少量含む。
8 青灰色土 青灰色砂質地山土中に1~5cmの暗灰褐色土塊が含まれる。地山粒の過ぎの可能性も。
9 暗灰褐色土 8層と近似。やや黒味強い。やや粘質あり。
10 暗灰褐色土 暗灰色土ブロック(0.5~1.0cm)を少量含む。ほとんど黄灰色砂質。
11 暗灰褐色土 10層に比べ、黄灰色砂質土ブロックが多い。
12 暗灰褐色土 10層に近似。
13 暗灰褐色土 10層に近似。黄灰色砂質土ブロック(0.5~1.0cm)やや多い。
14 暗灰褐色土 10層に近似。
15 暗灰褐色土 14層より黄灰色砂質土ブロック(0.5~1.0cm)やや多い。6・8・10・12・13・14・15=やや粘質あり。



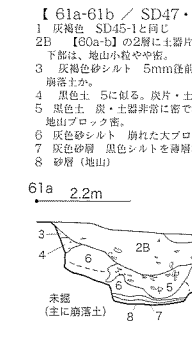
【57a-57b / SD54】

- 1 暗灰褐色土層 やや砂質。少量の黄色砂質土塊(2.0~1.0cm)を含む。
2 暗灰褐色土層 1層より黄色砂質土層や多い。
3 淡黄褐色土層 黄色砂質土層(0.5~5.0cm)をやや多く含む。砂質強い。
4 暗灰褐色土層 1層に比べ、黒味が強い。黄灰色砂質土層(0.2~1.0cm)を少量含む。
5 淡黄褐色土層 褐色土と黄灰色砂が灰に混じる。数mm炭化物粒少量含む。
6 暗灰褐色土層 4層と近似。炭化物粒が土層よりやや多い。
7 淡黄褐色土層 5層と近似。炭化物粒なし。
8 暗灰褐色土層 6層と近似。やや黒味強い。やや粘質あり。
9 淡黄褐色土層 褐色土ブロック(0.5~1.0cm)を少量含む。ほとんど黄灰色砂質。
10 暗灰褐色土層 黄灰色砂質土層(0.5~2cm)を少量含む。やや砂質。
11 暗灰褐色土層 10層に比べ、黄灰色砂質土層が多い。
12 暗灰褐色土層 10層に近似。
13 暗灰褐色土層 10層に近似。黄灰色砂質土層(0.5~1.0cm)やや多い。
14 暗灰褐色土層 10層に近似。
15 暗灰褐色土層 14層より黄灰色砂質土層(0.5~1.0cm)やや多い。6・8・10・12・13・14・15=やや粘質あり。



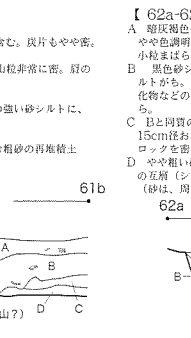
【58a-58b / SD53】

- 1 暗灰褐色シルト
2 黒色シルト
3 黒色シルト
4 暗灰色砂シルト



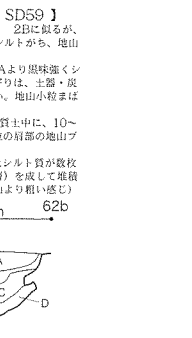
【59a-59b / SK06】

- 1 褐色土(暗灰褐色) 砂シルト シルトがら粘質。2mm程度の地山粒・炭片わずかに含む。
2 黒シルト質土 1から黒味・シルト質とも強く粘着。5mm前後の炭片まばら。黒味強。
3 暗灰色粘成土 数mm~1cm程度の地山(暗灰色)ブロックを密に含むと同等の黒色シルト。数mm程度粒わず。木根強も灰色あらしなく不均等。
4 灰褐色シルト 数mm径地山粒まばら。砂がら。



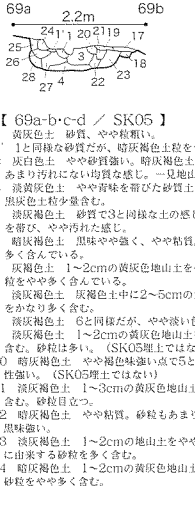
【60a-60b / SD47】

- 1 灰褐色 SD45-1と同じ
2 暗灰褐色土 SD45-2と同様の土を基調とするが、数mm径地山粒や粘着、特に中央で下位には数mm径土粒・炭粒まばらに含む。土層片も目立つ(厚平に多い発露層?)の未露出。
3 暗灰褐色土 2に似るが、やや砂質。地山粒少量。
4 暗灰褐色土 2と同様な砂質土層でやや黒味の強い部分を含む。数mm~1cm径地山粒や粘着。
5 暗灰褐色土 上部は3層、中央寄りでは4層と2層を基調とし、数mm~10cm径の地山土塊を含む。6 灰褐色土 地山土塊(数cm~10cm)を主体に、黒色シルトを小粒を混入した層状に含む。
7 灰褐色土 砂質の再産物中に黒色シルトをラミナ状に含む。



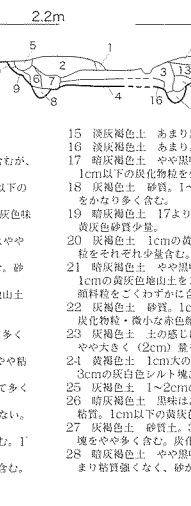
【66a-66b / SK05・SB04・SD45・SK08】

- SD45-1 (10YR3/1~5/2、暗灰~灰黄褐) 砂からシルト、かなり均質で下部に粘着。炭・黒色土・地山の数mm粒をこわすか含む。
SD45-2 (10YR4/1~4/2、暗灰~灰黄褐) 均質な砂シルトで上下層の中間的粒相。西寄りには砂質土に漸移し、色調も淡い。地山の数mm粒をこわすか含む。東より砂がらになる。高湿ではない。
SD45-3 中央はシルトがらで黒味強(10YR3/1~3/2、黒褐)。両側は1層と同様。西では砂質となり色調淡く、東ではややシルト質が弱く色調明るくなる。
SD45-4 地山ブロックを有するSD45-2層。粘着部の崩落土。SK08 茶褐色(暗灰褐色) 色シルト 上部はシルトがら、下部は粘着。一部地山粒を含む。
A1 暗灰褐色シルト 質青灰(10BG3/1~3/1)。砂がらや粘着。微細炭・地山粒まばら。全体に均質。
A2 A1よりやや黒味強く、砂質地山粒わずかに混じる。



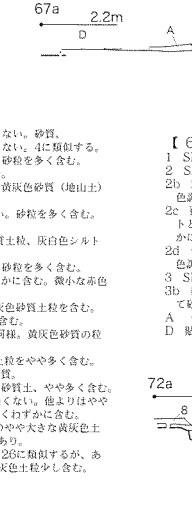
【61a-61b / SD47・59】

- 1 灰褐色 SD45-1と同じ
2B 【60a-b】の2層に土器片を密に含む。炭片もやや粘着。下部は、地山小粒や粘着。
3 灰褐色シルト 5mm前後の地山粒非常に密。屑の崩落土か。
4 黒色土 5に似る。炭片・土器器。
5 黒色土 土器器に密で、黒味の強いシルトに、地山土塊を含む。
6 灰褐色シルト 崩れた大ブロック
7 灰褐色シルト 黒色シルトを薄層状に含む粗砂の再産物。8 腐植(地山)



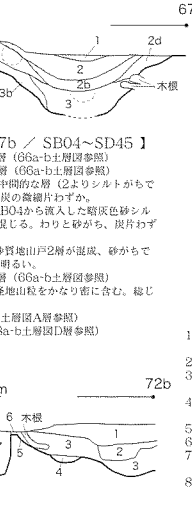
【62a-62b / SD59】

- A 暗灰褐色シルト 2Bに似るが、やや色調明るい。シルトがら、地山小粒まばら
B 黒色シルト Aより黒味強くシルトがら。SD47寄りには、土器・炭化物などの炭入り多。地山小粒まばら。
C 土器質のシルト質土中に、10~15cm厚さおよび小粒の崩落の地山ブロックを密に含む。
D やや粗粒と黒色シルト質が数枚の互層(シルト薄層)を成して堆積(砂は、周囲の地山より粗粒)した。



【63a-63b / SD48】

- 1 暗灰褐色シルト 上部は砂質、シルトがら下部は粘着。数mm厚層を有。1~2cm厚黄褐色粘土(粘土?)を含む。
2 黒色シルト やや粘着を有する。1から漸移したシルト質土。粘着性。
3 暗灰褐色土 地山灰褐色・黒色シルトの数mm~1cm径ブロックを密に含む。



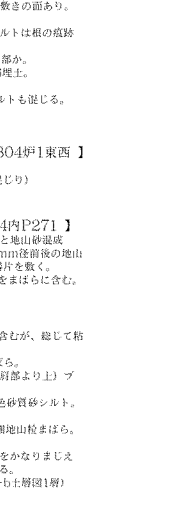
【64a-64b / SD68】

- 1 暗灰褐色シルト 1~2mm径地山粒(明褐色)をばらばら含む。黒味中強。粘着やや強。
2 灰褐色シルト 数mm~1cm径地山粒を密に含む。全体に不均質。木根もあらしなく。
3 灰褐色シルト 数mm径地山粒をやや密に含む。シルトがら。木根強か?



【65a-65b・68a-68b / SB04・SD45】

- A 暗灰褐色シルト 質青灰~暗灰(10BG3/1~3/1)。砂がらや粘着。微細炭・地山粒まばら。全体に均質。
Aa Aより黒味や粘着、ややシルトがら。
Ab 暗灰褐色(黒色)シルト 数mm径地山粒や粘着。
Ac 黒色土 砂がらシルト。地山粒わず。
Ad 暗灰褐色土 灰褐色シルト。木根の可能性がある。
Ae Aと近似。黒味強いシルト。
Af 暗灰褐色シルト 炭質。砂を切る層状に混入。
Ag 暗灰褐色シルト Bの帯大ブロックまばら。粘着を切る。
Aa Ah 暗灰褐色土 Hよりシルトがら。
Ai 暗灰褐色土(上部の地山)と黒色シルトの数mm~1cm径ブロックをまばらに含む。再産物か?
B 粘土土 灰白色砂質土と暗灰褐色シルト質土(一部黒褐色砂質シルト)の混成土。ただし暗灰・黒色の一部は木根強を含む。
Ba 黒褐色土層 黒色砂がらシルトと灰褐色シルトが混成(粘着)。
Bb 暗灰褐色土 Aに似る土質だが、硬く粘着する。Bの表面に追加したものか?
Bc 粘土土 粘灰褐色土、明灰褐色土(砂)混成。Bと一致。
Bd 暗灰褐色土 数mm~1cm径の地山土塊(暗褐色)を密に含む。粘着性。
Be 灰褐色土 数mm~1cm径の地山土塊(暗褐色)を密に含む。粘着性。
Bf 暗灰褐色土(粘着) 地山粒を不均等にばらばらに含む(周囲を切る?)



【69a-b-c-d / SK05】

- 1 黄灰色土 砂質、やや粘質。
1' 1と同様な砂質だが、暗灰褐色土粒を含む。
2 灰白色土 やや粘質強い。暗灰褐色土を少量含むが、あまり汚染しない均質なし。一見地山土風。
3 淡黄褐色土 やや粘着を有する砂質土。1cm以下の黒色土を少量含む。
4 淡灰褐色土 砂質で3と同様な感じだが、灰褐色を有し、やや汚れた感じ。
5 暗灰褐色土 黒味やや強、やや粘質。砂粒はやや多く含む。
6 灰褐色土 1~2cmの黄灰色地山土を少量含む。砂粒やや多く含む。
7 淡灰褐色土 灰褐色土中に2~5cmの黄灰色地山土をかなり多く含む。
8 淡灰褐色土 6と同様だが、やや淡い色調。
9 暗灰褐色土 1~2cmの黄灰色地山土を極めて多く含む。砂粒は多い。(SK05埋土ではない)
10 暗灰褐色土 やや粘質強い直で5に区分。やや粘質性。(SK05埋土ではない)
11 暗灰褐色土 1~3cmの黄灰色地山土を極めて多く含む。砂粒目立つ。
12 暗灰褐色土 やや粘質。砂粒もあまり目立たない。黒味強。
13 暗灰褐色土 1~2cmの黄灰色地山土をやや多く含む。1'に由来する砂粒を多く含む。
14 暗灰褐色土 1~2cmの黄灰色地山土を少量含む。砂粒をやや多く含む。



【67a-67b / SB04~SD45】

- 1 SD45-1層 (66a-b土層図参照)
2 SD45-2層 (66a-b土層図参照)
2e 1~5mm径の炭片目立つ
3 SD45-3層 (66a-b土層図参照) 3c 1~10mm厚・長の炭片目立つ
3d シルトがらで色調明るく、数mm~1cm径の地山土塊をばらばら含む。
3e 砂質土で、同上砂質土層と同様に含む。
3d・3eいずれも帯大ブロックは、木根強の可能性あり。
4 黒色シルトと灰褐色砂質土の互層を成して堆積
5 灰褐色砂質土(上部の地山)と黒色シルトの数mm~1cm径ブロックをまばらに含む。再産物か?



【67a-67b / SB04~SD45】

- 1 暗灰褐色土 炭が非常に粘着暗灰褐色土
G2 砂2層土 炭質暗灰褐色土。中位に土器片散りの面あり。
G4 砂4層土 黒色土。
G5 砂5層土 黒色土。炭質に含む暗灰褐色土は根の痕跡と思われ。直下は赤褐色に被覆。
Ha 暗灰褐色土 砂質土、暗灰小粒。Bの一部か。
Hb 暗灰褐色土 地山土層ブロック。F2SD0層。
Hc 灰褐色土
Hd 1cm~2cmの地山土層を主体に、暗灰シルトも混じる。SK14層土。



【67a-67b / SB04~SD45】

- 1 SD45-1層 (66a-b土層図参照)
2 SD45-2層 (66a-b土層図参照)
2b 2~3cm厚の粘着性(2よりシルトがらで色調明るく、炭の炭片わず)。
2c 粘着性、炭の炭片わず。
2d 粘着性、炭の炭片わず。
3 SD45-3層 (66a-b土層図参照)
3b 数mm径地山粒をかなり密に含む。粘着して砂がら。
3c 腐植の砂質土層2層が混成、砂がらで色調明るく。
3d SD45-3層 (66a-b土層図参照)
3b 数mm径地山粒をかなり密に含む。粘着して砂がら。
A (68a-b土層図A層参照)
D 粘土 (68a-b土層図D層参照)



【70a-70b / SB04第1東西】

- 1 黒色炭化層
2 暗灰褐色シルト(炭粒入り)



【71a-71b / SB04内P27】

- 1 粘土土 粘灰褐色シルトと地山砂混成
2 灰褐色シルト 5mm前後の地山粒を密に含む。炭質付近土層を有。
3 3に数mm径の赤色顔料をまばらに含む。



【72a-72b / SB04~SD46】

- 1 暗灰褐色シルト 地山粘着粒わず。かなり砂粒を含むが、粘着性強い。砂がら上部から下部へ漸移。
2 黒色シルト 炭質・粘着性。2~3mm径の地山粒まばら。
3 灰褐色土 数mm~最大2cm径のシルト質土層(現現砂質より)ブロックを非常に密に含む灰褐色シルト(1と同層)。
4 灰褐色土 5mm前後の地山粒を非常に密に含む灰褐色砂質シルト。色調は1・2層の灰褐色に共通。木根強もあらしなく。
5 灰褐色シルト 3と同様な色調の砂がらシルト。微細地山粒まばら。
6 灰褐色シルト 数mm径地山粒をかなり密に含む。砂質土。
7 やや粘着がかり色調強い。数mm径地山粒をかなり密に含む。上部は粘着性土。Dに似て、下部は砂がらになる。
8 灰褐色シルト 砂がらで、地山粘着粒まばら(65a-b土層図1層)

図3-17 土層断面図(14)ク区(6)

状況が見られた。地山面では、明瞭な鋤跡の残る部分が、各所で見られた。径数mの範囲に集中する程度で、広範囲に及ぶものではなかった。周溝墓の区画内平坦面に目立つことから、周辺が農地として開墾された時期のものと思われるが、時期を確定できる要素はない。

③ 3層群（遺物包含層）

明確な水田耕作土より下位の、遺物を包含する土層である。縄文時代から中世の遺物包含層・遺構埋土を一括している。色調・土質とも多様な土を含む。黒色土の下部は、地山として捉えるべき部分もあると思われるが、植物の痕跡による乱れの影響等もあって明確な線引きはできなかった。

弥生時代の包含層は、基本的に「黒色土」である。地山（4層群）が、土壌化・黒色化したものと考えられるが、黒色化した時期については特定できない。もっとも黒味が強いのは周溝墓区画の内側の地山直上部分である。人為的掘削が及んだことのある包含層であるのか、地山の一部であるのか判別は困難であった。同様に強い黒味を持った土は、周溝墓の溝埋土下部でも見られた。薄いレンズ状の間層が、地山の崩れた砂質土と互層をなしており、黒色部分はシルトがちであった。こうした黒味の強い土は、周溝墓域が形成された時点の地表面の土を反映していると考えられる。ただし、ク区の竪穴住居跡は、大半の方形周溝墓に先行すると考えられるが、埋土は必ずしも黒色土ではない。黒色土地山に掘られたSB04の埋土は、2層群に近い暗灰青色土部分が多かった。黒色土形成や遺構埋土の変異の要因についても検討が必要である。なお、自然化学分析資料の採取位置は、土層図に概略を示した。

④ 4層群（地山）

遺物を含まない最終遺構検出面は、灰色の砂質砂シルトであった。表層は一様ではなく、粗砂の多い砂がちな部分、多少粘性のあるシルトがちな部分などがあった。色調も、灰白色・明灰褐色を基本としつつ、黄色・青色・緑色などを帯びる部分が不規則に散在していた。表層から30cm前後より深部は、総じて砂質が強くなり、密度もゆるくなる場合が多かった。このため地下水位が上昇すると、掘り下げた遺構内に水流が砂を押し流し、表層下に空洞ができることも頻繁であった。方形周溝墓の溝には、こうした埋没（崩落）の状況を示すと思われる部分が見られた。周溝墓の肩～側壁には、植物の地下茎が痕跡を残し、土層図ではこれを「木根」「木」「根」と表現した。黒色土下の地山面にも同様な痕跡が不均等に見られた。

地山面には、おおむね東西方向に走る砂脈が見られた。13次調査（エ-1区）では平面略図を作成したが、14次ではこの作業は行っていない。エ区で最大のものは、長さ30m以上、最大幅0.5mである。下層の砂が噴き上がった地割れ痕跡であり、大規模な地震により形成されたと考えられる^(註)。弥生時代の遺構と重なる部分では、すべて遺構が砂脈を切っており、黒色土部分には砂脈は見られなかった。砂脈同士の切り合いは無く、砂脈の形成は一度と考えられる。時代推定は、確実なのは弥生時代中期初頭以前であるが、朝日遺跡周辺が陸化して以降、黒色土形成以前の縄文時代中～後期と推定される。

註 鬼頭剛氏（愛知県埋蔵文化財センター）にご教示をいただいた。

Ⅳ 第13次・第14次調査の遺構

(1) 縄文時代の遺構 (図4-18・20)

ク区P114のみを確認した。後期初頭頃の完形土器を埋設した土坑である。土器の検出で遺構を認識したため、規模や上部埋土など詳細は不明である。土器は、底面の地山に密着し、北に開口していた。内部の土は残存した土坑埋土と大差無い地山由来の灰色土であった。分析したが、内容物の手掛かりは得られなかった。周辺の地山上には黒色土が発達している。人為的に埋め戻されたはずの埋土には、黒色土粒の顕著な混入が見られず、後期初頭段階の周辺では黒色土が未発達であった可能性を示している。黒色埋土の弥生時代遺構を確認するには、地山上部をある程度削って検出する必要がある。P114のあり方からは、顕著に遺物が伴わず形状不明瞭で浅い縄文時代遺構は、多くが確認困難であろうと考えられた。

(2) 弥生時代の遺構

今回調査した遺構の大半を占める。複数の調査区にまたがる遺構は確認されなかったため、調査区ごとに主な遺構について述べる。紙幅の都合で、かなり要約しており、また記述できない遺構も多数ある。数値や関連遺構の名称については、各表・図を参照していただきたい。なお、SB・SZ・SZX以外の遺構名には、区毎に通番を付している。名称の前に調査区名が必要だが、本項では区毎に記述するので省略する。

①エ区 (13次・14次 1・2区 / 図4-2～9・20)

SZ16 四周の溝のみを確認した。以下、各溝の名称は表3-1を参照願う。SZ16・17・18・24は、軸が共通することから相前後して築造された可能性が強いが、築造順は把握できなかった。SZ16・17→SZX03 (古→新を示す、以下同じく)、SZ16・19→SZX04が推定される。こうした推定も、表3-1に一覧した。

SZ17 位置関係から、SZ18・19→SZ17またはその逆、SZ17→SZ21と推定。南辺溝の底面・側壁は、砂脈の影響もあってか地滑り状に崩落して乱れていた (土層断面図=以下「断」と略、断エ09・10)。

SZ18 中央やや西の主体部SK18は、長方形プランの四隅に浅いピットがあり、棺の痕跡と考えられる。

断エ02bcに東端部が示されているが、13次調査の作図時点では主体部という認識は持てなかった。西辺溝 (SD30) からは転落状況の壺が出土した。四周の溝には確実な切り合いは認められなかった。

SZ19 北西隅が繋がるように見える。本来の形状である他、土坑が重複した可能性と元は途切れていた溝が繋がれた可能性もある。西辺の溝は南北方向の2本が重複すると考えられる。これをSZX05の東辺と想定したが、詳細は把握できていない。SZ19は、断エ37に主体部の可能性を示したが不確実である。

SZ23 東半部を検出した周溝の北東の角が一連となり、南東隅は途切れている。SZ23は、SZX09とかなり重複し、また直下には別の区画を成す可能性のある溝が複数ある。軸方位は、北東側の一群に近く、SZ17等の一群とは異なっている。SZ23は、エ区において最新に位置付けられる可能性を考えている。

SZ24 調査区西方に中心のある周溝墓の東辺溝 (SD29) を想定。北東角はSZ23と重複して詳細不明だが、SD38が北端となる可能性もある。SD29南方の断面 (エ38ab) 出土土器は、SZ24南東角付近の上面にあたり、SZ24の築造時期に関わるか否かは不明。先行する溝 (周溝墓) を改築した可能性も考えられる。

SZX04 南北の周溝墓間の細長い区画を想定した。西辺 (SK11) からは石鏃が出土した。

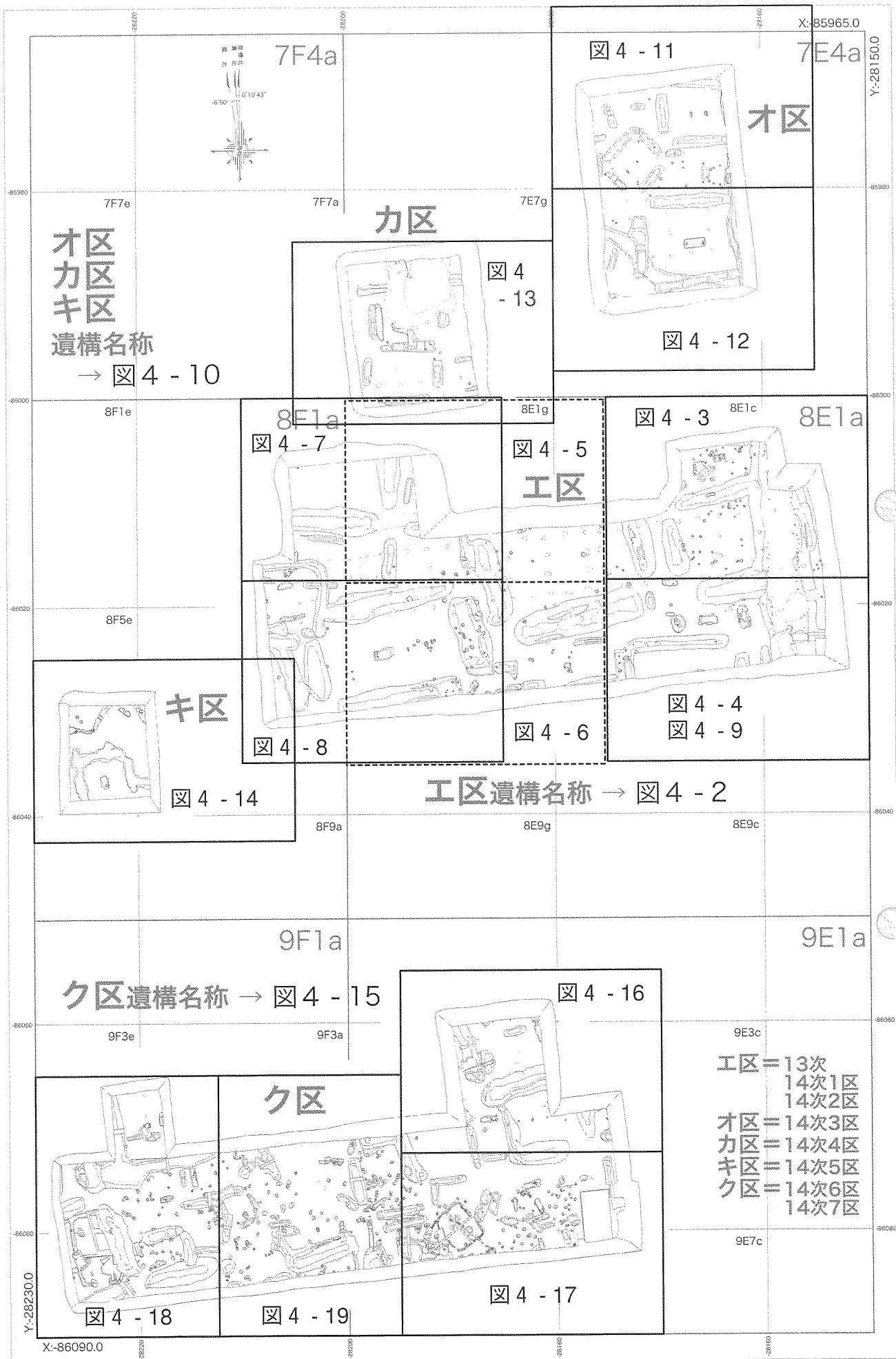


図4-1 第13・14次遺構平面図配置図

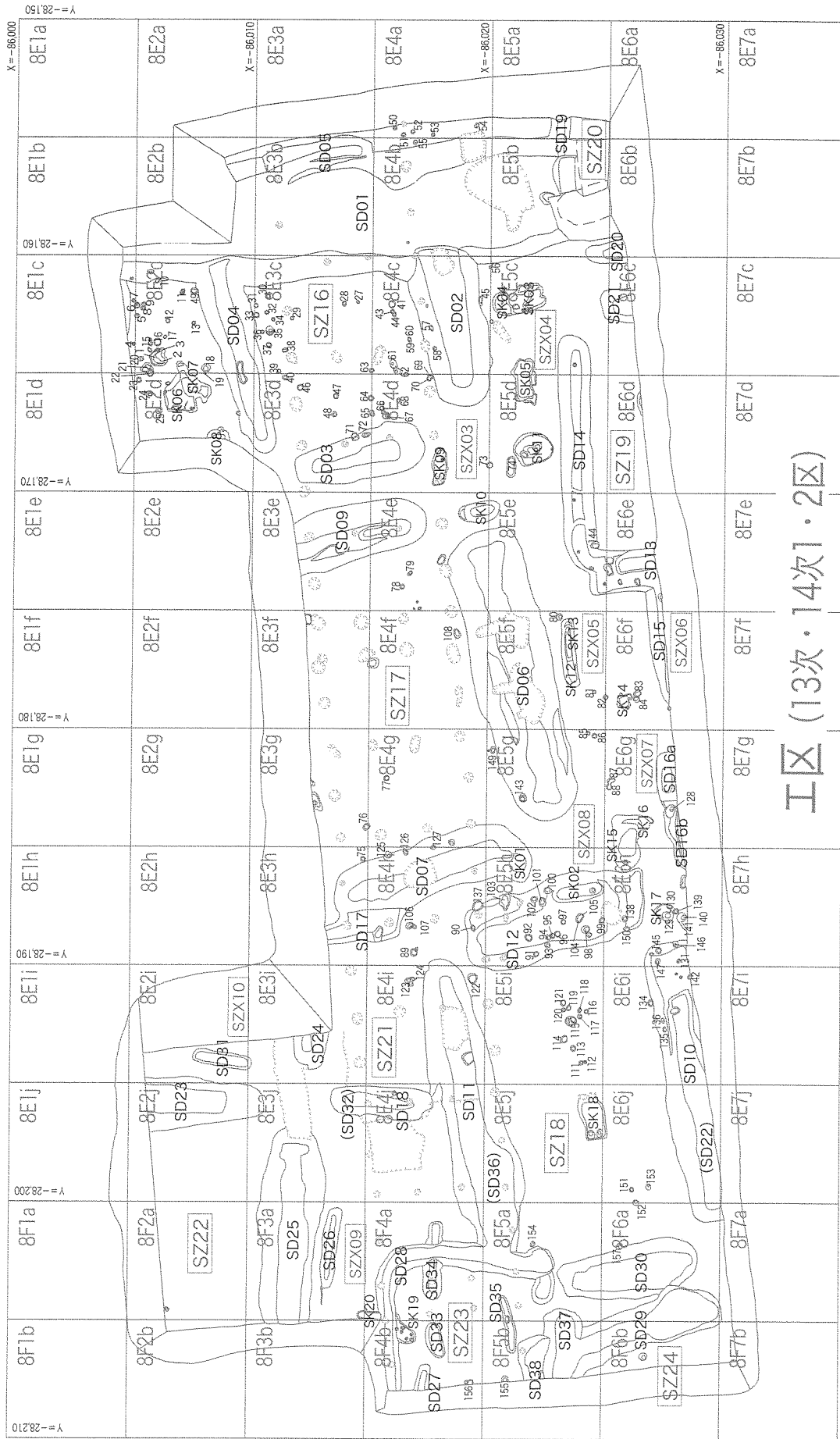


图4-2 I区遺構名称图

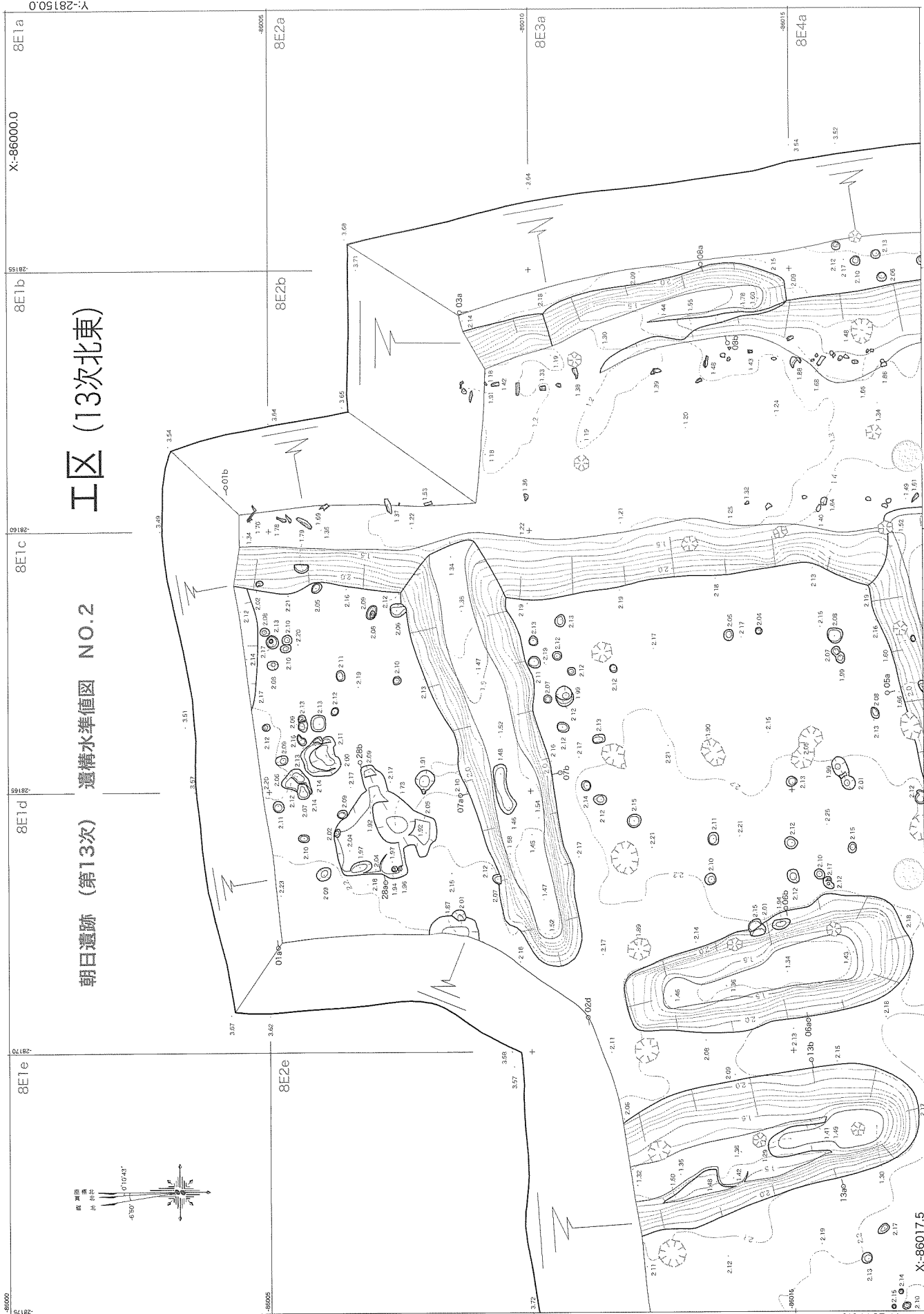
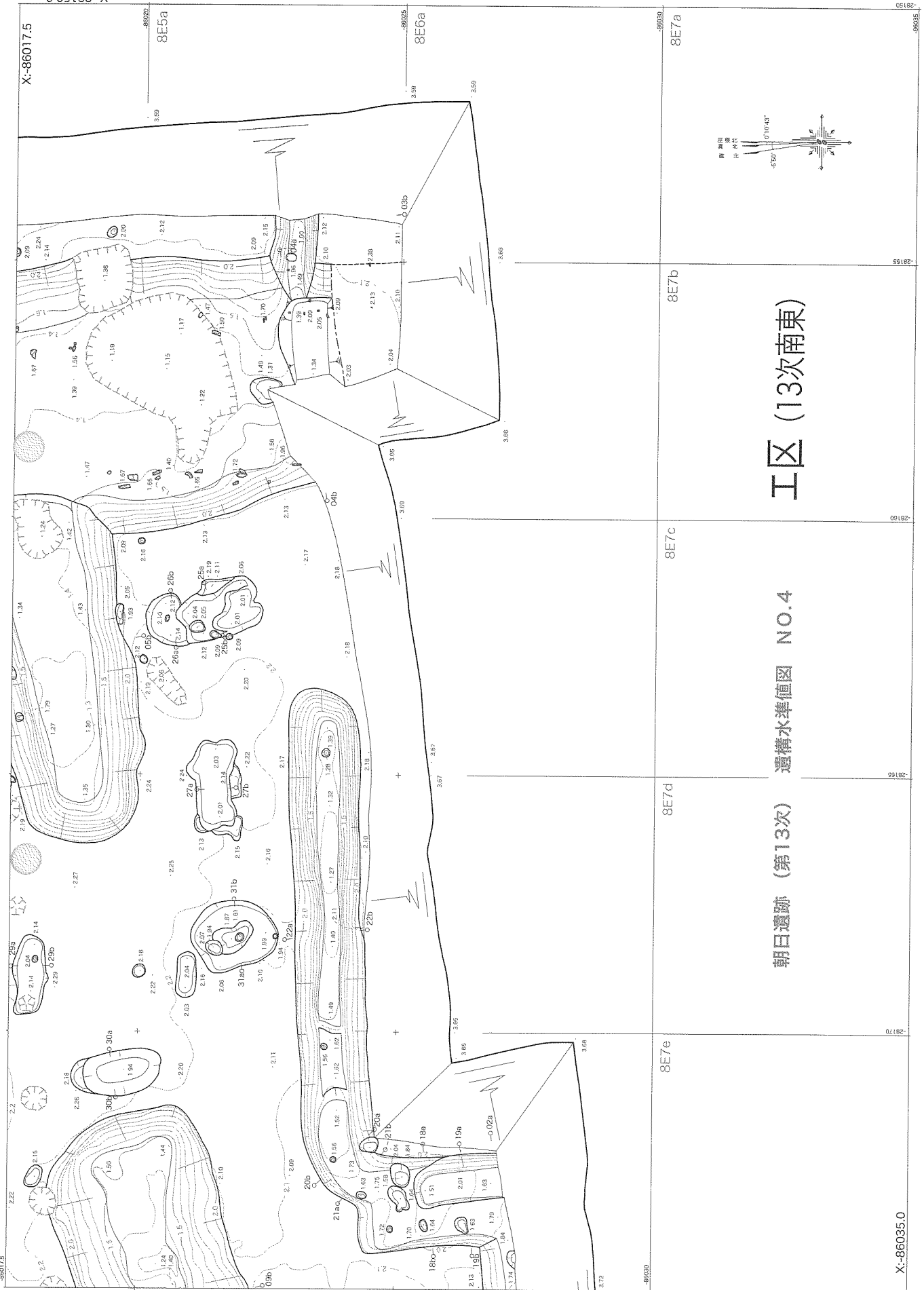


図4-3 工区遺構平面図(1)



工区 (13次南東)

朝日遺跡 (第13次) 遺構水準植図 NO.4

図4-4 工区遺構平面図(2)

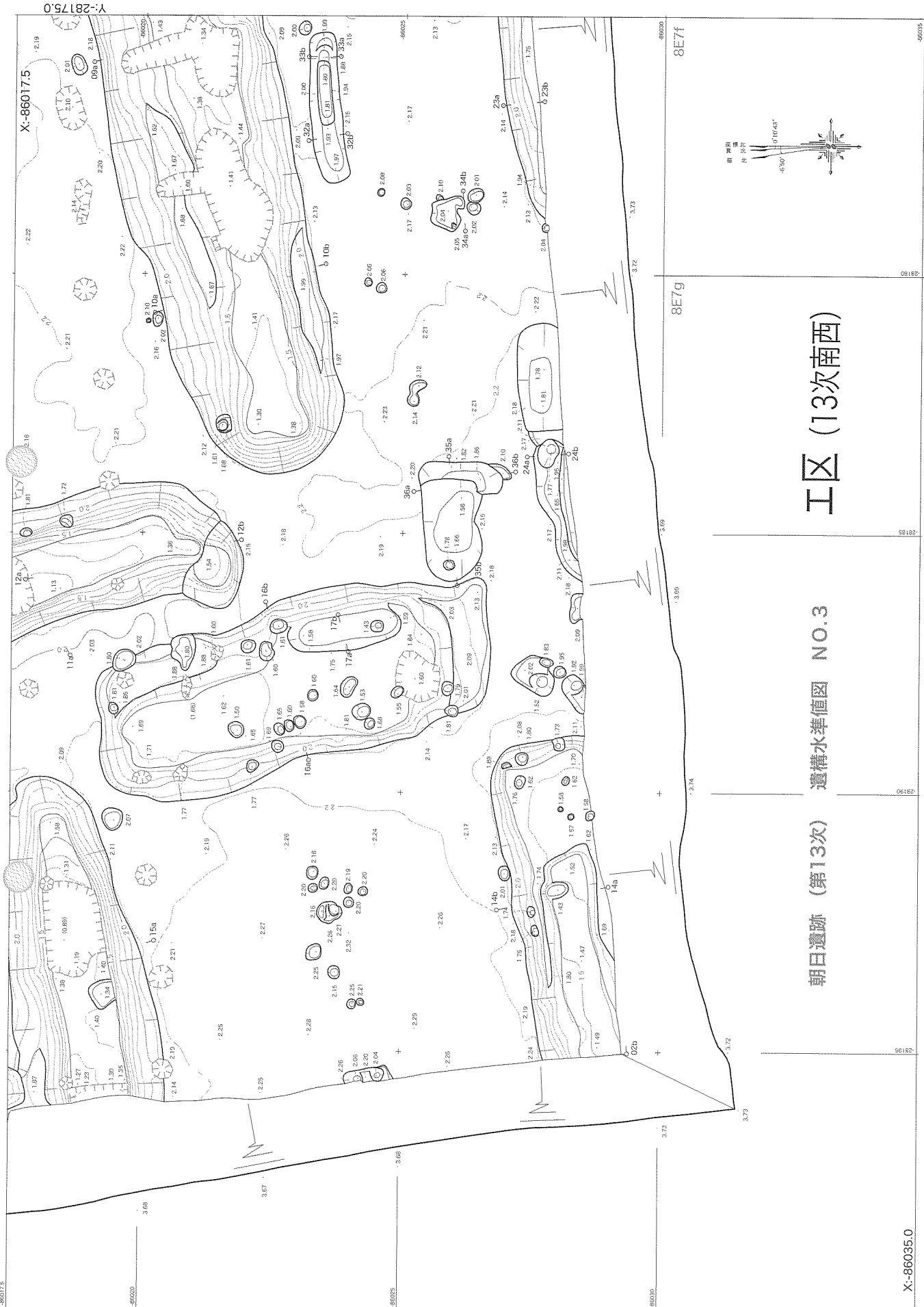


図4-6 工区遺構平面図(4)

工区 (13次南西)

遺構水準値図 NO.3

朝日遺跡 (第13次)

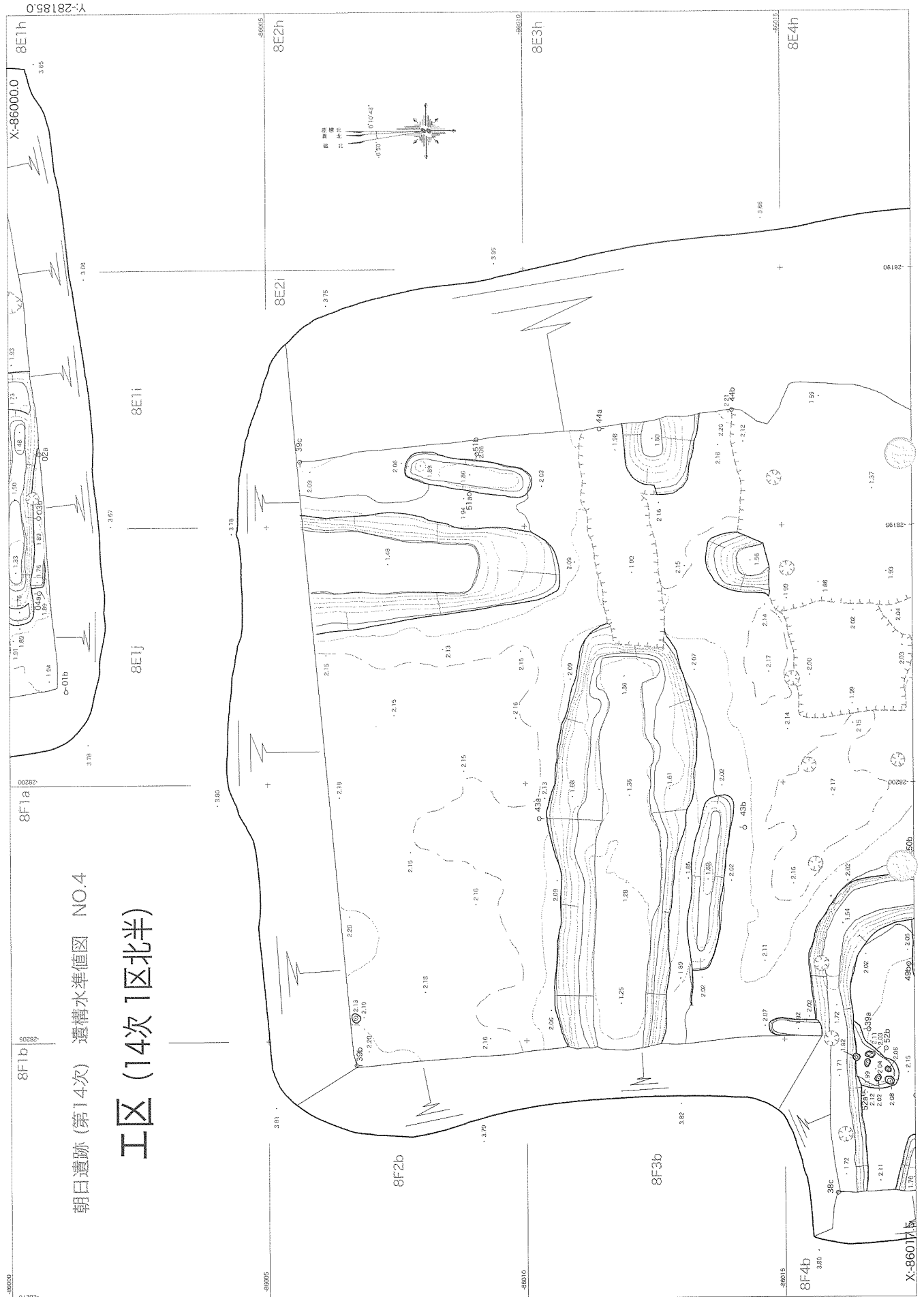
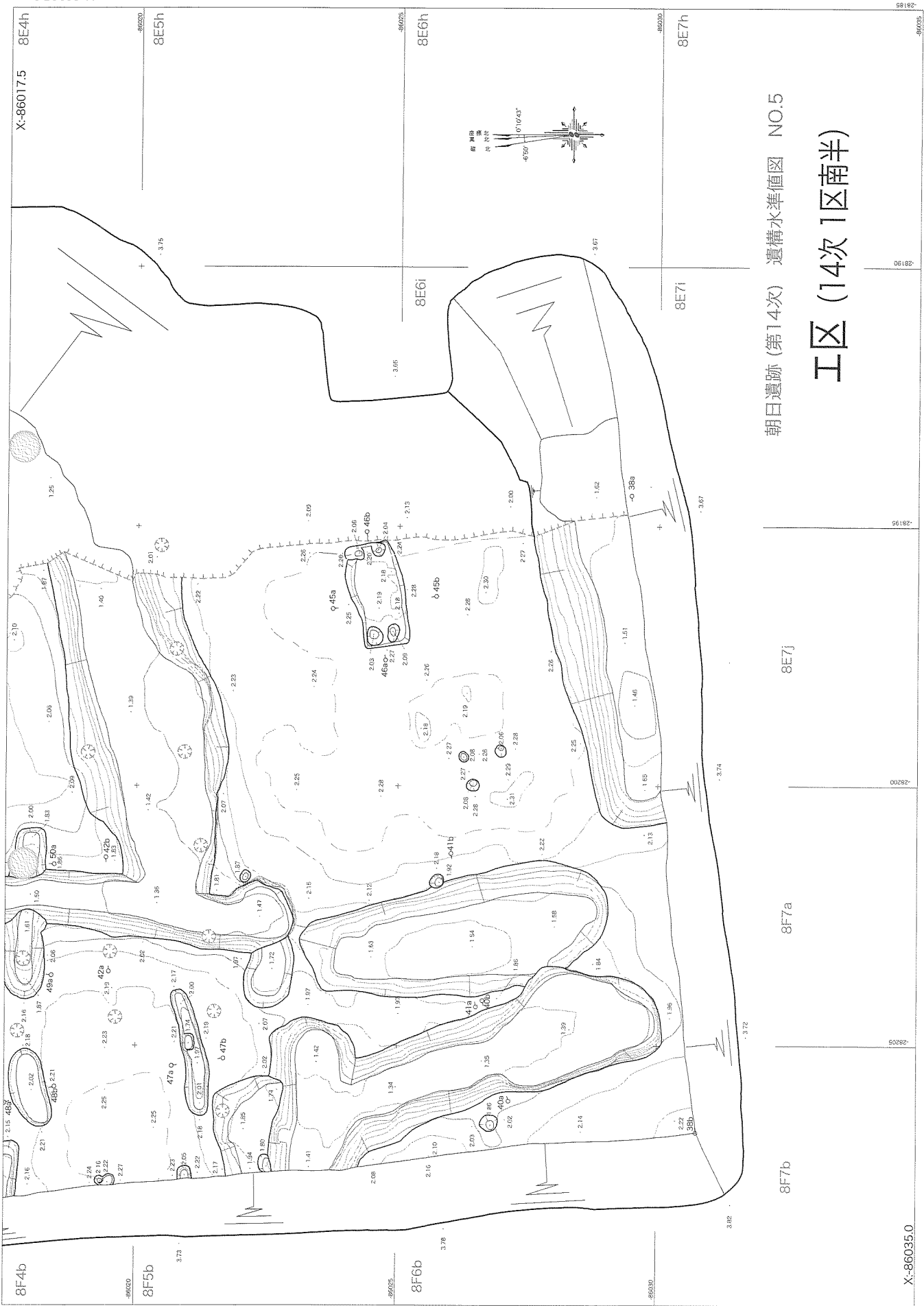


图4-7 I区遺構平面图(5)

図4-8 工区遺構平面図(6)



朝日遺跡(第14次) 遺構水準値図 NO.5
工区(14次1区南半)

Y-281850

Y-282100

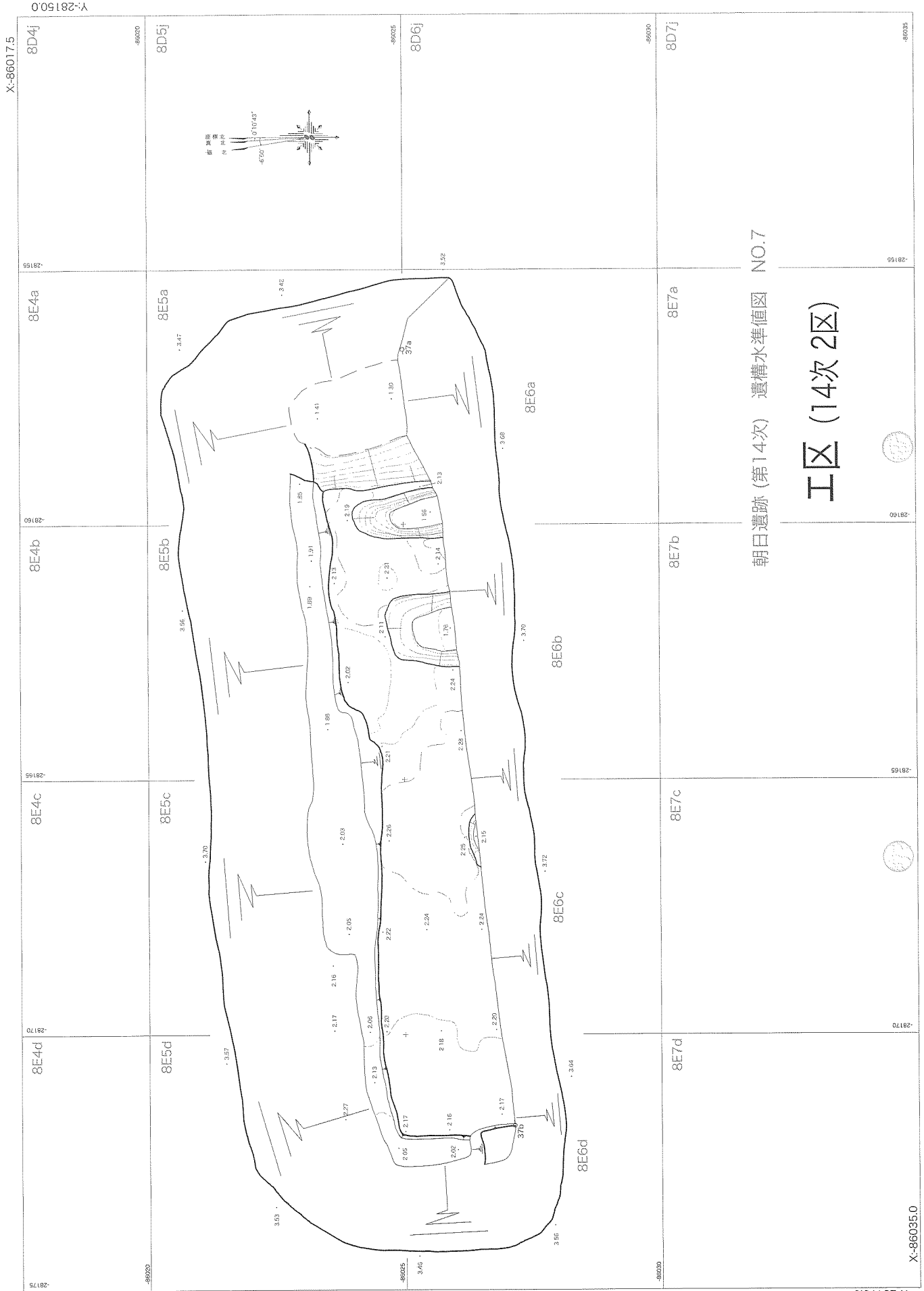


図4-9 I区遺構平面図(7)

SZX08 南辺溝 (SK15) はSZX07の西辺と捉えた溝を切っている (断エ35・36)。北辺 (SK01) はSZ17西辺に切られる観察 (断エ12) をしており、区画の存在やSZ17との先後関係に確実性を欠く。

②オ区 (14次3区/図4-10~12・20)

SZ25 3辺の溝を検出。南辺溝 (SD11) は、底面から木器 (鋤) が出土した。遺存したのは断片だが、完形品を置いたと考えられる。ただしその直上層は、確実な埋め戻し状況を示していない (断オ14)。側壁と同様な砂質地山土で埋め戻した可能性を認めるが、最下部は自然堆積とも思われる。湧水が激しく、いずれの溝も下半は精査不能であった。SD11東部は、末端に近い。両端に小さな段があり、西辺溝 (SD10) 南部も同様な段を持つ。この段 (テラス) は、築造時からあった可能性と、上部を改修した結果の可能性が考えられる。区画中央には、1.5m程の間隔で細長いピットがあり、主体部 (棺) 痕跡の可能性がある。

SZ27 他の周溝墓とは著しく軸方位が異なる。SZ25・28より後出の可能性を考えるが、切り合いは無く、確実な先後関係は不明である。SZX11は、さらに後続の区画である可能性を考えてのものである。SZ27には、中央付近にSZ25と同様な1対のピットがあり、主体部の痕跡と考えている。

SZ28 3辺の溝を検出した。北辺溝 (SD01) から転落状況の土器が出土している。南 (SD02) と西 (SD03) の溝は、SD04に利用されているが、もともと底面に段差あるいは掘り込みがあったと考えられる。区画中央の主体部土坑 (SK01) は、長軸の両端付近にSZ25・27と同様な細長いピットがあり、東寄りの底面に赤色顔料の散布を認めた (図4-20)。自然科学分析 (以下分析と略) の結果は、ベンガラであった。

SD04 SZX14の北辺溝 (断オ01deに記述)、SZ28のSD03南部、SD02西半を繋いで掘られた幅1.5m前後の溝で、オ区西方および南東方向へと続いている。分析「3区溝」の試料1~9である。上層埋土中の炭化物の年代測定では、古墳時代の数値が得られており、掘削も古墳時代に下る可能性がある。

③カ区 (14次4区/図4-10・13・20)

SZ29 2辺の一部のみ検出した。攪乱が重複するため規模などは不詳。南西角は途切れると推定するが、確認はできない。調査区北東隅の断面 (カ01cd・da) に見える落ち込みは主体部の可能性がある。

SZ31 南辺溝をSD10と推定する3辺を把握した。南側のSZ32北辺溝 (SD09) との切り合い関係は、不明確であった。SK01は、主体部とするには位置が南西に偏り、形状が不明瞭で、風倒木痕のような地山の乱れの可能性を考えたが不詳である。東辺溝 (SD02) の上位で土器片の集中が見られた。

SZ32 四周の溝を把握したが、主体部は不明。南辺溝 (SD12) はオ区SD11と同様に、両端部に小さなテラスを持つ。東辺溝 (SD13) の埋土から小型石斧が、底面から水銀朱の付着した叩石が出土した。

④キ区 (14次5区/図4-10・14・20)

SZ33 鋸形の溝を周溝墓と認識したが、根拠は薄弱である。他の周溝墓に比べて溝が細く、角が途切れな点、軸方位が近接するSZ34やエ区の周溝墓群と異なる点が特徴である。

SZ34 キ区の湧水は、SZ34の周溝内でポンプアップせざるを得なかったため、溝の形状はかなり崩れ、詳細が把握できなかった。特に北東・北西の角には別の溝・土坑が重複している可能性があり、SZ34の正確な形状は不明である。南東角は溝が途切れ、南西角と南辺溝は調査区外にあって、墳丘形状は正方形または南北に長い長方形となる。中央付近に南北主軸の主体部土坑 (SK01) がある。この土坑も湧水の影響で精査は困難であった。西辺溝 (SD01) の南部で、転落あるいは埋置された完形の大型壺が出土した。

SD03 キ区北東隅で、北東方向に落ち込む遺構である。断面形も不明であるが、位置的にはエ区SD29を

東辺と想定したSZ24の西辺にあたる可能性がある。ただし、SZ24が東西に長軸を持つと想定した場合であり、SZ34と類似の形状であればSD03は別の区画となる。複数の形状が重複した可能性もある。

⑤ク区（14次6・7区／図4-15～20）

SB01 長軸5.3m、短軸4.0mの長方形プランを推定する竪穴式住居である。ほぼこの範囲に土器の散布が認められた（図4-22）。ただし、土器の分布は、西側では想定プランより西にも広がっていた。北東の周溝から3m付近で周溝状の痕跡が見られる。これが南西壁であれば、前記の長軸が短軸となる。このように北東部以外は不確実な面がある。支柱穴は、P177・178とSD37に切られたP255・256の4本柱と考えられる。炉跡は見られず、床面は植物地下茎の痕跡がかなり多いが、貼床で整えられた可能性もある。北西角付近のSD38は、住居に伴う土坑の可能性はあるが、位置情報以上の根拠は無い。

SB02 SB01と切り合う住居であるが、北西部のみしか把握できなかった。西側の周溝は比較的明瞭で、土器片を立て込んだ部分があったが、意図は不明である。北部はSZ39の北辺溝に切れ、その北側に住居の北壁を想定している。南壁はSX01に切られたと思われる、柱穴や炉跡は把握されなかった。埋土に炭・焼土粒を含むSK03は、この住居の埋土で覆われており、住居に伴う可能性を考えている。

SB03 平坦な底面の直線的なプランを、住居と捉えた。床面よりやや上から土器が廃棄状況で出土した。地山への掘込は浅く、周溝も不明瞭であった。

SB04 南北7.3m、東西（推定）4.4mの長方形竪穴式住居である。空撮時に完掘できなかったため、図4-21(2)は掘削途中を図化している。図4-21(1)の住居プラン内側は手測り作図によるが、図4-18を転用した外周周溝との接合部において表現が整合しない部分がある。SB04埋土には、玉作り関係の遺物が混在しており、機能表示としての「住居」が適切でない可能性がある。貼床上の埋土・貼床土・住居内のピット埋土の大半は、持ち帰って水洗選別を行った。図4-21(4)は、埋土の取り上げ区分図である。

東側は、SZ42の溝に切られていた。また西側には、SZ42の主体部（SK05）があって、周溝や床面を切っていた。床面は貼床されており、その上下で溝や炉跡を検出したことから、少なくとも一回の改築があったと考えられる。貼床面を伴う住居をSB04新、地山面で示された住居をSB04古と仮称する。貼床面は南部で攪乱を受けており、検出・確認時に整形したため、貼床の確認範囲は図4-21(2)の通りである。本来は、SB04新の周溝内側全面に貼られたものと考えられる。貼床は厚さ5cm前後で、近辺の地山由来のややシルトがちな明灰褐色・灰白色土を主体に、黒色・暗灰褐色土の数cm径ブロックが混成する土である。

貼床上の確実な遺構には、炉1～3と柱穴3基および外周周溝がある。南西隅付近にはピットが密集していた。この中には、貼床上から掘り込まれたものもあったが、特定できないものが多かった。

SB04新は、4本の支柱穴と出入口部両脇の柱穴が想定される。南西の支柱穴（P115）が、やや内側に偏するのは、住居南西隅ピット群の機能と関わる可能性があるが、やはり不明である。南部の貼床面には径20cm程の焼土（炉3）があり、周辺の貼床面から土器（甕）1個体の断片が出土した。中央部では、炉1b・1d→1a、4・5→1cの順で変遷したと考えられる。炉から採取した炭化物は、AMS年代測定を実施した。

SB04古の南北幅と出入口位置は、新と共通したと考えられる。支柱穴も同様と推定するが、P287・290などにも可能性がある。西側の周溝は貼床下にあり、新への改築時に東西幅を広げたと理解される。貼床下では何基かのピットが確認されたが、ピットが集中する北東・南東・南西部では貼床上・下の把握が不明瞭なものが多かった。P271は、貼床に覆われており、土器片と赤色顔料が出土した。貼床下のSK14は、

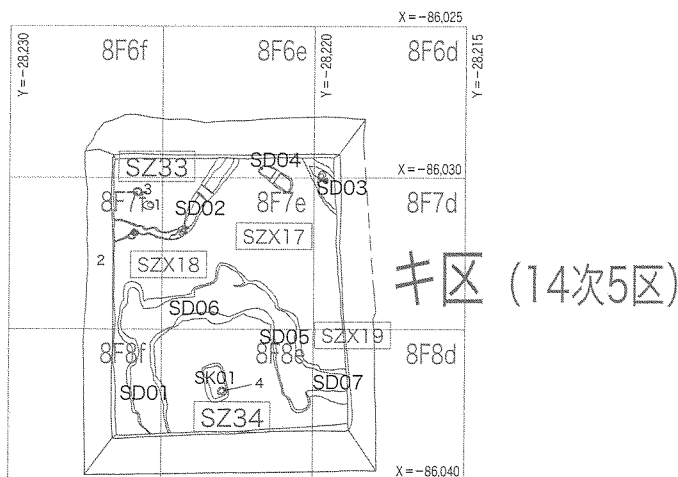


图4-10 才~丰区遺構名称図



才区 (14次3区) 北半

朝日遺跡 (第14次) 遺構水準値図 NO.1

図4-11 才区遺構平面図(1)

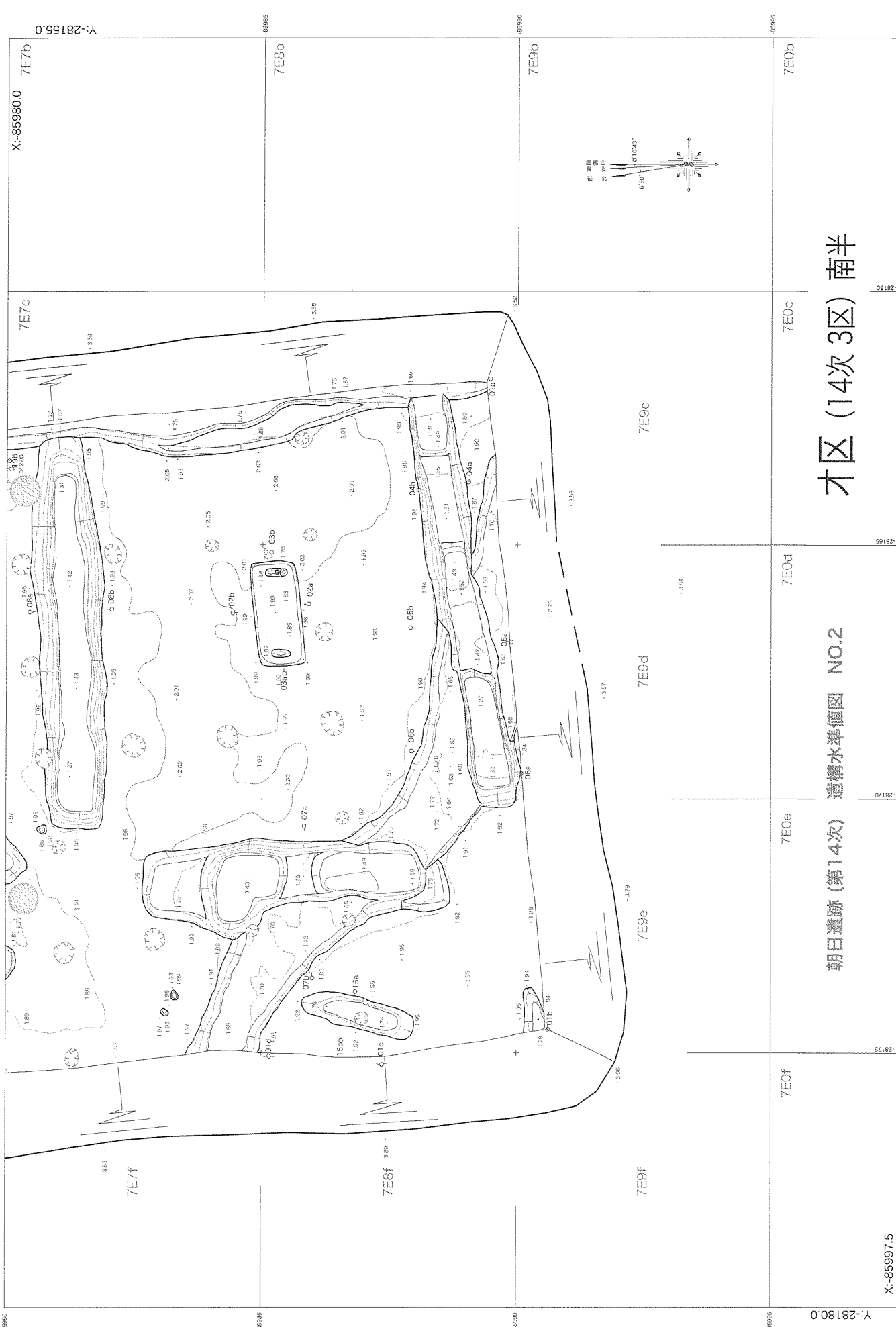
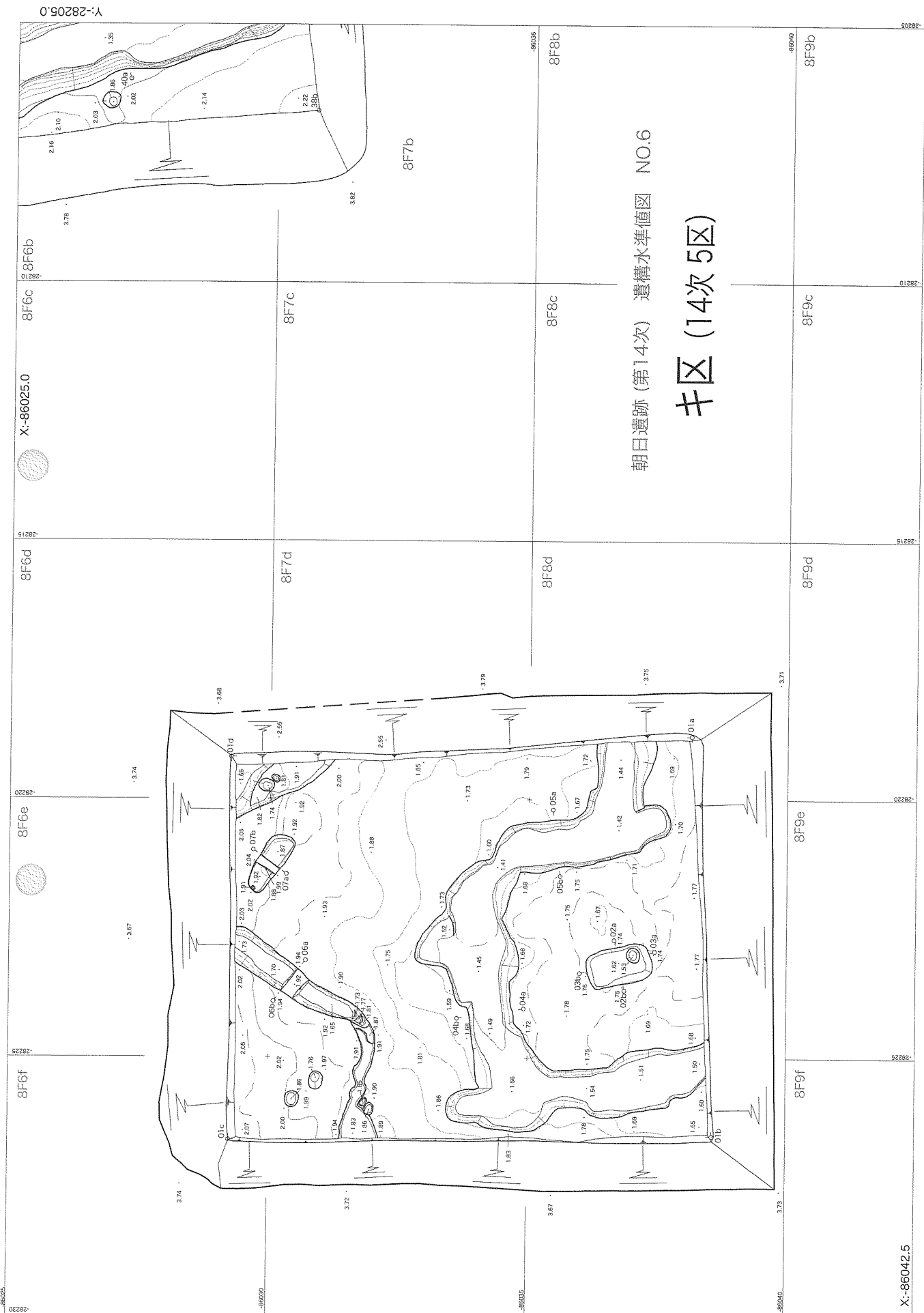


图4-12 才区遺構平面図(2)

才区 (14次 3区) 南半

朝日遺跡 (第14次) 遺構水準値図 NO.2

図4-14 Ⅰ区遺構平面図



地山主体のブロック土で人為的に埋められていたが、遺物は少なく、SB04古との関連・機能は不明である。

SB05 周溝墓SZ40に切られている。SD60の北側に北辺の周溝があり、4本柱を想定した場合の北側の2本は、SZ60内にあったと考えられる。南側はP172と南壁の未命名ピットが該当する。炉跡は見られなかった。埋土中からは、土器片がややまとまって出土したが、床面残置の状況は認められなかった。

SB06 直線的なプランを西壁と認めて名称を付した。大半は東側のク-1区(6区)にあたるが、6区調査時には遺構の認識を持たなかった。住居であれば、位置的にSB02と重複するが、詳細を提示できない。

SZ35 四周の溝を検出したが、北東角は調査区外で不明である。溝は、幅や深さがかなり不均一である。西辺溝(SD02)は幅狭く南部(南東角)は南辺溝(SD01)に繋がっている。SD02の北端(北西角)は、基本的に北辺溝(SD03)とは途切れていると捉えられる。SD03の西端は、かなり西へ張り出し、幅も広がっている。この部分では、土器片がややまとまって出土した。切り合いは把握できなかったが、SD03の西端部には土坑が重複していた可能性がある。主体部は把握できなかったが、断ク02de・07abには区画中央付近に落ち込みを示した。作業時には耕作による攪乱を想定したが、主体部の可能性も残る。

SZ36 SZ35と37の間を2本の溝で区画したように見える。ただし、SZ36の東辺溝(SD02)が先にあり、これを利用してSZ35が営まれた可能性も考えられる。SZ37に後続すると断定する根拠は無い。

SZ37 3辺の溝を検出した。東と南の溝は、両端に小さなテラスがある。東辺をSZ36と、西辺をSZ38と共有する。区画内は平坦で、主体部の痕跡は認められなかった。

SZ38 SZ37の西辺溝(SD30)を利用して、北・西・南の3辺を付加した区画を想定した。区画内にはピットが密集するが、周溝墓と関わるものとは考えられず、先行する住居などの痕跡と思われる。

SZ39 3辺の溝を確認した。東辺溝(SD37)南壁西側の断面直下に幅30cm程度の溝があるが、他の溝との位置関係から、南辺ではない可能性が強い。SD37はSB01を切っており、埋土中にはSB01の土器群から遺物が流入しているため、SD37固有の土器は特定できない。北辺溝(SD31)は、SB02を切っている。西辺溝(SD08)は、SZ40の東辺溝が重複しており、断面(ク03bc)の観察では、SZ39→SZ40と理解される。区画の中心にSX01がある。地山のかなり純粋なブロックを埋土としており、暗灰色の薄い下層には土器細片を含んでいた。風倒木痕の可能性も考えたが性格不明で、棺の痕跡が不明瞭な主体部の可能性も残る。

SZ40 SB05を切り、SB01を切ったSZ39を切ると考えられる。SK09は、垂直に近い壁の立ち上がりを持ち、調査時には廃棄土坑の可能性を考えた。しかし、底面を確認し、埋土状況が他の周溝墓と共通することから、SK09をSZ40の西辺溝と推定している。SK11が西辺溝である可能性も残る。

SZ41 北辺溝(SD47)と東辺溝の北端(SD44)のみを把握した。SD47の中央から東寄りでは、南側(土器群6)から土器片が多量に流入した状況を示した。焼土粒や炭化物も混在しており、これらの土器は、SZ47に先行する遺構をSD47が掘り通したために混入したと推定された。南壁断面にも土器片は密であった。SD47は、中央付近から西端にかけて、SZ43の南辺溝として掘り直されたと考えられる(SD47新)。SD47西寄りの埋土中で出土した完形壺は、SZ43に伴う転落土器と考えられる。

SZ42 SB04を切るSD45を東辺溝とし、南北辺の溝の一部も検出した。転落遺物を伴うのはSD45のみである。SD45では北部と南部の離れた2ヶ所で略完形の土器が出土している。北部の土器はSZ42の北東角

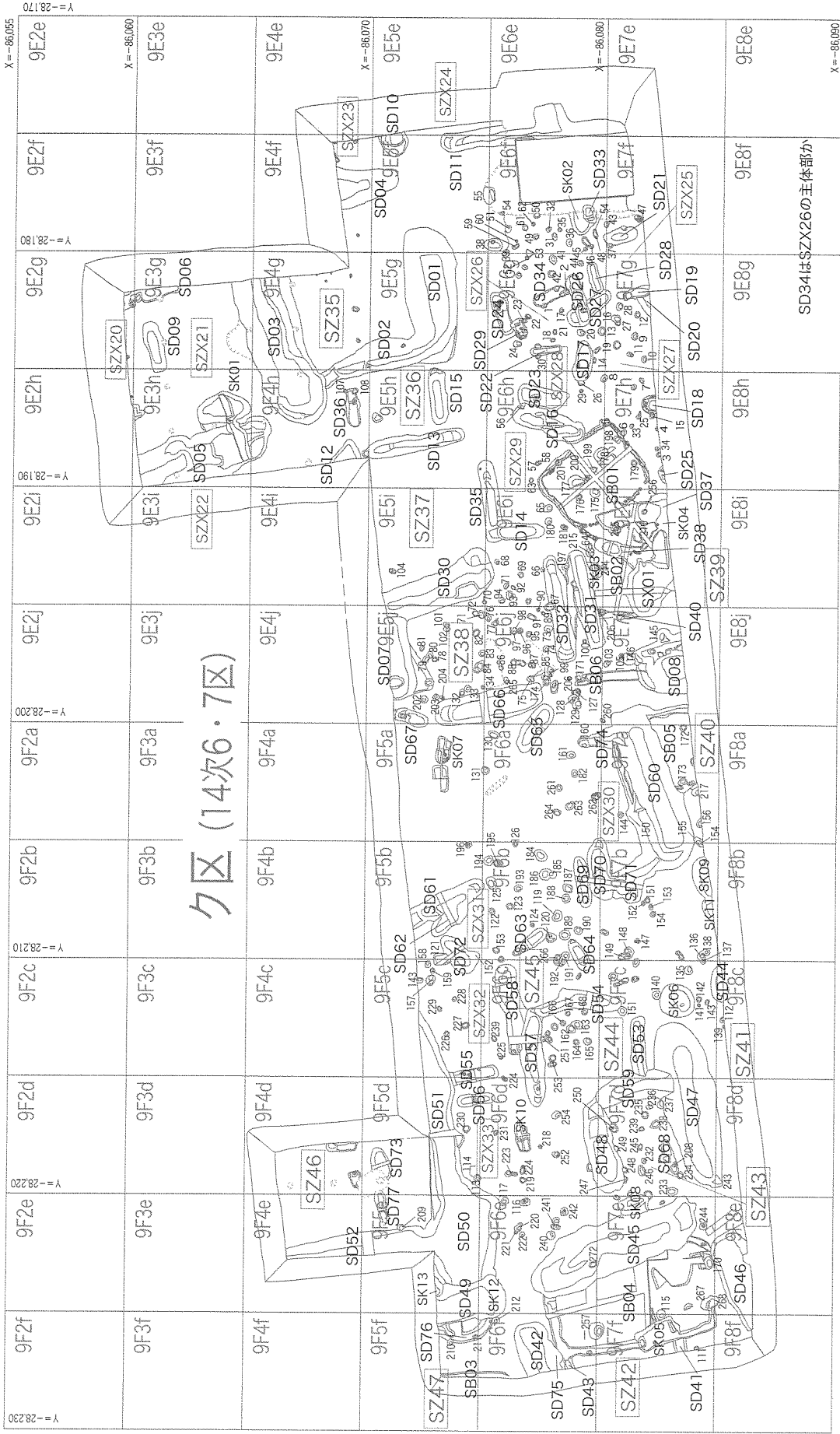


図4-15 ク区遺構名称図



図4-16 ク区遺構平面図(1)



朝日遺跡 (第14次) 遺構水準値図 NO.9
 ク区 (14次6区南東)

図4-17 ク区遺構平面図(2)

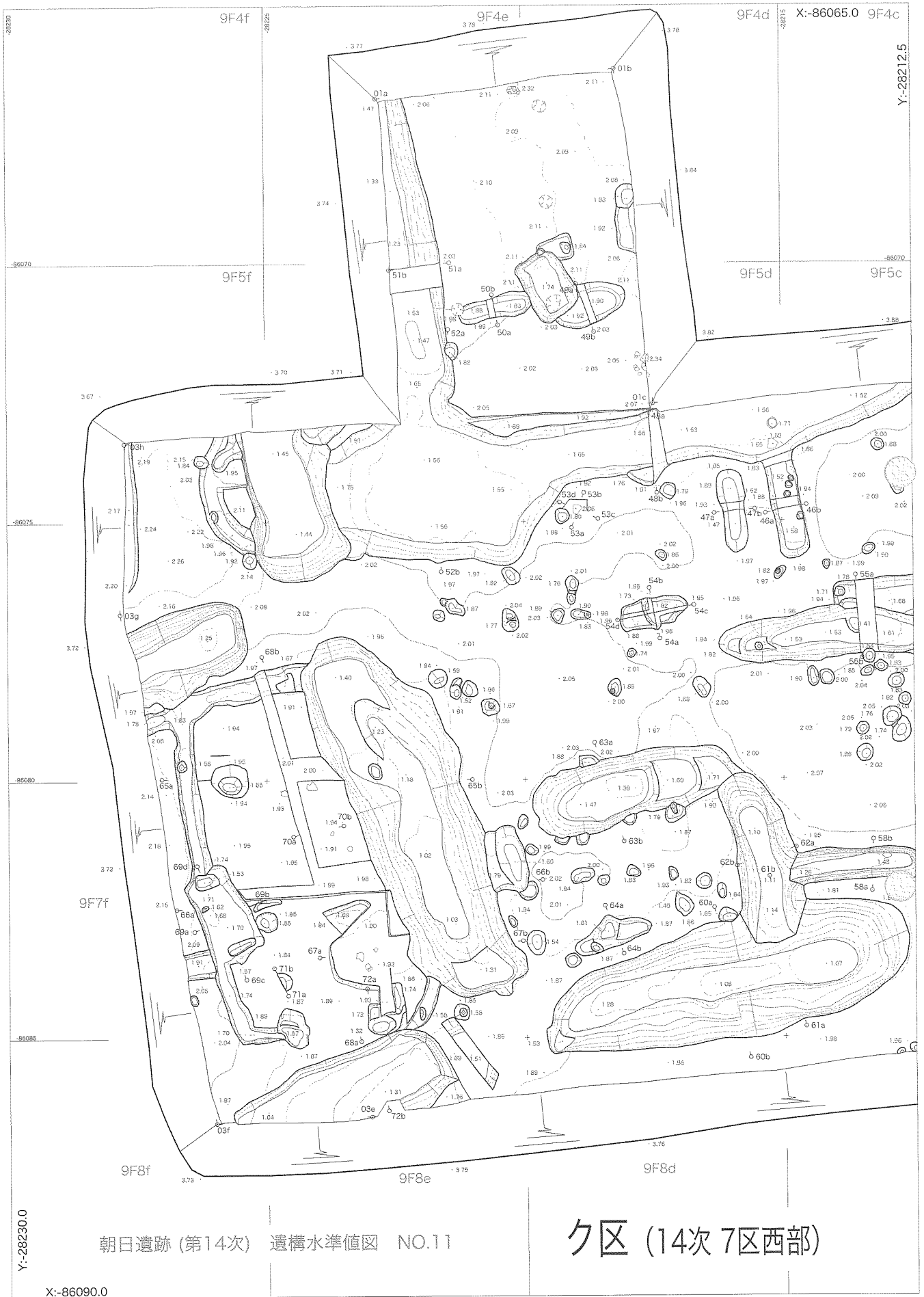


図4-18 ク区遺構平面図(3)

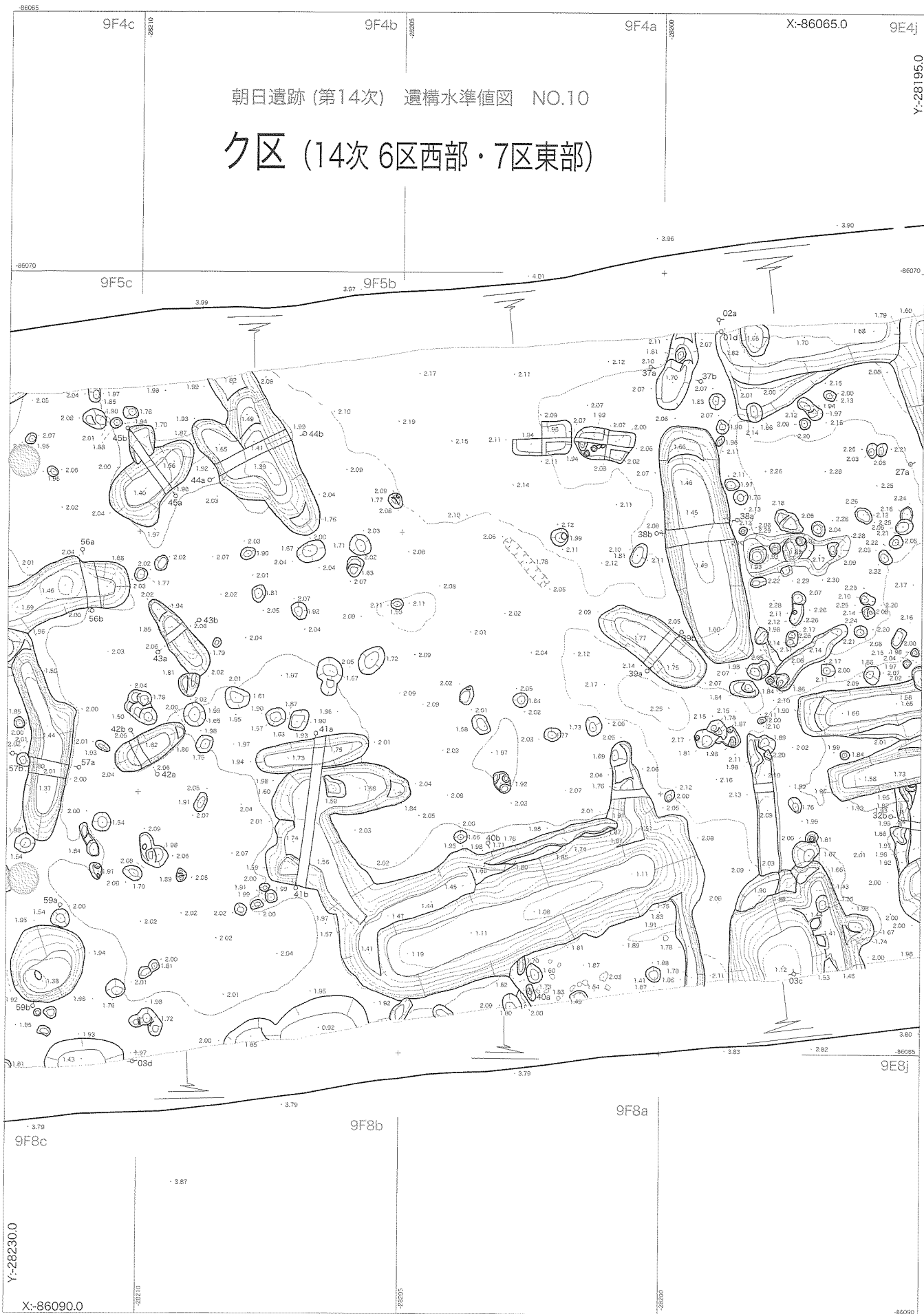


図4-19 ク区遺構平面図(4)

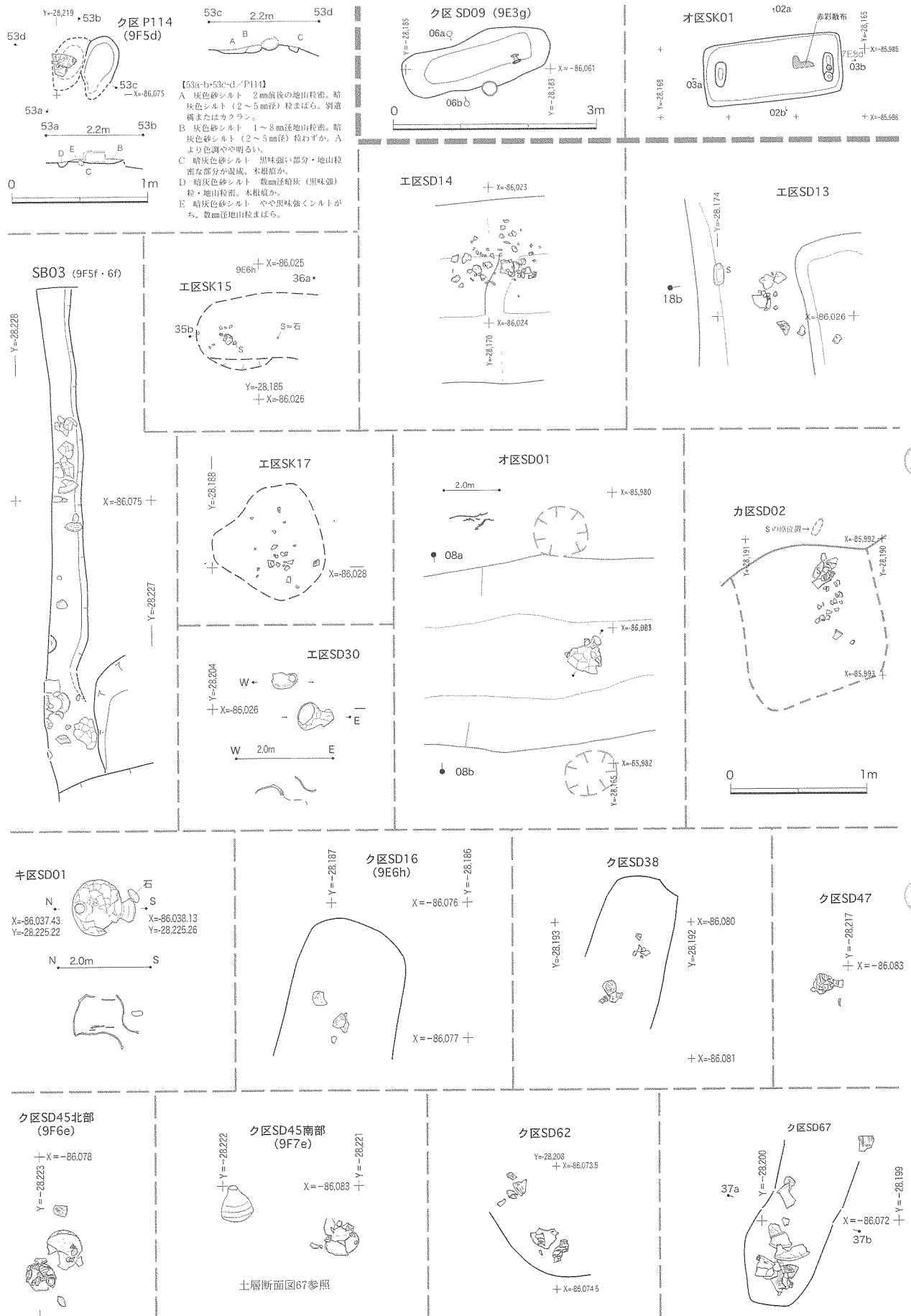


図4-20 13・14次遺構部分図



図4-21 ク区SB04平面図等

主体部であった可能性がある。区画内に位置するSD73・77との関係は不明である。

SZ47 東辺溝（SD49）の存在を理解するために、SD42を南辺溝として共有（重複）する区画を想定した。性格不明の溝SD76、土坑（SK12）、住居跡（SB03）を切るものと考えられる。

SZX20 SD09を南辺溝に想定した。SZ09底面からは完形の高杯1点が出土している。

SZX21 SD09を北辺溝、SK01を西辺溝に想定した仮定区画で、根拠は薄弱である。

SZX22 SD05は、周溝墓の溝と考えるが、区画想定が不確実である。埋土は地山由来の砂質土で、人為的に埋積されている可能性がある。埋積土中から完形の鉢形土器が出土している。SZX22は、SD05を東辺とする想定で図示した。平面的にはSD03・06とともに区画をなす可能性もあるが、その場合、SD09を伴う区画を破壊あるいは内包して造営したことになる。

SZX25 3辺の溝（SD19・21・28）による小区画を想定した。これを典型例と捉えて、小規模な土坑状の溝も区画をなすと考え、ク区内のSZXを想定した。

SD61・62 区画を想定できない溝で、SD62→61と推定。SD62埋土中位から甕と壺が出土（図4-20）。

SD67 SZ38の北東角に位置し、区画を想定しがたい。埋土上位から甕が潰れて出土した（図4-20）。

SK01 2.2×1.2m、深さ0.6m以上の楕円形土坑である。下部は、周溝墓の溝側壁が地下水の影響で崩落したのと同様な埋没状況を示し、上半も周溝墓の自然埋没と同様な黒色土で埋まっていた。検出時には西側のSD05に切られた円形プランを想定したが、結果はSD05と平行する長軸を有し、断面の切り合いも確実とは言い切れなかった。精査掘削をおこなった南半埋土中からは、土器の小片と石製の銅鐸鑄型片が出土した。通常掘削をおこなった北半埋土の掘削時には遺物が採取されなかった。遺構の性格は不明である。

SK06 円形の土坑で、区画を構成しないと思われる。埋土は、SD47に似て炭・焼土粒・土器片を含む。ピット 柱穴となり得る規模のものもあるが、建物等を推定できる配列は認めていない。

土器群 住居関連以外にク区の6ヶ所を命名した。大半が調査区の周縁部に位置するのは、掘削作業との関連もある。包含層での遺物出土量が多いグリッドにも、同様な土器集中が存在した可能性がある。土器群を構成する土器の時期は、住居と共通しており、土器群が住居痕跡を示す可能性もある。

(3) 近世の遺構（図4-2～4・9～12）

エ区東部で幅約5m、最大深1.5mの南北方向の溝（エSD01）を検出した。オ区東端の溝（オSD20）は、一連と考えられる。規模と位置から、明治17年（1884）の地籍図（註）に見える「西才籐地」と「東才籐地」の字界にあたと推定される。周囲の土層状況は、付近が特に低位であったとは認められず、少なくともエ区以南の平田荘内では、微高地を直線的に掘り通したものと考えられる。エ区の土層観察からは、断面の最大外形よりも小振りな素掘りの溝として開削され、後に板材を杭留めした護岸が作られたことがわかる。少なくとも1回、同様な護岸設備が改修されており、近代まで用いられて、平田荘の造成工事中にもかさ上げされつつ機能を保っていたと考えられる。掘削時期は、江戸時代と推定するが不詳。

註）第12次調査報告書（p.1参照）に引用されている。同書第4図の地籍図と現在の地図の重ね合わせは、地籍図が東へ10～20mずれていると考えられる。



写真4-1 13次 (工-1区) 空撮全景



写真4-2 14次1区 (工-3区) 空撮全景



写真4-3 14次2区 (工-2区) クレーン撮影風景



写真4-4 14次3・4区（才・力区）空撮全景



写真4-5 14次5区（キ区）空撮全景



写真4-6 14次7区（ク-2区）西部空撮全景



写真4-7 14次6区(ク-1区)空撮全景



写真4-8 14次7区(ク-2区)東半空撮全景



写真4-9 13次調査区（E-1区）全景（南西から）



写真4-10 13次調査区（E-1区）全景（東から）



写真4-11 13次調査区（E-1区）全景（南東から）



写真4-12 13次調査区東半（西から）

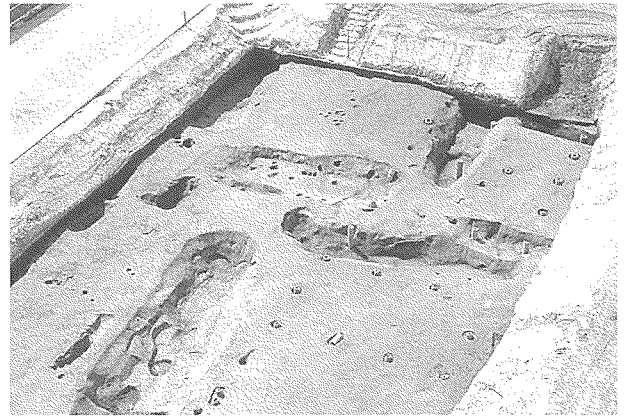


写真4-13 13次調査区西半（北東から）



写真4-14 13次調査区東半（北東から）



写真4-15 13次調査区中央部（北東から）



写真4-16 工区SD02検出状況（東から）



写真4-17 工区SD02土層断面（西から）



写真4-18 工区SD03全景（南から）



写真4-19 工区SD04土層断面（西から）

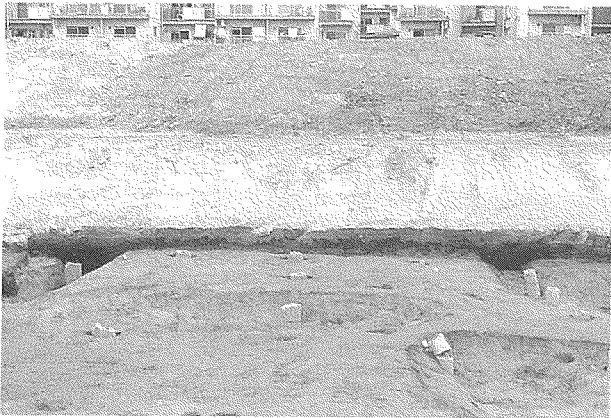


写真4-20 工区SZ21北壁断面（南から）



写真4-21 工区SD09北壁断面（南西から）

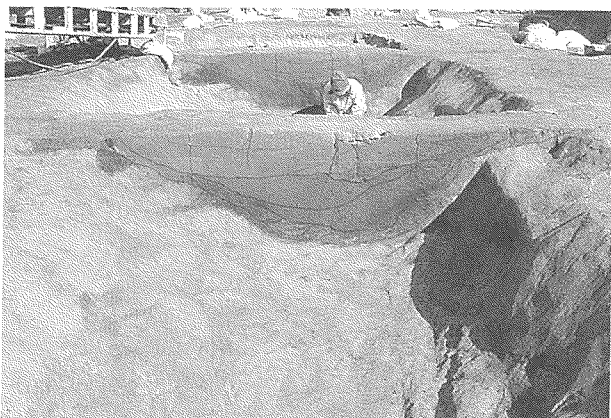


写真4-22 工区SD06西アゼ土層断面（西から）

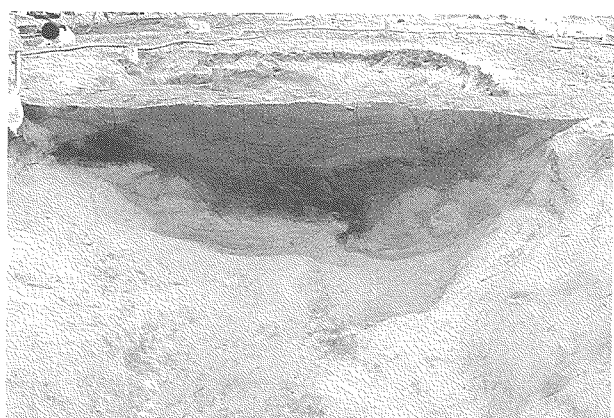


写真4-23 工区SD06東アゼ土層断面（西から）

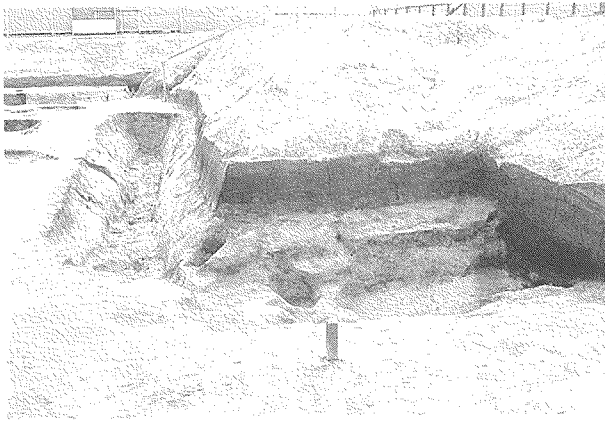


写真4-24 工区SD13・14 (西から)

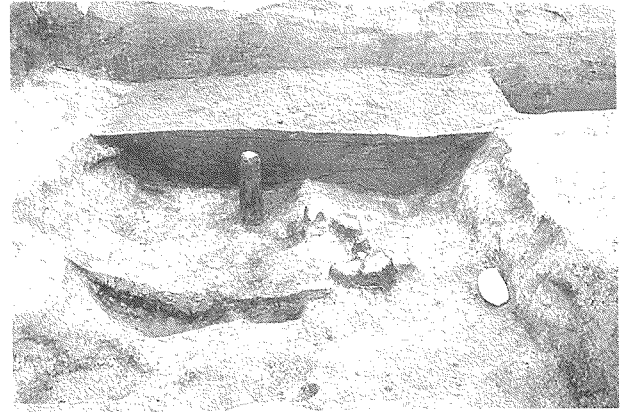


写真4-25 工区SD13・14重複部遺物出土状況(北から)

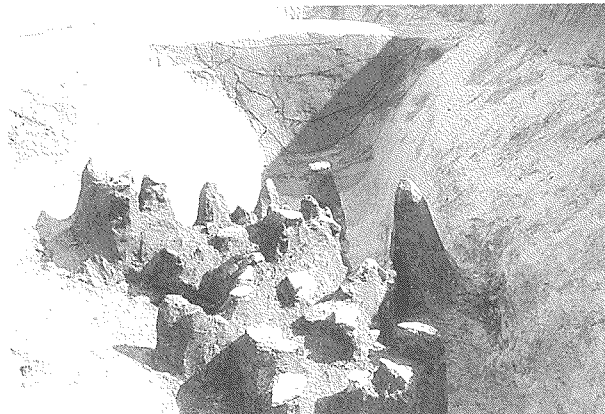


写真4-26 工区SD14土器出土状況 (西から)



写真4-27 工区SD19 (西から)



写真4-28 工区SD12 (南から)



写真4-29 工区SD12内SK02断面 (南から)

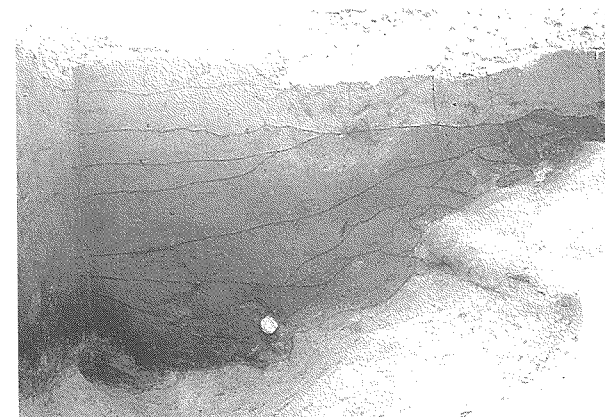


写真4-30 工区SD10土層断面 (東から)



写真4-31 工区SD11土層断面 (東から)



写真4-32 工区SK15土器出土状況（西から）

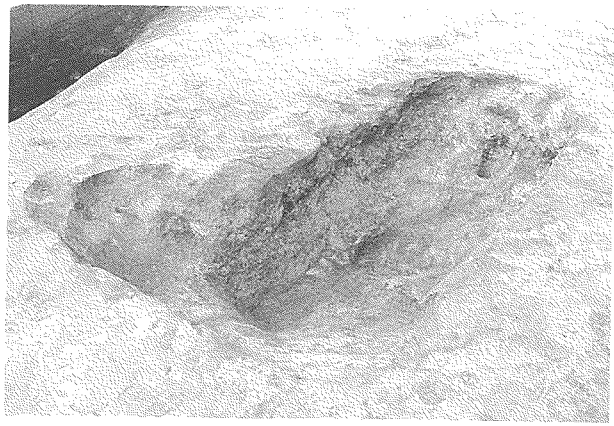


写真4-33 工区SK15・16（北東から）



写真4-34 工区SK12・13（西から）



写真4-35 工区SK6・7土層断面（南から）



写真4-36 工区SD01（南から）



写真4-37 工区SD01南壁断面（北から）



写真4-38 工区SD01（北から）

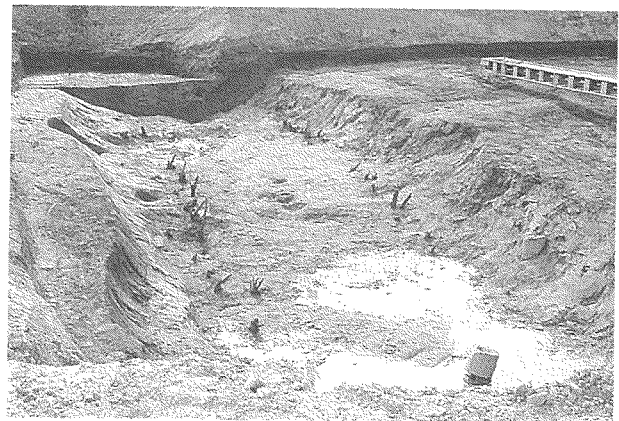


写真4-39 工区SD01（北東から）



写真4-40 14次1区 (I-3区) 全景 (北から)



写真4-41 14次1区 (I-3区) 全景 (南西から)



写真4-42 14次1区 (I-3区) 中央部 (南から)



写真4-43 14次1区 (I-3区) 南半全景 (北西から)



写真4-44 14次1区 (I-3区) 全景 (南東から)

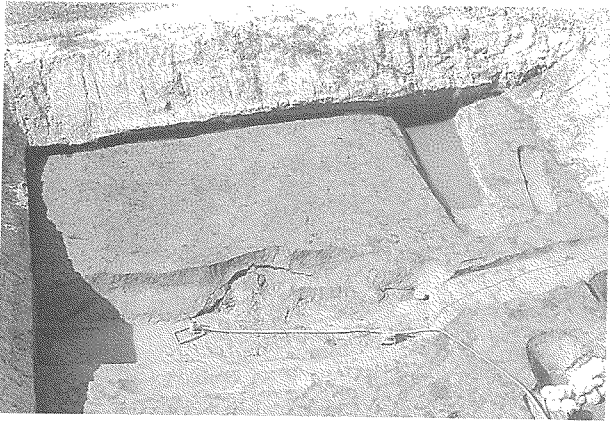


写真4-45 14次1区(工-3区)北部(南から)

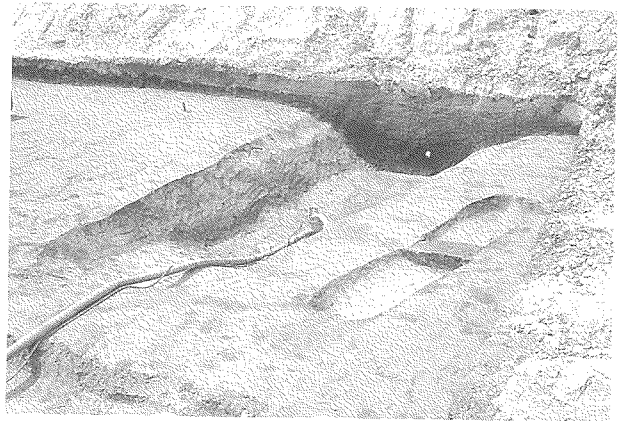


写真4-46 工区SD23・31(南東から)



写真4-47 工区SD25西壁土層断面(東から)

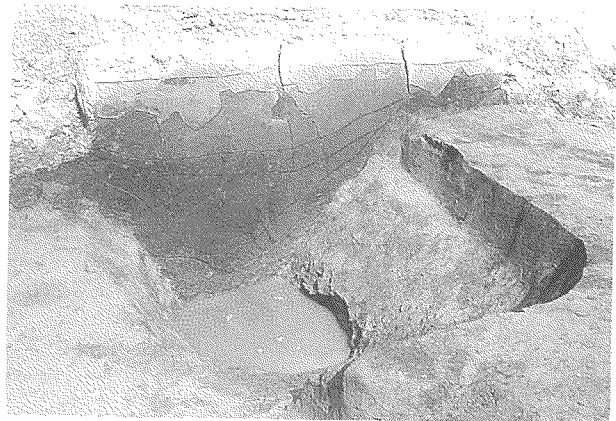


写真4-48 工区SD24(北西から)

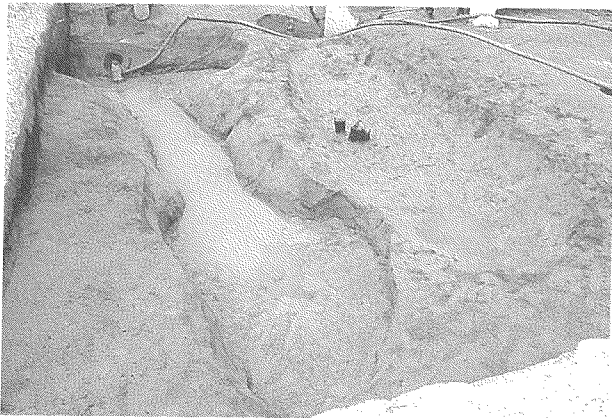


写真4-49 工区SD29・30(南から)



写真4-50 工区SD29・30(北東から)

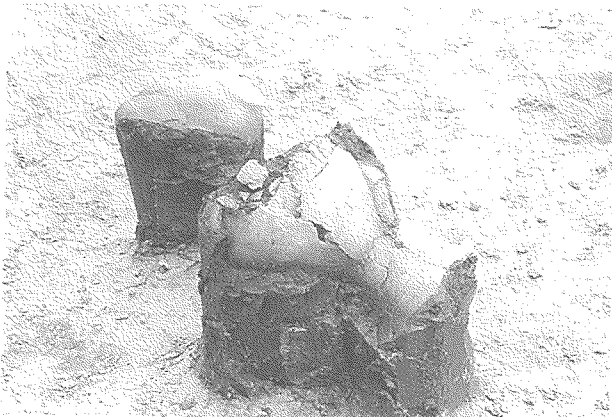


写真4-51 工区SD30土器出土状況(南から)



写真4-52 工区SD29南土器出土状況(北から)



写真4-53 工区SD28東辺土層断面（南から）



写真4-54 工区SD29・38土層断面（東から）

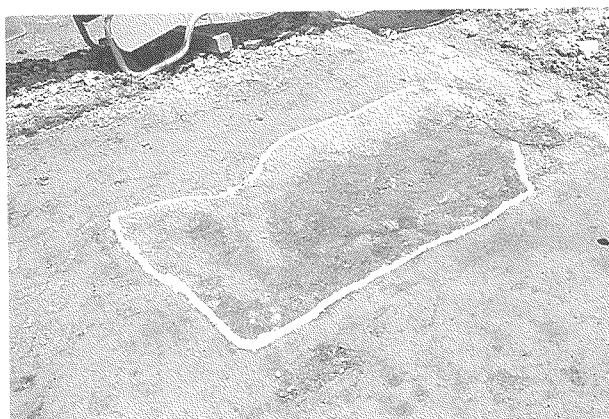


写真4-55 工区SK18検出状況（南西から）



写真4-56 工区SK18（東から）



写真4-57 14次2区（工-2区）全景（東から）



写真4-58 14次2区南壁西半土層断面（北西から）

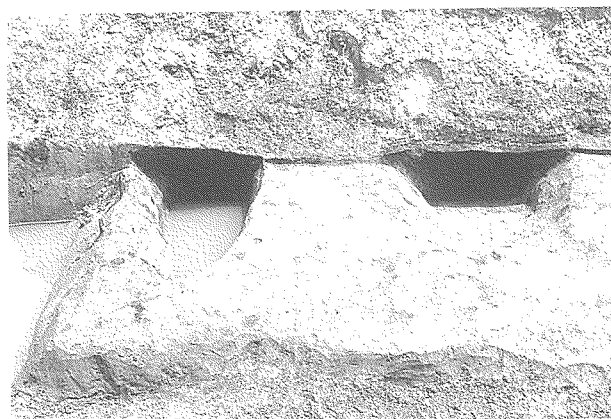


写真4-59 工区SD20・21（北から）

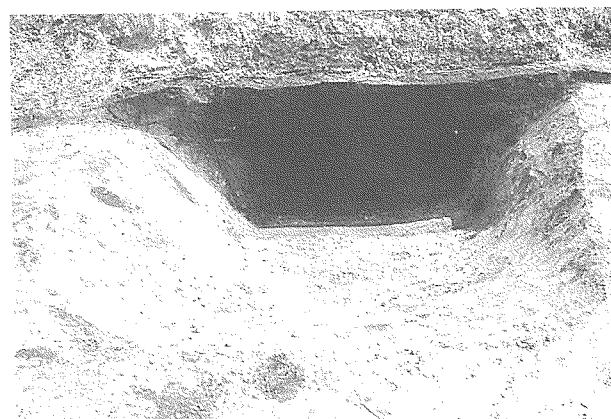


写真4-60 工区SD21土層断面（北から）



写真4-61 14次3区(オ区)全景(南西から)



写真4-62 14次3区(オ区)全景(北西から)



写真4-63 14次3区(才区)遺構検出状況(南東から)



写真4-64 14次3区北半遺構検出状況(西から)



写真4-65 14次3区全景(北東から)

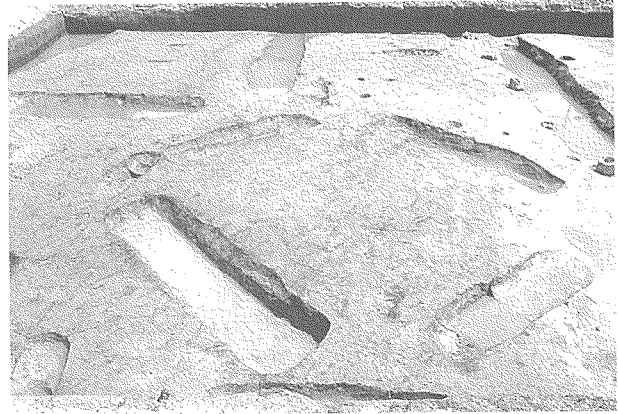


写真4-66 14次3区北半全景(西から)



写真4-67 14次3区全景(北西から)



写真4-68 14次3区南半全景(東から)

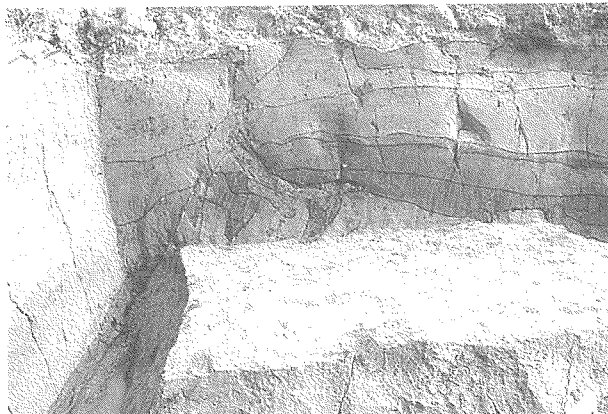


写真4-69 14次3区南東部南壁土層断面(北から)



写真4-70 14次3区SD04南壁土層断面(北から)

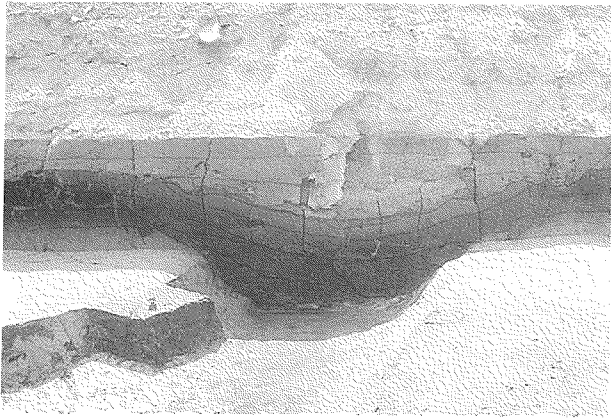


写真4-71 才区 (14次3区) SD04土層断面 (東から)



写真4-72 才区SK01検出状況 (南西から)

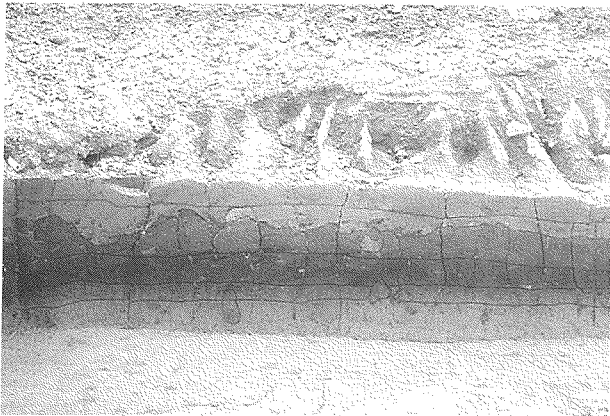


写真4-73 才区北壁土層断面 (南から)



写真4-74 才区SK01 (南西から)

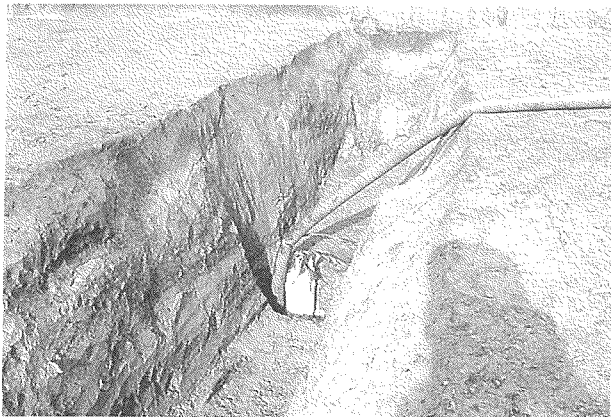


写真4-75 才区SD11木器出土状況 (西から)



写真4-76 才区SD01土器出土状況 (北東から)



写真4-77 才区SD02・04土層断面 (東から)

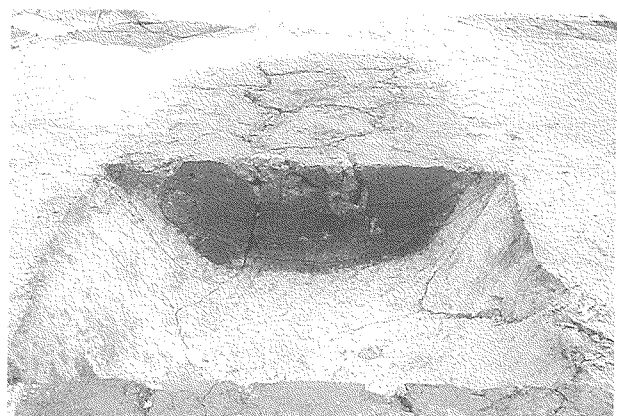


写真4-78 才区SD08土層断面 (北西から)



写真4-79 14次4区(カ区)全景(南東から)



写真4-80 14次4区(カ区)全景(南西から)



写真4-81 14次4区(カ区)西壁南半土層断面(東から)

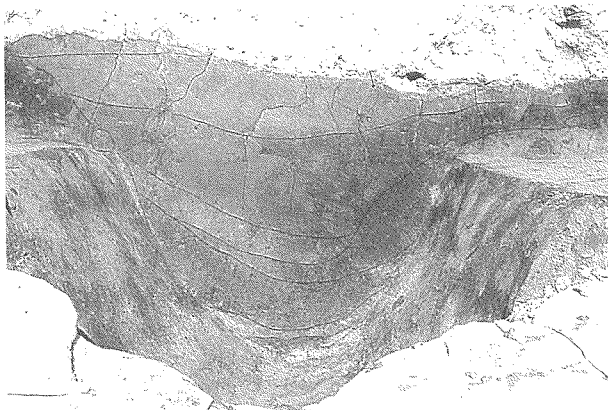


写真4-82 カ区SD03土層断面(西から)

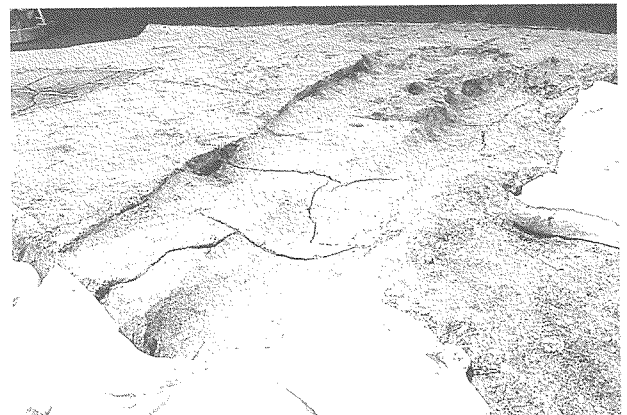


写真4-83 カ区SD06(東から)



写真4-84 14次4区(カ区)SD07・08土層断面(南から)



写真4-85 カ区SD02土器出土状況(南東から)

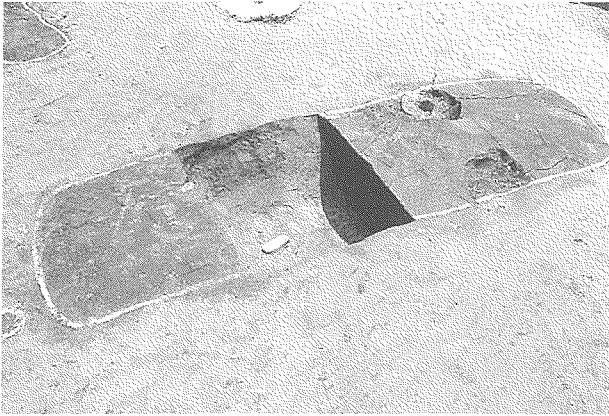


写真4-86 カ区SD13叩石出土状況(北西から)

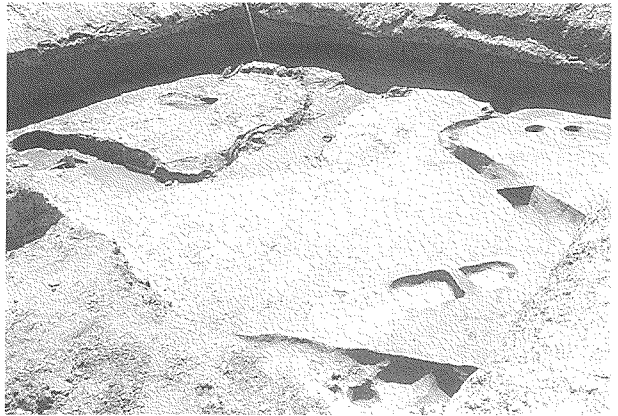


写真4-87 14次5区(キ区)全景(北東から)

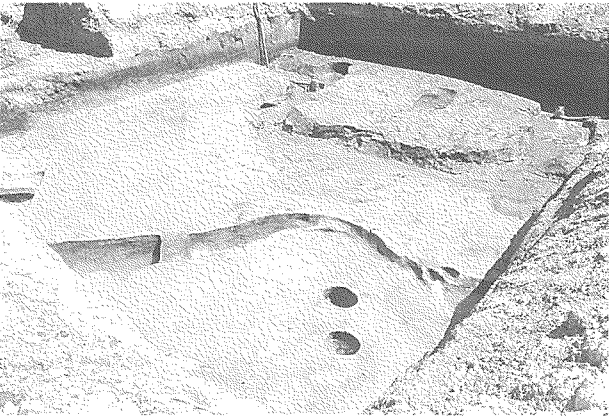


写真4-88 14次5区(キ区)全景(北西から)



写真4-89 14次5区(キ区)南半(西から)



写真4-90 14次5区(キ区)西壁土層断面(北東から)



写真4-91 キ区SD01土器出土状況(西から)



写真4-92 14次6区(ク-1区) 全景(南西から)



写真4-93 14次6区(ク-1区) 全景(南から)



写真4-94 14次6区(ク-1区)全景(北西から)



写真4-95 14次6区(ク-1区)西部全景(北西から)



写真4-96 14次6区(ク-1区)北部全景(北東から)



写真4-97 14次6区(ク-1区)北部全景(北西から)



写真4-98 ク区SD05土器出土状況(南から)



写真4-99 ク区SD05・SK01土層断面(南から)



写真4-100 ク区SD05土層断面(南東から)



写真4-101 ク区SK01土層断面(南から)



写真4-102 ク区SD09土器出土状況（東から）



写真4-103 ク区SD16・23土層断面（北から）



写真4-104 ク区SD31・32土層断面（東から）

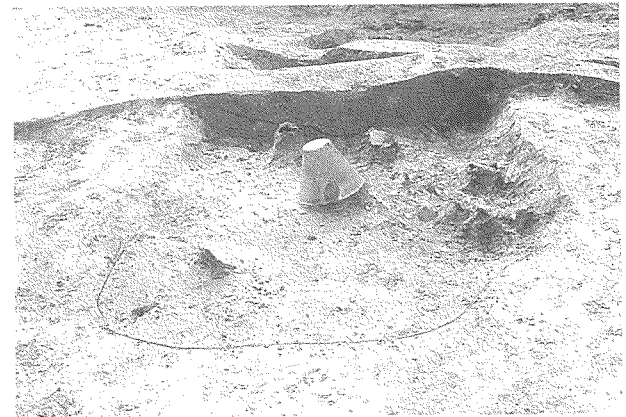


写真4-105 ク区SD37土器出土状況（北から）



写真4-106 ク区SB01上面土器出土状況（北から）



写真4-107 ク区SB01・02周辺（北東から）



写真4-108 ク区SB01・02周辺（南西から）



写真4-109 ク区SB01・02周辺（北から）



写真4-110 14次7区 (ク-2区) 全景 (南西から)



写真4-111 14次7区 (ク-2区) 全景 (北東から)



写真4-112 ク区 (14次7区) SB04全景 (南から)



写真4-113 ク区SB04貼床面全景 (南から)



写真4-114 ク区SB04貼床面南半 (北西から)



写真4-115 ク区SB04全景 (南西から)



写真4-116 ク区SB04全景 (北から)



写真4-117 ク区SB04炉1土器出土状況（東から）

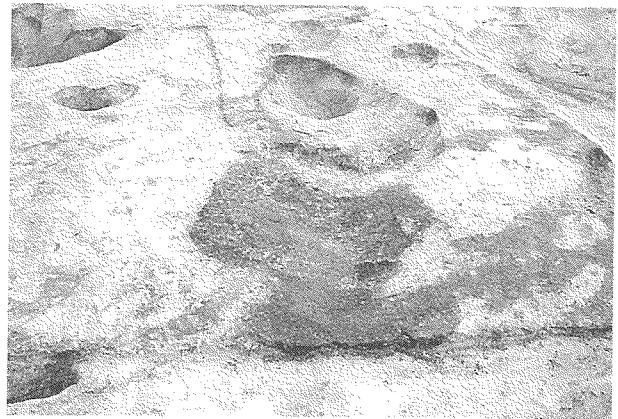


写真4-118 ク区SB04炉群（南から）

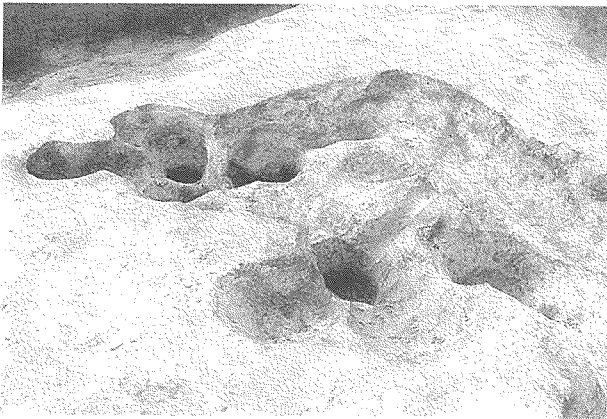


写真4-119 ク区SB04南西部（北東から）



写真4-120 ク区SK05（南東から）



写真4-121 ク-2区（14次7区）南西部（南東から）



写真4-122 ク区SK05周辺検出状況（東から）



写真4-123 ク-2区（14次7区）中央部（北から）



写真4-124 ク区SK05土層断面（東から）



写真4-125 ク区SB03土器出土状況（南東から）

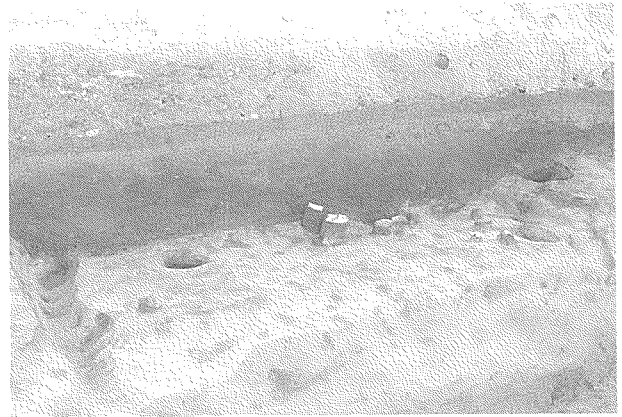


写真4-126 ク区SB05（北東から）

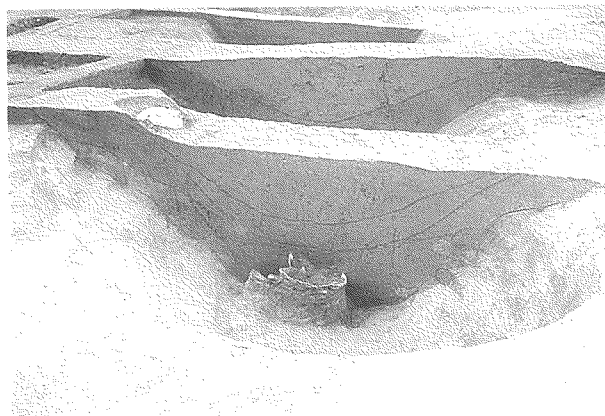


写真4-127 ク区SD45南部土層断面（南から）

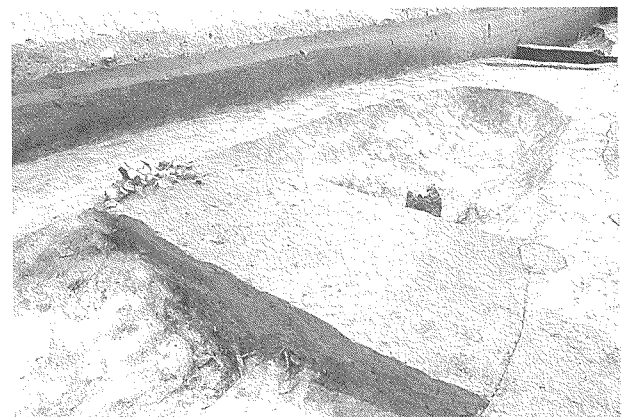


写真4-128 ク区SD47中央～西部（北東から）



写真4-129 ク区SK06土層断面（北西から）



写真4-130 ク区SK09周辺検出状況土層断面（北から）



写真4-131 ク区SD67土器出土状況（南から）



写真4-132 ク区P114土器出土状況（北東から）

V 第13・14次調査の遺物

(1) 縄文土器

遺構（ク区9F5d-P114）から出土した完形土器1個体（図5-1-A）の他に、5個体分の破片が出土している。いずれも縄文時代後期初頭（関東地方の土器編年の称名寺式）後半あるいはその前後に平行する時期のものと考えられる。ただし、6個体の土器の同時期性や相互の関連は確認されていない。

小型の鉢Aは全体にいびつで、口縁は長径15cm、短径13cmの楕円を呈する。口端上面には、RL縄文を転がした後に、雑な押圧装飾を加えている。胴部は、3/4周程にRLをやや間隔をあけて縦転がしし、一部で口縁直下に横転がしする。残り1/4周は、雑で撚りの緩いLRとさらにこれがほぐれたと思われる原体を縦転がししている。雑な作りから「習作」の印象を受ける個体である。

B1~4は、ク区SD01（9E5g）付近出土の波状口縁深鉢である。他に小片が数点ある。沈線区画内にRL縄文を充填している。胎土には粗い砂粒を密に含む。大きさは、Cと同程度であろう。

C1~6は、ク区SD07（9E5j）付近出土の波状口縁深鉢である。他に小片が数点ある。沈線区画内にLR縄文を充填している。口縁部は、小ぶりの4単位の波頂の間に小突起を配しており、口縁上端面に円形刺突列を加える。推定口径20~25cm程度・器高30cm前後である。

Dは、ク区9E5f包含層出土の小型の深鉢である。器面の磨滅が著しいが、LR単節縄文を加えていると思われる。推定口径15cm前後・器高15~20cm程度である。

Eは、ク区SD03（9E4g付近）出土の小片で、4本以上を単位とする鋭い条線文を縦方向に加えている。

F1・2は、エ区SD10・11（8E4i・6i）から出土したもので、他に小片が数点ある。鋭い沈線を縦位に加えており、F2には焼成後の穿孔がある。推定口径30cm前後・器高40cm前後である。

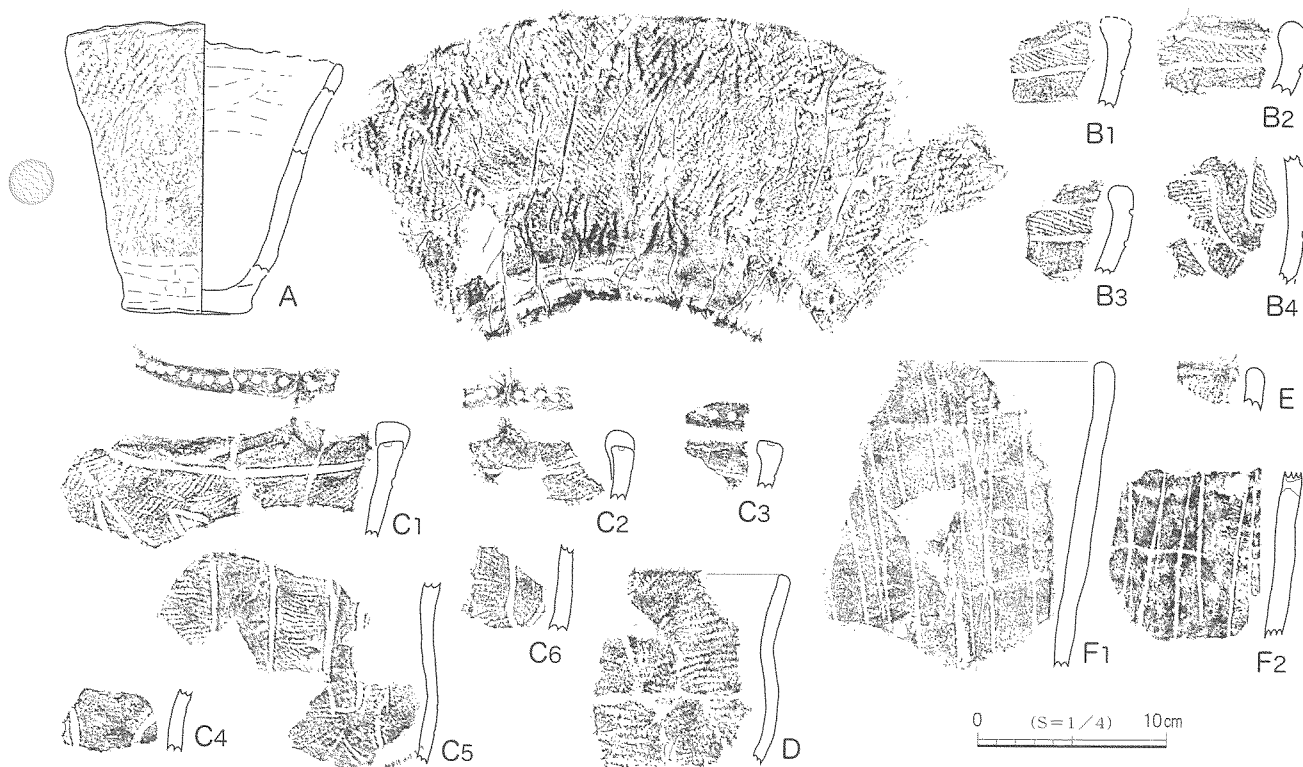


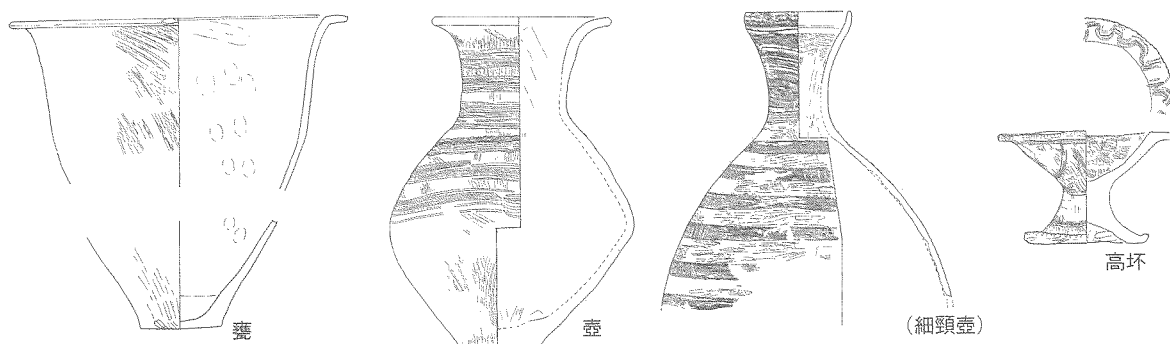
図5-1 第13・14次縄文土器

(2) 弥生土器

1 記述の方針

13・14次調査で出土した土器を、以下のように整理した。すべての出土資料のうち、遺存度合の高いもの、遺存度はあまり高くなくても、特徴的な文様、調整が施されたものなどを選び出した。その内、竪穴住居および土器群として取り上げたものについては、小破片も含めて可能な限り図化した。方形周溝墓の溝から出土した土器は、ほぼ完形に復元できるなど、遺存度合いが高く、方形周溝墓に伴う可能性が高いと判断されるものを中心に図化した。その他の小破片は、口縁部を中心に図化した。包含層として取り上げた資料は特徴的なものを中心に図化した。実測図を掲載した遺物は、できるだけ文章で記述したが、詳細は観察表(表5-1～5)も合わせて参照していただきたい。なお、土器の分類については朝日遺跡でのこれまでの調査・研究に範を求め(石黒・宮腰1994)、I～IV系への系統区分を行い、それに基づき記述した。なお、本報告での記述においては、その系統区分によるI系のものを櫛描文系、同じくII系を条痕文系、IV系を凹線文系とも言及している。また、土器の数量も限られているため、器種を分類し、記号や名称を与えることは行わない(図5-2)。時間的位置付けについても朝日遺跡での豊富な先行研究に依拠して記述する。本調査区での出土資料は、先述の石黒・宮腰氏による朝日Ⅲ期からⅥ期に概ね比定されるが、先行研究の編年案に従い記述するにあたっては、下記の指標を手がかりとした(石黒・宮腰1994)(石黒1996)(永井・村木2002)。なお、各期での細分は十分には行えなかった。

I系



II系

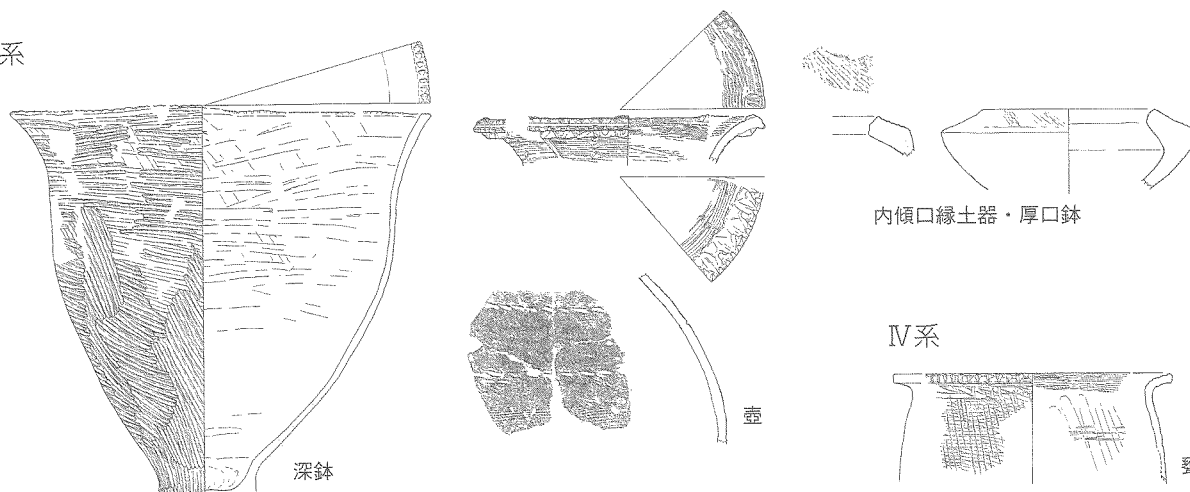


図5-2 土器の分類

朝日遺跡Ⅲ期（朝日式）

施文具が二枚貝主体から櫛主体へと変化するが、これ以後の時期に比べると貝殻描文が多い。条痕文系壺では受口状口縁、袋状口縁多く、半截竹管状工具の多用。内傾口縁土器、厚口鉢の存在。

朝日遺跡Ⅳ期（貝田町式古）

櫛描文系の受口状口縁細頸壺の存在。「付加沈線研磨手法」の確立。櫛描文帯の単帯・複帯共存→複帯→単帯中心、幅狭く「多重化」の順で変化。

朝日遺跡Ⅴ期（貝田町式新）

細頸壺の文様に磨消ハケメ帯の出現。櫛描文手法からの付加沈線の脱落。磨消線文出現。二枚貝条痕調整の「朝日形甕」消失し、ハケメの甕主体。

朝日遺跡Ⅵ期（広義の高蔵式）

凹線文系土器の出現。出現当初はⅤ期以来の在来系土器が圧倒的多数。

土器の観察及び記述に際し、調整、文様の原体、施される順序、方向など、土器の作り方をできるだけ明らかにするよう努めた。しかし、施文具、調整の工具の同定には判断に困る物が少なくない。特に多条の沈線を残す痕跡については、肉眼観察によって原体を識別できないものもあるため、いくらかの誤認もあると思われるが、可能な限り識別し記述するよう心がけた。ハケメと表現したものの中には、かすかに条線が観察できるだけのものから、凹部が匙面状で幅広いものまできわめて多様な痕跡を含んでいる。また、ハケメと同様、原体の静止圧痕が直線的なもので、条線の明瞭でないものはヘラナデとした。観察表中の胎土は、砂粒などの混じり具合を、精密、やや蜜、普通、やや粗い、粗雑までの5段階で表した。遺存度は図化した部分の全周に対する割合である。

なお、土器の記述は、個々の遺構単位で行った。溝に関しては、方形周溝墓単位で提示するのがわかりやすいが、溝の中には、複数の周溝墓を構成するものがあり、出土土器と方形周溝墓の関連が必ずしも明確ではない場合もあるため、溝ごとに示すという方法をとった。周溝墓と出土土器の関係については、本章の小結でも幾らか触れてあるが、あわせて遺構の記述を参照していただきたい。また、図化できた遺物がない遺構に関しては、出土遺物の内容を一覧表に示した（表3-2）。

2 資料の記述

①エ区（図5-3、写真5-1～5）

SD06

SD06からは弥生土器片が少量出土した。その中で唯一図化できたのが1の甕の台である。台部は全体が残っている。上位は中実で棒状、下半が強く内湾する器形で、外面にはハケメの後ミガキが施されている。内面は一部にミガキらしい痕跡がある他、ナデで平滑である。外面にわずかにススが付着している。Ⅴ期のものであろう。

SD07

SD07からも弥生土器小片が少量出土した。そのうち、外面に条痕を残し、口縁端部に二枚貝によるらしい沈線を施した深鉢小片(2)を図化した。

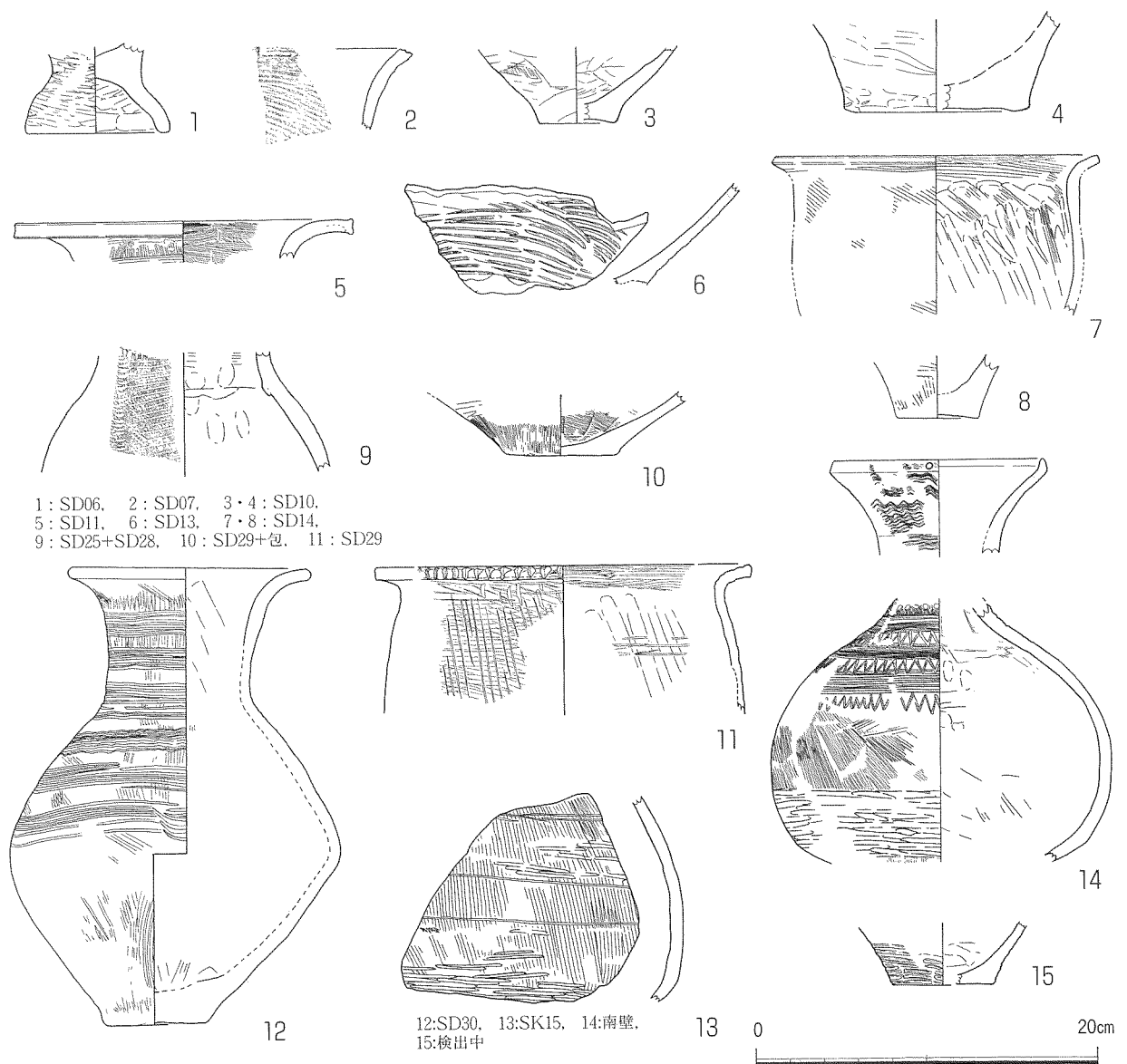


図5-3 工区出土土器

SD10

SD10からは弥生土器の小片が出土した。この内、弥生土器の壺底部を2点（3・4）図化した。

SD11

弥生土器の小片が出土している。図化できない程度のもが多い。頸部に櫛描文が観察できる壺口縁部小片(5)を図化した。

SD13

土器片がややまとまって出土した。6は条痕文系深鉢の底部付近の破片である。外面はススの付着が顕著である。SD13はわずかに一部を調査したに過ぎず、破片もやや大きいことを考えると、この溝に伴った遺物の可能性もあろう。

SD14

SD14では土器の細片が集中して出土した。複数個体分の破片があるが、図化できる程度に接合できたのは甕の口縁部と底部のみであった。口縁部(7)は外面は器面の剥離が著しく、調整もはっきりわからないが、斜めの条線が観察でき、ハケメまたは二枚貝条痕であろう。内面は斜めのハケメ後、縦方向にナデが

施されている。口縁端部はヨコナデによって面をなす。接合できなかった破片も含めると図化部の1/2程度は残っているものと思われる。底部(8)は(7)の破片に近接した位置で出土している。ともに小片で器面の残りも悪いため、同一個体とは決められないが、その可能性はあろう。

SD25

櫛描文系壺胴部(9)が出土した。SD28出土片と接合できた。ハケメ調整後、刺突を施し、その後多段の磨り消し線が施されている。頸部の内面には成形に伴う段が観察される。V期～VI期に比定できるが、小片であり、この溝に関連した土器とは判断できない。

SD29

SD29からは壺底部(10)と凹線文系のタタキ痕のある甕(11)が出土している。(10)は包含層出土の破片と接合した。内外面ともにハケメ調整を施し、外面は部分的にミガキが観察される。内面のハケメは原体の圧痕が顕著である。(11)は外面タタキの後にハケメが施されている。口縁部内面には横方向のハケメが施される。口縁端部にはヘラによる刺突が施されている。(11)はVI期のものである。

SD30

(12)はアゼ埋土中位から出土した櫛描文系の太頸壺である。口縁端部のかなりの部分を欠くが、それ以外はほぼ全体が残っており、この溝が構成する方形周溝墓と関連のある土器と見てよいだろう。外面はハケメ調整の後、6条程度の櫛による直線文、波状文が施されている。文様は凹部の幅が広いが、原体は二枚貝ではないと思われる。頸部の直線文のみ2段連なっている。内面は口縁部内面にはナデの痕跡らしい縦方向の条線が見られる。この土器はIII期に比定でき、それを方形周溝墓の時期とみなしてよいだろう。このSD30と同一の方形周溝墓を構成するSD12からはVI期に下がる凹線文系土器が出土しているが、破片であり、遺構の築造時期とは関連しないものであろう。

SK15

SK15からは弥生土器の破片がやや多く出土している。図化できた(13)は、櫛描文系壺の胴部であるが、ハケメの後、沈線を施し、その後疎らにヘラミガキを行っている。V期以降のものである。内面は外面のハケメとは異なる、凹部の幅広い原体による横方向のハケメであり、原体の圧痕が明瞭に残る。比較的大きな破片ではあるが、全体からすると遺存度は高いとは言えず、この遺構に伴うものとは決めかねる。

その他の土器

(14)はエ区南壁から出土した細頸壺である。出土した平面的位置はSD29の範囲内であるが、出土レベルがかなり高く、SD29出土とは決め難いものである。口縁部と胴部は接合しないが、同一個体と見て間違いはない。底部は欠いているが胴部はかなり残っており、何らかの遺構に関連する土器の可能性は高い。口縁部は受口状を呈し、やや内傾する口縁部外面には櫛描波状文の後、竹管による刺突が施されている。胴部は、下位に段がある器形である。文様は、頸部に竹管状刺突、櫛刺突がなされる。胴部は櫛による直線文後、その間にコンパス鋸歯文が施されている。V期以降のものであると思われる。

(15)は遺構検出作業中に出土した条痕文系深鉢の底部である。

②オ区(図5-4、写真5-6)

SD01

遺存度の高い細頸壺(16)が出土した。下胴部を欠くが、胴中位以上はほぼ残っており、本来この溝に関

連した土器とみなしてよいだろう。受口状の口縁部を持つ。口縁部の外面は縦ハケメ後に櫛描波状文、直線文を施している。胴部は櫛描文とミガキ帯が繰り返される文様構成である。櫛描文の上下には沈線が施されており、いわゆる付加沈線研磨手法である。ミガキと付加沈線の前後関係ははっきりしないが、ミガキを切って沈線が施されていると見られる部分がある。櫛描の直線文上には、四方向に縦の短い櫛描文が施されている。器形、文様から見てV期のものかと思われるが、いわゆる付加沈線の手法は保たれている。この溝はSZ28とSZX12のそれぞれ一辺をなすが、この土器がどちらに伴うかは決め手がない。

③カ区

この調査区の遺構からは図化できる遺物は出土しなかった。SZ31の東辺と思われるSD02からは土器片がいくらかまとまって出土した。しかし、これらの破片は接合せず、図化できなかつた。

④キ区 (図5-4、写真5-7)

SD01

SD01からはほぼ全体が残る大型の壺(17)が出土した。袋状の口縁部を持つ。胴部は中央が強く張る器

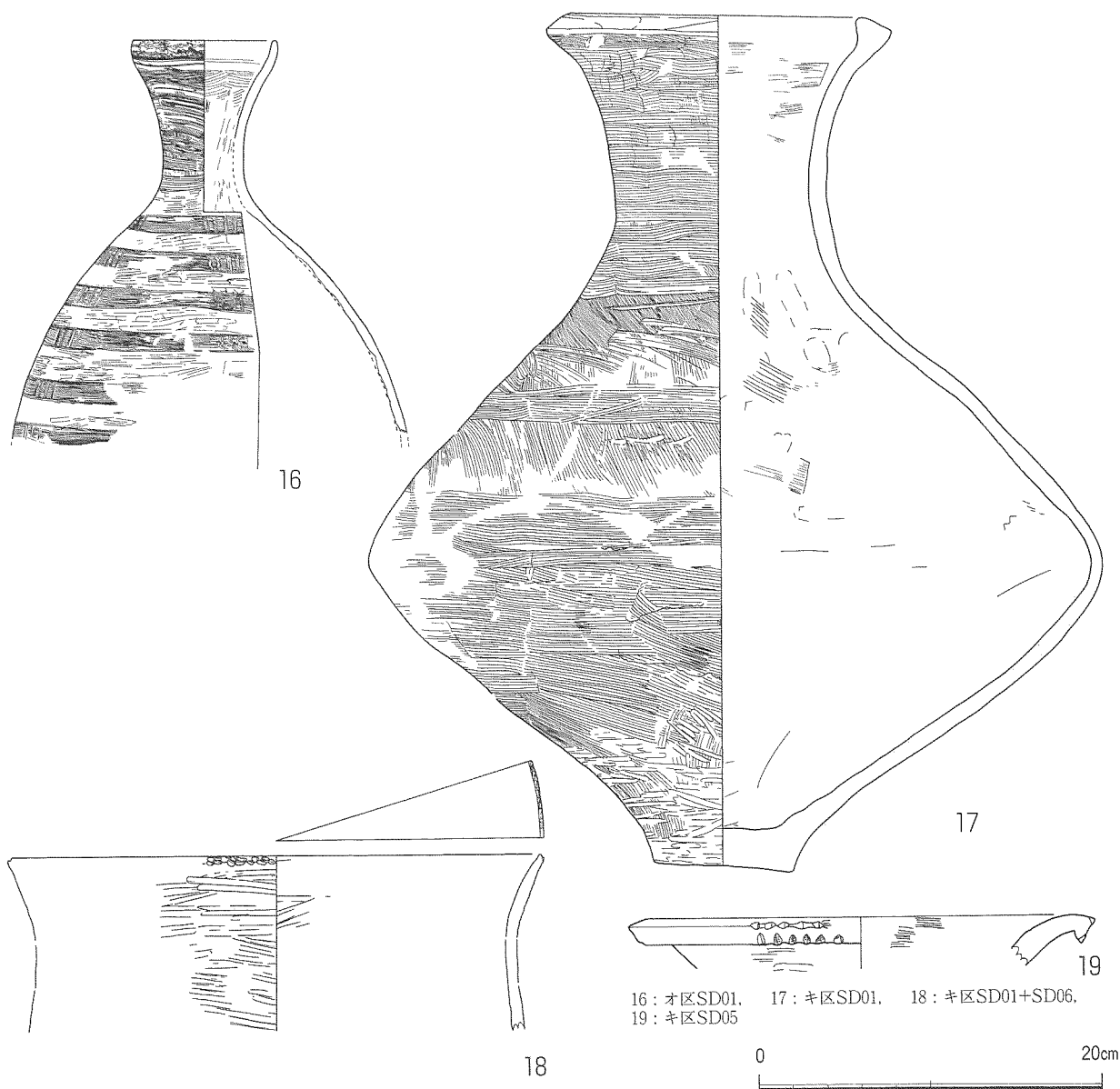


図5-4 オ区・キ区出土土器

形である。頸部には二枚貝による直線文が施されているが、原体の圧痕が顕著である。胴部の直線文は原体がはっきりしない。底面には、縄のような圧痕が見られる。施文具として二枚貝が使用されており、Ⅲ期に比定できるものと思われる。

SD01と北辺SD06から出土した小片が接合した(18)は、外面条痕調整の深鉢片である。ともに小片につき、いずれかの溝に伴うとは言えない。口縁端部の外面と上面にキザミが施されている。内面は端部直下が凹み、端部がわずかに突出している。

SD05

(19)は東辺SD05から出土した櫛描文系の壺口縁の破片である。小片のため、この溝に関連する遺物とは言えない。口縁の端面にはヨコナデがなされ、上下に櫛によるキザミが施されている。

⑤ケ区 (図5-5～12、写真5-8～42)

SB01

SB01から出土した土器には、ほぼ全体が残るものと小破片がある。この二者は竪穴住居との関連の仕方が異なる可能性があるが、順序としては区別せず示す。

(20)は胴部の径が50cmに達する大型の壺である。貝殻描と見られる直線文、波状文がこの順で施されている。2条の突帯があり、突帯状にはキザミが施されている。(21)は壺の胴部下半である。外面はハケメ後ミガキが施されている。内面は横方向のハケメで器面が整えられる。外底面も調整が施され、比較的平滑である。(22)は条痕文系壺である。口縁部と胴部は接合しないが、近い位置で出土しており同一個体と判断される。口縁部外面に圧痕のある突帯が巡っている。また、口縁部内面には櫛状の工具により直線文、波状文を施し、その後上端に浮文状の突起が付けられている。これは同時期に存在する沈線文系土器の特徴を取り入れたものと思われる。口縁部外面突帯以下には横方向の条痕、半截竹管状工具による縦方向直線、同じ工具によるらしい扇形文が施されている。胴部には、ミガキ帯をはさんで棒状工具による圧痕、波状文、直線文が施されている。

(23)は床面直上から出土した甕である。外面を粗い縦ハケメ、内面は横方向にハケメで調整している。口縁部内面には4条以上の櫛による波状文が2段施されている。口縁端部は四角く、上下にキザミが施されている。Ⅲ期～Ⅳ期に類例が見られる。(24)はハケメ調整の甕である。口縁端部は丸く、櫛による刺突がある、口縁部内面に波状文、直線文が施されている。

(25)はほぼ全体が残る甕である。あまりふくらみのない胴部から、ゆるく屈曲して口縁部にいたる。口縁端部はあまり整っていないが、部分的に下方に肥厚しているところもある。外面はハケメ調整であり、胴部下位にはミガキが施されている。内面は口縁部のみに横ハケメが施される。口縁端部に工具による押圧が1カ所のみ残る。外面は底部付近を除きススにより黒褐色、内面は胴部中位以上にかすかな炭化物の付着が観察される。(26)は外面縦ハケメ調整の甕である。胴部からゆるく屈曲して口縁部にいたる。口縁端部はあまり整わず、上側から粘土がはみ出し、段になっている。端部には1カ所幅5mm、断面の四角い押圧が施されている。(27)は外面縦ハケメで胴部から緩やかに屈曲して口縁部にいたる。口縁端部の上半のみに横方向のナデを施したため、稜が生じている。(28)は甕の口縁部小片である。端部に棒状工具に押圧が施されている。

(29)は尾張北部に多い条痕文系深鉢である。残りがよく、ほぼ全体が復元できた。胴部はややふくらみ

を持ち、上位は外反して口縁にいたる。外面は口縁部付近が横方向、胴部が斜め、底部付近が縦方向の条痕で調整されている。内面はハケメ状の細かな条線が観察できる。口縁端部にはキザミが施されている。底部外面には布目圧痕が見られる。外面の底部付近にはあまりススが付着していないが、底から10cm以上の部分にはススの付着が顕著である。

SB01の内部で検出されたピットからも遺物が出土している。(30)はP177から出土した壺の口縁部片である。口縁は端部付近で緩やかに屈折し、上面に幅1.5cmほどの面をなしている。端部には指頭による押圧が1カ所確認でき、頸部には櫛描の直線文がある。P178から出土した遺物では、いずれも小片であるが(31・32)を図化した。(31)は外面条痕調整の深鉢である。口縁部内面には、かすかな条線を持つ原体によりキザミが施されている。(32)は甕の底部である。胴部下端にはミガキと思われる幅5mmほどの平滑な面が見られる。底部外面も平滑である。

全体の残る土器だけでなく、小破片もⅢ期やⅣ-1期に見られるものであり、この住居の時期を示していると思われる。

SB02

(33)は住居内4区から出土した受口状口縁壺である。外面はハケメ状の条線や凹部の幅が広い条線が認められるがあまり明瞭な痕跡ではない。内面は平滑であるが、ヘラ状の工具の圧痕が観察される。口縁の端部は明瞭な面をなし、内側に突出している。(34)は住居内6区出土の条痕文系の袋状口縁壺である。口縁部外面に半截竹管状の工具による直線文がめぐっている。口縁端部はわずかに内側に突出する。全体の1/6程度が残る。(35)は条痕文系壺の胴部である。粗い条痕の上に、半截竹管状工具によって波状文、縦の直線文などが描かれている。文様は下位のものから順に描かれている。この個体と同一と思われる破片は他にもあり、図化部位の1/4程度が出土している。

(36)は条痕文系壺の胴部である。SB01出土の(22)と同様な壺の胴部片であるが、波状文の条数は異なる。また色調も異なり、同一個体とは判断できない。(37)は住居内6区の床面直上と貼床内から出土した条痕調整の壺底部片である。出土状況からは、住居に関連する遺物と見られる。底面は外周で接地し、内側はわずかに上げ底を呈する。(38)は、貝殻描と思われる直線文、波状文を持つ。

床面や周溝内から出土した土器は朝日遺跡Ⅲ期の特徴を持っており、この住居の時期を示している。

SB03

壺、甕が出土しているが、遺存度はあまり高くない。(39)は壺の口縁部である。口縁端部はやや幅広い面をなし、沈線が施される。その上下に二枚貝刺突が施されている。頸部外面にはハケメの後、櫛描直線文が施されている。(40)は受口状口縁を呈する条痕文系壺口縁である。口縁部は水平とは言い難く、ゆるい波状を呈するが、小片のため本来の形状は不明であり水平で図化した。外面は口縁部上位には二枚貝による縦方向の条痕があり、その下位は横方向にハケメ風の調整がなされている。端部は丸みを帯びた面をなしており、内側に突出する。

(41)は住居内のNo.3地点から出土した甕である。図化部の1/4が残っており、同一個体の口縁部破片もある。残りは比較的よく、この住居に伴う遺物と思われる。頸部はあまりしまらず、内面に稜をなして折れ、口縁部にいたる。口縁端部には棒状工具による刺突がなされているが、その中にヘラ状具によるやや大きめの刺突がある。胴部外面は縦方向に、凹部が匙面状になる粗いハケメによる調整が施されている。

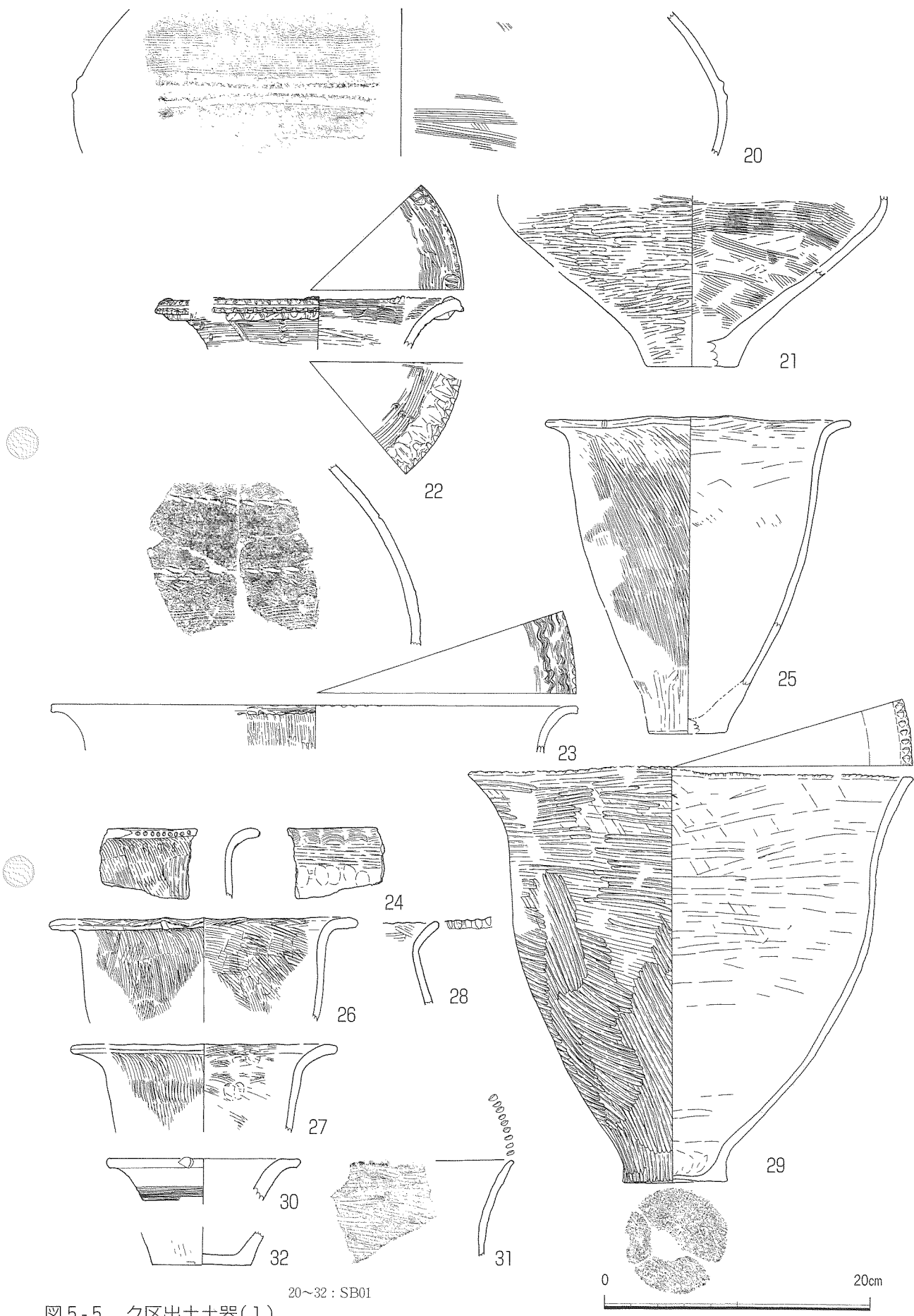


図 5-5 ク区出土土器(1)

20~32 : SB01

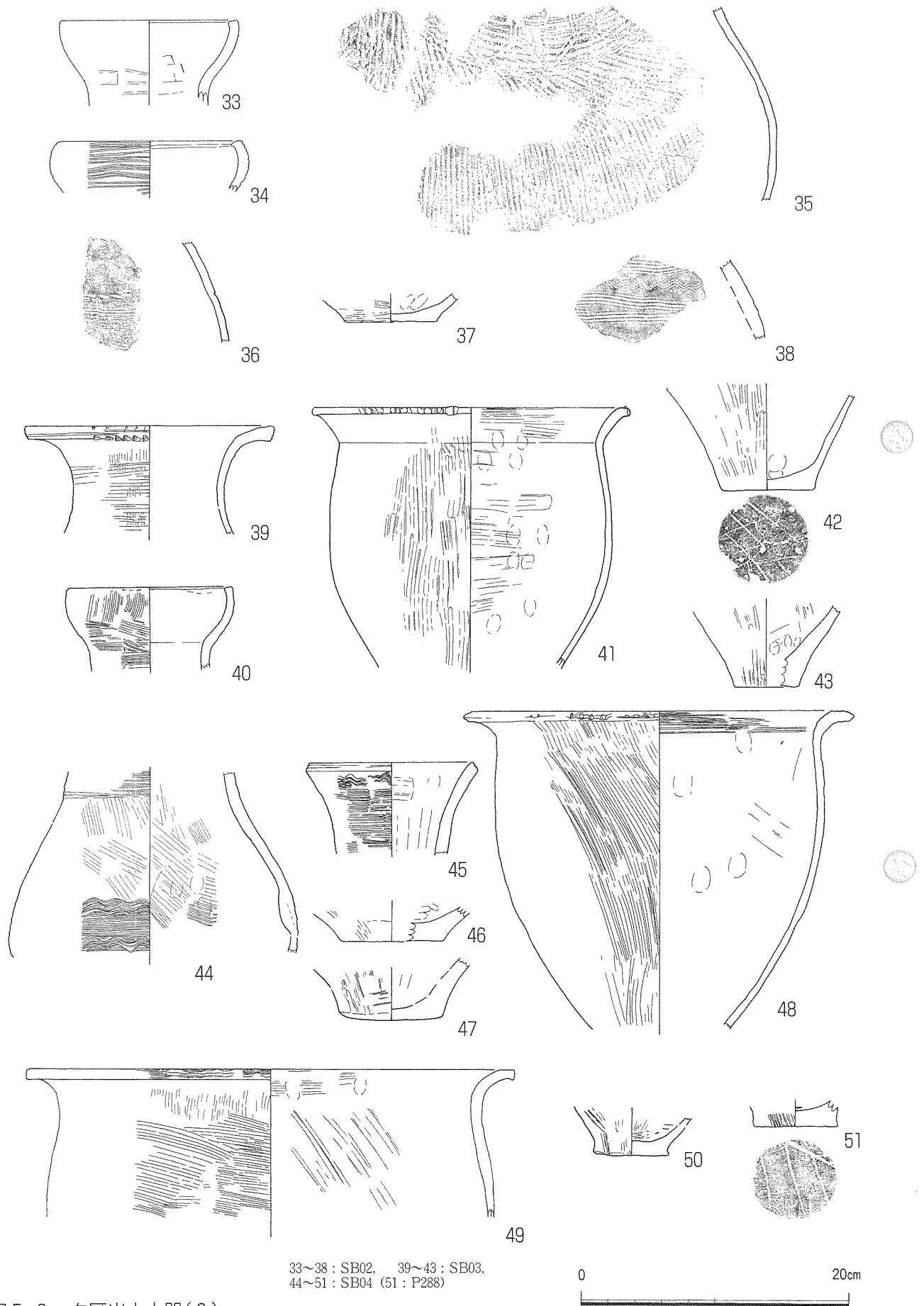


图 5-6 ク区出土土器(2)

内面は横方向に細かな条線が観察される。(42)は甕の底部である。内外に炭化物が付着する。外面は粗いハケメの調整である。底部付近はミガキ状を呈している。底面には斜格子の沈線が観察される。(43)は条痕調整の深鉢の底部の小片である。底部外面から胴部外面にかけてススが付着している。

これらの土器はⅢ期に比定してよいと思われる。

SB04

(44)は炉2内に敷かれていた土器である。頸部から胴部が全周の1/2ほど残っている。頸部はあまり締まらない器形である。内面には、縦方向の帯状に黒褐色のススが付着しており、炉内で付着したものと思われる。頸部には櫛描直線文が残り、その下端は、わずかに段がつけられている。下胴部には櫛による直線文、波状文が下から上の順に施される。内面はハケメ調整である。下胴部は粘土積み上げの際に分厚くなっているが、その部位に剥離面があるらしい。(45)は壺の口縁部である。口縁端部には面を持ち、一条の沈線が巡る。外面には櫛あるいは二枚貝による波状文、直線文が施されている。沈線の特徴は二枚貝のものに類似するが、貝殻の孤状の圧痕は見出せない。(46)はSB04の床面直上およびP258から出土した壺のものと思われる底部片である。外面は縦ハケメで、部分的にナデ消されている。底面はミガキがなされているらしく平滑である。外面にはススが付着する。(47)も壺の底部である。

(48)は甕である。全体の1/4ほどが残っている。緩やかに屈曲する口縁部を持ち、口縁端部は上側から粘土がかぶっているように突出している。口縁部内面には粗いハケメが施されている。外面はハケメ調整であり、口縁部外面と胴部最下端には、凹部の明瞭な粗いハケメが観察される。胴部内面には条線がかすかに見られるが、顕著な調整痕は確認できない。(49)は炉1a内に敷かれていた甕である。図化部の1/4程が残っている。緩やかに屈曲する口縁部で、端部には幅広い面を持っている。端面には直線文の後、波状文が施されている。外面は、口縁部から頸部を縦方向のハケメ、胴部はあまり凹部の明瞭ではない原体によるハケメが施されている。内面は斜めのハケメが見られる。(50)は外面条痕調整の深鉢底部である。内面はケズリ状の器面の状況を呈しているが、細かな条線が残り、砂粒の動きも顕著ではない。底部外面には細かな砂粒が集中する。

住居内のピットからも遺物が出土している。P288上部からは(51)の条痕調整の深鉢底部が出土した。底面には葉脈状の太い圧痕が明瞭である。

これらの遺物は残り具合も区々であるが、遺存度の高い壺や甕はⅢ期に比定できるものと思われる。

SB05

SD60に切られる等しており、土器の出土量はあまり多くない。

(52)は小片であるが、壺の口縁部である。口縁の端面に一条沈線がめぐり、その下位には櫛によると思われるキザミがある。口縁内面は端部直下がわずかに凹み、その下に稜が生じている。(53)は埋土上層から出土した壺の口縁部である。口縁の端面下端に櫛状の工具によるキザミが施される。

(54)は破片の大半がSD60から出土しているが、この溝に切られているSB05の床面から出土した破片と同一個体と見られ、本来この住居に属する遺物と判断した。条痕文系の受口状口縁壺である。口縁部は上面に面をなし、半截竹管状の工具による沈線が施されている。端部には櫛状の工具によるキザミが施される。外面口縁部直下には押圧のある突帯が貼り付けられている。口縁部外面は斜めの条痕、頸部は横方向の条痕があり、その境に半截竹管状の工具による波状文が施される。Ⅲ期に類例が見られる。

(55)は外面に二枚貝によると思われる条痕を残す、いわゆる「朝日形甕」である。口縁部外面が肥厚し、そのもっとも突出した所にかすかな稜が見られる。(56)も同様な甕である。(55)に類似しているが、条痕の特徴や口縁部の形態などから別個体と判断した。(56)は住居の床面から出土している。(55・56)はいずれも胎土中に雲母の小片を含んでいる。

(57)は小片のため器形はわからないが、直立する口縁部を持つ鉢かと思われる。外面に櫛による直線文、縦方向の弧状を呈する文様が施されている。内面および口縁端部の内面側にはミガキが施されている。

(58)は東半の床面直上から出土した小型の鉢である。短く屈折した口縁部を持つ。あまり作りはよくなく、外面にススの付着が顕著である。

これらの遺物は何れも小片ではあるが、条痕文系の受口状口縁壺など、床面から出土した遺物はⅢ期に属すると思われる。

SB06

この住居から出土した土器はあまり多くない。壺の胴部(59)及び(60)を図化した。胴部片は小片であるが、付加沈線研磨手法を持つ。底部は図化部全体が残る比較的遺存度の高いもので、胴部破片と同様、黒味の強い色調に焼成されている。この両者は同一個体の可能性があり、この住居に伴うものと考えらば、Ⅳ期以降の住居ということになる。

溝出土土器

SD03

SD03の西半及び西端から出土した、壺、甕などを図化した。(61)は壺口縁部と思われる。外面端部直下に突帯を貼り付け、指頭による圧痕を施している。内外面にススが付着している。(62)は胴部の小片であるが、縄文とそれを区画する沈線が観察される。明確とはいえないが縄文→沈線であろう。沈線の上位は磨滅しており不明である。(63)は壺底部の比較的大型の破片である。外面はハケメ後ミガキ、内面はハケメで器面を整えている。内面も部分的にミガキ状の痕跡によりハケメが消えている。外面底部付近にはススの付着が認められるが、このススは割れた面にも付着しているように見え、割れた後に熱を受けた可能性がある。比較的大きな破片であるが、全体からみた遺存度は高いとは言えない。

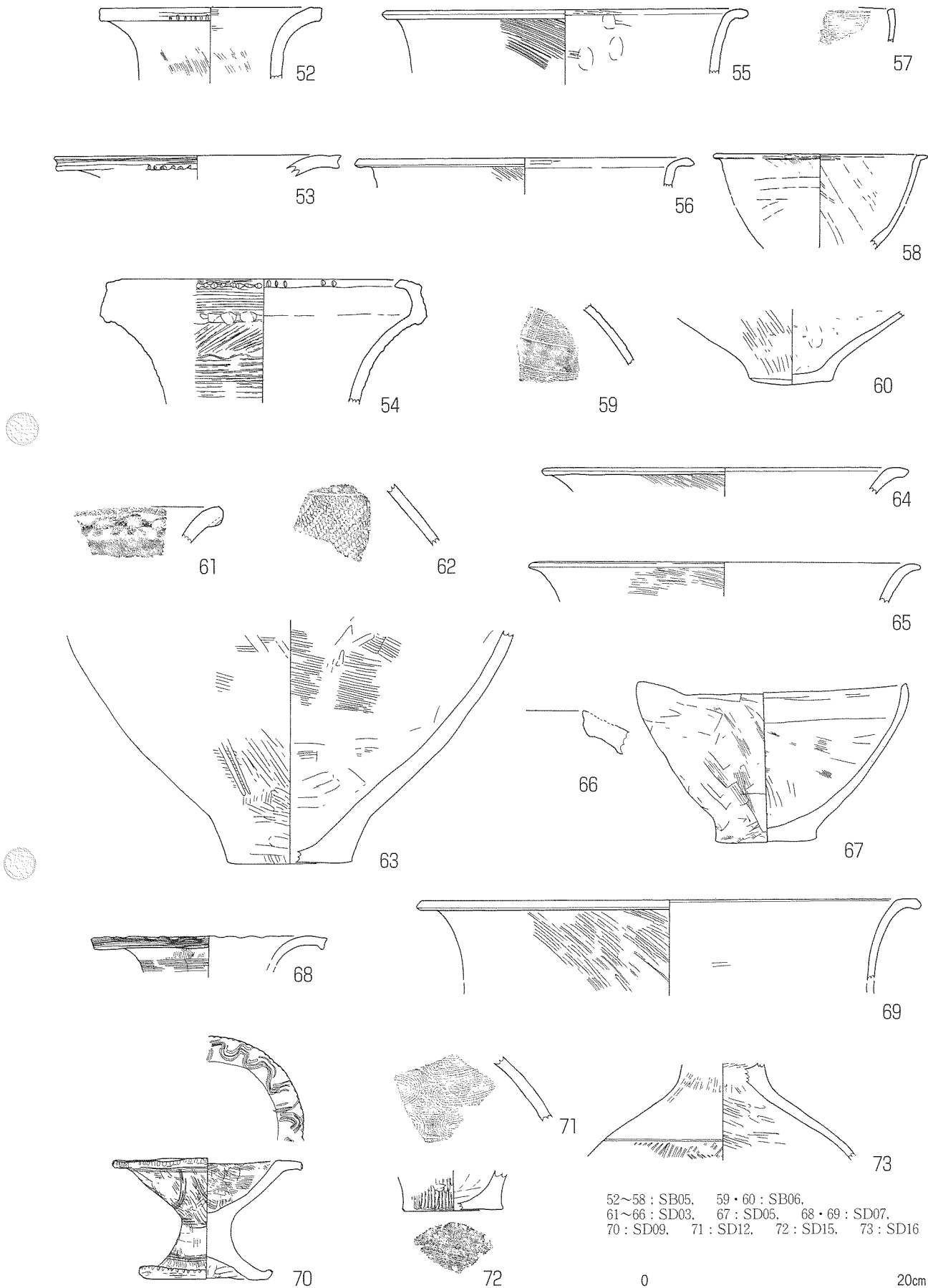
甕(64)は外面二枚貝条痕調整で、口縁端部には面を持つ。端部は下方に肥厚している。頸部から内面にかすかな稜をなして口縁部に至る。胎土中には雲母小片が含まれている。小片のため傾きは不正確である。(65)はSD03西側下位出土の外面二枚貝調整の甕である。口縁端部には幅の狭い面をなしているが、肥厚はしていない。内面は頸部から口縁部にかけてゆるく屈曲している。

(66)は内傾口縁土器である。口縁部は長く、端部にははっきりした面を持つ。外面は剥落しているが、わずかに条痕が確認できる。

これらの土器はSD03の西半から出土している。遺構の所見ではSD03に別の遺構が重複していた可能性が考えられ、これらの遺物はそれに含まれていたものと思われる。時間的にはⅢ期のものが多いが、縄文+沈線を持つ破片はⅣ期以降のものであろうか。

SD05

(67)は鉢である。全体の2/3が残っている。壺の下胴部と同じ形である。口縁部はいくらか波打っており、水平ではない。端部にはヨコナデが施され、胴部は内外ともにハケメによって器面が整えられている。



52~58 : SB05. 59・60 : SB06.
 61~66 : SD03. 67 : SD05. 68・69 : SD07.
 70 : SD09. 71 : SD12. 72 : SD15. 73 : SD16

0 20cm

图 5-7 ク区出土土器(3)

SD07

SZ38の北辺SD07出土土器では、壺の口縁部(68)と甕(69)を図化することができた。壺は口縁端部と頸部に貝殻描直線文が施されている。頸部の文様には、弧状をなす原体の圧痕も明瞭に残っている。口縁部上端には押圧痕が巡る。甕(69)は、口縁部が内面に稜をなして折れ、端部はわずかに下方に肥厚している。外面の調整痕は、部分的に二枚貝条痕のような痕跡もあるが、凹部の幅2～3mmの浅い条線が残っており、二枚貝とは決めかねる。そのほか、図化しなかったものには、ハケメ後に横方向にミガキを施した壺のやや大型の破片、半截竹管状工具で施文した条痕文系の壺片も出土している。口縁部内面に波状文を持つ甕もある。しかし、図化したものも含めていずれも小片のため、この溝に関連した土器とは言い難いものである。

SD09

SD09からは、全体が残る高坏(70)が出土した。罌状の口縁部を持ち、その上面に波状文が施されている。坏部の外面には櫛による直線文、連弧文、脚部には直線文が見られる(写真5-25～27)。坏部内面や脚部内面はユビオサエ、ナデの凹凸を残しており、あまり作りはよくない。想定される方形周溝墓が2基あり、いずれのものとも決められない。Ⅳ期のものであろうか。

SD12

小破片であるが、櫛描流水文を持つ壺胴部片(71)が出土している。小破片のため施文方法は不明であるが、図化した位置では下位の文様が上位の文様を切っている。

SD15

(72)は条痕調整の深鉢底部である。底部外面には布目痕が観察される。小破片のため、この溝に関連したもとはいえない。

SD16

(73)は蓋かと思われる。外面は剥落が顕著だが、内外面ともミガキを行っている。外面には直線文と横位の羽状文が観察される。外面褐灰色に焼成されている。

SD18

SD18からはやや残りのよい土器が出土した。(74)は溝内12b層から出土した外面に縄文を残す壺である。口縁部は欠いているが長頸壺であろう。胴の上位には、内側から押し出した直径5cm程度の突出が2カ所観察できる。沈線による文様と縄文の前後関係が確認できる場所は多くなく、判然としない。ナデ→沈線→縄文の順であろうか。器形の特徴、縄文及び沈線による文様のモチーフは、有東遺跡第16次調査SK05出土資料(岡村1997)など駿河湾地方に類例が求められるであろう。

(75)も12b層から出土した甕である。図の1/4ほど残っており、やや遺存度は高いが溝に関連したものとは決め難い。内外面をハケメ調整している。頸部から緩やかに屈曲して口縁部に至り、口縁端部にはキザミが施される。口縁端部はあまり肥厚しない。雲母が含まれている。そのほか、小片のため図化できなかったが内傾口縁土器の破片と思われるものも出土した。

SD30

(76)は外面条痕調整の深鉢である。条痕を施した後、口縁部付近のみ粘土を付加しているため、その付加粘土が剥離した部分にも条痕が観察される。小片である。

SD35

SD35から出土した土器は小片ばかりだが、壺胴部(77)と条痕文系深鉢底部(78)を図化した。壺の胴部片はミガキ帯の下位に、二条の沈線にはさまれた圧痕帯が観察できる。圧痕は原体は不明であるが、長さ5mm程度の短い沈線状と直径1mm程度の円形の圧痕が連続する部分が観察される。(78)の深鉢底部も遺存しているのは底部のみである。底部外面には布目の圧痕が明瞭に残っている。SD35はSZ37、SZX29それぞれの一辺をなす可能性があるが、出土した土器は本来この溝に関連した土器とは言い難く、溝の時期を決めることはできない。

SD36

SD36から出土した壺底部(79)を図化した。外面は横方向にミガキ、内面はナデ、ヘラナデで調整している。底部外面は平滑な部分が多く、ヘラ状工具によるナデと思われるが、砂粒の動きも認められる。

SD45

SD45からは残りのよい土器が出土している。これらの土器は出土位置によって大きく二分できる。溝の北よりから出土した(80・81)と溝の南部から出土した(82・83)である。遺構の所見からは、前者はSD45がその東辺をなすSZ42に関連したものの可能性が高いのに対し、後者はSD45の埋土を掘削して築かれたSZ43を構成する溝に伴う可能性が考えられる。

(80)は北部土器Cとされた細頸壺である。口縁端部と胴部の一部を欠くが、ほぼ全体が残っている。外面は全体が黒色を呈している。頸部には直線文が巡る。胴部には、付加沈線を持つ直線文帯が8段あり、その間はヘラミガキが施されている。下位の櫛描文はあまり明瞭ではなく、器面調整のハケメの痕跡が明瞭に観察される。(81)は北部の土器Bとされた壺の胴部である。下胴部のみほぼ残存している。下胴部は球形を呈している。外面はハケメの後ミガキが施されている。文様は下胴部をヘラミガキした後に、2条の沈線によって描かれている。上胴部を欠くため文様のモチーフはわからないが、沈線の後、その内部をヘラミガキしている。内面には粘土の接合に伴う段が2段残るが、確実な擬口縁は観察できない。底部は突出し、外面には葉脈のようにも見える沈線が観察される。

(82)はD地点から出土した細頸壺である。この土器も残りがよく、底部付近を欠くのみでほぼ全体が復元できる。外面はにぶい褐色をしている。下胴部があまり強くは張らない器形である。口縁部は受口状をなし、文様は施されていない。胴部はハケメの後、沈線が6条施され、この沈線間の2、4段目にあまり密とはいえないミガキが施される。また最下段の沈線下の胴部最大径部分にもミガキが施されている。それ以外はハケメが残っている。内面は下胴部の稜の部分までハケメが施され、稜の上位はナデによっている。(83)は土器Eとされた細頸壺である。口縁部はまったく欠いているが、胴部の6割ほどが残存している。下胴部の強く張る器形で、その最大径の部分に剥離面があるものと思われる。外面は斜めのハケメで整えたのち、直線文を施し、それに重ねて弧状の文様を描いている。そして直線文の上下に付加沈線を施し、直線文間をヘラミガキする、いわゆる付加沈線研磨手法である。直線文帯は観察できるだけで7段あり、かなり多条である。底部外面は斜めのヘラミガキを反時計回りに連続する。外面は褐灰色から黒褐色を呈する。

これらの土器群は、出土状況では二群に分けられる。いずれにも付加沈線研磨手法、多段化した文様帯を持つ黒褐色焼成の細頸壺が含まれているが、南の土器群では(82)のように、櫛描文が失われ、沈線とミガキ帯によるものがある。この点から見ると、南の土器群が相対的に後出である可能性は高く、遺構の所

見とは矛盾しない。しかし、いずれの土器群も朝日V期に比定することができるだろう。

SD47

SD47からは残りのよい細頸壺(84)が1点出土したほか、多くの弥生土器片が出土した。後者の多くは、遺構としては土器群6(SD47東南肩土器群)とされているものである。一方、細頸壺は、SD47埋没後に、埋土を掘削して築かれた周溝墓SZ43に伴うものであったと見られる。

周溝墓に伴う(84)は法量の比較的小さな細頸壺である。口縁部は外側にやや幅広い面をなし、受口状になっている。胴部は下位が強く張る器形で、その最大径の部分に成形中の乾燥工程を示す剥離面がある。胴部文様は櫛描直線文間をヘラミガキしており、付加沈線は見られない。V期のものと見てよいだろう。

これ以外の(85~90)は小破片である。(85)は口径37.8cmを測る大型の壺口縁部である。口縁端面の上端と下端に押圧が施されている。端面と頸部に直線文が施されている。口縁部外面は横方向に粗いハケメの後、斜めにハケメ、さらにその上に部分的にミガキを行っている。(86)は下層の黒色シルトから出土した壺の口縁部片である。口縁端部にはキザミが施され、わずかに下方に膨らんでいる。胎土中には雲母の小片が見られる。頸部には6条単位の櫛描直線文が3段観察できる。なお、この個体の破片はSD60の下層から出土した破片と接合した。

(87)は頸部に櫛描文が施された壺の口縁部である。端部はあまり幅の広くない凹面をなしている。外面は横方向にミガキが施される。(88)は壺の底部である。

(89)は外面を二枚貝条痕で調整する甕の小片である。小片のため、口径は誤差が大きい。口縁端部内側に二枚貝による沈線文が巡っている。口縁部内面は横方向にハケメ調整されている。(90)は条痕文系深鉢である。胴部はあまり膨らみがなく、緩やかに外反する。口縁部付近は横位、胴部は横位羽状の条痕が施されている。口縁端部には押し引きが施される。内面はナデまたはハケメにより細かな条線が残る。ススの付着が顕著である。

これらの破片は、詳細な時期の特定が困難なものであるが、甕の特徴などから見ても(84)より先行することは間違いなく、遺構の所見と矛盾しない。

SD49・50

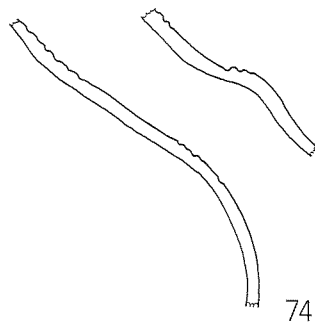
SD49・SD50のどちらに属するか不明であるが内傾口縁土器(91)が出土している。口縁部は比較的長く、外面には貝殻によると思われる条痕が巡っている。端部には内傾する明瞭な面をなす。内面には粘土が剥離した痕跡が観察できる。

SD50

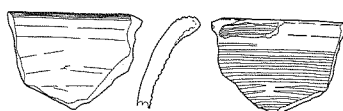
(92)はSD50から出土した甕の底部である。外面はハケメの後ミガキが施されている。底部外面もナデ、ミガキで平滑である。

SD51

壺の胴部(93~95)、底部(96)が出土した。(93)は細頸壺であろう。胴部文様は、沈線と研磨帯。沈線はミガキに先行しているらしい。外面にススが顕著に付着している。櫛描文が失われた文様から見てV期以降のものであろう。(93)は切り合いをもつSD55に属するものの可能性もある。(94・95)は壺胴部であるが、同一個体と思われる。幅4mmほどの棒状の原体によって沈線が描かれている。(96)は壺底部。



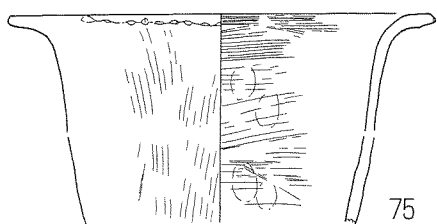
74



76



78



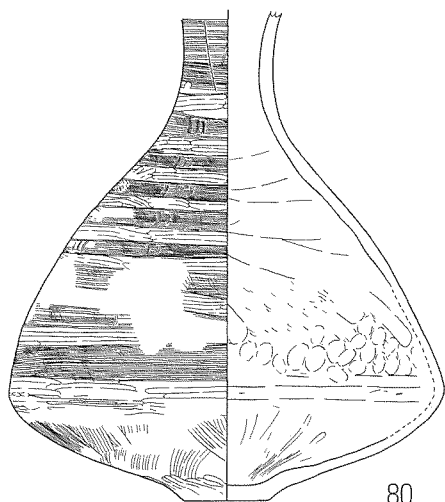
75



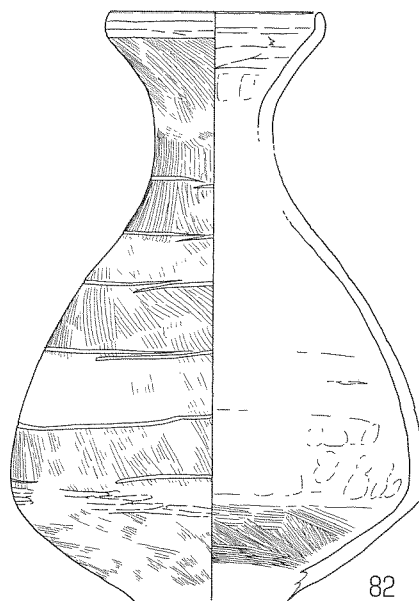
77



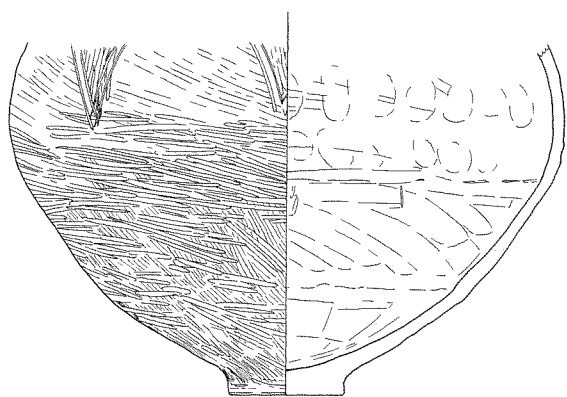
79



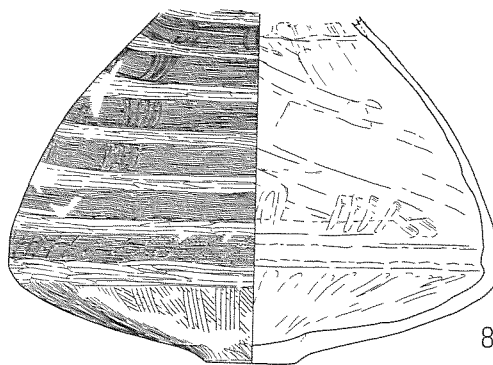
80



82



81



83

74・75: SD18. 76: SD30.
77・78: SD35. 79: SD36.
80~83: SD45

0 20cm

图 5-8 ク区出土土器(4)

SD53

この溝からは、外面が黒褐色に焼成された壺の下胴部片(97)を図化した。図化部の1/2が残っており、破片としては大きいですが、全体から見ると遺存度は高くない。外面は底部付近を縦方向、その上位は横方向に比較的丁寧にミガキで調整している。底部外面もミガキが施されている。

SD60

破片ばかりであるが、出土量が多い。(98)は貝殻描文を持つ壺の口縁部である。口縁部内外面をハケメ調整している。口縁端部はわずかに上方に突出し、端面には波状文が施されている。頸部には貝殻描直線文が施されており、原体の圧痕が確認される。(99)は壺の口縁部である。口縁の端面に直線文が施され、上下端に櫛によると思われる圧痕が施されている。(100)は受口状を呈する口縁の条痕文系壺である。口縁部外面と頸部外面に二枚貝による直線文が観察される。小破片である。その他、頸部に二枚貝による直線文を持つ壺も出土しているが、小片であり図化していない。これらの遺物は何れも小破片であり、本来溝に関連した土器であると考えるのは難しい。これらの土器片の中には二枚貝施文のものが比較的目立ち、Ⅲ期の土器であると思われるが、これがそのまま溝の時期を示しているとは言えない。なお、この遺構から出土した壺口縁部の破片が、SD47出土の破片と接合したが、SD47のところで記述した(86)。

SD62

SD62からは比較的残りのよい壺(101)が出土したほか、壺口縁部、甕など比較的多くの遺物が図化できた。(101~103)は遺構の南半部上層から出土し、(104)は南半だけでなく、北半からも破片が出土している。

(101)は櫛描文系の壺である。口縁および底部を欠いているが、胴部の2/3ほどが残り、遺存度は高い。外面全体が黒色に焼成されている。外面はハケメ調整の後、6条、7条の櫛によって直線文を描く。直線文上に施された弧線は3条である。付加沈線はない。その後直線文間に部分的にミガキを行うが、疎らなため、ハケメが残る部分が多い。下胴部外面には成形の際にはみ出した粘土が段をなしているが、明瞭な剥離面は観察できない。その段の直下には砂粒の動きが見られ、ヘラケズリが行われているようである。

(102・103)は櫛描文系壺の口縁部である。(102)の口縁端部には面があり、波状文が施されている。口縁端部は粘土が下方にはみ出し、肥厚しているいるが調整されていない。(103)は口縁部直下から頸部に直線文が巡る。口縁端部に幅広い面をなし、櫛による圧痕が施されている。小片である。

(104)の甕は、頸部からゆるく屈曲して口縁部に至る器形である。外面および内面口縁部はハケメによって調整されている。このハケメは、凹部の幅が広く、二枚貝条痕の可能性もあるが、原体の圧痕が直線的であるためハケメと考えた。口縁端部には同様な原体によるキザミが施される。口縁部内面には横方向の粗いハケメが施されている。口縁部の内外面とも端部直下までハケメが残っており、ヨコナデは施されていないようである。

SD66

SD66からは比較的多くの土器片が出土した。(105・106)は壺の口縁部である。(105)は南半の下層から出土した。口縁部の1/4程度の破片である。口縁端面と頸部に貝殻描文が施されている。明瞭な圧痕は観察できないが、直線文のわずかな屈曲部の痕跡が弧状になることから、原体を二枚貝と判断した。頸部の文様は、重なりがある部分では左側が上になるよう重なっている。上下の施文の前後関係は一様ではない。口縁端部にはヨコナデが施されており、内面は端部直下がわずかに凹んでいる。(106)は北半の下層から出

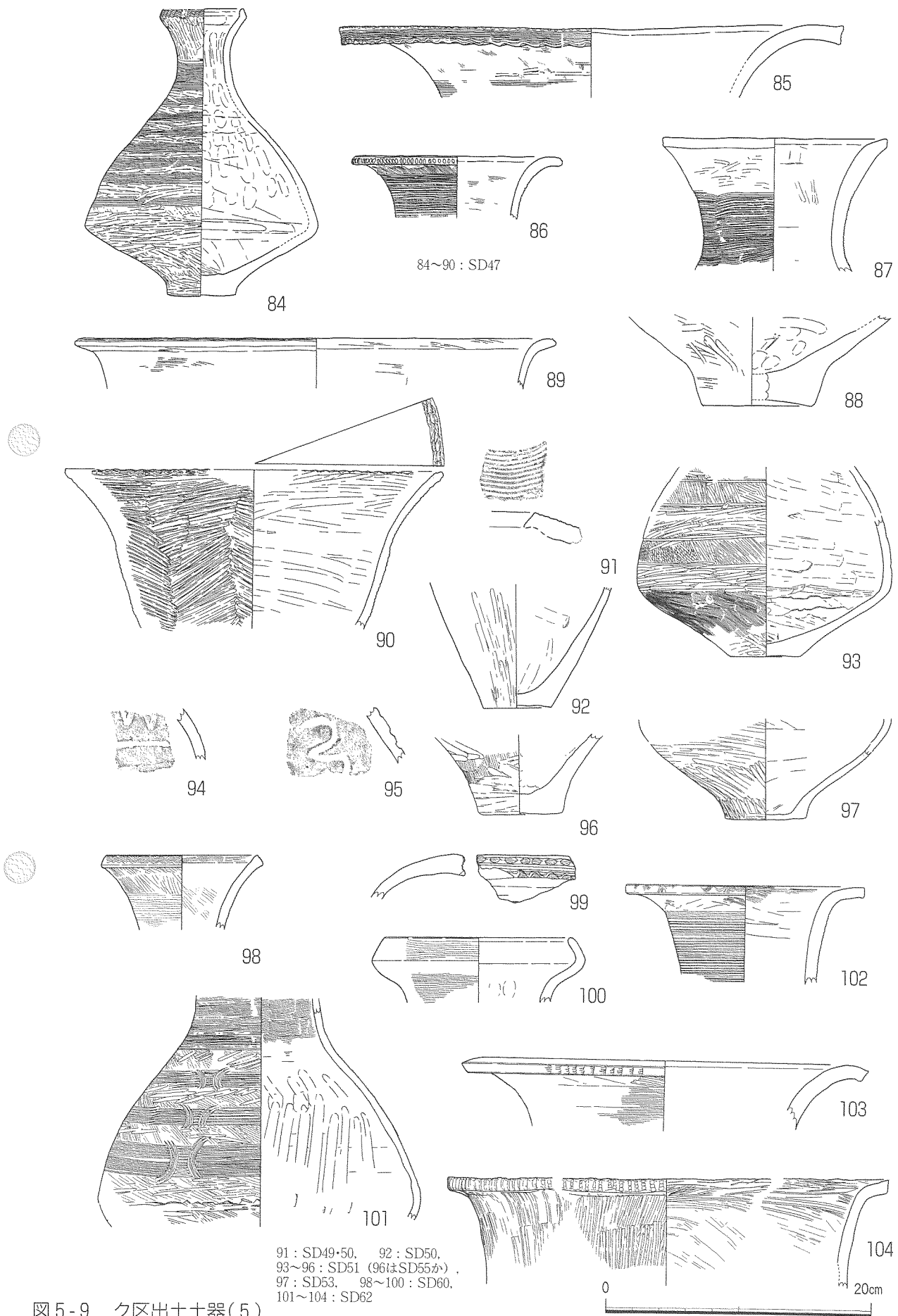


図5-9 夕区出土土器(5)

土した。口縁端面と頸部に貝殻描文が施されている。下層からの出土ではあるが、口縁部が1/5程度残るのみで、この遺構に関連のある遺物とは決めかねる。(107)は甕の底部である。外面は縦方向のハケメ調整がなされている。

SD66から出土した土器も残り具合は必ずしも高いとは言えず、本来この溝に関連した土器とは決め難いものである。

SD67

この遺構からは遺存状態のよい甕が2個体以上出土した。(108)は外面二枚貝条痕調整の甕である。底部と胴部以上が接合できないが、同一個体と見られる。ほぼ全体が残っており、この溝に伴う遺物と判断する。外面は上位が二枚貝条痕、下位は丁寧なヘラミガキが施されている。底部外面にもヘラミガキが施されている。口縁部は内面に比較的はっきり稜をなして屈折する。端部はヨコナデが施されており、外面の条痕が消えている。端部はごくわずかに下側が膨らむが、明瞭には肥厚しない。口縁端部の2カ所に圧痕が施される。外底面はケズリ状の痕跡の上にミガキが施されている。(109~112)も外面二枚貝条痕調整の甕である。接合できず、復元される口径や端部の形状がいくらか異なるため別個体として実測したが、この内のいくつかは同一個体の可能性が高い。何れも胴部からゆるく屈曲して口縁部にいたる。(111・112)は口縁端部がほとんど肥厚しないのに対し、(109・110)は丸く肥厚し、段をなしている。器面の調整はいずれも外面二枚貝条痕、内面横方向にハケメである。すべての破片が胎土中に雲母片を含んでいる。(113)は甕の底部である。外面は斜めのハケの後ミガキを行っている。外面は胴部下端付近に薄くススが付着し、内面は底部が炭化物により黒くなっている。上述した甕のいずれかと同一個体の可能性がある。

そのほかには壺の口縁部や櫛描文をもつ壺胴部が出土しているが、小破片であり、上述の甕とは性格の異なる遺物と見るべきであろう。これらのいわゆる「朝日形甕」は、これだけで編年的な位置を決めるのは難しいが、Ⅲ~Ⅳ期に比定できる。

SK01

弥生土器の小片が少量出土した。いずれも小片で、まとまったの出土でもないため、本来この遺構に関連したものとはいえない。しかし、この遺構から出土した銅鐸鑄型の時期を考える上で重要なため、幾らか詳しく述べる。(114)は壺の口縁小片である。口縁端部は下方に突出する面をなし、そこに二枚貝によると思われる条線が施されている。内面はミガキと思われる。(115)は外面二枚貝条痕によって調整する甕の口縁部片である。頸部から緩やかに屈曲して口縁部にいたる。口縁の端部には外傾する面をなし、端部直下に一条の沈線がある。その他は外面条痕調整の深鉢胴部片、ハケメ調整の甕胴部片、壺胴部と思われるハケメのある小破片などが出土したが、何れも図化しなかった(写真5-38)。(114)はⅢ期、(115)はⅢ期ないしはⅣ期の土器の特徴を示す。その他の破片を見ると、積極的にⅣ期以降に比定できるような破片はなく、出土土器はⅢ期と見てよいだろう。これらの土器片は、何れも本来この遺構に関連したものではなく、遺構埋没時に共に埋まったものと思われ、周辺に存在した竪穴住居や土器群の遺物に由来するものと見られる。

SK06

SK06出土の土器は破片ばかりであるが、次の土器を図化した。(116)は壺の口縁部。口縁端部は幅広い面をなし、端部の上下に指頭による押圧が施されている。(117)は櫛描文を持つ壺の胴部である。各条線の幅が広く、貝殻描のようにも見える。櫛描文を区画する沈線間にはミガキが施されている。(118)は壺の底

部である。外面はハケメ後ミガキ、内面はナデ、ユビオサエで調整している。

(119)は外面二枚貝条痕調整の甕である。頸部から口縁部にかけて、内面は比較的明瞭に外折している。口縁端部は丸く、あまり肥厚していないが、外面端部直下に一条の沈線が巡っている。(120)は条痕調整の深鉢の底部である。(121)は外面条痕調整の深鉢である。底部外面には木葉痕が残る。

何れも小破片のため、時期もはっきり決め難いが、Ⅲ～Ⅳ期のものであろう。

SK09

SK09からは外面条痕調整の深鉢底部(122)が出土した。条痕は横方向に施される。内面はハケメ状の条線が残っている。下胴部のみであるが、図化部の2/3ほどが残り、比較的遺存度は高い。

SK09・11

調査区南壁際にある土坑から出土したが、SK09と11のどちらに属するかはわからない土器である。

(123)は櫛描文系の壺胴部片である。櫛描直線文と弧線文が施される。直線文の最上位は凹部の断面形が他と異なっているように見えるが、付加沈線とは決めかねる。(124)は条痕文系の壺胴部小片である。条痕の後に貼り付けられた突帯上には二枚貝の殻頂部による圧痕が施されている。この痕跡に関しては、後掲の深澤・永井氏による論考(付論4)を参照いただきたい。(125)は外面二枚貝条痕調整の甕口縁部である。外面は条痕に先立って縦方向のハケメがなされる。胴部から頸部内面がやや鋭く折れて短い口縁部にいたる。口縁端部に一カ所所半円形の圧痕が観察される。

SK12

中央底面から出土した壺頸部(126)を図化した。外面には二枚貝または櫛によると思われる直線文が施されている。文様の最下端にはわずかな段差が見られる。胎土中に雲母が含まれている。破片は大きいとはいえないが、底面からの出土であり、この遺構に伴うもの可能性もあろう。

ピット

ピットの内、竪穴住居に関連するものはすでに述べた。そのほかでは図化できた遺物は少ない。ピット出土遺物は一覧を参照して頂きたい。

P121

ハケメ調整の甕(127)が出土した。図化した部分の1/5ほどが残っている。胴部からゆるく屈曲して口縁部に至る。端部は丸く、へら状の工具により、キザミが施される。雲母の小片が目立つ。

SB01周辺土器群

(128～131)は貝殻描文、櫛描文を持つⅠ系の壺口縁部である。何れも小さな破片である。(128)は口縁端面と頸部に貝殻描と思われる直線文が巡っている。口縁端面の上下端には押圧が施されている。(129)は口縁部に幅広い面をなす。端面の下端には櫛によるキザミが施される。上端はやや磨滅してはっきりしないが、縦方向の短い条線が観察され、キザミが施された可能性がある。頸部には櫛直線文が観察される。(130)は頸部がまっすぐ立ち上がり、緩やかに外反して口縁部にいたる。頸部外面には、縦方向のハケメの後、櫛による直線文が施されている。内面はハケメ調整である。(131)の口縁には幅広い面があり、下方に突出する。口縁端部付近にはヨコナデが施され、端面には櫛描波状文が巡る。頸部には直線文が観察される。

(132)は壺の胴部である。断面を図化した部分の半分程度は残っており、胴部最大径は50cm程度と復元できる。内外面とも器面は平滑に整えられている。貼付突帯が残存部だけで1条+3条巡っている。上段の

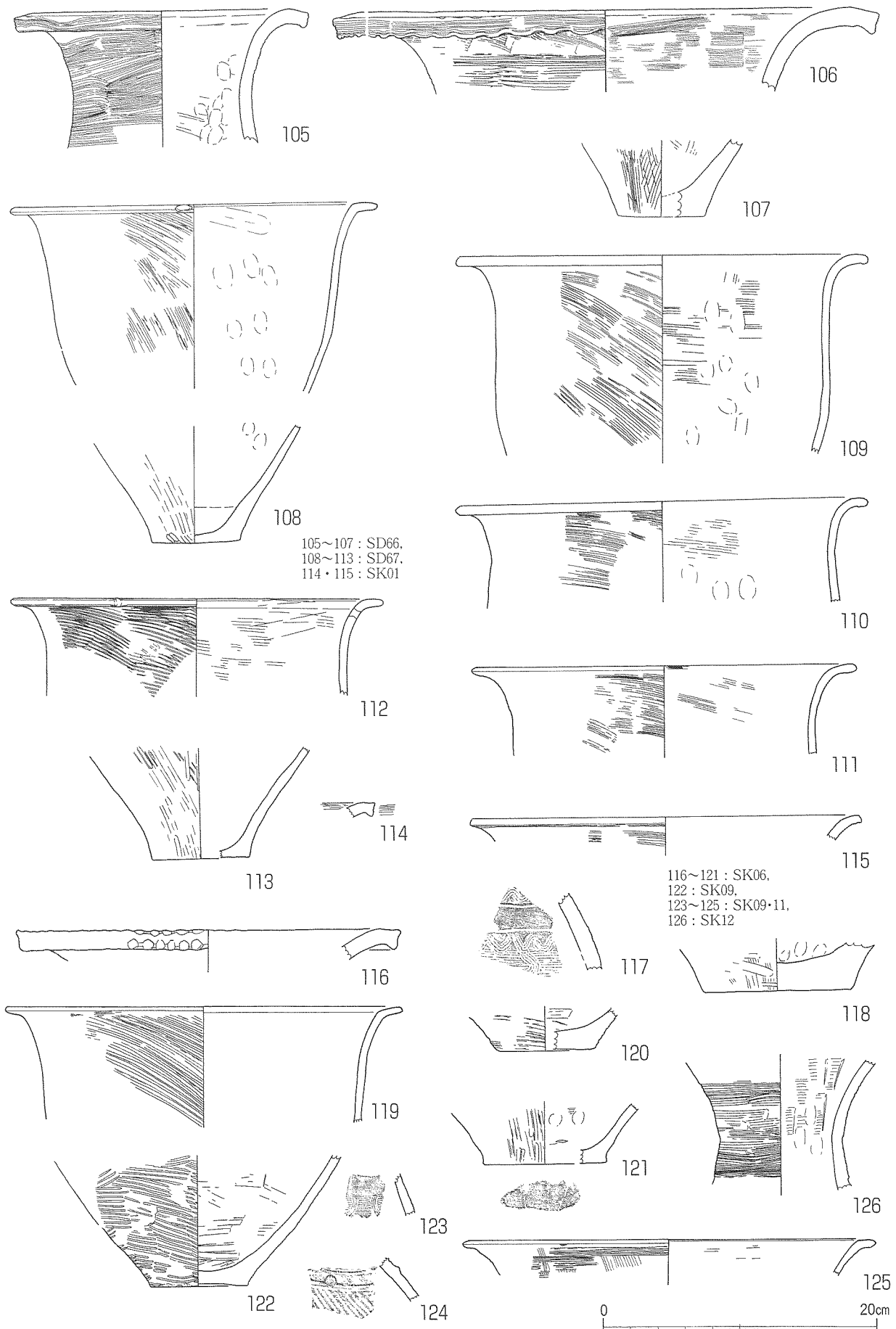


図5-10 ク区出土土器(6)

突帯及び下段の最下端の突帯にはU字形の垂下部が3ないしは4方向にあると思われる。また、これら以外の突帯上には、二枚貝の殻頂付近と見られる圧痕が連続しているが、垂下部のある突帯には、原体は特定し難いが、異なった痕跡が観察される。(133)は条痕文系壺の胴部上位である。頸部付近にはハネアゲ文、その下位には直線文が施されている。比較的大きな破片である。

(134)は全体の残る鉢である。口縁部は短く屈折している。口縁部には4カ所押圧が施される。外面はハケメによって整えた後、底部付近のみ縦方向にミガキを行っている。底面もミガキがなされているらしく、平滑である。内面はイタナデ状の細かな条線が残っているほか、ユビオサエ、ナデによって調整されている。甕の底部付近と同様な作りである。

(135・136)は外面に二枚貝条痕らしい調整が施された甕である。(135)は口縁端部を四角く作っている部分があり、下方に突出している。1カ所押圧が確認できる。頸部から口縁へは内面にごくかすかな稜をなして屈曲する。(136)は頸部から内面に比較的明瞭な稜をもって屈折し口縁部にいたる。端部は丸く、肥厚や突出は見られない。(137)は磨滅が進み、器面の調整はよくわからない。胴部からゆるく屈曲して口縁部にいたる。口縁端部はわずかに下方に膨らんでいる。1カ所押圧痕が確認できる。

(138)は甕の口縁部小片である。端部はヨコナデによって四角く作っている。外面は縦ハケメ後頸部に横方向の調整、内面は横ハケメが施されている。(139)はハケメ調整の甕。端部にキザミが施される。(140・141)も外面ハケメ調整の甕である。頸部がはっきりせず、胴部から緩やかに外反して口縁端部に至る。(142)は条痕文系深鉢の底部片である。底部外面には布目痕が明瞭である。ススが付着し黒褐色を呈する。

これらの土器は、SB01及びSB02の範囲から出土しているが、各土器と遺構との関係、土器相互の関係がはっきりしないため、この土器群の評価は難しく、時間的な位置付けにも困難が伴う。しかし、Ⅳ期以降に下げる根拠はなく、多くの土器がⅢ期のものと見てよいだろう。

土器群 1 (9F5a北壁土器)

(143)は北壁Bの甕である。図化部の2/3程度が残っており、比較的遺存度合いは高い。内外面ともに顕著にススが付着し、被熱のためか器面の剥落が進んでいる。口縁部は胴部からゆるく屈曲し、端部は丸い。部分的に肥厚している。胴部外面はハケメ、内面が口縁部はハケメ、その下位はナデである。胎土中に雲母の小片を含んでいる。

土器群 2 (9F5a北壁土器群西)

図化できたものはいずれも小片である。(144)は高坏の坏部であろうか。口縁部付近は器面が剥離しているため、正確な器形は不明であるが、口縁部は屈折して上側に面をなしているようである。端部付近に指頭圧痕が施される。(145)は甕口縁部である。端部は上位に稜があり、その下位に丸みを帯びた面をなす。下側に少し肥厚する。押圧が1カ所確認できる。外面はナナメのハケの後、二枚貝条痕が施される。

(146)は外面二枚貝調整の深鉢の小片である。外面の条痕は縦方向である。口縁部内面に二枚貝による沈線が施されている。

土器群 3 (9F5b北壁土器群)

この土器群からは、甕及び深鉢が3個体出土した。あまり接合できず、全体がわかるものはないが、それぞれの破片は比較的大きく、何らかの遺構に伴うものの可能性があるだろう。

(147)は外面二枚貝条痕調整の甕である。条痕は口縁部付近ではほぼ水平方向、胴部ではわずかに左上が

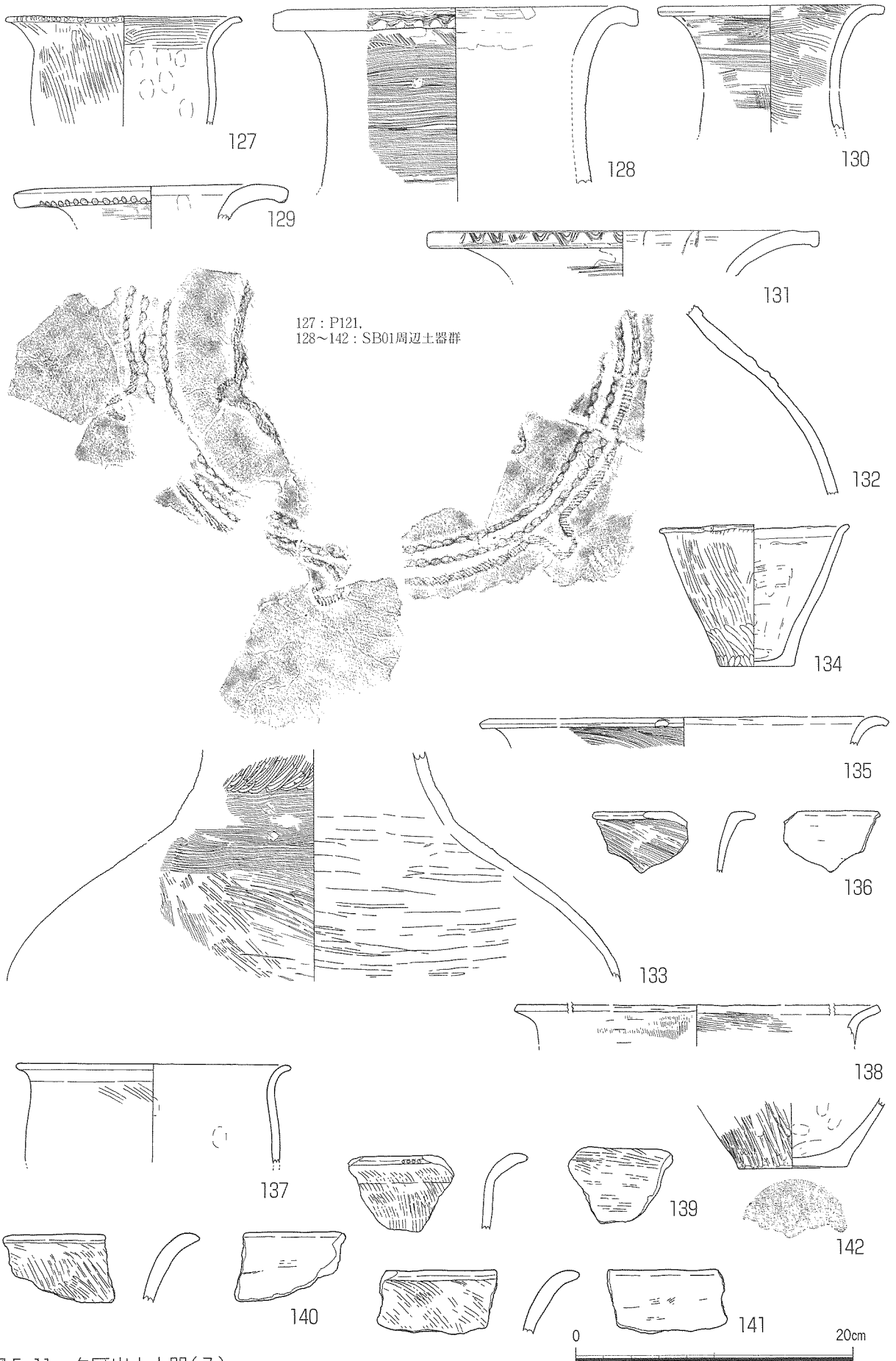


図5-11 ク区出土土器(7)

りに施される。頸部内面に、にぶい稜をなして口縁部に至る。口縁部は下方に肥厚しており、外面は条痕の上端部分で段差が生じている。

(148)は外面二枚貝条痕調整の深鉢である。口縁部付近のみ短く外折し、端部は外傾する面をなす。その面にヘラ状の工具で圧痕が付けられている。外面の条痕はそれぞれ左上がりに施され、施す順も左上がりの場合が多い。(149)は外面二枚貝条痕の深鉢。胴部から緩やかに外反して口縁部に至る。口縁部には外傾する幅広い面をなし、二枚貝による直線が施される。口縁部内面の端部直下が凹み、端部が突出している。

甕、深鉢のみで、時間的な位置づけが難しいがⅢ～Ⅳ期のものと見られる。

土器群 4 (9F5d東壁土器群)

(150)の甕を図化した。接合できなかった破片を含めて口縁部は全体の1/4以上あり、残りは比較的よい。外面ハケメ調整の甕である。口縁部は水平ではなく、ゆるい波状をなしている部分がある。端部には櫛によるキザミが1カ所3個確認できる。胴部の膨らみはなく、頸部の締めりもない。

土器群 5 (9F4d～4e土器群)

(151)は壺口縁部の小破片である。口縁端部外面に粘土を付加した後、そこにキザミを施している。

遺構に属さない土器 包含層等

ク区の包含層の土器では次のものを図化した。(152・153)はSD62付近で出土した。(152)は貝殻描文を持つ太頸壺である。口縁部内面に2個1対の突起がある。口縁の端部は幅広い面をなし、その面に波状文が描かれている。内外面ともハケメで調整しており、その後口縁部から頸部外面に二枚貝による直線文を施す。二枚貝と思われる湾曲した原体の静止痕が数カ所で確認できる。また、頸部内面はハケメ後ナデが施される。(153)は外面にミガキの痕跡を残す甕の底部である。外底面にもミガキが施され、平滑に整えられている。

(155)はSD60の周辺で出土した、粗いハケメ調整の甕である。外面は縦方向、口縁部内面は横方向の粗いハケメによって器面調整されている。口縁端部は四角く作っており、櫛による刺突が施されている。

包含層出土の内傾口縁土器、厚口鉢は3個体図化できた。(156)はク区の中央付近の黒色包含層から出土した破片である。口縁部はあまり厚くならず、やや長いようである。口縁端部には面をなす。口縁部内面は調整が施されず、粘土の継ぎ目が明瞭に残っている。(157)は9F6cグリッドから出土した破片である。口縁部はやや厚い。端部にはヨコナデによって比較的明瞭な面がある。体部と口縁部の境には成形の際の剥離面が観察される。厚口鉢(158)は9E7iグリッド、9E6hグリッドのそれぞれ包含層から出土したものが接合した。口縁は厚く、短い。外面には斜めの条痕がかすかに残る。端部は丸く、面はなさない。体部と口縁部の接合部には剥離面が観察される。外面にはススが付着している。

(159)は蓋の天井部付近と思われる。天井部に2方向の穿孔が観察される。(160)は器種不明の口縁部である。山形の突出部で、中央に穿孔が認められる。孔の周りは幾らか磨滅しており、紐をかけた可能性もある。

なお、ク区では他の調査区に比べて包含層出土土器が極めて多い。後述するとおり、溝や土坑内から出土する小破片は、これらの包含層扱いで取り上げた土器と近い関係にあるものと思われる。また、遺構の検出が難しい地点では、遺構のものでも包含層として取り上げている場合もありえよう。そうした点を勘案し、最後に包含層扱いの土器について概観しておく。

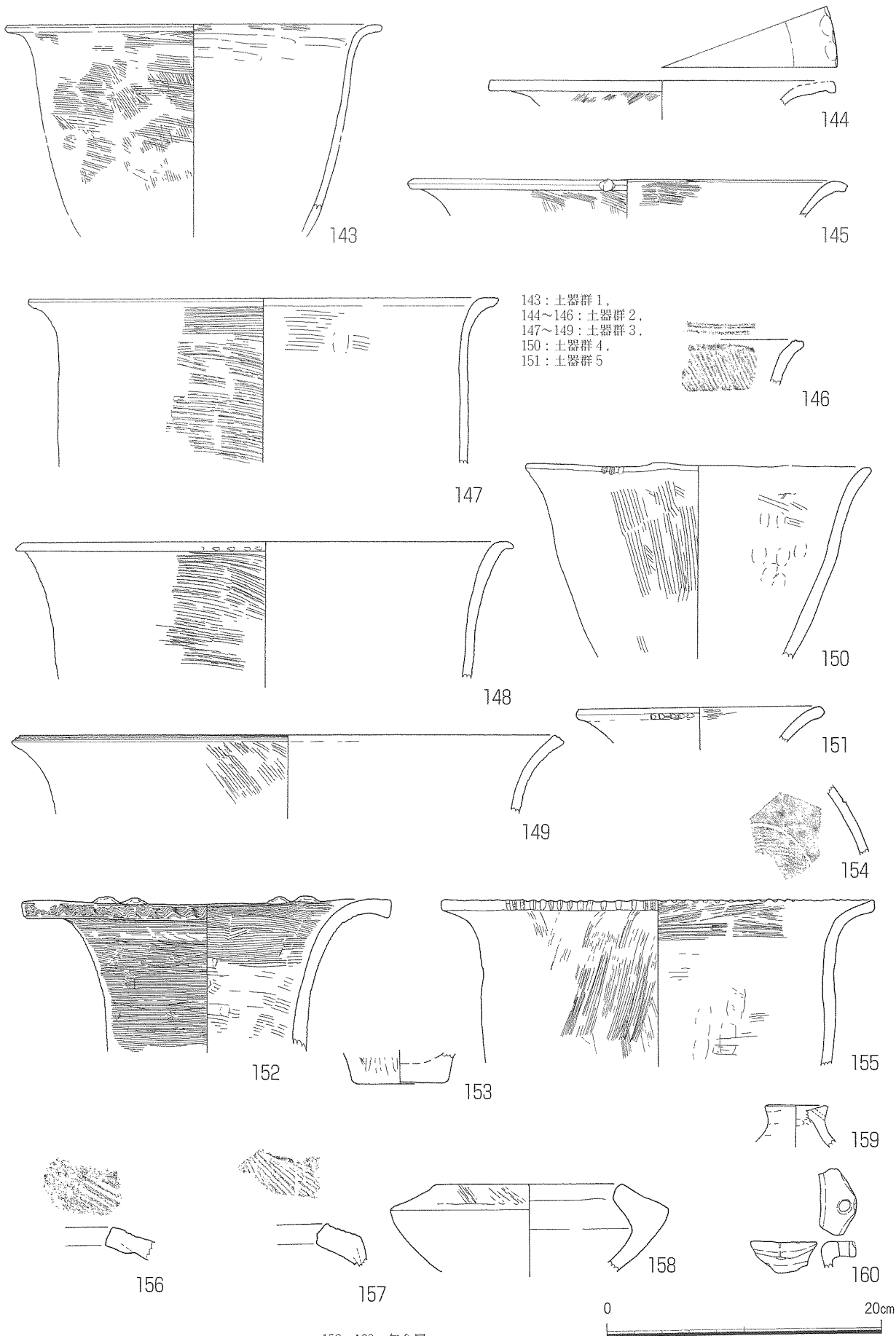


図 5-12 ク区出土土器(8)

ク区の東部にあたる9E区のg列、h列では、包含層の遺物は少ない。北東部の9E4hから、口縁端部に貝殻と思われる圧痕のある甕や櫛描文のある壺頸部が出土している程度で、小片が多い。包含層遺物の時期は特定しがたい。SB01に近い6hではやや遺物量が多く、破片も大きい。

中央部の9E区i、j列では、包含層扱いで取り上げた土器の量は多い。北よりの5jでは比較的大きな土器片がある。「朝日形甕」や半截竹管状の工具で施文した条痕文系壺など、Ⅲ期に比定できるものが多い。その南の6i、7i、6j、7jの遺物量も多い。これらは、付近で検出されたSB01、02などと共通する土器が大半であるが、ハケメ帯とミガキ帯が多段に施されたV期以降の遺物も若干含まれている。

ク区中央の9Fa～d列でも遺物量は多い。5bグリッドでは住居などの遺構は確認されていないが、土器の量はかなり多く、破片もやや大きい。貝殻描文を持つ壺の破片や、二枚貝条痕調整の甕、条痕調整の深鉢、内傾口縁土器の小片などが見られ、竪穴住居出土資料などと共通の特徴が見られる。

ク区の西端e、f列ではあまり量的には多くない。二枚貝条痕調整の甕などが出土している。

3 小 結

以上まで、13・14次調査で出土した弥生土器について報告した。最後に簡単なまとめを行っておく。ここで報告した土器のうち、遺構と関連し、数量的にもある程度まとまった資料は限られている。これを満たし、検討可能なのは、竪穴住居跡出土の資料、方形周溝墓を構成する溝資料の一部である。SB01周辺土器群は同時性の確認できないものであり、扱いが難しいが、SB01、02のいずれかに関わるものであろう。

方形周溝墓出土のものでは、その遺存状態から、本来周溝墓に関連する土器（ここでは供献されたのか否かといった関連の仕方は問わない）とみなしえるものと、溝が埋まる時に周辺から流入した、遺構とは直接関連しないものがあると判断される。遺構との関連を考える上では、前者のみが対象となる。報告の中でも記述したが、方形周溝墓、出土土器との関連は次のようにまとめられる。

エ区SD30（土器12）→SZ18（朝日Ⅲ期） オ区SD01（土器16）→SZ28（朝日V期） キ区SD01（土器17）→SZ34（朝日Ⅲ～Ⅳ期） ク区SD45北部土器（土器80・81）→SZ42（朝日V期） ク区SD45南部土器（土器82・83）→SZ43（朝日V期） ク区SD47（土器84）→SZ43（朝日V期）

ク区SD45出土の土器82、83とSD47出土の土器84は、同一周溝墓（SZ43）に伴う土器の可能性が高い。それぞれの項で述べた特徴から見て、これらが同時期のものであっても不都合はない。その他、残りのよい甕が出土したSD67も方形周溝墓の溝の可能性もあるが、復元できていない。

まず、これらの資料の時間的な位置付けをまとめておこう。竪穴住居の内、SB06では褐灰色に焼成された壺の底部と、同様な色調を呈する付加沈線を持つ壺破片の存在から見てⅣ期以降の可能性が考えられる。しかし、小片のため確実とは言い難い。それ以外の住居出土資料及びSB01周辺土器群の資料は、壺における二枚貝施文、条痕文系土器の特徴などから見てⅢ期～Ⅳ期初めに属している。SB01とSB02は重なりがあるらしく、遺構としては同時には存在し得ない。しかし、SB02の出土土器は限られており、土器の前後関係を判断するのは難しい。土器から見る限り、大きな時間的な隔たりは認めがたく、朝日Ⅲ期からⅣ期初めの間に連続的に居住されたと推測される。

一方、方形周溝墓を構成する溝の出土遺物では、エ区のSZ18のように、Ⅲ期に比定できるものがある。竪穴住居に近接するク区の方形周溝墓では、確実なものに限れば、その出土遺物は細頸壺の特徴から明ら

かなようにⅤ期を中心としている。Ⅲ区では、Ⅲ期～Ⅳ期初めに住居が営まれた後、しばらく遺構は築かれず、Ⅴ期になって方形周溝墓が築かれたと見られる。ただし、Ⅲ区においても、SD67からは「朝日形甕」ばかりが出土し、この溝はⅢ期ないしはⅣ期に属する可能性がある。現時点ではこの溝が方形周溝墓を構成するという証拠は得られていないが、この溝の評価によっては、今述べた、土器から見た遺構の時間的変遷はいくらか変更の余地がある。

こうした遺構の時間的変遷から見ると、方形周溝墓の溝から出土した、その遺構とは直接関わらない土器片は、多くがⅢ期に属することからもわかるとおり、堅穴住居や住居周辺の土器群に由来するものの可能性が高い。包含層扱いで取り上げた土器も多くがⅢ期からⅣ期初めのものであり、Ⅴ期以降の遺物は少ない。これは方形周溝墓に由来する土器の量が、堅穴住居に由来するものと比べて少ないだけでなく、絶対量が少ないことによるのであろう。こうした状況は、本調査における重要な問題の一つであるⅢ区SK01の時間的な位置付けに際しても考慮を必要とする。すでに述べた通り、この土坑から出土した土器はすべて小破片であり、本来この土坑と関連のある遺物ではない。土坑が埋まるとき一緒に埋まったと考えるべきものである。この遺構の土器はⅢ期に属するものが多く、それ以降に積極的に位置付けられるものはない。それゆえ土坑がⅢ期のうちに埋まった可能性は高く、銅鐸鑄型の時期を決める根拠となろう。しかし、同時に、上述の状況も念頭におくべきであろう。

次に遺構から出土した土器の構成についても簡単に触れておく。SB01ではⅠ系の甕、壺、Ⅱ系の深鉢、壺がそれぞれ出土した。これらは住居での土器の構成の一端を示していると思われるが、Ⅰ系及びⅡ系が相半ばしている。隣のSB02では壺が多いが、中でもⅡ系の壺が目立つ。SB01に次いで出土量の多いSB04ではⅠ系の壺、甕が主体を占めており、2基の炉に敷かれていた壺、甕は何れもⅠ系のものであった。この時期には、ひとつの遺構内から多系統の土器が出土するのが極めて一般的ではあるが、その中でも器種毎の構成比には住居毎に何らかの違いがあるようにも思われる。今回の資料は、堅穴住居出土の資料であり、遺構の性格が明らかでないため、そうした構成を考えていく上で重要なものとなろう。

方形周溝墓に伴う土器は少なく、構成を論ずるには至らない。SD18出土の壺(74)のような遠隔地からもたらされたと思われるものが注意される程度である。

今回の土器資料は、これまでの朝日遺跡の調査では必ずしも良好な資料が得られていない朝日Ⅲ期の良い資料となった。しかし、本報告においては、その詳細な時間的な位置付けを行うことはできなかった。その理由のひとつとしては、今回の土器の中で量的に多い「朝日形甕」の検討の難しさが挙げられる。これまでの研究が明らかにしてきたとおり、口縁部の形態、器面の調整、胎土など、他の器種との対比ではきわめて共通性の高いものであるが、その分類内においては、経時的な変化を示すような細分は難しい。そのため、現時点ではこの土器を時間的細分の材料となし得ないのが残念である。この甕は、数量的には多く、それを生かすためにも、今後更なる検討を加えねばならない。

<参考文献>

- 岡村渉 1997 『有東遺跡第16次発掘調査報告書』静岡市埋蔵文化財調査報告39 静岡市教育委員会
永井宏幸・村木誠 2002 「尾張地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社 pp. 253-412
石黒立人・宮腰健司 1994 「弥生時代から古墳時代の土器」『朝日遺跡Ⅴ(土器編・総論編)』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集 (財)愛知県埋蔵文化財センター pp. 10-176
石黒立人・宮腰健司 1996 「尾張(付:美濃)」『YAY!』弥生土器を語る会20回到達記念論文集 弥生土器を語る会 pp. 289-305

表 5-1 土器観察表(1)

土器番号	調査区	遺構	層位等	器種	調整・製作技術	形態・文様	法量	胎土	色調	遺存度	その他
1	エ区	SD06	No.6	甕台部	外面ハケメ→ミガキ、内面ナデ、ミガキか	上位は中夷棒状、下位は内湾する形態。	台径 8.2cm	やや粗い。雲母小片。	にぶい橙色	図化部全存	
2	エ区	SD07	土器11	深鉢	外面条痕、内面ナデ。	口縁端部に二枚貝沈線。		やや粗い	にぶい黄橙色	小片	
3	エ区	SD10	アゼ東上位	壺底部	外面ハケメ→ナデ、内面ナデ。		底径 4.4cm	やや粗い	にぶい黄橙色	図の1/2	外面滑くスス付着
4	エ区	SD10	No.6	壺底部	外面ミガキ、内面摩滅。底面もミガキ。		底径10.8cm	やや粗い	にぶい黄橙色	図の1/2	
5	エ区	SD11	アゼ東埋土下位	壺	内面ヨコハケメ、外面口縁ヨコハケメ、頸部タテハケメ。口縁端部ヨコナデ。	口縁端部は幅広い面をなし上方にわずかに突出。	口径20cm程度	やや粗い、雲母片	内面にぶい橙色、外面灰黄褐色	図の1/10	
6	エ区	SD13	No.8	深鉢下部	外面二枚貝条痕、内面ナデ。			砂粒多く粗い。	にぶい黄橙色		外面スス付着顕著
7	エ区	SD14	土器17・28・26・32・54	甕	外面斜めの条痕(ハケメまたは二枚貝条痕)、口縁内面横にハケ。胴部内面はナナメハケ→縦ナデ。口縁端部付近のみヨコナデ。	口縁端部は四角く、面をなす。肥厚はしない。	口径 18.8cm	やや粗い	灰黄褐色	図の1/4	外面スス付着顕著
8	エ区	SD14	土器22・27	甕底部	外面横方向の条痕後、ミガキ。底面もミガキ。内面摩滅。		底径 4.8cm	やや粗い	灰黄褐色	図の1/3	
9	エ区	SD25埋土上+SD28		壺	外面ハケメ、内面ナデ、ユビオサエ。頸部は横ハケメ。頸部粘土の継ぎ目が見える。	刺突後磨り消し線。刺突の原体は不明だが、縦位の刺突は右側状。	不明	1~2mmの砂粒があるが、粗くはない。普通。	にぶい黄褐色	図の1/6	
10	エ区	西黒色土層、SD29埋土上		壺底部	外面ハケメ後部分的にミガキ。内面横方向にハケメ。原体圧痕明瞭。底面に棒状、へら状の圧痕。		底径 6.4cm	0.5mm以下の砂粒があるが、普通。赤色粒入る。	にぶい橙色	図の2/3	
11	エ区	SD29	N側	甕	外面タタキ後ハケメ、内面口縁部ハケメ、胴部ナデ。	口縁端部にへら刺突。	口径22~23cm	粗い	にぶい黄褐色	図の1/8	煤付着顕著
12	エ区	SD30	アゼ中位	壺	口縁部ヨコナデ、外面縦方向中心のハケメ、内面ナデか。内面底部付近はハケメ。	頸部から胴部上位6条の櫛描直線文、波状文。頸部から胴部にかけて櫛描直線文、波状文。右回り、連続的に施文。最上段の直線文は原体の圧痕多数残る。	口径13.6cm、底径5.8cm、器高26.6cm	1~2mmの砂粒や多くやや粗い。	にぶい黄褐色	ほぼ全存	
13	エ区	SK15	No.1	壺胴部	外面タテハケメ→沈線。部分的に横ミガキ。内面横にハケメ。			やや粗い	外面褐色、内面黒色	破片	
14	エ区	南壁セクション	No.3	壺	外面ハケメ後、下胴部を横方向にヘラミガキ。内面はユビオサエ、ナデ。頸部付近は成形に伴う段があり、その上位はハケメか。	受口状口縁。口縁部櫛描波状文、口縁部外側の面には竹管刺突。下胴部に稜をなす。頸部竹管刺突、櫛刺突。胴部は櫛描直線文後その間に櫛刺突によるコンパス鋸歯文。鋸歯文は右へ施される。	口径 12.0cm	1mm以下の砂粒、赤色粒があるが粗くはない。普通。	にぶい橙色	図の1/2	
15	エ区	調査区北西部	検出中	深鉢底部	外面横方向二枚貝条痕、内面ナデ。底部外面も平滑。		底径 5.8cm	やや粗い	橙色	図の1/3	
16	オ区	SD01	東半	細頸壺	口縁外面縦ハケメ、口縁端部ヨコナデ。口縁部内面横ハケメ。頸部内面にシボリ痕。	受口状の口縁。口縁部櫛描文。一周連続しないものがある。胴部櫛描直線文、タテ直線文、波状文。櫛描文間ミガキ後、櫛描文上下に付加沈線。	口径 8.2cm	1mmの砂粒があるが普通。	外面灰白色、内面灰褐色	図の4/5	
17	キ区	SD01		壺	口縁部ヨコナデ、外面ハケメ、底部付近はミガキ。内面上位ハケメ、ナデ、下位ナデ。頸部付近はシボリか。外底面に縄のような沈線が1条。	頸部に貝殻櫛描直線文。貝殻圧痕顕著。胴部直線文は原体不明。袋状の口縁。胴部中位で強く張る器形。	口径17.0cm、底径8.2cm、器高49.5cm	1~2mmの砂粒多く、やや粗い。	淡黄褐色	図の4/5	
18	キ区	SD01+SD06		深鉢	外面条痕、内面ナデ、イタナデ。条痕は数カ所で2条ずつ確認できるが、単位は不明。	口縁端部外面、上面に条痕原体?によるキザミ。口縁部内面はわずかに突出。	口径 30.6cm	1~2mmの砂粒や多く、やや粗い。	外面淡黄色、内面黒褐色	図の1/12	
19	キ区	SD05		壺	内外ハケメ後、口縁部ヨコナデ、外面はミガキまたはナデによりハケメ消えている。	口縁端面上下に櫛によるキザミ。	口径27.0cm	1~3mmの砂粒多く、やや粗い。	橙色	図の1/12	
20	ク区	SB01	235	壺	外面ハケメ後ミガキ。突帯上はヨコナデ。内面はハケメ、ナデ。	突帯上にキザミ。貝殻櫛描直線文、波状文。	不明(胴部最大径が50cm程度)	1~2mmの砂粒多くやや粗い。	外面にぶい橙色、内面灰白色	図の1/10	
21	ク区	SB01	180~182・188・190・203	壺	外面ハケメ後横にミガキ、内面横ハケメ。	胴部に直線文。	底径 7.0cm	やや荒い、雲母小片あり。	にぶい黄褐色	図の1/3	黒斑あり
22	ク区	SB01	205・187・183・184・178・204	条痕壺	外面貝殻条痕、内面ミガキか。胴部内面ナデか。	口縁端部沈線、上下端キザミ。口縁端部下突帯、外面横条痕後、半截竹管状工具による縦直線、扇形文、内面櫛描直線文・波状文後浮文。胴部は直線文、波状文、列点文2段の間にミガキ帯。	口径 22.0cm	粗い	橙色	口縁部図の1/3、胴部は小片	
23	ク区	SB01-2区	227・床直	甕	外面縦方向粗いハケメ、内面横方向粗いハケメ。	口縁上下端に櫛?刺突、口縁部内面に櫛描波状文。	口径 39.0cm	1mmの砂粒や多く、やや粗い。雲母小片あり。	外面黒褐色、内面にぶい黄褐色	図の1/4	
24	ク区	SB01	173	甕	外面ハケメ、内面施文後ナデ。口縁部はナデか。	口縁部内面に波状文、直線文。口縁端部に櫛?キザミ。外面頸部にハケメとは別原体による圧痕。	不明	1~2mmの砂粒や多く、やや粗い。	外面灰黄褐色、内面にぶい黄褐色。	小片	
25	ク区	SB01	167	甕	外面ハケメ、胴部下位には縦方向のミガキ。内面は口縁部ハケメ後ナデ、胴部ナデ。	口縁端部に圧痕1カ所のみ残る。頸部からゆるく屈曲して口縁部へ。	口径22.3cm、底径5.7cm、器高23.9cm	微小な砂粒多くやや粗い。雲母片あり。	外面ススにより黒褐色、内面にぶい黄褐色	図の2/3	外面胴部下端にはあまりスス付かず、それ以上には顕著にスス付着。
26	ク区	SB01	168	甕	内外面ハケメ、口縁部にヨコナデはなく、上側から粘土がはみ出ている。	口縁端部に工具圧痕1箇所。	口径 21.6cm	1mmの砂粒多く、やや粗い。	外面ススにより褐灰色、内面にぶい橙色	図の1/6	
27	ク区	SB01	170	甕	口縁端部横方向のナデ。内面横ハケメ、外面縦ハケメ。	口縁端部中央に稜。	19.6cm	1mmの砂粒多く、やや粗い。雲母片。	外面ススと黒斑で黒褐色、内面灰黄褐色。	図の1/8	
28	ク区	SB01	下位No.228	甕	外面摩滅激しく不明。口縁内面凹部のはっきりしないハケメか。	口縁端部に棒状の工具によるキザミ。	不明	1~2mmの砂粒きわめて多く粗い。	にぶい橙色	小片	
29	ク区	SB01	200・195・292・212	深鉢	外面条痕、内面ナデか。ハケメのような細かな条痕、へらナデ状の痕跡もあり。底部外面には布目圧痕。	口縁端部にへら状工具のキザミ。	口径33.2cm、底径7.8cm、器高31.1cm	5mm以下の砂粒含み粗い。	外面にぶい赤褐色、内面黒褐色	ほぼ全存	外面中下位スス付着
30	ク区	SB01	4区P177東半	壺	口縁端部ヨコナデ、口縁部内外面ナデか。	口縁部は端部付近で屈折し、上面に水平な面をなす。端部に指頭による押圧。頸部に櫛描直線文。	口径 14.0cm	1mmの砂粒多く粗い。	浅黄褐色	図の1/6弱	

表5-2 土器観察表(2)

土器番号	調査区	遺構	層位等	器種	調整・製作技術	形態・文様	法量	胎土	色調	遺存度	その他
31	ク区	SB01	3区P178	深鉢	外面横方向条痕、内面横方向ナデ。	口縁端面内側に櫛またはヘラ状工具刺突。	不明	1.2mmの砂粒多く粗い。	外面ススによりにぶい褐色、内面褐色。	小片	
32	ク区	SB01	3区P178	壺底部	外面ミガキか、内面ナデか。外底面はナデまたはミガキにより平滑。		底径7.3cm	1mmの砂粒やや多く、やや粗い。	外面ススにより灰黄褐色、内面にぶい黄褐色。	図の1/2	
33	ク区	SB02	4区	条痕文系壺	外面かすかな条線。内面ナデまたはミガキ。工具の圧痕あり。	受口状口縁。口縁端面に明瞭な凹面をなし内側へ突出。	口径13.0cm	1mmの砂粒多くやや粗い。	灰白色	図の1/10	
34	ク区	SB02	6区	条痕文系袋状口縁壺	内面ヨコナデ。	半截竹管状工具による直線文。口縁部は面をなし、内側に突出。施文は上から下の順が確認できる。	口径13.4cm	砂粒多くやや粗い	外にぶい黄褐色、内褐色	図の1/6	
35	ク区	SB02	6区周溝	条痕文系壺	外面条痕、内面ナデか。細かな条線。	半截竹管状工具による直線文。胴部上位に下から底側の小さな波状文、大きな波状文。縦直線がこの順で施される。	不明	1~2mmの砂粒やや多くやや粗い。	にぶい黄褐色	胴部固化部位の1/4	
36	ク区	SB02	4区	壺	外面ミガキ、内面ナデ	ヘラ刺突、2条の波状文(半截竹管状工具)にはさまれた櫛描直線文。	不明	1mmの砂粒多く、やや粗い。	にぶい黄褐色	小片	
37	ク区	SB02	貼床、床面直上	壺底部	外面横方向条痕、内面ナデ	底部わずかにドーナツ底状	底径6.8cm	1mmの砂粒やや多くやや粗い。	外面褐色、内面灰白色	図の1/2	
38	ク区	SB02	3区貼床?層	壺	外面ハケメ、内面器面剥離のため不明。	原体の圧痕はないが、文様の断面形状から二枚貝によると思われる直線文、波状文。	不明	1~2mmの砂粒やや多く、やや粗い。	にぶい褐色	小片	
39	ク区	SB03	No.9	壺	外面縦ハケメ→櫛描文。内面磨減。内面口縁部付近にかすかに条線。	口縁端面に直線文、その上下に貝殻押し引き。	口径18.4cm	砂粒やや多く、やや粗。雲母小片。	褐色	1/3。同一器体口縁部あり。	
40	ク区	SB03	No.6	条痕文系受口状口縁壺	外面口縁縦条痕、頸部横条痕または粗いハケ。内面ナデ。	口縁部遺存部では緩やかな波状を呈する。口縁部は丸く、内側に突出。	口径12.1cm	砂粒あるが粗くない。普通。雲母小片。	にぶい黄褐色	図の1/4	
41	ク区	SB03	No.3	壺	外面縦粗いハケメ、内面横イタナデ。ユビオサエ目立つ。	口縁部棒状工具圧痕、ヘラ圧痕。	口径23.4cm	1~2mmの砂粒極めて多く、粗雑。雲母片目立つ	内外とも黒褐色	図の1/4	42と同一器体。
42	ク区	SB03	No.1	壺	外面粗いハケメ、内面ナデ。外底面に斜格子状の沈線。		底径6.6cm	1.2ミリの砂粒多く粗い。雲母	内外とも黒褐色	図の2/3	41と同一器体。
43	ク区	SB03	No.8	深鉢	外面条痕、内面ハケメ。底面外部沈線あり。		底径4.8cm	砂粒多く粗い。雲母。	外面ススにより褐色、内面にぶい黄褐色	図の1/4	
44	ク区	SB04	炉2内敷き土器	壺	外面ハケメ、内面ハケメ、ユビオサエ。内面下部部に粘土積み上げに伴う剥離痕が確認できる。	頸部に櫛描直線文。この文様の下部に段がある。胴部に櫛描直線文、波状文。施文は下位から上位。	不明	1~5mmの砂粒、小石含みや粗い。雲母小片	にぶい黄褐色。スス付着部は灰黄褐色、黒褐色。	図の1/2	内面帯状に黒褐色スス付着。炉内で付着したものか。
45	ク区	SB04	No.80	壺	口縁端面をなし、沈線。内面はナデ。	櫛描波状文、直線文(原体は二枚貝の可能性もあり)。施文は下位から上位へ。	口径12.0cm	砂粒やや多く、やや粗。	にぶい黄褐色	図の1/4	
46	ク区	SB04内	P258及びその直上の床	壺底部	外面ハケメ後ミガキ、内面ナデ。底面も平滑。		底径7.6cm	1.2mmの砂粒やや多く、やや粗い。	灰白色	図の1/3	外面スス付着顕著。
47	ク区	SB04	No.90	壺底部	外面縦ハケメ、内面ナデ、ヘラナデ。底面外部に砂粒集中。		底径7.7cm	砂粒やや多くやや粗い。	灰黄色	図の1/2	
48	ク区	SB04	95・97	壺	外面ハケメ。下位のハケメほど後に施されているらしい。内面口縁部横ハケメ。胴部はイタナデ、ナデか。	口縁部は上側から粘土が乗るよう突出し、そこにヘラ状工具キザミ。	口径28.0cm	1mmの砂粒多く粗い。雲母小片あり。	外面ススにより黒褐色、内面にぶい黄褐色	図の1/4	外面底部付近を除いてスス付着。
49	ク区	SB04	炉1a内敷き土器	壺	外面ハケメ、内面イタナデ。	口縁端面に波状文。	口径36.0cm	砂粒多く、やや粗い。雲母小片。	にぶい黄褐色	図の1/4	内外面スス付着。
50	ク区	SB04	No.88	深鉢	外面条痕、内面ハケメ又はケズリ。		底径5.6cm	砂粒多く粗い。底部外面きわめて多い。外面暗褐色、内面黒色。	外面暗褐色、内面黒色	図化部全存	
51	ク区	SB04	P288上部	深鉢	外面条痕、内面ナデか。底面に葉脈状の圧痕。		底径6.2cm	1.2mmの砂粒極めて多く粗い。	灰白色	図化部全存	
52	ク区	SB05	No.5	壺	外面ハケメ、内面ハケメ後ナデか。	口縁端面に一条沈線、櫛キザミ。口縁部内側に幅0.7cm程の面をなす。	口径16.0cm	1~3mmの砂粒多く粗い。雲母小片あり。	浅黄褐色	図の1/10	
53	ク区	SB05	西半上層	壺	口縁部ヨコナデ。	端面に沈線、下端に櫛キザミ。内面に指頭圧痕状の凹凸あり。端部上方に突出。	口径20.8cm	1~3mmの砂粒、小石あり粗い。	褐色	図の1/10	
54	ク区	SB05+SD60	住居床面	条痕文系受口口縁壺	外面条痕、内面ナデ。	口縁上面に半截竹管状工具沈線、口縁部櫛状工具キザミ、口縁部直下に押圧突帯。	口径20.0cm	1mmの砂粒多く、粗い	外面暗黄灰褐色、内面褐色	図の1/4	
55	ク区	SB05	No.2	壺	口縁部ヨコナデありか。外面二枚貝条痕、頸部以下内面ハケメ?後ナデ。	口縁部下方にわずかに肥厚。頸部から口縁部へはややシャープな稜をなす。	口径26.2cm	1mmの砂粒やや多くやや粗い。雲母小片。	外面にぶい黄褐色、内面にぶい黄褐色	図の1/8	
56	ク区	SB05	西半床直	壺	外面二枚貝条痕か、口縁内面ヨコナデ。口縁内面方向の異なる条線あり。胴内面はナデか。	内面胴部からシャープな稜をなし、口縁部へ。口縁部短い。外面端部直下に一条沈線。	口径24.4cm	1mmの砂粒あり、やや粗い。雲母小片。	外面ススにより暗褐色、内面にぶい黄褐色	図の1/10弱	
57	ク区	SB05	西半床直	鉢又は無頸壺	内面および口縁部ミガキ	外面櫛描直線文、3条櫛による縦方向の文様	不明	1mmの砂粒あるが粗くはない。普通。	灰褐色	小片	
58	ク区	SB05	東半床直	鉢	外面ハケメ、内面イタナデか。	口縁部短く外折。	口径16cm程度	粗い。	にぶい褐色	図の1/8	
59	ク区	SB06		壺	内面ナデ	付加沈線研磨手法、縦直線	不明	1mm以下の砂粒多くやや粗い。	外面黒色、内面灰褐色	小片	
60	ク区	SB06	北半	壺底部	外面ミガキ、内面ナデ。原体は不明だが長さ3mm程度の細かな圧痕多数。底面もミガキ。接地部は砂が集中。		底径6.2cm	1~3mmの砂粒あり、やや粗い。	褐色。外面一部スス付着し、黒褐色。	図化部は全存。	
61	ク区	SD03	西端部	壺	口縁部ナデまたはヨコナデ。	外面口縁部直下に突帯貼り付け、圧痕。	不明	1mm以下の砂粒やや多く、やや粗い。雲母小片。	灰褐色	小片	内外スス付着。
62	ク区	SD03	西端部	壺	内面ナデ	縄文→区画する沈線。	不明	0.5mmの砂粒かなり多くやや粗い。雲母小片あり。	灰黄褐色	小片	内外ともスス付着か。
63	ク区	SD03	西端	壺底部	外面ハケメ→ミガキ、内面ハケメ。底面外部ナデか。口縁部はヨコナデ。		底径9.1cm	1~2mmの砂粒やや多く、やや粗い。	にぶい褐色	底部1/2、胴部1/6	底部にスス付着。割れた面にもスス付着か。

表 5-3 土器観察表(3)

土器番号	調査区	遺構	層位等	器種	調整・製作技術	形態・文様	法量	胎土	色調	遺存度	その他
64	ク区	SD03 西端部		甕	口縁部外面にヨコナデありか。外 面二枚貝条痕、内面ナデ。	口縁部に面をなし、外面下 方へ突出する。頸部からゆる く屈曲して口縁部に至る。	口径 27.0cm	0.5mm 以下の砂粒あ るが粗くはない。普 通。雲母小片。	外面ススにより暗 灰黄色。内面浅黄 色。	図の 1/10	
65	ク区	SD03 +SD0 3西側 下位		甕	外面二枚貝条痕、内面口縁部ナデま たはヨコナデ。	口縁部に面をなすが、肥 厚はしない。	口径 28.6cm	1~2mm の砂粒かな り多くやや粗い。	褐色	図の 1/10	
66	ク区	SD03	西側	内傾口 縁土器	内面ナデ。外面条痕の痕跡かすか。	口縁部には凹面をなす。	不明	1~2mm の砂粒多く 粗い。	外面ススにより灰 褐色。内面にぶい 黄褐色	小片	
67	ク区	SD05	南部No.45	鉢	外面ハケメ、内面ハケメ、ナデ。口 縁部ヨコナデ。外底面は平滑。	口縁部には四角く作り、面 をなしている所がある。	口径19.7 cm、底径 7.5cm、器 高11.0cm	1mm の砂粒あるが、 粗くはない。普通。	にぶい褐色	図の2/3	
68	ク区	SD07		壺	外面ハケメ、口縁部から内面ヨコナ デ。	口縁部と頸部に貝殻描 文。頸部には貝殻の静止痕 残る。口縁部上端に押圧。	口径 17.2cm	1~2mm の砂粒、赤色 粒含みや粗い。	にぶい黄褐色	図の1/5	
69	ク区	SD07	No.6	甕	口縁部ヨコナデ、外面凹部の浅い条 痕。部分的に二枚貝条痕らしい痕跡 もあり。胴部内面上位ハケメ後ヨコ ナデか。	内面胴部からややシャープ に折れて口縁部へ、口縁部上 位は外傾する面をなし、下 半は下に丸く肥厚する。	口径 36.2cm	0.5mm の砂粒あるが、 普通。雲母小片あり。	にぶい黄褐色	図の1/6	
70	ク区	SD09	底面	高坏	外面ハケメ、坏部内面ハケメ後ユビ オサエ、脚内面ユビオサエ、ナデ。	坏部外面に櫛歯の直線文と 連弧文風の文様。脚部直線 文。坏口縁部上面に面をなし、 櫛歯状文。口縁、脚 端部にキザミ。	口径13.6 cm、底径 8.6cm、器 高8.9cm	1~3mm の砂粒あり、 やや粗い。	淡い黄色	ほぼ全存	
71	ク区	SD12		壺	内面横方向ハケメ、ナデ、外面縦ハ ケメ横ハケメナデか。	櫛歯流水文		1mm の砂粒あり。普 通。	浅黄褐色	小片	
72	ク区	SD15	西半	条痕文 系深鉢	外面条痕、内面ナデ。底部外面布目 圧痕。		底径 7.2cm	3mm 以下の砂粒多く 粗い。	にぶい褐色、スス 付着し部分的に黒 褐色	図の1/4	
73	ク区	SD16	No.2	蓋か。	外面磨滅しているが天井部付近ミガ キ、内面ミガキ。内面天井部は条線 残り、ハケメか。	沈線と羽状文。		2mm 以下の砂粒含み やや粗い。	外面褐色、内面 灰褐色	図の1/4	
74	ク区	SD18	12b層	壺	外面縄文、ナデ、内面ナデ、ユビオ サエ	胴部上位に、内側から押し出 した突起が2か所残る。沈線 による施文。縄文と沈線の 前後関係判断としない。	不明	1~5mm の砂粒、小石 多く粗い	外面褐色、内面黒 色	胴部破片	駿河湾地方 のもの。
75	ク区	SD18	12b層	甕	外面縦ハケメ、内面横ハケメ。	口縁部にはキザミ、口縁外 面はあまり肥厚しない。	口径 22.0cm	1~3mm の砂粒やや 多くやや粗い。雲母 小片。	外面ススにより暗 褐色。内面にぶい 褐色	図の1/4	
76	ク区	SD30	アゼ	深鉢	外面横に条痕後、口縁部外面に粘土 付加。内面ナデ。	口縁部内面に直線文。		2mm 以下の砂粒含 み、やや粗い。	にぶい褐色	小片	
77	ク区	SD35	中央	壺	内面ハケメか。	ミガキ帯、2条の沈線間に原 位不明の圧痕。		1mm 以下の砂粒多く 粗い。	外面暗赤褐色、内 面灰褐色	小片	
78	ク区	SD35	中央	条痕文 系深鉢	外面条痕、内面ナデ、底部付近ヘラ 工具ナデか。底部外面布目痕。		底径 6.7cm	3mm 以下の砂粒多く 粗い。	黒褐色	図化部全 存	外面スス付 着。
79	ク区	SD36		壺底部	外面横ミガキ、内面ナデ、ヘラナデ。底 面ヘラナデまたはケズリ(砂粒動く)。		底径 7.0cm	1~2mm の砂粒やや 多く、やや粗い。	にぶい黄褐色	図化部全 存	外面薄くス ス付着。
80	ク区	SD45	北部土器C	細頸壺	外面ハケメ。胴部下半はハケメ後ナ デ及びミガキ。内面ナデ、ハケメ。 胴部内面に爪形の圧痕集中。	下胴部が強く張る器形。下 胴部の様部分で粘土接合 痕は明瞭だが、剥離面は観 察できず。頸部櫛歯直線文。 胴部櫛歯直線文+沈線+研 磨帯、直線文上に櫛歯直線文。	底径 4.3cm	やや粗い	外面黒色、内面灰 色	図の4/5	
81	ク区	SD45	土器B	壺	外面ハケメ後ミガキヘラ施文。内面ヘ ラナデ、ハケメ。底部外面に木葉痕。	球形に近い胴部。2条のヘラ 描き沈線による文様。文様 内部はミガキ。	底径 6.0cm	1mm 以下の砂粒多く やや粗い。	外面黒褐色、内面 褐色	図の4/5	
82	ク区	SD45	土器D	細頸壺	口縁部ヨコナデ、外面ナメハケ、 ミガキ。内面下胴部最大径以下ハケ メ、中位以上ナデ。	胴部文様ヘラ沈線とミガキ 帯。下胴部あまり強くは張 らない。	口径 11.1cm	1mm 以下の砂粒やや 多く、やや粗い。	外面にぶい褐色、 内面黒褐色	図の4/5	
83	ク区	SD45	土器E	細頸壺	外面ハケメ。胴部最大径部分にヨコモ ガキ、底部付近は斜めミガキ。内面イタ ナデ。胴部最大径部分で腹口縁か。	下胴部で強く張る器形。櫛 歯文+付加沈線+研磨。	底径 4.7cm	0.5mm 以下の砂粒少 しあるがやや粗い。	外面褐色、黒褐 色、内面黄灰色	図の1/2	
84	ク区	SD47 西部		細頸壺	口縁部外面縦方向ミガキ、胴部ナメハ ケ後施文、ミガキ。下胴部に剥離面を持 つ。底面は中央がわずかに凹む。砂粒集 中。内面頸部付近はボリ痕。胴部上位に は粘土織目残り、指頭圧痕顕著。底部 付近にヘラの痕跡集中。	櫛歯直線文後その間をミガ キ。頸部の櫛歯文には一周 連続しないものがある。付 加沈線はない。口縁部には 粘土貼り付け後波状文。	口径5.8 cm、底径 5.1cm、器 高21.7 cm	1mm 以下の砂粒含 むが粗くはない。普通。 赤色粒含む。	にぶい褐色	胴部わず かに欠く がほぼ全 存	
85	ク区	SD47	アゼ西黒色 シルト	壺	横方向粗いハケメナデハケメ部分 的にミガキ、内面ヨコナデ。頸部 はナデか。	口縁部面に貝殻直線文、上 端に棒状工具、下端に指頭の 押圧。頸部にも貝殻直線文。	口径 37.8cm	1.5mm の砂粒多く、 やや粗い	にぶい黄褐色	図の1/4	
86	ク区	SD47 + SD60	アゼ下層黒 色シルト上 半	壺	口縁部ヨコナデ、内面横にハケメ、 外面斜めハケメ。	口縁部にはキザミ、頸部に 6条の櫛歯直線文。	口径 15.4cm	1mm 以下の砂粒やや 多い。普通。	にぶい黄褐色	1/3。同 一個体口 縁部あり。 SD60と 出土片と 接合。	口縁部内外 面にスス付 着。
87	ク区	SD47	アゼ上層	壺	口縁部付近ヨコナデ、外面ミガキ、 内面上位はヘラナデツケ、頸部付近 はナデ後部分的にミガキ。	口縁部凹面をなす。頸部 には櫛歯直線文。左側に上 になるよう重なっている。	口径 16.8cm	1mm 程度の砂粒含 み。普通。雲母小片 あり。	内面ススにより褐 灰色、内面にぶい 黄褐色	図の1/5	
88	ク区	SD47	東半	壺底部	外面ハケメ、ケズリ?後ミガキ、内 面ナデ。底部外面比較的平滑。	底部上げ底状。	底径 8.4cm	3mm 以下の砂粒多 く、5mm の礫もある。 粗い。雲母小片あり。	にぶい黄褐色	図の1/3	
89	ク区	SD47	アゼ西黒色 シルト	甕	口縁部ヨコナデか、外面二枚貝条痕、 内面口縁部ヨコハケメ、胴部ナデか。	頸部からゆるく屈曲して口 縁部にいたる。口縁部内 側に二枚貝による沈線。	口径 26.0cm	0.5mm の砂粒あるが、 普通。雲母小片目立 つ。	内面にぶい黄褐 色、外面浅黄褐色	図の 1/12	
90	ク区	SD47 東半上 層	上層シルト	深鉢	外面横位羽状条痕、内面ナデまたは ハケメで細かな条線。	口縁部部に押し引き。	口径 28cm程度	粗い、雲母小片目立 つ。	にぶい褐色	図の1/8	煤付顕著
91	ク区	SD49 -50	SD49-50	内傾口 縁土器	口縁部外面条痕、口縁部内面ナデま たはヨコナデ。		不明	1mm 以下の砂粒ある が粗くない。普通。 0.5mm の赤色粒含む。	褐色	小片	
92	ク区	SD50	北より2層	壺底部	外面縦ハケメ後ミガキ、内面はナデ。 底面はナデ。	底部はわずかに上げ底状。	底径 5.0cm	1~2mm の砂粒かな り多く、やや粗い。	外面褐色、内面灰 黄色	図の2/3	外面スス付 着。
93	ク区	SD51 (SD55)		細頸壺	外面ハケメ後ミガキ、内面イタナ デ、ナデ。	ミガキ帯+沈線、順序不明	底径 5.0cm	粗い	明褐色、黒色	底部全 存、胴部 3/4	煤付着
94	ク区	SD51	中位	壺	内外面ともナデか。内面はナデの前 に条線あり、ハケメか。	幅4mm 程度の棒状工具によ る沈線。		1mm 以下の砂粒含 みや粗い。	外面にぶい褐色、 内面黒褐色	小片	95と同一個 体
95	ク区	SD51	東側	壺	内外面ともナデか。	幅4mm 程度の棒状工具によ る沈線。		1mm 以下の砂粒含 みや粗い。	外面にぶい赤褐 色、内面黒色	小片	94と同一個 体

表5-4 土器観察表(4)

土器番号	調査区	遺構	層位等	器種	調整・製作技術	形態・文様	法量	胎土	色調	遺存度	その他
96	ク区	SD51(SD55)	土器北	甕底部	外面ハケメ後ナデ、ミガキ。		底径 6.0cm	粗い	灰褐色	図化部ほぼ全存	
97	ク区	SD53	東半	甕底部	外面ミガキ。胴部はヨコ、底部付近は斜め。内面ナデ。底部外面もミガキ。		底径 6.1cm	2mm以下の砂粒含みやや粗い。	褐灰色	図の1/2	
98	ク区	SD60	アゼ下層	甕	内外面ハケメ、口縁端部のヨコナデ有無不明。	口縁端部はわずかに上方に突出。端部に波状文、頸部に貝殻描直線文。原体圧痕あり。	口径 11.2cm	3mm以下の砂粒含みやや粗い。	外面浅黄褐色、内面にふい赤褐色	図の1/6	
99	ク区	SD60	アゼ下層	甕	口縁端部付近ヨコナデ、外面ナデ、内面ハケメ	端部に直線文、上下端に櫛状痕。	不明	4mm以下の砂粒や多く、やや粗い。	にふい橙色	小片	
100	ク区	SD60	アゼ	条痕文系甕	摩擦のためよくわからないが、口縁部内面はヨコナデ、頸部内面はナデか。	口縁部外面、頸部に二枚貝?直線文。	口径 14cm 程度	2mm以下の砂粒多く、やや粗い。	浅黄褐色	小片	
101	ク区	SD62	№6・7、南半上層	甕	外面ハケメ後、施文、部分的にミガキ。下胴部に粘土積み上げに伴う段が残り、その下位はヘラケズリ、ハケメ。内面ナデ後頸部は横にハケメ。下胴部の接合部は横にヘラ状工具ナデ。	6条および7条の櫛描直線文。直線文上の弧線は3条。付加沈線なし。		1mmの砂粒かなり多く粗い。	内外面黒褐色。	図の2/3	
102	ク区	SD62	南半上層	甕	口縁部内外面ハケメ、口縁端部は下方に粘土はみ出すがその後調整なし。	頸部に櫛描文、口縁端部に波状文。	口径 18.9cm	3mm以下の砂粒多く粗い。	浅黄褐色	図の1/2	
103	ク区	SD62	南半上層	甕	外面ハケメ、口縁端部付近ヨコナデ、内面摩擦で不明。	頸部に櫛描直線文らしい。口縁端部に櫛によるキザミ。	口径 30.4cm	3mm以下の砂粒多く粗い。	にふい橙色	図の1/10	
104	ク区	SD62	№5、南半上層	甕	外面縦ハケメ、凹部の幅広く、一見二枚貝のようにも見えるが、原体の圧痕は直線的。内面口縁部はハケメ。	口縁端部は幅広い面をなし、ハケメ原体によるキザミ。	口径 33.0cm	1mm以下の砂粒多く、やや粗い。	にふい黄褐色。外面スス付着。	図の1/5	
105	ク区	SD66	南半下層	甕	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、イタナデ。	口縁部、頸部に貝殻描(?)文。文様は左側が上になるよう重なる。	口径 21.4cm	1~2mmの砂粒や多く、やや粗い。	にふい黄褐色	図の1/4	
106	ク区	SD66	北半下層	甕	口縁部ヨコナデ、内面横方向ハケメ。外面口縁直下にヨコナデによる段が生じる。外面斜めハケメ。	口縁部、頸部に貝殻描文。口縁部下端に押圧。	口径 39.8cm	1.5mmの砂粒多く粗い。	内外面橙色	図の1/5	
107	ク区	SD66	北半下層	甕	外面ハケメ、内面ナデ及びハケメか。		底径 6.4cm	1mm以下の砂粒多く、やや粗い。	外面灰黄褐色、内面黒褐色	図の1/2	
108	ク区	SD67	№3・4	甕	口縁部ヨコナデ、外面上位二枚貝条痕、下位縦方向のミガキ、内面ナデ、ユビオサエ。底部外面はケズリ後ヘラミガキ。	口縁部わずかに膨らむ。頸部に圧痕あり。口縁部はややシャープに折れる。	口径26.8cm、底径 6.4cm	0.5mm以下の砂粒多く、やや粗い。雲母小片目立つ。	外面ススにより灰褐色、内面にふい黄褐色	図の3/4	内面胴部中にスス付着。
109	ク区	SD67		甕	口縁部ヨコナデ、胴部外面二枚貝条痕、内面横ハケメ、ユビオサエ。	口縁部丸く下方に突出。頸部はゆるく屈曲。	口径 29.2cm	1mm以下の砂粒や多く、やや粗い。雲母小片多い。	外面スス付着により灰褐色、内面にふい橙色	口縁部1/4	110~112と同一個体の可能性あり。
110	ク区	SD67		甕	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヨコ二枚貝条痕、内面横ハケメ。	口縁部上側から粘土が被るように肥厚し、段をなす。頸部はゆるく屈曲。	口径 29.2cm	1mm以下の砂粒多く、やや粗い。雲母小片。	外面スス付着により灰褐色、内面にふい橙色	図の1/8	
111	ク区	SD67	№7	甕	口縁部ヨコナデ、外面ヨコ方向二枚貝条痕、内面横ハケメ。	口縁部は肥厚せず、ヨコナデで薄くなる。頸部はゆるく屈曲。	口径 27.2cm	1mmの砂粒多く、やや粗い。雲母小片多い。	外面スス付着で灰褐色、内面にふい黄褐色	図の1/10	
112	ク区	SD67	№1	甕	外面貝殻条痕、内面ハケメ、口縁部ヨコナデ。	頸部ゆるく屈曲。頸部に焼成面穿孔。	口径 27cm 程度	粗い、雲母小片目立つ。	外面ススで黒褐色、内面浅黄褐色	図の1/6、胴部片あり	
113	ク区	SD67		甕底部	外面ナメハケメナメミガキ、内面は摩擦で不明。底部外面もミガキ。		底径 6.9cm	1mmの砂粒や多く、やや粗い。雲母小片、赤色粒。	にふい黄褐色	図の1/3	
114	ク区	SK01	南半	甕	口縁内面ナデまたはミガキで平滑。	口縁部内面に二枚貝による沈線。	不明	1mmの砂粒や多く、やや粗い。	褐色	小片	
115	ク区	SK01	南半	甕	口縁部ヨコナデ、胴部外面二枚貝条痕	口縁部面に面を持つ。外面端部直下に沈線。	口径 28.0cm	0.5mm以下の砂粒や多く、やや粗い。雲母小片あり。	外面ススにより暗褐色、内面にふい黄褐色	図の1/12	
116		SK06	西半	甕	口縁部ヨコナデ	口縁部上下に指頭押圧。	口径 27.6cm	1~2mmの砂粒や多く、やや粗い。	橙色	図の1/8	
117	ク区	SK06		甕	内面はハケメ、ナデ	櫛描文、沈線間にミガキ。		1mmの砂粒多く、やや粗い。	灰白色	小片	
118	ク区	SK06	下層	甕底部	外面ハケメ後ミガキ、内面ユビオサエ、ナデ。底部外面はケズリ後ナデか。		底径 10.4cm	1~3mmの砂粒あり、やや粗い。	黄褐色	図の1/3	
119	ク区	SK06	西半+下層	甕	外面二枚貝条痕、内面ナデ、口縁部ヨコナデ。	頸部から口縁は内面にやや明瞭な稜をなして折れる。口縁部はあまり肥厚しないが、外面端部直下に一条沈線。	口径 28.6cm	0.5mm以下の砂粒あるが粗くはない。普通。雲母小片。	褐灰色	図の1/6	
120	ク区	SK06	西半	深鉢	外面二枚貝条痕、内面ヘラ状工具ナデ。底面は平滑。		底径 6.4cm	1mmの砂粒多く、粗い。	外面にふい黄褐色、内面黒褐色	図の1/4	
121	ク区	SK06	西半	深鉢	外面条痕、内面ナデ。底面木葉痕。		底径 9.0cm	1~3mmの砂粒や多く、やや粗い。	外面暗褐色、内面黒褐色	図の1/4	
122	ク区	SK09	セクションの土器	深鉢底部	外面横条痕、内面横イタナデ。		底径 7.0cm	粗い	浅黄褐色	底部全存、胴部の2/3	
123	ク区	SK09・11		甕	外面ミガキ、内面ナデ	外面櫛描文。	不明	0.5mmの砂粒あるが普通。	外面黒褐色、内面灰色	小片	
124	ク区	SK09・11		条痕文系甕	外面条痕、突帯上ヨコナデ、内面ナデ。	突帯上に圧痕。	不明	1mm以下の砂粒多く粗い	外面ススにより暗褐色、内面にふい黄褐色	小片	
125	ク区	SK09・11		甕	口縁部ヨコナデ、胴部外面縦ハケメ後二枚貝条痕、内面ナデか。	口縁部に1カ所のみ工具刺突痕。	口径 29.0cm	0.5mm以下の砂粒や多く、やや粗い。雲母小片あり。	外面ススにより暗褐色、内面橙色	図の1/8	
126	ク区	SK12		甕	文様のない部分はナデまたはミガキ。文様部は縦ハケメの可能性あるが、はっきりしない。内面は上位を横にハケメ、下位はナデ。	頸部に櫛または貝殻描直線文。施文部下端に段が生じている。		1~3mmの砂粒や多く、やや粗い。雲母小片わずか。	外面暗褐色、内面にふい黄褐色。	図の1/4	
127	ク区	P121		甕	外面縦ハケメ、内面口縁部横ハケメ、胴部ユビオサエ。	胴部から口縁部にゆるく屈曲。口縁部にはヘラ状の工具による圧痕。	口径 17.0cm	2mm以下の砂粒含み粗い。雲母小片。	外面ススにより褐灰色、内面にふい黄褐色	図の1/5	
128		SB01周辺土器群	308・309	甕	口縁部ヨコナデ、外面斜めハケメ。内面ヨコハケメ後ナデ。	口縁部、頸部に貝殻描?文。口縁部面上端に押圧。	口径 26.0cm	1~3mmの砂粒含み粗い。	淡黄色、黒斑。	図の1/10	
129	ク区	SB01周辺土器群	154	甕	口縁部ヨコナデ、外面ハケメ。内面は摩擦で不明。	口縁部下端に櫛キザミ、上端には短い条線がある。頸部に櫛直線文。	口径 19.6cm	0.5mm以下の微小な砂粒多く、やや粗い。	浅黄褐色	図の1/6	

表 5-5 土器観察表(5)

土器番号	調査区	遺構	層位等	器種	調整・製作技術	形態・文様	法量	胎土	色調	遺存度	その他
130	ク区	SB01 周辺土器群	201	甕	外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。	口縁端部は四角いが、明瞭な面にはならない。頸部輪描直線文。	口径 15.8cm	普通、雲母片あり。	淡黄色	図の1/2弱	
131	ク区	SB01 周辺土器群	153	甕	口縁部端部付近ヨコナデ。外面ナデ、内面ハケメ。	口縁端部に擗波状文、頸部に直線文。	口径 28.0cm	1~3mmの砂粒あり、やや粗い。	にぶい橙色。	図の1/6	
132	ク区	SB01 周辺土器群 包含層	23・34・35	甕胴部	外面ナデ、ミガキか。内面ナデ。内外とも平滑に仕上げられている。	貼り付けた突帯上に貝殻による刺突、押圧。図化部の最上段と最下段の一部は痕跡が異なる。	胴最大径が50cm程度。	1.2mmの砂粒やや多く、やや粗い。	褐灰色	図化部の1/2ほど	
133	ク区	SB01 周辺土器群	67・86・65・81	条痕文系甕	外面条痕、内面ハケメ状の条痕。	貝殻による直線文、跳ね上げ文。		やや粗い	外面黒褐色、内面灰褐色	図の1/6程度	
134	ク区	SB01 周辺土器群	256	鉢	外面ハケメ後下位のみミガキ、内面ナデ。底面外部もミガキ。	口縁端部に4カ所押圧。	口径13.1cm、底径5.2cm、器高10.3cm	普通、雲母片あり。	淡黄色	全存	
135	ク区	SB01 周辺土器群	161	甕	外面二枚貝条痕、内面ナデか。口縁部ヨコナデありか。	口縁端部には面を持ち、1カ所所圧痕がある。頸部内面かすかな稜を持って屈曲。	口径 28.8cm	1mm以下の砂粒多く、やや粗い。雲母小片目立つ。	にぶい黄褐色	図の1/10	
136	ク区	SB01 周辺土器群	49	甕	外面二枚貝条痕、内面ナデか。口縁部ヨコナデ。	頸部内面に比較的明瞭な稜をなして屈折して口縁へ。口縁端部は丸い。	不明	微細な砂粒多く、やや粗い。雲母小片。	外面ススにより灰黄褐色、内面にぶい黄褐色。	小片	
137	ク区	SB01 周辺土器群	12	甕	外面条痕か、内面磨滅で不明。	口縁端部に押圧するように見えるが磨滅で不明。	口径 19.2cm	普通、あまり砂粒はない。	浅黄褐色	図の1/6	
138	ク区	SB01 周辺土器群	317	甕	内面横方向、外面縦方向のハケメ、端部はヨコナデ。	口縁端部は四角く、面をなしている。口縁水平ではなく、わずかに波状?	不明	1mmの砂粒含み、やや粗い。	にぶい黄褐色	小片	
139	ク区	SB01 周辺土器群	352	甕	外面縦ハケメ、内面横ハケメ。口縁部ナデまたはヨコナデ。	口縁端部にキザミ。	不明	1mmの砂粒やや多く、やや粗い。雲母小片あり。	外面スス付着によりにぶい黄褐色、内面浅黄褐色。	小片	
140	ク区	SB01 周辺土器群	77	甕	口縁部内面ヨコナデ、胴内面ハケ後ナデか。外面ハケメ。	ゆるく外反し、口縁端部は外側に粘土がはみ出す。	不明	1mmの砂粒多く、やや粗い。	外面浅黄褐色、内面にぶい黄褐色	小片	
141	ク区	SB01 周辺土器群	111	甕	口縁部内面ヨコナデ、胴内面ハケ後ナデ、外面ハケメ。	ゆるく外反し、口縁端部は丸い。	不明	1mmの砂粒やや多く、やや粗い。	にぶい黄褐色	小片	
142	ク区	SB01 周辺土器群	86	条痕文系深鉢	外面条痕、内面ナデ、ユビオサエ。底部外面に布目圧痕。		底径 7.8cm	5mm以下の砂粒含み粗い。雲母小片	内外褐灰色。底部外面は黒褐色	図の1/2	
143	ク区	土器群 1(9F5 a北壁)	北壁B	甕	外面縦方向ハケメ→横方向ハケメ、内面口縁部ハケメ、胴部ナデ。	頸部はゆるく屈曲して口縁部へ至る。口縁部は丸く、部分的に肥厚する。	口径 26.8cm	粗い。雲母小片あり。	内外面ともススにより暗褐色	図の2/3	
144	ク区	土器群 2(9F5 a北壁 土器群 西)	高環か	高環か	外面ハケメ、内面器面剥離。剥離面にハケメ状の条痕。	口縁部上面に指頭圧痕。口縁端部は面をなして下方に突出。	口径 24.8cm	1mmの砂粒多く、やや粗い。雲母小片含む。	浅黄色	図の1/4	
145	ク区	土器群 2(9F5 a北壁 土器群 西)		甕	口縁部端部付近ヨコナデ。外面ハケメ後二枚貝条痕、部分的にナデ。内面口縁端部から胴部上位まで横ハケメ。	口縁端部に1カ所指頭圧痕。口縁端部は丸みを帯びた面をなし、下側に肥厚。	口径 30.8cm	0.5mmの砂粒あるが粗くはなく普通。雲母小片あり。	外面ススにより暗褐色、内面褐色	図の1/12	
146	ク区	土器群 2(9F5 a北壁 土器群 西)		深鉢	外面縦方向二枚貝条痕、内面ヨコナデか。	口縁端部に二枚貝による沈線。	不明	1mmの砂粒やや多く、やや粗い。	外面灰白色、内面黒色	小片	
147	ク区	土器群 3(9F5 b)	北壁土器群	甕	口縁部ヨコナデあり。外面口縁部横方向、胴部やや左上りの二枚貝条痕。内面口縁部付近ハケメ、胴部はナデ。	頸部から内面ににぶい稜をなして口縁部へ。口縁端部は下方にやや肥厚し、条痕の上端で段が生じる。	口径33.8cm(誤差大)	1mm程度の砂粒やや多く、やや粗い。	外面褐灰色、内面淡黄色	図の1/12	
148	ク区	土器群 3(9F5 b)	北壁土器群	深鉢	外面左上がり二枚貝条痕。施す順は、左上方の条痕が後であろう。後内面細密な条線も見られるがナデか。	口縁部付近で短く外折す。口縁部の面にへら状工具による圧痕。	口径35.0cm(誤差大)	1~2mmの砂粒含み、やや粗い。	外面褐灰色、内面褐色。内面黒斑。	同一個体破片を含めて図の1/5	
149	ク区	土器群 3(9F5 b)	北壁土器群	深鉢	外面二枚貝条痕、内面ナデ。	口縁端部に二枚貝による沈線。内面端部直下凹む。	口径38.2cm(小片のため不正確)	1~2mmの砂粒やや多く、やや粗い。	にぶい橙色	図の1/16	
150	ク区	土器群 4(9F5 d)	東壁土器群	甕	口縁部ヨコナデ、外面縦方向ハケメ、内面上位部分的にハケメ。ユビオサエ、ナデ。	口縁部はゆるい波状をなす部分がある。端部に櫛キザミ1カ所3個。	口径24.8cm(誤差大)	1~2mmの砂粒かなり多く、やや粗い。雲母小片。	スス、炭化物により褐灰色	口縁部1/4、胴部1/8	
151	ク区	土器群 5(9F 4d~ 4e土器群)		甕	磨滅により不明、口縁内面ミガキか。	口縁部粘土付加した後へら状工具圧痕。	口径 17.4cm	0.5mmの砂粒多く、やや粗い。	褐色	図の1/8	
152	ク区	包含層 (SD62 付近)	No.36	太頸甕	内外ハケメ、口縁端部ヨコナデ。	口縁部内面に2個1対の突起。口縁端部に波状文、口縁部から頸部外面に二枚貝による直線文。	口径 26.8cm	1~3ミリの砂粒少量、やや粗。雲母片あり。	にぶい橙色	図の1/3	
153	ク区	包含層 (SD62 付近)	No.33	甕底部	胴部外面細かい条線後ミガキ。内面剥落。底部外面平滑。		底径 6.2cm	0.5mmの砂粒やや多く、やや粗い。	外面にぶい黄褐色、内面褐色。	図の2/3	
154	ク区	包含層	No.44	甕	内外面ナデ。	区画沈線内に観文。		1mmの砂粒多く、やや粗い。	灰白色	小片	
155	ク区	包含層	No.47	甕	外面縦方向粗いハケメ、内面口縁部横粗いハケメ、胴部横方向ハケメ。	口縁端部に櫛?圧痕。櫛歯の圧痕は方形。	口径 31.0cm	1mmの砂粒いくらかあるが粗くはない。普通。	浅黄色	図の1/6弱	
156	ク区	包含層	西傾黒色土上面	内傾口縁土器	口縁部外面条痕、口縁内面粘土継ぎ目顕著に残る。	口縁端部は凹面をなす。	不明	1~2mmの砂粒やや多く、やや粗い。	にぶい黄褐色	小片	
157	ク区	9F6c 包含層	内傾口縁土器	内傾口縁土器	口縁部外面条痕後端部ヨコナデ。体部外面ナデ。粘土の剥離痕が明瞭。	口縁端部は凹面をなす。	不明	1~2mmの砂粒かなり多く、やや粗い。	褐色	小片	
158	ク区	9E7i + 9E6h 包含層	包含層	厚口鉢	口縁部外面条痕、胴部内外面ナデか。	口縁は丸く、面はなさない。	口径 13.5cm	1~2mmの砂粒やや多く、やや粗い。赤色粒少量含む。	褐色、ススにより灰褐色を呈する部分あり。	図の1/4	外面にスス付着。
159	ク区	9F6d 包含層	包含層	蓋	内外ともにナデか。平滑。	天井部に2カ所穿孔がある。	天井部径 4.6cm	1mm以下の砂粒あるがやや密。	暗灰色	図の1/5	
160	ク区	7区中央包含層	包含層上位	不明	磨滅で不明。	口縁の突起に穿孔。穿孔部に粗をかけたような痕跡あり。		3mm以下の砂粒含み、やや粗い。	にぶい黄褐色	小片	



写真5-1 工区SD06出土土器(1)

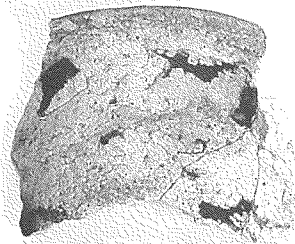


写真5-2 工区SD14出土土器(7)



写真5-3 工区SK15出土土器(13)

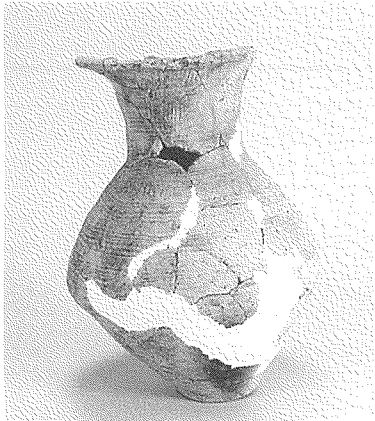


写真5-4 工区SD30出土土器(12)



写真5-5 工区南壁出土土器(14)



写真5-6 才区SD01出土土器(16)



写真5-7 キ区SD01出土土器(17)

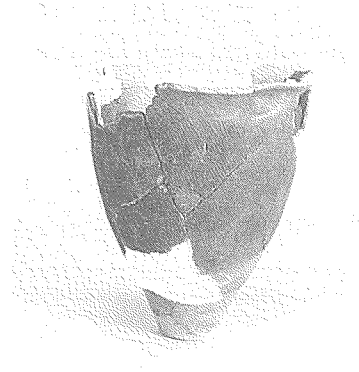


写真5-8 ク区SB01出土土器(25)

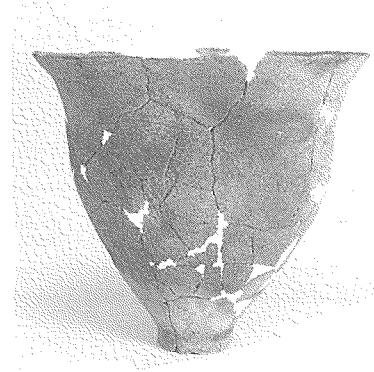


写真5-9 ク区SB01出土土器(29)

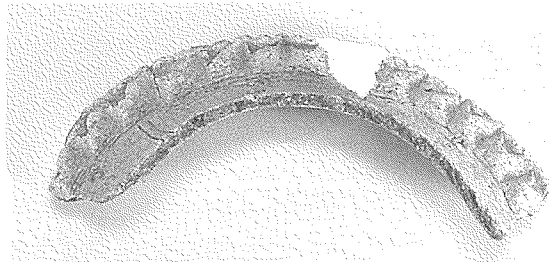


写真5-10 ク区SB01出土土器(22)

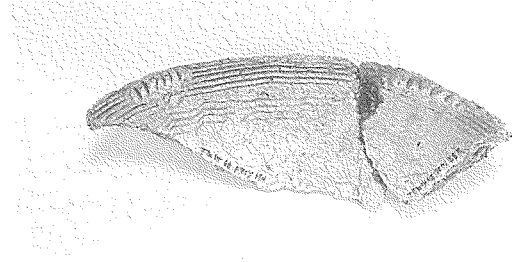


写真5-11 同左

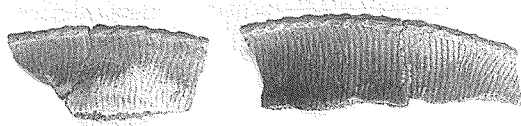


写真5-12 ク区SB01出土土器(23)

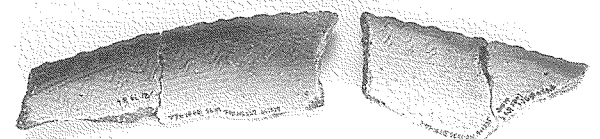


写真5-13 同左



写真5-14 ク区SB02出土土器(35)



写真5-15 ク区SB02出土土器(34)



写真5-16 ク区SB02出土土器(40)

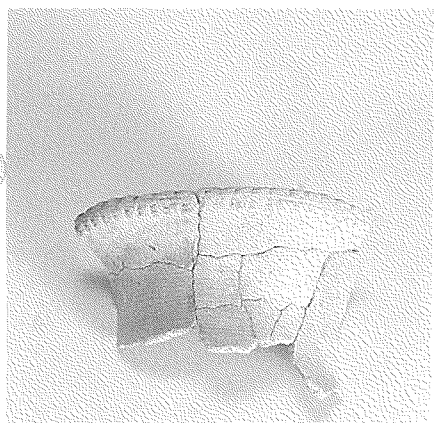


写真5-17 ク区SB03出土土器(39)



写真5-18 ク区SB03出土土器(41)

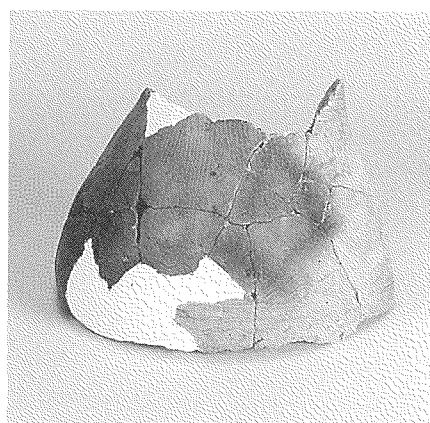


写真5-19 ク区SB04出土土器(44)



写真5-20 ク区SB04出土土器(45)



写真5-21 ク区SB03出土土器(48)



写真5-22 ク区SD05出土土器(67)

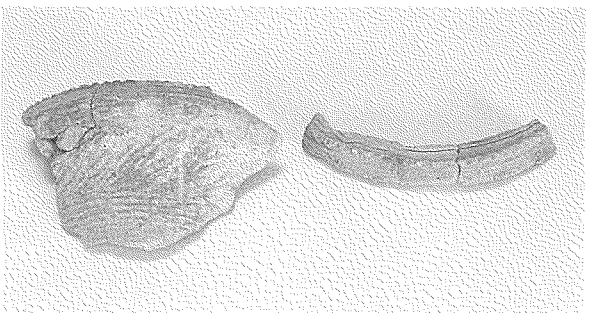


写真5-23 ク区SB05出土土器(54)

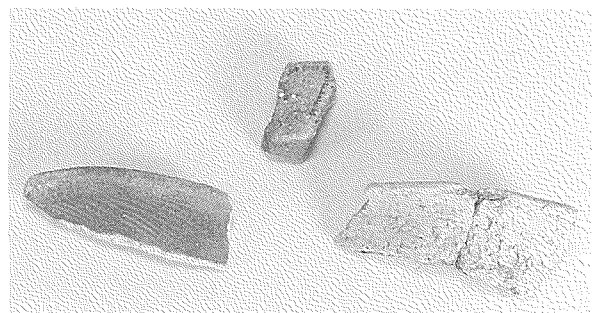


写真5-24 ク区SD03出土土器(64~66)



写真5-25 ク区SD09出土土器(70)

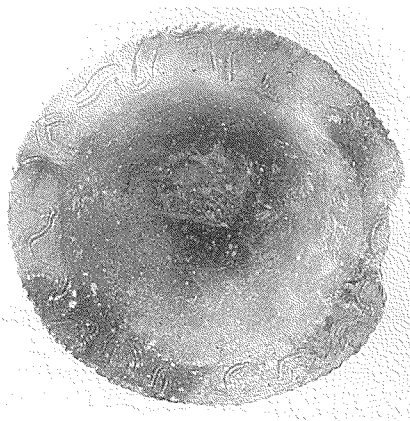


写真5-26 同左



写真5-27 同左



写真5-28 ク区SD18出土土器(74)



写真5-29 ク区SD45出土土器(80)



写真5-30 ク区SD45出土土器(81)



写真5-31 ク区SD45出土土器(82)



写真5-32 ク区SD45出土土器(83)



写真5-33 ク区SD47出土土器(84)



写真5-34 ク区SD62出土土器(101)

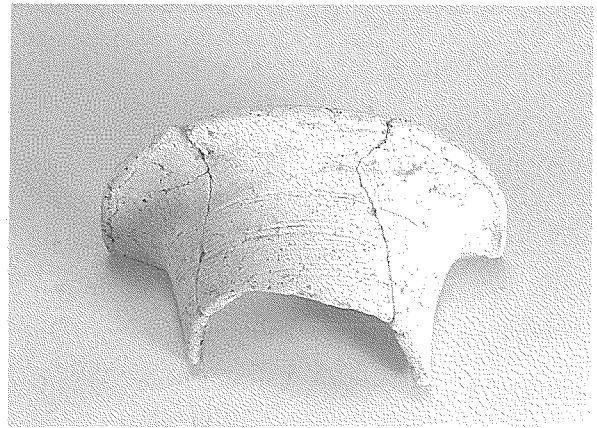


写真5-35 ク区SD62出土土器(102)

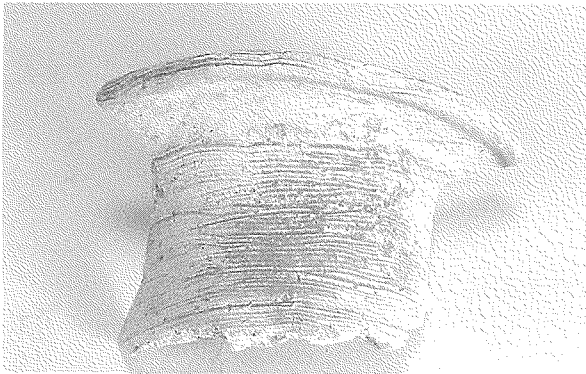


写真5-36 ク区SD66出土土器(105)



写真5-37 ク区SD67出土土器(108)

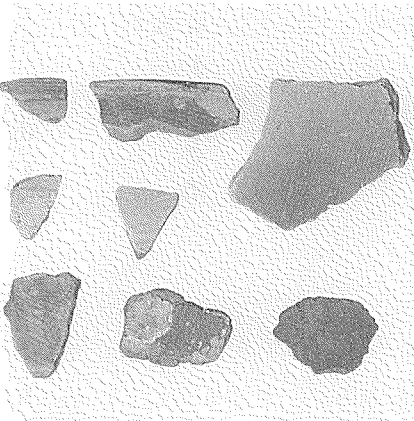


写真5-38 ク区SK01出土土器



写真5-39 ク区SK09・11出土土器(124)

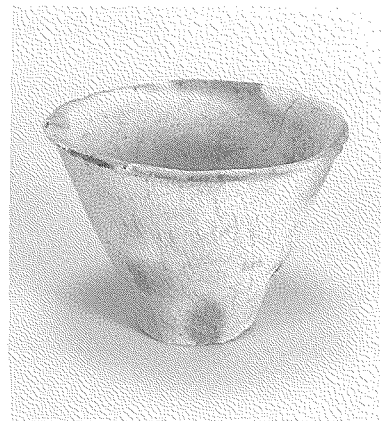


写真5-40 ク区SB01周辺土器群(134)

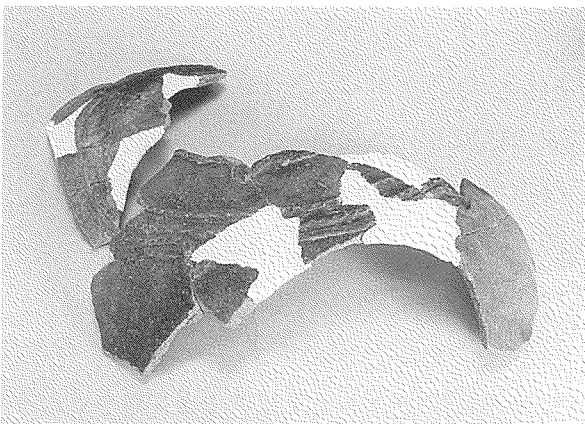


写真5-41 ク区SB01周辺土器群(132)

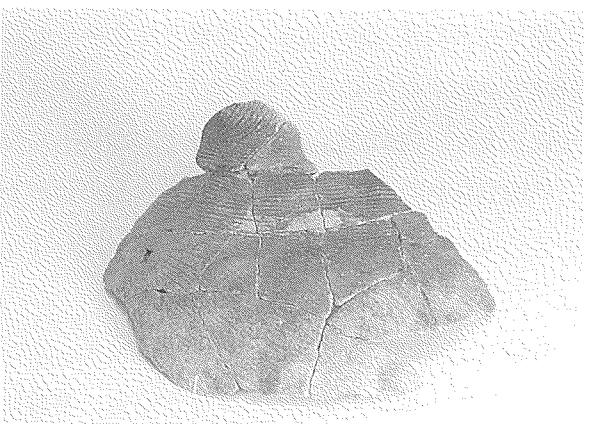


写真5-42 ク区SB01周辺土器群(133)

(3) 弥生時代 石製品

弥生時代の石製品としては、総数200点を超える石器類が出土している。その多くは、生業に関わる石器類が主体となっているが、少ないながらも青銅器や玉作り関連の石製品が出土しており、その出土位置の多くは居住域周辺の微高地にあたるク区を主体として波紋のように分布域が広がる状況が確認できた。器種としては、狩猟具あるいは武器としての石鏃や、農具の収穫具である石包丁や石鎌、各種工具の石斧、石錐、楔形石器、敲石、砥石など様々である。その器種構成は、これまでの朝日遺跡出土の弥生時代中期の内容に通有のものであり、今次の調査区でわずかながら認められた縄文時代後期の所産物は殆ど含まれないものと見ることができよう。以下、器種ごとに記述する(註1)。

1 狩猟具

石鏃(1~22) 基部の形状が凹基式、平基式、尖基式、有茎式の各型式の石鏃が認められる。尖基式、有茎式のものが多いが、大きさは最小のもので重さ0.9gから、最大で3.9gまでとばらつきを有する。石材は下呂石が主で、サヌカイトが次いでいる。チャートは1点にとどまる。居住域に相当するク区西側、殊にSB04周辺で数多く出土している。

(23・24)の2点は石鏃などの剥片石器を作り出す途中の未製品。

2 農具の収穫具

石包丁(25) 蛇紋岩製の磨製石包丁1点が出土している。著しく破損しており全形の復原は難しい。居住域から若干遠ざかるエ区SD16から出土。

石鎌(26) 打製石鎌の基部残欠片が1点のみ出土している。全形不詳。ホルンフェルス製。居住域に近いク区9E5j包含層から出土。

3 各種工具類

大型蛤刃石斧(27~30) 小破片を含めると計6点出土しているが、いずれも破損品である。うち2点(28・29)は敲石に転用されている。石材はハイアロクラストライトが5点あり、主体をなしている。その出土分布は居住域のク区に多いが、エ区のSD23(SZ22)からも刃部片の1点(27)が出土している。

扁平片刃石斧(31~35) 小破片を含めると計8点出土している。大きさは大小ばらつきがあるが、石材は8点中7点までがハイアロクラストライトで占められている。出土位置は、居住域のク区SB04周辺で6点と多く、他にク区東側包含層で1点出土した他、墓域のカ区SD13(SZ32)で1点出土している。

小型方柱状片刃石斧(36・37) 小型の鑿形を呈するハイアロクラストライト製の2点が出土している。ク区SD47(SZ41)から出土した石斧(37)は完存しており、全長14.7cmを測る。他の刃部片1点(36)はク区SB04内のP170から出土。

石錐(38~41) 打製の石錐が4点出土している。取っ手の付くタイプ(38)が1点ある他は、棒状の頭部と錐部の境が不明瞭なタイプである。石材は下呂石が2点の他は、チャートとサヌカイト各1点ある。いずれもク区の居住域周辺で出土。

石小刀(42) 両面調整によって作り出されている打製石器。1点のみ出土。折損品を再加工して楔あ

るいは削器として用いられたものか。石材はサヌカイト。ク区のSD49・50出土。

楔形石器 (43~48) 楔形石器の可能性が推定される石核を含めて計6点ある。両端部に加工及び使用による潰れ痕を認める。石材は下呂石が5点、サヌカイトが1点。皆、ク区の居住域で出土。

敲石 (49~91) 敲石は最も数多く出土している石器であり、計51点を数える。大きさは概ね大中小の3種に区別でき、重量が300g以下を小型、1000gを超えるものを大型として分類できる。小型品は指先で扱うもの、中型品は掌に納めて軽く操作できるもの、大型品は片手で操作するには負担を要するものとして、感覚的には認識できる。その形状を見ると、小型品は丸みを帯びた小円礫であり若干のぼらつきを有するが、中型品は棒状で握り易い形状の自然礫を用いたものが多数を占めている。打製調整して刃部を作り出している例(71)は例外的な存在であり、大多数は自然礫の両端や側縁にわずかばかりの敲打痕を留めるものである。石材は濃飛流紋岩が多数を占めている。その出土分布は居住域のク区に多いのであるが、墓域に相当するエ区やキ区、さらにはカ区やオ区においても、少ないながらも周溝墓の溝から出土していることは注意される。殊に、カ区のSD13(SZ32)底面で出土した棒状の中型品(75)には、片方の端部に水銀朱の付着することが確認されており(堀木氏付論6資料2)、同様の棒状中型品の1点(73)[オ区SD01(SZ28)出土]にも、未分析ではあるが微量の赤色顔料(鮮やかな朱色)が付着しているように観察されるのである。この2点共に居住域からはずれた周溝墓の溝から出土していることは注意する必要がある。

台石 (92・93) 台石の可能性のあるものを含めて計5点ある。平坦面を有する自然礫に若干の敲打痕や磨痕が認められる程度のものである。石材は濃飛流紋岩や砂岩。敲石とセットをなすものと推定されるが、いずれも周溝墓の溝からの出土であり、居住域の石器群とは直接的な関わりが少ない可能性が推測される。

磨石 (94) 1点のみ出土。明瞭な使用痕が観察できない。火を受けて赤色変化しているか。ク区のSD60(SZ40)より出土している。

環石 (95) 環石の破損品が1点ある。中央部の孔は両面から穿孔途中となっている。側面の敲打痕が顕著であるので、環石の破損品を敲石として再利用したのであろう。エ区の包含層出土。

砥石 (96~105) 粉々になった破損品が多く、全形を復元できるものが少ない。棒状のもの(96)や板状のもの(97)、小型のもの(98・99)、石皿状のもの(100)などがある。その形状や大きさもぼらつきが大きいので、用途も様々であったことが推測される。ざらざらした目の粗い軟質の砂岩を石材としている砥石が多い。出土位置はク区とエ区に限られている。

玉作りに関連する用途が推定できるものが少数ある。管玉の仕上げ用と推測される筋砥石が2点(101・102)、管玉の穿孔具である石針用と推定される筋砥石が3点ある(103~105)。石針砥石(103)がSB01の床面、玉砥石(102)がSB04を切るSD46から出土するなど、玉作り関連の砥石はすべてク区の住居跡周辺からの出土に限られる。

剥片・石核類 (106~128) 使用痕を有するサヌカイトの剥片が1点(106)ある。二次加工のある下呂石やサヌカイトの剥片が4点(107~110)見られる。この他にも下呂石が主体となる剥片や碎片、石核類が多数出土しているが、ここではサンプル的に採り上げている。これらは石鏃や石錐、楔形石器、あるいは、後述する管玉穿孔具の石針を製作する際の素材剥片や残核、碎片であることが理解される。下呂石の原石

(円礫)面を残す小型の翼状剥片が目立っている。大多数が居住域のク区で出土。

4 自然礫

自然礫 (129~191) 本調査区周辺の基盤層は単純な砂層で構成されていることから、自然礫といえども何らかの目的のために人為的に持ち込まれた可能性の高いことが推測される。軽く手に納まるピンポン玉ぐらいの大きさの小円礫が多く認められ、計60点を数える。濃飛流紋岩の小円礫が主であるが、少数の割円礫も含まれる。エ区とク区の周溝墓の溝から複数固まって出土しているものが目に付く。エ区のSD02 (SZ16) から5点、SD14 (SZ19) から3点、ク区のSD60 (SZ40) 6点、SD66 (SZ38) で3点などとなっている。

畿内での出土例に多数がまとまって出土することがあり、投弾である可能性が想定される場合があるが、ここでは出土位置が周溝墓の溝であることも念頭に置いた上で、取り敢えず留意すべき事象として報告するものである。

比較的大型の自然礫も6点 (189~191など) 出土している。明瞭な使用痕は認められないが、若干の平坦面を有するものが多いので、台石などに用いられた可能性を考慮すべきものであろうか。

5 玉作り関連資料

玉作り関連資料が、ク区の各所で出土している。

管玉 (192~197) 管玉の完成品が3点、未製品が3点ある。うち3点 (193・195・196) は緑色硬質、他は軟質の緑色凝灰岩製である。(193)の管玉は仕上げ磨きが施され、光沢を有している。未製品にはいくつかが異なる工程のものが認められる。多角柱状未製品に穿孔する途中で割れたもの (195)、縦長の素材剥片を押圧剥離調整によって整形している段階 (196)、角柱状未製品を研磨調整している段階 (197)のものなどがある。

角玉 (198) 軟質の緑色凝灰岩製の角玉が1点のみ検出された。四角柱の長軸方向の両端より穿孔が施されているが、未穿孔にとどまっている。ク区のSD50で出土。

玉素材ほか (199~217) ヒスイ製の玉を擦り切りによって小割にしたもの (199) が1点ある他は、多数の緑色凝灰岩と少数のメノウの素材剥片や残破片が出土している。玉作り関連資料の多数が出土しているSB04の覆土からは、多量の緑色凝灰岩のチップ類が水洗選別によって検出されている。素材剥片類には擦り切り溝が残されているものが割合多く見てとれることが特徴的である。また、角柱状未製品を作り出す段階で押圧剥離調整によって整形するものや (210)、研磨調整するもの (203) なども観察できる。

石鋸 (218~223) 玉作りの擦り切り工具と考えられる紅廉片岩製の石鋸が4点出土している。石鋸の素材片も2点認められる。うち1点の石鋸 (218) はSB04-P275で出土しており、後述する石針8点 (未製品1点含む) などと共に同一遺構内から出土していることで注意される。

石針 (224~243) 下呂石製の石針が33点、メノウ製の石針が2点検出された。メノウ製の石針2点 (224・232) は軸部がやや不整形な角柱状の打製品であり、下呂石製は多角 (八角前後が多い) 柱状の磨製品となっている。先端部はいずれも横方向の回転による摩滅痕を良くとどめており、中には先端部が出ベソ状を呈して錐糞の排出を窺わせるもの (224・230) なども観察できる。下呂石製の多角柱状の石針

は、総じて軸部が極端に細いことが特徴的で、シャープペンシルの芯と見違える程の直径1mm前後のものが多数を占めている。すべて使用後のものと考えられ、未使用（製作）時の本来の長さについては把握できない。現状では5mm以下になっているものが多い。なお、先端部片が多数を占めているのであるが、うち2点（227・231）については両端ともに回転摩滅痕が残されており、両端とも破損せずに生きていることが看取される。石針を使い切った最終段階のものであろうか。長さが3.5mmまでにちびている。

下呂石製の石針の未製品には、押圧剥離調整によるものと（234）、平板状に研磨するものの2点が認められる。縦長状（238）あるいは翼状の剥片（239）が石針素材として用いられたものと思われる。メノウ製の石針に関連するものには、円礫の石核（236）や板状剥片（237）、剥片・碎片（240・241・243）などが見出せる。赤色チャートの縦長剥片（242）も1点認められる。

6 石製銅鐸鑄型

石製銅鐸鑄型（244） ク区SK01南半側の埋土中から、弥生中期の土器片（朝日Ⅲ期か）少量と共に出土している。発掘調査時に検出したものではなく、出土後ただちに資料館に持ち帰り、水洗作業を済ませた後に確認した。発掘調査では、石ころといえども出土品として持ち帰ることを原則としていたことが効を奏したものと思われる。

鑄型片は、砂岩製で大きさが縦3.6cm、横3.0cm、重さ20.6gの小破片となっている（註2）。色調は保存処理前には、灰黄（2.5Y6/2）～黄灰色（2.5Y5/1）を呈していたが、保存処理後の現在はやや黒味が強くなった観がある。文様の彫り込まれた面は、わずかながら匙状に湾曲していることや、被熱による黒色変化している可能性があるなどの特徴が見て取れる。厚さが2cmから3cmある反対側では平坦な面をなしており、多数の細かい条線が斜めに平行して残されている（註3）。この2面以外は破断面となっており、鑄型全体の本来の形状を直接窺うことはできないが、凹面を有する鑄型の外型としての特徴を十分に備えていることが理解できる。この鑄型を外型として製品を推定復元すると、小型で筒形の銅鐸が想定できる。

凹面の鑄型面には、斜格子文帯と綾杉文帯が一条の界線で区切られて横方向に配されている。この斜格子文帯に続く位置では、さらに1条の界線に区切られて、緩く立ち上がる部分がわずかに残されている。肉眼では不鮮明な立ち上がりであるが、実体顕微鏡で見るとはっきりと見て取れる。鐸身裾近くの横帯には鋸歯文が用いられることが多いことや、鑄型の鐸身裾部分は湯口が開放式であった可能性が高いこと（難波200）などを考え併せると、この立ち上がりは、鐸身から舞に続く縁の部分に相当する蓋然性が高いものと判断される。複帯構成の横帯が舞に続く鐸身の上端部に当り、無軸の綾杉文が右向きから左向きの向かい合う構成となっている。この文様帯は幅1.3cm程しか残存しておらず、これに続くはずの鱗部については、あるかないかも含めて推測する手掛りを失っている。

鑄型面の湾曲と舞の残り具合から銅鐸の大きさを推定すると、舞の幅は、おそらくは10cm以下であり、この数値を基にして全形の復元を試みると、鐸身裾から鈕までの全高で20cmを若干上回るぐらいの大きさが無難な数値として推定できようか。

以上の諸要素から見て、この鑄型から製作された銅鐸の型式としては、荒神谷5号銅鐸などと共通項が多く看取できるものであり、菱環鈕1式に相当するとして、銅鐸最古式の一群に位置付けられる可能性が高いものと思われる。その所属時期については、出土位置や相伴土器、周囲の状況などから見て、朝日Ⅲ

期〔Ⅱ-3期（朝日式）〕頃である蓋然性が高く、朝日Ⅳ期〔Ⅲ-1～3期（貝田町式前半）〕まで降る可能性はまずないものと考えられよう。

註1 石器類の整理・報告に当っては、斎藤基生氏、水野裕之氏より適宜ご教示頂いた。石製銅鐸鑄型については、深澤芳樹氏、難波洋三氏、石黒立人氏、宮腰健司氏、松井一明氏、黒沢 浩氏、北島大輔氏ほかの多くの方より有益なご教示を頂いている。記して謝意を表する次第である。

註2 肉眼による観察では、全体に黄灰色を呈する硬質で比較的きめの細かい砂岩であり、所々で、節理状の黒く細い筋が鑄型面から背面に向かって見える。全体的に細かい金雲母と石英の粒がキラキラと見え、背面側の方がやや橙色で砂勝ちとなっており均質でない。石質に関して岩石学的な分析を実施していないが、鑄型表面のX線回析分析の結果（高妻・降幡両氏付論5）からも、主な鉱物として石英と雲母が検出されている。これらの諸特徴から、この鑄型片の石材が地元産であったと仮定すれば、いわゆる「河戸石」（こうずいし）と通称される硬質砂岩の特徴と近似する。当地周辺の尾張から美濃にかけては、中近世に石塔や石垣などの用材として盛んに用いられており、現在の岐阜県海津市南濃町の養老山系で採掘されたと言われている。朝日遺跡とは距離的に近く、石材の入手先としては蓋然性が高いように思われるが、確実なことは言えない。

註3 文様面の背面の平坦面に残された多数の平行する条線については、鑄型外面の旧状をとどめている可能性（削痕か）があると見るか、砥石に再利用された可能性（擦痕と見るか）があると見るか、判然としない。鑄型の文様面が被熱によってやや黒色変化しているのを見てとれることや、文様面に見えるひび割れが鑄型内部の深さ10mmまで亀裂が及んでいることなどから（高妻・降幡両氏付論5）、複数回の銅鐸鑄造を行なったことが推測される。その結果、鑄型が劣化して粉々に割れたものが廃棄されたものと推測することも可能性としてあり得るかもしれない。

<参考文献>

石黒立人 1993 『朝日遺跡Ⅳ』 愛知県埋蔵文化財センター

難波洋三 2000 「同範銅鐸の展開」 『シルクロード学研究叢書』3 シルクロード学研究センター

（4） 弥生時代 土製品

土製品は、有孔加工円盤と加工円盤の各1点のみ出土。

有孔加工円盤（245） 表面ハケ目調整の土器片を円盤状に整形し、側辺を研磨している。中央に直径4.3mmの孔があげられている。ク区9E6i包含層の出土。

加工円盤（246） 表面ハケ目調整の土器片を円盤状に整形し、側辺を研磨している。孔はあげられてない。ク区SB04の周溝から出土。

（5） 弥生時代 鹿角製品

鹿角製品には髪飾りが推定されるものと、固定銚頭の各1点のみ出土している。

髪飾り？（247） 鹿角製髪飾りの小破片であろうか。断面が三角形で、両面とも加工痕をとどめる。青白色を呈しており、焼けていることが推測される。ク区SD61から出土。

銚頭（248） 鹿角製固定銚頭の先端部片。逆刺が先端の片側のみ確認できる。青白色を呈しており、焼けている可能性が推測される。ク区SD60（SZ40）埋土上位から出土。

（6） 弥生時代 木製品

平鋤（249） オ区SZ25の南溝SD11から、一木平鋤が1点出土している。出土地点はSD11のほぼ中央で、溝底に密着した状況で出土した。

柄部の上半と身部の多くは欠損しており、全長は不明だが、残存長は約43cmである。身部は片側縁が遺存しており、復元幅はおよそ14cm程度で、身幅はかなり細い。樹種は未同定だが、おそらくアカガシ亜属と思われ、木取りは柾目である。

朝日遺跡における方形周溝墓からの鍬鋤類の出土例は、愛知県埋蔵文化財センターの調査による、朝日Ⅱ期（朝日式）の61N区SZ208西溝から直柄平鍬2点、朝日Ⅴ期（貝田町式後半）の61T区SZ301北溝から一木平鋤3点・組合せ平鋤2点・鋤柄1点、同じく朝日Ⅴ期の61T区SZ303西溝から直柄平鍬2点・組合せ平鋤1点が知られている（愛知県埋蔵文化財センター1992）。これらはいずれも墳丘の長軸が15mを超える大型の方形周溝墓（SZ301・303は長軸30m以上）からの出土で、しかも溝底に埋納あるいは据え置かれたような状況で出土していることから、造墓にかかわる儀礼ないしは墓坑の掘削にのみ使用された可能性が高いとされている（樋上2000）。

今回、一木平鋤が出土したSZ25は、墳丘の長軸が6m弱と小型であることから、朝日遺跡では（超）大型方形周溝墓に限らず、むしろ普遍的に造墓に際して鍬・鋤類の埋納が行われていたと推定できる点で貴重な事例といえよう。

<参考文献>

愛知県埋蔵文化財センター 1992 『朝日遺跡Ⅲ』

樋上 昇 2000 「木製農耕具ははたして農耕具なのか」『考古学研究』第47巻第3号

（7） 弥生時代 自然遺物

植物遺体（250・251） 水洗選別資料の中に炭化米（250）やオニグルミ（251）が少数ながら認められた。炭化米はSB02床面で検出されたSK03やSB04、オニグルミもSB04で出土。

赤色顔料（252） 赤色顔料については、堀木氏付論6で報告されているように、調査区各所で出土した石器や土器片、さらには周溝墓の主体部の埋土からも検出されている。殊に、SB04からは水洗選別資料中に多量の粉末状、あるいは顆粒状を呈するベンガラ（堀木氏付論6試料6）を検出している。SB04から程近いSD70からも顆粒状の赤色物質が水洗選別により検出している（252）。SB01やSB02の覆土についても水洗選別を実施しているが、ベンガラと思しき赤色物質は見出していない。SB04周辺においてベンガラの生産、あるいは大量使用の行われていた状況がうかがえる。

（8） 古墳時代～近世

古墳時代 須恵器の杯部小片1点がク区包含層内で出土している。

中世 山茶碗や土師器、施釉陶器の小片がエ区とク区の包含層内でわずかながら出土している。

近世 各区の包含層で近世陶器片が少量出土した他、エ区において該期唯一の遺構としてSD01がある。埋土の下位では江戸後期から幕末にかけての瀬戸美濃窯陶器（253）や火打石（254）、火箸（255・256）などが少量出土しているが、埋土上位では近代以降に降る陶磁器片の出土が見られた。

表5-6 遺物観察表(1)

図No.	仮No.	器種	地区	出土位置	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	材質	備考
1	28	石鏃	13エ	SK11	5.10	1.60	0.60	3.5	下呂石	尖基長三角形
2	36	石鏃	13エ	SD11	3.10	1.50	0.55	2.0	下呂石	有基三角形/先端部欠損
3	182	石鏃	ク	SB03西壁/水洗選別No.178	1.70	1.65	0.60	0.9	下呂石	尖基菱形?/上部欠損
4	58	石鏃	ク	SB04	1.85	0.97	0.27	0.4	サヌカイト	小型/有基三角形/完形
5	102	石鏃	ク	SD75	2.40	1.70	0.55	1.9	下呂石	平基三角形/完形
6	103	石鏃	ク	SB04-P271西	3.00	1.61	0.55	2.4	サヌカイト	尖基菱形/完形
7	110	石鏃	ク	SB04-SD78	2.65	1.50	0.52	1.7	下呂石	有基三角形/基部欠損
8	188	石鏃	ク	SB04-H区/水洗選別No.188	2.90	1.00	0.50	1.0	下呂石	尖基菱形/先端と左側一部欠損
9	51	石鏃	ク	SD45北側壁下位	3.10	1.40	0.70	2.3	下呂石	有基/先端部欠損
10	47	石鏃	ク	SD50東上位	3.90	1.50	0.65	2.5	下呂石	有基長五角形/完形
11	54	石鏃	ク	SD53西	3.30	1.40	0.50	1.6	サヌカイト	有基長五角形/先端及び基部わずかに欠損
12	163	石鏃	ク	SK06西	2.70	1.30	0.50	0.9	下呂石	尖基菱形/先端わずかに欠損
13	181	石鏃	ク	SK12中央/水洗選別No.141	2.20	1.20	0.45	1.0	下呂石	有基三角形/先端及び基部欠損
14	1	石鏃	ク	ク区東側包含層上位	4.70	1.50	0.50	2.9	下呂石	有基長五角形/基部及び先端欠損
15	52	石鏃	ク	9E7i包含層	3.10	1.60	0.50	1.5	下呂石	有基五角形/完形
16	53	石鏃	ク	SD62南上位	2.40	1.50	0.60	1.7	下呂石	凹基五角形/先端僅かに欠損
17	56	石鏃	ク	9F6h包含層	3.00	2.30	0.80	3.2	下呂石	有基三角形/両端部欠損
18	57	石鏃	ク	9F7c包含層	4.20	1.80	0.60	3.7	サヌカイト	有基長五角形/先端欠損
19	104	石鏃	ク	9E7i包含層	2.83	1.40	0.65	2.1	サヌカイト	尖基菱形/完形
20	105	石鏃	ク	9E5j包含層	2.48	1.20	0.40	1.1	下呂石	三角形/基部欠損
21	106	石鏃	ク	9E7i包含層	3.21	1.90	0.74	3.9	サヌカイト	平基三角形/先端部欠損
22	107	石鏃	ク	9E6i包含層	3.60	1.50	0.53	2.3	チャート	有基長五角形/完形
23	6	石鏃等の未製品	ク	SD07西	3.50	3.40	0.70	9.3	サヌカイト	
24	148	石鏃等の未製品	ク	9F5b包含層	3.30	2.55	1.00	8.1	下呂石	
25	35	石包丁	13エ	SD16上位	7.60	5.60	0.90	46.8	蛇紋岩	破損品/形状不明
26	7	石鏃	ク	9E5j包含層	4.70	4.60	1.20	21.4	ホルンフェルス	基部片
27	26	大型蛤刃石斧	エ	SD23開壁中位	6.20	5.80	3.70	200.0	ハイアロ	刃部片
28	69	大型蛤刃石斧	ク	ク区包含層上位	10.70	6.10	2.75	264.0	ハイアロ	身部片/破石に再利用
29	70	大型蛤刃石斧	ク	9E5i包含層	7.50	6.80	3.50	250.0	ハイアロ	身部片/破石に再利用
-	113	大型蛤刃石斧	ク	SD61南	2.50	2.50	2.50	8.3	ハイアロ	刃部小破片
30	133	大型蛤刃石斧	ク	9F7c包含層	8.80	2.90	2.90	68.0	蛇紋岩	基部~側縁部片
-	149	大型蛤刃石斧	ク	9F5b包含層	4.60	2.10	0.70	6.3	ハイアロ	身部小破片
31	35	扁平片刃石斧	カ	SD13上位	4.75	2.80	0.80	16.0	ハイアロ	小型品/ほぼ完形
32	50	扁平片刃石斧	ク	SD42	4.45	4.20	1.30	34.0	ハイアロ	刃部片
-	109	扁平片刃石斧	ク	SB04	2.85	1.70	1.08	3.8	ハイアロ	身部小破片
33	111	扁平片刃石斧	ク	SB04	2.90	2.50	0.70	6.7	ハイアロ	身部小破片
-	248	扁平片刃石斧	ク	SB04-E区	1.90	1.00	0.30	0.8	ハイアロ	基部側縁部小破片
34	172	扁平片刃石斧	ク	9F7d包含層	4.30	3.15	0.60	15.0	ハイアロ	基部欠損
35	190	扁平片刃石斧	ク	ク区東側包含層上位	5.90	2.85	1.35	19.2	変成岩	刃部~側縁部片
-	118	扁平片刃石斧	ク	9F7d包含層	2.55	1.31	0.80	2.0	ハイアロ	刃部小破片
36	48	方柱状片刃石斧	ク	SB04-P170	4.40	0.80	1.10	7.1	ハイアロ	刃部片
37	49	方柱状片刃石斧	ク	SD47東	14.70	1.10	1.30	51.5	ハイアロ	完形
-	92	磨製石斧	ク	SD45	2.10	0.85	0.35	0.7	蛇紋岩	身部小破片
-	93	磨製石斧	ク	ク区包含層上位	2.10	1.45	0.58	2.6	ハイアロ	身部小破片
-	97	磨製石斧	ク	9F7c包含層	2.78	1.52	0.30	1.2	ハイアロ	身部小破片
38	99	石鏃	ク	9F6f包含層	4.22	4.10	1.00	11.2	下呂石	頭部翼状
39	114	石鏃	ク	9E7i包含層	2.80	0.80	0.62	1.4	下呂石	縦割れている
40	17	石鏃	ク	SD32東	2.30	0.90	0.80	1.8	チャート	頭部四角柱
41	135	石鏃	ク	SD64東	2.25	0.85	0.50	1.0	サヌカイト	頭部及び刃部先端欠損
42	174	石小刀	ク	SD49・SD50	3.10	2.05	0.90	5.3	サヌカイト	石小刀の欠損品を再加工している
43	98	楔形石器	ク	SB04	2.05	1.90	0.98	3.4	下呂石	両端部刃潰れ
44	101	楔形石器	ク	9E7i包含層	1.40	1.30	0.60	1.0	サヌカイト	下端がV字に整形されている
45	175	楔形石器	ク	SD62南上位	2.85	3.10	0.90	7.7	下呂石	原石を残す
46	138	石核(楔形石器?)	ク	SD61南	3.50	3.20	1.25	14.8	下呂石	両端打撃の跡がある
47	139	石核(楔形石器?)	ク	SD61南	4.20	2.40	1.10	8.6	下呂石	両端に加工/上部に潰れあり
48	177	石核(楔形石器?)	ク	9F5b包含層	3.50	2.80	1.00	12.0	下呂石	原石を残す
-	1	敲石(小型)	13エ	SK15	5.00	6.10	3.60	130.0	安山岩	側面及び上面に敲打痕
49	3	敲石(小型)	13エ	SD14	6.95	7.00	2.80	158.0	チャート	上部及び下部に敲打痕
50	8	敲石(小型)	13エ	SD06東端	4.40	4.60	2.70	66.5	安山岩?	下端に剥離
-	125	敲石(小型)	ク	SB04	7.00	6.50	2.05	84.0	チャート	破損品/各面より使用され剥離している
51	129	敲石(小型)	ク	SB04	7.12	5.70	5.25	283.0	玄武岩質安山岩?	一部剥離/両端に敲打痕
52	155	敲石(小型)	ク	SB04	7.65	5.95	3.92	258.0	チャート	両端部使用痕あり
53	180	敲石(小型)	ク	SD44	6.55	4.20	3.70	122.0	濃飛流紋岩	一部欠損/敲打痕4箇所
54	140	敲石(小型)	ク	SD61南	9.10	3.50	2.10	82.0	砂岩	下部に敲打痕
55	171	敲石(小型)	ク	SD62北	6.65	5.35	3.50	150.0	チャート	下端と右側縁に剥離と潰れが目立つ
56	154	敲石(小型)	ク	ク区西側包含層(表土混)	5.71	3.45	2.55	73.0	濃飛流紋岩	一部欠損/下部に敲打痕
57	5	敲石(中型)	13エ	SD10	9.50	6.20	4.40	360.0	チャート	下部部に敲打痕
58	6	敲石(中型)	13エ	SD10	10.90	7.00	3.70	435.0	安山岩?	各所に敲打痕
59	32	敲石(中型)	13エ	SD10	12.70	5.80	4.60	507.0	濃飛流紋岩	両端及び側面に敲打痕
-	14	敲石(中型)	13エ	SD11	7.50	5.90	4.80	276.0	濃飛流紋岩	破損品/各所に敲打痕
60	17	敲石(中型)	13エ	SD12	11.80	6.30	3.40	355.0	濃飛流紋岩	両端に敲打痕
-	18	敲石(中型)	13エ	SD12	8.40	7.70	5.20	373.0	濃飛流紋岩	破損品/側面及び上面に敲打痕
61	25	敲石(中型)	エ	SD36上位	10.70	7.40	4.60	530.0	石英斑岩	各所に敲打痕
62	27	敲石(中型)	エ	SD30上位	12.90	4.50	4.00	350.0	濃飛流紋岩	両端及び前面に敲打痕
63	28	敲石(中型)	エ	SD30南	14.40	6.40	4.60	615.0	濃飛流紋岩	各所に敲打痕
64	32	敲石(中型)	エ	SD30南	13.20	6.10	4.50	476.0	玄武岩質安山岩?	側面に敲打痕
65	29	敲石(中型)	エ	SD22上位	11.90	5.60	4.60	463.0	砂岩	各所に敲打痕
66	33	敲石(中型)	エ	SD29北	13.60	6.70	4.20	620.0	ホルンフェルス	一部欠損/各所に敲打痕
67	37	敲石(中型)	エ	エ区南西側遺構検出	12.40	5.50	4.80	448.0	濃飛流紋岩	両端部敲打痕
68	42	敲石(中型)	エ	SD22下位	14.40	5.80	4.60	566.0	濃飛流紋岩	下面に敲打痕
69	44	敲石(中型)	エ	SD22西下位	13.20	6.80	4.40	514.0	濃飛流紋岩	一部欠損/全面に1箇所凹み/各所に敲打痕
70	130	敲石(中型)	エ	SD22下位	9.30	6.80	5.60	570.0	ハイアロ	上部に敲打痕
71	45	敲石(中型)	エ	エ区南西側遺構検出	11.30	9.50	5.40	665.0	砂岩	刃部作出/下部刃潰れ/上部に敲打痕あり
72	12	敲石(中型)	オ	SD04遺構検出	12.90	6.50	6.50	750.0	濃飛流紋岩	一部欠損/各所に強い敲打痕
73	40	敲石(中型)	オ	SD01東	12.10	5.70	3.90	320.0	濃飛流紋岩	下面に敲打痕/両端に微量の赤色顔料付着か?(未分析)
74	4	敲石(中型)	カ	SD02上面土器群	13.50	6.00	3.30	406.0	ホルンフェルス	端部及び側面に敲打痕
75	195	敲石(中型)	カ	SD13 レンチ底面	13.30	5.60	4.90	572.0	濃飛流紋岩	両端に敲打痕/先端に水銀朱付着/付論6試料2
76	41	敲石(中型)	キ	SD01南	12.00	5.80	4.30	412.0	濃飛流紋岩	各所に敲打痕
77	2	敲石(中型)	ク	SD16	12.90	5.30	4.00	405.0	砂岩	両端に敲打痕
-	8	敲石(中型)	ク	SD03	10.30	4.70	3.70	253.0	砂岩	破損品/側面及び前面に敲打痕
78	9	敲石(中型)	ク	ク区表土層下位~包含層上位	12.80	5.30	4.70	433.0	ホルンフェルス	前面に敲打痕
79	24	敲石(中型)	ク	9E7h土器群 (SB01周辺)	15.40	7.50	4.20	740.0	濃飛流紋岩	両端に敲打痕
80	55	敲石(中型)	ク	SD45北	10.40	9.20	5.00	727.0	珉岩	側面全周に敲打痕

表5-7 遺物観察表(2)

図No.	版No.	器種	地区	出土位置	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	材質	備考
81	128	敲石(中型)	ク	SB01-2区	12.10	5.30	4.80	388.0	濃飛流紋岩	両端に敲打痕
82	160	敲石(中型)	ク	ク区中央包含層上位	12.50	5.95	4.70	465.0	濃飛流紋岩	両端に敲打痕
83	164	敲石(中型)	ク	9E7i土器群 (SB01周辺)	13.15	5.10	4.50	425.0	流紋岩?	両端に敲打痕
84	165	敲石(中型)	ク	9E7h土器群 (SB01周辺)	11.45	6.10	5.55	600.0	濃飛流紋岩	下端にのみ敲打痕
85	194	敲石(中型)	ク	9E7h土器群 (SB01周辺)	11.85	5.80	3.60	347.0	濃飛流紋岩	下端に敲打痕
86	33	敲石(大型)	13エ	SD13	16.30	8.10	8.10	1300.0	濃飛流紋岩	両端に敲打痕
87	36	敲石(大型)	エ	SD22西下位	13.10	14.50	8.30	2400.0	濃飛流紋岩	碟器状を呈する
—	31	敲石(大型)	エ	SD22上位	10.10	8.00	6.40	665.0	濃飛流紋岩	破損品/上面に敲打痕
88	39	敲石(大型)	エ	SD30南	10.80	9.00	6.00	817.0	濃飛流紋岩	下面に敲打痕
—	30	敲石(大型)	エ	SD30南	8.50	6.60	6.70	490.0	濃飛流紋岩	破損品/上面2箇所敲打痕
89	38	敲石(大型)	オ	SD04上位	13.20	7.60	4.80	697.0	濃飛流紋岩	両端及び前面に敲打痕
90	156	敲石(大型)	ク	SD61南	18.45	7.50	5.60	1300.0	濃飛流紋岩	両端にかすかな敲打痕
91	161	敲石(大型)	ク	9F7d包含層	15.75	10.20	4.80	1140.0	濃飛流紋岩	両端に敲打痕
—	12	敲石(大型)	ク	ク区東側包含層上位	6.90	7.60	5.20	312.0	濃飛流紋岩	破損品/下部に敲打痕
92	10	台石	13エ	SD06	18.60	16.20	9.10	2700.0	砂岩	凹み1箇所
—	43	台石	キ	SD05	9.80	9.80	5.90	800.0	濃飛流紋岩	破損品/前面平坦
93	3	台石	ク	SD22	14.90	11.60	6.60	1500.0	砂岩	完形/各所に敲打痕/側面に磨痕/側面全周が被熱で黒色化
—	4	台石?	13エ	SD10	15.60	11.40	8.20	2000.0	濃飛流紋岩	明瞭な使用痕なし
—	31	台石?	13エ	SD19	20.90	15.20	6.50	3000.0	濃飛流紋岩?	明瞭な使用痕なし/片面に自然の凹み
94	196	磨石	ク	SD60西	11.40	10.80	6.90	1200.0	安山岩?	使用痕不明瞭/平坦面使用か/付録6試料7
95	34	環石	エ	9E3a周辺包含層	13.30	9.50	7.60	1020.0	安山岩	破損品/両面から穿孔途中/側面に敲打痕/半径10.2cm
—	34	砥石	13エ	SD01	3.40	2.70	3.00	36.2	珪岩?	破損品/細目
—	167	砥石	ク	SB04	6.60	2.80	3.50	58.0	砂岩	破損品/粗目/上面のみ使用痕/被熱で赤色化
96	168	砥石	ク	SB04	4.57	3.00	2.75	45.8	凝灰岩	下部欠損/4面使用/粗目
—	247	砥石	ク	SB04-E区	1.20	0.90	0.30	0.6	砂岩	小型品/小破片/粗目
—	183	砥石	ク	SD46東上位	2.85	2.10	0.60	4.0	砂岩	小型品/破損品/表裏使用/粗目
—	242	砥石	ク	SD46	1.70	3.10	1.10	6.9	砂岩	小型品/3面使用/小破片
—	234	砥石	ク	SD47東	2.60	2.70	1.70	14.4	砂岩	小破片/粗目
—	239	砥石	ク	SD47西	2.50	1.70	2.50	17.0	砂岩	小破片/粗目
—	240	砥石	ク	SD47西	4.10	3.00	0.80	15.2	砂岩	小破片/粗目
—	245	砥石	ク	SD47東	5.20	2.40	2.30	12.6	砂岩	小破片/粗目
—	237	砥石	ク	SD48東	4.70	4.90	2.90	91.5	砂岩	小破片/粗目
—	236	砥石	ク	SD49	4.70	4.70	8.20	139.0	砂岩	小破片/粗目
97	193	砥石	ク	SD55	6.70	4.60	1.60	59.5	砂岩	破損品/3面使用/粗目
98	166	砥石	ク	SD61	5.05	3.85	1.30	25.0	砂岩	小型品/破損品/粗目/4面使用
—	68	砥石	ク	9F5a包含層	8.25	6.70	3.80	323.0	砂岩	破損品/粗目
99	152	砥石	ク	ク区西側包含層(表土混)	4.60	2.50	0.65	9.8	砂岩	小型品/破損品/中目
—	153	砥石	ク	ク区西側包含層(表土混)	5.50	3.85	2.05	44.0	砂岩	破損品/粗目
100	157	砥石	ク	9F5c包含層1点・9F5b包含層2点接合	16.00	12.10	3.10	745.0	砂岩	破損品/粗目/一部使用により溝状にくぼむ/被熱で赤色化
—	162	砥石	ク	9F7d包含層	8.80	8.80	3.80	285.0	砂岩	破損品/粗目/縁辺明き
—	191	砥石	ク	ク区西側包含層(表土混)	2.40	2.45	2.30	17.0	砂岩	表裏使用/表面にわずかに溝あり/破損品/粗目
—	235	砥石	ク	9F5b包含層	6.10	2.30	3.90	45.0	砂岩	小破片/粗目
—	238	砥石	ク	9F5b包含層	8.70	5.90	3.20	263.0	砂岩	小破片/粗目
—	241	砥石	ク	9F6e包含層	4.90	3.30	1.80	14.0	砂岩	小破片/粗目
—	243	砥石	ク	ク区東側包含層上位	2.70	1.60	0.90	4.3	砂岩	小破片/粗目
—	244	砥石	ク	9F6e包含層	2.20	1.40	1.10	4.2	砂岩	小型品/小破片/粗目
—	246	砥石	ク	ク区東側南壁面	2.40	0.80	1.00	2.2	砂岩	小破片/粗目
101	192	砥石(玉用?)	ク	9F5b包含層	2.38	1.60	0.70	3.1	砂岩	小型品/溝2面にあり/粗目
102	146	砥石(玉用?)	ク	SD46隔壁以東	3.20	2.25	1.80	15.0	砂岩	4面使用/側面の溝は玉用
103	75	砥石(石針用?)	ク	SB01-1区床直	2.50	1.10	0.80	3.7	砂岩	4面使用/石針用?の溝15箇所
104	147	砥石(石針用?)	ク	9F5b包含層	2.00	2.00	0.63	3.0	砂岩	様々なサイズの溝が13箇所/裏面以外は面的にも使用
105	179	砥石(石針用?)	ク	9F7b包含層	2.85	2.80	0.80	5.4	砂岩	溝2条/上部の欠損も溝から
106	96	使用痕のある剥片	ク	9F7e包含層	2.70	2.20	0.40	2.1	サヌカイト	刃こぼれ状の使用痕
107	14	二次加工のある剥片	ク	9E7h包含層	3.10	2.10	0.60	3.3	下呂石	石錐等の未製品か
108	100	二次加工のある剥片	ク	9F6f包含層	2.95	1.20	0.30	1.0	サヌカイト	石錐等の未製品か
109	141	二次加工のある剥片	ク	9F6f包含層	2.45	1.85	0.47	1.4	下呂石	石錐等の未製品か
110	143	二次加工のある剥片	ク	SD45隔壁際トレンチ	2.70	1.60	0.38	1.3	下呂石	石錐等の未製品か
111	5	剥片	ク	9E7i包含層	4.20	2.30	0.30	2.0	サヌカイト	
112	94	剥片	ク	9F7e包含層	3.65	1.42	0.60	2.5	下呂石	
113	95	剥片	ク	9F7e包含層	3.20	1.45	0.70	2.0	サヌカイト	原石面を残す
114	116	剥片	ク	9F7d包含層	2.80	2.40	0.50	2.7	下呂石	
115	117	剥片	ク	9F7d包含層	2.75	2.40	1.00	5.5	下呂石	
116	126	剥片	ク	9E7i包含層	3.75	2.50	0.80	4.4	下呂石	
117	22	剥片	ク	SD07東端上位	3.80	3.10	1.00	7.0	下呂石	原石面を残す
118	112	剥片	ク	SD61南	2.90	2.50	0.50	3.7	下呂石	
119	137	剥片	ク	SD61南	2.30	1.60	0.45	0.7	サヌカイト	
120	132	剥片	ク	SB02-3区	3.40	2.45	0.50	3.5	下呂石	全面風化
121	173	剥片	ク	SB03	3.85	2.90	5.80	4.9	下呂石	原石面を残す
122	78	砕片	ク	SB04	3.00	1.83	1.80	8.1	下呂石	原石面を残す
123	124	砕片	ク	SB04	1.18	0.53	0.20	0.1以下	下呂石	
124	115	砕片	ク	9E7i包含層	2.70	1.80	1.35	6.6	下呂石	原石面を残す
125	127	砕片	ク	9E7i包含層	2.20	1.40	0.35	0.5	下呂石	全面風化
126	13	残核	ク	9E6i包含層	2.40	1.80	1.10	3.0	下呂石	
127	159	石核	ク	SD48北東上位	4.70	3.80	2.85	42.0	下呂石	各所から剥片を打ち出している/元は円盤
128	178	石核	ク	SD44	5.90	3.40	2.80	48.0	下呂石	上部の潰れは剥片を取る際のものか/元は円盤
129	2	自然礫(小門礫)	13エ	SK15	3.35	2.80	1.90	22.6	濃飛流紋岩	
130	24	自然礫(小門礫)	13エ	SD02下位	4.00	3.30	2.60	49.4	濃飛流紋岩	
131	25	自然礫(小門礫)	13エ	SD02西下位	3.20	2.60	1.80	18.2	砂岩	
132	26	自然礫(小門礫)	13エ	SD02西下位	3.50	2.50	2.10	20.8	チャート	
133	27	自然礫(小門礫)	13エ	SD02西下位	2.40	2.10	1.70	10.8	濃飛流紋岩	
134	30	自然礫(小門礫)	13エ	SD02	4.10	3.10	2.30	36.0	濃飛流紋岩?	
135	19	自然礫(小門礫)	13エ	SD04上~中位	3.60	3.40	2.80	48.4	濃飛流紋岩	
136	20	自然礫(小門礫)	13エ	SD04上~中位	4.10	2.60	2.60	37.6	アブライト?	
137	10	自然礫(小門礫)	13エ	SD06中央下位	2.60	2.60	2.30	22.4	濃飛流紋岩	
138	7	自然礫(小門礫)	13エ	SD06東端下位	4.00	3.10	2.60	33.6	花崗岩	
139	11	自然礫(小門礫)	13エ	SD10	4.90	2.20	1.70	23.8	チャート	
140	29	自然礫(小門礫)	13エ	SD11	3.10	2.90	2.30	28.0	濃飛流紋岩	
141	15	自然礫(小門礫)	13エ	SD12北下位	3.20	3.20	2.40	32.6	濃飛流紋岩	
142	16	自然礫(小門礫)	13エ	SD12南	4.60	3.50	2.50	52.0	濃飛流紋岩?	
143	21	自然礫(小門礫)	13エ	SD14上位	4.10	3.70	2.60	57.0	流紋岩	
144	22	自然礫(小門礫)	13エ	SD14上位	3.80	3.10	2.60	41.4	濃飛流紋岩	
145	23	自然礫(小門礫)	13エ	SD14上位	3.40	2.70	2.20	22.4	濃飛流紋岩?	
146	214	自然礫(小門礫)	カ	SD13上位	3.90	3.30	2.80	47.8	濃飛流紋岩	

表5-8 遺物観察表(3)

図No	仮No	器種	地区	出土位置	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	材質	備考
147	222	自然礫(小門礫)	キ	SD02北壁断面	4.60	3.20	2.85	55.0	流紋岩	
148	221	自然礫(小門礫)	ク	SD03	4.70	3.10	2.95	53.0	濃飛流紋岩	
149	11	自然礫(小割礫)	ク	SD04	5.00	3.20	1.90	31.8	チャート	
150	207	自然礫(小門礫)	ク	SD07上位	4.10	2.70	2.60	42.2	濃飛流紋岩	
151	16	自然礫(小割礫)	ク	SD07上~中位	3.60	2.60	2.10	22.8	チャート	
152	206	自然礫(小門礫)	ク	SD08	4.40	3.20	2.90	56.5	砂岩	
153	225	自然礫(小門礫)	ク	SD09	3.70	3.10	2.30	33.4	濃飛流紋岩	
154	15	自然礫(小割礫)	ク	SD15西	4.00	3.80	2.60	56.0	チャート	
155	20	自然礫(小割礫)	ク	SD15西	3.50	3.10	2.60	30.8	チャート	
156	226	自然礫(小門礫)	ク	SD16南	3.60	3.20	2.10	33.2	濃飛流紋岩	
157	227	自然礫(小門礫)	ク	SD16南	3.55	3.50	2.40	36.8	花崗岩	
158	21	自然礫(小割礫)	ク	SD31東	4.60	4.20	2.10	51.0	濃飛流紋岩	
159	213	自然礫(小門礫)	ク	SD32東	3.40	2.80	2.20	25.8	濃飛流紋岩	
160	205	自然礫(小門礫)	ク	SD45最南部	4.20	2.90	2.60	46.4	濃飛流紋岩	
161	223	自然礫(小門礫)	ク	SD45北上位	4.55	4.10	2.60	47.0	石英	
162	224	自然礫(小門礫)	ク	SD45北上位	4.15	3.30	2.35	44.8	花崗岩	
163	201	自然礫(小門礫)	ク	SD46間壁以西	4.20	3.20	2.00	37.4	濃飛流紋岩	
164	217	自然礫(小門礫)	ク	SD47東	3.90	3.10	2.30	35.0	濃飛流紋岩	
165	204	自然礫(小門礫)	ク	SD49・SD50	4.20	3.70	2.90	65.0	濃飛流紋岩	
166	211	自然礫(小門礫)	ク	SD50北上位	5.65	3.95	2.30	67.0	濃飛流紋岩	
167	215	自然礫(小門礫)	ク	SD50	4.60	3.10	2.50	50.5	濃飛流紋岩	
168	216	自然礫(小門礫)	ク	SD50	4.65	2.90	2.35	45.4	花崗岩	
169	228	自然礫(小門礫)	ク	SD50東下位	3.50	3.10	2.50	31.0	玄武岩?	
170	229	自然礫(小門礫)	ク	SD50東下位	3.70	3.60	3.00	49.0	濃飛流紋岩	
171	199	自然礫(小門礫)	ク	SD51間壁上位	4.10	2.80	2.30	30.2	濃飛流紋岩	
172	198	自然礫(小門礫)	ク	SD55南	3.70	3.00	2.40	40.4	濃飛流紋岩	
173	197	自然礫(小門礫)	ク	SD58西	3.80	3.10	2.20	35.2	濃飛流紋岩	
174	200	自然礫(小門礫)	ク	SD58東間壁下位	4.30	3.80	2.80	52.0	安山岩?	付論6試料10
175	210	自然礫(小門礫)	ク	SD58	5.40	3.60	3.10	79.5	砂岩	
176	176	自然礫(小門礫)	ク	SD60東下位	7.80	3.60	3.35	135.0	安山岩?	
177	218	自然礫(小門礫)	ク	SD60間壁寄りサブトレ	4.30	3.40	1.70	32.2	砂岩	
178	219	自然礫(小門礫)	ク	SD60間壁寄りサブトレ	4.20	3.55	3.20	62.5	砂岩	
179	230	自然礫(小門礫)	ク	SD60東上位	4.90	3.55	2.85	65.0	ホルンフェルス?	
180	231	自然礫(小門礫)	ク	SD60東上位	3.90	3.10	2.55	45.6	濃飛流紋岩	
181	232	自然礫(小門礫)	ク	SD60東上位	3.70	3.00	2.30	34.0	安山岩?	
182	209	自然礫(小門礫)	ク	SD62南上位	3.50	2.70	2.40	27.8	安山岩?	
183	220	自然礫(小門礫)	ク	SD65間壁	5.50	4.00	2.90	82.0	花崗岩	
184	202	自然礫(小門礫)	ク	SD66南上位	4.60	2.90	2.30	45.2	濃飛流紋岩	
185	203	自然礫(小門礫)	ク	SD66北下位	5.80	4.50	2.70	88.5	濃飛流紋岩	
186	212	自然礫(小門礫)	ク	SD66南下位	4.15	3.40	3.00	58.5	濃飛流紋岩	
187	208	自然礫(小門礫)	ク	SD74南	4.20	3.20	2.50	50.0	濃飛流紋岩	
188	170	自然礫(小割礫)	ク	SB04	6.60	3.90	2.20	68.0	砂岩	
189	9	自然礫(拳大門礫)	13エ	SD06	8.90	8.30	3.60	408.0	砂岩	全面が平坦
-	134	自然礫(拳大割礫)	カ	SD12東	7.40	7.05	3.80	283.0	砂岩	
190	13	自然礫(大型門礫)	13エ	SD11	18.20	11.90	9.70	3000.0	濃飛流紋岩	全面が平坦/明確な使用痕なし
191	46	自然礫(大型門礫)	エ	9E7石土群群 (SB01周辺)	16.40	12.20	5.10	1500.0	濃飛流紋岩	明瞭な使用痕なし/部分的に被熱で赤色化
-	19	自然礫(大型割門礫)	ク	SD03中位	13.80	8.10	9.00	1200.0	濃飛流紋岩	前面平坦/明瞭な使用痕なし
-	23	自然礫(大型割門礫)	ク	SD16	12.60	10.90	6.00	1200.0	濃飛流紋岩	平坦面を有する
192	121	管玉	ク	SB01-2・3区間壁	0.70	0.40	0.35	0.1以下	緑色凝灰岩(軟質)	保存処理済
193	87	管玉	ク	SB04	0.82	0.51	0.50	0.3	緑色凝灰岩(硬質)	ほぼ完形/艶あり/孔径3.0mm
194	233	管玉	ク	SB04-1区/水洗選別No.128	0.50	0.30	0.30	0.1以下	緑色凝灰岩(軟質)	上面孔径1.0mm/下面孔径1.5mm
195	89	管玉未製品	ク	SB04	0.73	0.41	0.20	0.1以下	緑色凝灰岩(硬質)	穿孔途中に破損/多面的に研磨されている
196	88	管玉未製品	ク	9F7e遺構横出	1.20	0.40	0.32	0.2	緑色凝灰岩(硬質)	四角柱状の剥片/両側面を調整剥離
197	62	管玉未製品	ク	SK05南西	2.30	1.05	0.80	2.5	緑色凝灰岩	擦切痕1箇所/研磨面4面/原石面を残す
198	120	角玉	ク	SD50	1.55	1.25	0.45	1.3	緑色凝灰岩(軟質)	各面研磨/両側から穿孔/未貫通/保存処理済
199	77	玉の破片	ク	SD69東上位	1.40	1.00	0.35	0.9	ヒスイ	擦切痕1箇所/表面に磨り痕/玉の破片を再利用か
200	59	玉素材	ク	SD45上位	2.05	1.10	0.90	2.1	緑色凝灰岩	擦切痕1箇所/研磨面あり
201	60	玉素材	ク	SD46間壁上位	1.70	1.20	1.00	2.9	緑色凝灰岩	擦切痕・磨り痕など無し/原石面を残す
202	136	玉素材	ク	SD60西上位	1.50	0.98	0.70	0.4	緑色凝灰岩(硬質)	擦切痕1箇所あり
203	83	玉素材	ク	SD62南上位	0.90	1.00	0.62	0.6	緑色凝灰岩	多面的に研磨されている
204	76	玉素材	ク	SB04	2.40	1.15	0.80	1.8	緑色凝灰岩(軟質)	擦切痕2箇所/2面研磨
205	85	玉素材	ク	SB04南東	1.10	1.10	0.52	0.4	緑色凝灰岩(硬質)	擦切痕3箇所/2面研磨されている
206	61	玉素材	ク	9F5b包含層	1.89	1.30	1.20	3.3	緑色凝灰岩(硬質)	擦切痕3箇所/原石面を残す
207	63	玉素材	ク	ク区西側包含層上位	1.70	1.30	1.10	2.6	緑色凝灰岩	擦切痕2箇所/研磨面1面/原石面を残す
208	64	玉素材	ク	ク区西側包含層上位	2.95	2.90	1.55	11.6	緑色凝灰岩	擦切痕3箇所
209	65	玉素材	ク	9F6a包含層	3.35	2.58	2.00	16.6	緑色凝灰岩	擦切痕1箇所
210	79	玉素材	ク	SD65西上位	1.85	0.82	0.62	1.5	緑色凝灰岩	擦切痕1箇所
211	80	玉素材	ク	9F5b包含層	1.82	1.30	1.00	2.2	緑色凝灰岩	擦切痕1箇所
212	119	破片	ク	SD65東	1.55	1.23	0.85	1.3	緑色凝灰岩	
213	81	破片	ク	9F5b包含層	2.30	0.84	0.30	0.5	緑色凝灰岩(硬質)	
214	82	破片	ク	SD62南上位	2.35	1.92	0.51	1.4	緑色凝灰岩	
215	84	破片	ク	SD45北上位	2.10	1.32	0.63	1.6	緑色凝灰岩(硬質)	
216	123	破片	ク	SB04	1.35	0.85	0.50	0.3	緑色凝灰岩(硬質)	三角柱状
217	122	破片	ク	SB04-P257南床面付近	2.05	1.40	0.50	1.4	ヒスイ	
218	73	石鋸	ク	SB04-P275掘方北西	7.30	2.30	0.30	6.8	紅廉片岩	磨痕明瞭
219	74	石鋸	ク	SB04-P275掘方北西	6.35	1.78	0.30	4.2	紅廉片岩	磨痕明瞭/2点接合
220	71	石鋸	ク	9F5b包含層	4.20	1.40	0.20	2.0	紅廉片岩	磨痕明瞭
221	150	石鋸	ク	9F6d包含層	2.50	2.50	0.40	2.8	紅廉片岩	磨痕明瞭
222	72	石鋸素材	ク	SX01	5.10	1.70	0.80	7.6	紅廉片岩	
223	91	石鋸素材	ク	SD61北区	5.10	1.40	1.00	10.2	紅廉片岩	
224	-	石針	ク	SB02/水洗選別No.265	0.56	0.17	0.17	0.1未満	メノウ	先端磨減/軸部打製で四角柱
225	169	石針	ク	SB04-P区貼床以下/水洗選別No.358	1.35	0.40	0.38	0.2	下呂石	端部片/先端磨減/軸部打製で四角柱
226	90	石針	ク	SB04-P115	0.85	0.30	0.30	0.1	下呂石	端部片/先端磨減/軸部磨製で多角柱
227	-	石針	ク	SB04-Z区/水洗選別No.18	0.35	0.13	0.13	0.1未満	下呂石	両端磨減/軸部磨製で多角柱
228	-	石針	ク	SB04-C区西/水洗選別No.237	0.48	0.11	0.11	0.1未満	下呂石	端部片/先端磨減/軸部磨製で多角柱
229	-	石針	ク	SB04-A区南/水洗選別No.389	0.41	0.11	0.11	0.1未満	下呂石	端部片/先端磨減/軸部磨製で多角柱
230	-	石針	ク	SB04-P275下位/水洗選別No.374	0.32	0.10	0.10	0.1未満	下呂石	端部片/先端磨減/軸部磨製で多角柱
231	-	石針	ク	SB04-P275掘方/水洗選別No.502	0.38	0.13	0.13	0.1未満	下呂石	両端磨減/軸部磨製で多角柱
232	-	石針	ク	SB04-P275掘方/水洗選別No.478	0.51	0.23	0.17	0.1未満	メノウ	先端磨減/軸部打製
-	-	石針	ク	SB04-P275下位/水洗選別No.なし	0.43	0.12	0.12	0.1未満	下呂石	軸部片/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04-P275下位/水洗選別No.なし	0.39	0.10	0.10	0.1未満	下呂石	端部片/先端磨減/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04-P275下位/水洗選別No.374	0.41	0.10	0.10	0.1未満	下呂石	端部片/先端磨減/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04-P275上位/水洗選別No.377	0.34	0.10	0.10	0.1未満	下呂石	端部片/先端磨減/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04-A区南/水洗選別No.389	0.27	0.11	0.11	0.1未満	下呂石	軸部片/軸部磨製で多角柱

表5-9 遺物観察表(4)

図No	仮No	器種	地区	出土位置	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	材質	備考
-	-	石針	ク	SB04-P区貼床以下/水洗選別No.358	0.31	0.09	0.06	0.1未満	下呂石	軸部縦割れ片/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04-C区東/水洗選別No.323	0.30	0.10	0.10	0.1未満	下呂石	両端磨減/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04-C区東/水洗選別No.323	0.26	0.10	0.10	0.1未満	下呂石	軸部片/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04-A区周溝/水洗選別No.331	0.33	0.09	0.09	0.1未満	下呂石	端部片/先端磨減/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04-V区貼床土/水洗選別No.146	0.25	0.10	0.10	0.1未満	下呂石	軸部片/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04-D区下位/水洗選別No.266	0.53	0.19	0.19	0.1未満	下呂石	軸部縦割れ片/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04-R区周溝/水洗選別No.337	0.42	0.10	0.10	0.1未満	下呂石	端部片/端部磨減少ない/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04-N区貼床土/水洗選別No.184	0.33	0.12	0.12	0.1未満	下呂石	端部片/端部磨減なし/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04-P118東/水洗選別No.49	0.48	0.13	0.13	0.1未満	下呂石	端部片/端部磨減なし/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04-P118東/水洗選別No.49	0.30	0.11	0.11	0.1未満	下呂石	軸部片/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04南東部(貼床上)/水洗選別No.55	0.55	0.13	0.13	0.1未満	下呂石	端部片/端部磨減なし/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04南東部(貼床上)/水洗選別No.55	0.53	0.10	0.10	0.1未満	下呂石	軸部縦割れ片/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04南東部(貼床上)/水洗選別No.55	0.32	0.10	0.10	0.1未満	下呂石	端部片/先端磨減/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04南東部(貼床上)/水洗選別No.55	0.25	0.10	0.10	0.1未満	下呂石	端部片/先端磨減/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04南東部(貼床上)/水洗選別No.55	0.24	0.08	0.08	0.1未満	下呂石	軸部片/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04-C区西/水洗選別No.333	0.29	0.09	0.09	0.1未満	下呂石	端部片/先端磨減/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04-KK区下位/水洗選別No.326	0.28	0.09	0.09	0.1未満	下呂石	端部片/端部磨減なし/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04-B区東中央部貼床/水洗選別No.109	0.45	0.14	0.14	0.1未満	下呂石	端部片/先端磨減/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SB04-U区西/水洗選別No.16	0.28	0.18	0.18	0.1未満	下呂石	軸部片/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SD37-P255/水洗選別No.1	0.28	0.10	0.10	0.1未満	下呂石	端部片/先端磨減/軸部磨製で多角柱
-	-	石針	ク	SD70下位/水洗選別No.なし	0.43	0.80	0.80	0.1未満	下呂石	端部片/先端磨減/軸部磨製で多角柱
233	-	石針	ク	SB04-P275下位/水洗選別No.445	0.95	0.40	0.25	0.1未満	下呂石	両面とも片側から押圧剥離
234	189	石針未製品?	ク	9F6e包含層	2.70	0.86	0.48	1.3	下呂石	多面研磨
235	108	石針未製品?	ク	SD46	4.41	3.81	1.80	31.2	メノウ	原石面を残す/元は円盤
236	66	石針素材礫	ク	SD45	7.00	4.20	2.60	82.0	メノウ	
237	67	石針素材礫	ク	SB04	1.60	0.65	0.43	0.4	下呂石	三角柱状
238	86	石針素材	ク	SB04-B区	2.35	1.15	0.58	1.4	下呂石	
239	144	石針素材	ク	SB04+ 炉北西	1.30	0.83	0.50	0.4	メノウ	
240	131	石針素材	ク	SK05北西上位	1.70	0.80	0.40	0.4	メノウ	
241	158	石針?素材	ク	9F5b包含層	4.38	1.20	0.70	2.6	チャート	
242	142	石針?素材	ク	SB04-B区	1.25	0.70	0.30	0.2	メノウ	
243	145	砕片	ク	SK01南	3.60	3.00	1.65	20.6	砂岩	小破片
244	249	銅鐸錐型	ク	9E6i包含層	4.80	4.40	0.85	15.6	土器片	側面は研磨されている/表面ハケ目/孔の径4.3mm
245	184	有孔加工円盤	ク	SB04-F区周溝	3.60	3.40	0.95	10.8	土器片	側面は研磨されている/表面ハケ目
246	185	加工円盤	ク	SD61	3.15	0.90	0.40	1.0	鹿角	両面とも擦り痕あり/断面三角形/挑けている
247	186	髪飾り?	ク	SD60アゼ上位	2.65	0.85	0.40	0.5	鹿角	先端部の作り出す加工が見られる
248	187	鋸頭	オ	SD11中央底面	43.00	6.40	1.80	-	木	残欠片/保存処理済/樹種未同定(アカガシ垂頭か)
249	-	平鋸	ク	SB02-SK03/水洗選別No.504	-	-	-	0.1未満	炭化物	8点
250	-	植物遺体(米)	ク	SD47東下位/水洗選別No.なし	-	-	-	0.1	炭化物	12点
-	-	植物遺体(米)	ク	SB04南東部(貼床上)/水洗選別No.55	-	-	-	0.1未満	炭化物	3点
251	-	植物遺体(オニグルミ)	ク	SB04-G区周溝/水洗選別No.451	-	-	-	0.4	炭化物	3点
-	-	赤色顔料	ク	SB04-P300/水洗選別No.496	-	-	-	0.1未満	ベンガラ	粉末状/分析済(付論6試料6)
252	-	赤色顔料?	ク	SD70東下位/水洗選別No.なし	-	-	-	0.2	ベンガラ?	顆粒状/未分析
253	38	染付皿	13エ	SD01北壁下位	11.20	-	-	-	陶器	坏部欠損/底径6.2cm
254	37	火打石	13エ	SD01中央底面	4.00	3.70	1.20	14.0	チャート	破損品
255	13	火箸	13エ	SD01中央下位	49.00	-	0.62	98.0	鉄	256と一対/断面角柱
256	14	火箸	13エ	SD01中央下位	46.20	-	0.61	91.0	鉄	一部欠損

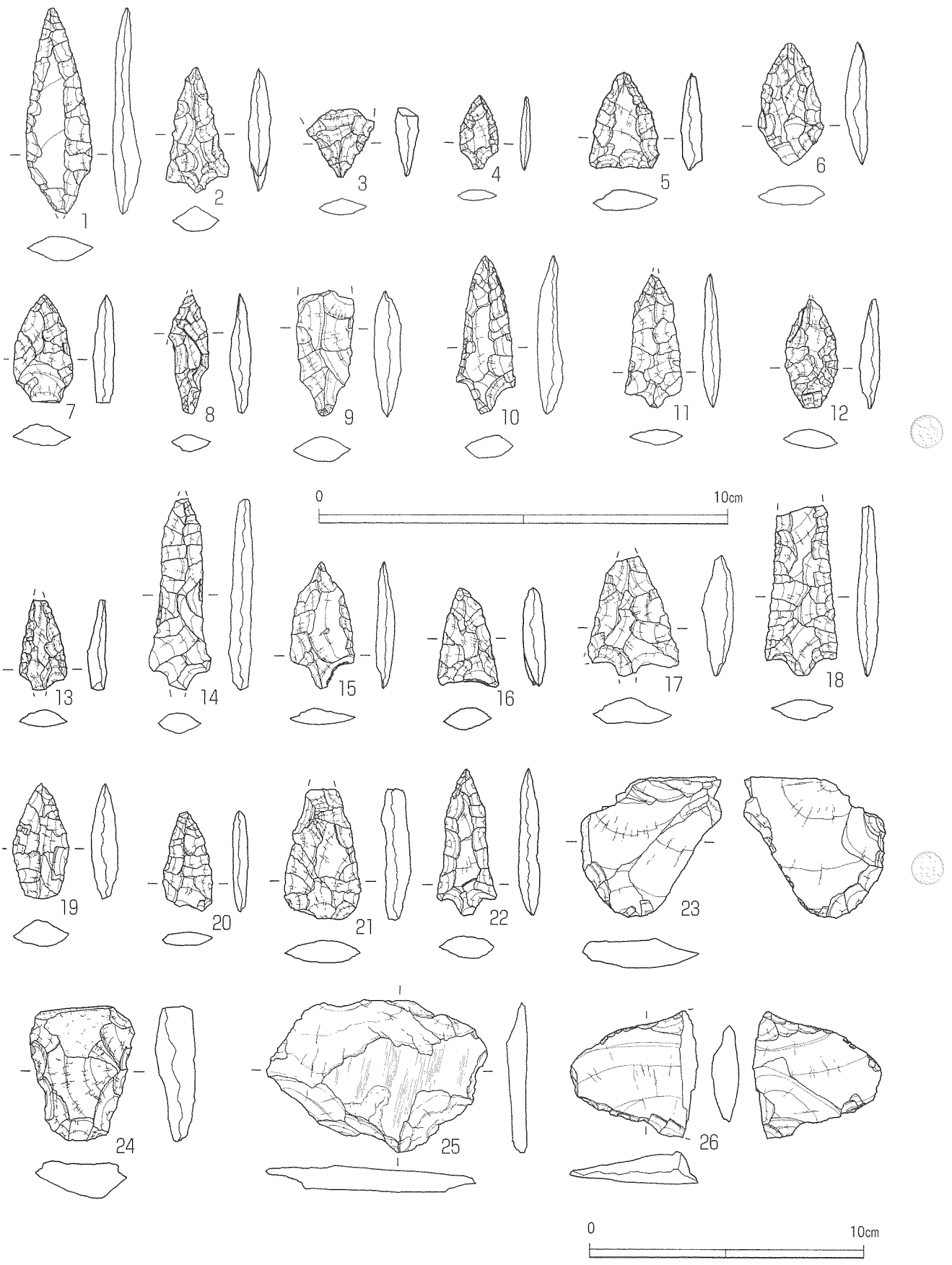


図5-12 石鏃・石包丁・石鎌 (1~24 : 3/4) (25・26 : 1/2)



图5-13 大型蛤刃石斧·扁平片刃石斧·小型方柱状片刃石斧 (27~37: 1/2)

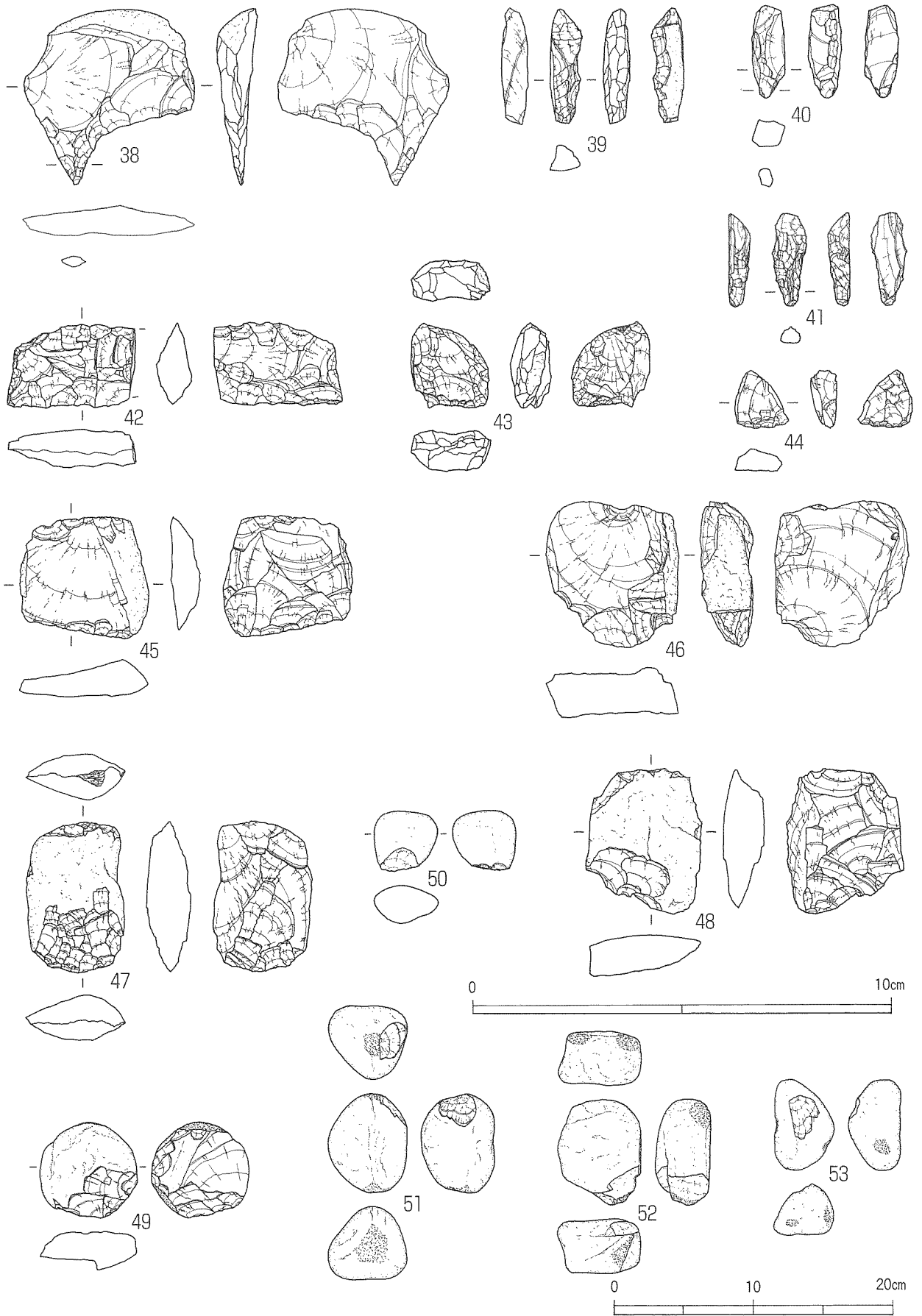


图5-14 石錐·石小刀·楔形石器·敲石 (38~48 : 3/4) (49~53 : 1/4)

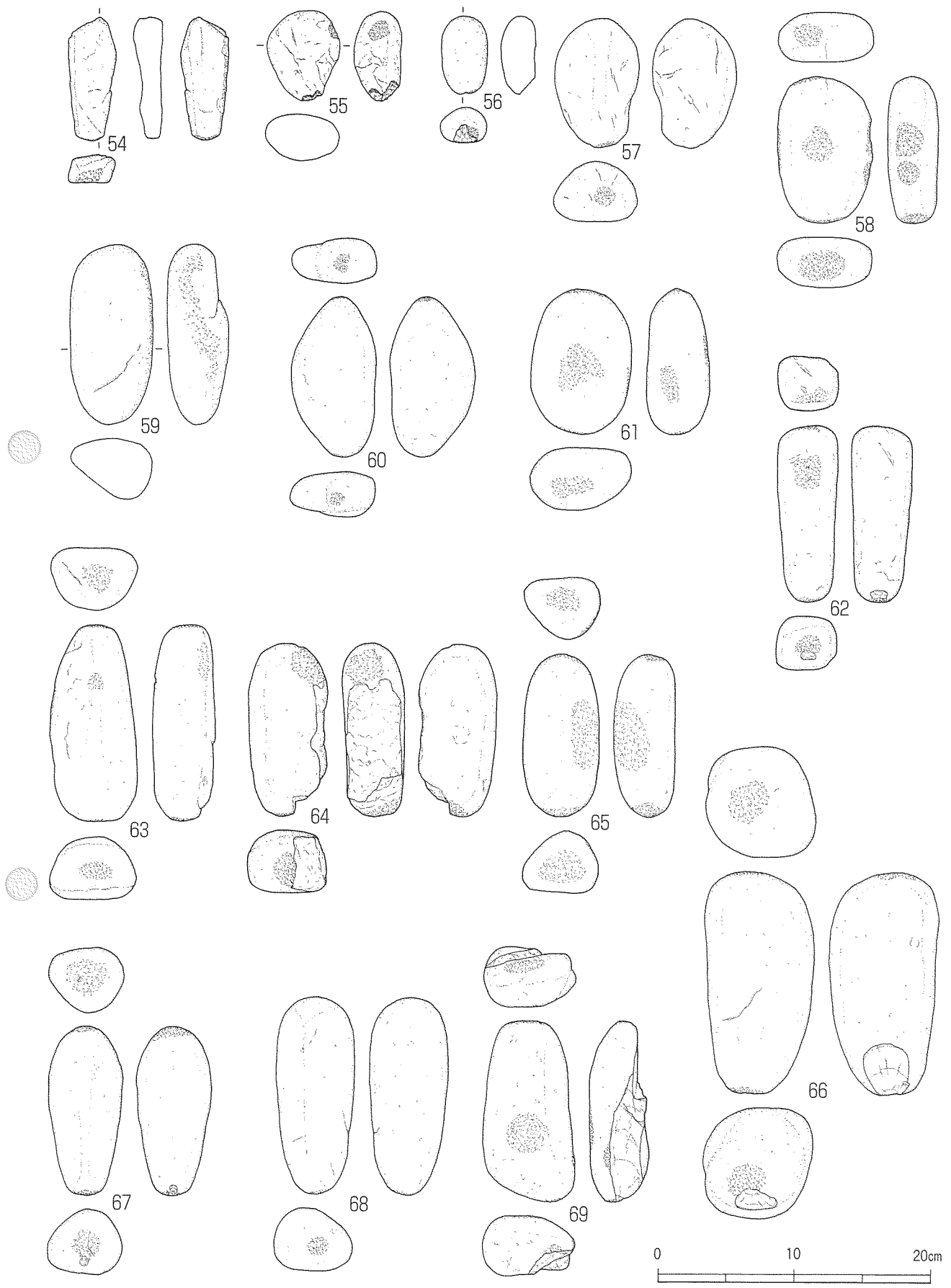


图5-15 敲石 (54~69 : 1/4)



図5-16 敲石 (70~83 : 1/4)



图5-17 敲石·台石·磨石·環石 (84~95: 1/4)

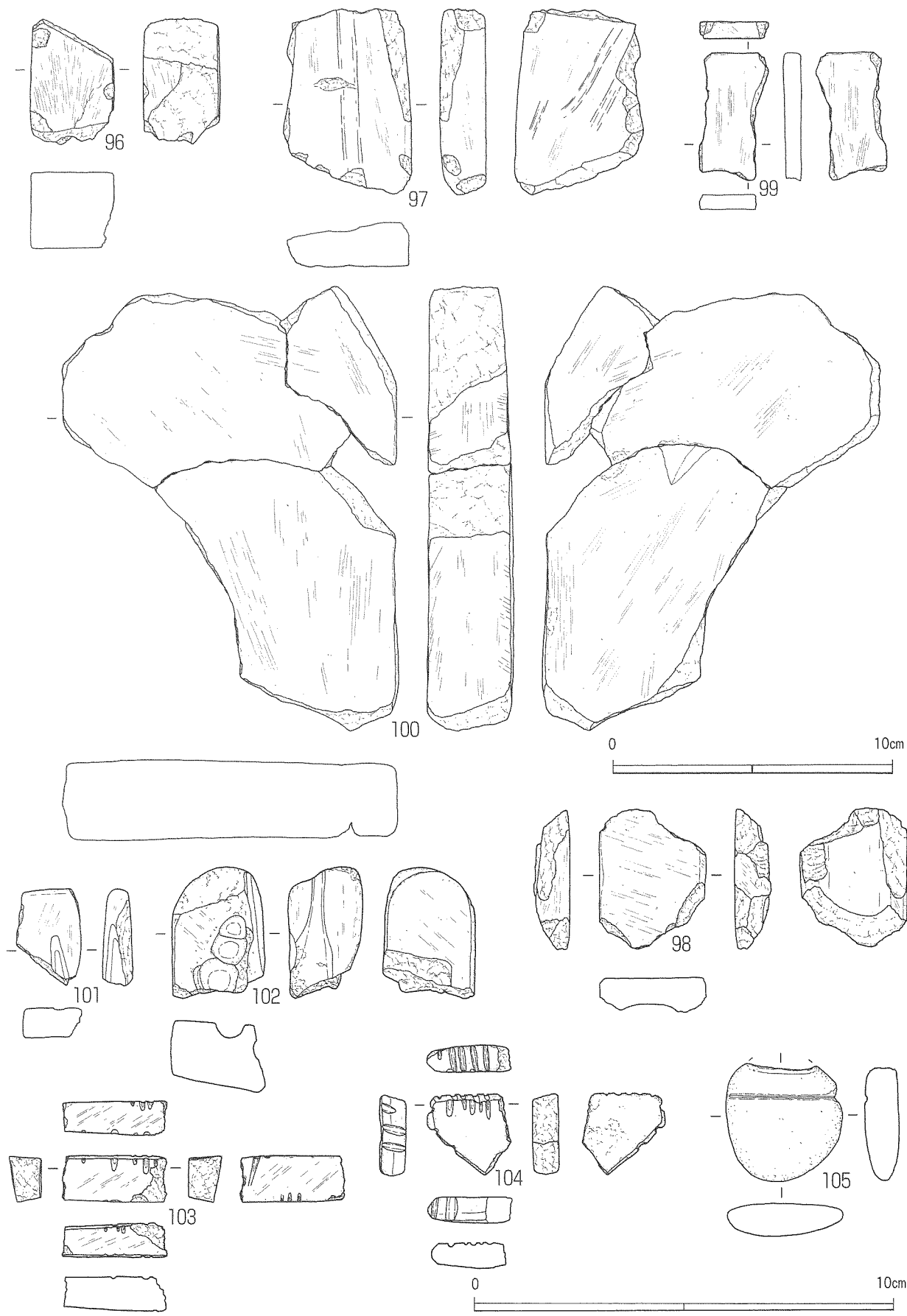


图5-18 砥石 (96~100 : 1/2) (101~105 : 3/4)

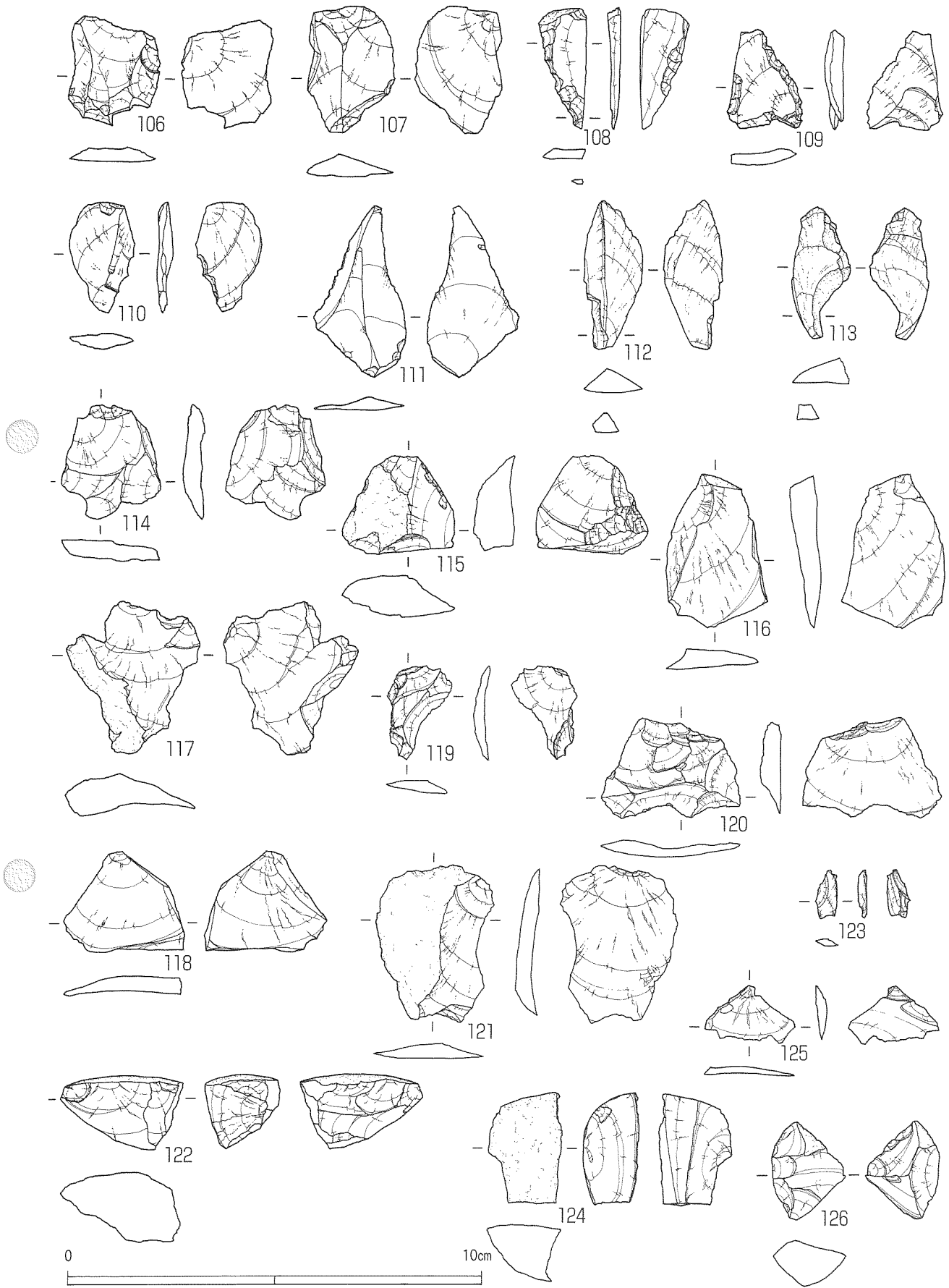


图5-19 剥片·石核類 (106~126 : 3/4)

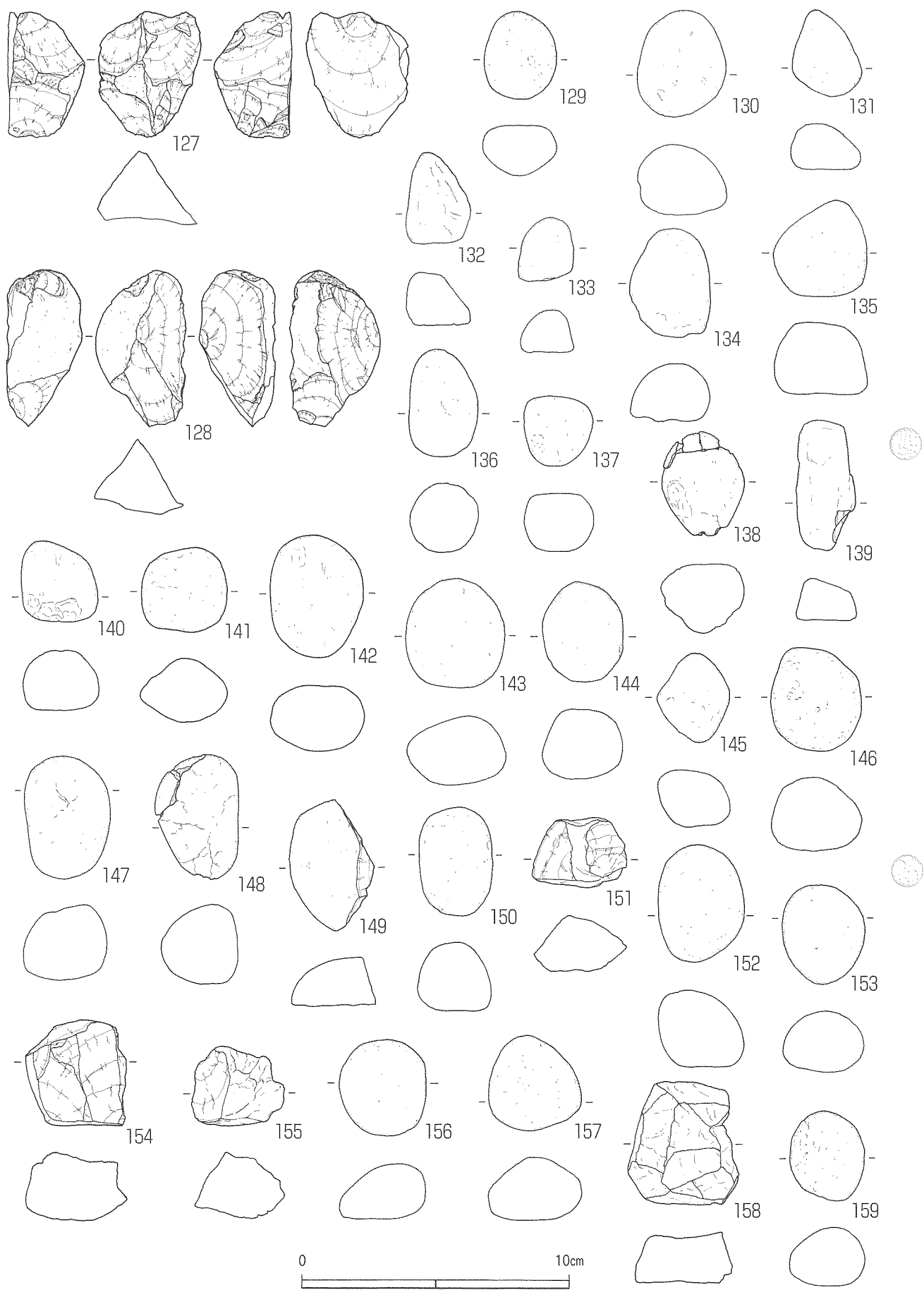


图5-20 石核·自然礫 (127~159: 1/2)

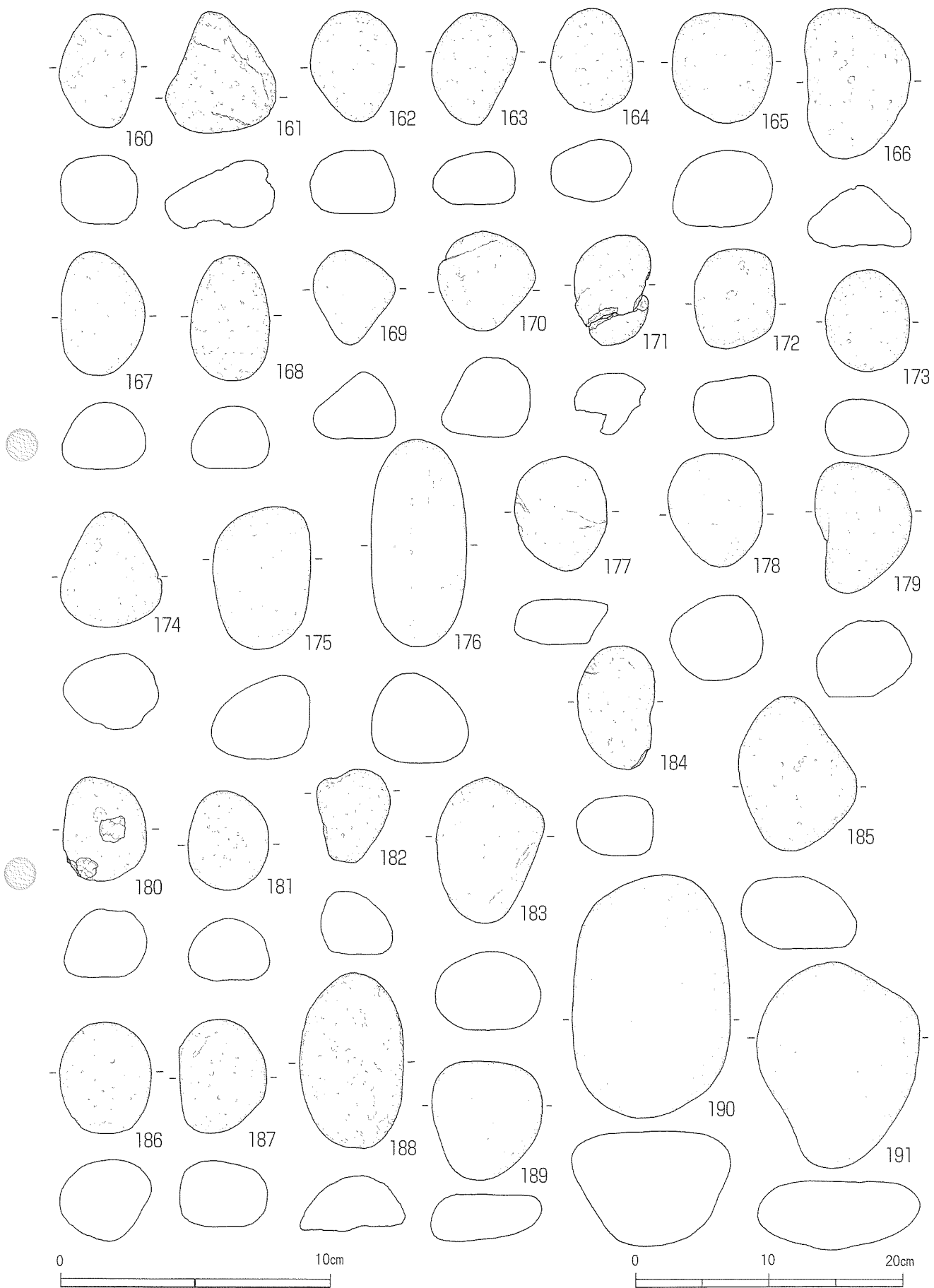


图5-21 自然礫 (160~188 : 1/2) (189~191 : 1/4)



図5-22 管玉・角玉・玉素材ほか (192~211 : 1/1)

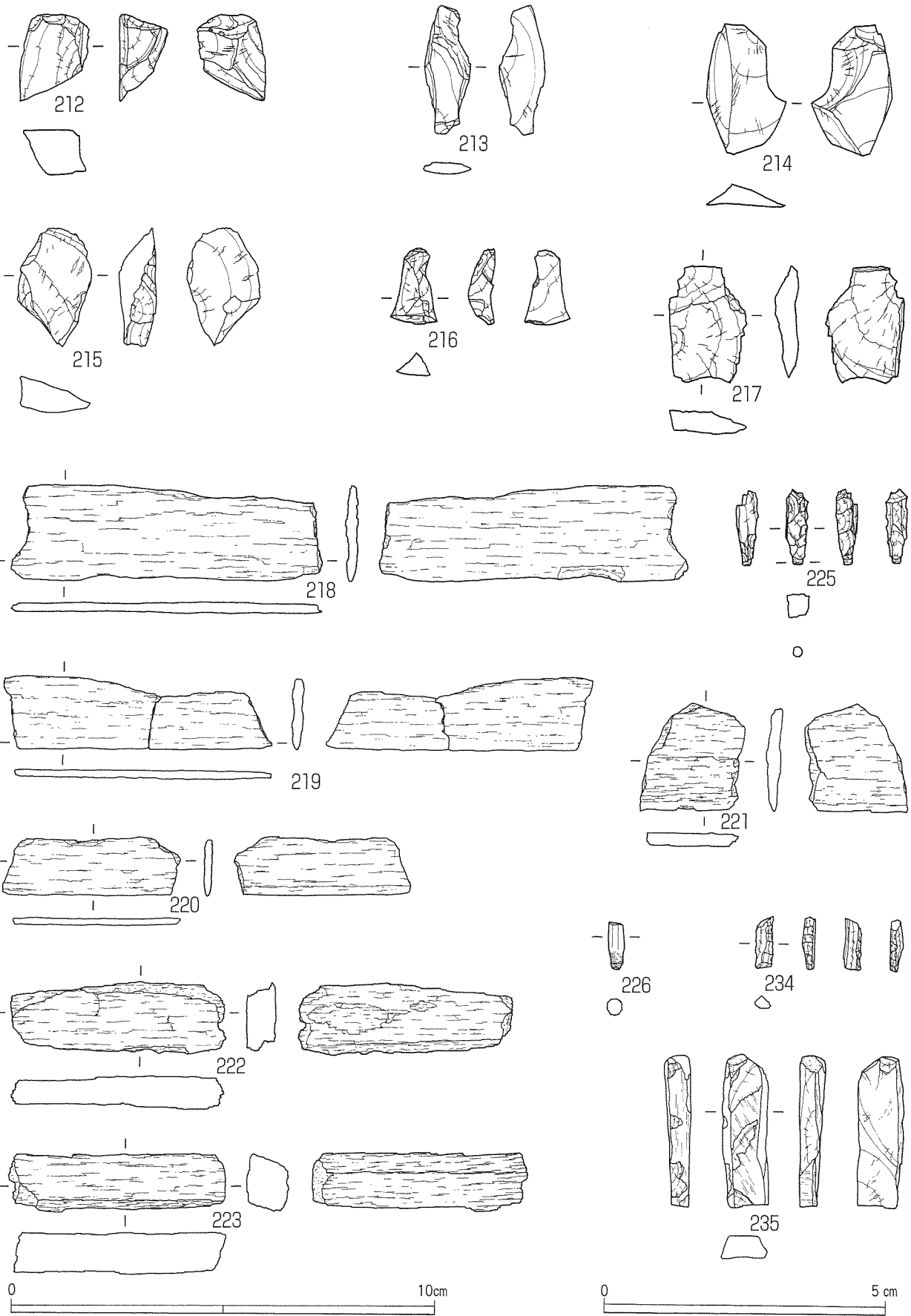


図5-23 玉素材ほか・石鋸・石針 (218~223 : 3/4) (その他 : 1/1)



図5-24 石針素材・銅鐸鑄型・土製品・鹿角製品 (236・237 : 1/2) (238~243 : 1/1) (244~248 : 3/4)

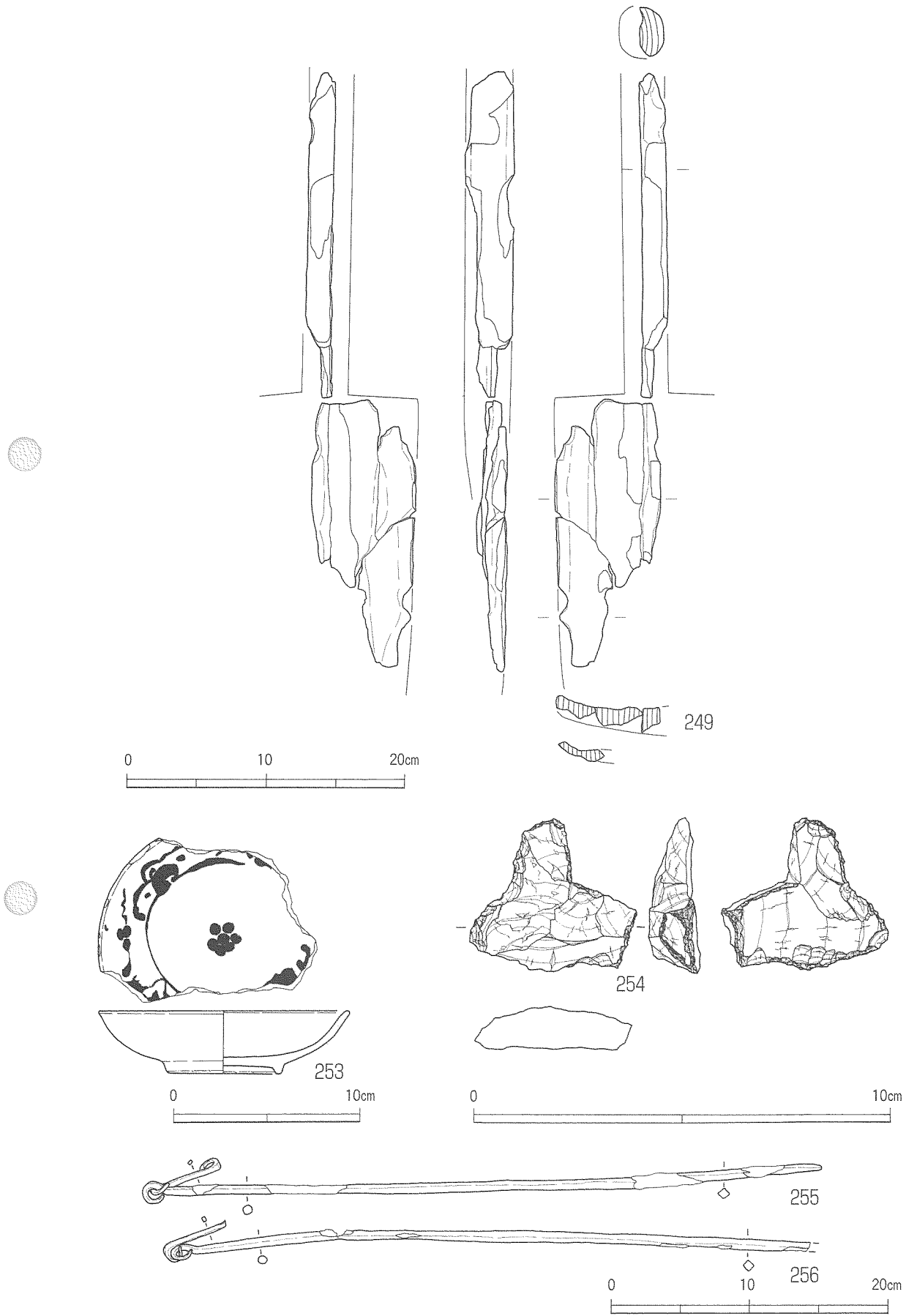


図5-25 木製品・近世陶器ほか (249・255・256 : 1/4) (253 : 1/3) (254 : 3/4)

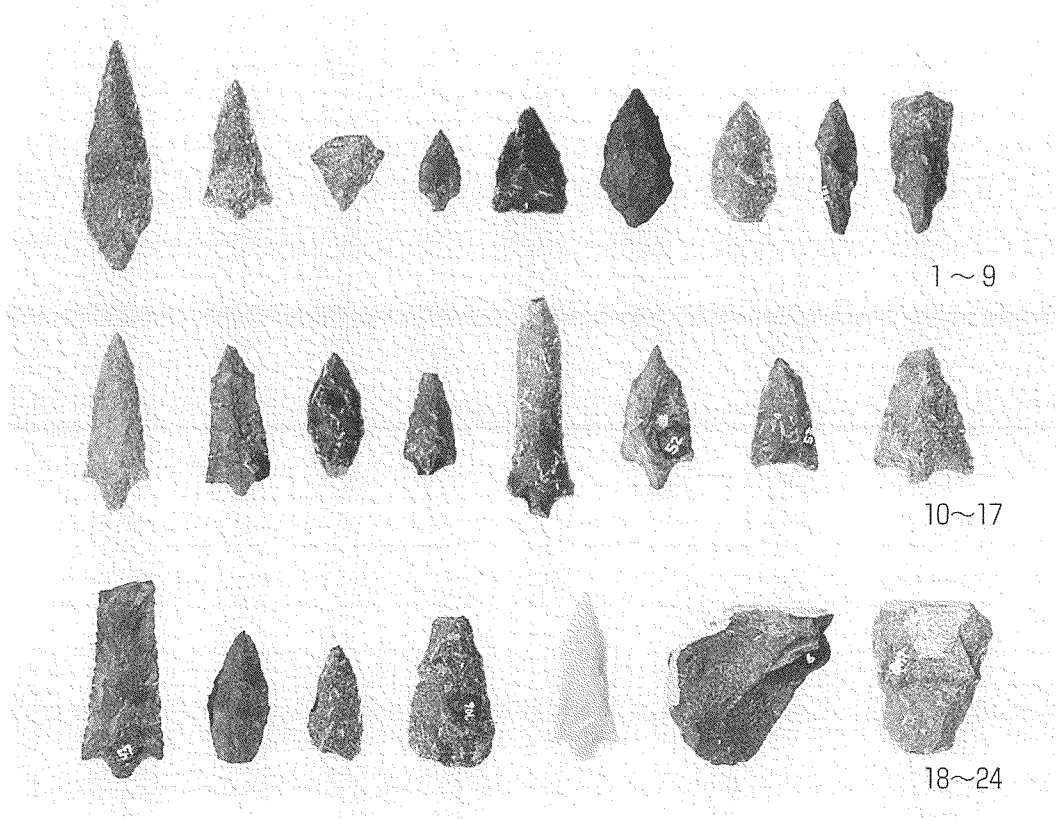


写真5-43 石鏃ほか

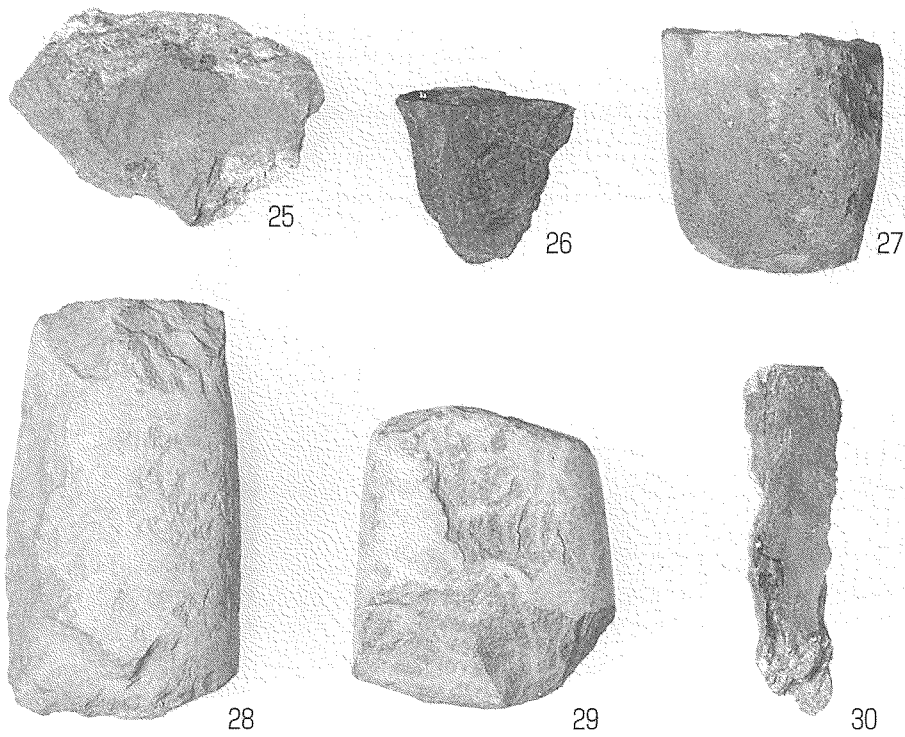


写真5-44 石包丁・石鎌・太型蛤刃石斧

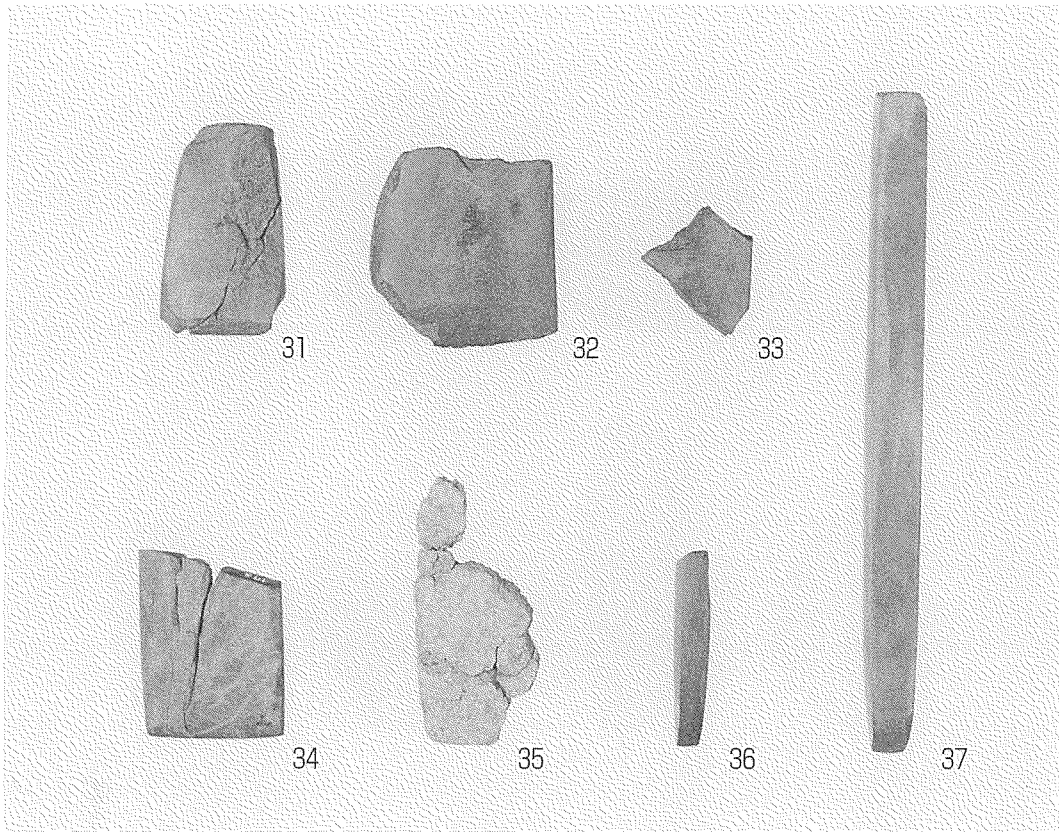


写真5-45 扁平片刃石斧・小型方柱状片刃石斧

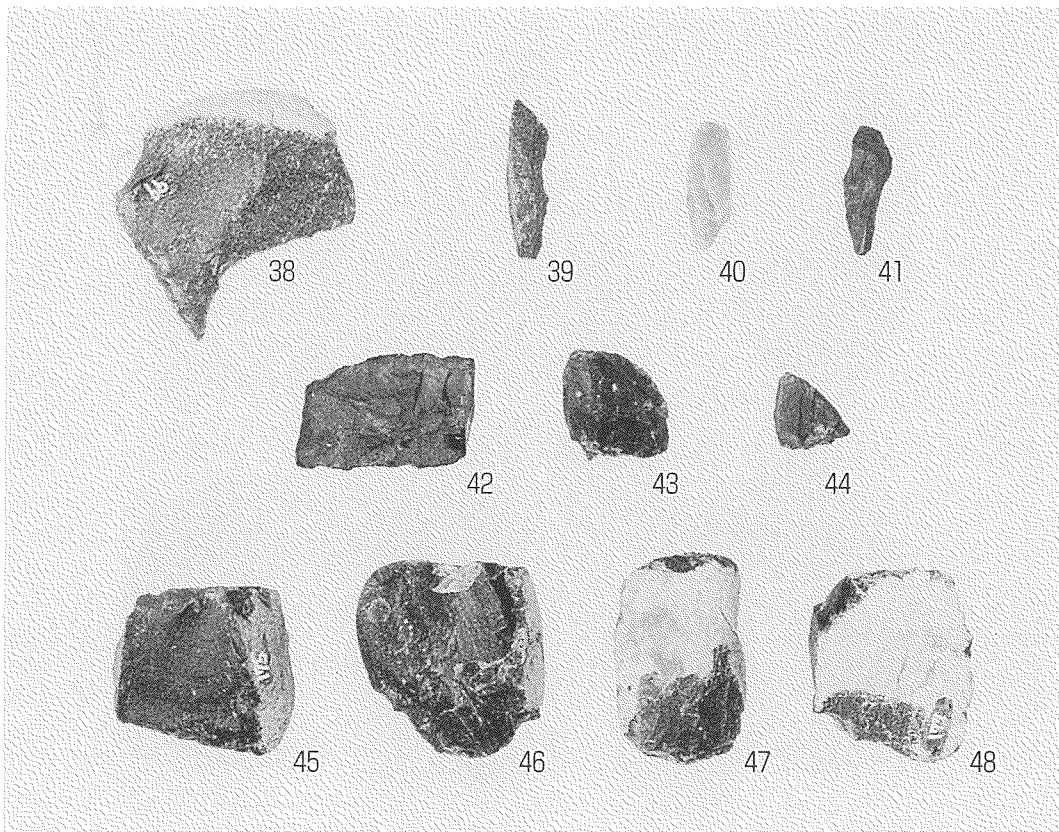


写真5-46 石錐・石小刀・楔形石器

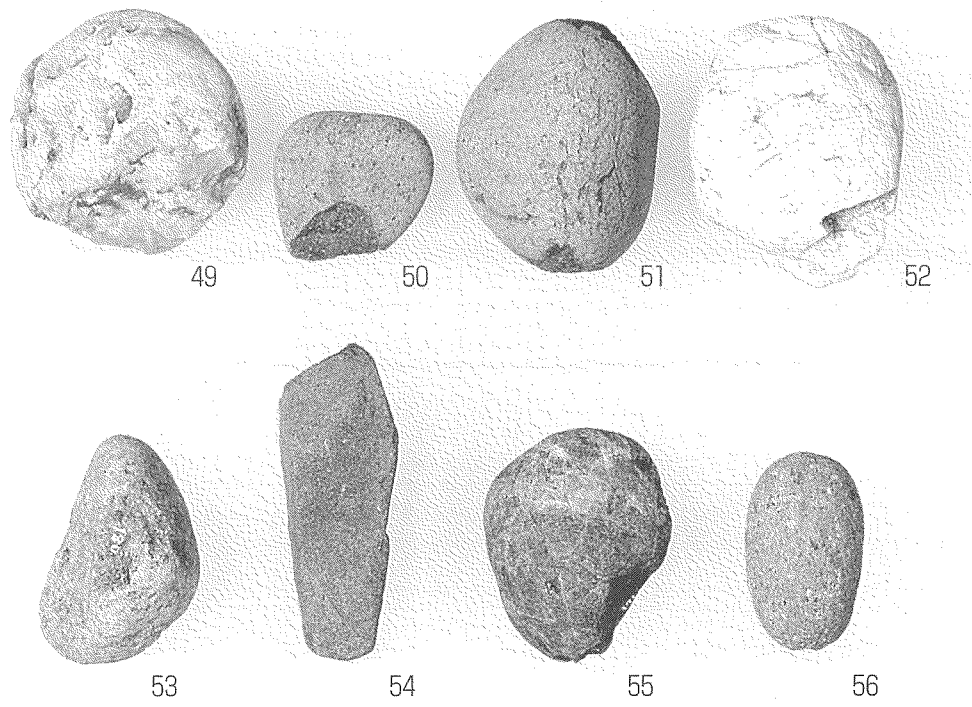


写真5-47 敲石 (小型)

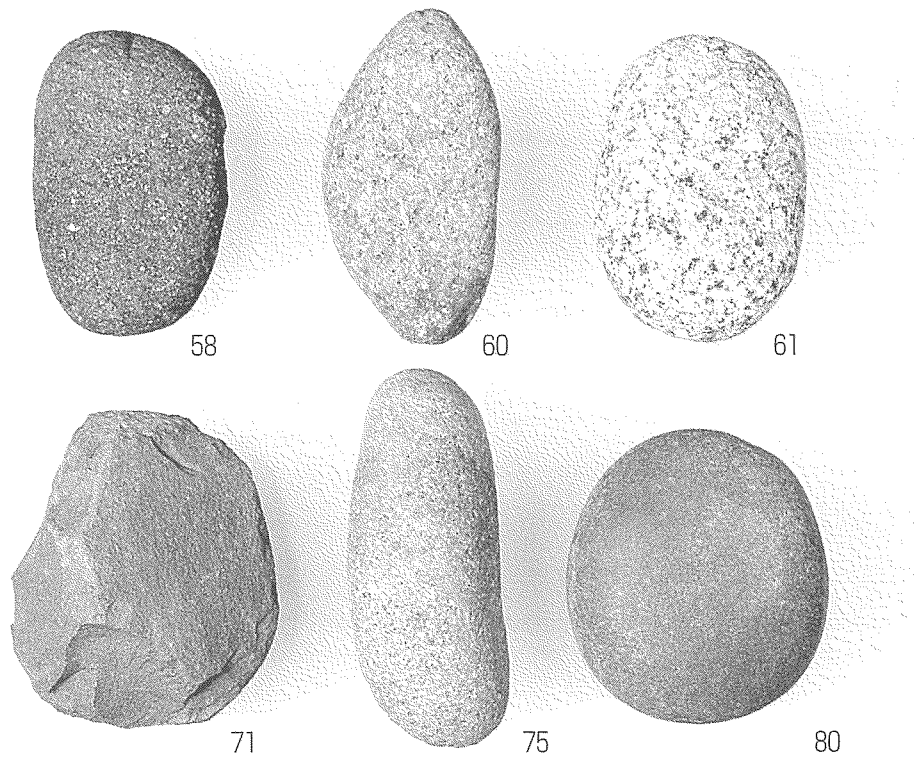


写真5-48 敲石 (中型)

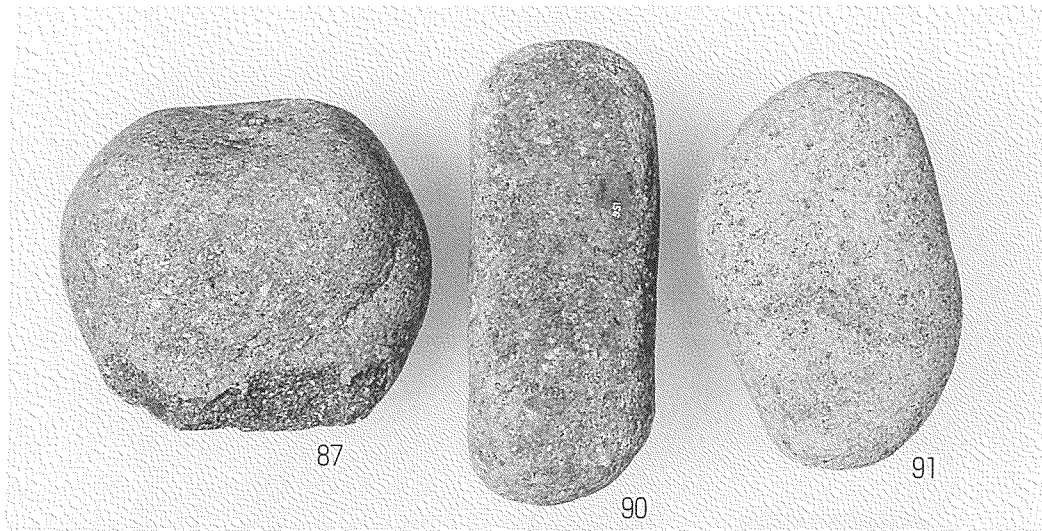


写真5-49 敲石（大型）

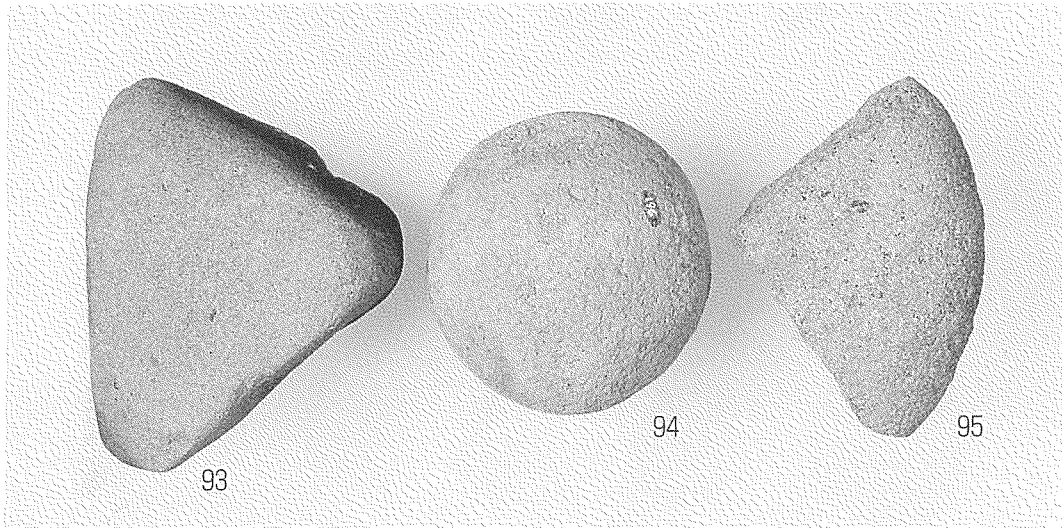


写真5-50 台石・磨石・環石

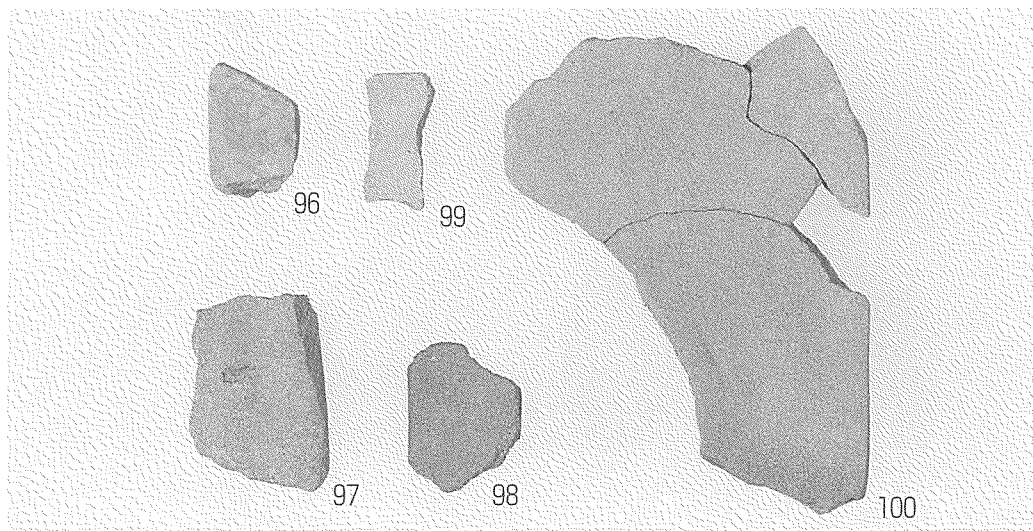


写真5-51 砥石

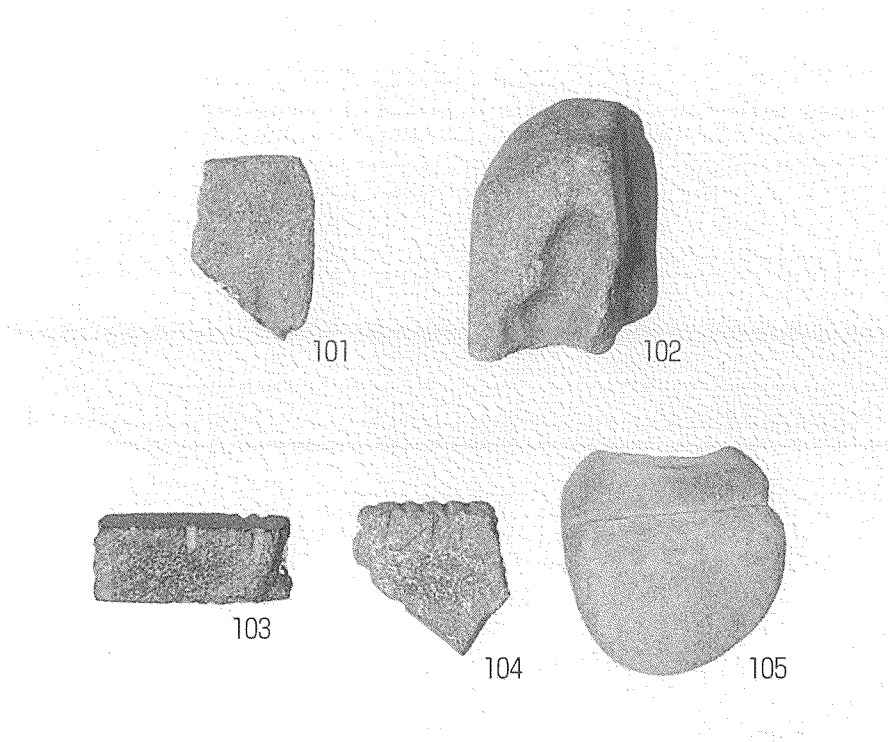


写真5-52 砥石（玉作り関連）

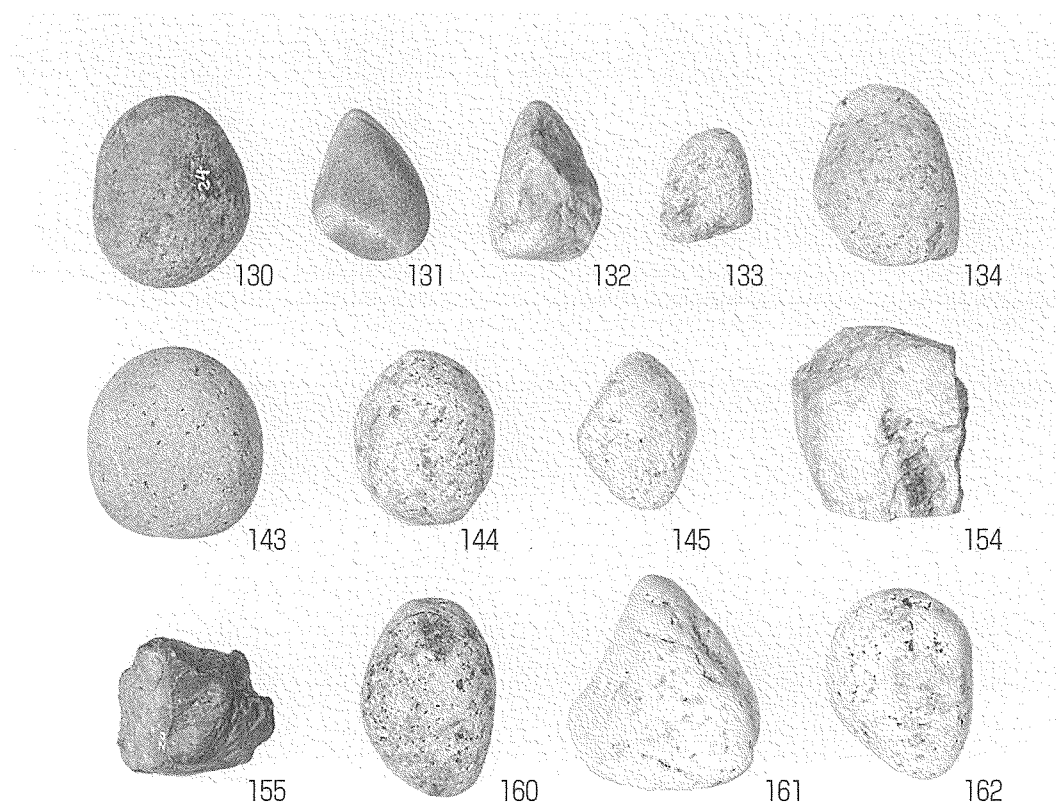


写真5-53 自然礫

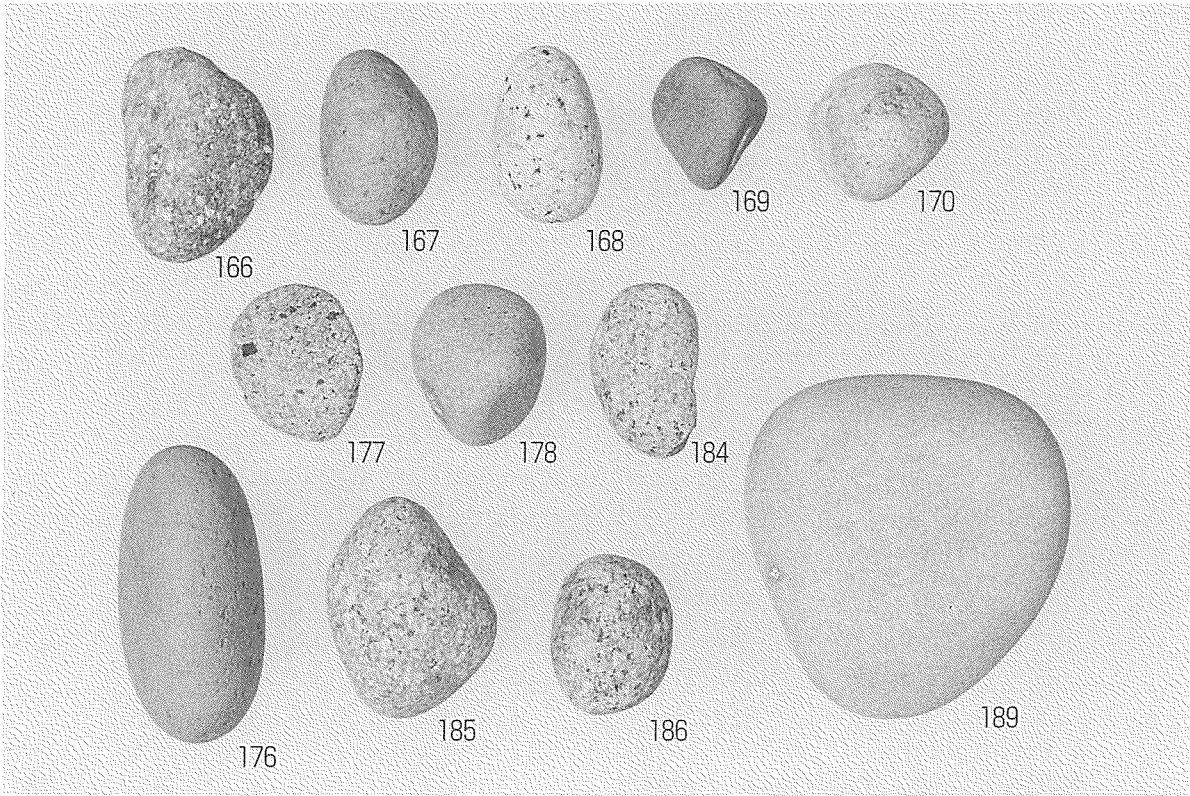


写真5-54 自然礫

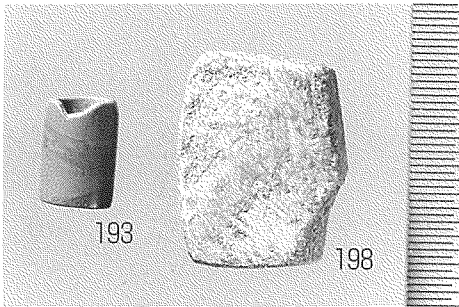


写真5-55 管玉・角玉

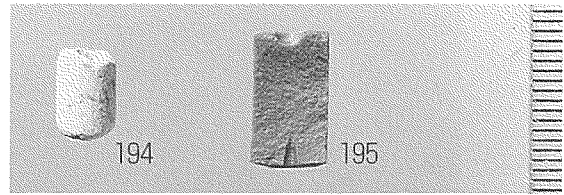


写真5-56 管玉・未製品

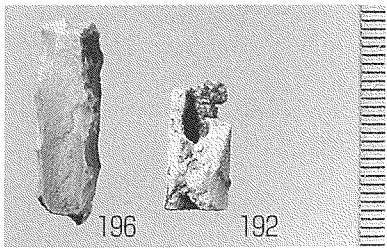


写真5-57 管玉・未製品

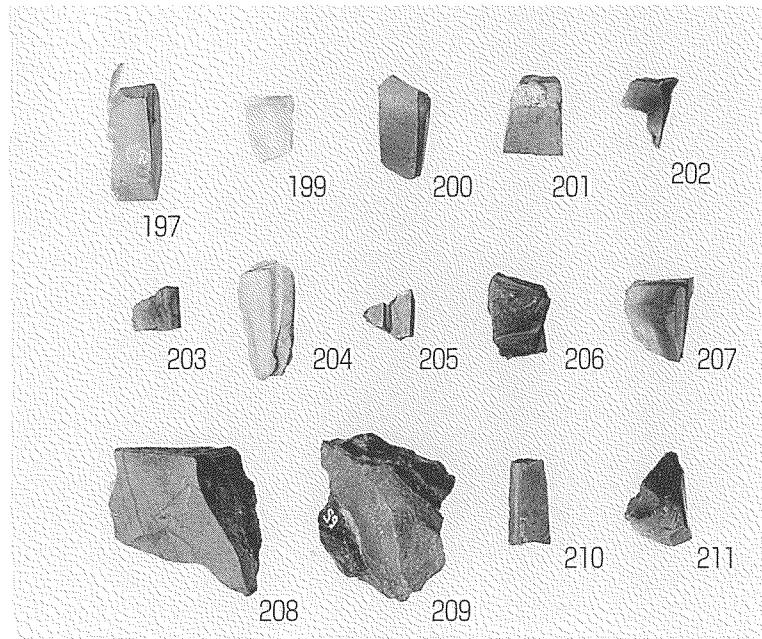


写真5-58 管玉・未製品・玉素材

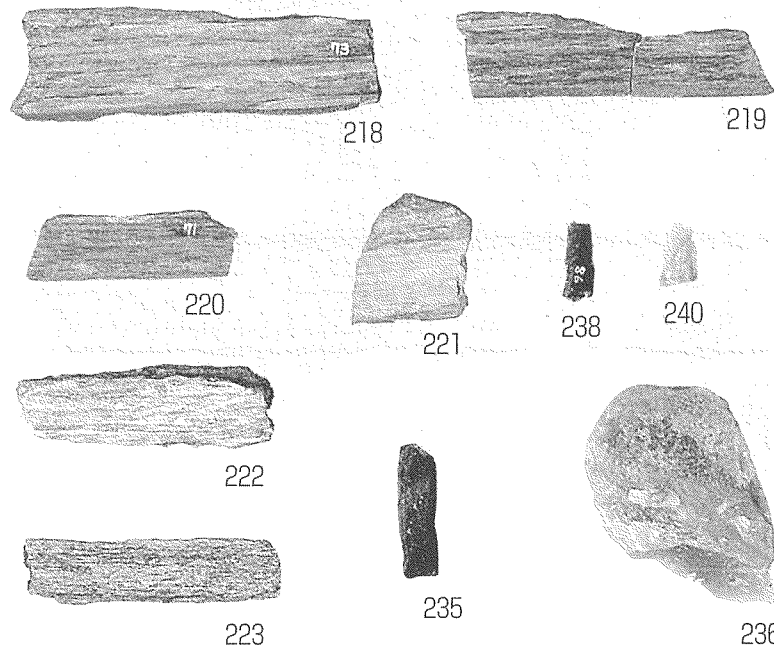


写真5-59 石鋸・石針未製品・石針素材

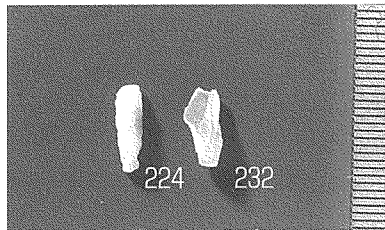


写真5-60 石針

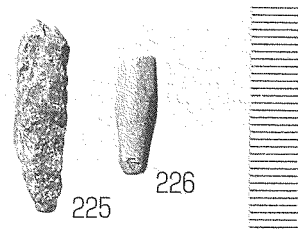


写真5-61 石針

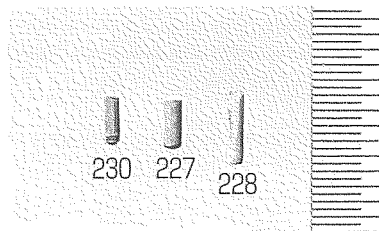


写真5-62 石針

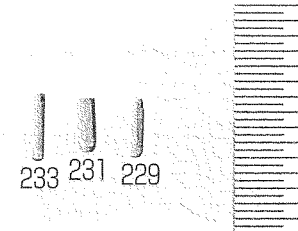


写真5-63 石針



写真5-64 銅鐸鑄型（鑄型面）



写真5-65 銅鐸鑄型（背面）

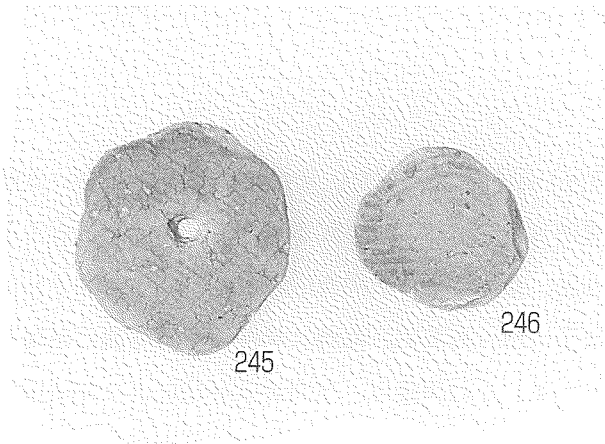


写真5-66 土製品

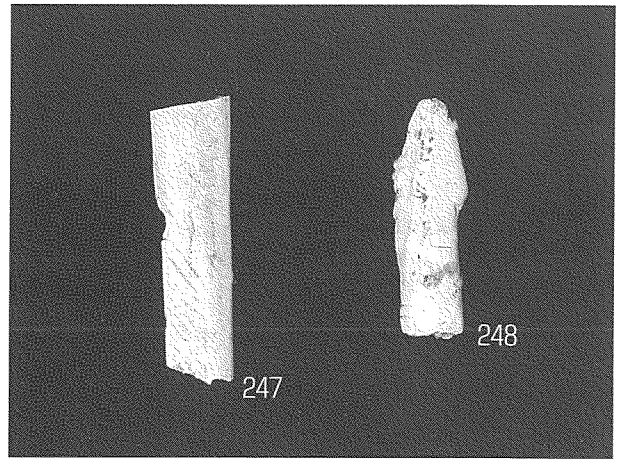


写真5-67 鹿角製品

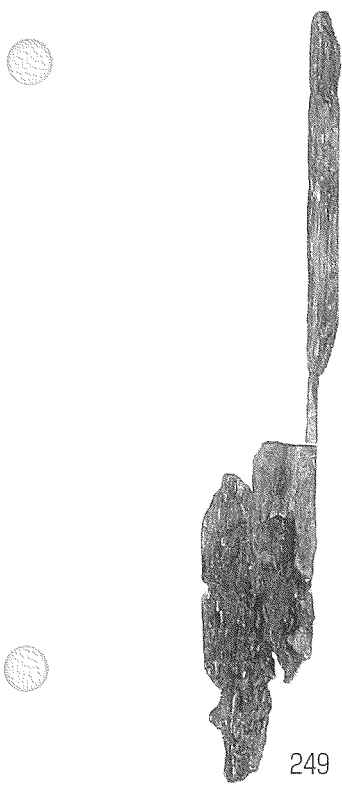


写真5-68 木製品（表面）

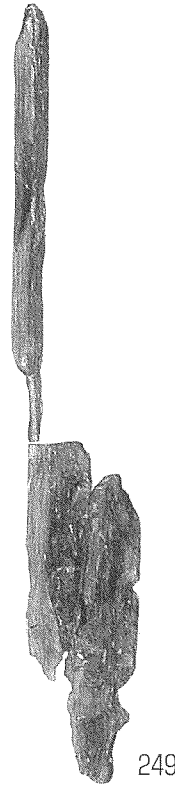


写真5-69 木製品（裏面）

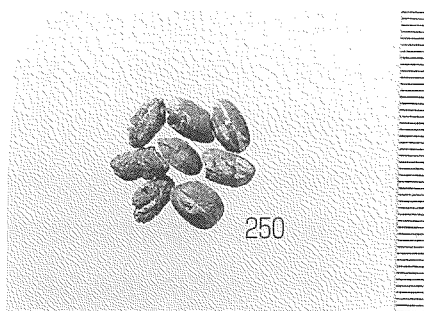


写真5-70 炭化米

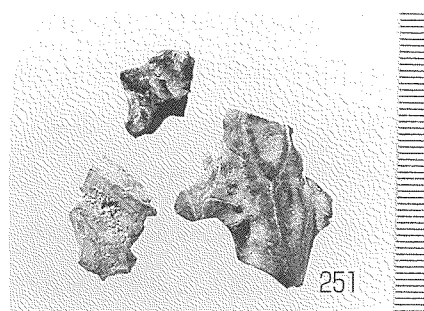


写真5-71 オニグルミ

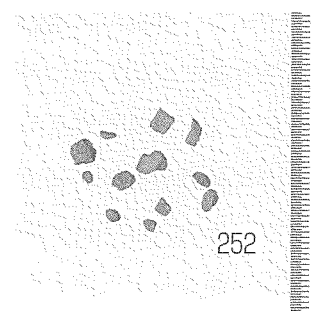


写真5-72 赤色顔料？

VI 第15次調査

(1) 遺構と遺物

今回の調査は、幅約2m、長さ約100mのきわめて細長い調査区であった。そのため規模の大きい方形周溝墓が密集する当地点では、検出される溝は、方形周溝墓の一部と予想されるものの、全体からみるとほんのわずかな部分だけである。北側の第13・14次調査区、南側の第14次調査区の間という位置であったが、既出の遺構と同一の周溝墓になる溝は検出されなかった。ただし、北側に隣接して同時期に実施した下水管理設に伴う調査では、同一の遺構が検出されている。この調査は、民間調査会社により別途報告されるので、ここでは触れないが、平面図のみ掲載する。

現地表面は造成地であり起伏はほとんどないが、東西に約100mあるため、地山面の標高にはわずかながらの差異が見られた。西端では、標高2.1～2.2m、西から25m付近では約1.9m、西から50mでは2.1～2.2m、西から75mでは約2.2m、東端では約2.4mであった。西から25m付近が最も低く、SD03の東側から一段と高くなり、東端が最も高かった。そのためSD03より東側では、水田耕作時の攪拌により包含層が開墾され、開墾の跡がベース面に達している状況が観察された。

SD01・SK01 検出の結果、色調の違いから2つの遺構とした。SD01は、暗灰茶色を呈し、ゆるやかな円弧を描いている。SK01は灰茶色を呈し、鉄分を多く含む。調査の結果、SD01とSK01は同一の可能性が高い。SD01はSD02を壊して掘削されている。検出長約3.2m、幅約0.3m、深さ約0.6mである。

SD02 東西方向に検出した。検出長約11.2m、幅約2.2m、深さ約0.8mである。埋土は、上位層は青味のある濃茶灰色シルト、下位層は灰色砂シルトでレンズ状に堆積する。溝の断面形は箱形で底面はほぼ平坦である。SD24とほぼ直交して掘削されていることから、方形周溝墓の一部と推定される(SZ50)。弥生土器、石斧、敲石が出土した。弥生土器は壺の胴部片など小片がある。

石器(図6-16-2)は、敲石で長さ12.8cm、幅6.4cm、厚さ4.3cm、重さ507gである。端部1か所に敲打痕がある。

石器(図6-16-3)は太型蛤歯石斧で、長さ6.55cm、幅6.65cm、厚さ4.95cm、重さ225gである。両端欠損している。

SD03・SD06 本遺構は、コの字形にめぐり調査区南へ続く。したがって方形周溝墓の北辺と東辺及び西辺に該当する(SZ49)。東西長約13.7m、西辺は幅約4.3m、深さ約0.5m。東辺は幅約1.5m、深さ約0.5mである。調査区南壁の土層の観察(図6-3)から、水田耕作土直下の褐灰色シルト(やや灰色が強い)

(第6層)が約0.35m堆積し、その下位には暗褐色砂シルト(第6層に比べシルトブロック多い)、暗褐色灰色シルト(第6層よりシルト質強い)などが地山面まで堆積している。この暗褐色灰色シルトを主とする土が周溝墓の盛土と考えられ、その高さは0.4～0.5mである。築造当初はさらに高く積まれていたと思われる。溝内には下位に地山砂ブロックを多く含む暗褐色灰色砂シルトが堆積し、その上位に遺物包含層である褐灰色シルト(第6層)が流入している。流入後の窪んだ溝内には炭化物が層となって含む青灰色シルト(第4層)や青灰色シルト(第3層)が堆積している。溝内からは弥生土器、石器が出土した。

弥生土器は、細頸壺(図6-15-2)口頸部の破片である。口径7.0cm、残存高8.5cmを測る。口唇部は

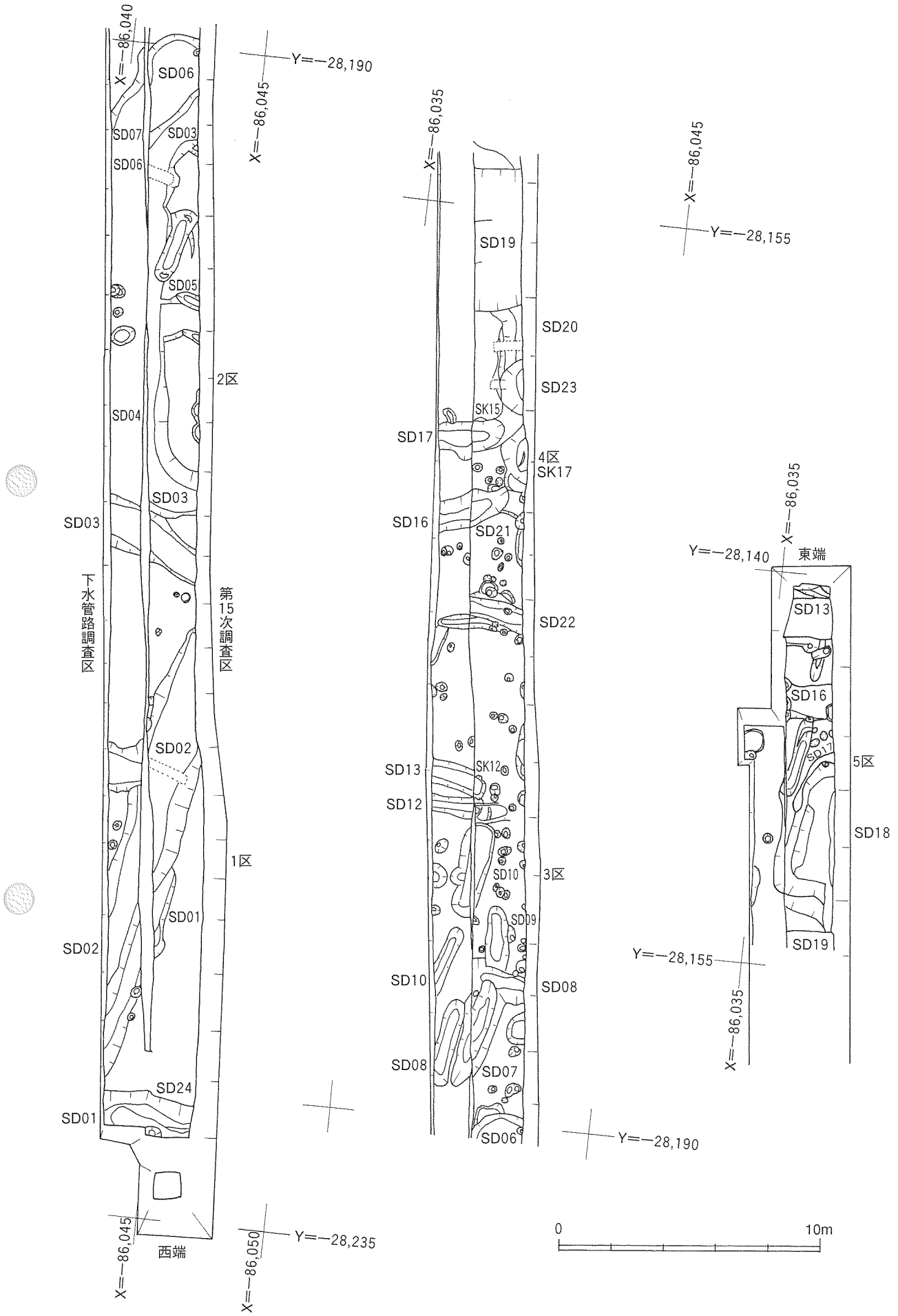


図 6-1 全体図 S=1/200

上方へつまみあげている。頸部はしっかりとしぼられ、内面に縦方向のひだ（しぼり痕）が残る。外面は文様帯により調整痕は不明である。文様は、口唇部には櫛描波状文、頸部への変換部には貝殻刺突文、頸部は櫛描波状文、直線文、竹管刺突文、貝殻刺突文が施される。色調はにぶい黄橙色(10YR 7 / 2)、褐灰色 (10YR 4 / 1) を呈し、胎土はやや粗い。焼成は良好である。時期は朝日V期と考えられる。



写真6-1 SD03 弥生土器出土状況

弥生土器(図6-15-3)は、壺の底部の破片である。底径4.7cm、残存高3.3cmを測る。外面はハケ調整、内面はイタナデ調整痕が残る。底面に木葉痕が残る。色調は黄灰色(2.5Y6/1)を呈する。胎土はやや粗い。焼成は良好である。

弥生土器は(図6-15-1)は、広口壺の口縁部の破片である。復元口径21.0cmを測る。口縁部を折り曲げて面をつくる。口唇端部はやや下方へ向く。口唇部外面には櫛描波状文、内面には櫛歯による羽状刺突文を入れる。また羽状内に粘土塊貼り付けの突起を付ける。色調は浅黄橙色(10YR8/3)を呈し、胎土は粗い。焼成はやや不良である。時期は朝日V期と考えられる。このほか弥生土器壺の胴部片など小片がある。

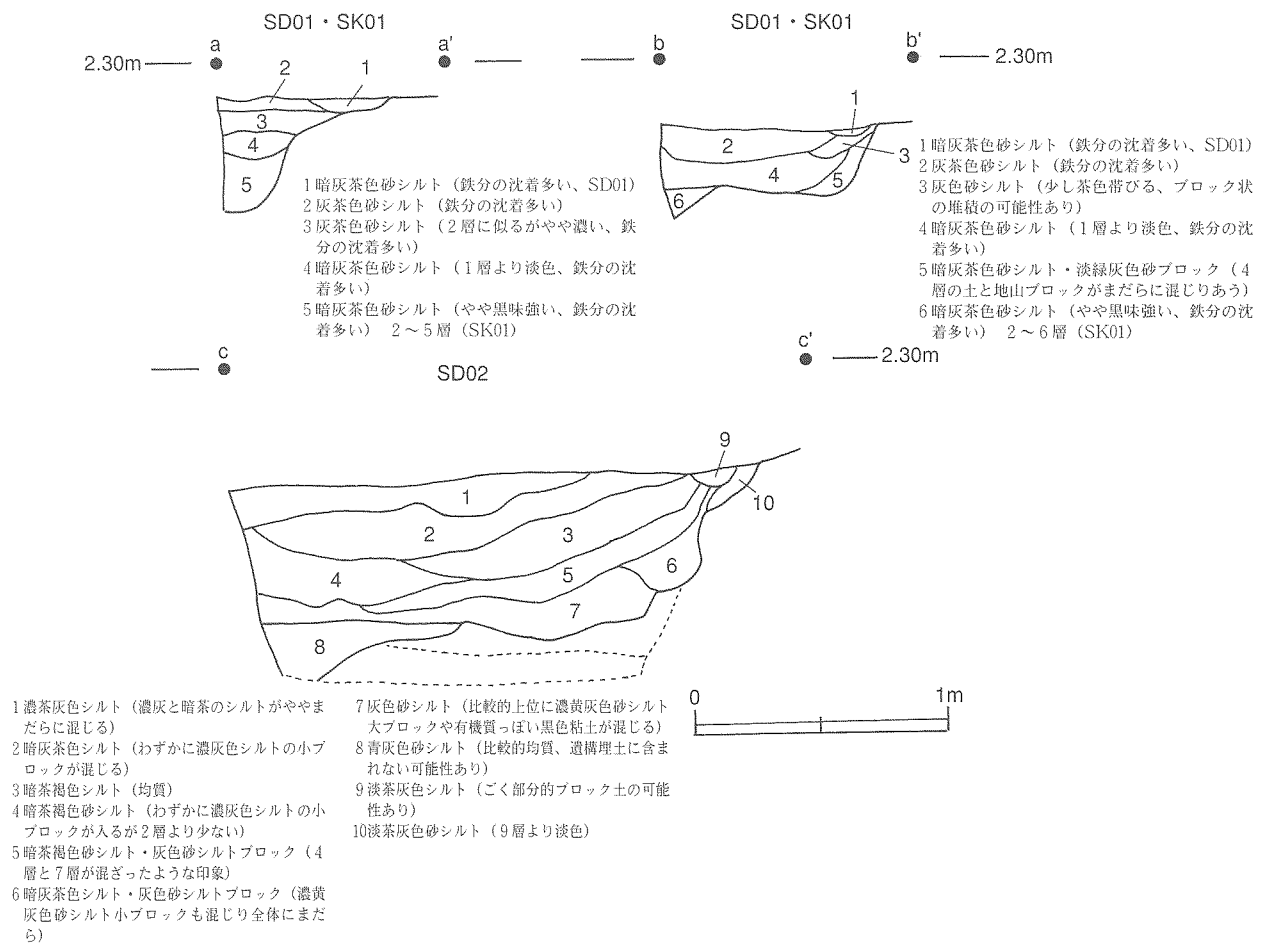
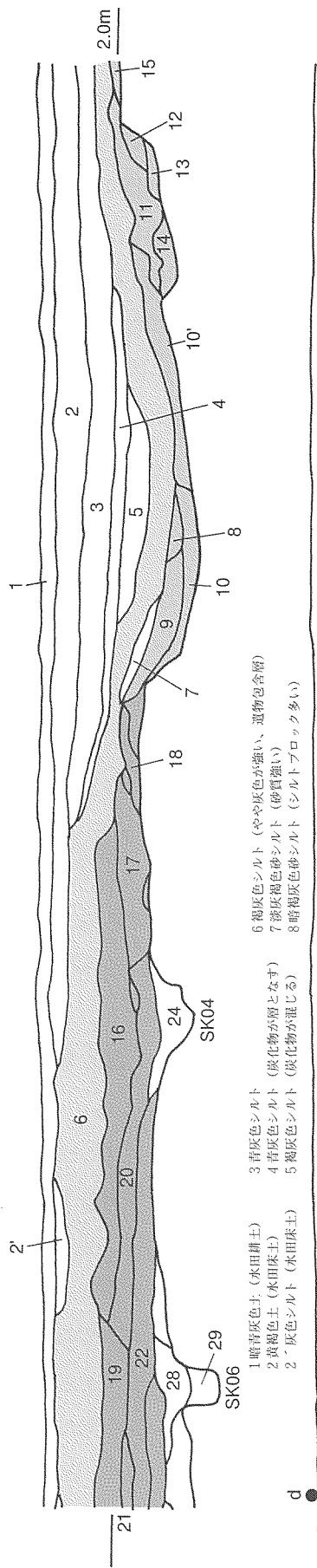


図6-2 土層図 (SD01・SD02・SK01) S=1/30

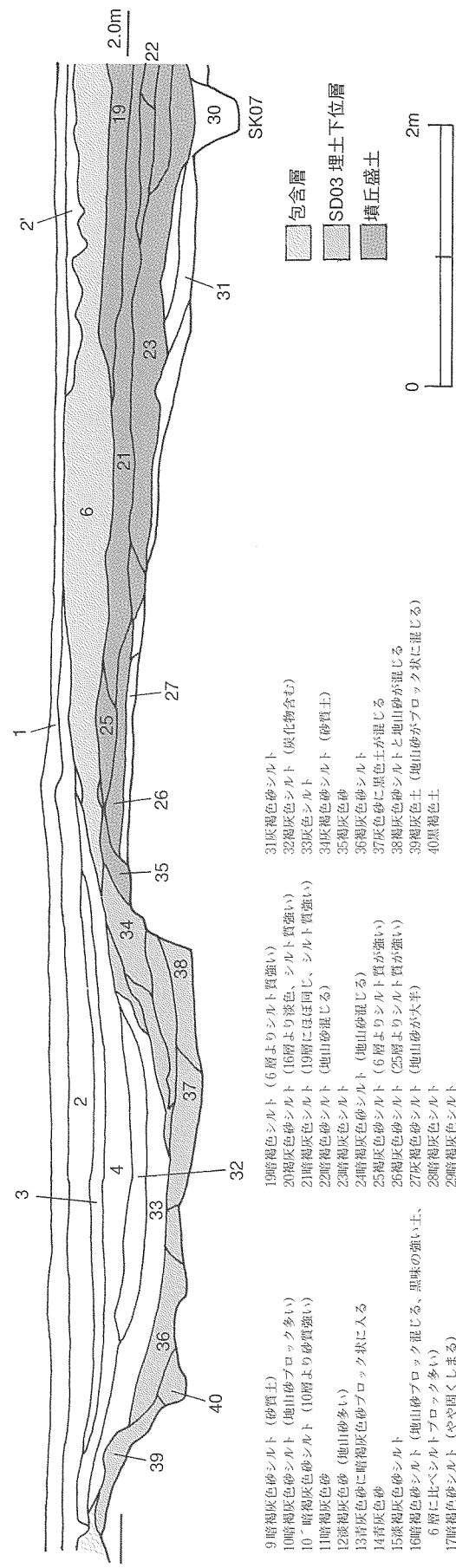
d'

表土 (宅地造成土)



- 1 暗青灰色土 (水田耕土)
- 2 黄褐色土 (水田床土)
- 2' 灰色シルト (水田床土)
- 3 青灰色シルト
- 4 青灰色シルト (炭化物が層となす)
- 5 褐灰色シルト (炭化物が混じる)
- 6 褐灰色シルト (やや灰色が強い、遺物包含層)
- 7 淡灰褐色シルト (砂質強い)
- 8 暗褐灰色シルト (シルトブロック多い)
- 9 暗褐色シルト (砂質土)
- 10 暗褐色シルト (地山砂混じる)
- 11 暗褐色シルト (地山砂混じる)
- 12 淡褐灰色砂
- 13 青灰色砂 (地山砂多い)
- 14 青灰色砂
- 15 淡褐灰色シルト (地山砂混じる、黒味の強い土、6層に比べシルトブロック多い)
- 16 暗褐色シルト (やや固くしまる)
- 17 暗褐色シルト (ややシルト質強い)
- 18 暗褐色シルト (炭化物が混じる)
- 19 暗褐色シルト (6層よりシルト質強い)
- 20 暗褐色シルト (18層より淡色、シルト質強い)
- 21 暗褐色シルト (19層にほぼ同じ、シルト質強い)
- 22 暗褐色シルト (地山砂混じる)
- 23 暗褐色シルト
- 24 暗褐色シルト (地山砂混じる)
- 25 暗褐色シルト (6層よりシルト質が強い)
- 26 暗褐色シルト (25層よりシルト質が強い)
- 27 暗褐色シルト (地山砂が大半)
- 28 暗褐色シルト
- 29 暗褐色シルト (炭化物含む)
- 30 暗褐色シルト (炭化物含む)
- 31 暗褐色シルト
- 32 暗褐色シルト (炭化物含む)
- 33 暗褐色シルト
- 34 暗褐色シルト (砂質土)
- 35 暗褐色砂
- 36 暗褐色シルト
- 37 暗褐色シルト (地山砂混じる)
- 38 暗褐色シルトと地山砂が混じる
- 39 暗褐色土 (地山砂がブロック状に混じる)
- 40 黒褐色土

盛土



- 包含層
- SD03 埋土下位層
- 填丘盛土

- 9 暗褐色シルト (砂質土)
- 10 暗褐色シルト (地山砂ブロック多い)
- 10' 暗褐色シルト (10層より砂質強い)
- 11 暗褐色シルト
- 12 淡褐灰色砂
- 13 青灰色砂 (地山砂多い)
- 14 青灰色砂
- 15 淡褐灰色シルト (地山砂混じる、黒味の強い土、6層に比べシルトブロック多い)
- 16 暗褐色シルト (やや固くしまる)
- 17 暗褐色シルト (ややシルト質強い)
- 18 暗褐色シルト (炭化物含む)
- 19 暗褐色シルト (6層よりシルト質強い)
- 20 暗褐色シルト (18層より淡色、シルト質強い)
- 21 暗褐色シルト (19層にほぼ同じ、シルト質強い)
- 22 暗褐色シルト (地山砂混じる)
- 23 暗褐色シルト
- 24 暗褐色シルト (地山砂混じる)
- 25 暗褐色シルト (6層よりシルト質が強い)
- 26 暗褐色シルト (25層よりシルト質が強い)
- 27 暗褐色シルト (地山砂が大半)
- 28 暗褐色シルト
- 29 暗褐色シルト (炭化物含む)
- 30 暗褐色シルト (炭化物含む)
- 31 暗褐色シルト
- 32 暗褐色シルト (炭化物含む)
- 33 暗褐色シルト
- 34 暗褐色シルト (砂質土)
- 35 暗褐色砂
- 36 暗褐色シルト
- 37 暗褐色シルト (地山砂混じる)
- 38 暗褐色シルトと地山砂が混じる
- 39 暗褐色土 (地山砂がブロック状に混じる)
- 40 黒褐色土

図 6-3 土層図 (SD03) S=1/50

石器(図6-16-5)は、台石で長さ13.4cm、幅11.1cm、厚さ7.5cm、重さ1.8kgである。破損しているが、敲打痕が残る。

石器(図6-16-6)は、敲石で長さ8.9cm、幅5.7cm、厚さ4.6cm、重さ265gである。破損している。

SD06は、SD03の東側で検出した。しかし、南壁土層観察(図6-3)では、SD03と明確に区分できず、SD06とした第36層(褐灰色砂シルト)が当初のSD03埋土で、37、38層は掘りなおし後の堆積ではないかと思われる。溝底から弥生土器、石器が出土した。弥生土器は、壺形土器1個体である。

弥生土器(図6-15-7)は、細頸壺で口径9.0cm、器高24.3cm、底径5.9cmを測る。口縁部は受口形、胴部は丸みをもったソロバン玉形をしている。口縁部と頸部に凹線文がめぐり、胴部外面にはハケ調整が施される。上半部にはハケ調整のあとタタキ調整が施される。色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)、一部褐灰色(10YR5/1)を呈し、胎土はやや粗い。雲母小片を多く含む。焼成は良好である。時期は朝日VI期と考えられる。

石器(図6-16-4)は、敲石で長さ11.6cm、幅5.9cm、厚さ4.3cm、重さ423gである。複数の敲打痕が認められる。

SD04 南北方向に約0.6m検出した。浅い土坑状の遺構である。幅約0.6m、深さ約0.1mである。SD03、SK06、SK07に一部壊されている。埋土は暗灰茶色シルトである。

SD05 検出長約2.95m、幅約0.7m、深さ0.50~0.70mである。土坑状を呈する。埋土は黒褐色砂シルトで、中~下層に砂が多い。SD03に一部壊されている。平面プランは、SK06、SK07と直交しており、小規模な周溝墓の可能性も考えて溝とした(SZX39)。弥生土器が出土した。弥生土器は、底部の破片である。底径6.5cmを測る。色調は外面黄灰色(2.5Y4/1)、黒褐色(2.5Y3/1)内面灰黄(2.5Y6/2)胎土は粗く砂粒を多く含む。焼成は良好である。

SD07 東西方向に検出した。検出長約3.5m、幅約1.15m、深さ約0.75mである。埋土は淡褐灰色砂シルトである。SD08に切られる。東側のSD09とは別の遺構である。この付近には同一方向のSD10などが近接して構築されている。

SD08 当初SK11としたが、溝状遺構とした。検出長約2.0m、幅約1.1m、深さ約0.4mである。埋土は、上位は暗褐灰色砂で黒味強くまた砂質強い。下位は褐灰色砂で地山砂が混じる。

SD09 東西方向に検出した。土坑状を呈する。検出長約2.4m、幅約0.9m、深さ約0.2m。埋土は暗灰茶シルトに地山ブロック、炭化粒混じる。西端をSD08に切られる。溝底から弥生土器が出土した。破片接合の結果、壺形土器2個体であった。

弥生土器広口壺(図6-15-5)は、口径7.9cm、器高12.6cm、底径3.5cmを測る。口縁部は素縁で外方にひらく。胴部はソロバン玉形をしているが、上半は丸みをもつ。下半は直線的である。口縁内面には櫛描波状文がめぐり、頸部外面には櫛描波状文、胴部にはハケ調整後に櫛描横線文を多用している。頸部の波状文と直線文の境に竹管刺突文をめぐらす。また、櫛描縦線文を頸部から四方向に入れる。下半はヘラミガキ調整を施す。色調はにぶい橙色(10YR7/2)を呈し、黒斑が明瞭である。胎土はやや粗い。砂粒を含む。焼成は良好である。時期は朝日V期と考えられる。

弥生土器広口壺(図6-15-4)は、口径8.5cm、器高(残存高)11.5cmを測る。底部を欠く。口縁部は素縁で外方にひらく。胴部は丸みをもつ。口唇部はヨコナデ調整が加えられて断面方形をなす。口縁部から

胴部上半はハケ調整が施される。下半はヘラミガキ調整である。文様は竹管刺突文でシンプルに仕上げる。頸部には1条めぐらせ、胴部には縦方向に6条施す。色調は灰黄 (2.5YR7/2)、にぶい黄橙色 (2.5YR6/3)、オリーブ黒色 (5Y3/1) を呈する。胎土はやや密で、焼成は良好である。時期は朝日V期と考えられる。

このほか弥生土器細頸壺の口縁部の破片がある。内外面に波状文をめぐらす。色調はにぶい黄橙色 (10YR7/2) を呈する。

SD10 北壁に接して検出した。検出長3.5m、幅0.7m以上、深さ約0.95mである。埋土は暗褐色砂シルト (やや黒い) である。下水管路調査区のSD10、SD12と合わせて方形周溝墓の一辺と考えられる (SZX37)。弥生土器が出土した。弥生土器は底部の破片である。底径7.1cmを測る。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4)、胎土に雲母を含む。焼成は良好である。

SD11 検出長約1.8m、幅約0.75m、深さ約0.5mである。埋土は褐灰色砂シルトに砂がブロック状に含まれる。底面は北側に向かって深くなる。

SD12 南壁きわで検出した。幅約0.3m、深さ約0.3mである。大半が南壁以南である。埋土は褐灰色砂シルトである。

SD13 調査区東端で検出した。東側は水道管理設溝、西側は雨水管理設溝により壊されているため、形状、規模など不明である。南北方向の溝または土坑と思われる。埋土は灰褐色土である。残存する深さは0.75m (地山面から約0.2m) である。弥生土器が出土した。

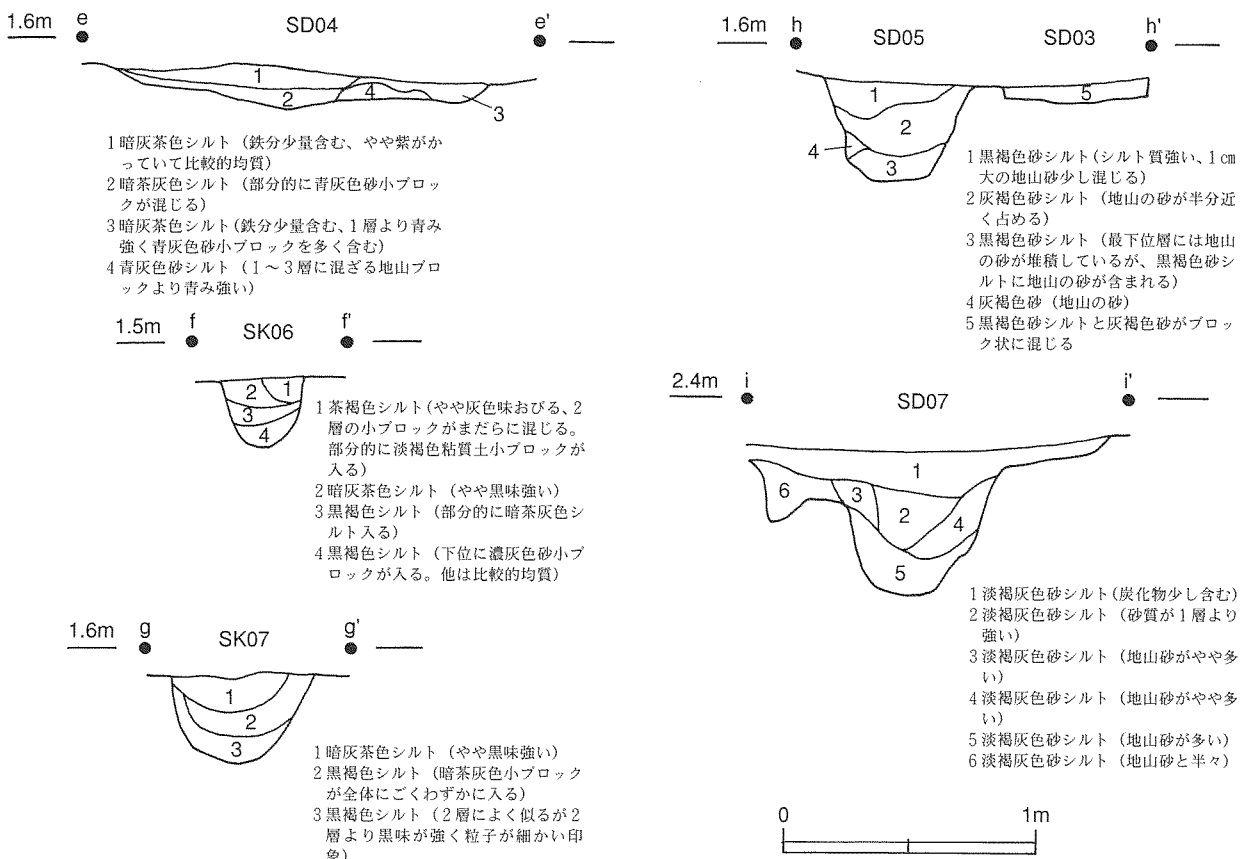


図6-4 土層図 (SD04・SD05・SK06・SD07・SK07) S=1/30

SD14 東端から3m西方、雨水管の西側で検出した。検出長約1.7m、幅約0.45m、深さ約0.2mである。土坑状を呈する。埋土は褐灰色シルトに少量の灰色地山砂含む。SD17と合わせて方形周溝墓の一部となる可能性がある (SZX34)。

SD15 東端近くの雨水管の西側で検出した。多くは雨水管に壊されている。またSD14とも重複し一部壊されている。

SD16 南北方向に検出した。幅約1.2m、深さ0.03~0.11mである。埋土は、淡灰茶色シルトに暗褐色土ブロック土、暗茶灰色シルトブロック土、地山ブロック土含む。

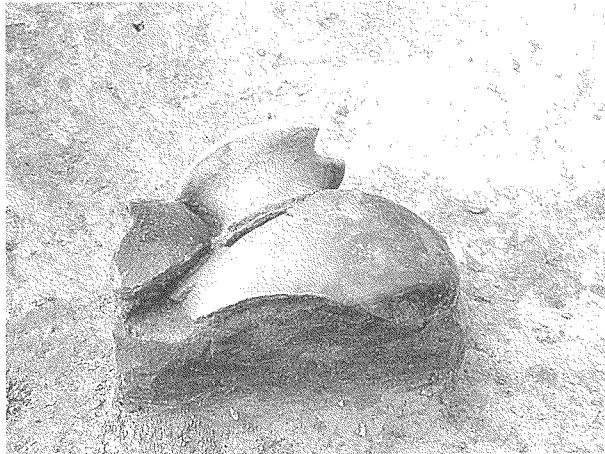


写真 6-2 SD09 弥生土器出土状況



写真 6-3 SD09 弥生土器出土状況

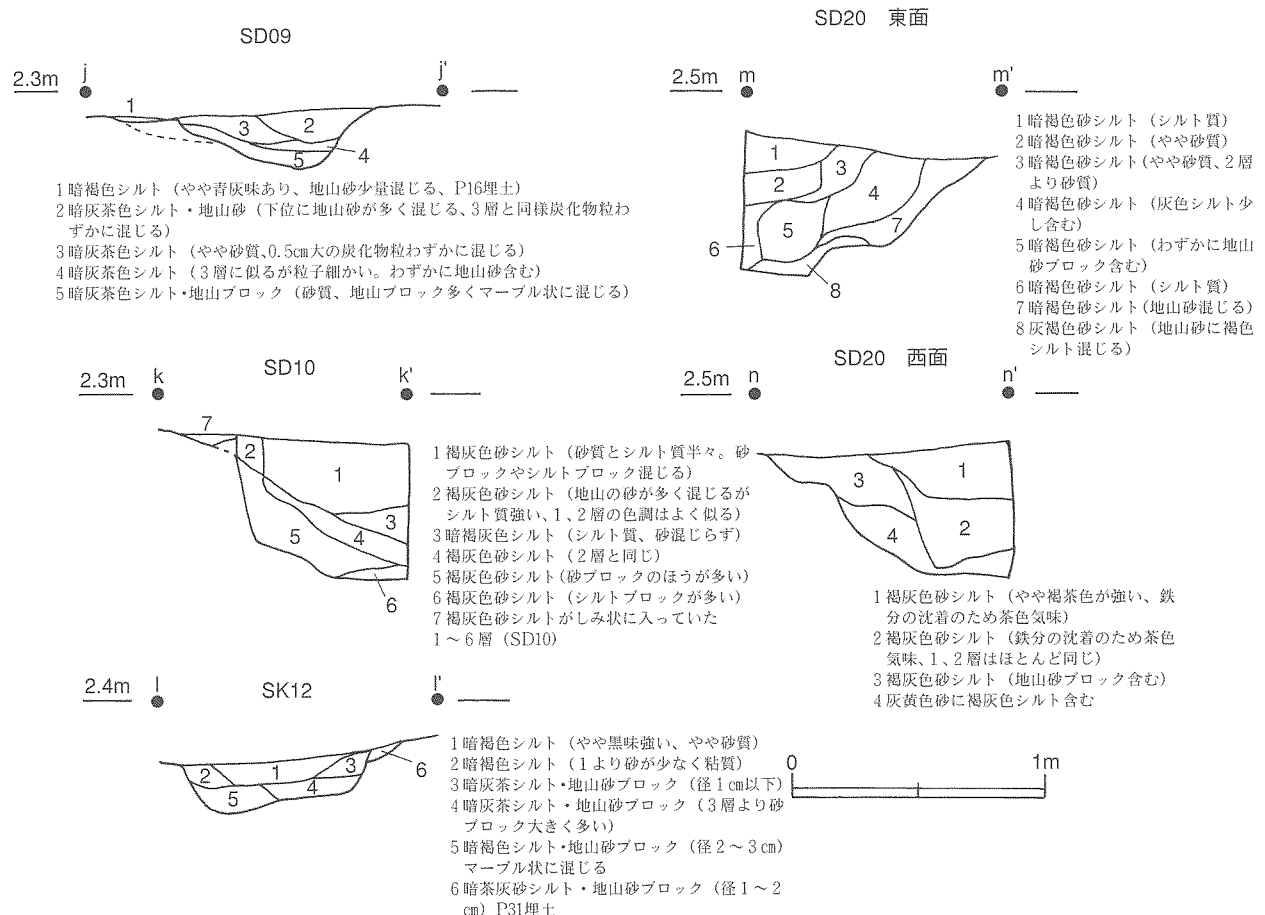


図 6-5 土層図 (SD09・SD20・SD10・SK12) S=1/30

SD17 検出長2.95m、幅約0.6m、深さ0.25~0.46mである。埋土は、褐灰色砂シルトを基本とし、地山ブロック多く含む。SD18、SD16を一部壊す。弥生土器が出土した。

SD18 規模が大きく溝の方向は不明である。東西約5m、南北約1.5m以上である。深さは約1.3m、地山面から約0.9mである。埋土はレンズ状に堆積する。南壁土層の観察により(図6-8)、溝底付近は暗褐灰色シルトに地山の青灰色砂多く混じる(南壁第17層)。灰青色地山砂多く含む(第16層)。下位層は、灰褐色シルト(第10層)、暗褐灰色シルト(第13層)。上位は淡灰青色土で暗灰青色土筋状に入る(第6層)、淡灰青色土で暗灰色土など筋状に入る(第7層)。淡灰青色土で炭化物ブロック多く含むため黒味が強い(第8層)。

石器(図6-16-7)は、敲石で長さ11.6cm、幅5.6cm、厚さ5.2cm、重さ445gである。濃飛流紋岩。端部1か所に敲打痕がある。

SD19 南北方向の用水路の一部である。検出幅約8.3m、深さ約1.4mである。断面形は箱形で溝底の両端から西側は0.9m、東側は3mそれぞれ内側に丸木杭を打ち込んでいる。その木杭間の幅は約2.8mである。西側肩付近は、周溝墓埋土を壊しているため、褐色土が溝内に入る。埋土は、下位層は灰青色シルトでシルト質が強い。灰色シルトは粘質で固く締まる。上位層は青灰色砂~暗青灰色砂である。

SD20 埋土は、暗褐色シルトでSD19付近は黒っぽい。SK15、SD19に切られる。部分的に攪乱により壊されており、形状がわかりにくかった。掘削を進めていくと、別の遺構SD23、SD17を検出した。深さ約0.6mである。SD21とあわせて方形周溝墓の一部と考えられる(SZX35)。

石器(図6-16-1)は、敲石で、長さ10.85cm、幅5.1cm、厚さ2.95cm、重さ258gである。両端及び側縁に敲打痕がある。

SD21 調査区北壁に接して検出。検出長約1.6m、幅1.6~1.1m、深さ約0.75m、地山面からは0.45~0.57mである。埋土は褐灰色砂シルトで、鉄分、地山砂混じる。方形周溝墓の一部と推定される。敲石が出土した。

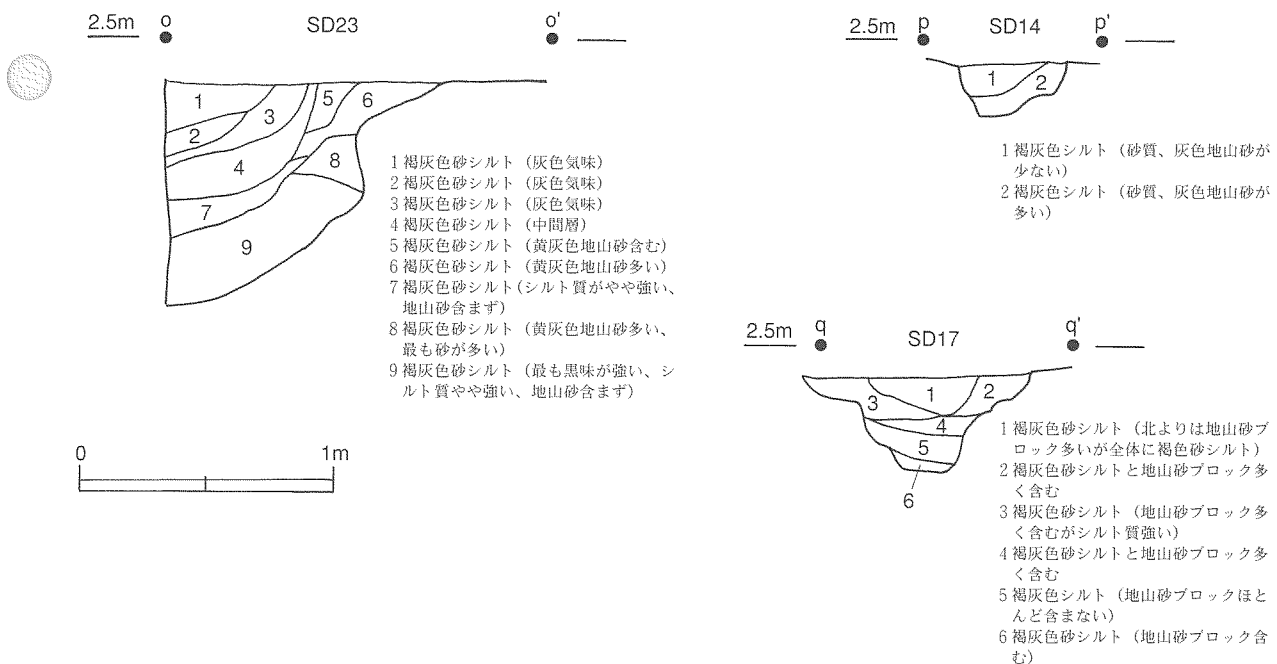


図6-6 土層図 (SD23・SD14・SD17) S=1/30

SD22 検出長約2.2m、幅約1m、深さ約0.55mである。埋土は褐灰色砂シルトである。方形周溝墓の一部と思われる（SZ48、SZX36）。上面付近で弥生土器が出土した。

SD23 SD20下で検出した。深さ約0.8mである。埋土は灰茶色砂シルトである。方形周溝墓の一部と考えられる。

SD24 調査区西端で検出した。当初第13次調査区南西端に西に向かう自然流路があることから、その一部と考え完掘しなかった。しかし、再度掘削したところ南北方向の溝状遺構となった。SD02と合わせて方形周溝墓の一部と推定される。この位置には南北方向に水道管が埋設されており、その周辺は掘ることができなかつたため、溝の西縁は明らかにできなかつた。したがって溝幅は不明である。検出南北長約3.4m、東西検出長約1.5m、深さは地山面から0.7~1.1mである。弥生土器が出土した。

弥生土器は、下位層出土で、小片2点がある。うち1点は、壺の胴部で条痕文の器壁に半截竹管文がめぐり。色調は褐灰色（7.5YR4/1）、胎土に雲母を含む。三河地方にみられ、朝日Ⅲ期のものと考えられる。

SK03 南壁きわで検出した。東西約0.8m、深さ約0.05mである。埋土は濃灰茶で、緑色味の灰ブロック土を含む。

SK04 地山検出面では東西約0.8m、土層面で確認される上面で約1.1m、深さ約0.33mである。埋土は暗褐灰色砂シルトで黒味が強い。地山砂が混じるため砂質が強い。弥生土器が出土した。弥生土器は甕の口縁部の破片である。口唇部に凹圧を加えている。小片のため1か所であるが、本来は2あるいは4か所凹圧を加える。外面は剥離して欠ける。色調はにぶい黄橙（10YR6/3）を呈する。このほか弥生土器壺の頸部の破片がある。外面に貝殻直線文をめぐらす。色調は褐灰色（10YR6/1）を呈する。胎土に雲母を含む。朝日Ⅲ期のものと考えられる。

SK06 南壁きわで検出した。検出長約0.7m、幅約0.35m、深さ0.46mである。埋土は、茶褐色シルト、暗灰茶色シルトである。

SK07 南壁きわで検出した。検出長約1m、幅約0.55m、深さ約0.34mである。埋土は、暗灰茶色シルト

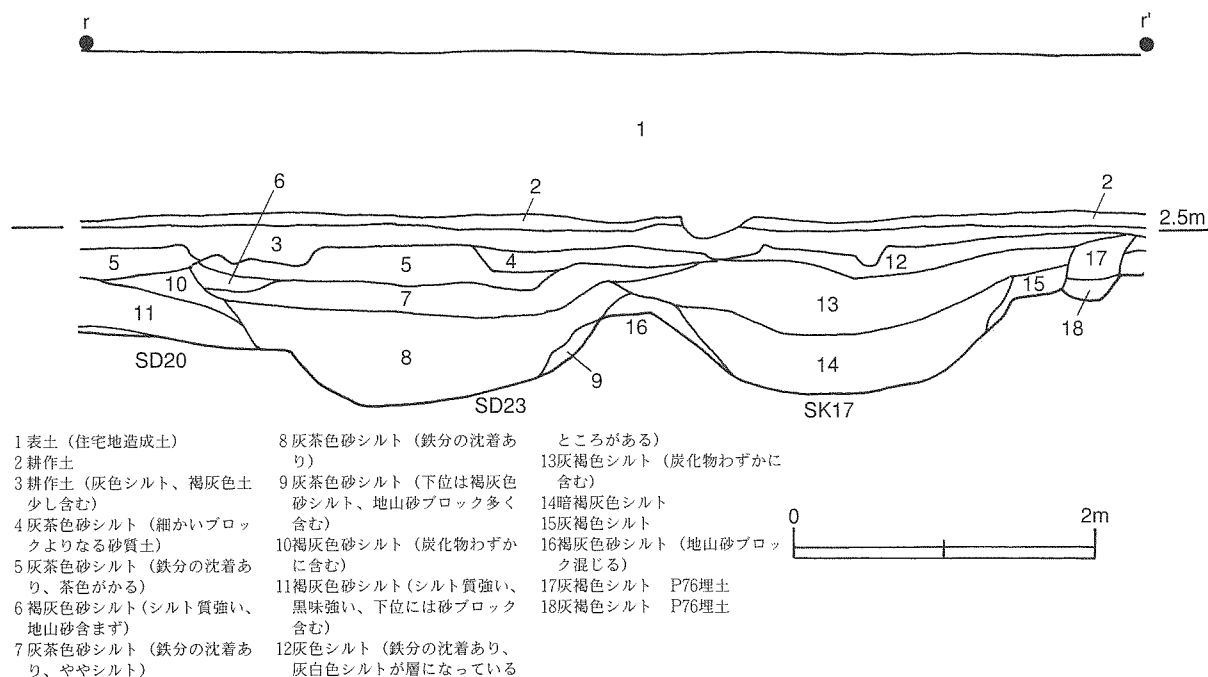


図 6-7 土層図 (SK17・SD23・SD20) S=1/50

で炭化物、褐灰色シルトブロック土、灰褐色砂ブロック土少し含む。

SK10 南壁きわで検出した。幅約1.82m、深さ約0.3mである。地山面からの深さは約0.08mで浅い皿状を呈する。埋土は、淡褐灰色砂シルトで黄灰色砂をブロック状に含み砂質が強い。

SK12 北壁きわで検出した。検出長0.5m、幅0.8m、深さ約0.2mである。埋土は褐灰色砂シルトである。下水管路区の調査で溝状遺構であることが確認された (SZ48)。

SK15 土坑としたが、溝の可能性が高い。検出長約1.0m、深さ約0.8m。埋土は、上位層は黄灰色砂に褐灰色シルトが含まれ、一見地山と思うほどであった。下位層は褐灰色シルト、淡褐灰色シルトである。

SK17 SD20埋土掘削後検出した。しかし南壁土層ではSD20を壊して掘っているようにみえる。埋土は、上位は灰褐色シルト、下位は暗褐灰色シルトである。また、南壁土層からSD23を壊して掘っている。底面に接して弥生土器壺が出土した。壺形土器で完形である。方形周溝墓の溝の可能性が高い。

弥生土器は、細頸壺 (図6-15-6) は復元口径9.8cm、器高27.0cm、底径5.2cmを測る。口縁部はヨコナデ調整により上方へつまみ上げられて、受口状に作られている。胴部は丸みをおび、屈折して短い直線状の胴部下半につづく。頸部はハケ調整の後面取り状にミガキ調整が施される。また、頸部は製作時のしぼりにより、内面に縦方向のひだ (しぼり痕) が残る。頸部外面には2条1単位4条の沈線文が描かれる。胴部外面は、全体にハケ調整が施されるのみで櫛描文はない。胴部上半から下半に変わる屈折部はミガキ調整が施される。胴部内面は、成形時の指頭圧痕とユビナデ調整がみられる。色調は灰褐色 (7.5YR6/2) を呈し、胎土は粗く雲母小片含む。焼成はやや不良である。時期は朝日V期と考えられる。

P79 SD18東肩で検出した。径25×20cm、深さは地山ベース面から47.5cmである。弥生土器S字甕A類の口縁部小片が出土した。灰白色 (10YR8/2) を呈する。時期は朝日IX期のものと考えられる。

包含層出土 石器 (図6-16-8) は、敲石で西端から50m付近の包含層から出土した。長さ12.5cm、幅7.2cm、厚さ4.6cm、重さ650g、流紋岩である。端部1か所に敲打痕がある。

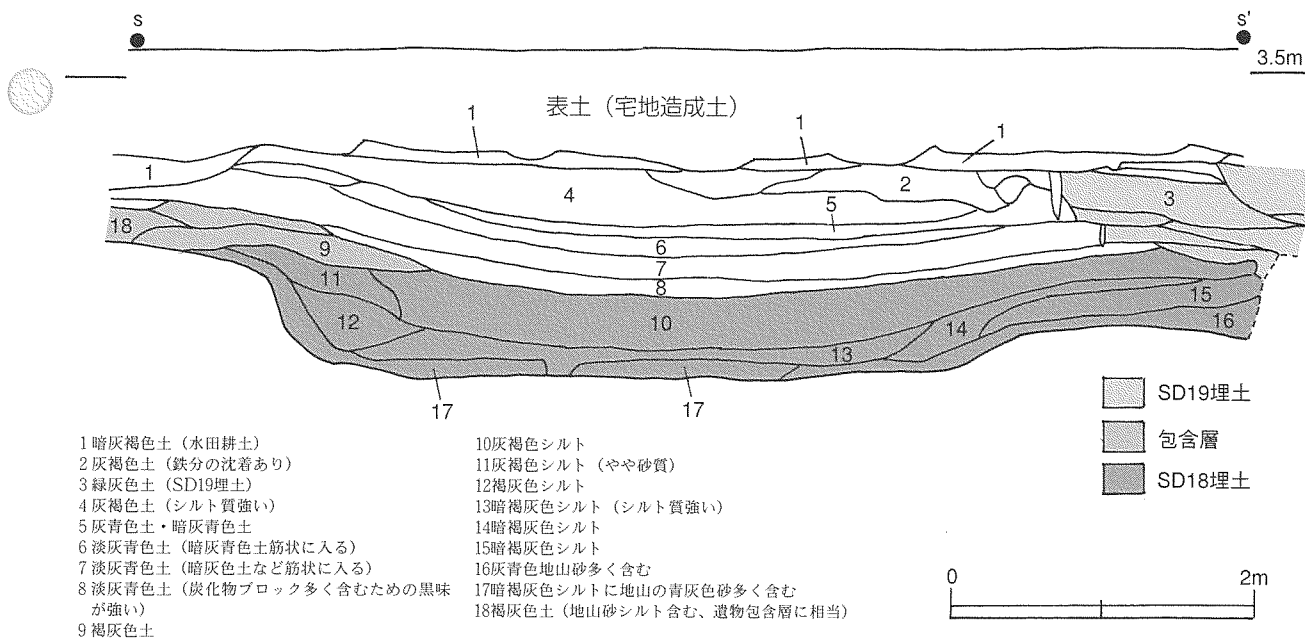


図6-8 土層図 (SD18) S=1/50

(2) 小 結

今回検出した遺構は、主に周溝墓の一部と小穴（ピット）である。方形周溝墓は、全体の形を知ることにはできなかったが、第13次、第14次調査と同様に溝の配置や規模から周溝墓と考えられるものSZ、その可能性の高いものをSZXとしておく。（注〔 〕は下水管路部分の調査区、規模は第15次調査区内）

方形周溝墓名	遺 構 名	規 模
SZ48	SK12・SD22・〔SD13・SD15〕	東西6.4m×南北2.2m以上
SZ49	SD03・SD06	東西13.7m×南北1.8m以上
SZ50	SD02・SD24	東西13.5m以上×3m以上
SZX34	SD17・SD14	東西5.4m以上×南北1m以上
SZX35	SD20・SD21・〔SD16〕	東西6.8m以上×南北1.3m以上
SZX36	SD22・SD21 ?	東西3.5m×南北2m以上
SZX37	SD10・〔SD10・SD11・SD12〕	東西3.5m以上×南北不明
SZX38	SD08・〔SD08〕	東西5m×南北1.9m以上
SZX39	SK07・SD05	東西2.7m以上×南北1.2m以上
SZX40	SD02・SD03	東西4.4m以上×南北1.9m以上

これらの遺構の時期は、出土遺物が少ないためはっきりとしたことはいえないが、わずかながら完形に近い弥生土器が出土したSZ49は朝日Ⅴ～Ⅵ期、SD09とSK17は朝日Ⅴ期と推定される。溝、土坑以外の遺構は、小穴がある。小穴は、SZ49の東側で多く検出された。地山面の高さがSZ49の西側より0.3～0.5m高いことが関係していると推定される。小穴の構築された時期も、遺物が少なくはっきりしないが、P79はS字甕A類の小片が出土したことから、朝日Ⅸ期までのものを含んでおり、時期幅をもっていると考えられる。従って弥生土器は、SK04出土の朝日Ⅲ期の壺頸部片が最も古く、P79の朝日Ⅸ期の甕口縁部が最も新しい。石器は石斧、敲石、台石が出土した。

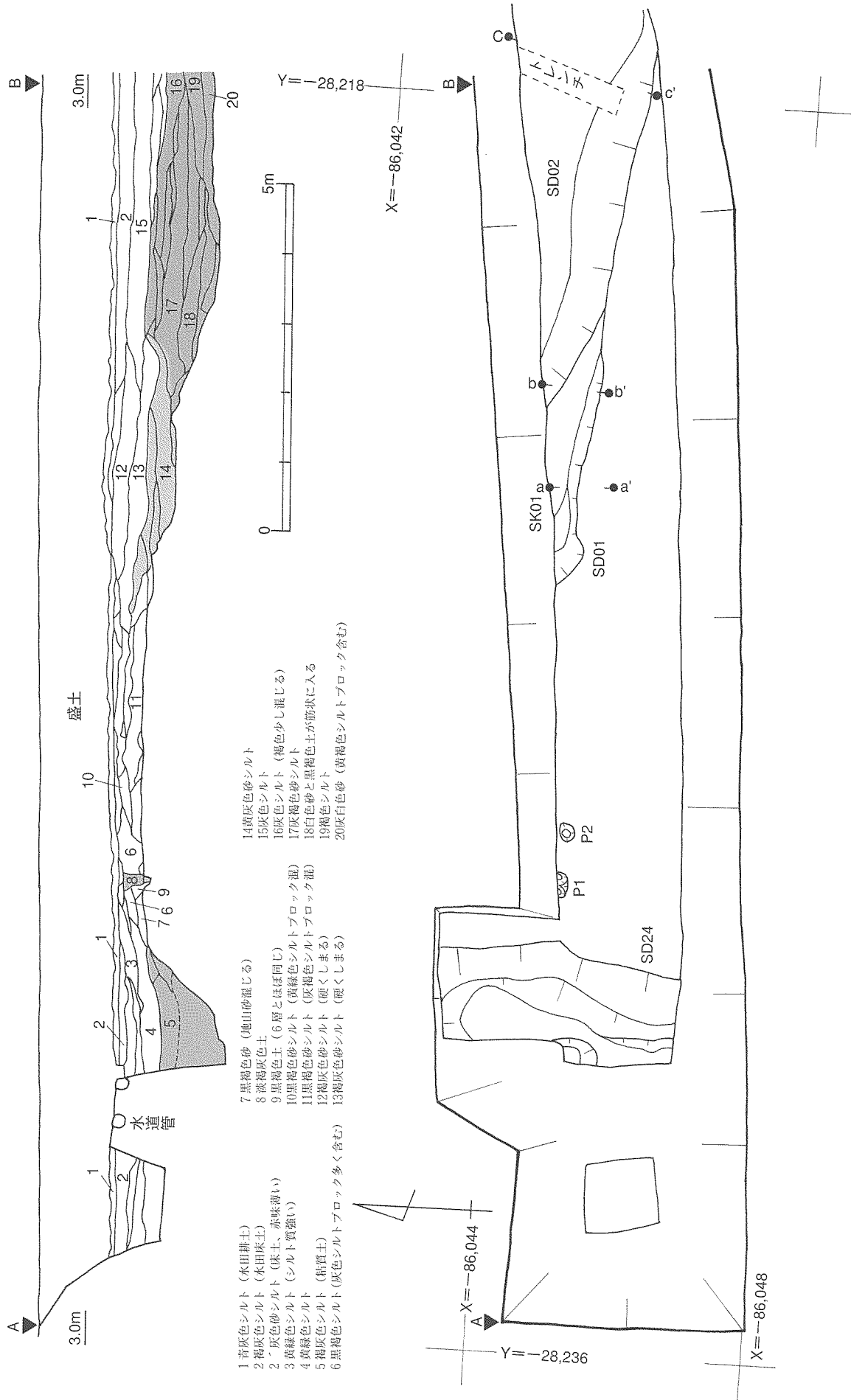


図 6-9 遺構平面図・土層図 (1) S=1/80 アミ部は遺構埋土

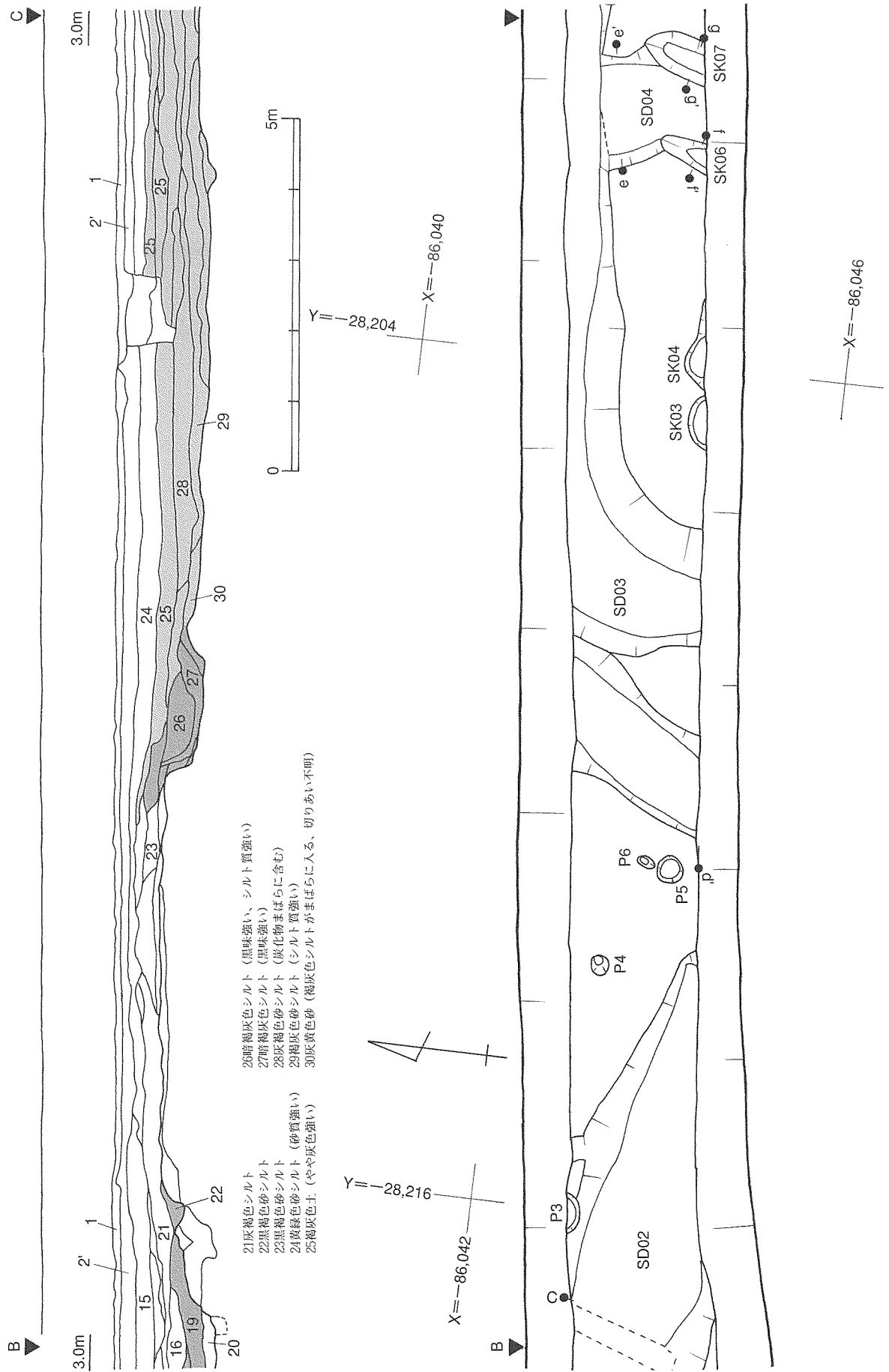


図6-10 遺構平面図・土層図 (2) S=1/80 アミ部は遺構埋土

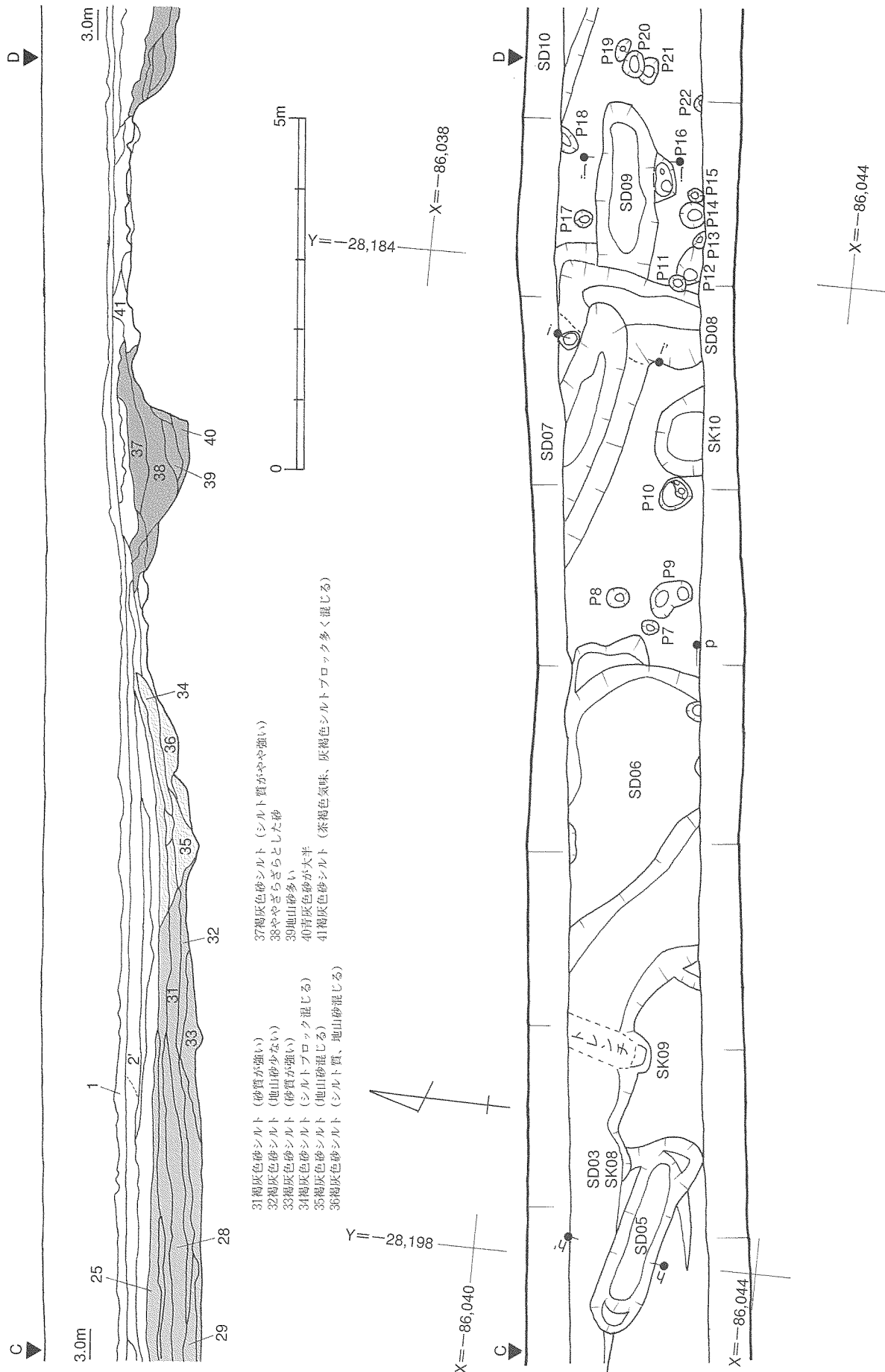


図 6-11 遺構平面図・土層図 (3) S=1/80 アミ部は遺構埋土

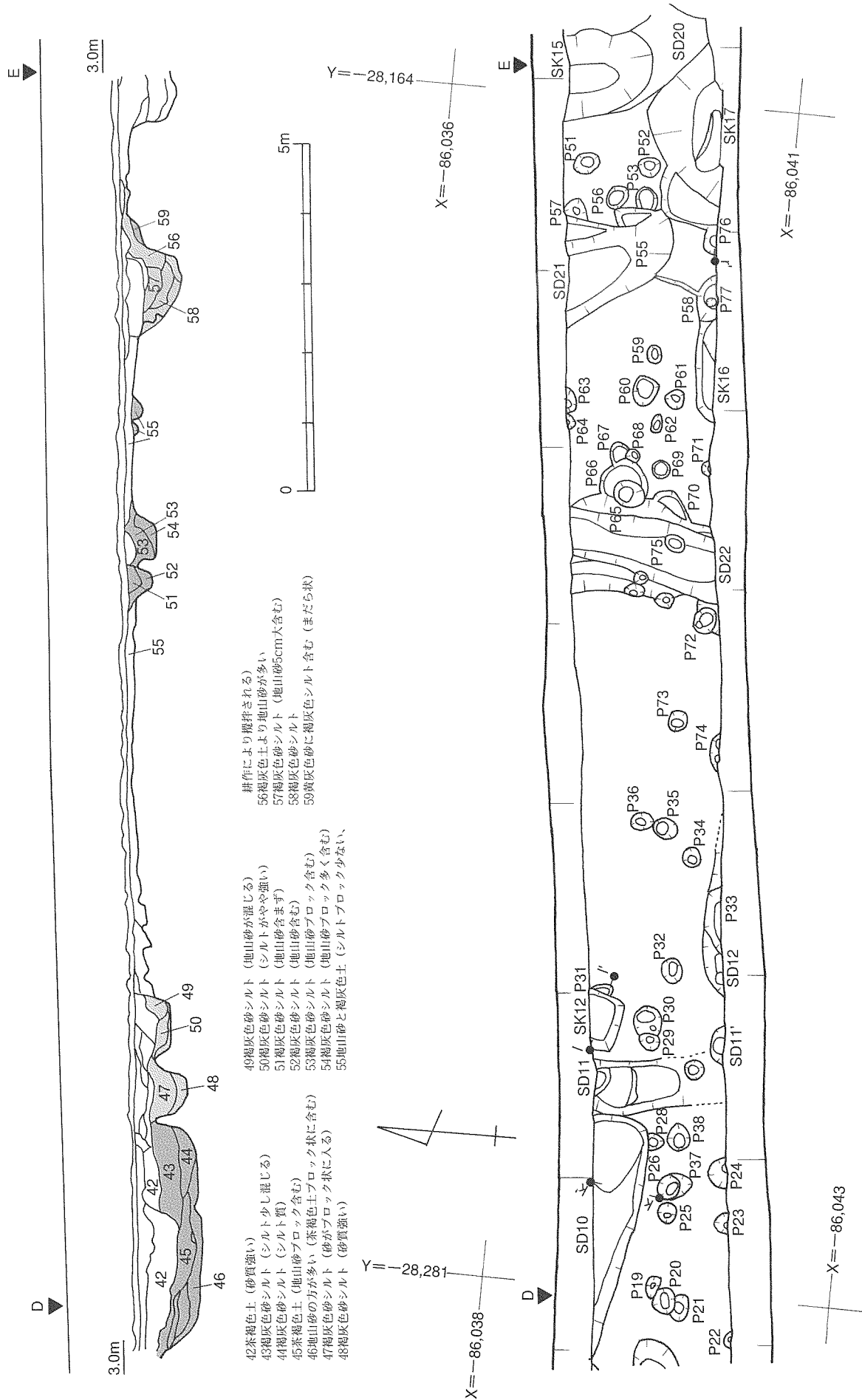


図 6-12 遺構平面図・土層図 (4) S=1/80 ア三部は遺構埋土

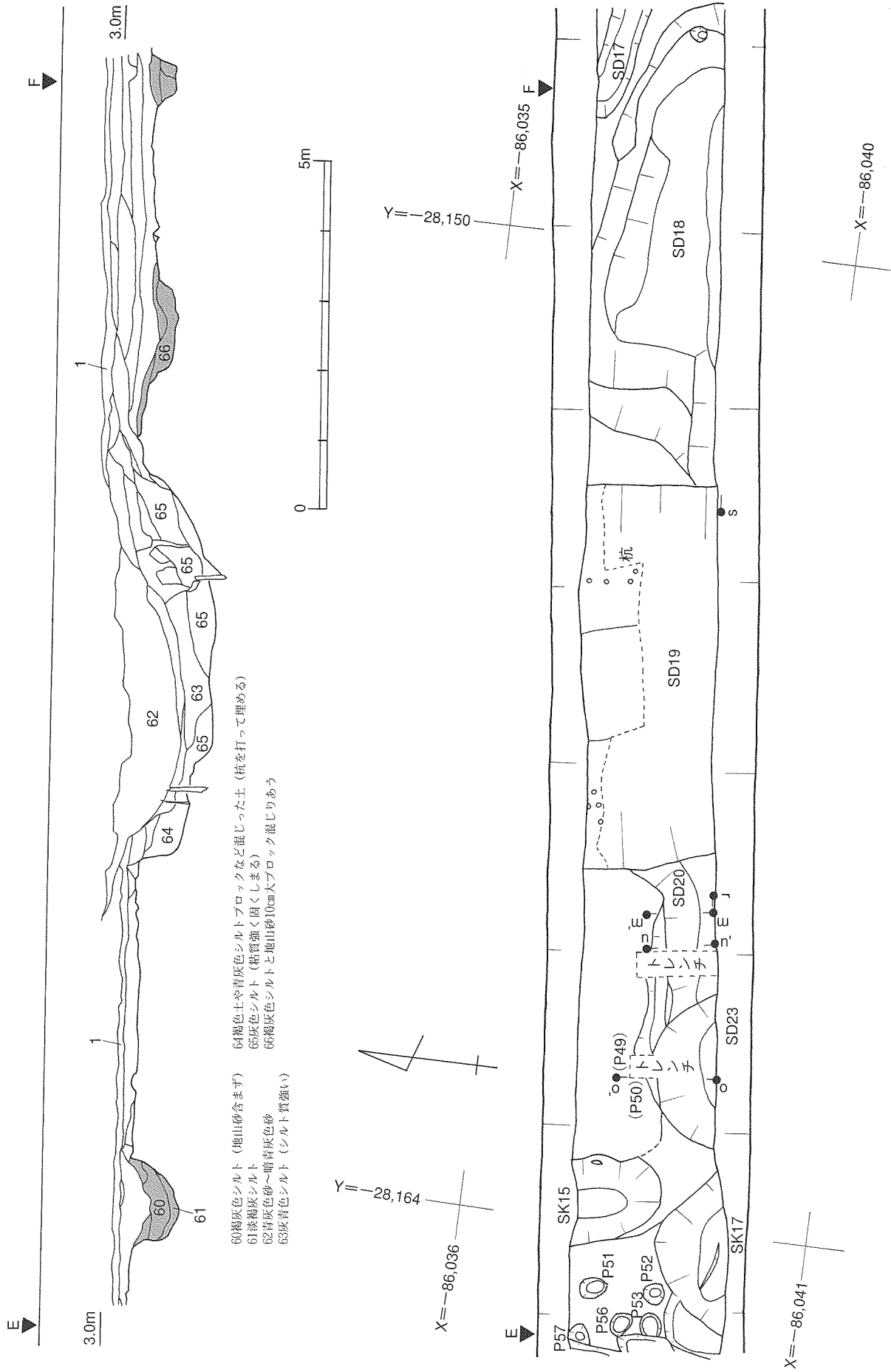


図 6-13 遺構平面図・土層図 (5) S=1/80 ア3部は遺構埋土

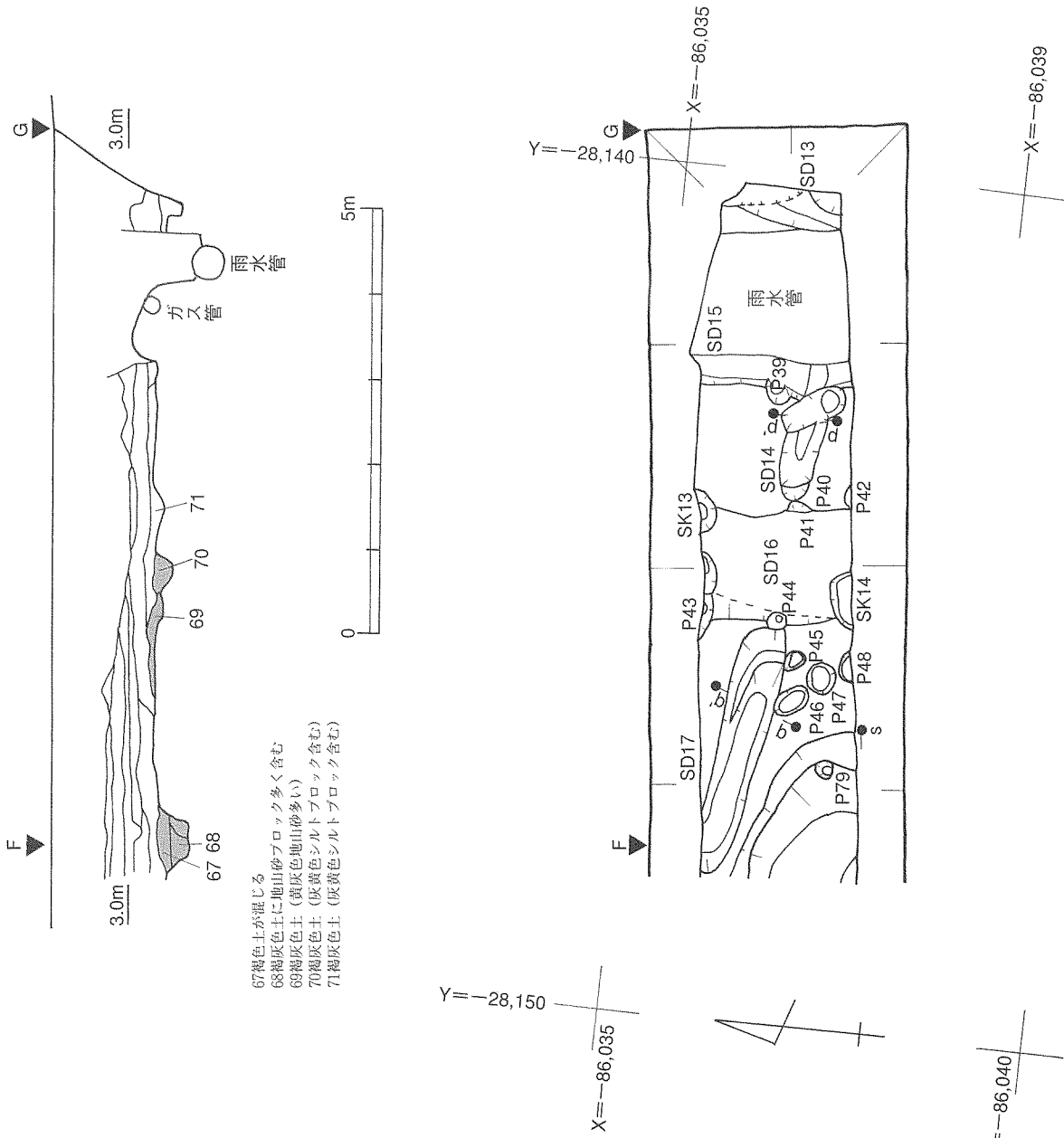


図 6-14 遺構平面図・土層図 (6) S=1/80 ア三部分は遺構埋土

遺構名	規模	深さ	備考
P 1	30×(15)	9.6	
P 2	25×20	14.0	
P 3	60×(15)	15.5	
P 4	30×25	10.0	
P 5	40×35	13.0	
P 6	30×15	15.0	
P 7	20×20	10.9	
P 8	30×30	10.4	
P 9	40×60	34.7~31.7	
P10	40×50	3.2~7.1	
P11	25×25	34.1	
P12	35×55	19.4	
P13	25×10	3.4	
P14	40×30	8.0	
P15	15×15	11.8	
P16	65×30	—	P16(古)→SD09(新)
P17	25×25	20.4	
P18	35×(20)	9.5	
P19	35×15	4.2	
P20	35×30	10.2	P20(古)→P19(新)
P21	40×20	4.7	P21(古)→P20(新)
P22	25×(10)	8.8	
P23	30×(20)	13.3	
P24	40×(30)	27.0	
P25	30×25	27.8	
P26	30×30	44.9	
P27			SD10上面検出
P28	30×20	13.2	
P29	25×25	31.3	
P30	40×35	20.2	P30(古)→P29(新)
P31	(15)×30	27.7	
P32	40×25	27.1	
P33	100×(25)	26.2	SD12(古)→P33(新)
P34	30×25	25.2	SD12(古)→P34(新)
P35	35×35	28	
P36	25×30	19.1	
P37	30×(20)	5.4	
P38	40×30	23.9	
P39	40×30	9~6	P39(古)→SD15(新)
P40	(15)×25	—	P40(古)→SD14(新)

遺構名	規模	深さ	備考
P41	()×30	—	P41(古)→SD16(新)
P42	30×(5)	—	P42(古)→SD16(新)
P43	60×(10)	8.7	P43(古)→SD16(新)
P44	20×20	10.2	
P45	30×15	7	P45(古)→SD17(新)
P46	45×25	5.5	
P47	35×30	11.4	
P48	40×(16)	8.4	
P49	—	—	遺構の肩
P50	—	—	//
P51	30×40	6.4	地山が汚れた感じ
P52	30×30	10.2	
P53	25×35	8.9	
P54	—	—	遺構の肩
P55	(30)×(60)	9.5	
P56	35×25	6.2	
P57	25×30	7.6	
P58	70×25	3.5	
P59	30×15	6.1	
P60	45×40	6.5	
P61	30×30	4.3	
P62	30×15	8.7	
P63	40×15	12.9	
P64	20×10	4.7	
P65	40×45	41.1	
P66	(60)×65	1.6	P66(古)→SD22, P65(新)
P67	20×30	5.8	P67(古)→P66(新)
P68	15×10	—	P68(古)→P66(新)
P69	25×25	5.8	
P70	(25)×60	5.3	P70(古)→SD22(新)
P71	25×(10)	32.9	
P72	40×30	25.7	
P73	30×20	33.6	
P74	60×(10)	9.5	
P75	25×30	15.9	P75(古)→SD22(新)
P76	30×(20)	14.1	
P77	20×20	11.8	
P78	(20)×(50)	16.1	
P79	25×20	16	SD16肩からの深さ47.5

表1 遺構(ピット)一覧

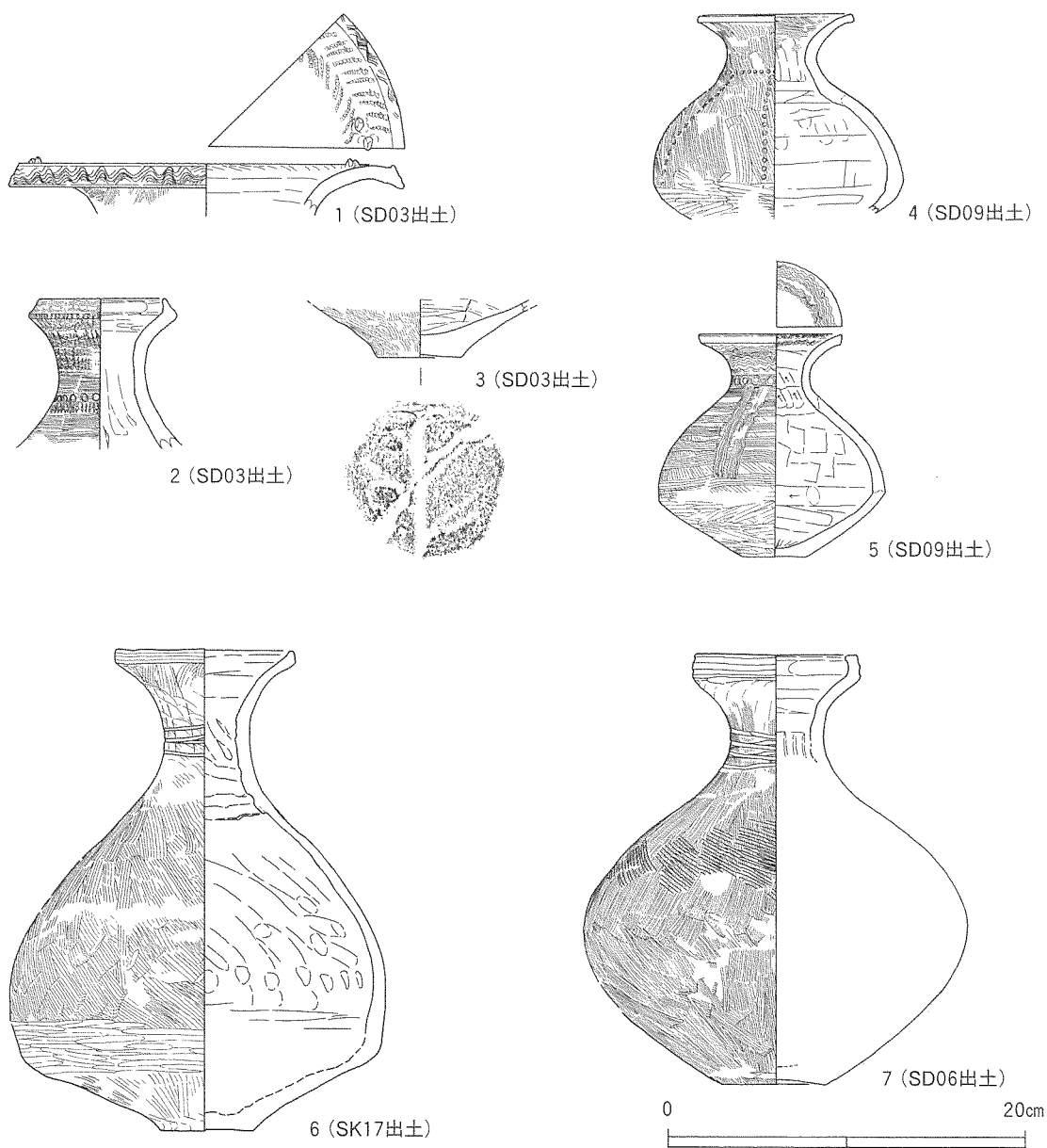


图 6-15 遺物実測図 (1) S=1/4

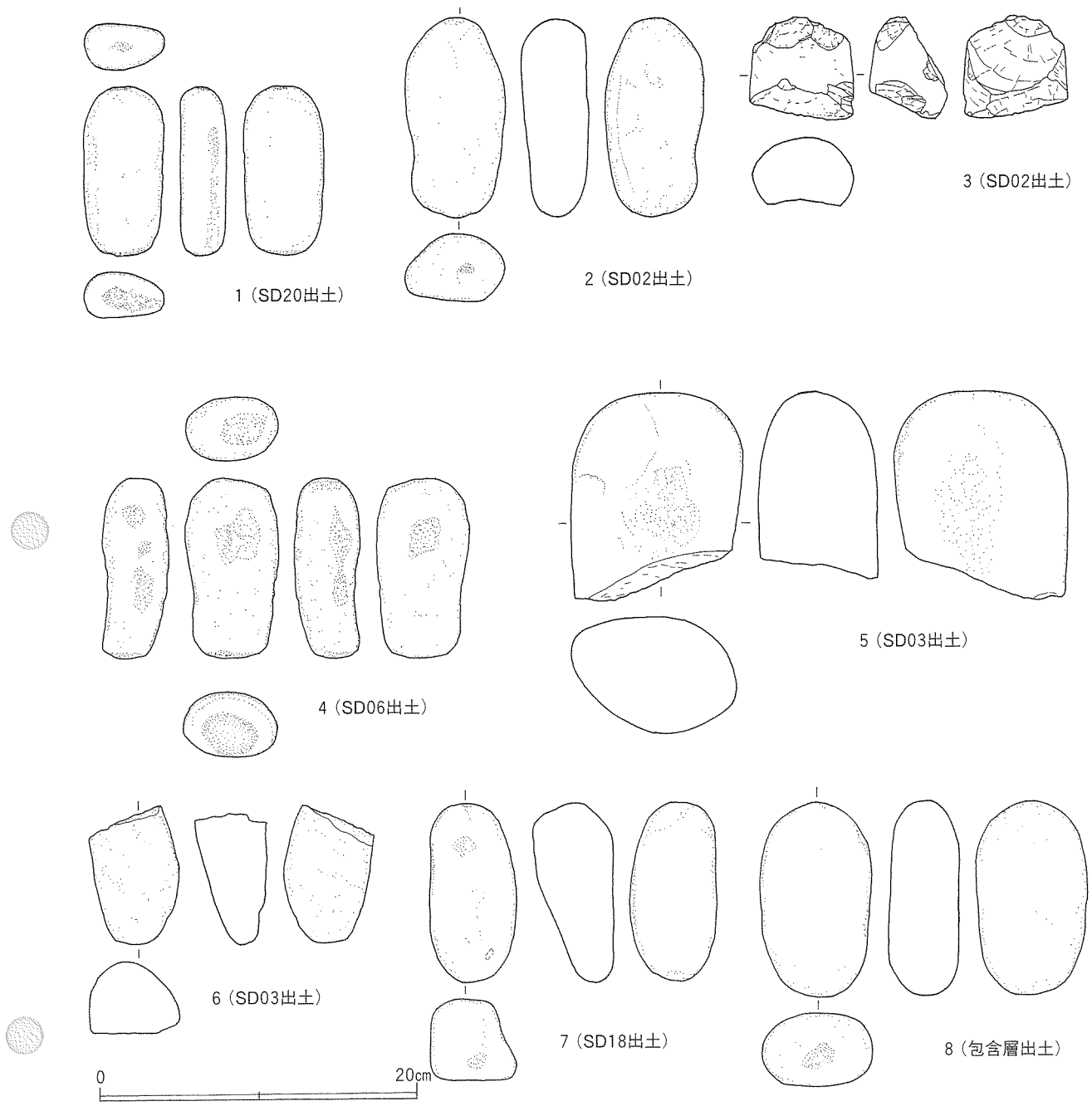


図 6-16 遺物実測図 (2) S=1/4



写真 6-4 1区西端 SD24 (南から)



写真 6-5 1区全景 (西から)

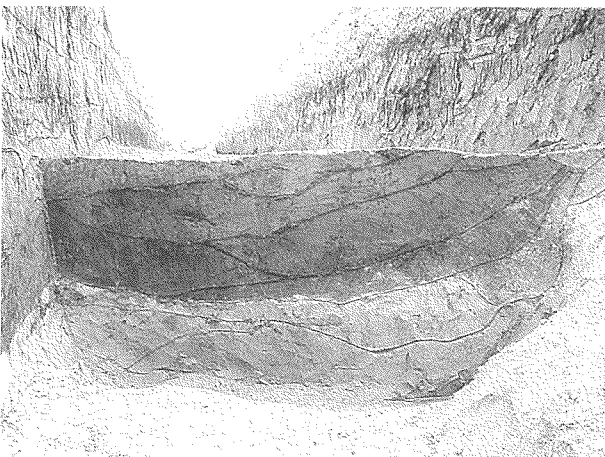


写真 6-6 1区SD02断面 (西から)



写真 6-7 2区全景 (東から)



写真 6-8 2区SD03 (西から)



写真 6-9 2区SD05・SK07・SK06 (北東から)



写真6-10 3区全景(東から)



写真6-11 4区全景(西から)



写真6-12 4区SD22(北から)



写真6-13 4区SK17(北から)



写真6-14 4区SK17 弥生土器出土状況



写真6-15 5区全景(西から)



写真 6-16 弥生土器壺 (SD03出土)



写真 6-17 弥生土器壺 (SD06出土)

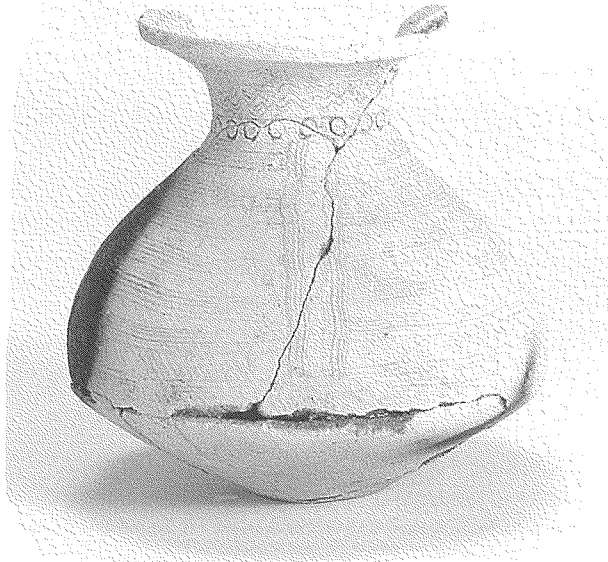


写真 6-18 弥生土器壺 (SD09出土)

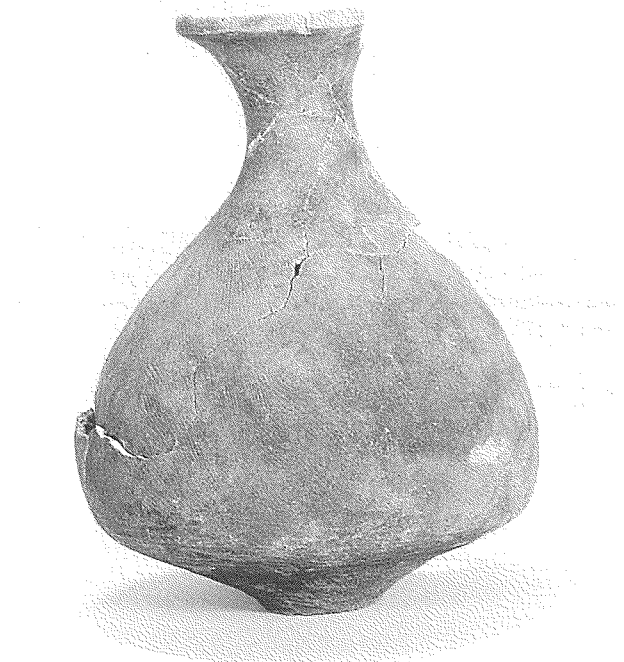


写真 6-20 弥生土器壺 (SK17出土)



写真 6-19 弥生土器壺 (SD09出土)

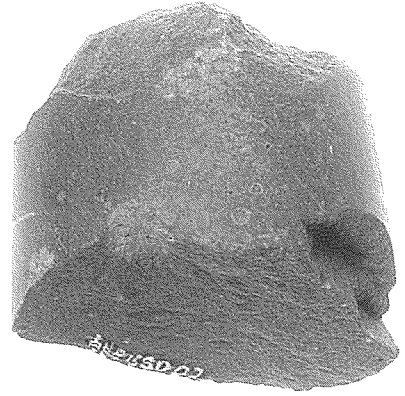
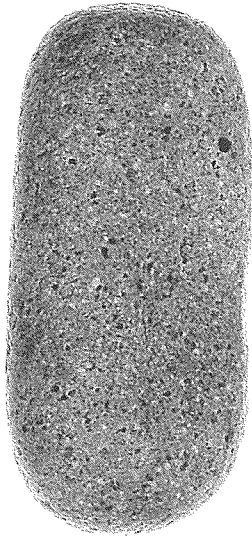


写真 6-21 敲石 (SD20出土) 写真 6-22 敲石 (SD02出土) 写真 6-23 石斧 (SD02出土)

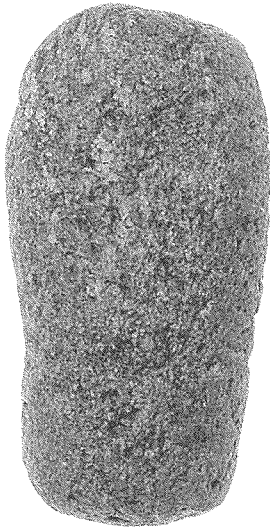


写真 6-24 敲石 (SD06出土) 写真 6-25 台石 (SD03出土)

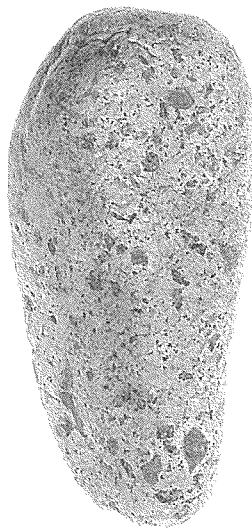
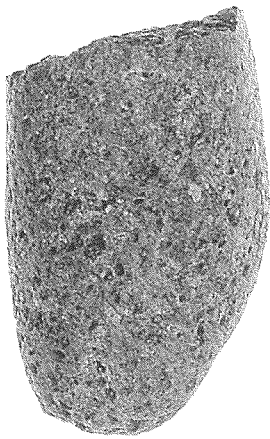


写真 6-26 敲石 (SD03出土) 写真 6-27 敲石 (SD18出土) 写真 6-28 敲石 (包含層出土)

VII まとめ

朝日遺跡第13次～第15次発掘調査は、今後も継続予定の平田荘建替工事に伴う調査の一部であることは冒頭でも述べた。このため、本書は一連の調査の中間報告という性格も持たざるを得ない。本調査地点に関する最終的な評価は、今後の調査の進展の結果に委ねるとして、ここでは、当該調査の成果について、時代順、項目ごとにまとめて報告の責を果したい。

縄文土坑 縄文土坑（ク区P114）の存在は、縄文時代後期初頭頃の遺構分布が散在傾向を示すことを追認した。弥生時代の遺構で破壊された部分はかなりあるが、遺物量の少なさは調査区の中には当時の居住地点が含まれていないことを示す可能性が強い。

弥生時代中期の住居域 ク区において堅穴住居跡6軒を確認した。いずれも方形周溝墓群が発達する以前に営まれ廃絶したと考えられる。出土土器からはⅢ期～Ⅳ期の短期間に属するものと考えられる。平田荘の最も南西部に位置する調査区で、朝日遺跡の最も北東端の住居域が把握された現状が、遺跡の実態を示すか否かについては、今後の調査結果を見て判断すべきであろう。周溝墓に伴わない土器破片の集中地点（土器群）や、包含層の遺物量の多寡などに注意を払う必要がある。現時点においても、今回確認した住居群は、朝日遺跡の大集落が成立する段階の様相を示す重要な情報となるであろう。

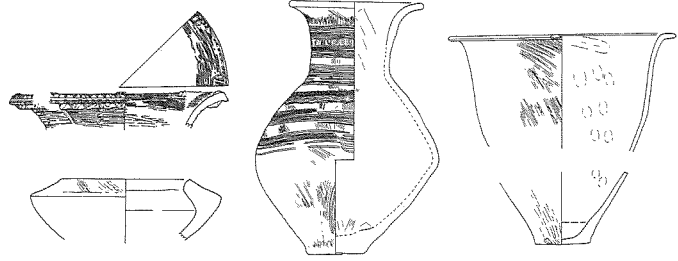
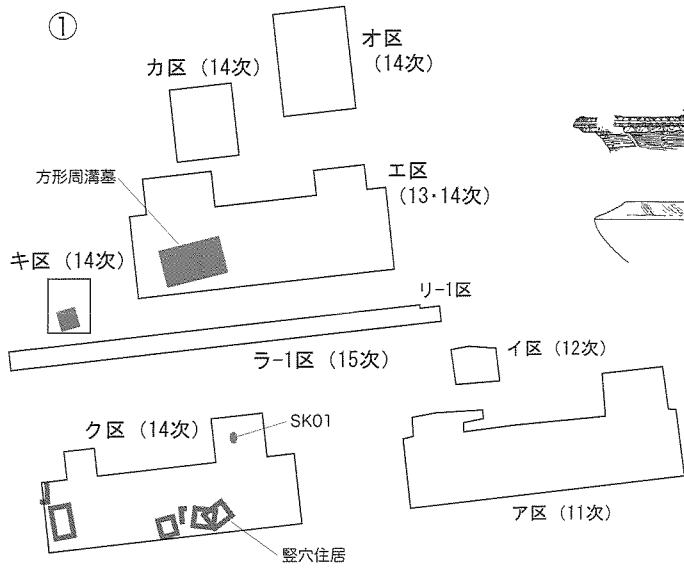
弥生時代中期の墓域 第11次調査の成果などから（佐藤2002）、本調査区における方形周溝墓の展開は予想されていた。しかしながら、最も北東に位置するオ区においても周溝墓が密集する状況を確認したことで、さらに北東へ広がるという具体的情報を把握できたことは、今次調査の成果と言える。また、住居域が墓域へと変遷する様相を捉えた点も重要であり、自然科学分析の成果と合わせて、より詳細に検討する必要がある。ここでは、こうした認識を前提に大まかな遺構の変遷を3段階に示して、当該地点の弥生時代墓域のまとめとする。ただし、これはあくまでも本項の説明のために変遷順のイメージを示すことが目的であり、段階区分や時期区分について提示する意図はないことをお断りしておく。

図7-1は、①～③の順で遺構の変遷を示している。調査区の範囲と、その時期の遺構を表示し、周溝墓については前時期までに築造されたものも薄い色で示している。

①は、Ⅲ期〔中期前葉末／Ⅱ-3期（朝日式）〕の遺構である。住居域（ク区）からやや離れた北方に、平田荘内で現在のところ最古と捉えられる周溝墓（キ区SZ34）が存在することを示している。住居同士の切り合いがあることから、住居域の継続期間にも、ある程度の幅は推定されるが、住居とSZ34の関係は不詳である。住居域が営まれた時期、あるいはその廃絶直後に墓域が発達する状況は認められない。

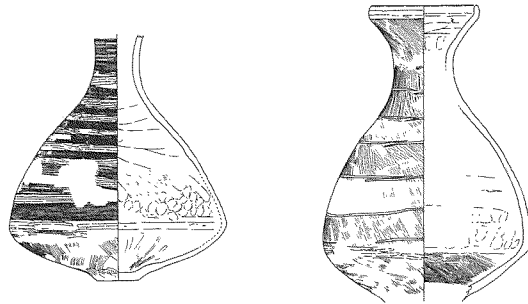
②は、Ⅴ期〔中期中葉後半／Ⅲ-4・5期（貝田町式後半）〕の遺構である。溝を共有し、あるいは軸方位を揃えて接続するいくつかのグループが把握されるが、調査区の間隙が多くあることや、周溝墓に伴う遺物が少なく、個別あるいはグループ同士の比較が難しいため、変遷の詳細を示すことはできない。比較的規模の大きな周溝墓は東西方向に接続・展開する傾向が強く、その周溝墓の間隙を利用し、あるいは付随するように築いた印象の小型の周溝墓は、区画が不明瞭で周溝墓と断定しかねる例も多い。

③は、Ⅵ期〔中期後葉／Ⅳ-1～3期（凹線文系土器）〕と考えられる遺構である。この時期の土器を伴った数少ない例と、それらに後続することが確実な遺構のみを表示している。時期が判然としないものもあ



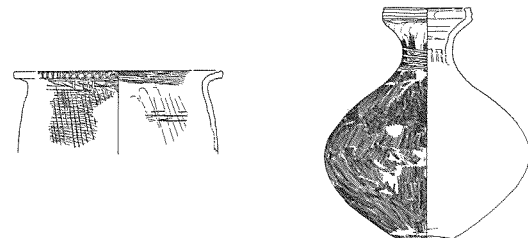
Ⅲ期

朝日式の後半期から貝田町式のごく初頭と考えられる遺構を表示した。ク区の住居跡と土器群、これらと同時期と推定されるエ・キ区の方形周溝墓を表示した。①～③に示した土器は、目安として示したもので、段階や幅を示す意図は無い。



Ⅴ期

貝田町式の前半は、遺構形成が確認されない空白期である。②に示したのは、貝田町式の後半の周溝墓および類似区画である。ただし、時期不明のものも、すべてこの図に含めている。墓域の展開過程は、部分的な前後関係しか明示できなかった。



Ⅵ期

凹線文系土器の時期と考えられる周溝墓・類似区画を示した。時期不明を上図に含めたため、実際より表示が少ない可能性はあるが、造墓活動が急激に低調化したのは確かである。

図 7-1 遺構変遷図

るが、絶対数の減少は間違いない。V期の小型の周溝墓や区画を破壊して築造する場合があるが、大型の周溝墓を侵す築造はなされなかったようである。オ区SD04は、古墳時代に埋没したとする年代測定値が得られたが、この時点においても墳丘は基本的に尊重されていたと思われる。

方形周溝墓の築造儀礼 オ区SD11 (SZ25) の底面から出土した木製品 (一木平鋤) は、周溝墓の築造に伴って掘削用具を埋納する儀礼がおこなわれた可能性を示すものであろう。この溝と同様な下層埋土の状況は、他の溝でも認められるのである。同様の周溝墓に伴う木製品の出土例を見てみると、東三河の篠東遺跡において、弥生時代後期の周溝墓 (SZ1/規模10.8×9.8m) の溝底から一木平鋤が出土していることが知られる (中村・鈴木1998)。朝日遺跡では過去、(超)大型とも形容される方形周溝墓に出土例が限られているが、実際には、造墓に際して普遍的に鍬・鋤類の埋納が行われていた可能性が考えられる。木質が遺存する例は限られるであろうが、今後は問題意識を持って調査に臨む必要があろう。

水洗選別資料 14次調査では周溝墓の主体部 (オ区SZ28のSK01) や、玉作り関連資料を出土したSB04を主とした住居跡の他、SD47・70などの埋土について、水洗選別法による分析調査 (5mmと1mmメッシュのフルイを使用) を実施している。土嚢袋 (平均10数kg/1袋) で約700袋の土を採取して資料館に持ち帰り、室内作業で水洗選別を実施している。2005年2月から始めて、2006年3月現在まで断続的に進めているが、現在、水洗作業については618袋、選別・分類作業は144袋を済ませたにとどまる。選別・分類作業が大幅に遅れている現在、ここに途中経過を報告し、今後の見通しとしたい。

周溝墓の主体部であるオ区SK01 (SZ28/土嚢袋5袋) では、下呂石のチップや炭化物を微量検出したにとどまる。予想したことではあったが、副葬品類は全く検出できなかった。しかしながら、埋土に染み込んだような状態で調査中に確認した赤色物質については、蛍光X線分析でベンガラであることが確認されている (堀木氏付論6試料1)。

SB01 (土嚢袋5袋) では、下呂石のチップ類を少量認めたにすぎない。

SB02 (SB02を切るSK03、SD37~39を含む/土嚢袋23袋) では、玉作りに関わる石針を2点 (下呂石製1点は磨製/メノウ製1点は打製) 検出した他、チップ類 (下呂石が多く、緑色凝灰岩、メノウ、ヒスイは微量) も少量認めている。他に炭化米や赤色物質 (顆粒状/ベンガラか) も少量検出している。

SB03 (土嚢袋1袋) では、下呂石のチップ類を少量検出したにとどまる。

SB04 (土嚢袋107袋) では、30点を超える石針 (メノウ1点は打製/他はすべて下呂石の磨製) や管玉1点をはじめ、多量のチップ類 (下呂石が多く、次いで緑色凝灰岩、メノウ・ヒスイは微量) を検出している。他にも、ベンガラと推定される多量の赤色物質 (顆粒状・粉末状/堀木氏付論6試料6など) や、炭化米、オニグルミなども見られた。選別・分類作業の残り (土嚢袋500袋超) の大半はSB04の埋土であるので、今後の作業の進展に伴い、石針やチップ類の資料数は相当に膨らむことが予測される。

ク区SD47 (SZ41/土嚢袋2袋) では、少量の炭化米と骨片 (焼骨か/未同定) を検出した。

ク区SD70 (SZX30/土嚢袋1袋) では、赤色物質 (顆粒状/ベンガラか) を少量検出した。

赤色顔料 ク区SB04 (朝日Ⅲ期) の埋土から水洗選別によって検出した多量のベンガラについては、ベンガラそのものの生産に関わるものか、あるいは大量使用のあった痕跡と考えるか、判断は容易でない。しかしながら、玉作り関連資料が多数伴うことを考え併せると、玉作りの仕上げ磨きの工程で用いられていた可能性も考えられるので、自家消費的な生産を想定することもできるかもしれない。

一方、時期は降るが（朝日V期）、方形周溝墓の墳墓祭祀に関わる赤色顔料として、水銀朱の付着した敲石〔カ区SD13（SZ34）出土／堀木氏付論6試料2〕や、赤色顔料の付着が見て取れる敲石〔オ区SD01（SZ28）出土／未分析〕、さらには、周溝墓の主体部であるオ区SK01（SZ28）の埋土からはベンガラが検出されている（堀木氏付論6試料1）。また、エ区SK18（SZ18）でも微量の赤色物質（未分析）が散布されていた様子が見えかけた。これらの数少ない事例ではあるが、この時期、水銀朱やベンガラの赤色顔料が、明らかに周溝墓の埋葬儀礼の重要な場面で一定の役割を果たしていたことがうかがえるのである。また、棒状中型の敲石が他の周溝墓の溝からも少数とはいえ、確実に出土していることから比較的通有の事柄であったと見るべきかもしれない。東海地方では、弥生時代後期から古墳時代の墳墓祭祀に赤色顔料の使用例が多く指摘されるようになってきている（鈴木2004）（贄2005）。本遺跡と同時期にさかのぼる例を探してみると、東三河の篠東遺跡において、ほぼ同時期の周溝墓の主体部からベンガラの出土が確認されている（中村・鈴木1998）。弥生時代後期以降の赤色顔料に関わる遺物には、小型片口鉢などの容器や石杵・石臼などの道具類が専用器として定型化して見られるのであるが、弥生時代中期には、未だ専用器としては成立しておらず、未分化にとどまる段階にあったのであろう。

玉作り関連資料 玉作り関連資料が、ク区東寄りのSB01・02周辺とク区中央部北側の9F5b周辺、ク区西端のSB04周辺の3箇所において比較的まとまった量で検出することができた。管玉や角玉の製品や未製品、道具類の石鋸や石針、砥石、さらにはこれらの素材類などである。玉の石材は緑色凝灰岩が主で、ヒスイがごく微量用いられていたようである。石鋸は紅簾片岩、石針はメノウが2点ある他は、すべて地元産の下呂石を用いている。砥石に多く用いられている砂岩は地元産であろう。また、敲石（形割具）や環石（穿孔時の台石か）、楔形石器（施溝分割時のタガネか）、有孔加工円盤（穿孔具のはずみ車か）なども、玉作りの工具として用いられていた可能性も考慮する必要があるかもしれない。

下呂石製の石針については、従来、朝日遺跡では知られていなかったものであり注目される。多角柱状の磨製品（八角前後が多いか）であるのは、従来知られていたサヌカイト製と全く同じ作りである。石質の性状がほぼ同じであるとしても、地元産の石材を玉作りの主要な工具である石針に用いる点は、技術の導入・定着の過程をうかがう上で興味深い資料である。

SB04の埋土中からは、石針片が32点出土した他、石針素材の下呂石や玉素材の緑色凝灰岩のチップ類が多数散布するなど、この住居跡において玉作りが行われた可能性も考えられる。出入口を示す構造や、その周辺のピット群の機能など、遺構の類例検証を進める必要がある。

玉作りの主な生産品と考えられる管玉や未製品の出土資料数が少ないために、その製作工程を具体的に復元するのは難しい。しかしながら、硬質の緑色凝灰岩と軟質のものとは、その基本的な製作技法が部分的に異なるケースが想定できる（石黒1993）。角柱状未製品の調整工程において、軟質の場合は研磨調整、硬質の場合は押圧剥離調整に拠るものである。この違いは、これまで提唱されている「大中の湖技法」と「新穂技法」が共存するとの見方ができるかもしれないが、時期差や技法の系譜の違いなど、いくつかの要素を内包している可能性がある（藤田1989）。近畿や北陸方面との技法の比較を検討する必要がある。

石製銅鐸鑄型 石製銅鐸鑄型片の出土は、まさに「事実は小説よりも奇なり」と言うにふさわしく、全く予想だにできなかったことであった。石製鑄型の出土は東海地方初であることに加えて、これが現状では、銅鐸最古式の一群に位置付けられる可能性が高いという点で、従来の銅鐸出現過程の理解に波紋を及

ばす資料となるであろう。この点については、難波洋三氏に詳細な検討をお願いし、その成果について付論に掲載することができたので、これに譲る次第である。

鋳型の小破片が1点出土したというだけでは、当地において銅鐸を鋳造したか否かは残念ながら判断できない。鋳造遺構の存在が明瞭に認識される前提としては、フイゴの羽口や坩堝、取瓶、さらには銅滓や炉壁などが共伴する場合に限られるであろう。しかしながら、先に触れたとおり、当地区では玉作り工房の存在や赤色顔料の生産の可能性などが考えられ、手工業生産を担う工房群が集落の周縁部である墓域との境界近くで存在していたことが想定されるのである。このような技術者集団の居住域（工房域）に当時のハイテク技術を保有した銅鐸鋳造の技術者集団が、一時的にしる居住していた可能性は十分あり得る環境であったように思えるのである。今後の重要な課題として残る。このような拠点集落の工房域において、玉作りと銅鐸を生産した可能性のある遺跡として、福井県三国町・下屋敷遺跡の例が思い起こされる。畿内第Ⅲ様式併行期の土器と石製銅鐸鋳型（小型／未製品）が共伴しており、玉作りの工具類や管玉の製作技法も、今次調査と共通項が多く見いだせるのである。日本海の交通の要所にある下屋敷遺跡と、太平洋側の朝日遺跡、偶然にも両者とも海路を通しての東西日本の結節点とも言うべき重要な地理的条件を備えているのである。広域的な地域間交渉が実際にはどのようなものであったのか興味深い。

古墳時代 周溝墓の築造が終了した後に整備された溝の存在も、記憶する必要がある。明確だったのはオ区SD04が典型例で、周溝墓の溝をつないで水路にしたと考えられる（土層図3-9）。AMS年代測定では古墳時代初め頃に中心値が示された溝埋土からはプラントオパールが検出されており、この時期には稲作が定着していたことと、オ区SD04がこれに関連した可能性が考えられる。今後は、これまで以上に上層遺構の把握に努める必要がある。

古代～中世 古代～中世の遺構で明確なものはなく、出土遺物もごく少量であった。水田等としての利用痕跡が近世と重複しているのかもしれないが、土地利用が不明瞭な期間である。

近世 近世に掘削されたと考えられるオ区SD20、エ区SD01、ラ-1区SD19は、平田荘造成以前の地籍を確認し、近世に遡る地籍（字界）への調査区位置の特定を可能にすると考えられる。従来も地図記録の分析によって、ある程度の確認はできたはずだが、遺構を明確にした意味は大きいと言える。

以上、今次調査における成果と課題について羅列的に書き留めたにすぎないが、まとめに代えさせて頂くものである。報告書としての本書の体裁や内容に不十分な面を残した点をお詫びすると共に、今後の調査に向けてご指導、ご助言を賜り、将来に期したいと願う次第である。

末尾ではあるが、本調査に関して玉稿をお寄せ頂いた方々、調査にご協力いただいた多くの皆様に厚く御礼を申し上げる。

<参考文献>

- 石黒立人 1993 『朝日遺跡Ⅳ』第33集 愛知県埋蔵文化財センター
佐藤好司 2002 『朝日遺跡第11次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
鈴木 元ほか 2004 『東町田遺跡』大垣市文化財調査報告書第14集 大垣市教育委員会
富山正明ほか 1988 『下屋敷遺跡 堀江十楽遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第14集 福井県教育庁埋蔵文化財センター
中村文哉・鈴木 徹 1998 『篠束遺跡群』小坂井町教育委員会
贅 元洋 2005 『朱関連遺物』『愛知県史』資料編3 考古3 古墳 愛知県
藤田富士夫 1989 『玉』考古学ライブラリー52 ニュー・サイエンス社

付論 1 朝日遺跡出土の銅鐸鑄型と菱環鈕式銅鐸

難波洋三（京都国立博物館）

2004年11月に朝日遺跡で出土した銅鐸鑄型は、廃棄時期が畿内第Ⅱ様式後半にあたる朝日Ⅲ期にほぼ限定でき、銅鐸の製作開始年代や初期の銅鐸製作工人集団の動向を考える上で、非常に重要な資料である。本稿では、この銅鐸鑄型の文様や形態を検討し、これが菱環鈕1式銅鐸と共通する特徴を多く持っていることを示した後、菱環鈕式銅鐸の細分などを試みる。

1 朝日遺跡出土鑄型の特徴

この鑄型は、銅鐸の外型の、身の上縁付近の小破片である。材質はきめの細かい砂岩で、灰色を呈し、部分的に黒い節理状の筋がある。鑄型面は黒く変色するが、鑄型面からの黒変の染み込みは顕著でない。また、裏面には、砥石に転用した痕がある。

この鑄型に彫られた銅鐸の形態と文様には、以下の特徴がある。

- ①身の横断面の曲率が大きく、この鑄型で鑄造した銅鐸は全高20cm程度の小型品であった可能性が高い。
- ②身の縦断面が、この鑄型で鑄造した銅鐸でみて、外にわずかに凸となっている。
- ③身の上縁に文様よりも太い線が刻されている。
- ④身の上縁に接して、上下幅が約1.0cmの斜格子文横帯を飾る。斜格子文横帯の下には、綾杉文の横帯がある。この横帯の下部は欠失しているが、綾杉文の上半の上下幅がほぼ8mmなので、綾杉文横帯の上下幅は本来1.6cm程度であったと考えられる。すなわち、斜格子文横帯よりも綾杉文横帯のほうが幅がかなり広がったようである。
- ⑤斜格子文の斜線の作る菱形は縦長である。横帯の輪郭線と右下がりの斜線の作る鋭角は、輪郭線と左下がりの斜線の作る鋭角より、角度が小さい。綾杉文の斜線も、同じ特徴を持っている。

2 朝日遺跡出土鑄型で作った銅鐸の型式

銅鐸の鑄型の材質は、扁平鈕式内で石から土に変わった。この変化は、各系列間で大きな時間差がなく起ったと考えられるので、扁平鈕式を石製鑄型で鑄造した古段階と土製鑄型で鑄造した新段階に細分できる（難波1986 pp. 140-143、難波1987 p. 83）。朝日遺跡出土の銅鐸鑄型は石製なので、扁平鈕式古段階以前のものである。

この鑄型に刻された文様の特徴の中で、製作された銅鐸の型式を検討する上で重要となるのは、以下の点である。

- ①綾杉文の横帯を飾る。

石製鑄型で作った銅鐸でこの特徴を有するのは、出土地不明東博35509鐸（菱環鈕1式）^{（註1）}、島根県荒神谷5号鐸（菱環鈕1式）、岐阜県十六鐸（菱環鈕2式）、兵庫県氣比2号鐸とその同範銅鐸（外縁付鈕2式）、佐賀県吉野ヶ里鐸とその同範銅鐸（福田型）、伝鳥取県出土鐸（福田型）、伝岡山県足守出土鐸（福田型）、広島県福田鐸（福田型）、以上の8組である。

出土地不明東博35509鐸のB面第3横帯の文様は、従来、菱形文とされてきたが（春成1984 p. 30）、この横帯の右部に無軸の綾杉文DCがみえるので、鳥根県荒神谷5号鐸のものに似た、途中で何回か斜線の変える綾杉文と考えられる。また、この銅鐸のA面第2横帯の文様は、春成の図（春成1984 第1図a）よりも三木の図（三木1995 挿図54）が実際に近く、斜線の変える綾杉文状の文様である。なお、外縁付鈕1式には綾杉文を飾る例が多いが、これを横帯に飾る例はなく、いずれも鈕の菱環部に飾る。

②下辺横帯とその直上の横帯以外にも、横帯を重ねて飾る。

石製鋳型で作った銅鐸でこの特徴を有するのは、出土地不明東博35509鐸（菱環鈕1式）、鳥根県荒神谷5号鐸（菱環鈕1式）、兵庫県中川原鐸（菱環鈕1式）、兵庫県神種鐸（菱環鈕2式）、出土地不明辰馬402鐸（菱環鈕2式）、岡山県念仏塚鐸とその同範銅鐸（外縁付鈕1式）、兵庫県気比1号鐸（外縁付鈕2式）、以上の7組で、そのうち5組が菱環鈕式である。

外縁付鈕1式の岡山県念仏塚鐸とその同範銅鐸の片面の中横帯は、上半が斜格子文で、下半が上下に対向した鋸歯文の間に平行線2条を挟んだ特殊な文様である。このような上半を斜格子文とし下半に別の文様を飾る構成の横帯は、菱環鈕2式の兵庫県神種鐸にすでに例がある。扁平鈕式新段階の桜ヶ丘4・5号鐸型が、これらと同じ構成の横帯を持っているのは、これらの銅鐸を模倣したのであろう。

③綾杉文が無軸である。

石製鋳型で作った銅鐸で無軸の綾杉文を飾るのは、出土地不明東博35509鐸（横帯、菱環鈕1式）、鳥根県荒神谷5号鐸（横帯、菱環鈕1式）、福井県井向2号鐸（菱環内外斜面、菱環鈕2式）、岡山県念仏塚鐸とその同範銅鐸（菱環内斜面、外縁付鈕1式）、奈良県上牧鐸とその同範銅鐸（菱環外斜面、外縁付鈕1式）、出土地不明辰馬419鐸とその同範銅鐸（菱環内斜面、外縁付鈕1式）、以上の6組である。

銅鐸の綾杉文のほとんどは有軸綾杉文で、無軸綾杉文はこのように極めて稀で、菱環鈕1式から外縁付鈕1式に限ってある。一方、有軸綾杉文も菱環鈕2式にはすでにあり、たとえば岐阜県十六鐸では、A面の中横帯の綾杉文とB面の鈕菱環外斜面の綾杉文が、ともに有軸綾杉文である。

④綾杉文Dと綾杉文Cの間を無文とせず、この部分にも斜線を充填する。

これは、扁平鈕式古段階以後の銅鐸の菱環部綾杉文には普遍的にみられる特徴だが、菱環鈕式と外縁付鈕式でこの特徴を有する綾杉文を飾るのは、鳥根県荒神谷5号鐸（横帯、菱環鈕1式）と鳥根県加茂岩倉12号鐸（菱環、外縁付鈕1式）のみである。ただし、磨滅が著しいため文様の細部の特徴が確認できなくなっている菱環鈕1式の出土地不明東博35509鐸の横帯の綾杉文についても、この特徴を有する可能性はある（註2）。

以上、①～④の特徴についての検討をまとめよう。朝日遺跡出土鋳型の文様の前記の特徴をすべて有する銅鐸は、今のところ菱環鈕1式の鳥根県荒神谷5号鐸しかないが、同じ菱環鈕1式の出土地不明東博35509鐸も、その可能性がある。ただし、この鋳型では、身の上縁に文様よりもやや太い明瞭な沈線が刻されているが、菱環鈕1式銅鐸には、この線があることを確認できる例がない。朝日遺跡出土鋳型のこの特徴が、これまで発見されている菱環鈕1式とは、製作時期や製作工人集団が異なることを示しているのか、あるいは菱環鈕1式内の変異にすぎないのかは、今のところ、明確でない。

次に、鋳型の形態上の特徴について検討しよう。形態上の特徴で注目されるのは、身の縦断面が、この

鋳型で鋳造した銅鐸でみて、外にわずかに張っている点である。もし、身の縦断面が通常の銅鐸とは異なり全体として外に張っていたとすれば、朝鮮式小銅鐸や菱環鈕1式の一部とこの点で共通し、菱環鈕2式以降の銅鐸とは異なっていたことになる。ただし、古い段階の銅鐸には、身が全体としては通常通り縦方向に内湾しているが、身の上部の舞に近い部分は外に張った例もかなりあるので、この部位の小片である本例の場合、身の全体が外に張っていたと速断することは危険である。

以上の検討をまとめよう。朝日遺跡出土の鋳型は石製なので、扁平鈕式古段階あるいはそれより古い型式の銅鐸のものである。綾杉文の特徴や横帯を重ねる文様帯の構成は菱環鈕1式と最も共通しており、その鋳型の可能性が高い。ただし、小片であるので、今のところ、断定は控えたい(註3)。

このように、菱環鈕1式銅鐸のものである可能性が高い鋳型破片が、砥石に転用された後、畿内第Ⅱ様式後半にあたる朝日Ⅲ期に廃棄されていることは、菱環鈕式銅鐸あるいは外縁付鈕式銅鐸のものと考えられる京都府向日市鶏冠井遺跡出土の鋳型が、畿内第Ⅱ様式の土器を主体とし、少量の第Ⅰ様式新段階の土器が混在する溝から出土したことと、整合している。銅鐸の製作は、畿内第Ⅱ様式にはすでに始まっていたと考えられる。

3 菱環鈕式銅鐸の製作地

菱環鈕式銅鐸の製作地については、これを畿内とする説が有力であったが、朝日遺跡で菱環鈕1式銅鐸と共通する文様を有する石製鋳型の破片が出土したことで、朝日遺跡内あるいはその近辺で菱環鈕1式銅鐸が製作された可能性が生じた。ただし、同時期の輪の羽口、埴塼、銅滓などの鋳造関係遺物は、今のところ付近で出土していない。

菱環鈕1式銅鐸はこれまで3個出土しているが、個体差は小さいので、単独工人集団の製品であろう。よって、仮に、朝日遺跡出土鋳型が菱環鈕1式銅鐸のものであり、この鋳型を使って朝日遺跡内あるいは近辺で銅鐸が作られたとすれば、以下のいずれかとなる。

①菱環鈕1式銅鐸の製作工人集団は、朝日遺跡内あるいはその近辺に拠点を置いて活動しており、東海地方で銅鐸の多くを作った。

②菱環鈕1式銅鐸の製作工人集団は、その拠点を畿内など別の地域に置いていたが、東海地方に一時的にやってきて銅鐸を作った。

③菱環鈕1式銅鐸の製作工人集団は、特定地域に活動の拠点を置かずに、移動を繰り返し、銅鐸を作った。

①～③のいずれであるかを推定するにあたり、今のところ最も有効な手掛かりは、鋳型の石材の産地である。この鋳型の石材が近畿地方などの遠隔地で採取したものなら、工人がそれらの地域から鋳型を携えてこの地域にやってきて銅鐸を製作した可能性、すなわち①ではなく②か③の可能性が高くなる。一方、石材が朝日遺跡の近郊で採取したものなら、①の可能性が高くなる。ただし、②③の可能性、すなわち、東海地方にやってきた工人が朝日遺跡付近で採取した石材を使って、鋳型を新調した場合も考えうる。

菱環鈕1式とは異なり、菱環鈕2式は大きさや文様などが多様な銅鐸で構成されており、この段階から銅鐸の製作工人集団がすでに複数となっていた可能性があり(難波2003(註2))、外縁付鈕1式以降は、銅鐸の製作工人集団が確実に複数化する(難波1991 p. 68、難波2002a pp. 78-80、難波2002b pp. 88・89)。よって、朝日遺跡出土鋳型がこのような段階のものであるなら、複数併存していた銅鐸製作工人集団の一

つが、東海地方に拠点を置いて活動していた可能性も、考えなければならない。

しかし、その後の東海地方の銅鐸の様相を見る限り、独自の特徴を有する銅鐸が東海地方で継続的に作られるようになるのは、扁平鈕式新段階でも新しい段階以降、すなわち、いわゆる東海派の銅鐸製作工人集団が西方からこの地域へ移住してきた後のことである。それ以前には、畿内など西方の地域で製作された銅鐸が流入しており、この地域独自の特徴を持つ銅鐸の生産は、今のところ、明確でない（難波2002b pp. 92-96）^(註4)。

よって、現状では、②あるいは③の可能性が高いであろう。福井県三国町加戸下屋敷遺跡では、銅鐸の石製鋳型の未製品が、畿内の第Ⅱ様式後葉から第Ⅲ様式前葉に相当する時期の土器を伴って出土している^(註5)。銅鐸分布圏北端のこの地に、この段階の銅鐸製作工人集団の拠点のひとつがあったとは考えにくいので、これも、工人の一時的な移住による銅鐸製作に関する遺物であろう。このような形での銅鐸製作が、初期には珍しくなかったのかもしれない。

4 菱環鈕式銅鐸の特徴

菱環鈕式は、1960年に、佐原が鈕のルジメント化に着目して、外縁付鈕式、扁平鈕式、突線鈕式とともに設定した型式である（佐原1960 pp. 94-96）。その後、1974年に公表した銅鐸出土地名表で、佐原は菱環鈕式をさらに1式と2式に細分し、具体的には、兵庫県中川原鐸を菱環鈕1式、兵庫県神種鐸と福井県井向2号鐸を菱環鈕2式とした（佐原1974）。1982年には、春成と連名で、出土地不明銅鐸のリストなどを追加した改定版の銅鐸出土地名表を公表したが（佐原・春成1982）、そこでは、上記の3個のほか、出土地不明東博35509鐸を菱環鈕1式、出土地不明辰馬402鐸を菱環鈕2式とし、計5個を菱環鈕式に比定している。しかし、菱環鈕式をどのような分類基準で1式と2式に細分するのかについて、佐原が説明することはなかった^(註6)。

佐原の銅鐸出土地名表の改訂に協力した春成は、1984年、前記の5個の菱環鈕式銅鐸を分析した論文を発表し、その中で、菱環鈕式を2分する佐原案を支持している（春成1984 pp. 40・41）。この春成の研究によって菱環鈕1式と2式の型式の特徴はかなり明確になったが、春成が、先行してなされていた個々の銅鐸に対する型式比定を追認したうえで、1式と2式の特徴を列挙する記述法をとったため、どのような特徴によって1式と2式を分けるのかは、依然不明確なまま放置されることになった。

その後、難波は、鈕の断面形ではなく文様帯構成を重視する観点から、従来は外縁付鈕1式に比定されていた出土地不明辰馬428鐸、岐阜県十六鐸、島根県荒神谷4号鐸を菱環鈕2式に含めた。その結果、菱環鈕2式の総数は倍増することになった。これに、その後発見された資料を加え、現在、菱環鈕式銅鐸の総数は11個で、そのうち、1式は、出土地不明東博35509鐸、島根県荒神谷5号鐸、兵庫県中川原鐸、以上の3個、2式は、出土地不明辰馬428鐸、兵庫県神種鐸、三重県高岡山鐸、福井県井向2号鐸、出土地不明辰馬402鐸、出土地不明明治大学4号鐸、岐阜県十六鐸、島根県荒神谷4号鐸、以上の8個である。なお、春成は近年発表した論文で、京都府梅ヶ畑4号鐸を菱環鈕2式の中でも古い段階のものとしている（春成2003 p. 70）。しかし、この銅鐸は島根県荒神谷2号鐸と同範であり（難波2005 p. 365）、島根県荒神谷2号鐸は、鱗から続く鋸歯文の文様帯が鈕にあり、かつ、舞の型持が1個なので、外縁付鈕1式に比定できる。よって、京都府梅ヶ畑4号鐸は、菱環鈕2式ではなく外縁付鈕1式である。

今のところ、佐原が1式とした出土地不明東博35509鐸や兵庫県中川原鐸に近い特徴を有するものを1式、それよりも新しい特徴を有するものを2式とすることで、大きな問題はない。しかし、今後、さらに資料数が増加すれば、1式と2式の分類基準が不明確な点が問題となると予想できる。よって、ここでは、佐原や春成などによる先行研究を踏まえた上で、まず菱環鈕1式と2式の特徴を検討し、両者の分類基準として有効な属性の抽出を試みる。

①大きさ

菱環鈕1式はいずれも小型で、全高が20cm余りである。

菱環鈕2式には大小さまざまなものがあり、最小の島根県荒神谷4号鐸は全高23.8cmで、1式と大きさが変わらないが、最大の福井県井向2号鐸は全高47.7cmもある。また、外縁付鈕1式は大きさに規格があり、全高20cm余り、30cm余り、40cm余りの例がほとんどであるが、菱環鈕2式にはこのような規格がまだない。

②鈕の形

菱環鈕1式の鈕は、幅に比して高さが低い。鈕の総幅に対する高さの比率を百分率で示すと、島根県荒神谷5号鐸はこれが45%しかなく、出土地不明東博35509鐸は49%である。1式の中では兵庫県中川原鐸の鈕が最も縦長で、これが52%である。

菱環鈕2式は1式よりもこの値が大きく、鈕の縦長化が目立つ。この値が2式の中で最も小さい兵庫県神種鐸でも57%あり、福井県井向2号鐸、出土地不明明治大学4号鐸、岐阜県十六鐸、島根県荒神谷4号鐸では、58~60%になっている。

また、菱環鈕1式の鈕は、上部の左右への張りが比較的弱く、放物線状の形であるのに対し、菱環鈕2式の鈕の多くは、左右への張りが強く半円形状である。

③鈕の厚さ

菱環鈕1式で、鈕が最も厚いのは出土地不明東博35509鐸で、稜の厚さが鈕頂で9mmある。これに対し、島根県荒神谷5号鐸はこれが約5mm、兵庫県中川原鐸はこれが約6mmと薄い。ただし、菱環鈕2式の中でも新しい特徴を多く有する岐阜県十六鐸と島根県荒神谷4号鐸は、小型であるにもかかわらず、鈕の稜の厚さが鈕頂で約6mmある。よって、単純に、製作が新しいほど鈕が薄くなるわけではない。

④鈕の断面形

鈕頂での鈕の断面形を比較すると、菱環鈕1式では、菱環外斜面が凸面か平面になっている。菱環鈕2式では、福井県井向2号鐸の鈕が、菱環鈕1式と同じ古い特徴を持っている。これに対し、出土地不明明治大学4号鐸、島根県荒神谷4号鐸は、鈕頂でも菱環外斜面が凹面になるという、外縁付鈕1式と共通する新しい特徴を持つ。

⑤鈕の内外幅

佐原は、外縁付鈕式以降の銅鐸は、鈕の内外幅が鈕頂と鈕脚でほぼ等しいものが少数で、大多数は鈕頂で広く鈕脚で狭いが、菱環鈕式は、これが鈕頂より鈕脚で広いと指摘した(佐原1983 p.387)。菱環鈕式が11個と増えた今、これを再検討すると、以下のようになる。

島根県荒神谷5号鐸は、使用によって鈕の頂部付近がかなり磨滅している可能性があるが、鈕の内外幅が鈕頂で狭く鈕脚で広がっており、現状では、菱環鈕1式の3個の中でもその差が最も大きい。出土地不明東博35509鐸は鈕頂の外周が腐食しやや欠損しているが、現状では鈕の内外幅が鈕脚よりも鈕頂で2~

3mm狭い。兵庫県中川原鐸では鈕脚と鈕頂で、内外幅にほぼ差がない。

菱環鈕2式のうち、兵庫県神種鐸は鈕の内外幅が鈕頂で目立って狭くなっている。これは鑄造後の整形の結果かもしれない(註7)。福井県井向2号鐸の鈕は腐食によって全体に内外幅がやや狭くなっている可能性があるが、現状では、A面右鈕脚は鈕頂より内外幅がかなり広い。菱環鈕2式の中では、出土地不明明治大学4号鐸、岐阜県十六鐸、島根県荒神谷4号鐸が、この点について外縁付鈕1式以降の銅鐸と共通する新しい特徴を持っており、鈕の内外幅が鈕脚より鈕頂でやや広がっている。

⑥菱環の外斜面と内斜面の幅

菱環鈕1式のうち、出土地不明東博35509鐸は、菱環の外斜面と内斜面の幅に明確な差がないのに対し、島根県荒神谷4号鐸と兵庫県中川原鐸は、全体として菱環外斜面の幅が内斜面の幅よりも広い。菱環鈕2式は、いずれも菱環外斜面の幅が内斜面の幅よりも広いので(註8)、菱環鈕1式の中では、出土地不明東博35509鐸が、この点について古い特徴を持っているといえる。

⑦鈕の文様

菱環鈕1式はいずれも、頂を菱環の稜に向けた鋸歯文を鈕に飾る。また、菱環の内外の斜面に鋸歯文を飾ることが確認できる出土地不明東博35509鐸と兵庫県中川原鐸では、稜で内外の鋸歯文の頂を合せるように配している。

菱環鈕2式には、鈕に鋸歯文を飾る例と、斜線文を飾る例がある。出土地不明辰馬428鐸は、A面の菱環外斜面とB面の菱環内斜面に頂を稜に向けた鋸歯文が観察できるので、鈕の文様構成が菱環鈕1式と類似していた可能性が高い。ただし、稜で内外の鋸歯文の頂を合せるように配していたかどうかは、現状では確認できない。兵庫県神種鐸のA面と出土地不明明治大学4号鐸のA面は、菱環外斜面に頂を稜に向けた鋸歯文を飾る点は菱環鈕1式と同じだが、内斜面の鋸歯文が頂を鈕孔に向けている点で、菱環鈕1式と異なる。岐阜県十六鐸は、A面の菱環外斜面に頂を外に向けた鋸歯文を飾り、B面の菱環外斜面には方向の異なる内外2帯の斜線文からなる綾杉文を飾る。福井県井向2号鐸と島根県荒神谷4号鐸は、鈕の両面に同様の綾杉文を飾る。

菱環外斜面に斜線文を飾る場合はすべて、これを2帯組み合わせると綾杉文を構成しており、外側の1帯は鈕脚でのその幅が鱗の上端幅と同じである。このように、鱗と連続する部分を菱環外斜面の中でも区別して扱っていることは、この部分を外縁として菱環部から独立させる動きが、菱環鈕2式段階にすでにあったことを示している。

⑧身の反り

本稿では、正面観で確認できる身の側縁の反りと、側面観で確認できる身の中央付近の縦方向の反りを、区別して検討する。通常、銅鐸は、側面観でも正面観でも身が内湾している。しかし、ごく稀に、身に反りがない例や身が外に張った例もある。

菱環鈕1式は、正面観でも側面観でも身に反りがない、あるいは身がやや外に張る(註9)。

菱環鈕2式は、側面観ではいずれも身が内湾している。しかし、正面観では、身に反りがない例と身が内湾する例の両者がある。よって、銅鐸の身が内湾する特徴は、まず正面中央付近でみられるようになり、遅れて、側縁に及んだことがわかる。

菱環鈕2式のうち、正面観で身に反りがないものは、出土地不明辰馬428鐸、兵庫県神種鐸、福井県井向

2号鐸、以上の3個である(註10)。破片なので断定はできないが、三重県高岡山鐸もこの反りがないようである。菱環鈕2式のうち、正面観で身に反りがあるのは、出土地不明辰馬402鐸、出土地不明明治大学4号鐸、岐阜県十六鐸、島根県荒神谷4号鐸、以上の4個である。

銅鐸の祖型となったと考えられている朝鮮式小銅鐸は、正面観と側面観のいずれでも、身に反りがない、あるいは通常の銅鐸とは逆に、身が外に張る。菱環鈕1式の身も、同様に、反りがないあるいはやや外に張る。これは、朝鮮式小銅鐸の特徴を残しているのであろう。

この身の反りに関係して注目されるのは、1999年に大阪府茨木市東奈良遺跡で出土した小銅鐸である。この小銅鐸は、菱環鈕式の祖型とも考えられている(森田2002)。しかし、正面観では身に反りがないが、側面観では身が強く内湾している。前記のように、側面観での身の内湾は、朝鮮式小銅鐸と菱環鈕1式銅鐸にはみられないが、菱環鈕2式銅鐸には必ずみられ、以後の銅鐸のほとんどが有する特徴である。よって、この東奈良遺跡出土小銅鐸は、菱環鈕2式の成立以後に製作されたものであり、銅鐸の祖型ではありえない(註11)。

⑨身の形

菱環鈕1式は身が太短く、(身高/舞長径)値が約1.9~2.1である。

菱環鈕2式の大抵は、1式よりも身が細長い。たとえば、兵庫県神種鐸や岐阜県十六鐸は、この値が約2.4もある。これに対し、福井県井向2号鐸、出土地不明辰馬402鐸、島根県荒神谷4号鐸はこれが約2.0で、菱環鈕1式と同様、身が太短い。

⑩身の文様

菱環鈕1式の身の文様は、横帯文か袈裟襷文である。出土地不明東博35509鐸の袈裟襷文は定形化しておらず、斜格子文だけでなく複合鋸歯文や綾杉文などの横帯も多く飾る複雑な構成となっている。残る2個は、横帯文を飾り、身を上下二区画に分ける。

菱環鈕2式になると四区袈裟襷文が完成し、これが身の文様の主流となる。出土地不明辰馬428鐸、福井県井向2号鐸、出土地不明明治大学4号鐸、岐阜県十六鐸、島根県荒神谷4号鐸、以上の5個がこの菱環鈕2式の四区袈裟襷文銅鐸である。ただし、これらの銅鐸の袈裟襷文と身の側縁の間の界線の構成は、後述するように多様である。一方、この段階にも横帯文を飾る例が残っており、兵庫県神種鐸、三重県高岡山鐸、出土地不明辰馬402鐸の3個がこれにあたる。外縁付鈕1式になると、横帯文を飾るのは奈良県名柄鐸の片面だけとなる(註12)。

⑪下辺横帯の鋸歯文

菱環鈕1式はすべて、下辺横帯に下向きの鋸歯文を飾る。

菱環鈕2式のほとんどは、この鋸歯文が上向きだが、島根県荒神谷4号鐸だけは、1式と同様にこれが下向きである。

出土地不明辰馬428鐸A面の下辺横帯鋸歯文は、R鋸歯文とL鋸歯文を交互に並べているようである。残存する鋸歯文からみて、三重県高岡山鐸の下辺横帯鋸歯文も、同様になっていた可能性がある。R鋸歯文とL鋸歯文を交互に並べるこの特徴は、菱環鈕1式の島根県荒神谷5号鐸A面の、鈕の鋸歯文にすでにみられ、菱環鈕2式の兵庫県神種鐸の、鈕の両面の鋸歯文も、同じ特徴を有する。また、菱環鈕1式の兵庫県中川原鐸A面と2式の出土地不明辰馬428鐸A面の、菱環外斜面の鋸歯文も、同じ特徴を有する可能

性がある。このように、R鋸歯文とL鋸歯文を交互に並べる特徴は、菱環鈕式に広くみられる。

⑫下辺横帯下界線の条数

菱環鈕1式の下辺横帯下界線の条数は、1条あるいは2条である。出土地不明東博35509鐸は両面ともにこれが1条、島根県荒神谷5号鐸と兵庫県中川原鐸は両面ともにこれが2条である。

菱環鈕2式のほとんどはこれが3条になっているが、兵庫県神種鐸だけは、両面ともにこれが2条である。ただし、2条の例は外縁付鈕1式にも、和歌山県太田黒田鐸とその同範銅鐸、島根県加茂岩倉6号鐸とその同範銅鐸、奈良県上牧鐸とその同範銅鐸、島根県荒神谷6号鐸、伝静岡県井伊谷出土鐸など、かなりある。よって、菱環鈕2式のうち、これが2条の例が3条の例よりも製作が古いと、単純にはいえない。

⑬裾の広さ

菱環鈕1式は裾が狭く、裾の上下幅は身高の6～9%である。1式の中で最も裾が広いのは、兵庫県中川原鐸である。

総じて、菱環鈕2式の裾は1式のそれよりも広いが、島根県荒神谷5号鐸では裾の上下幅が身高の7%程度しかなく、菱環鈕1式のそれとあまり差がない。ただし、外縁付鈕1式にも、島根県加茂岩倉12号鐸、兵庫県桜ヶ丘1号鐸とその同範銅鐸のように、裾が狭く、これが7～8%しかない例があるので、単純に新しいほど裾が広くなるとはいえない。

⑭鱗の幅

菱環鈕1式のうち、出土地不明東博35509鐸と島根県荒神谷5号鐸には、まだ一定幅の明確な鱗はない。これに対し、兵庫県中川原鐸には、一定幅の明確な鱗があるが、鱗の幅は3～4mmと狭い。

鱗の幅に関しては、菱環鈕2式の中では、岐阜県十六鐸と島根県荒神谷4号鐸が、最も新しい特徴を持っている。これらの銅鐸は、菱環鈕2式の中でも鱗の幅が広く、鱗の上端幅が菱環外斜面幅の半分近くになっている。すなわち、鱗の上端幅と、菱環外斜面のうち鱗より内側の部分の幅に、あまり差がない。その後、鱗の延長部が菱環外斜面から独立して、鱗から続く別の文様帯である外縁となった外縁付鈕1式は、この特徴を受け継いで、そのほとんどで、鈕脚での、外縁の幅すなわち鱗の上端幅と、菱環外斜面の幅がほぼ等しくなっている。

⑮鱗の文様

前記のように、菱環鈕1式内で、鱗はすでに成立しているが、まだ無文である。

菱環鈕2式には、菱環鈕1式と同じく鱗が無文の例と、外縁付鈕1式と同じく鱗に文様を飾る例がある。鱗に文様があることを確認できる例は、兵庫県神種鐸、三重県高岡山鐸、出土地不明辰馬402鐸、岐阜県十六鐸、以上の4個で、いずれも鋸歯文を飾る。現状で鱗に文様を確認できない例は、出土地不明辰馬428鐸、福井県井向2号鐸、出土地不明明治大学4号鐸、島根県荒神谷4号鐸、以上の4個である。

⑭で検討した鱗の幅の広狭と、ここで検討した鱗の文様の有無は、必ずしも対応していない。たとえば、出土地不明辰馬402鐸は、菱環鈕2式の中でも鱗の幅が狭いが、鱗には鋸歯文が飾られている。一方、島根県荒神谷4号鐸は、前記のように菱環鈕2式の中でも最も鱗の幅が広いものの一つであるが、鱗に文様はないようである。

⑯身の上半の型持

菱環鈕式で、身の上半の型持の本来の形状を、内面に残った痕によって確認できた例では、いずれもこ

れが正方形である。

佐原は、菱環鈕1式の兵庫県中川原鐸の身の上半の円孔を、型持に由来するものではなく、福田型の場合と同様、型持孔をまねて鑄造後に穿孔した「模倣孔」と考えた（佐原1983 pp. 387・388）。しかし、内面を観察した結果、兵庫県中川原鐸のこの円孔は、型持孔を鑄造後に円形に加工整形したもので（註13）、他の菱環鈕1式と同様に身の上半に型持があったこと、そしてそれが正方形であったことを確認できた。

なお、中川原鐸のように、身の上半の型持孔を鑄造後に円形に加工した例は、これより新しい型式の銅鐸にもある。たとえば、菱環鈕2式では、出土地不明辰馬428鐸と岐阜県十六鐸、外縁付鈕1式では、鳥根県加茂岩倉16号鐸とその同範銅鐸などが、その例である。身の上半の型持孔をこのように加工した銅鐸は、数が少ないにもかかわらず、同範品がある場合、同範品にも同じ加工がみられる。このことから、この加工整形をしたのは、多くの場合、使用者ではなく製作者であったと考えられる。

銅鐸の身の上半の型持が、菱環鈕式と外縁付鈕1式ではほぼすべて正方形であることは、銅鐸の祖型と考えられている朝鮮式小銅鐸の身の型持が正方形であることと関係するであろう（難波2002a p. 75）。

⑰舞の型持

菱環鈕1式は、舞の型持が1個である（註14）。鳥根県荒神谷5号鐸はこれが正方形で小さく、身の上半の型持とほぼ同大である。出土地不明東博35509鐸の舞の型持は一辺が約2.2cmの正方形で、一辺が約1.6cmの正方形の、身の上半の型持よりも大きい。兵庫県中川原鐸の舞の型持は、内面に残るその痕がやや不明瞭だが、本来は2.5×2.9cm程度の、舞の短径方向に長い長方形のようで、1辺が約1.2cmと小さい正方形の、身の上半の型持よりもずっと大きい。兵庫県中川原鐸の、舞の型持が長方形であるこの特徴は、菱環鈕2式と共通する。

菱環鈕2式で舞の型持の形状や大きさを確認できる例は限られているが、舞の型持が1個の例と2個の例がある。福井県井向2号鐸と鳥根県荒神谷4号鐸は、舞の型持が1個である。舞の型持はいずれも舞の短径方向に長い長方形だが、福井県井向2号鐸のそれは4.0×5.5cm、鳥根県荒神谷4号鐸のそれは1.8×2.5cmと、あまり細長くない点で共通している。これは、菱環鈕1式の舞の型持の形状をまだ留めているのであろう。

出土地不明辰馬402鐸と出土地不明明治大学4号鐸は、舞の型持が2個である。個々の型持は舞の長径方向にやや長い長方形で、出土地不明辰馬402鐸では2個の型持の間隔が0.8cmであるが、出土地不明明治大学4号鐸では2個の型持がさらに近接している。岐阜県十六鐸の舞の型持は輪郭の一部しか残っていないが、方形のものが2個、やはり極めて近接していた可能性が高い。これらは、まず長方形の型持を1個作った後、これを2個に分割したようだ。

舞の型持は、おそらく、菱環鈕1式でも新しい段階で、正方形から長方形へと変化した。そして、菱環鈕2式に続いて作られた外縁付鈕1式は、舞の型持がすべて長方形である。舞の型持が1個の場合、その形が正方形から長方形に変わるのは、舞に適当な大きさの型持孔を2個、より確実に作り、舌を垂下する際にこれを利用するためであろう（難波2003（注2））。菱環鈕2式に舞の型持を2個とした例があるのも、舞の型持孔をより確実に2孔とするための工夫と考えられるが、これは定着せず、外縁付鈕1式になると再び舞の型持はすべて1個になった。

⑱裾の型持痕

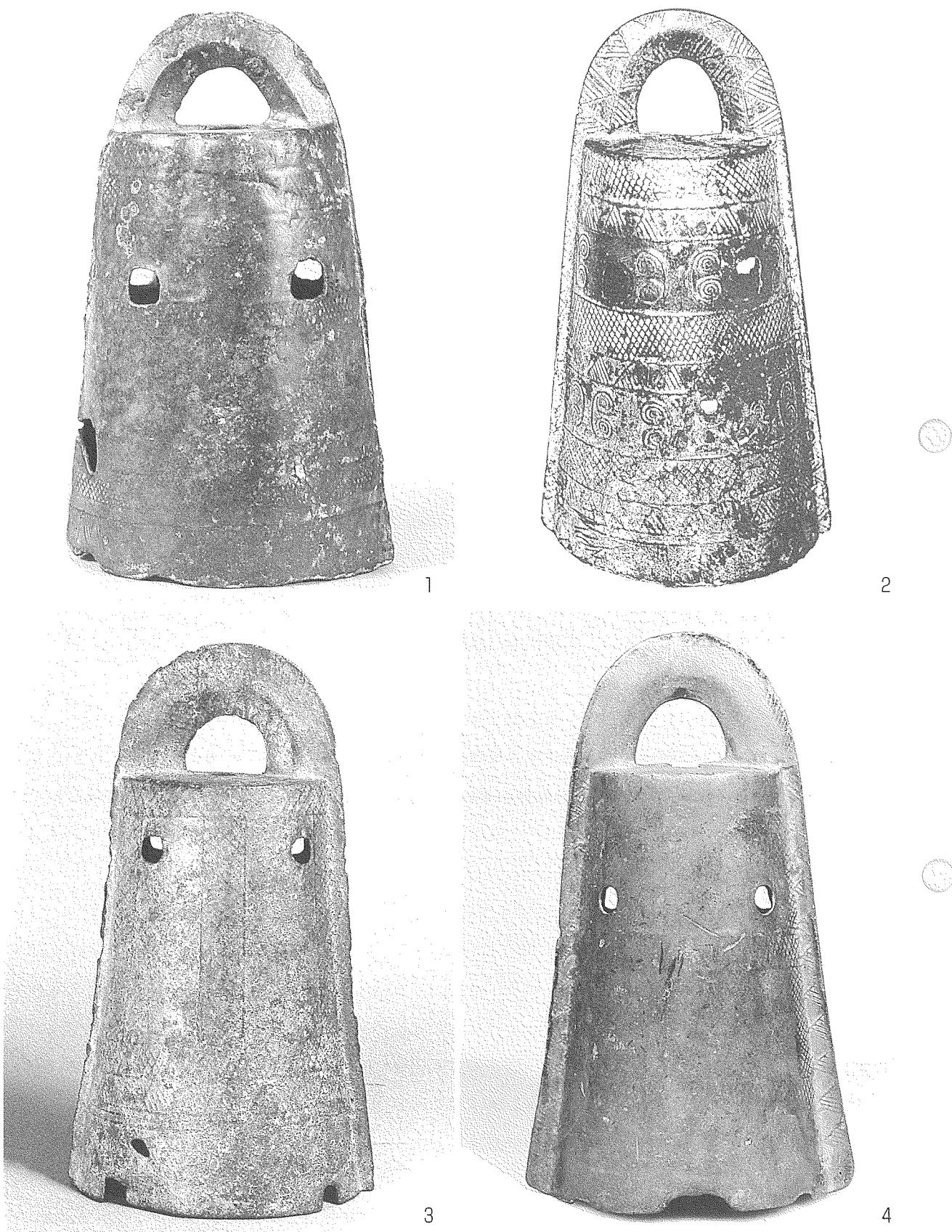


図1 菱環鈕式銅鐸

- 1 出土地不明東博35509鐸 (1 I式)、2 兵庫県神種鐸 (2 I式)
- 3 出土地不明明治大学4号鐸 (2 II式)、4 岐阜県十六鐸 (2 III式)

菱環鈕1式は、いずれも裾に型持痕がない。

菱環鈕2式のうち、兵庫県神種鐸、出土地不明辰馬428鐸、島根県荒神谷4号鐸、以上の3個は裾に型持痕がなく、三重県高岡山鐸も裾に型持痕がないようである。これに対し、出土地不明辰馬402鐸、福井県井向2号鐸、出土地不明明治大学4号鐸、岐阜県十六鐸、以上の4個は裾に型持痕がある。この特徴については、後で詳しく分析する。

5 菱環鈕式銅鐸の細分

以上の検討を踏まえ、菱環鈕式銅鐸の細分を試みよう。

前記の①～⑱のうち、②⑦⑧⑭は菱環鈕1式と2式で特徴が異なっている。その中で、現状で、菱環鈕1式と2式の分類基準として最も有効なものは、⑧の、側面観で確認できる、身の正面中央付近における縦方向の反りの有無であろう。よって、本稿では、菱環鈕式のうち、この反りがないものを1式、この反りがあるものを2式とする。

それでは、菱環鈕1式と2式を、それぞれさらに細分することは可能性であろうか。次に、これについて検討しよう。

菱環鈕1式の3個は、大きさ、形態、文様構成など各種の特徴が類似しており、前記のように、単独の工人集団がこれを製作したと考えられる。その中では、兵庫県中川原鐸が、②③⑥⑫⑬⑭⑰について新しい特徴を持っており、最も製作年代が下がるであろう。それらの特徴の中では、⑭の明確な鱗の有無、あるいは⑰の舞の型持の形態が、現状では菱環鈕1式を細分する基準として最も適当である。本稿では仮に、明確な鱗がないものを菱環鈕1Ⅰ式、一定幅の明確な鱗があるものを菱環鈕1Ⅱ式とする。

なお、菱環鈕1Ⅰ式の2個を比較すると、②については島根県荒神谷5号鐸のほうが古い特徴を持っているが、③⑥⑫については出土地不明東博35509鐸のほうが古い特徴を持っている。おそらく、出土地不明東博35509鐸が先に作られたのであろう。

菱環鈕2式は、1式に比べて個体差が大きい。現状では、前記のすべての点につき、特定の銅鐸が古い特徴を有し、別の銅鐸が新しい特徴を有するというわけではない。しかし、②④⑤⑧⑭については、古い特徴を有する例と新しい特徴を有する例の別に混乱がみられず、ほぼ整合している。具体的に指摘すると、②の鈕の形については、兵庫県神種鐸が古い特徴を有する。④の鈕の断面形については、福井県井向2号鐸が古い特徴を有し、出土地不明明治大学4号鐸、島根県荒神谷4号鐸が新しい特徴を有する。⑤の鈕の内外幅については、兵庫県神種鐸、福井県井向2号鐸が古い特徴を有し、出土地不明明治大学4号鐸、岐阜県十六鐸、島根県荒神谷4号鐸が新しい特徴を有する。⑧の身の反りについては、出土地不明辰馬428鐸、兵庫県神種鐸、福井県井向2号鐸が古い特徴を有し、出土地不明辰馬402鐸、出土地不明明治大学4号鐸、岐阜県十六鐸、島根県荒神谷4号鐸が新しい特徴を有する。⑭の鱗の幅については、岐阜県十六鐸と島根県荒神谷4号鐸が新しい特徴を有し、他は、古い特徴を有する。

以上の検討を要約しよう。菱環鈕2式の中では、出土地不明辰馬428鐸、兵庫県神種鐸、福井県井向2号鐸が古い特徴を多く有している。これに対し、出土地不明明治大学4号鐸、岐阜県十六鐸、島根県荒神谷4号鐸は新しい特徴を多く有しており、中でも、岐阜県十六鐸、島根県荒神谷4号鐸は、菱環鈕2式の最終段階に属すると考えられる。具体的に菱環鈕2式を細分するとすれば、現状では、正面観で確認できる

身の側縁の反りがないものを2Ⅰ式、正面観で確認できる身の反りがあり、鱭の幅が狭く、鱭の上端幅が、菱環部のうち鱭より内側の部分の幅よりも狭いものを2Ⅱ式、正面観で確認できる身の反りがあり、鱭の幅が広く、鱭の上端幅が、菱環部のうち鱭より内側の部分の幅に近くなったものを2Ⅲ式とするのが最も矛盾が少ない。すなわち、出土地不明辰馬428鐸、兵庫県神種鐸、福井県井向2号鐸が2Ⅰ式、出土地不明辰馬402鐸、出土地不明明治大学4号鐸が2Ⅱ式、岐阜県十六鐸、島根県荒神谷4号鐸が2Ⅲ式となる。2Ⅰ式の中では、福井県井向2号鐸が新しい特徴を持っているようである。また、破片であるため正確な型式比定は難しいが、三重県高岡山鐸は2Ⅰ式の可能性が高い。

なお、春成は、近年、菱環鈕2式のうち、鱭に文様のない、福井県井向2号鐸、出土地不明辰馬428鐸、京都府梅ヶ畑4号鐸、以上の3個を古い一群、鱭に文様のある、岐阜県十六鐸、兵庫県神種鐸、出土地不明辰馬402鐸、以上の3個を新しい一群、と考えた（春成2003 p. 70）。しかし、鱭の文様の有無によって設定しうる新旧の別は、他の属性によって設定しうる新旧の別との矛盾が目立ち、編年の基準としてあまり適切でないと考える。さらに、同範の島根県荒神谷2号鐸の鱭には文様があるにもかかわらず、春成が京都府梅ヶ畑4号鐸の鱭を無文と判断したことからわかるように、磨滅や鋳上がり不良によって文様が不鮮明になった例が多い古式の銅鐸では、鱭の文様の有無を誤認する可能性もある。

6 菱環鈕式銅鐸の鋳型の裾の構造

鋳型の裾の構造も、菱環鈕式銅鐸の細分などを考える上で、注目すべき点である。銅鐸の鋳型の裾の構造の変遷については、その概要を記したことがある（難波1999 pp. 36-45、難波2000 pp. 11-16）。これを要約すると、次のようになる。

銅鐸の鋳型の裾の構造には、外型の小口面に余った熔銅がたまるA類と、鋳型を据えた状態で外型が内型より上まで伸びているため、内型の小口面に余った熔銅がたまるB類があり、A類は、鱭の下端が鋳型の小口面に開いたA1類と、鱭の下端が鋳型に彫り込まれており小口面に開いていないA2類に細分できる。概ね、外縁付鈕1式はA1類、外縁付鈕2式はA2類、扁平鈕式新段階はB類の裾の構造を有する鋳型で作られた。なお、A類、B類ともに、型持だけで内型を固定しており、はばきは使わない。菱環鈕式の鋳型の裾の構造は明確でないが、菱環鈕2式は外縁付鈕1式と同様にA1類であった可能性がある。

その後、菱環鈕2Ⅲ式の岐阜県十六鐸を調査し、外型の小口面に熔銅がたまっていたことを示す、鋳張り状の突出が、この銅鐸のA面左鱭とB面右鱭の、鱭下端と身の下縁の接する部位の外側にあることを確認できた。これによって、A1類の裾の構造を有し、はばきを使わない鋳型の使用が、菱環鈕2Ⅲ式に遡ることが判明した。

さて、内型にはばきがあり、外型に彫り込んだ身の、裾の延長部ではばきを支えて内型を固定する場合、裾に型持を設ける必要はない（難波1999 p. 41）^{（註15）}。よって、裾に型持痕がある例は、内型の固定にはばきを使わなかった可能性が高い。そこで菱環鈕式について裾の型持痕の有無を検討すると、前記のように、菱環鈕1式は3個いずれも裾に型持痕がないが、菱環鈕2式は裾に型持痕のないものとあるものがほぼ半数ずつである。そして、菱環鈕2Ⅰ式の福井県井向2号鐸の裾には明瞭な型持痕があるので、この段階ですでに、はばきを使わず型持だけで内型を固定することが始まっていたと推定できる。

しかし、裾に型持痕がない例は、福井県井向2号鐸よりも新しい菱環鈕2Ⅲ式に1個あり、さらに新し

い外縁付鈕1式にもかなりある。たとえば、外縁付鈕1式では、島根県荒神谷2・6号鐸、島根県加茂岩倉3・16号鐸、兵庫県中村鐸、京都府梅ヶ畑4号鐸、出土地不明辰馬419・430鐸がそのような例である。これらの裾に型持痕のない例は、はばきを使って内型を固定したのであろうか。これを考える上で興味深いのは、次の例である。出土地不明辰馬419鐸は両面ともに裾に型持痕がないのに対し、これと同範の島根県加茂岩倉6号鐸は両面の裾に型持痕がある。また、互いに同範の島根県加茂岩倉3号鐸と30号鐸でも、3号鐸は裾に型持痕がないが、30号鐸は両面の裾にわずかだが型持痕がある。同範銅鐸に、はばきを使う例と使わない例があったとは考えられないので、出土地不明辰馬419鐸や島根県加茂岩倉3号鐸は、はばきを使わずに裾にも型持を使ったが、身の下縁の切断部位が関係して、あるいは熔銅の流し込み量が少なかったため、裾に型持痕が残らなかったと考えるべきである(註16)。この2組を検討すると、裾に型持痕のない銅鐸は、これと同範で裾に型持痕のある銅鐸よりも、身が短い。これも、この推定を裏付けるものである。

よって、菱環鈕1式や2式の、裾に型持痕がない例についても、これらと同じ原因で型持痕ができなかった可能性があり、はばきで内型を固定したと短絡的に判断するのは、危険である。遅くとも、裾に型持痕を残す例が出現する菱環鈕2Ⅰ式のある段階以後は、福田型などの北部九州で作られた銅鐸を除いて、銅鐸の鑄造にはばきを使わなくなり、型持だけで内型を固定するようになったのであろう。そして、菱環鈕1式についても、裾に型持痕がないが、はばきを使わずに型持だけで内型を固定し鑄造した可能性が、充分あるのである。

銅鐸については、上記のように推定できる。それでは、銅鐸の祖型と考えられている朝鮮式小銅鐸の鑄型の裾の構造は、どのようなものであったのだろうか。伝平壤出土の小銅鐸鑄型については、中口がすでに指摘しているように(中口1971 pp. 15・16)、鈕に比して身が著しく長く、外型の鐸身延長部で内型のはばきを固定し、鑄造したと考えられる。近年、熊本市八ノ坪遺跡で出土した中期前半の小銅鐸鑄型も、この伝平壤出土例と同じように、身が著しく長い。この小銅鐸鑄型でも、外型の鐸身延長部で内型のはばきを固定し、鑄造したのであろう。このように、朝鮮式小銅鐸は、はばきによって内型を固定し鑄造するのが普通であったと考えられる(註17)。よって、銅鐸の祖型が朝鮮式小銅鐸であるとすれば、朝鮮式小銅鐸から菱環鈕1式銅鐸が成立し、それが菱環鈕2Ⅰ式となる間のどこかで、内型にはばきを作らなくなり、型持だけで内型を固定するようになったことになる。

それでは、なぜ、銅鐸は、はばきを使わず型持のみで内型を固定するようになったのだろうか。はばきを使って銅鐸を鑄造したとすれば、その鑄型は伝平壤出土の朝鮮式小銅鐸鑄型と似た構造であったと考えられる。もし、銅鐸鑄型に、伝平壤出土の朝鮮式小銅鐸鑄型と同様、身高の約3割の長さのはばき受けがあったとすると(註18)、はばきを使う鑄型は、はばきを使わない鑄型よりも約20~25%長くなる。そして、この小銅鐸と同じように、はばき受けを鐸身の延長部に裾の広がる形態で作るなら、鑄型は長さだけでなく厚さや幅も増さなければならない。その結果、はばきを使う鑄型は、はばきを使わない鑄型に比して、同大の銅鐸を鑄造する鑄型の製作に、おそらく1.5倍あるいはそれ以上の重量の石材が必要となる。全高が20cm以上にもなる銅鐸では、このはばき受けがあることによる鑄型の大型化は、鑄型の石材の入手やその移動、さらには鑄型の製作上、大きな問題となったと考えられる。言い換えれば、この部分がなければ、同大の石材からより大きい銅鐸の製作が可能となるし、同大の銅鐸の鑄型なら、小型の石材で製作が可能となる。おそらくこのような理由で、銅鐸成立時あるいはその後の菱環鈕2Ⅰ式で顕著となる大型化に伴

って、はばきを使わなくなったのであろう。

一方、北部九州では、銅矛の内型の固定にはばきを使い続けた。銅矛の場合、その構造上、鑄造時に内型が熔銅から受ける浮力は銅鐸の場合ほど大きくないので、広形銅矛でも鑄型のはばき受けの部分の長さは3cm程度である。すなわち、はばきを使うことによる鑄型の重量の増大は、3～4%程度にすぎない。銅矛の製作にはばきを使い続けた原因のひとつは、おそらくここにある。

7 袈裟襷文と身の側縁の間の界線の構成

袈裟襷文と身の側縁の間の界線の構成は、菱環鈕式や外縁付鈕式の銅鐸群の抽出や銅鐸群間の系譜関係の検討に、有効と予想される。ここではこれについて概観し、今後の分析に備えることにする。

袈裟襷文と身の側縁の間の界線の構成を、本稿では以下のように細分する。

A類：縦横帯と身の側縁の間に、第1横帯の上端から下へ、一続きの界線がある。この界線が下辺横帯の下端まで伸びたA1類と、下辺横帯の上端までしかないA2類に細分する。

B類：横帯と身の側縁の間に界線がなく、縦帯と身の側縁の間に界線がある。

C類：袈裟襷文の上と下の横帯と身の側縁の間に界線がなく、その間の縦横帯と身の側縁の間に、上下一続きの界線がある。

B類とC類では、まず、すべてのあるいは上下の横帯を割り付け、その後、この種の界線を有する残りの部分を彫っている。菱環鈕1式、2式を通じて、横帯文では、横帯と身の側縁の間に界線がないが、B類の横帯は、横帯文と共通するこの特徴を持っており、C類もこれに類似する。これに対し、A類は、まず袈裟襷文全体の台形状の枠となる界線を彫り、その後、その中に横帯と縦帯を割り付けており、この点でB・C類と大きく異なる。

A～C類の構成の界線を有する例のほとんどは、菱環鈕式か外縁付鈕式である。

菱環鈕1式のうち、出土地不明東博35509鐸にはこの種の界線がすでにある。文様が不鮮明なため界線の構成の全体を正確に知ることは難しいが、斜格子文横帯と身の側縁の間には界線がないが、左右の斜格子文縦帯と身の側縁の間には界線があるようである。すなわち、B類に似た界線構成であったと推定できる。

菱環鈕2式には、すでに前記の類型がそろっており、福井県井向2号鐸がA1類、出土地不明辰馬428鐸がB類、出土地不明明治大学4号鐸がC類である。岐阜県十六鐸と島根県荒神谷4号鐸にはこの種の界線がない。

外縁付鈕1式の四区袈裟襷文銅鐸は、ほぼその半数にあたる以下の9組が、この種の界線を有する。

- ① 伝兵庫県大月山出土鐸、兵庫県中山1・2号鐸、出土地不明京都国立博物館蔵鐸、出土地不明崇福寺蔵鐸、伝大阪府出土鐸、福井県米ヶ脇鐸（以上、同範7個）・・・A1類
- ② 和歌山県太田黒田鐸、島根県加茂岩倉4・7・19・22号鐸（以上、同範5個）・・・A1類
- ③ 出土地不明東博36667鐸・・・A1類
- ④ 京都府梅ヶ畑2号鐸・・・A1類
- ⑤ 島根県加茂岩倉24・38・39号鐸（以上、同範3個）・・・A1類
- ⑥ 島根県荒神谷3号鐸、伝徳島県脇町出土鐸、出土地不明秦氏蔵鐸（以上、同範3個）・・・A1類
- ⑦ 兵庫県中ノ御堂鐸・・・A1類かA2類

⑧島根県加茂岩倉12号鐸・・・A1類類似

⑨岡山県念仏塚鐸、島根県加茂岩倉36号鐸（以上、同範2個）・・・B類

以上のように、外縁付鈕1式四区袈裟禪文銅鐸でこの種の界線を持つ例のほとんどが、A1類の界線を有している。その中で興味深いのは、①～④の4組14個である。これらは、途中で斜線の方向を変える有軸綾杉文を鈕の菱環外斜面に飾り、頂を菱環の稜に向けた鋸歯文を菱環内斜面に飾るという、共通の特徴を持っており、また、この特徴を持つ例はいずれもA1類の界線を有する。⑤⑥の2組6個については、菱環内斜面の文様を現状では確認できないが、綾杉文を菱環外斜面に飾っており、やはりA1類の界線を有するので(註19)、①～④と同じグループに属する可能性が高い。外縁付鈕1式四区袈裟禪文銅鐸でA1類の界線を有する例は、ほぼこの6組20個に限られており、鈕の文様構成も共通するので、これらは同じ工人集団の製品としてよいだろう(註20)。これを、中山型としよう。中山型は、外縁付鈕1式四区袈裟禪文銅鐸の、半数弱を占めている。

⑦の兵庫県中ノ御堂鐸は、鈕の菱環外斜面に斜格子文を飾る珍しい例である。A類の界線を有するが、A1類かA2類か明確でない。⑧の島根県加茂岩倉12号鐸は、A1類の界線構成をとるが、横帯の界線と下辺横帯下界線が身の側縁に達している点で、①～⑥とは異なる(註21)。この島根県加茂岩倉12号鐸は慶野型に属し(難波2002a pp. 78-80、難波2003 p. 47)、中山型とは別の工人集団の製品である。ただし、同じ慶野型に属する兵庫県慶野鐸には、この種の界線がない。⑨の岡山県念仏塚鐸とその同範銅鐸(計2個)は、外縁付鈕1式で、唯一、B類の界線を有する。

外縁付鈕1式四区袈裟禪文銅鐸で、この種の界線を持たない例のほとんどは、菱環外斜面の文様が以下のいずれかである。

(A)綾杉文。例数が最も多い。

(B)頂を合せて向い合う鋸歯文。例数が多い。

(C)頂を外に向けた鋸歯文。外縁と菱環外斜面の鋸歯文は、頂が合う。例数は少ない。

(D)頂を内に向けた鋸歯文。鋸歯文の底辺の端は、外縁の鋸歯文の頂と合う。菱環内斜面に頂を鈕孔に向けた鋸歯文を飾り、その底辺の端が外斜面の鋸歯文の頂と合う例が多い。例数はかなり多い。

(E)斜線文。例数は少ない。

菱環外斜面の文様が(A)(B)(C)の例のほとんどは、片面が(B)か(C)で他面が(A)である。これに対し、菱環外斜面の文様が(D)の例は、他面の文様も同じ(D)である。これらの中から群の抽出が可能か、これらが中山型や流水文銅鐸とどのような関係にあるのかなどについては、今後、慎重に検討したい。

以下のように、外縁付鈕1式流水文銅鐸も、袈裟禪文銅鐸のそれと同じような界線を有する。

⑩伝静岡県井伊谷出土鐸・・・A2類

⑪大阪府神於鐸、兵庫県桜ヶ丘2号鐸（以上、同範2個）・・・A1類

⑫奈良県名柄鐸・・・A1類

⑬伝滋賀県出土辰馬407鐸、出土地不明辰馬414鐸（以上、同範2個）・・・A1類かA2類

⑭福井県井向1号鐸・・・A1類類似(A面)、A2類(B面)

⑮愛知県八王子鐸・・・類型不明

このように、外縁付鈕1式の流水文銅鐸は、そのほとんどがA類の界線を持っており、今のところこの

種の界線がないのは、最古の流水文銅鐸と考えられている兵庫県桜ヶ丘1号鐸とその同範銅鐸のみである。よって、外縁付鈕1式の流水文銅鐸は、外縁付鈕1式四区袈裟禪文銅鐸のうち、中山型をはじめとする、この種の界線を有するものを作った工人集団の製品である可能性が高い。

中でも興味深いのは、⑪の大阪府神於鐸とその同範銅鐸および⑫の奈良県名柄鐸が、中山型と同じA1類の界線を有することである。これは、外縁付鈕2式の横型流水文銅鐸の祖型となった系列の流水文銅鐸が、中山型と同じ工人集団の製品あるいは近い関係にある工人集団の製品であることを示している。

⑭の福井県井向1号鐸は、島根県加茂岩倉12号鐸などの慶野型を製作した工人集団の製品あるいはこれと近い関係にある工人集団の製品である（難波2002a pp. 78・79、難波2003 pp. 43-48）。B面はA2類の界線を有するが、側縁に接する縦帯が下辺横帯を切っているA面は、A1類に類似した界線を有し、下辺横帯の下界線が身の側縁に達している。このA面の界線構成は、前記の島根県加茂岩倉12号鐸のそれとほぼ同じである。

外縁付鈕2式については不明な点はまだ多いが、横型流水文銅鐸の伝徳島県吉野川流域出土鐸とその同範銅鐸が、その祖型である大阪府神於鐸とその同範銅鐸と同じ、A1類の界線を有することが注目できる。

また、すでに指摘したことがあるように、外縁付鈕2式の1対耳四区袈裟禪文銅鐸は、初期には横型流水文銅鐸の工人集団がこれを作っていた可能性があるが、その後、横型流水文銅鐸とは別の工人集団が作るようになったと考えられる（難波1991 pp. 73・74）。横型流水文銅鐸と同大の1対耳四区袈裟禪文銅鐸に、横型流水文銅鐸と同じA1類の界線を有する例（島根県加茂岩倉37号鐸）があることは、前記のような両者の関係を物語っているのであろう。

一方、小型の1対耳四区袈裟禪文銅鐸の、伝島根県熊野出土鐸や出土地不明国立歴史民俗博物館蔵鐸（井上・森田編2003 62-4）は、A1類とはやや異なる、A2類の界線を有する。これは、これらの小型の1対耳四区袈裟禪文銅鐸が、横型流水文銅鐸とは別の工人集団によって作られたことを示しているのかもしれない。また、破損の著しい現状では飾耳がみられないが、菱環の内外斜面に綾杉文を重ねて飾る特徴が1対耳四区袈裟禪文銅鐸と共通する島根県志谷奥1号鐸も、A2類の界線を有する。あるいは、本来は鱗の上端に飾耳を1対有したのであろうか。

外縁付鈕2式の3対耳四区袈裟禪文銅鐸と縦型流水文銅鐸については、今のところこの種の界線の有無や構成が明確ではないが、三重県磯山鐸はA2類の界線を有するようである。

このように、ここで概観した縦横帯と身の側縁の間の界線の構成は、銅鐸群の分析に一定の有効性が期待できる。今後、検討を深化させたい。

本稿の作成にあたっては、青木政幸、赤澤徳明、石川日出志、伊藤随賢、奥井哲秀、瀬川貴文、長屋幸二、日種顕夫、日高慎、島根県埋蔵文化財調査センターと名古屋市見晴台考古資料館の諸氏、以上の方々に、資料調査等で御世話になった。記して感謝致します。なお本稿は、平成15～18年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））「難波分類に基づく銅鐸出土地名表の作成」の成果の一部である。

<註>

1) 出土地不明の東京国立博物館蔵列品番号J-35509鐸を、このように略記する。また、辰馬考古資料館所蔵銅鐸のうち、出土地が不明のもので資料番号を付記する必要のあるものについても、たとえば、「出土地不明辰馬419鐸」というように

略記する。

- 2) 中細形銅剣b類でも新しい特徴を有する兵庫県古津路1号銅剣の綾杉文も、この特徴を有する。
- 3) 大阪府茨木市東奈良遺跡出土の小銅鐸は、近畿とその周辺から出土した小銅鐸の中で最も古い特徴を持つが、朝日遺跡出土鑄型と同様に、身の上縁に文様より太い線がある。この小銅鐸の身の曲率は、側縁付近で大きく中央付近で小さいので、朝日遺跡出土鑄型がこのような小銅鐸の鑄型の身の中央付近の破片である可能性も、低い但不是ない。
- 4) 北島は、愛知県外山鐸と愛知県千両鐸の2個が銅鐸群をなす可能性を指摘しているが(北島2001 p.102)、東海派以前の東海地方出土の銅鐸の中で、他地域出土の銅鐸にない特殊な特徴を有する例をあげるとすれば、この2個であろう。これを仮に、千両型とする。この2個は、菱環部が厚い点、鱗の幅が狭い点、鈕外縁と鱗の鋸歯文の大きさが著しく違う点、鈕孔が大きい点など、菱環鈕式と共通する古い特徴を多く有する。また、袈裟襷文と身の側縁の間の界線の構成が、後述するC類である点、斜格子文が粗い点、裾の型持痕が大型で幅広く方形である点、裾が広い点などは、菱環鈕2式の出土地不明明治大学4号鐸によく似ている。この出土地不明明治大学4号鐸が、千両型の祖型かもしれない。千両型の2個はいずれも外縁があり、舞の型持が2個なので、外縁付鈕2式となる。身の上半の型持の位置もこの型式比定と矛盾しない。しかし、菱環鈕2式に舞の型持が2個の例がすでにあることを考えれば、現在、外縁付鈕2式としているものの中に、外縁付鈕1式と同時期に作られたものが若干含まれている可能性がないわけではない(難波2003(注2))。千両型の2個の中でも、特に古い特徴が目立つ愛知県外山鐸については、そのような可能性も考える必要がある。鉛同位体比の測定がなされれば、これらの銅鐸の位置付けについて見通しを得ることができるであろうが、これも含め、今後、慎重に検討したい。ただし、千両型が東海地方で作られた銅鐸群であるとしても、この系列の銅鐸がその後、東海地方で継続的に作られた形跡は、今のところ確認できない。
- 5) 出土土器については、赤澤徳明氏の教示を受けた。
- 6) 菱環鈕式銅鐸を検討した論文(佐原1983)においても、前記の5個の製作順まで論じながら、菱環鈕式の2分案についてはまったく触れていない。
- 7) 兵庫県神種鐸の鈕菱環外斜面の鋸歯文は、単位文の三角形が互いに接していないので、鈕の外周が鑄造後に削られた可能性がある(春成1984 p.36)。しかし、鋸歯文の隣り合う三角形が互いに接する位置まで、本来は菱環外斜面があったとすると、菱環外斜面の幅が広くなりすぎる。よって、この銅鐸では、菱環外斜面の鋸歯文の三角形は、鑄型に彫られた段階で、すでに現状のように互いに接していなかったと考えられる。鑄造後の鈕外周の整形は、あったとしてもそれほど大きくなかったのかもしれない。
- 8) 鱗の発生後、菱環外斜面は鱗の延長部まで拡張されるようになり、鱗の幅がしだいに広くなるのに連動して、菱環外斜面の幅も増加する。菱環鈕2式の菱環外斜面の幅が内斜面の幅よりも広い原因のひとつはここにある。
- 9) 出土地不明東博35509鐸A面は、身の側縁でも中央付近でも、特に上部で外への張りが目立つ。一方、B面は、部分的な差異が目立ち、側縁は上部で外へ張るが、中央付近には明確な反りがない。島根県荒神谷5号鐸は、実測図によれば、身の側縁が上部でやや外へ張るが、中央付近には明確な反りがないようである。兵庫県中川原鐸は、側縁には反りがないが、A面の身の中央付近に反りがあり、上縁と下縁を結んだ線から、最深部で1mm程度内湾している。しかし、B面には身の中央付近に反りがないので、A面のこの反りを製作時の誤差と考え、本稿ではこの鐸には反りがないとしておく。
- 10) 春成は、福井県井向2号鐸の身には反りがないとするが(春成1984 p.40、春成2003 p.66)、調査により、身の正面中央付近は、上縁と下縁を結んだ線から、最深部で約3mm内湾していることが確認できた。また、B面左側縁には反りがない。他の側縁は、1mm程度内湾している可能性もあるが、錆や腐食のため、確認が困難である。いずれにせよ、福井県井向2号鐸は側縁にまだ明確な反りはないとして、問題ないであろう。
- 11) 後述するように、菱環鈕2式の中では、正面観で身に反りのない型式がこの反りのある型式より古い。東奈良遺跡出土小銅鐸は、正面観で身に反りがないので、この点で菱環鈕2式の古い段階のものと共通している。単純な比較は危険だが、あるいは菱環鈕2式の古い段階に、この小銅鐸の製作時期を限定できるかもしれない。
- 12) 銅鐸出土地名表(佐原・春成1982)で外縁付鈕1式の横帯文銅鐸か、となっている和歌山県朝日鐸は、外縁付鈕2式の四区袈裟襷文銅鐸である。
- 13) 外型と型持の間に熔銅が廻ってしまい、型持部が孔にならなかった箇所もあったかもしれない。
- 14) 銅鐸の祖型の有力な候補である朝鮮式小銅鐸には、舞の型持が2個の例と正方形で1個の例がある。舞の型持が正方形で1個の例は、平安南道平壤市周辺に出土地が集中しており、黄海南道の雲城里でも出土している。これに対し、忠清南道や慶尚北道出土の小銅鐸はいずれも舞の型持が2個である。すなわち、舞の型持については、菱環鈕1式銅鐸は、朝鮮半島北部の朝鮮式小銅鐸と共通する特徴を持っていることになる。ただし、現状では、朝鮮式小銅鐸の中でも製作の古い例は舞の型持が2個であり、舞の型持が正方形で1個の例は銅鐸の祖型とするには製作時期が新しすぎる。

- 15) はばきで内型を固定する朝鮮式小銅鐸には、裾に型持痕がない。はばきで内型を固定する場合、裾に型持を設ける必要がないことは、これからも推定できる。
- 16) 実際、外縁付鈕1式には、熔銅の流し込み量が不足気味で、下縁の広い範囲にわたって熔銅の末端がそのまま残った例が多い(難波2000 p.13)。
- 17) 鋳型がこの構造であれば、身の下縁は、あらかじめ内型に彫られて位置が決っている。朝鮮式小銅鐸には、忠清南道槐亭洞出土鐸や平安南道梧野里23号墳出土鐸をはじめ、身の下縁が内向きの斜面をなす例が目立つ。これは下縁が傾斜を作って内型に彫られていたことに起因するのであろう。菱環鈕式銅鐸に身の下縁がこの特徴を有する例がないことは、菱環鈕式銅鐸が朝鮮式小銅鐸鋳型のような構造の鋳型で作られたのではないことを示しているのかもしれない。また、鋳型がこの構造であれば、鋳造後に下縁を全周にわたって切断して仕上げる必要はないので、外縁付鈕1式に多く見られるような、身の下縁に切断痕のある例は、朝鮮式小銅鐸とは異なる構造の鋳型で鋳造した可能性が高いことになる。
- 18) 伝平壤出土の朝鮮式小銅鐸鋳型のはばき受けの長さは、井上の復元(井上1992 pp.18-20)を参照し、推定した。八ノ坪遺跡出土の小銅鐸鋳型も、はばき受けが身高の約3割はあるようである。朝鮮式小銅鐸や銅鐸は、内型が大きいので、鋳込み時に熔銅から受ける浮力が非常に大きい。朝鮮式小銅鐸のはばき受けが製品に比して長いのは、この大きな浮力に耐えて内型を保持するためである。
- 19) ⑤については報告書に菱環外斜面の文様に関する記載はないが、38号鐸A面の菱環外斜面左上部に綾杉文がみえる。
- 20) 春成は、本稿の①②③について、鈕の前記のような文様構成などに着目し、同じ工人集団の製品と推定している(春成1992 p.23)。
- 21) A1類の界線を有するとした、菱環鈕2式の福井県井向2号鐸も、下辺横帯下界線が身の側縁に達する同じ特徴を有する可能性がある。

<参考文献>

- 井上洋一 1993 「銅鐸起源論と小銅鐸」『東京国立博物館紀要』第28号 東京国立博物館
- 井上洋一・森田稔編 2003 『考古資料大観』第6巻 弥生・古墳時代 青銅・ガラス製品 小学館
- 北島大輔 2001 「伊勢湾沿岸地方の銅鐸覚書」『シンポジウム「銅鐸から描く弥生社会」予稿集』一宮市博物館
- 佐原真 1960 「銅鐸の鋳造」『世界考古学大系』第2巻 日本Ⅱ 弥生時代 平凡社
- 佐原真 1974 「銅鐸出土地名表」『古代史発掘』5 大陸文化と青銅器 講談社
- 佐原真 1983 「銅鐸の始まりと終りと」『展望アジアの考古学—樋口隆康教授退官記念論集—』新潮社
- 佐原真・春成秀爾 1982 「銅鐸出土地名表」『考古学ジャーナル』No.210 ニュー・サイエンス社
- 中口裕 1971 「銅鐸石型の分類と鋳造技術」『九州考古学』41~44 九州考古学会
- 難波洋三 1986 「銅鐸」『弥生文化の研究』第6巻 道具と技術Ⅱ 雄山閣出版
- 難波洋三 1987 「銅鐸研究の現状と課題」『島根考古学会誌』第4集 島根考古学会
- 難波洋三 1991 「同範銅鐸2例」『辰馬考古資料館考古学研究紀要』2 辰馬考古資料館
- 難波洋三 1999 「近年の銅鐸研究の動向」『徹底討論 銅鐸と邪馬台国』サンライズ出版
- 難波洋三 2000 「同範銅鐸の展開」『シルクロード学研究叢書』3 シルクロード学研究センター
- 難波洋三 2002a 「銅鐸」『八王子遺跡 考察編』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第92集 愛知県埋蔵文化財センター
- 難波洋三 2002b 「八王子銅鐸の位置づけ」『銅鐸から描く弥生時代』学生社(難波洋三2001「八王子銅鐸の位置づけ」『シンポジウム「銅鐸から描く弥生社会」予稿集』一宮市博物館 に加筆改訂)
- 難波洋三 2003 「井向1号銅鐸の位置づけ」『辰馬考古資料館考古学研究紀要』5 辰馬考古資料館
- 難波洋三 2005 「神庭荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡」『ドイツ展記念概説 日本の考古学』上巻 学生社
- 春成秀爾 1984 「最古の銅鐸」『考古学雑誌』第70巻第1号 日本考古学会
- 春成秀爾 1992 「銅鐸の製作工人」『考古学研究』第39巻第2号 考古学研究会
- 春成秀爾 2003 「井向1・2号銅鐸の絵画」『辰馬考古資料館考古学研究紀要』5 辰馬考古資料館
- 三木文雄 1995 『日本出土青銅器の研究—剣・戈・矛・鏡・銅鐸—』本文編 第一書房
- 森田克行 2002 「最古の銅鐸をめぐって—東奈良銅鐸の型式学的研究—」『究班』Ⅱ 埋蔵文化財研究会25周年記念論文集 埋蔵文化財研究会25周年記念論文集編集委員会

付論 2 朝日遺跡、変容する景観

石黒立人（愛知県埋蔵文化財センター）

1 はじめに

朝日遺跡はこれまで断続的に調査が行われ、その都度新たな発見とともに詳細なデータが蓄積され続けている。同時に遺跡像の編集作業も進み、より蓋然性を増しつつある。

さて、朝日遺跡は国道22号バイパスの東側がほぼ名古屋市に属し、西側の北半が西春日井郡春日町に、南半が清須市に属している。そして発掘調査については、東西南北に貫く国道22号バイパスと東名阪道路および国道302号は愛知県教育委員会や（財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターがもっぱらあたり、それ以外の市町村関係の公共事業や民間開発は当該市町村教育委員会があたっている。今回の名古屋市教育委員会による朝日遺跡の調査はそのような環境で実施されたものである。

わたしは今回調査の直接の調査担当者ではない。しかし、これまで朝日遺跡の調査・報告を重ねて来た経緯もあってか、担当者から報告書作成に向けて協力の依頼があった。そこで、今回の調査成果が朝日遺跡の変遷上どのような意味があるのかを主眼に課題を整理することで責を果たすことにしたい。

2 朝日遺跡の変遷概要

まず、朝日遺跡の変遷過程を示す。

I 期（朝日 I 期、近畿 I 様式）^{（註1）}

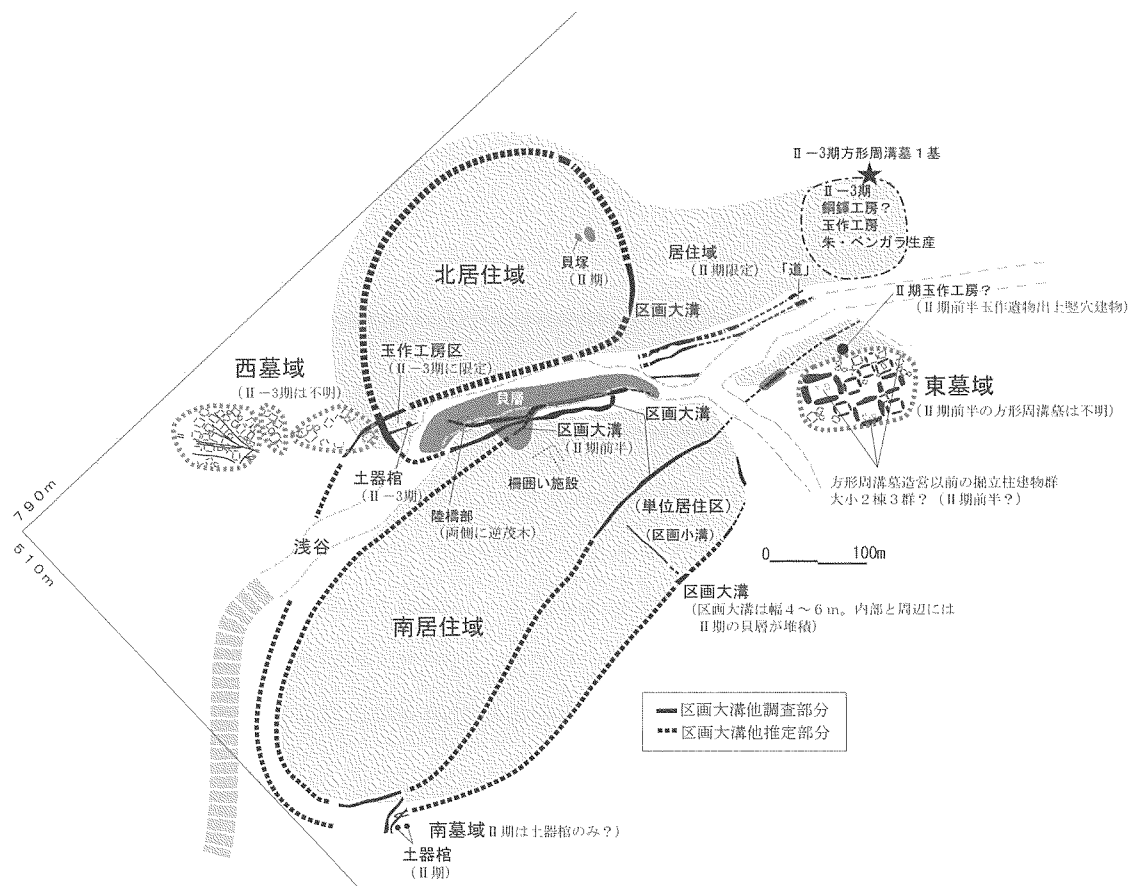
前半期には貝殻山貝塚や二反地貝塚を伴う南居住域が形成される。後半には谷Aの北側に小規模な居住域が形成され、両者は並存する。南居住域は当初環濠を伴わないが、後に環濠が掘削される。

II - 1・2 期（朝日 II 期、近畿 II 様式前半）

居住域の中心は東方の、ちょうど谷Aの蛇行する付近に移動する。谷A北側の居住域は断絶して方形周溝墓が展開する[西墓域]となる。旧[南居住域]は拡大した居住域の西限となる。この時期の区画大溝は新[南居住域]北縁と南西縁で何条か検出されているのみで、新[北居住域]では未検出である。

新[北居住域]は範囲が東方に大きく広がり、谷A南側の、最初に[東墓域]が形成された区域に北接する竪穴建物の覆土中からは玉作遺物（碧玉素材・管玉未成品・穿孔具）が出土している。この竪穴建物そのものは玉作工房ではないが、付近に工房が存在する可能性は高い（これを[東部玉作区域]と呼ぶ）。また、そのさらに南にはII - 3期の方形周溝墓に先行して、梁間が1間と2間の大小の掘立柱建物からなる単位が2単位もしくは3単位あり、さらに複数の掘立柱建物の存在も窺える。しかし、出土遺物がほとんど無く廃棄土坑も伴わないというように居住域の様相が窺えないので、特別な区域であった可能性が高い。

新[南居住域]では平面形が方形と円形の竪穴建物が混在する<混成系>をなす。基本的に、方形竪穴建物は地床炉、円形竪穴建物は中央穴炉であり、また床面の拡張方法（前者は対角的、後者は求心的）を含めて原理の異なる建物が並存する。それが系譜的な差なのか機能的な差なのかは確定していない^{（註2）}。また、「方形柵囲い」（内部には炉跡が無い小規模な竪穴建物跡があり、特別な空間であったと考えられる）も発見されており、最初期の遺構であることからこの時期である可能性が高い。



Ⅱ期（弥生中期前葉）

この時期、貝層の形成は谷A南斜面で顕著であり、新[南居住域]北縁に掘削された区画大溝を覆っていた。貝層中には破砕貝層や炭化物層・灰層が形成され、作業面を伴いつつ集中的な煮沸処理が行われた形跡がある。

Ⅱ-3期（朝日Ⅲ期、近畿Ⅱ様式後半）

今回の名古屋市教育委員会調査分に該当する時期である。

これまでの調査で明らかになった先期との相違点は、

- ① [北居住域] を囲む区画大溝（環濠）が掘削されるが溝内には大量の貝殻が廃棄される、
- ② 大形方形周溝墓を核とする世代単位の墓群による [東墓域] の形成が始まる、
- ③ [北居住域] 外郭に玉作工房区が付設される、
- ④ 谷Aを横断する区画大溝に設けられた溝肩より一段低い陸橋部付近に逆茂木が付設される、
- ⑤ [南居住域] が区画大溝や区画小溝によって幅100mほどの小区画により編成される、

ことなどである。

このほか、土器型式における正しい意味での櫛描紋が成立し、また「松菊里型」竪穴建物も出現する。

名古屋市教育委員会の調査はこれに、[東部玉作区域]の拡大と玉作工程の具体的な内容の把握、銅鐸鋳型を追加した。この発見の意義については後述する。

Ⅲ期（朝日Ⅳ期・Ⅴ期、近畿Ⅱ様式末からⅢ様式）

名古屋市調査分の大半はこの時期の墓域である。

前半期は構造的に先期と大きな変化は無い。区画大溝は廃棄物や土砂の流入によって埋没する。谷Aは

ことに意味は無いということである。この点は、同じ場所に連続して営まれる集落を同一系譜において考えることが多い弥生時代研究において重要な反証材料となる。

このように、朝日遺跡の歴史はⅢ期末をもっていったん途絶え、Ⅳ期から新しい歴史が始まるのであるが、なかなか理解されない部分である。

V期・VI期（朝日Ⅶ期・Ⅷ期、近畿Ⅴ様式・Ⅵ様式）

谷Aを挟んで南北に二つの居住域が並存し、その環濠集落化、非環濠集落化を繰り返して推移する。

〔北居住域〕は環濠の走行がやや複雑で、出土した青銅製品も多い。「銅滴」が出土したことから青銅器生産も想定されているが、確実な鋳型の出土例はない。なお、Ⅴ期初頭には〔南居住域〕南縁に銅鐸が埋納（横位・東西方向）され、銅鐸埋納地点を避けて環濠が掘削されていることから、地表には何らかの表示物があった可能性が考えられる。

谷Aは恒常的に水流があり、河道化する。西部の屈曲部付近には堰が設けられ、かつての〔東墓域〕の上層が水田化された可能性がある。

古墳時代

5世紀には墳墓群が展開する墓域と化し、その後埋没が進行する。旧五条川の流路変更と自然堤防の形成によって地表面高度の逆転現象が生じたのであろう。

中世

谷Aは「沼」状をなして残存する。斑土を埋土とする長方形土坑が広範囲に多数分布する。大規模な土坑もあり、中には埋め戻されていないものもある。長方形土坑のいくつかはグループをなして、方形にまとまるものがある。土坑の短辺側から灰釉系陶器の碗・皿が出土することがあることから、これらは墓坑であったと考えられる。

3 朝日遺跡の空間構成

朝日遺跡はⅡ-3期に至ってⅢ期に継承される基本的なく集落>プランを確立する。しかし、その直前段階は居住域・墓域・玉作生産域が散漫に分布しているにすぎない。集落範囲は貝殻山貝塚周辺地区を南西限として東方に拡大し、南西端と北部の谷A際で区画大溝が検出されていることから環濠がめぐる可能性も高いが、集落範囲はさらにその外側にまで広がっているのが実情で、無遺構区域も介在して集落界はいささか曖昧である。この点で、朝日遺跡調査歴の初期において、これらが一体のものであるとの認識は無かったことも十分にうなずける。

朝日遺跡が一体の集落遺跡であるとの理解は、一つには調査方法、二つには遺跡に対する認識的転回によって達成された。朝日遺跡の発掘調査は道路建設部分であり、連続する調査区が設定されている。そのため、複数の地形単位や機能空間を横断するかたちで調査成果が得られた。仮に調査区が間隔をおいて分断されていたなら、その広がりや機能を一体と捉えることも無く、複数の遺跡からなる<遺跡群>として認識されたままであった可能性が高い。この点は、1970年代の愛知県教育委員会による概要報告において当初、「朝日遺跡群」と記載されていたことに示されている。

それが1980年代以降「朝日遺跡」と呼称するようになったのは、愛知県教育委員会による正式「報告書」（愛知県教育委員会1982）において遺構を分担した都築暢也氏が全体をひとつのものとして捉える視点を

提示し、それによって遺構群の関係性を重視した記述を進めたことによる。それ以来、わたしたちは「朝日遺跡」という全体的概念を共有しているのである。

今回の名古屋市教育委員会調査分は、このような背景（地）において意味（図）を持つものとなる。

さて、ここではⅡ-3期という時期区分が鍵となるのだが、同時存在の遺構を確定し景観を復元することは決して容易ではない。特に問題となるのは玉作関連遺構群である。つまり、名古屋市教育委員会が調査した[東部玉作区域]と[北居住区]外郭の玉作工房区が同時存在なのか時期差なのかという点である。

今回の名古屋市教育委員会調査区においては「玉作工房」の特定はむづかしい（SB04にその可能性がある）ようだが、[東部玉作区域]ではⅡ期を通して玉作関連遺構群が地点を北に移しながら継続していた蓋然性は高くなった。そして[北居住域]外郭の工房区がⅢ期には[北居住域]内に取り込まれるという流れを考慮するなら、Ⅱ?3期のうちに東から西に移転したというのが受け入れ易い考え方である。しかし、そうなると玉作工房は1時期1棟ということになる。

[北居住域]外郭の工房区は北を区画大溝、東を谷A、南を区画小溝で画された小範囲にやや大形の円形堅穴建物と小型の円形堅穴建物が東西に並んで検出された。玉作関連遺物は東隣の大形円形堅穴建物の床面や床面に掘り込まれた土坑内部から出土した。土坑からは玉砥石も出土し、この建物を「工房」と認定できた。

この堅穴建物の床面には方形にめぐる周壁溝が重複して見ついている。工房が建てられる前に方形の堅穴建物があったことは明らかであるが、それも工房であったのかどうかはわからない。ともかく現状においてこの工房区で復元できる工房建物は1棟であり、複数の工房が建ち並ぶ景観は復元できない。

いっぽう、[東部玉作区域]はⅡ期という幅があるとはいえ範囲も広く、また玉作関連だけでなくベンガラなどの赤色顔料の生産・精製も行っていった可能性があり、限定品目の手工業生産区域として特化していた風が読み取れる。ベンガラについては玉作の最終工程での研磨材として用いられていた可能性があり、用途が顔料に限定できない可能性はあるが、鋳型片が出土しており、[北居住域]外郭工房区の内容とは大きく異なる。おそらく、工房があるとすればそれは複数であり、まさに工房が建ち並ぶ景観が想像できる。となれば、[東部玉作区域]→[北居住域]外郭工房区という時間的な流れではなく、両者が並存していた可能性が強く浮上してくる。

注目すべきは、今次調査の目玉ともいえるべき[東部玉作区域]北縁から出土した稜環鈕式銅鐸鋳型である。鋳型が出土したからといって、それが即座に朝日遺跡における銅鐸生産を証明するものではないにしても、生活必需財ではなく装身具・顔料などという儀礼的場面や儀礼的行為、象徴的意味付与、贈与に用いられる品目を生産する区域において出土した点をこそ重視すべきであると考えられる。

そして、まさにこの[東部玉作区域]の南に、長辺が30mを超える大形方形周溝墓を核とする方形周溝墓群を単位（世代的まとまり）として墓域形成をみせる[東墓域]が成立するのである。やや先行して墓域形成が始まる[西墓域]は複数の平面形態が混在し、規模格差がまったく窺えないのとはきわめて対照的である。

墓域における東西格差については従来、[北居住域]構成員が[東墓域]の造営主体であり、[西墓域]は[南居住域]が対応すると考えてきたわけだが、[東墓域]の成立契機は[東部玉作区域]の動向と無関係ではないことがより明確になった。つまり、[東墓域]の造営主体が単に[北居住域]に関係するという

以上に、[東部玉作区域]を含む手工業生産部門の統括者こそが大形方形周溝墓の被葬者であるといえるのであり、しかもこの点は[東墓域]がかつて大小の掘立柱建物群が展開する特殊な区域であったことにも関連しよう。大小の掘立柱建物群からなる区域がはたして手工業生産部門の統括者の居住地であったのかどうか、あるいは祭場であったのか、そのことを直接に示す証拠は無いが、大形方形周溝墓の造営が[東墓域]の開始である点で、その選地と無関係であったとは思えない。

朝日遺跡では、Ⅲ期には玉作を含む限定品目の工房関連も[北居住域]内へ集約されてしまう。他方、①磨製石斧の一次的生産系列(原産地発の系列)の朝日遺跡内での最終工程については資料が少なく実態も不明だが、破損素材からの再生産である二次的生産系列(消費地発の系列)を示す資料の出土、②動物解体にはじまる骨角器生産や皮革加工という一連の作業の流れが認められ、それに関係すると思われる削器の出土、③木器生産や修繕に関連する伐採斧・加工斧の出土、④谷A南斜面や区画大溝への貝の廃棄など、⑤布生産を示す紡錘車の出土、において集中的に出土する地区は認識できず、これらのことはいずれも[南居住域]で平均的に行われていたと考えられる。もとより、磨製石斧の再生産は二次的であり、必要を補う程度のブリコラージュの一環ともいえるので専門的な分業問題とは切り離される。その他の品目も殊朝日遺跡においては基礎的な生産活動として共有されていたのであり、あくまで玉作など限定品目の生産についてのみ特殊化されていたと考えられる(註3)。

つまり、朝日遺跡における玉生産が玉作卓越地域における営みであるならともかく、まったく分布圏からはずれる朝日遺跡に随伴して出現する点に<專業化>を見ることができるのである(註4)。

とはいえ、上記の①～⑤について、朝日遺跡においては通常の生産品目であった言えるとしても、同時期の他の遺跡では脱落する部分もあり、この点で手工業生産の部門構成をめぐって遺跡間に差異があることも重要な事実である(註5)。結局のところ、<專業化>問題は一律の基準を設けて対象地域を限定せずに手工業生産一般を論ずるのではなく、地域ごとに差のある品目それぞれのグレードを把握・整理した上で、遺跡間格差も同時に対象にしなければ集落間関係に届かないまま個別論に終始することになる。現行の議論は一般論に過ぎ、地域ごとの社会的経済的環境への目配せが不十分であるといわざるをえない。

4 濃尾平野における遺跡間関係

朝日遺跡がⅡ-3期に至って<集落>プランを確立することが、濃尾平野全域においてどのような意味があったのか、あるいは無かったのかをここで触れておきたい。

同時期で内容のわかっている遺跡は、八王子遺跡、猫島遺跡など多くはない。八王子遺跡は成立がⅠ期に遡る。Ⅱ期には三重環濠が掘削され、集落はⅢ期に継続するが、Ⅳ期前半は空白期となる。猫島遺跡は遠賀川系土器の出土は見られるが、集落の確立はⅡ期であり、二重環濠がめぐる。遺物量から言えばⅡ-3期からⅢ期がピークである。方形周溝墓群はⅢ期全般にわたるが、Ⅲ期後半の居住域は影が薄い。遺跡の遺存状況に関係するのであろうか。Ⅳ期前半は八王子遺跡と同様に集落の存在を積極的に認めることはできない。

両遺跡とも盛行期が朝日遺跡に並行する。とりわけ猫島遺跡はやや距離もあるが水系的には隣接する集落であり、玉作関係遺物も出土しており工房の存在が窺える点で無関係ではないだろう。このほか、志賀公園遺跡はⅡ-3期からⅢ期にかけての小規模な集落遺跡であり西志賀遺跡と深く関係すると考えられる

が、居住域と墓域が組み合っただけは独立した景観を有している。阿弥陀寺遺跡は後出的で、Ⅱ－3期の資料がおぼろげであり、Ⅲ期にならないと明確にはならない。

結局、濃尾平野においてこれまでわかっているⅡ－3期の集落遺跡は少なく、相互に関係する遺跡群の範囲がどこまであるのかは明確ではない。むしろ、遺跡が少ない中で、朝日遺跡の大規模さが浮き彫りになる。わたしはこれを「極大型」（石黒2005）と表現したのだが、よくあるように集落間関係をピラミッド構成にしようというわけではない。その地域における尺度において大きいことに意味があったのだらうと、ただそれだけのことである。

では、大規模であることの意味とは何か。思いつく言葉はいささか代わり映えしないが、不動の「拠点形成」ということであろう。多くの人口を擁しつつ多品目の生産を集約することで、生活（消費）や生産を継続する基盤を整備し、さらに強化に向けた基礎を確保する。加えて生産品目に玉生産をも取り込むことによって、生産物である玉（および玉からなる装身具）を分配することで社会的関係を押し進める。そのための「拠点形成」である。それは、濃尾平野だけでなく伊勢湾周辺地域全域を対象とした新たなネットワークの形成であろう。基盤的な道具としての磨製石斧の素材が伊勢湾西岸で産出するハイアロクラストタイトに傾斜していくのはⅡ期になってからであり、原産地の動向にやや不明な点が残るとしても、その先には磨製石斧の生産／消費と不可分である農具・土木具の生産／消費の安定がある。このことが大規模集落の形成と同時に進むネットワーク化の要因のひとつであったことは間違いないだろう（石黒1997・2000）。

こうした動きはおそらくⅡ期当初から始まっており、それが朝日遺跡ではⅡ－3期になって集落構造の再編となって現れたのであり、八王子遺跡や猫島遺跡等が朝日遺跡に同期しているのはこうした背景によると考えられる。将来的に調査が進む中で、ネットワークの主たる構成要素である「極大型」や「大型」集落の内容が判明すれば単に規模を指標とするだけではない集落カテゴリーが設定でき、また集落関係の内実にも接近できるようになるだろう。

謝辞

朝日遺跡に迫る作業はなお途上にあるが、今回このような形で朝日遺跡について考える機会を与えていただいた、野澤則幸・伊藤正人・村木 誠の諸氏に感謝したい。

<註>

1) 本文における時期区分は濃尾平野のⅥ期区分を基本とし、朝日遺跡区分および近畿区分（大和盆地編年依存）を併記する。以下は細別区分・型式との対照を示す。

Ⅰ期：前期；遠賀川系土器期；樗王式期；水神平式期、Ⅱ期：中期前葉；Ⅱ－1期・2期（朝日式1期）、Ⅱ－3期（朝日式2期）、Ⅲ期：中期中葉；Ⅲ－1期～3期（貝田町式1期）、Ⅲ－4期・5期（貝田町式2期）、Ⅳ期：中期後葉；Ⅳ－1期（貝田町式3期／凹線紋系1期）、Ⅳ－2期（凹線紋系2期）、Ⅳ－3期（凹線紋系3期・「高蔵式」）、Ⅴ期：後期前半；Ⅴ－1期（八王子古宮式・見晴台式）・Ⅴ－2期（山中式）、Ⅵ期：後期後半（廻間1式・欠山式）

なお、近畿Ⅱ様式後葉は濃尾Ⅱ－3期～Ⅲ－2期前半までの幅で接点があり、対応する近畿編年の細分が明確でないために細かな議論ができない。また、三重県宮山遺跡の資料によれば濃尾Ⅲ－5期は近畿Ⅳ様式と接点をもつ可能性があり、区分界の対応関係は厳密には確定していない。

2) 竪穴建物プランの円形と方形（方形、台形、長方形などを含む）の組み合わせは、弥生前期には未確認であり、確実にⅡ期になって現れる。濃尾平野では朝日遺跡の他には猫島遺跡、伊勢湾西岸では三重県東庄内B遺跡などがある。鈴

鹿川以南の西岸はⅢ期までは円形基調である<円系>であり、むしろ東庄内B遺跡は特異例である。濃尾平野ではⅢ期の阿弥陀寺遺跡は方形基調の<方系>であった可能性がある。

<円方混成系>は居住様式が複合する点でネットワークの結節点を構成する集落を示すものと言えよう。

- 3) 朝日遺跡ではヒスイ製勾玉、硬軟両質の緑色凝灰岩製管玉が生産されているが、玉素材だけでなく工具素材も外部からの供給に依存している。つまり、玉作については技術移転のみではだめで、玉作卓越地域との恒常的な安定した関係が維持される必要がある。広域的な関係性において他の品目とグレードが異なる所以である。

また、玉類についてその分配に関してどのような形態が考えられるのか、現状では議論が不十分である。そもそも物品の移動はそれを担う人々があってのことであり、物品を伴っての移動が可能なのはどのような条件においてなのか議論されるべきである。人々の往来は、日常的な範囲を超えて行われる場合、当然ながら安全と保護が前提である。その条件を満たすのはまず個別には各地に播居する親族の連係である。そしてつぎは、絶え間ない相互訪問による関係維持・強化である。どちらにしろ<贈与>が必須であり、玉類などの装身具や布は軽量物なので搬送に最適であろう。広域流通品目について重量物と軽量物に区分し、内容・搬送方法などから再整理する必要がある。

「遠くに離れた親類や見知らぬ人たちも、個人も集団も、共通の、それと認知できる象徴化を共有することを通じて互いに一体感を確認できるので、様式は社会的な意思伝達と協力関係に役立つ」(クリストファー・ストリッガー／クライブ・ギャンブル著(河合信和訳)1997『ネアンデルタール人とは誰か』朝日選書576)。

- 4) ここでは、玉生産技術が移転可能であったのか・なかったのかという技術的側面ではなく、社会的側面を問題にしている。玉生産そのものが技術的に高度なために模倣できなかったから周辺に玉生産が拡大しなかったとは到底考えられない。復元された工程のなかで<穿孔>は確かに熟練を要するかもしれないが、技術的には時間が解決するのであって、むしろ問題は素材・道具類の入手であろう。そこに社会性が表れていると考える。玉生産卓越地域では当たり前のことが、周辺ではけっして当たり前ではないのであって、こうしたことは縄文時代から何ら変わらないことであろう。

<專業化>を集落内部に視点を置いて眺めると、分業の進展によって技術保有や時間配分の固定を進める場合と、生産品目・技術そのものが外来であることからくる限定性によって技術拡散が制限されている場合とがあり、玉生産(や銅鐸を含む青銅器生産)は朝日遺跡において後者であった可能性が高い。他方、前者に関係するのが磨製石斧生産などの必需財生産であるが、これらについてはそれが集落存続の死命を制するものなので、技術・生産物の排他的占有は制限されていたと考えられる。破損品素材からの二次的の生産をみると濃尾平野では「中型」以上であればどこでも行われていたようであり、集落内部では<專業化>の影は薄い。むしろ集落外部との関係、つまり「中型」以下を含む集落間関係によって<專業化>の程度が測られるものとなろう。そして、木製品や骨角製品の一部分製品については<專業化>というよりは<特殊化>(技術・生産物の排他的占有)ではないかと考えられる。

わたしは<專業化>の議論は思いのほか難しいという印象をもっており、実は「布」や骨角器がこうした問題を解く重要な鍵ではないかと思っているのだが、資料的な制約も大きくお手上げ状態にある。

- 5) 木製品や骨角器の生産は素材が腐食しやすいので遺存条件に左右され、一律の議論ができない。布生産も織機が木製品なので同様である。したがって腐朽しない材質を視点にして議論する必要がある。それを踏まえて言うなら、Ⅲ期には紡錘車や削器の出土例に偏りがあり、「極大型」「大型」は別にして「中型」集落と考えられる阿弥陀寺遺跡や岡島遺跡では両者ともに出土していないし、「小型」「極小」も同様である。そもそも貝層も朝日遺跡や西志賀遺跡以外にまとまった形成事例がないのであり、遺跡間格差についてそれが有意な範囲とはどのようなものか議論を深化させる必要がある。

<参考・引用文献>

- 石黒立人 1997 「伊勢湾周辺地域における手工業生産と弥生社会をめぐるラフスケッチ」『考古学フォーラム』8
石黒立人 2000 「弥生時代の石斧生産をめぐる2相」『朝日遺跡VI』愛知県埋蔵文化財センター
石黒立人 2005 「弥生集落史の地平 その2」『研究紀要』第5号 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県教育委員会 1975 『環状2号線関係 朝日遺跡群第一次発掘調査報告』
愛知県教育委員会 1982 『朝日遺跡』I～IV
愛知県埋蔵文化財センター 1990 『朝日遺跡I』
愛知県埋蔵文化財センター 1992 『朝日遺跡II』
愛知県埋蔵文化財センター 1992 『朝日遺跡III』
愛知県埋蔵文化財センター 1993 『朝日遺跡IV』
愛知県埋蔵文化財センター 1994 『朝日遺跡V』
愛知県埋蔵文化財センター 2000 『朝日遺跡VI』
三重県教育委員会 1975 「東庄内B遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』

付論3 東日本の弥生文化／朝日遺跡

黒沢 浩（南山大学人文学部）

はじめに

朝日遺跡は、いうまでもなく伊勢湾沿岸地域のみならず、中部地域^(註1)を代表する弥生時代の集落遺跡である。本稿は、この朝日遺跡が弥生文化、特に東日本の弥生文化を理解する上で、どのような意味をもつのかを概括的に述べることを目的とする。ただし、そのためにはいくつかの留保が必要であろう。

まず、「弥生文化」「弥生時代」という枠組みである。われわれが自明としているこれらの枠組みは、明治時代以降、近代考古学の中で設定されたものであり、今後も有効な枠組み足りえるかは疑問である。

二つ目は、「東日本」という枠組みである。地質的には静岡一糸魚川構造線が、西と東を分けるラインだが、考古学を含む人文諸科学では、このラインよりもやや西側で、東と西を分ける場合が一般的である。最近では、「近畿」も「東日本」の範疇で理解すべき^(註2)という意見もあり、流動的である。また、所謂「東北」との境界に関しても問題が残る。

三つ目は、そうした状況を踏まえて、朝日遺跡の帰属に関する問題である。朝日遺跡は、「東日本」の遺跡なのか、「西日本」の遺跡なのか。しかし、実はこの問いは意味のあるものではない。われわれがどちらに含めようとも、朝日遺跡は厳然と存在する遺跡なのであり、その帰属はわれわれの認識の仕方ではない。したがって、本来的には上記のような枠組みに依らず、分析・記述をすすめるべきであろう。

そのことを示した上で、今回は朝日遺跡と所謂「東日本」の「弥生文化」についての比較である。ただし、実際には中部・関東の、それも前期・中期が中心となる点はご了承願いたい。

1 時間的枠組み

朝日遺跡が所在する濃尾平野の土器編年にかんしては、永井宏幸氏と村木誠氏がまとめられている（永井・村木2002）ので、それにしたがって、尾張をⅠ～Ⅶ様式の区分で理解する。このうちⅠ様式を前期、Ⅱ～Ⅳ様式が中期、Ⅴ～Ⅶ様式が後期として理解しておく。

これに対応する「東日本」の土器型式は必ずしも明確ではないが、大まかにⅠ期を尾張Ⅰ様式一条痕文系土器、Ⅱ期を尾張Ⅱ様式—平沢式系、Ⅲ期を尾張Ⅲ様式—池上式・中里式・小松式・栗林1式、Ⅳ期を尾張Ⅳ様式—宮ノ台式・小松式・栗林式、Ⅴ期を尾張Ⅴ～Ⅶ様式—久ヶ原式・吉田式・箱清水式ほか、として理解しておきたい。

2 集落の展開

「東日本」ではⅠ・Ⅱ期の集落遺跡は明確ではない。該期の遺跡の多くは墓地遺跡であり、居住域とされる部分にも遺構が明確ではないのが普通である。群馬県・注連引原Ⅱ遺跡や中野谷原遺跡を分析した小林青樹氏は、Ⅰ期の居住は短期的で移動性の高い小規模な集団で、Ⅱ期になって集住化の進む集団と相変わらず小規模な集団とに分化するものとしている（小林2004）。妥当な見解であろう。

関東において、定着的・集住的な集落遺跡の出現はⅢ期である。神奈川県・中里遺跡（第1図①）、埼玉

県・池上遺跡（第1図②）がその代表であり、千葉県・常代遺跡では居住域こそ未検出だが、群在する方形周溝墓群のあり方からみて（第1図③）、Ⅲ期にはそのような集落が出現していたものと考えられよう。

池上遺跡では居住域を区画する溝があり、中里遺跡では集落域を河道で区切っている。しかし、この時期に、明確な環濠集落は出現しておらず、環濠集落の出現はⅣ期を待たなければならない。

Ⅳ期の環濠集落は、関東および中部高地において、概ね同じような現れ方をする。関東の宮ノ台式の集落では、環濠集落の盛衰のプロセスがほぼ一致しており、①小規模集団の定着 ②人口の増加による居住域の拡大と環濠の掘削 ③環濠の埋没と居住域の小規模化・分散化という経過をたどる。環濠とほぼ同時期に、環濠内に大型の方形周溝墓が1基構築されることもある（第1図④）。

関東の環濠集落の特徴は、その立地と形態、そして継続期間の短さという点に集約できよう。立地の点では、多くが台地上に占地しており、形態は濠1条である。そして、継続期間はほぼ土器1型式の中で終了する。立地条件を除いて、こうした特徴は中部高地でも概ね当てはまるようだ。

以上の点は、朝日遺跡と比較した場合、その違いは明白であろう。朝日遺跡は沖積地に立地し、環濠も多条化する時期がある。また継続期間は前期から後期と、ほぼ「弥生時代」全般にわたる。立地については、高蔵遺跡など台地上の環濠集落もあるが、それらは「東日本」同様、継続期間が短期間もしくは断続的である点は興味深い。いずれにしても、朝日遺跡の環濠集落としての特徴は、中部地方や関東とは差異が大きく、むしろ近畿以西のものに近い点は指摘できるであろう。しかし、中部・関東において、集落の定着化・集住化が進むⅢ・Ⅳ期は、朝日遺跡においても集落自体が大きく転換していく時期でもある。こうした動きと「東日本」の集落の動向が連動している可能性は、考えなければならない。

2 墓制にみる弥生中期の集団構成

中部・関東のⅠ・Ⅱ期の墓制としては、再葬墓が知られている。再葬墓は、葬送のプロセスに遺体処理を含むものとして理解されるが、関東・東北南部では壺を蔵骨器として使うことが多いため、「壺棺再葬墓」と呼ばれる（第2図①）。

関東や東北南部の壺棺再葬墓では、一つの墓坑に複数の蔵骨器を埋設している場合が多い。このような場合、一遺体に一棺と考えて、複数の人が一つの墓坑に埋葬されたとみるか、一遺体を複数の棺に分けて埋葬したとみるかで、その内容は大きく異なる。しかし、現状ではどちらも証拠がなく、また、全身の骨もそろわないことから、部分骨のみの埋葬であるということになる。

石川日出志氏は再葬について、集落遺跡のあり方との兼ね合いから、通常分散して居住していた集団が、同族意識を確認するために儀式であり、再葬墓はその共同墓地である、と位置付けた（石川1999）。これについては設楽博己氏も賛同しており（設楽2004）、妥当であろう。

さて、再葬墓は何も関東に特有なものではなく、東海地方にもみられる。縄文晩期には、田原市・吉胡貝塚や伊川津貝塚で確認され、かつては関東の再葬墓も東海からの波及であるとさえ言われたことがある。

東海で、縄文晩期から弥生初期の土器棺を使用した墓地遺跡としては、麻生田大橋遺跡の事例がある。麻生田大橋例を再葬墓と呼ぶかどうかは別として、土器棺を使用して墓域を形成すると言う点では共通している。ただし、麻生田大橋例を含め、東海では一墓坑に埋設土器は1つ（合口は一棺とする）が原則である点で、関東・東北南部の再葬墓とは異なり、多数の墓が群在して、明確な墓域を形成する点も異なる。

先に述べたように、関東・東北南部の再葬墓が小規模で分散的な集団の共同墓地であるとするならば、麻生田大橋遺跡の場合には、比較的規模が大きく、定着性の高い集団を、その背景に想定すべきであろう。このように見れば、東海の土器棺墓地は、それが再葬墓であろうとなかろうと、その構成原理において関東・東北南部の再葬墓地とは異なっていると言えよう。

もちろん、東海地方では麻生田大橋ほどの大規模な墓地を形成せず、もっと小規模な場合の方が多いため、これを普遍化することは危険である。しかし、少なくとも、Ⅰ・Ⅱ期の集団構成において、東海地方の諸集団の中に、関東・東北南部の集団よりも定着性・集住性が高かったものがあつた可能性は指摘しておいて良いだろう。そして、こうした集団構成がある程度達成できていたからこそ、朝日遺跡において、Ⅱ期に方形周溝墓の導入が可能であつたと評価できるのではないだろうか。

方形周溝墓の導入は、関東ではⅢ期であり、中部高地ではさらに遅れる。関東においては池上遺跡や中里遺跡のような、定着性・集住性の高い集落の出現と軌を一にする。中部高地では、長野県・伊勢宮遺跡で木棺墓群が確認されている(第2図②)。これらは再葬もしくは改葬された可能性が高いが、さらに興味深いのは、木棺墓群を区画する溝がありそうなことである(註3)。もし、そうだとすれば、方形周溝墓という形ではないにしろ、一定の空間を墓域として占地することはあつたのだろう。

定着性・集住性の高い集団には、計画された墓域が必要である。もちろん、墓域の構成原理そのものは、別な理解と説明が必要であるが、方形周溝墓導入の背景についてはそのように理解しておきたい。

3 手工業生産について

「東日本」では、具体的な生産活動を示す証拠がほとんどない。数少ない証拠としては、長野県・松原遺跡と榎田遺跡における磨製石斧の生産・流通体制の存在が指摘されている(馬場2004)。「榎田型磨製石斧」は関東にももたらされているなど(馬場2001)、広域に流通していたようだ。また、「榎田型磨製石斧」とは別に、在地石材での石器製作も明らかにされているが、そうした手工業生産は必ずしも「拠点集落」に集約されているわけではない。このように、「東日本」において、生産と流通を論じるには、未だ資料が断片的に過ぎるのが現状である。

朝日遺跡においては、石器・木器・玉の生産は確実であり、手工業生産がこうした拠点集落に集約されている状況を確認することができる。さらに、金属器生産については、今次調査において出土した銅鐸鑄型によってその蓋然性は高まった。

しかし、青銅器鑄型の出土例が多い北部九州では、鑄型だけでなく青銅器の鑄造関連遺物(例えば鞆の羽口や埴塹など)がなければ鑄造遺跡とは認められない。こうした点を考えれば、朝日遺跡における中期(Ⅱ期)の銅鐸鑄造は、未だ蓋然性の段階に過ぎないとしておきたい。むしろ、今次調査における銅鐸鑄型と玉作り関連遺物との関係は重視されるべきかもしれない。北陸では、福井県・加戸下屋敷遺跡で菱環鈕式とされる銅鐸鑄型が出土しているし、福井県・井向遺跡では菱環鈕式を含む古式の銅鐸がまとまっていることから、銅鐸の成立に関して北陸もしくは山陰まで含めた日本海側の可能性を考慮すべきであろう。その意味で、北陸が主体となる玉作り関連資料との関係が重要なのである。

朝日遺跡では、中期段階での金属器生産の痕跡はほとんどみられない。しかし、後期以降、「東日本」に散発的にもたらされる青銅製品の製作地を考えたとき、やはり、濃尾平野はその第一候補である。その中

には、三遠式銅鐸も当然含まれてくる^(註4) のであり、この段階では、朝日遺跡は東の方を向いている。

おわりに

「東日本」と朝日遺跡について、ほとんど思いつきを書き連ねてしまった。

今回の銅鐸鑄型片の出土を契機として、「東日本」における青銅器のあり方について思いをめぐらしはじめたところであり、銅鐸鑄型にふれた部分はその考察の途中の一断片である。

「東日本」からみたとき、朝日遺跡は非常に「西日本」的な集落遺跡であるといえる。それは立地・継続期間、そして遺跡の構成要素のどれをとっても、以東の遺跡とは違う。しかも、興味深いのは、朝日遺跡を含む伊勢湾周辺地域が、中期まではどちらかといえば西——直接的には近畿——との関連が強いように思えるのに対し、後期以降には東との関係を強めるように見えることだ。

おそらく、その辺りに「西」でも「東」でもない、朝日遺跡を含む伊勢湾地域の遺跡群の動向が垣間見られるのではないか、と思う。

<註>

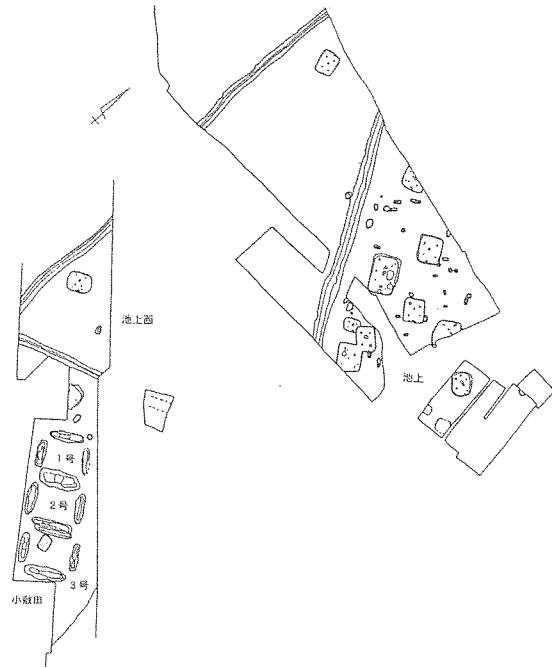
- 1) 「中部地域」という言い方には、静岡・愛知・三重・岐阜といった東海4県と、長野・山梨といった甲信地域、そして新潟・富山・石川・福井の北陸地域をまとめている。
- 2) 2004年の大学合同シンポジウム（於明治大学）での小林青樹氏の発言。
- 3) ただし、報告書には溝や土坑に関する記載がなく、時期の確定はできない。ここでは木棺墓群との位置関係のみから判断しているので、ここでの想定が誤っている場合は、当然あり得る。
- 4) 朝日遺跡では1988年の調査で、「土製鑄型」の可能性のある焼けた粘土塊が出土している（石黒・野口1990）。これを積極的に評価すれば、鑄造関連遺物ということになるかもしれないが、現状ではそこまでの判断はできない。

<参考文献>（個別の発掘調査報告書は割愛した）

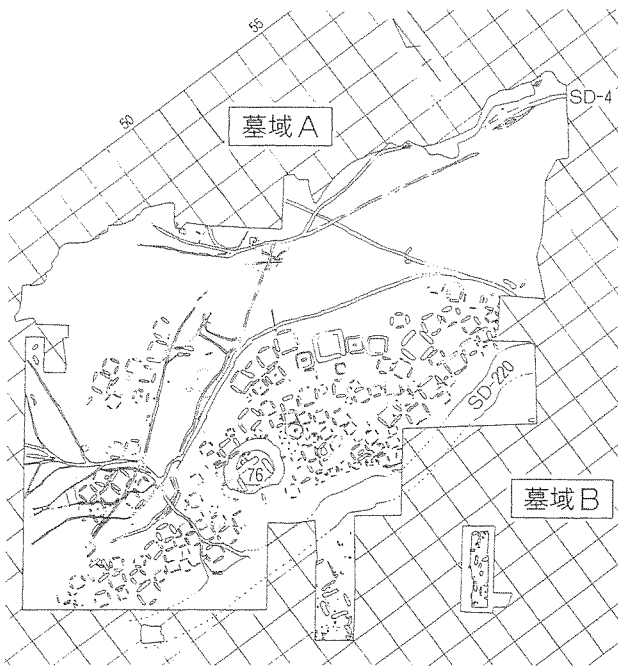
- 石川日出志 1999 「東日本弥生墓制の特質」『新弥生紀行』朝日新聞社
- 石黒立人 1996 「朝日遺跡の変遷過程を描くにあたっての二、三の問題」『(財)愛知県埋蔵文化財センター年報 平成7年度』愛知県埋蔵文化財センター
- 石黒立人・野口哲也 1990 「朝日遺跡出土の金属器鑄造関連遺物について」『(財)愛知県埋蔵文化財センター年報 平成元年度』愛知県埋蔵文化財センター
- 伊丹 徹 2006 「弥生時代の「墓」という場」『墓場の考古学』第13回東海考古学フォーラム
- 黒沢 浩 2005 「南関東における弥生時代後期土器群の動向」『駿台史学』第124号 駿台史学会
- 小林青樹 2004 「農耕開始期の居住システムと住居構造」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第12集 帝京大学山梨文化財研究所
- 設楽博己 2004 「再葬の背景」『国立歴史民俗博物館研究報告』第112集 国立歴史民俗博物館
- 戸田哲也 2000 「中里遺跡の調査」『平成12年小田原市遺跡調査発表会 中里遺跡講演会 発表要旨』小田原市教育委員会
- 永井宏幸・村木 誠 2002 「尾張地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社
- 馬場伸一郎 2001 「南関東弥生中期の地域社会（上）（下）」『古代文化』第53巻第5号・第6号 財団法人古代学協会
- 馬場伸一郎 2004 「弥生時代長野盆地における榎田型磨製石斧の生産と流通」『駿台史学』第120号 駿台史学会
- 山岸良二・甲斐博幸・諸墨知義 1996 「千葉県の方形周溝墓」『関東の方形周溝墓』同成社



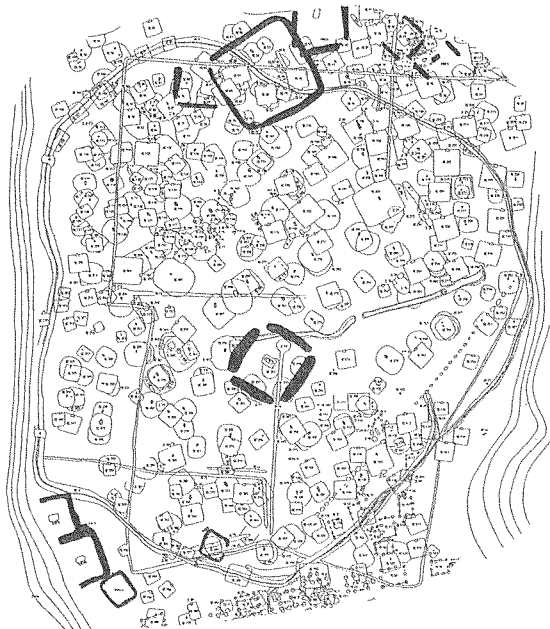
①神奈川県・中里遺跡 (戸田2000)



②埼玉県・池上遺跡、小敷田遺跡
(伊丹2006を一部改変)

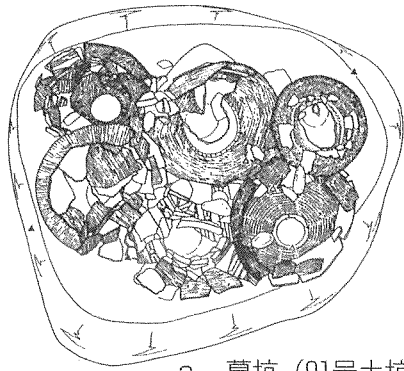


③千葉県・常代遺跡 (報告書より)

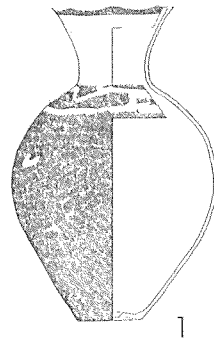


④千葉県・大崎台遺跡
(山岸・甲斐・諸墨1996)

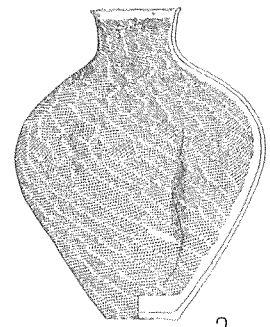
第1図 集落遺跡および関連資料 (スケール不同)



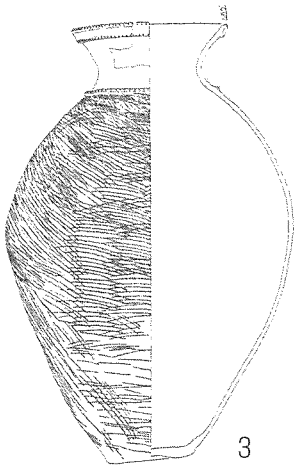
a. 墓坑 (91号土坑)



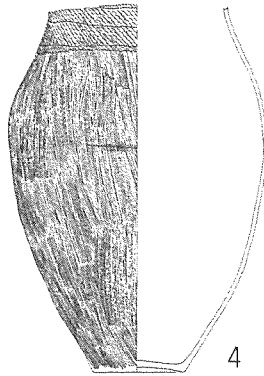
1



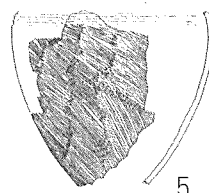
2



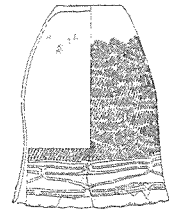
3



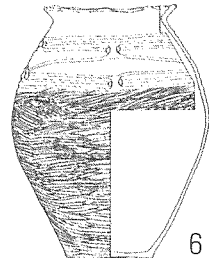
4



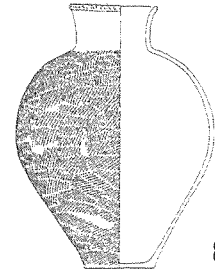
5



7



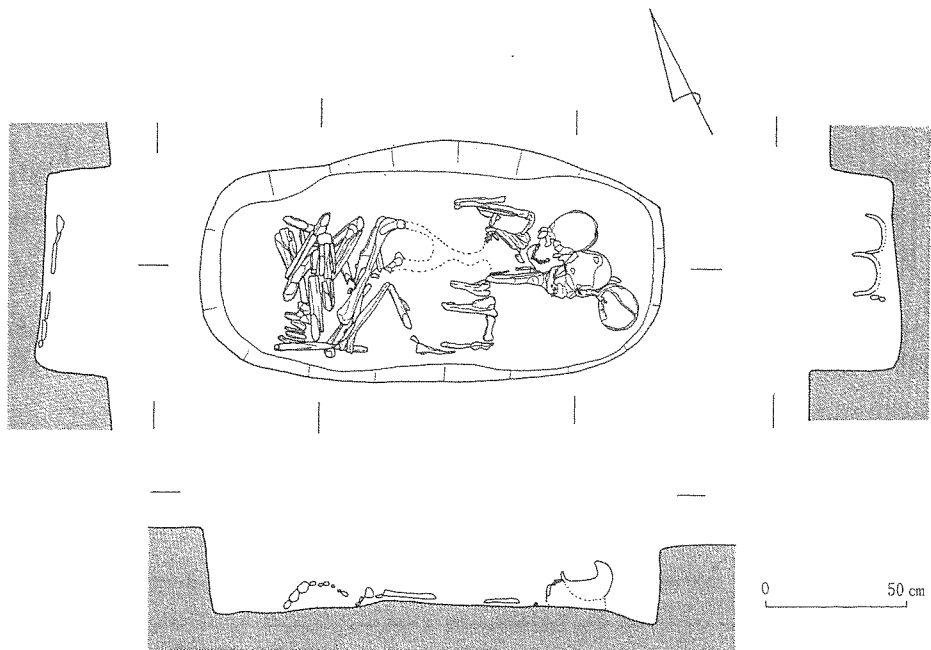
6



8

b. 出土土器

①新潟県・村尻遺跡の壺棺再葬墓 (報告書より)



②長野県・伊勢宮遺跡の木棺墓 (5号 報告書より)

第2図 壺棺再葬墓・木棺墓

付論 4 朝日遺跡出土土器における貝施紋具・調整具の検討

永井宏幸[※]・深澤芳樹[※]

※愛知県埋蔵文化財センター ※※奈良文化財研究所

序言 名古屋市教育委員会が2004年度に調査した朝日遺跡で、石製銅鐸鑄型が出土した。鑄型は、3 cm前後の小片1点ではあるが、紋様がきわめて鮮明に残っていて、しかもこの紋様部分が黒変していた。この鑄型片は、まず調査担当者の伊藤正人氏と野澤則幸氏が、このような小片をも見逃さないかにかに精緻な調査を朝日遺跡において実行していたかを明らかにする。とともに銅鐸鑄型が東海地方で初めて出土しそれが朝日遺跡であったという事実に加え、その鑄型に実際に銅鐸を鑄造した痕跡があったという事実がことの重大さを如実に示すのである。

2004年暮れに石黒立人氏と同遺跡を訪ねて、その鑄型を拝見する機会にめぐまれた。その場ですぐ難波洋三氏に電話連絡し、鑄型の略図をファックスし、どの型式に該当するのか教示をこうた。そしてその鑄型が菱環鈕1式、すなわち最古の銅鐸の特徴をそなえていることを知った。この鑄型に関しては、難波氏や高妻洋成氏の別稿に詳しい。

出土した場所が、所属時期を絞り込む上で、非常に幸運だった。石黒氏によれば、鑄型出土地は、はじめのうち生活域で後に墓域に変わった地区であった。朝日遺跡のような大集落は、いくつもの時期の遺構が重複してなかなか時期を特定しがたいのが一般だが、この鑄型は生産用具だから、その鑄型は生活域当時の所産でなければならない。しかもこの鑄型は土坑から出土したので、土器を詳細に検討すれば、所属時期をさらに細かく絞り込める公算が大きいのである。これはとりもなおさず、銅鐸鑄造の開始時期に迫ることにつながるのである。

生活域であった時期、東海地方では貝殻を施紋具・調整具にした土器がめだつ。私は、近畿に在住していて、このような土器を見る機会が少ない。そこでこの土器に詳しい永井宏幸さんに、貝種の同定作業をいちからしてもらおうことにした。こうして本稿はなった。(深澤)

条痕紋原体の研究史 条痕紋系土器の原体に関する研究は、実は少ない。

条痕紋系土器の原体について記載のある文献は、山内清男氏の吉胡貝塚第二トレンチ土器概観の項(山内1952)が初見であろう。山内氏は大型のハイガイの腹縁による条痕、zigzag(縦位羽状条痕のことか)の紋様と口縁の太い隆帯といった特徴から「縄文式直後の土器」を説明した。図版と本文から判断して条痕紋系土器のうち水神平式に関する記載であろう。だが残念ながらハイガイなのか記載していない。

続いて、中村友博氏による原体研究がある(中村1982・1987)。中村氏は「放射肋をもつ貝殻」についていくつかの実験と観察を重ねるなかで、櫛状工具との相違点を指摘した。つまり断面形と粘土のはみだし方に注意したのである。貝種の特定までにはいたらないが、「三河地方の貝塚に多いハイガイ」を例としてあげている(中村1987)。

最近では条痕文土器研究会による取り組みがある。そのなかで前田清彦氏は麻生田大橋遺跡出土資料から、条痕紋系土器原体の5分類を提示した(前田2003)。このうちⅠ類を二枚貝腹縁とし、条溝と条間の幅の違

いから当時採取可能であった二枚貝を比較検討した。その結果、条溝・条間の幅がほぼ同じで、条溝が比較的深いもの（I類B）にハイガイ、条溝に比し条間の幅がやや狭く、条溝が比較的深いもの（I類A）にサルボウ・サトウガイ・アカガイをあてた。ただし前田氏の研究は本人が断っているように、「実験サンプル」であって見通しを示したものだ。 （永井）

原体の同定作業 まず永井と村木誠氏が、土器を詳細に観察して、摩滅が少なく、貝殻の明瞭な圧痕をとどめた土器を選別した。この土器の写真撮影を牛嶋茂氏がスタジオ撮影した。

次に、土器の貝圧痕部を詳細に観察するために、印象材を注入して抜き取る。そして土器に残されたネガ圧痕をポジに置き換えて、観察することにした。それは比較検討を容易にし、かつ詳細写真を撮影しやすくするためである。ポジ変換を、今回はシリコーン型抜き法によった。この具体的なやり方は、山崎純男氏、比佐陽一郎氏、片多雅樹氏にご教示いただいた。そして実際のシリコーン型抜きは、高妻氏、降旗順子氏、脇谷草一郎氏が実行した。このシリコーン型も、牛嶋氏にスタジオ撮影してもらった。

それからこのシリコーン型と土器を貝と比較することになる。貝の比較資料は、七田忠昭氏にお願いし有吉敏和氏から有明海産のハイガイとサルボウを、池田研氏から大阪城跡出土のハイガイとサルボウ、アカガイを、松井章氏から名古屋市大曲輪貝塚出土のハイガイを、近藤敏氏にお願いし忍澤成視氏から石川県かほく市木津採集のサルボウ、それに千葉県天津小湊・浜荻採集のサトウガイを、それぞれ提供していただいた。これに永井が朝日遺跡出土のハイガイを加えた。

シリコーン型は、光学顕微鏡で観察と撮影を、降旗氏に行ってもらった。さらに電子顕微鏡による写真撮影を、比佐氏、片多氏に行っていた。シリコーン表面の光沢に対して、電子顕微鏡による写真撮影はきわめて有効であった。これらの画像資料も比較に際して、活用した。

土器圧痕と貝について比較検討を行うに際して、松岡敬二氏にご教示いただいた。

最後に、特定した貝を粘土に圧して、同じ圧痕を形成するか、確認した。これも、牛嶋氏にスタジオ撮影してもらった。

これらの手続きのうち、貝資料の収集、シリコーン型抜きから同定する際に、比較材料とし、かつ証拠ともなる写真撮影にかかわる部分を深澤が担当し、土器の選定、貝種の同定作業の部分を永井が担当した。 （深澤）

原体貝種の同定 本稿では、朝日遺跡出土の条痕紋系土器を2点取り上げる。いずれも貝殻背面押圧とされる圧痕を施した土器である。これら2点の条痕紋系土器に使用された圧痕の原体を特定するため3つの視点から同定を進める。

まず、土器の特徴。土器の器形と紋様、そして施紋など製作手法といった通常我々が土器資料から抽出する情報を提示する。

次に、圧痕の観察。シリコーン型抜きによるサンプルの作成と写真記録からの検討。光学および電子顕微鏡による観察・撮影した試料を加えて検討する。

最後に、貝殻との比較。現生および各遺跡出土の貝殻との比較検討。貝殻の特徴と土器の圧痕部分について、類似・相違点を抽出する。以上の手続きを踏まえて、圧痕の貝種同定を導き出す。

県調査資料 [土器の特徴] 県調査資料は条痕紋系壺の口縁部。広口壺の口縁部で、口縁端部が内側に屈曲する、受口状となる器形。口縁端部両端ともに刻み目を施す。口縁部が屈曲する部分に横方向の条線、その上に棒状浮紋を貼付ける。この浮紋の上下両端に圧痕を施す。受口の下端には幅1cm前後の突帯が貼り付き、縦方向の指腹による連続押圧（刻み目）を行い、上端をさらに細かいヘラ刻みで仕上げる。頸部に向かってこれら口縁部の装飾を施す前に、やや右斜め方向の条痕が全周する。これらの特徴から朝日式に比定する。

[圧痕の観察] 圧痕は棒状浮紋の両端にあるが、下端は摩耗が進み観察できない。したがって、良好な状態を保つ上端を中心に見ていこう。

平面観は上位に向かって集束する先が尖らない楕円形になっていて、オニギリ形に見える。圧痕内の粘土のはみ出しが向かって右方向に傾く。つまり、原体を押し当てる時、向かって左から右方向へ力点が移動している。続いて、圧痕内部の観察に移る。縦方向の条線は全体的に弧線を描き、その間隔は上端より下端の方が拡がり、扇形となる。縦方向の弧線を凸部、間を凹部とすると、凹部には横方向の突起が縦列している。突起の間隔も上端より下端の方が間隔が拡がる。

名古屋市調査資料 [土器の特徴] 名古屋市調査資料（本書図5-10、124）は条痕紋系壺の胴部片である。圧痕の位置は、ちょうど頸胴部界の幅1cm前後の低位突帯上である。破片から推定できる施紋手順は以下に示す通り。まず、頸胴部界から胴部にかけて左斜め上がりの条痕を施す。次に突帯を付ける。さらに、突帯の上下を沈線で区画し、その後突帯をヨコナデにより調整する。最終段階で圧痕を施している。これらの特徴は、朝日式に該当する。

[圧痕の観察] 平面観は上位に向かって集束する先が尖らない三角形。圧痕は下方から少し押し上げるように付けている。これは突帯上に観察できる粘土のはみ出しでわかる。続いて、圧痕の内部を観察してみよう。原体を引きずらないで、静止した状態で押圧している。つまり、圧痕内部の様子が原体をそのまま反映している。縦方向の弧状線が連なって、下方へ向かって扇状に拡がる。そしてこの縦線のうち、凹部分には横方向の突起が等間隔に並ぶ。一方、この突起を縦方向の弧線単位でみると、下位になるほど間隔が広がっていることがわかる。（永井）

貝殻との比較 今回取り上げた2点の土器片にある圧痕は、従来から二枚貝殻頂部による圧痕として報告されている特徴をそなえている。従来条痕紋系土器の貝殻原体としては、フネガイ科のハイガイ・サルボウなど貝殻腹縁の放射肋に特徴がある二枚貝を比定してきた。

ここで、もう一度土器資料の圧痕観察を整理しておこう。外形は隅丸三角形のオニギリ形、圧痕内部には縦方向の条線（凸部）と条間（凹部）があり、条間には横方向の突起が縦列する。そして条線は左下に向かって拡がる。これらの特徴は圧痕に基づいた記述のため、原体に対してネガ状態である。つまり、貝殻と比較するには、型取りをしてポジにした方が分かりやすい。掲載した写真3は、土器資料2点と現生のハイガイである。ここからは写真を使って説明していく。

ハイガイの特徴は、波部忠重（波部1977）によると、「殻は中型。厚質堅固、やや不等殻、長方形から球形で、よく膨らむ。殻表の放射肋は数が少なく15~23。肋上に結節がある。」

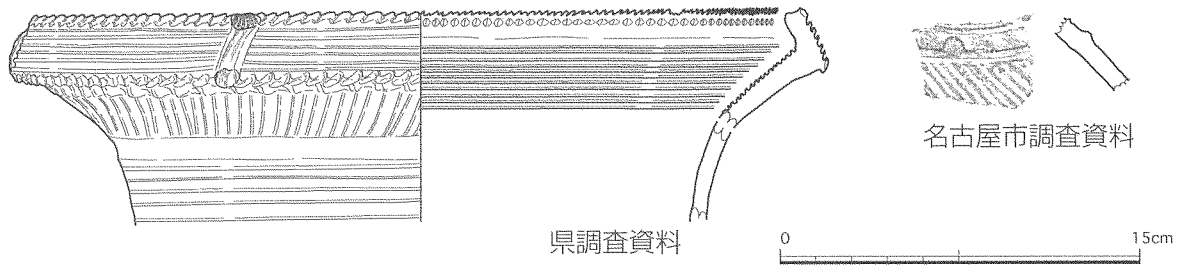


図1 観察資料実測図 S = 1 : 3

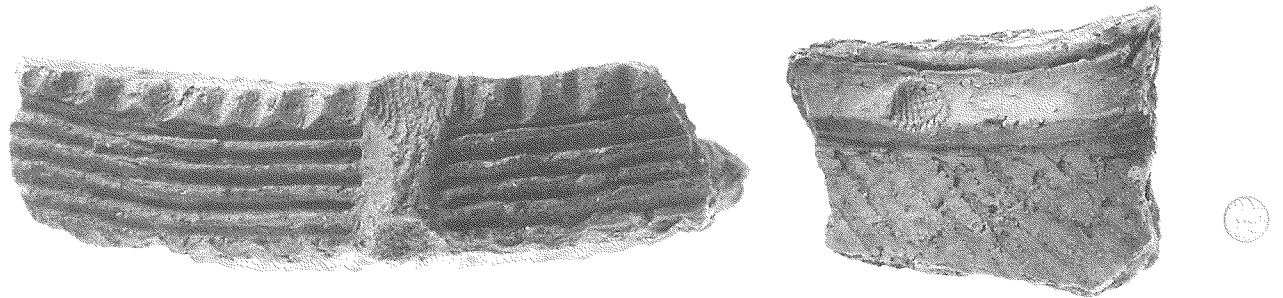


写真1 観察資料写真

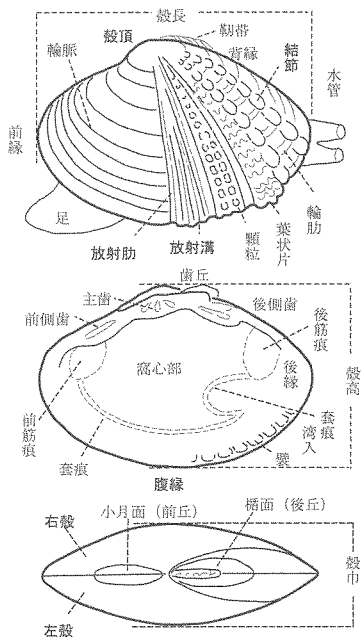


写真2 実験試料に用いたハイガイ現生試料 (有明海産出)

図2 二枚貝網部位等名称模式図 (渡部1977を引用一部改変)

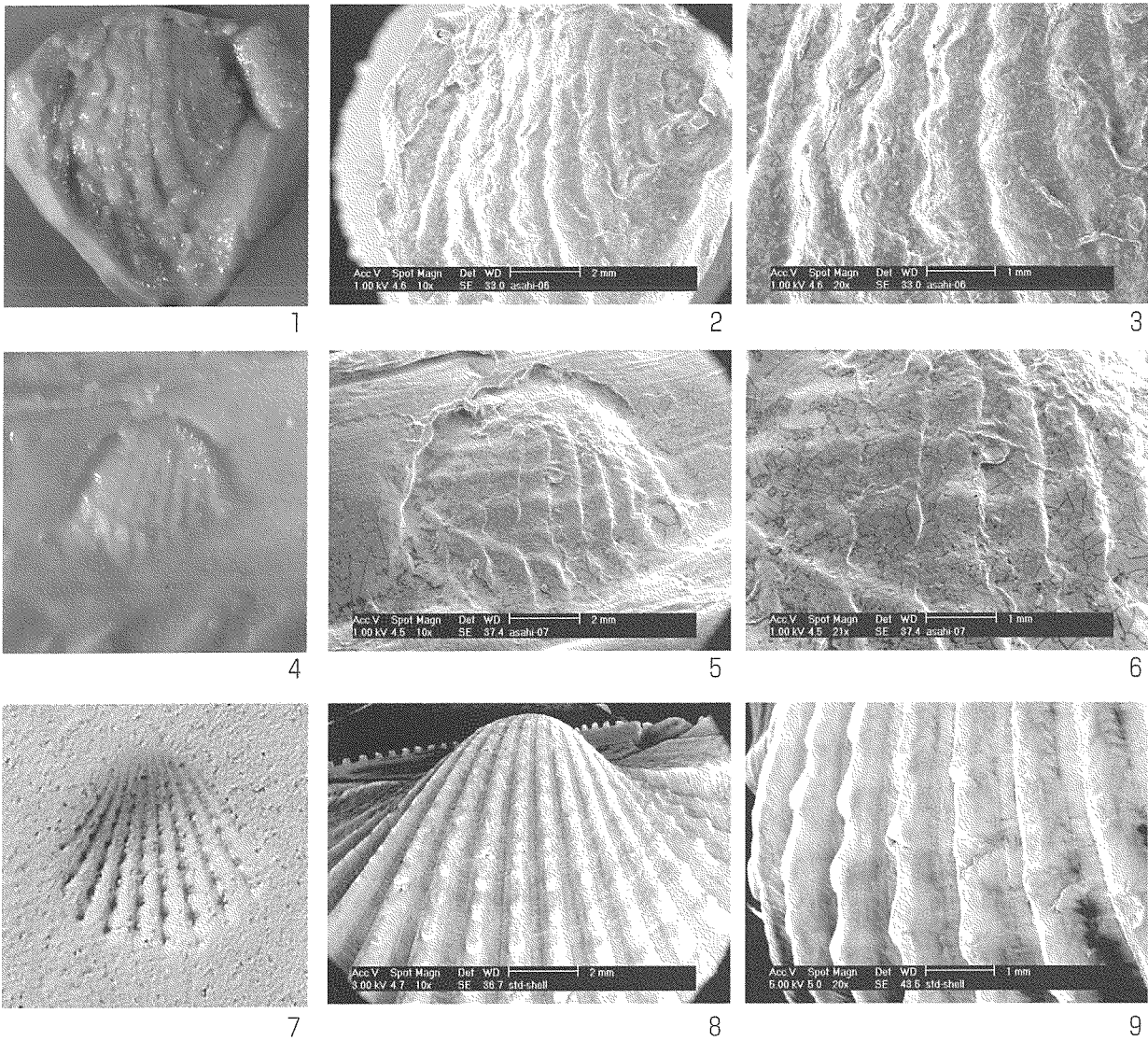


写真3 光学写真および電子顕微鏡写真

1・4・7は光学写真、他は電子顕微鏡写真

上段は県調査資料、中段は名古屋市調査資料、下段は現生標本試料

1～6はシリコン型抜き試料、7は現生標本を用いた粘土実験試料

最初に貝殻の貝頂に注目してみよう。肋条が殻頂に向かって集束していることがわかる。そして放射肋の拡がりも左下に向かってるので左殻。殻頂の外形は圧痕と同様に三角形あるいはオニギリ形である。圧痕の条線は右下に拡がる。つまり、貝殻とすれば右殻。貝頂を圧痕した実験試料(写真3-7)からも同様の外形が見て取れる。

次に注目したいのは、「肋上の結節」である。肋上の結節が明瞭な二枚貝はハイガイの特徴である。電子顕微鏡の比較写真を参考にすると、圧痕の条間に見られる横方向の突起と特徴が肋上の結節と酷似する。一方、今回比較検討したフネガイ科のサルボウ、サトウガイ、アカガイを観察する限り、「肋上の結節」はハイガイのみであった。

まとめると、圧痕の外形および条線の集束から判断すると右殻の殻頂を用いている。そして条間に刻まれた横方向の突起が肋上の結節を示す。肋上の結節が貝頂に認められる貝殻は、フネガイ科のうち、ハイ

ガイ属ハイガイのみである。以上2点の観察結果から、今回提示した条痕紋系壺2点の圧痕原体は、フネガイ科ハイガイを用いたと判断できる。(永井)

結語 今回の同定作業に用いた条痕紋系土器は、貝殻を押し、引き、削るなど施紋具や調整具とした土器である。条痕紋系土器の原体には、中村氏らの研究で貝殻以外の素材も指摘されている(中村2000)。一個体に対して、これら複数にわたる原体を巧みに用いて表現する類例もある。つまり、原体を使い分けて条痕とするのである。今回同定したハイガイをはじめ二枚貝だけでもおそらく数種類の貝殻を使用しているであろう。今後他の資料を用いて比較検討していく予定である。その第一歩として、生物学者にご助言をいただきながら検討した。さらに、土器資料を微細な観点から追求する上で、今後印象材を用いた顕微鏡観察は不可欠な検討方法となるであろう。(永井)

また低倍率でも、櫛描紋において草本の単子葉類を選別できることが明らかになっている(深澤2004)。これは原体レベルで木本をも分離可能なことを示している。これに貝種の同定の研究を組み合わせれば、一つの土器において製作者がどんな素材の工具をまわりに置いて作業していたか、そしてどのようにそれを用いたか明らかにできるはずである。これは、地域や時期を詳細に検討するに際して、きわめて有効に働くはずである。さらに生育や生息といった生態の地理的偏りから、その工具の入手をめぐる周辺地への働きかけの程度も推定できるはずである。

このような検討を行うためにも、まず確実な同定作業が求められている。(深澤)

本稿をなすにあたっては、網谷克彦、有吉敏和、石黒立人、池田研、泉拓良、伊藤正人、芋本隆裕、牛嶋茂、忍澤成視、片多雅樹、高妻洋成、川添和暁、瀬瀬茂、近藤敏、七田忠昭、菅波正人、中沢道彦、野澤則幸、林正憲、原田幹、比佐陽一郎、降旗順子、松岡敬二、村木誠、森本若葉、山崎純男、脇谷草一郎、渡辺丈彦の各氏に、比較資料、資料化の方法、撮影法など、全般におよぶご教示、ご援助をいただいた。わたくしたちは、以上の方々に対して、あらためて心から深く感謝する。(2006年1月)

<文献>

- 中村友博 1982 「土器様式変化の一研究」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会 平凡社
中村友博 1987 「水神平式土器」『弥生文化の研究』4 雄山閣
中村友博 2000 「製陶具としての連体」『利根川』21 利根川同人会
波部忠重 1977 『日本産軟体動物分類学 二枚貝綱／掘足綱』北隆館
深澤芳樹 2004 「草本を用いた櫛状工具」『下植野南遺跡II』(京都府遺跡調査報告書 第35冊) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
前田清彦 2003 「条痕文系土器の原体と調整・施文の手順」『条痕文系土器の原体をめぐる』三河考古学談話会
山内清男 1952 「第二トレンチ」『吉胡貝塚』文化財保護委員会 吉川弘文館

付論5 石製銅鐸鑄型の調査と保存処理

高妻洋成・降幡順子（奈良文化財研究所）

1 はじめに

朝日遺跡より出土した石製銅鐸鑄型は、最古段階の銅鐸生産が東海地方においてもおこなわれていた可能性を示すものである。今回発見された石製鑄型は比較的保存状態が良好であったが、石製鑄型にはいくつかの亀裂が認められ、その保管や展示、移動などの際に安全性が危惧されたため、保存処理をおこなうこととなった。保存処理に際しては、表面の詳細な観察、石材の主要な鉱物組成、亀裂などの内部状態、鑄造時の金属が残存しているか否かについて詳細な分析調査をおこなった。また、これらの情報を基にした保存処理を実施した。本稿では、保存科学的調査に関する結果について報告をおこなう。

2 保存処理に際した分析調査

2-1 鑄型表面の蛍光X線分析

鑄型表面に鑄造時の金属が残存しているかどうかを調査するため、蛍光X線分析をおこなった。測定に用いた装置は堀場製作所製X線分析顕微鏡XGT-2000Wである。測定条件は管電圧50kV、管電流1.0mA、ターゲットにロジウム(Rh)、コリメータ径100 μ m、測定時間200秒とした。

鑄型表面の10箇所を分析した結果、すべての分析箇所において同様のスペクトルを得ることができた。図1にその一例を示す。ケイ素(Si)および鉄(Fe)を強く検出、次いでアルミニウム(Al)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)およびチタン(Ti)を検出し、僅かにマンガン(Mn)、ルビジウム(Rb)、ジルコニウム(Zr)を検出した。これらの元素は本来、岩石に含まれている元素である。鑄造に用いられたと想定される合金

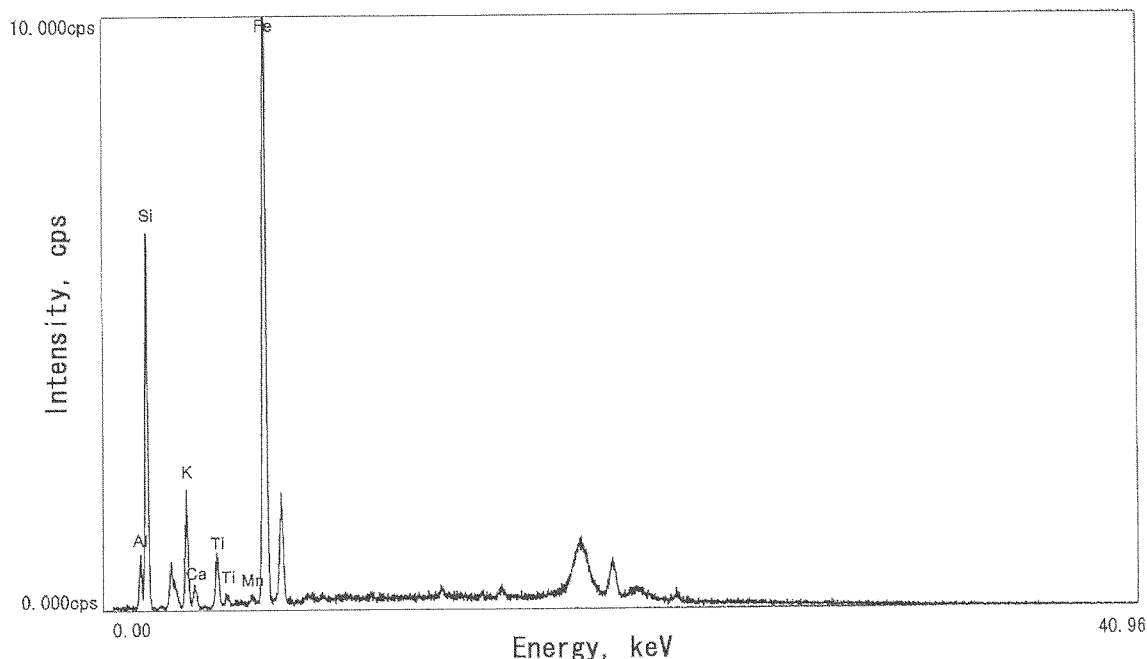


図1 鑄型表面の蛍光X線スペクトル

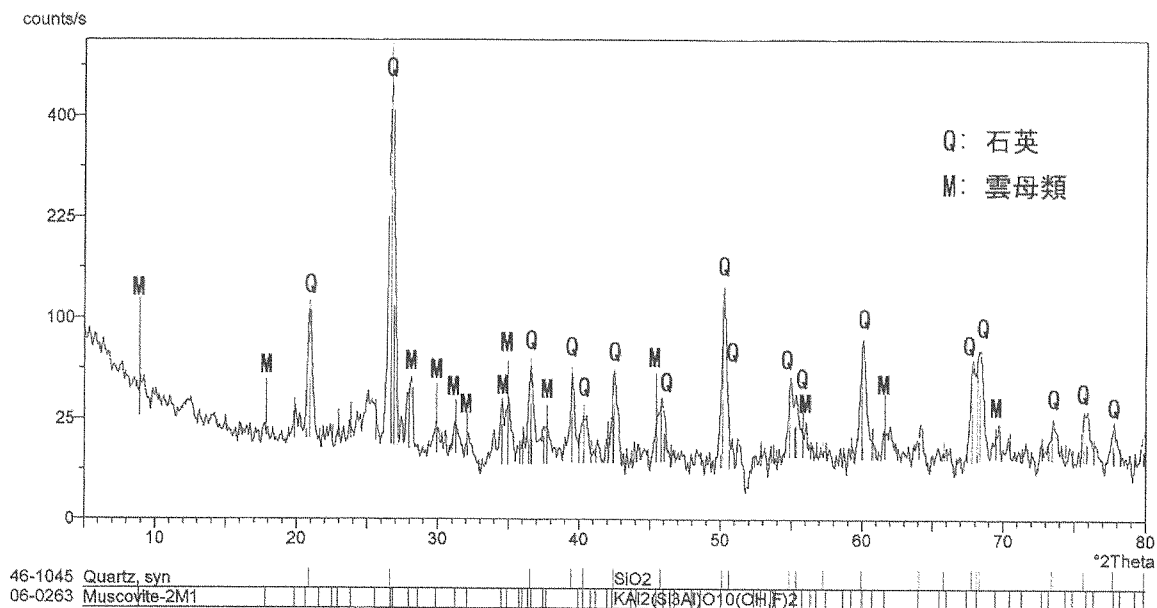


図2 鋳型表面のX線回折スペクトル

の主要な元素としては銅(Cu)、スズ(Sn)、鉛(Pb)などが考えられるが、今回の分析ではこれらの元素は検出限界以下であった。したがって、鋳型には鋳造時の金属の痕跡は残存していないといえる。

2-2 鋳型表面のX線回折分析

石材を構成する主要な鉱物に関する情報を得るため、鋳型表面を非破壊型X線回折分析装置で測定をおこなった。測定に用いた装置はPANalytical製X線回折分析装置X'pert-MPDである。測定条件は管電圧40kV、管電流40mA、ターゲットに銅(Cu)、走査速度 $2^\circ/\text{分}$ 、ステップ幅 0.02° とした。

X線回折分析の結果、主な鉱物として石英と雲母を検出した以外に、長石族らしきピークも考えられたが同定するには至らなかった。特異的な鉱物は検出されなかった。なお、岩石の同定には、薄片プレパラートを作製して偏光顕微鏡による観察が必要になる。

2-3 鋳型内部の状態調査

鋳型内部の亀裂や空洞などに関する内部構造を調査するため、X線コンピュータドラジオグラフィ(X-CR)およびX線コンピュータドトモグラフィ(X-CT)をおこなった。

X-CRでは、富士写真フィルム社製 μ FX-100によりイメージングプレート(BAS-MS2025)を用いて透過撮影をおこなった。撮影条件は管電圧60kV、管電流 $60\mu\text{A}$ 、X線照射時間は60秒あるいは120秒

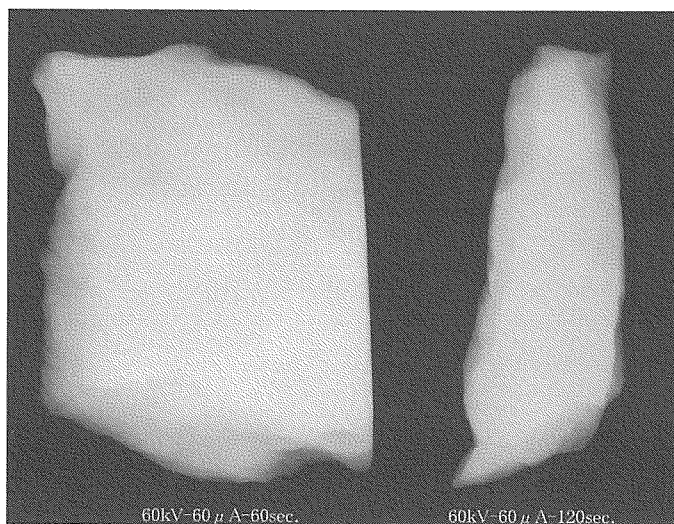
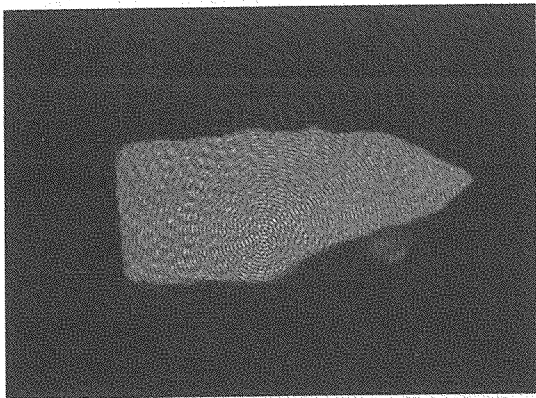
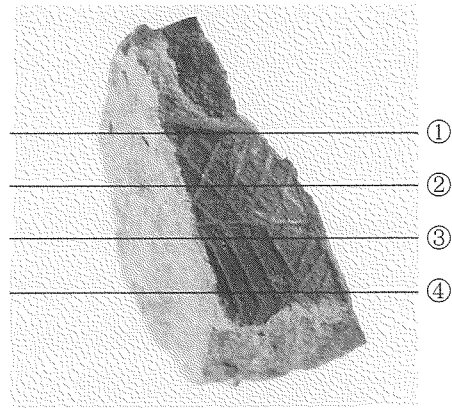
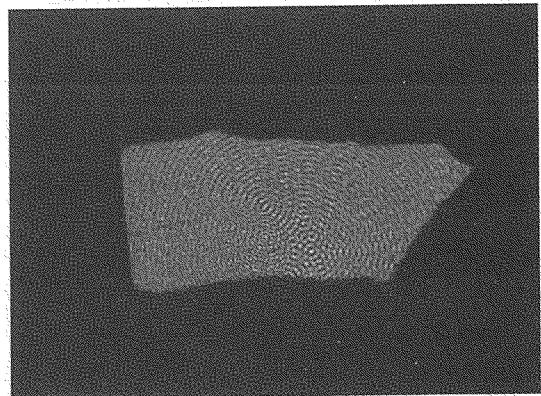


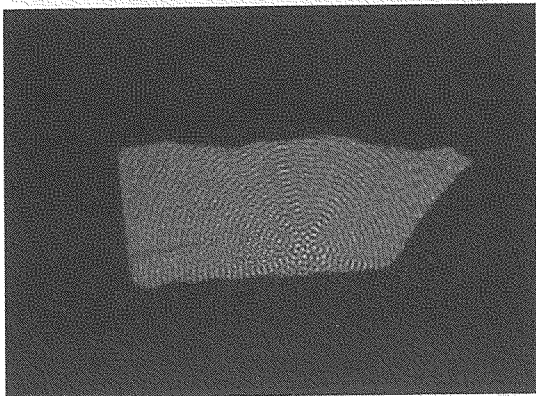
図3 石製鋳型のXCR画像



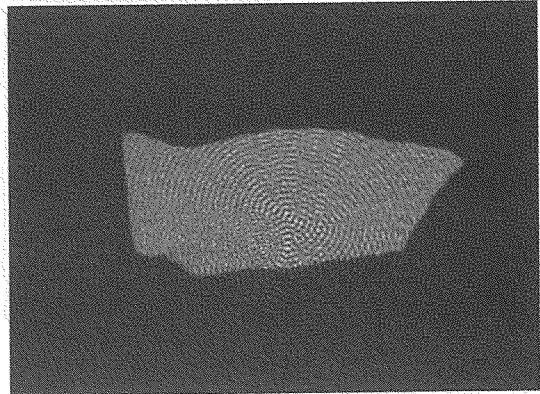
①



②



③



④

図4 石製鋳型のXCT画像

であった。X線照射時間の違いは撮影方向によって試料厚みが異なることによるものである。撮影後、イメージングプレートを富士写真フィルム社製BAS5000でスキャンニングし、デジタル画像を取得した。

X-CTは、日立製作所製高エネルギーX線CTスキャナー HiXCT-1Mを用いて、図4に示した位置の二次元断面スライス画像を撮影した。

X-CR画像を図3に示す。石製鑄型の紋様面において確認できる亀裂は内部にまで達していることが明らかである。X-CT画像(図4)からは、この亀裂が約10mmほど内部に達していることが明らかとなった。また、石製鑄型断面において画像のコントラストの差、すなわちCT値に明瞭な差が認められないことから、密度はほぼ均質であると考えられる。

2-4 石製鑄型表面の共焦点レーザー走査顕微鏡による観察

石製鑄型表面に施された文様の線刻部分における表面の凹凸を詳細に観察するために共焦点レーザー走査顕微鏡を用いて観察をおこなった。観察に用いた装置は株式会社オリンパス社製共焦点レーザー走査顕微鏡OLS1000である。測定箇所は、斜格子文部分、細い横線部分、綾杉文部分の3箇所である。

図5から7は各観察部分の観察領域、等高線メッシュ図、等高線図および断面計測図である。断面計測は観察領域において白線で示した部分でおこなった。

線刻の深さは約0.1~0.2mmで、1本の線刻においても変動がある。綾杉文の等高線メッシュ図および等高線図をみると、線刻の底部に広がりがあることがわかる。

今回測定した範囲は、各部分について3.5×2.6mmと限られていたが、全面的に計測をおこなうことにより、鑄型の文様形状についての詳細な計測値を得ることが可能である。これらのデータは、今後、この石製鑄型を用いて鑄造されたと思われる銅鐸との照合において客観的なデータを提示するものと期待される。

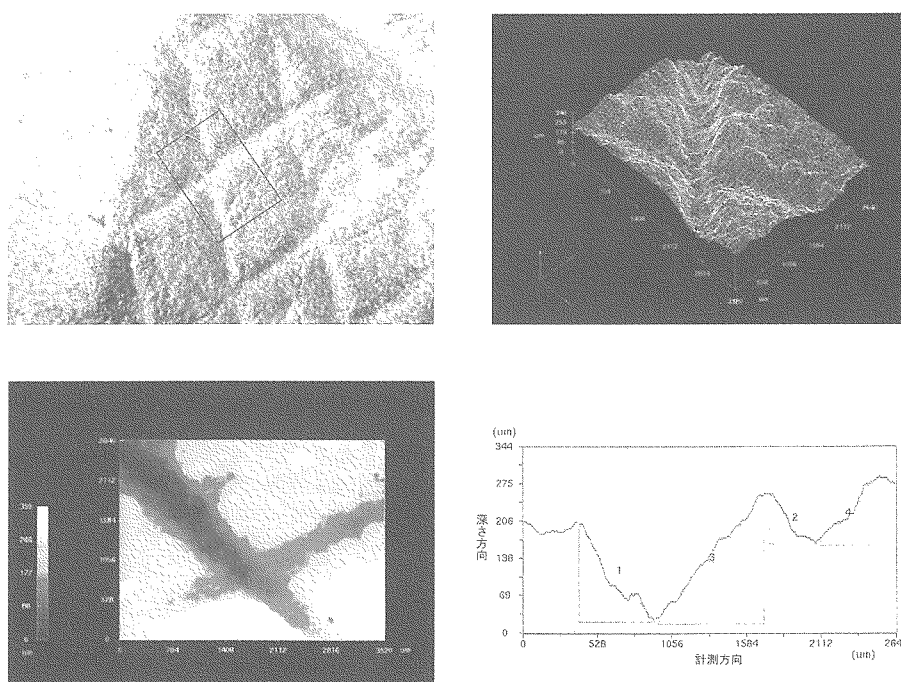


図5 石製鑄型表面の共焦点レーザー顕微鏡観察(斜格子文)

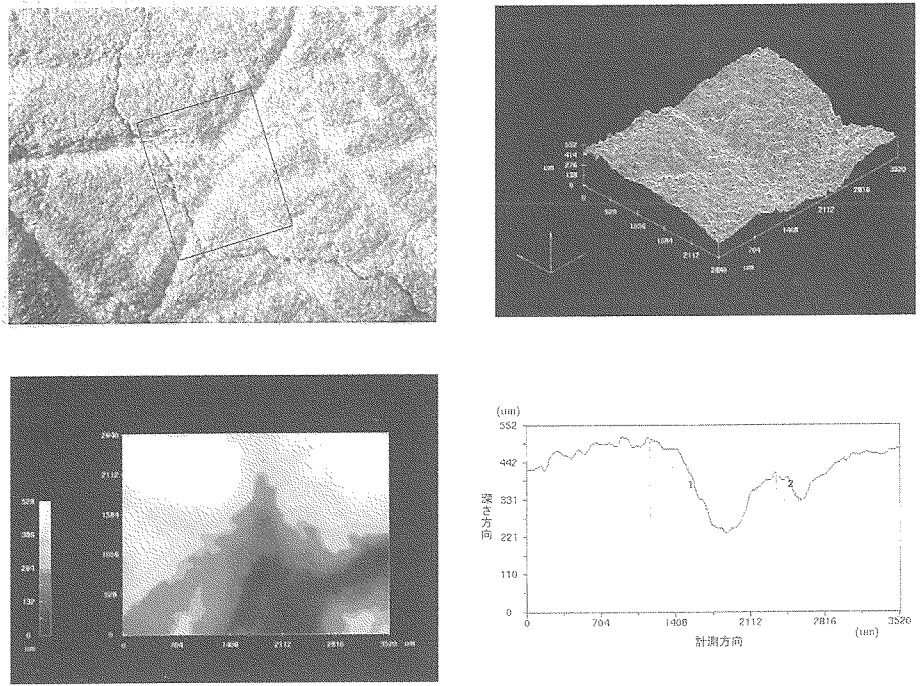


図6 石製鋳型表面の共焦点レーザー顕微鏡観察（細い横線部分）

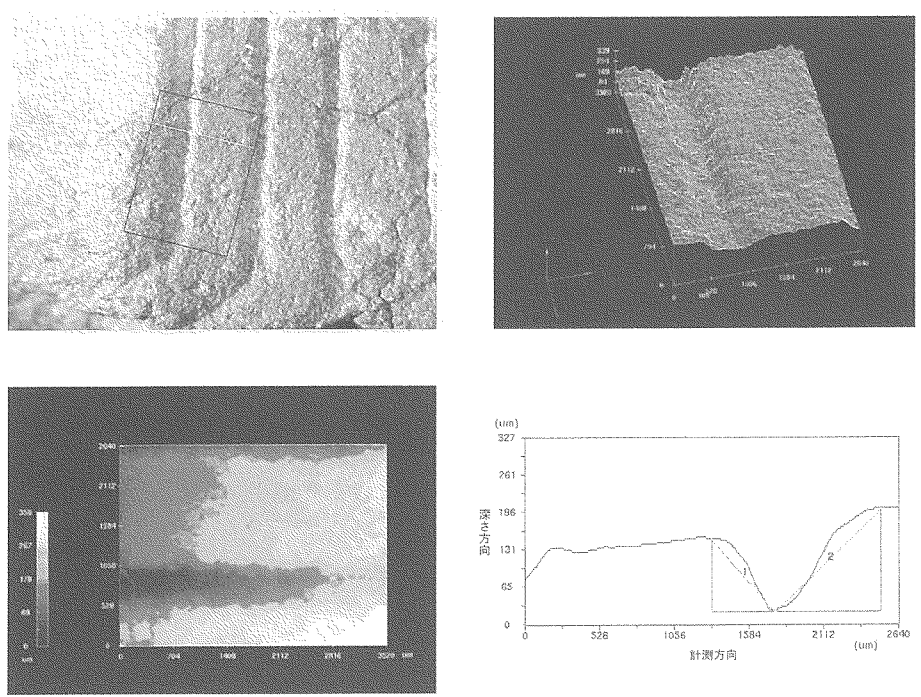


図7 石製鋳型表面の共焦点レーザー顕微鏡観察（綾杉文）

3 保存処理

X-CRおよびX-CTによる調査の結果、石製鋳型には約10mmほど内部にまで亀裂がはいっていることが明らかとなった。石製鋳型はそれ自体風化が進行していないものの、この内部亀裂の拡大などが懸念される状態にある。そこで、何らかの含浸強化剤を用いて強化処置と亀裂の接着を図る必要があると判断された。石材の含浸強化剤としては、有機珪酸エステルを用いる方法が一般的ではあるが、触媒としてスズを含有している。今回の分析では石製鋳型から特異な元素を検出することはなかったが、石製鋳型が銅鐸の鋳造に用いられた可能性が高く、この有機珪酸エステルを使用した場合、将来の分析において妨害となる可能性がある。そこで、強化含浸処置にはアクリル樹脂を用いることを決定した。

含浸強化処理にはアセトン・トルエン混合液（1：1，v/v）を溶剤として、3%となるようにアクリル樹脂（商品名：パラロイドB-72）を溶解して調製した処理液を用いた。石製鋳型はこの処理液に40時間浸漬した後、処理液より取り出し、風乾した。

4 まとめ

鋳型表面の蛍光X線分析からは、鋳型に鋳造時に鋳込まれたと想定される金属元素を検出することができなかった。従来から同様の銅鐸や銅鏃用の石製鋳型の分析をおこなっているが、鋳型から銅やスズなどが検出されたことはない。溶解した金属液が石材に溶け込むことはなく、また何らかの剥離処置がなされていたと推定する方が合理的である。また、石製鋳型の表面を共焦点レーザー顕微鏡により調査し、線刻に関する有用な数値データを得ることができた。今後、鋳型の文様全体に対して同法を適用することにより、製品との照合、製作技法の検討などに有効となるものと思われる。

これらの考古科学的調査をおこなうことにより、石製鋳型には約10mmほど内部に達する亀裂も存在することが明らかとなった。また、将来の分析の可能性を残すということを考慮して、アクリル樹脂による含浸強化処理をおこなった。

付論 6 名古屋市朝日遺跡出土の赤色顔料

堀木真美子（愛知県埋蔵文化財センター）

1 試料および分析方法

今回分析を行った試料は、土器および石器に付着する赤色部分11点および片口鉢内面に残存する赤色顔料5点の合計16点である。

測定方法は、赤色部分を中心に接着テープを用いて少量採取し、この試料にX線を照射する方法で測定を行った。測定条件はいずれも同一である。測定機器は(株)堀場製作所製XGT-5000、X線管電圧30kV、測定時間100秒、照射径100 μ m、雰囲気は大気である。接着テープはSiとAlが少量検出される。

2 測定結果

測定の結果、各試料において認められた元素について表2に示す。

試料1（朝日遺跡14次 オ区 SK01（SZ28） 図1）：方形周溝墓の主体部（SK01）内の底面より採取された赤色物質。赤色物質からはFeのピークが特徴的にあらわれ、他にSi、Al、K、Tiが認められた。一方、土壌部分の分析ではSiが最も大きなピークを示し、Al、K、Ca、Mn、Feが認められた。赤色物質に鉱物粒がほとんどほとんど含まれず、滑らかなペースト状を示していることから、ベンガラであると推測できる。

試料2（朝日遺跡14次 カ区 SD13（SZ32） 敲石 ペクトル図4）：溝内から出土した敲石の先端部の小さな凹部に付着する赤色物質。Hgの明確なピークを確認したことから、水銀朱であると思われる。また土壌も付着していたが、土壌部分からはHgは検出されていない。

試料3（朝日遺跡14次 ク区 SB04 土器片 図3）：土器の小片に付着する赤色物質。付着する部分は土器の内面である。赤色部分でかなり強いFeのピークが確認できた。赤色を呈しない部分ではSiのピークが最も強く現れ、他にAl、K、Ca、Ti、Feが認められた。Feの現れ方に大きな差が見られることから、Feを多く含む顔料（ベンガラ）と判断した。

試料4（朝日遺跡14次 キ区 SD06（SZ34） 土器底部片 図3）：土器の小片に付着する赤色物質。Si

表1 分析試料一覧

遺跡名	調査区	遺構	内容	備考	Hg	赤色顔料に含まれる元素	赤色顔料
1 朝日遺跡	14次	オ区 SK01 (SZ28)	赤色物質を含む土壌			Fe,Si,Al,Ti,K	ベンガラ
2 朝日遺跡	14次	カ区 SD13 (SZ32)	敲石 (石製品No.75)		○	Hg,Si,Al,Ti,Fe,K	水銀朱
3 朝日遺跡	14次	ク区 SB04	土器片 (内面)			Fe,Si,Al,Ti,K,Mn	ベンガラ
4 朝日遺跡	14次	キ区 SD06 (SZ34)	土器底部片 (内面)			Fe,Si,Al,Ti,K	ベンガラ
5 朝日遺跡	14次	ク区 SD51 (SZ46)	自然礫片	未洗浄		Si,Al,K,Fe	風化した鉱物
6 朝日遺跡	14次	ク区 SB04-P300	水洗選別済赤色物質			Fe,Si,Ti	ベンガラ
7 朝日遺跡	14次	ク区 SD60 No.46	磨石 (石製品No.94)	未洗浄		Si,Al,K,Ca,Ti,Mn,Fe	岩石の赤色部分
8 朝日遺跡	14次	ク区 9F6C	円礫			Fe,Si,Al,K,Ti	ベンガラ
9 朝日遺跡	14次	ク区 9E7I	赤色物質を含む土壌			Fe,Si,Al,K,Ti	ベンガラ
10 朝日遺跡	14次	ク区 SD58 東アゼ下層(SD45)	小円礫(石製品No.174)			Si,Al,K,Ca,Ti,Mn,Fe	ベンガラではない?
11 朝日遺跡	14次	ク区 SB04-P271 埋土西半	赤色物質を含む土壌			Fe,Si,Al	ベンガラ
12 見晴台遺跡	24次	濠	片口鉢 (内面)		○	Hg,Si,Al,Ca,Fe	水銀朱
13 高蔵遺跡	4次	SD04	片口鉢? (内面)		○	Hg,Si,Fe	水銀朱
14 高蔵遺跡	4次	SD04	片口鉢? (内面)		○	Hg,Si	水銀朱
15 朝日遺跡	14次	ク区 9F6b	壺底部片 (内面)			Si,Al,Ti,Ca,Ti,Fe	ベンガラではない?
16 片山神社遺跡	1次	SD07	片口鉢 (内面)		○	Hg,Si,Al,Ti,K,Ca,Fe	水銀朱

が最も強いピークを示し、他にAl、K、Ti、Feが認められる。測定箇所をかえても現れるスペクトルに大きな差が見られないことから、ある程度精製された状態の物質（ベンガラ）であると思われる。

試料5（朝日遺跡14次 ク区 SD51（SZ46） 自然礫片 図4）：未洗浄の石器に付着する赤色を呈する土壌。赤色部分ではK、Ca、Feのピークが際立つが、土壌中の方がFeやTiのピークが大きく現れている。このことから赤色の原因としてFeの影響が伺えるが、赤色を呈する原因がFeを主成分とするベンガラである可能性は低く、風化した鉱物（黒雲母か）であると判断。

試料6（朝日遺跡14次 ク区 SB04-P300 赤色物質 図1）：径数mmの赤色粒。測定箇所をかえても、スペクトルに大きな差が現れなかった。検出された元素はFe、Ti、Siである。ベンガラと考えられる。

試料7（朝日遺跡14次 ク区 SD60（SZ40） No.46 磨石 図4）：未洗浄の石器にみられる赤色を呈するもの。赤色部分のみを採取することが困難であった。赤色物質かと思われる箇所の測定を行いFeの大きなピークを得ることができたが、物質の形状から黒雲母等が風化した物質を測定したものと思われる。この試料に見られる赤色部は、顔料ではなく、風化もしくは被熱を受けたために赤色を呈している可能性が考えられる。

試料8（朝日遺跡14次 ク区 No.15 自然礫 図4）：円礫の端に付着する赤色顔料。赤色部分では明瞭なFeのピークを確認。他にSi、K、Al、Tiを確認。赤色顔料を含まない部分においても、Feを検出するが、その高さは小さい。このことからベンガラと判断。

試料9（朝日遺跡14次 ク区 9E7i 赤色物質 図1）：赤色粒。測定箇所をかえても、現れる元素はすべて同じであった。検出元素は以下の通り。Fe、Si、Al、K、Ti、Feの強いピークから、Feを多く含むベンガラと考えられる。

試料10（朝日遺跡14次 ク区 SD58（SZ45） 東畦下層 小円礫 図5）：赤色部分と赤色を呈しない部分では、検出される元素の種類に違いが見られない。赤色を呈する部分ではFeのピークがSiのピークよりも大きく現れる。また、CaやTiなども赤色を呈しない部分よりやや高いピークを呈している。これらのことから、赤色の原因がFeであると推測されるが、顔料によるものか否かは判断できない。

試料11（朝日遺跡14次 ク区 SB04-P271 赤色粒 図1）：土壌中に含まれる赤色物質。ペースト状の滑らかな物質で土中に塊状に含まれる。この赤色物質のみを取り出し測定を行った。検出された元素はFe、Si、Al。検出される元素の種類が少ないことから、精製された状態のFeを多く含む顔料（ベンガラ）と推測される。

試料12（見晴台遺跡24次 濠 片口鉢 内面 図2）：片口鉢の内面底部付近に付着残存している赤色物質を採取し測定。赤色部分ではHgの明瞭なピークとFeの小さなピークを示す地点と、Feの大きなピークとHgのやや小さなピークを示す地点が存在した。赤色を呈しない部分と比較を行うと、Feの大きなピークは赤色を呈しない部分の影響を受けているものと推測される。Hgが検出されたことから水銀朱が使われていたと推測できるが、Feの大きなピークを示す箇所があることからベンガラが使用されたと判断するのは難しい。

試料13（高蔵遺跡4次 SD04 鉢 内面 図2）：片口鉢の内面底部付近に付着残存している赤色物質を採取し測定。赤色顔料より検出された元素は、Hg、Si、Feである。また土器の胎土部分より検出された元素はSi、Al、Fe、K、Ti、Feであった。このことより、試料13の内面に残存している赤色顔料は水銀朱であったと推測される。

試料14（高蔵遺跡4次 SD04 鉢 内面 図2）：片口鉢の内面底部付近に付着残存している赤色物質を採取し測定。赤色顔料より検出された元素はHg、Si。土器の胎土部分より検出された元素は、Si、Al、K、Ti、Fe。これらのことより、試料14に残存していたものは、水銀を含む朱であったと推測される。

試料15（朝日遺跡14次 ク区9F6b 壺底部片 内面 図3）：壺底部内面より赤色物質を採取し測定。赤色部分2カ所および赤色を呈しない箇所1カ所で測定を実施。赤色顔料の2カ所の測定結果より検出された元素は、Al、Si、Ca、Ti、Fe。赤色を呈しない箇所においてもほぼ同様のスペクトルを得た。このことから、赤色物質はFeを多く含むベンガラである可能性が考えられるが、胎土部分との差が見られないことから、顔料ではなく、鉱物片もしくは胎土に含まれる赤粒（シャモット？）の可能性も考えられる。

試料16（片山神社遺跡1次 SD07 片口鉢内面 図2）：片口鉢内面に残存していた赤色物質を採取。赤色部分よりHgの強いスペクトルを検出した。また赤色を呈しない部分ではHgのピークは検出されなかった。このことから残存していた赤色物質は、水銀朱と推測される。赤色部分で検出された元素は、Hg、Si、Al、K、Ti、Fe。赤色を呈しない部分では、Hg以外の元素が検出された。

3 まとめ

今回測定を行った試料には、土壌中に含まれていた赤色の塊状物質4点、片口鉢（推定を含む）4点、その他の土器に付着した赤色顔料が3点、石器および礫に付着する物質5点であった。

このうち、土壌中に含まれていた赤色の塊状物質（試料1、6、9、11：図1）は遺構内の土壌に含まれていたものであり、いわゆる鉄班とは明らかに異なるものである。いずれの試料も、土器に付着する赤色顔料に色調が似ており、石英粒等の異質物をほとんど含まないシルト状の物質である。X線の測定を行った結果、Feのピークが強く検出されている。他に確認できる元素はAl、Si、K、Tiなどである。塊状試料のうち試料1や6においては、Fe以外に検出される元素がAl、Si、Tiと非常に少ない。KやAlは土壌中の粘土鉱物等に多く含まれているため、顔料以外でも検出される元素と考えられるが、試料1、6、11においては検出されなかった。このうち試料6については水洗選別を行った試料のため、水洗選別により、KやAlが溶出した可能性も推測される。試料1や11においては未洗浄の試料で、土壌中に含まれている状態であったにもかかわらず、KやAlがごく小さなピークでしかとらえられなかった。このことは、ベンガラの精製方法を示唆しているのかもしれない。

次に片口鉢に付着していた赤色顔料について述べる。分析試料は4点（試料番号12、13、14、16：図2）である。いずれの試料からもHgを検出した。また赤色を呈しない箇所においてHgが全く検出されないことも確認された。いずれも顔料としての水銀朱がもたらしたHgであると考えられる。土器の形式との関連に着目したい。

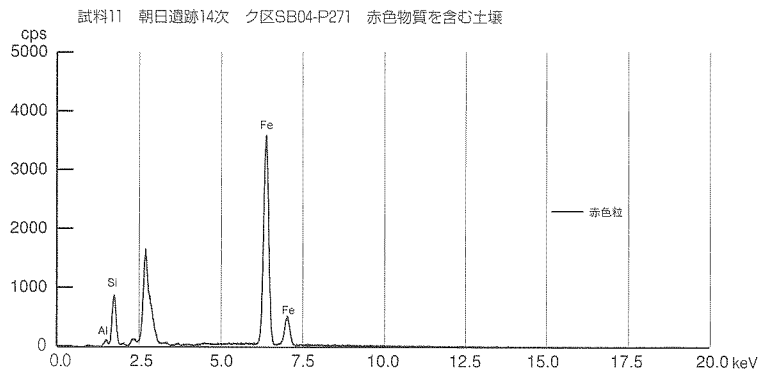
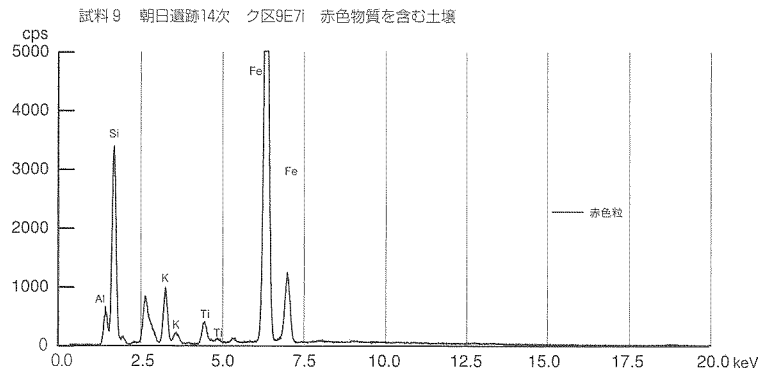
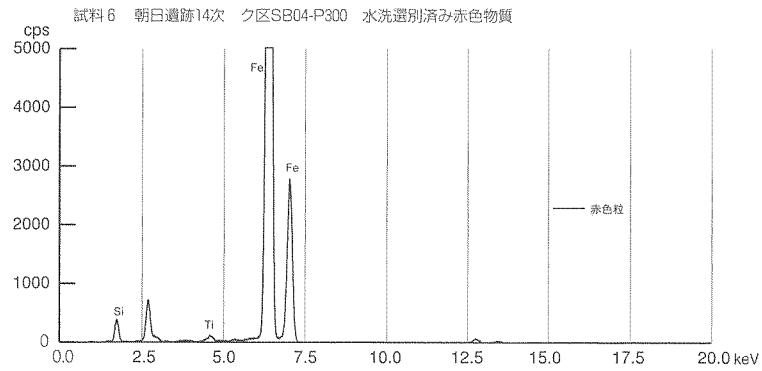
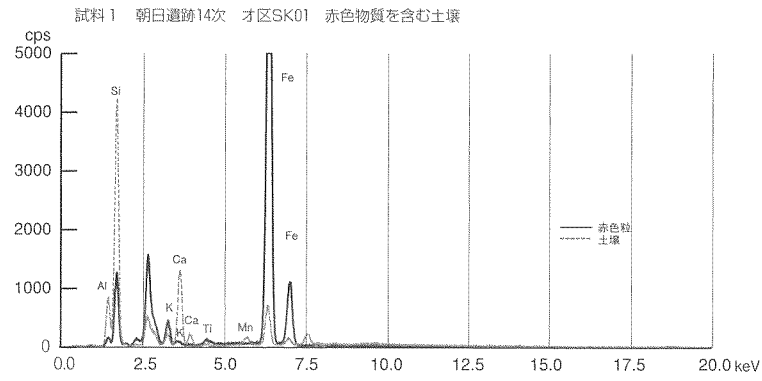


図1 土壌中の赤色物質

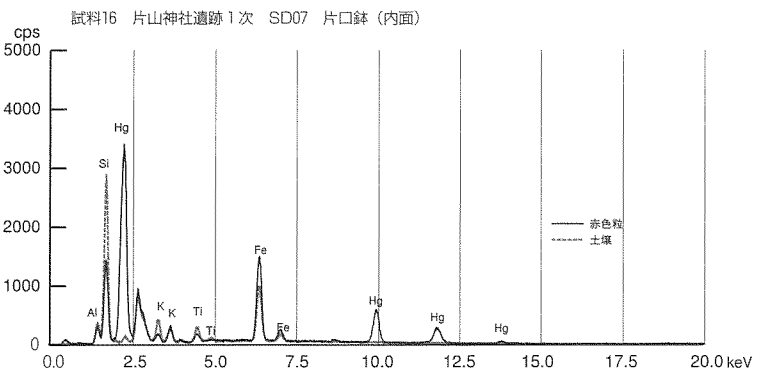
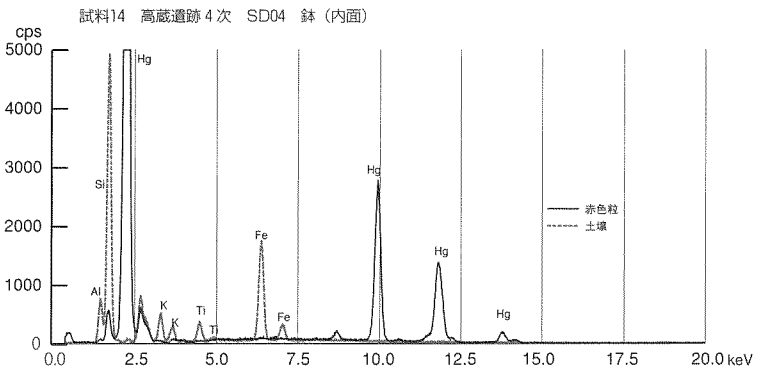
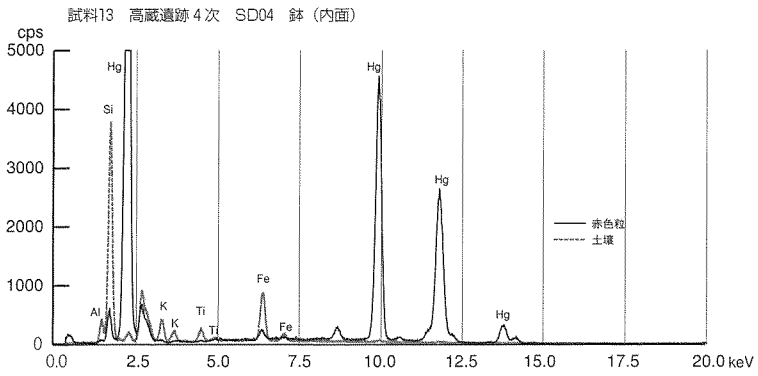
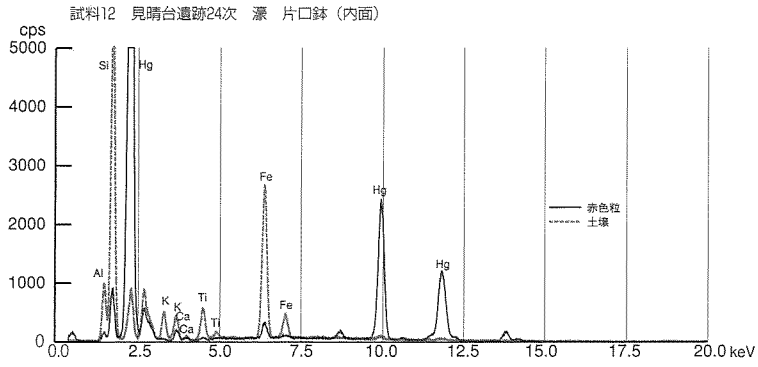


図2 片口鉢内面の赤色顔料

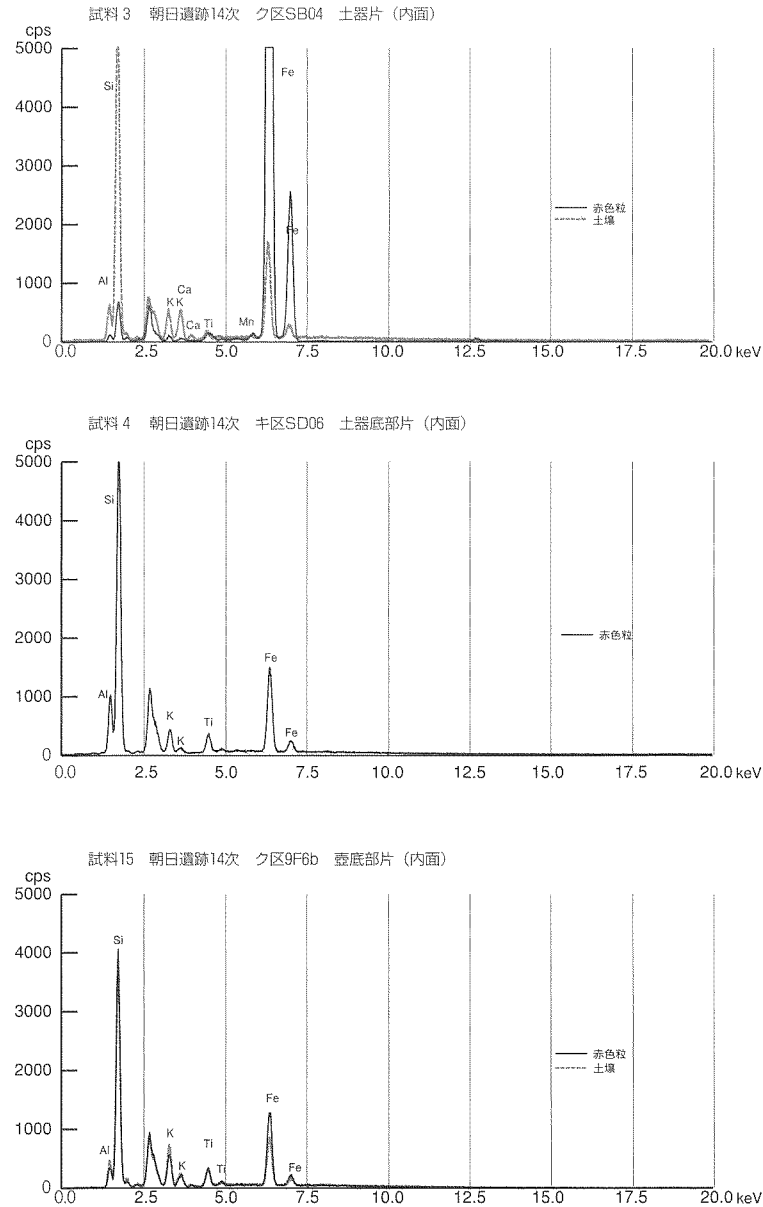


図3 土器付着の赤色物質

片口鉢以外の土器に付着した赤色顔料の分析結果（試料3、4、15:図3）を見ると、いずれもFeのピークが大きく現れ、他にAl、Si、K、Tiが検出されている。赤色を呈する箇所とそうでない箇所では、検出される元素の種類に違いはないが、試料3ではピークの大きさが異なっていた。試料3の赤色部分のスペクトルは前述の赤色塊状物質のそれによく似ていることから、この試料については、ベンガラであると判断した。しかし、試料15については胎土部分との差がないことからベンガラではないと思われる。

石器および礫に付着した試料（試料番号2、5、7、8、10:図4、5）では、特に試料2の敲石に着目したい。この試料のみ石器に付着する赤色顔料としてHgを検出した。他の試料については、土壌との違いが見られないか、赤色顔料そのものの採取ができなかった（岩石の赤色部分）、風化した鉱物と考えられるものであった。

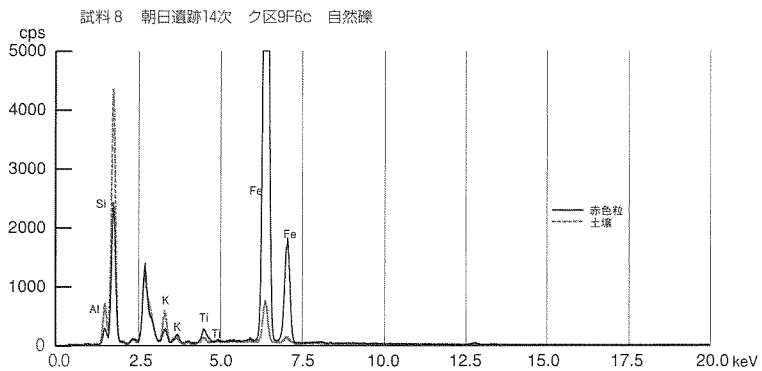
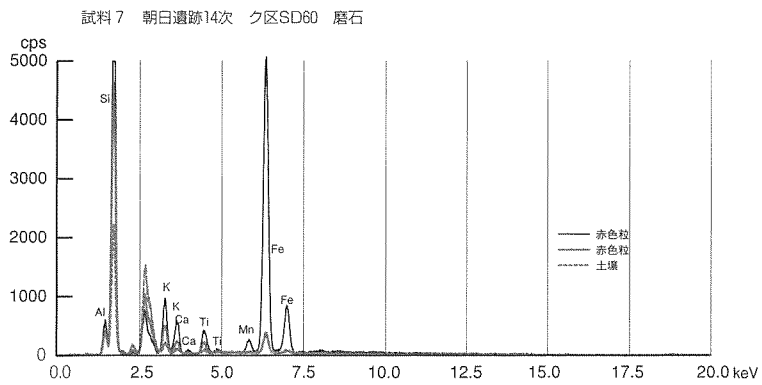
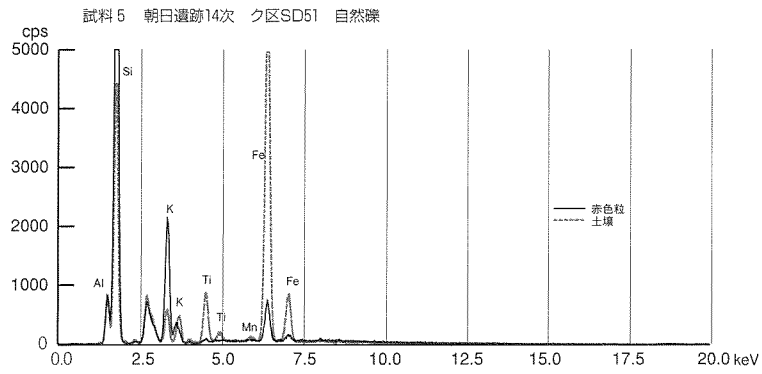
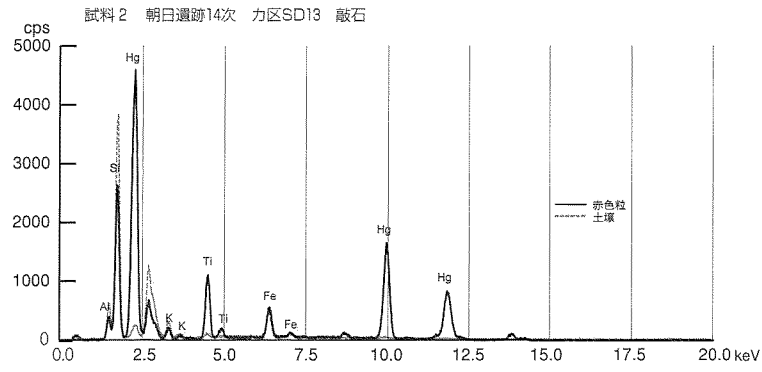


図4 石器附着の赤色物質(1)

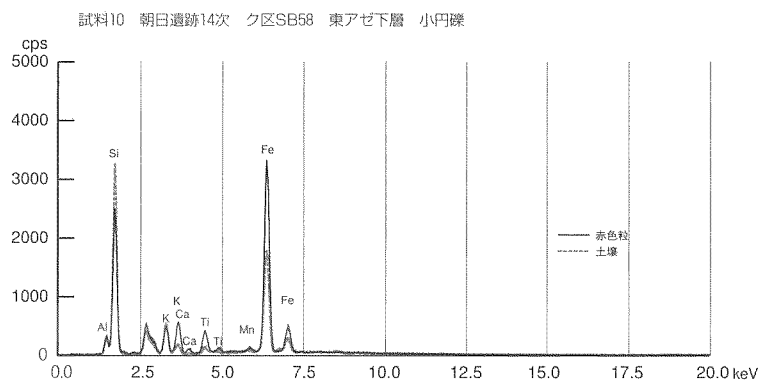


図5 石器付着の赤色物質(2)

4 今後の課題

今回は朝日遺跡を中心に赤色顔料の分析を行った。水銀朱に関しては、産地が限定されており入手が困難であったと推測されることから、使用例の調査研究を行うことが望まれる。一方ベンガラは、主成分である鉄が普遍的に含まれる元素であることから、顔料自体の認定が困難である。ベンガラの特定を行うには蛍光X線による元素の分析にあわせ、X線回折および電子顕微鏡による構造の分析が必要となる。ただし今回の分析においては明らかに人為的に精製されたと考えられる塊状の赤色物質の分析を行った結果、含まれる元素がSi、Al、Ti、Feと限定されていることが判明した。今後はこのような原材料と思われるものの分析事例を増やしてゆく必要がある。

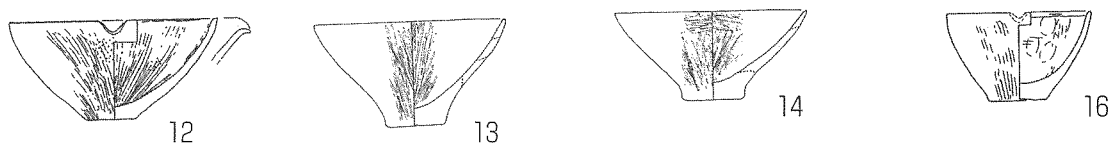


図6 分析試料(弥生後期～古墳時代) 1:6

<分析試料について>

試料12 見晴台遺跡第24次発掘調査環濠出土

片口鉢。口径16.6cm、底径3.8cm、器高8.0cm。やや丸みを帯びた器形で、口縁端部はわずかに外反しているようにも見える。器面は内外面ともにヘラミガキで整えている。外面にはススが付着している。内面の器面が剥落した部分に鮮やかな赤色が観察される。環濠出土のため、他の遺物から時期を特定するのは難しいが、弥生時代後期後半(Ⅶ様式)の遺物が出土している。

試料13 高蔵遺跡第4次発掘調査 SD04出土

鉢。口縁端部を全体の2/3ほど欠損しており、片口になるかどうか不明。口径14.9cm、底径4.5cm、器高8.3cm。磨滅が進んでおり外面の調整ははっきりしない。内面はミガキ。内面は全体が赤味を帯びた色調であるが、数カ所鮮やかな赤色が観察される。ともに出土した壺や高坏から弥生時代後期後半(Ⅶ-2様式)頃が推定される。

試料14 高蔵遺跡第4次発掘調査 SD04出土

鉢。口縁部端を1/2程度欠損しており、片口になるかどうか不明。口径15.1cm、底径4.4cm、器高7.1cm。試料13の個体に似るが、やや器高が低い。内外面ともヘラミガキを行っている。内面のごくわずかな部分に赤色が観察される。時期は13と同じである。図6の13、14の図出典は、竹内宇哲 1990『高蔵遺跡 第4次調査の概要』名古屋市教育局。

試料16 片山神社遺跡 SD07出土

片口鉢。ちょうど片口の部分が欠損している。口径11.3cm、底径4.5cm、器高7.0cm。口縁端部はわずかに内傾する面をなしているように見える。外面はミガキ、内面もミガキと思われるが磨滅のため不明。内面のごく一部に赤色が観察される。ともに出土した高坏などから古墳時代初頭のものと思われる。(本項の文責は村木)

付論 7 放射性炭素年代測定

小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・藤根 久

(パレオ・ラボAMS年代測定グループ)

1 はじめに

朝日遺跡の炭化物試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表1のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（NEC製 5UD およびパレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-3031	遺構：3区溝 層位：試料4（微化石分析試料と同じ）	試料の種類：草本炭化物 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	NEC製5UD- Pelletron
PLD-3032	遺構：3区溝 層位：試料8（微化石分析試料と同じ）	試料の種類：木本炭化物 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	NEC製5UD- Pelletron
PLD-3033	遺構：4区西壁中央付近 遺構：草本炭化物層	試料の種類：草本炭化物 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	NEC製5UD- Pelletron
PLD-3412	遺構：3区溝 層位：⑥の層その1	試料の種類：炭化物*植物遺体 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo：NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-3413	遺構：SB02-SK03 （住居址床面土坑内）	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外以外年輪 状態：wet、カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo：NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-3424	遺構：SD46 層位：草本炭化物集中層	試料の種類：草本炭化物 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo：NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-4805	位置：SB04 遺構：7区 層位：炉1埋土C（東半）	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外以外年輪 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-4806	位置：SB04 遺構：7区 層位：炉5a東半埋土	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外以外年輪 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH

3 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うため

に記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal3.10 (較正曲線データ: INTCAL04) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表2 放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)
			1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲	
PLD-3031	-19.21 \pm 1.19	1660 \pm 40	260AD(3.1%)280AD <u>330AD(65.1%)430AD</u>	250AD(10.4%)300AD <u>310AD(74.6%)470AD</u> 480AD(10.4%)540AD	1659 \pm 42
PLD-3032	-30.27 \pm 0.62	2035 \pm 40	<u>100BC(68.2%)20AD</u>	<u>170BC(95.4%)60AD</u>	2036 \pm 38
PLD-3033	-22.94 \pm 0.29	1890 \pm 40	60AD(56.0%)140AD 150AD(6.2%)170AD 190AD(6.0%)210AD	20AD(1.3%)40AD <u>50AD(94.1%)230AD</u>	1888 \pm 38
PLD-3412	-22.68 \pm 0.19	1940 \pm 30	<u>20AD(60.5%)90AD</u> 105AD(7.7%)120AD	<u>AD(95.4%)130AD</u>	1938 \pm 30
PLD-3413	-28.56 \pm 0.18	2160 \pm 30	360BC(32.8%)290BC 230BC(2.2%)220BC <u>210BC(33.2%)160BC</u>	360BC(38.1%)270BC <u>260BC(57.3%)90BC</u>	2158 \pm 31
PLD-3424	-25.96 \pm 0.18	1690 \pm 30	260AD(7.4%)280AD <u>330AD(60.8%)410AD</u>	<u>250AD(95.4%)420AD</u>	1692 \pm 30
PLD-4805	-27.16 \pm 0.13	2200 \pm 20	360BC(10.5%)340BC 330BC(31.2%)280BC 260BC(26.4%)200BC	<u>370BC(95.4%)190BC</u>	2201 \pm 22
PLD-4806	-24.09 \pm 0.11	2225 \pm 20	370BC(8.4%)350BC <u>300BC(59.8%)200BC</u>	380BC(18.2%)340BC <u>330BC(77.2%)200BC</u>	2223 \pm 21

4 考 察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

PLD-3031は、3区溝試料4(花粉分析などと同じ試料)の草本類炭化物であるが、1 σ 暦年代範囲においてcal AD 330-430年(65.1%)、2 σ 暦年代範囲においてcal AD 310-470年(74.6%)である。調査では、中世と予想されていたが、古墳時代初めの年代であった。

PLD-3032は、3区溝試料8(花粉分析などと同じ試料)の草本類炭化物であるが、1 σ 暦年代範囲においてcal BC 100-AD20年(68.2%)、2 σ 暦年代範囲においてcal BC 170-AD60年(95.4%)である。調査では、古墳時代と予想されていたが、弥生時代中期の年代であった。

PLD-3033は、4区西壁中央付近の草本類炭化物であるが、1 σ 暦年代範囲においてcal AD 60-140年(56.0%)、2 σ 暦年代範囲においてcal AD50-230年(94.1%)である。調査では、中世と予想されていたが、弥生時代後期の年代であった。

PLD-3413は、3区溝の草本類炭化物であるが、1 σ 暦年代範囲においてcal AD 20-90年(60.5%)、2 σ 暦年代範囲においてcal AD0-130年(95.4%)である。調査では、中世と予想されていたが、弥生時代中期末～後期初めの年代であった。

PLD-3412は、SD46の草本炭化物集中層であるが、1 σ 暦年代範囲においてcal AD 330-410年(60.8%)、2 σ 暦年代範囲においてcal AD 250-420年(95.4%)である。調査では、弥生時代中期と予想されていたが、古墳時代の年代であった。

PLD-3413のSB02-SK03、PLD-4805のSB04、PLD-4806のSB04は、いずれも弥生時代中期の住居跡である。SB02-SK03(最外年輪以外の炭化材)が1 σ 暦年代範囲においてcal BC210-160年(33.2%)、2 σ 暦年代範囲においてcal BC 260-90年(57.3%)であった。また、PLD-4805のSB04(草本類炭化物)が1 σ 暦年代範囲においてcal BC 330-280年(31.2%)、2 σ 暦年代範囲においてcal BC 370-190年(95.4%)であった。さらに、PLD-4806のSB04(草本類炭化物)が1 σ 暦年代範囲においてcal BC 300-200年(59.8%)、2 σ 暦年代範囲においてcal BC 330-200年(77.2%)であった。これらの年代値は、最近の弥生時代の実年代とほぼ調和的である。

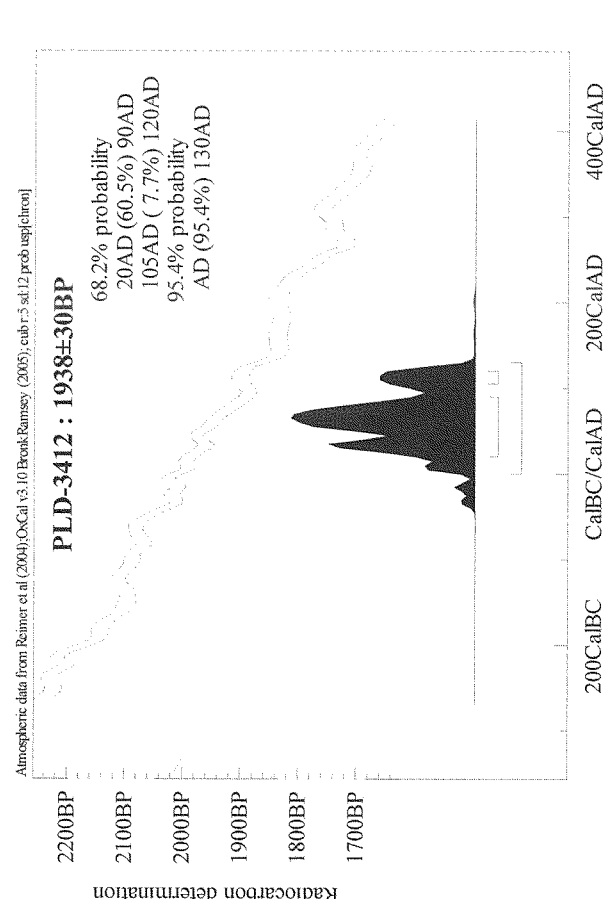
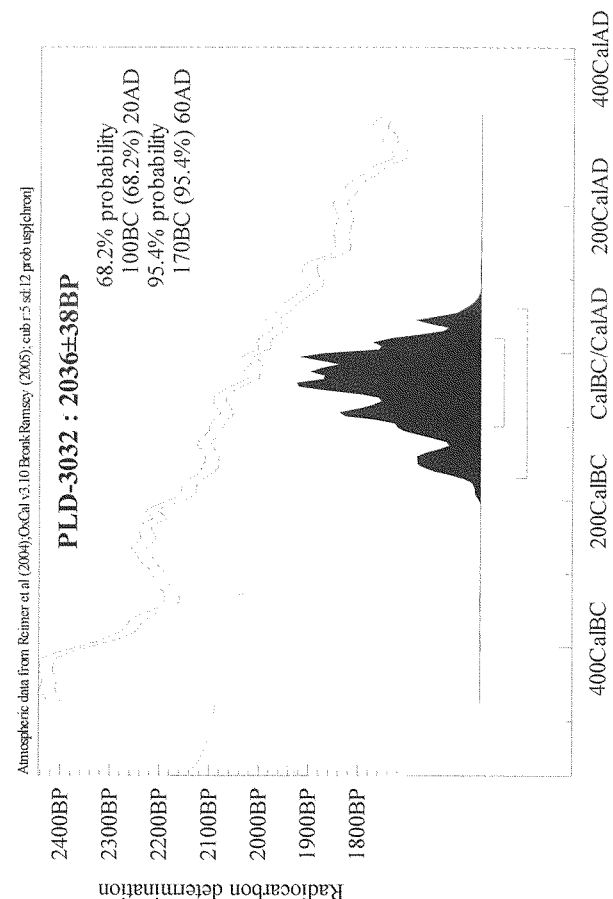
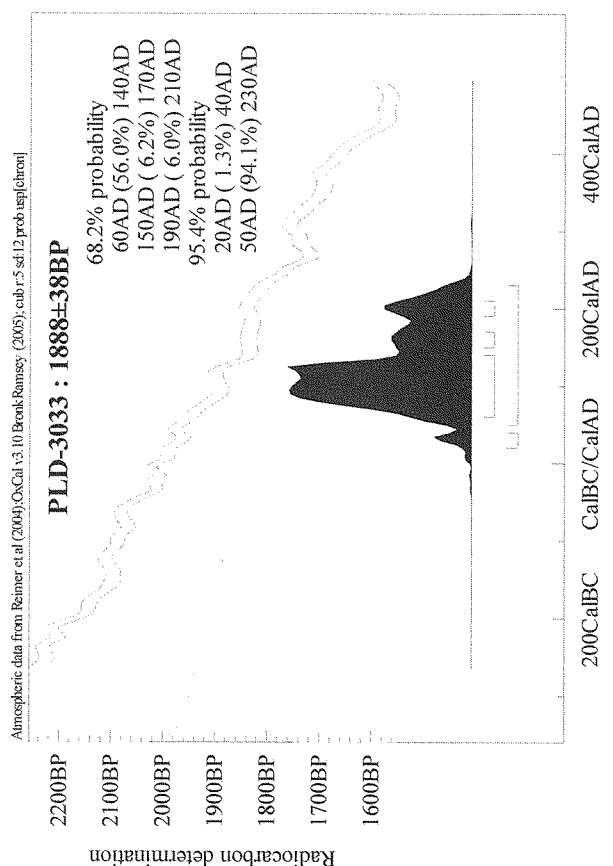
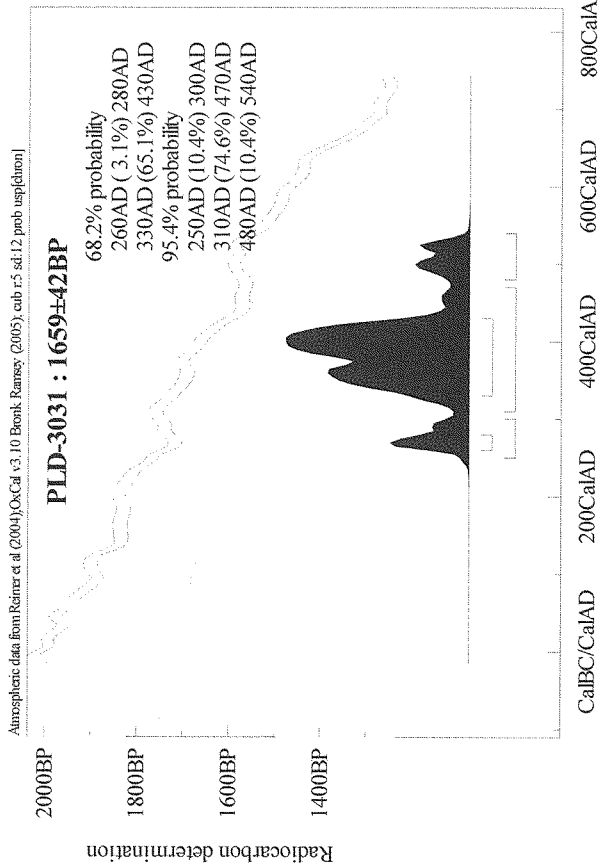
参考文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425-430.

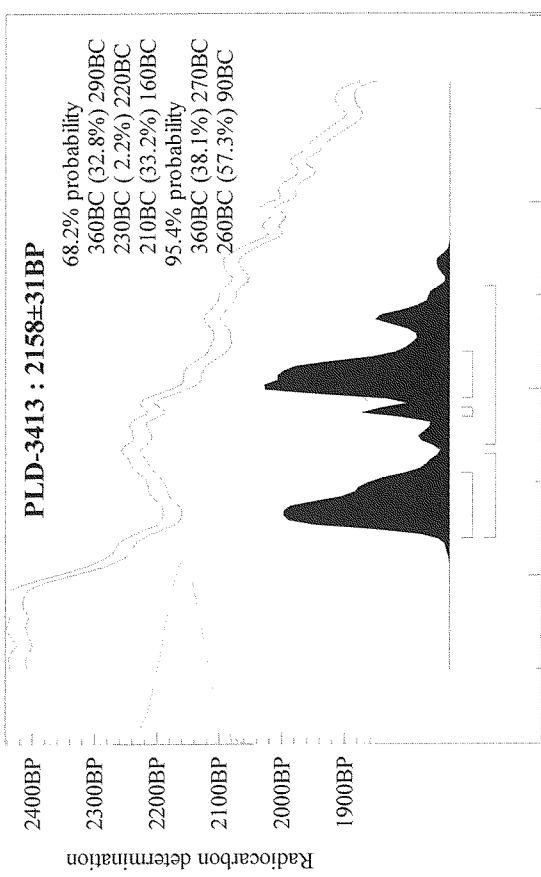
Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代, 3-20.

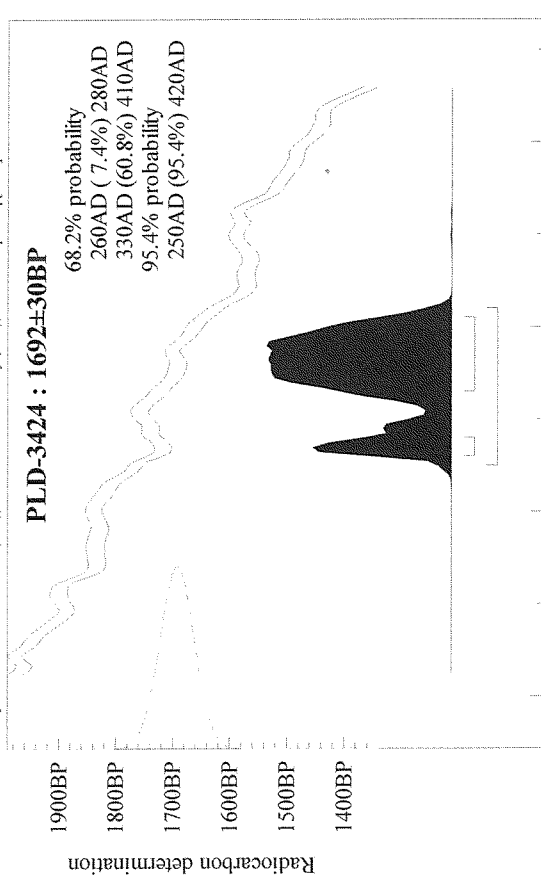
Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.



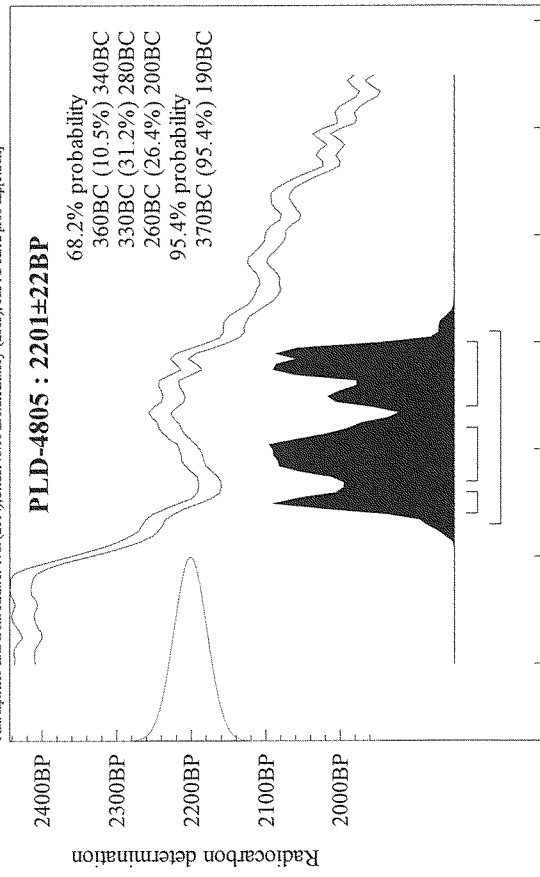
Atmospheric data from Reimer et al. (2004), OxCal v3.10, Bronk/Ramsey (2005), cub r:5 sd:12 prob.usp[electron]



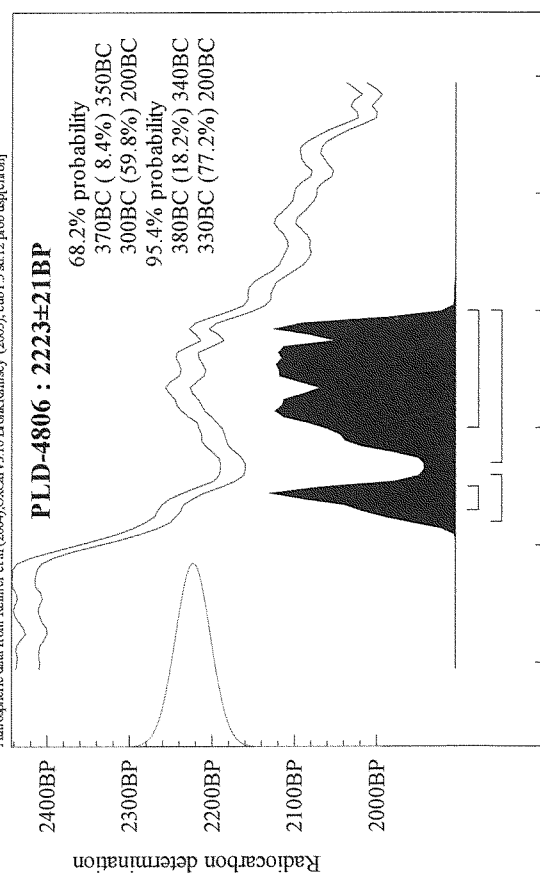
Atmospheric data from Reimer et al. (2004), OxCal v3.10, Bronk/Ramsey (2005), cub r:5 sd:12 prob.usp[electron]



Atmospheric data from Reimer et al. (2004), OxCal v3.10, Bronk/Ramsey (2005), cub r:5 sd:12 prob.usp[electron]



Atmospheric data from Reimer et al. (2004), OxCal v3.10, Bronk/Ramsey (2005), cub r:5 sd:12 prob.usp[electron]



付論 8 朝日遺跡のプラント・オパール

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

朝日遺跡において行われた発掘調査で溝を中心に土壌試料が採取され、「周辺で稲作が行われていた可能性はあるのか、また溝内にイネの籾殻が投棄されているのか」について検討する目的でプラント・オパール分析を行った。以下にその結果・考察を示す。

2 試料と分析方法

分析用試料は、3区溝(10試料)、6区のSD05(5試料)とSD07(5試料)、7区のSD08(1試料)とSK09(1試料)の総計22試料である。各試料について簡単に記すと、3区溝の上位8試料(試料番号1~8)はおおむね黒褐色のシルト~粘土、下部2試料(9、10)は黒褐色の粘土混じりの砂である。これらのうち2層準において年代測定が行われ、試料4層準で1 σ 暦年代範囲AD340-430、試料8層準でBC65-AD5が得られている。6区SD05(弥生時代中期中葉の方形周溝墓の溝)の5試料(試料番号1~5)はおおむね黒褐色のシルト~粘土で、最下部試料5では砂が多く混入している。同区SD07(弥生時代中期中葉の方形周溝墓の溝)の5試料(試料番号1~5)もおおむね黒褐色のシルト~粘土で、下部2試料では砂質となっている。7区SD08(弥生時代中期中葉の方形周溝墓の溝)の1試料(仮試料番号1)は黒褐色の砂質粘土、同区SK09(弥生時代中期中葉)の1試料(仮試料番号1)も黒褐色の砂質粘土である。プラント・オパール分析はこれら22試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトールピーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約40 μ m)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 μ m以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

3 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(表1)、それらの分布を図1(3区溝)、図2(6区SD05)、図3(6区SD07)、図4(7区SD08)、図5(7区SK09)に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

3区溝: 検鏡の結果、試料1、2、4、5の4試料よりイネのプラント・オパールが検出された。個数としては、最上部2試料では10,000個以上と多く検出されているが、4、5ではやっと1,000個を越えた程度である。多く得られているのはネザサ節型とウシクサ族で、ネザサ節型は中央部で、ウシクサ族は下部で多産している。

6区SD05: イネについては試料2、3で若干観察されたのみである。最も多く検出されたのはネザサ節

表1 試料1g当たりのプラント・オパール個数

地区	遺構	試料 番号	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
3区	溝	1	17,400	20,600	4,300	1,100	3,300	4,300	9,800	5,400
		2	11,200	12,200	3,100	0	5,100	2,000	8,200	3,100
		3	0	11,700	1,200	2,300	3,500	1,200	8,200	7,000
		4	1,200	75,300	5,900	1,200	2,400	3,500	10,600	3,500
		5	1,200	168,400	6,200	3,700	1,200	6,200	29,700	12,400
		6	0	49,100	0	2,300	4,600	3,400	37,700	13,700
		7	0	50,200	2,700	0	4,100	4,100	55,700	16,300
		8	0	34,100	1,400	0	5,700	2,800	68,300	12,800
		9	0	12,100	2,400	0	3,600	4,900	42,500	4,900
		10	0	10,900	0	0	0	0	32,600	6,000
6区	SD05	1	0	26,500	6,300	0	1,300	1,300	15,100	6,300
		2	1,400	70,500	5,500	4,100	0	0	34,600	6,900
		3	1,300	167,600	6,700	6,700	0	1,300	30,800	4,000
		4	0	16,700	2,800	0	1,400	0	18,100	12,500
		5	0	6,200	2,500	0	0	0	1,200	2,500
6区	SD07	1	0	178,200	11,700	7,400	0	4,200	8,500	4,200
		2	0	133,200	11,200	3,700	0	1,200	10,000	6,200
		3	0	31,800	2,400	6,100	0	0	6,100	2,400
		4	0	48,700	2,700	1,400	0	0	16,200	4,100
		5	0	20,800	2,600	0	1,300	0	3,900	6,500
7区	SD08	1	0	25,000	9,200	1,300	0	0	56,600	9,200
7区	SD09	1	19,800	23,500	2,500	0	1,200	9,900	55,600	6,200

型で、試料3では約170,000個に達している。次いでウシクサ族が多く、最下部を除き10,000個以上を示している。

6区SD07：イネは観察されなかった。最も多く得られたのはやはりネザサ節型で、上部2試料では100,000個を越えている。

7区SD08：本試料でもイネは認められなかった。最も多く観察されたのはウシクサ族で、次いでネザサ節型となっている。

7区SK09：約20,000個と多量のイネのプラント・オパールが検出された。最も多く得られたのはやはりウシクサ族で、次いでネザサ節型となっている。

なお、全試料においてイネの穎（籾殻）に形成される珪酸体は観察されなかった。

4 稲作について

上記したように、22試料のうち7試料よりイネのプラント・オパールが検出された。そのうち7区SK09では約20,000個のイネのプラント・オパールが検出されている。時期は弥生時代中期中葉と考えられてい

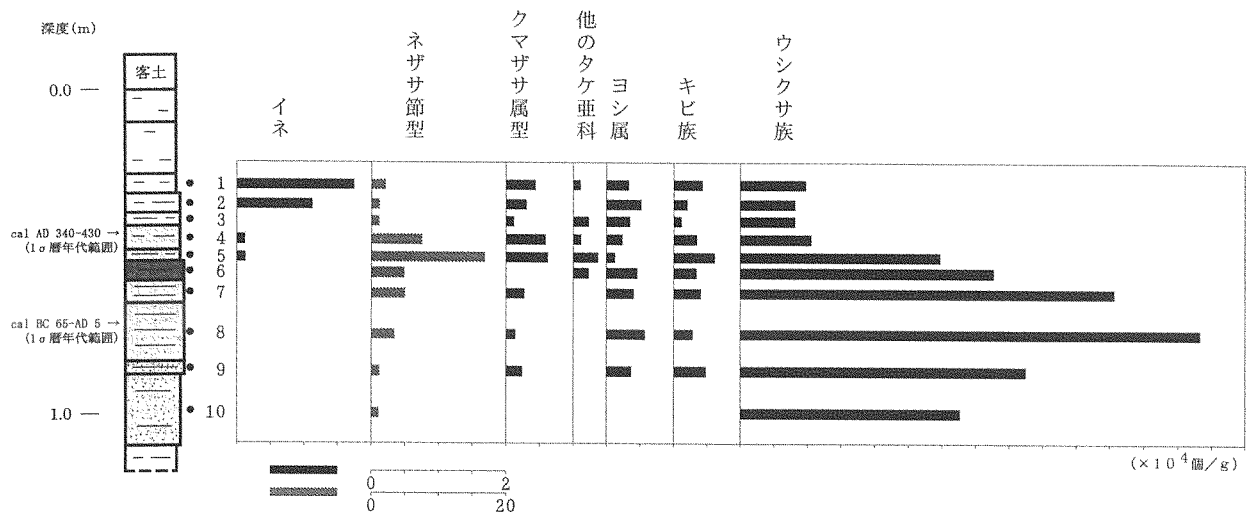


図1 3区溝試料のプラント・オパール分布図

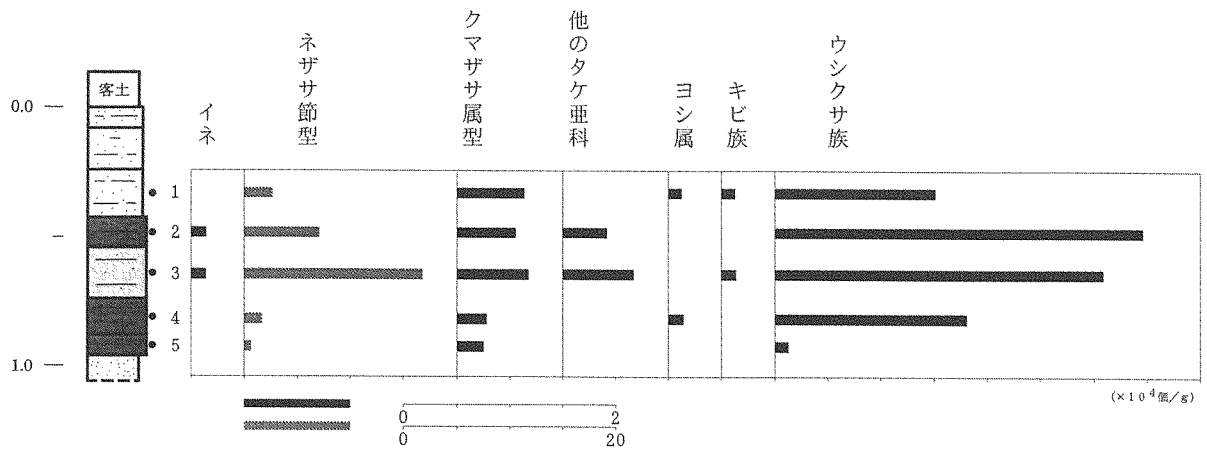


図2 6区SD05試料のプラント・オパール分布図

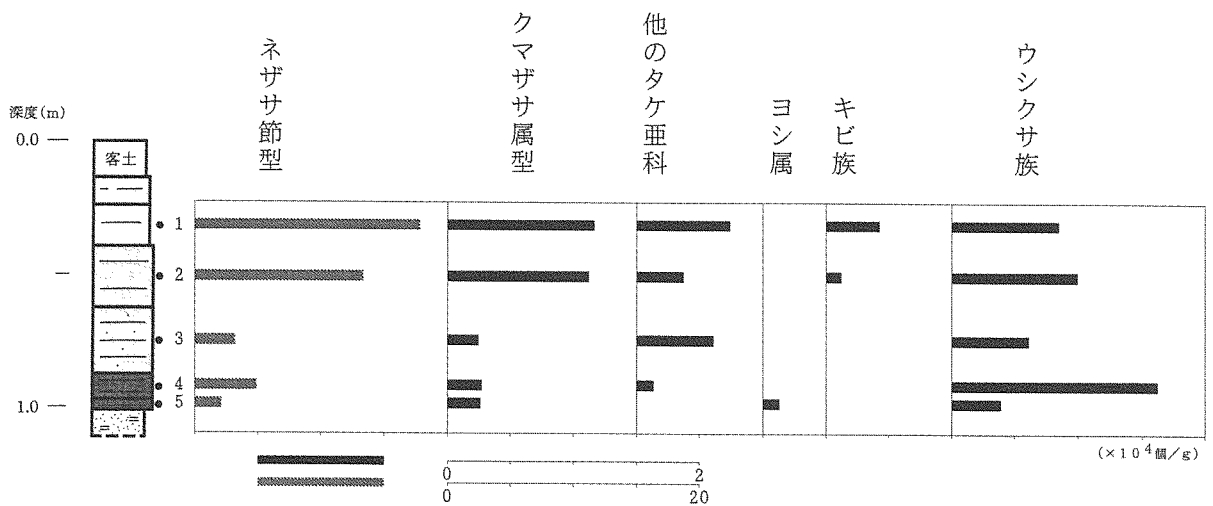


図3 6区SD07試料のプラント・オパール分布図

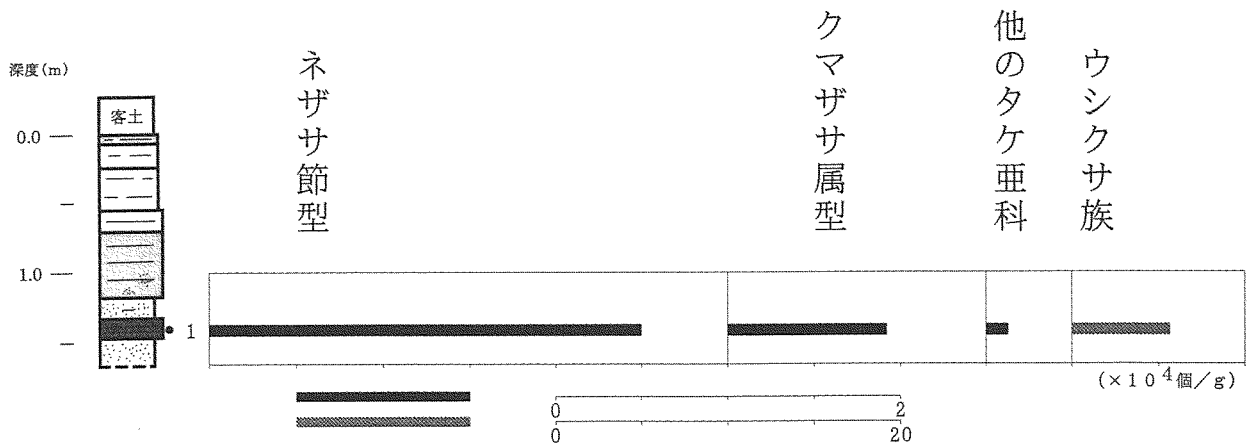


図4 7区SD08試料のプラント・オパール分布図

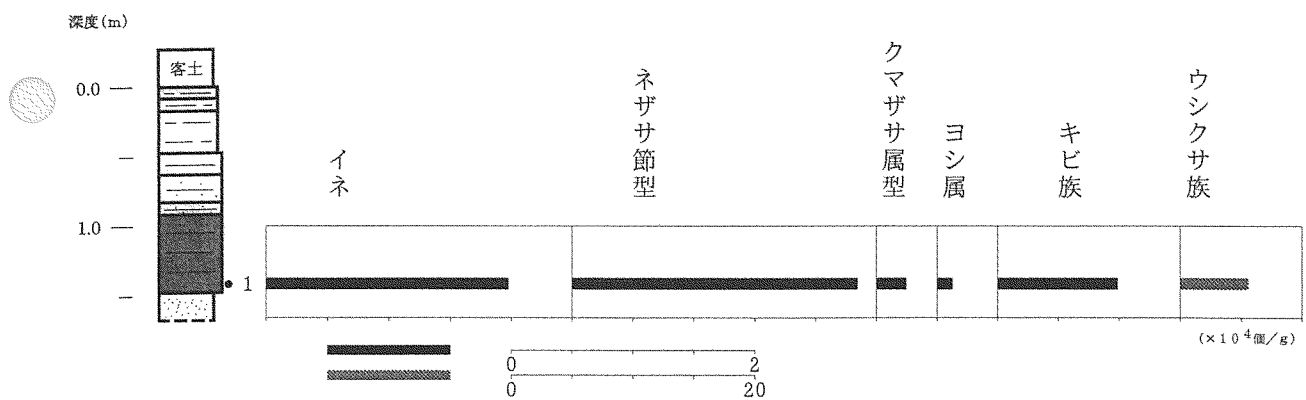


図5 7区SD09試料のプラント・オパール分布図

る。同様の時期の6区SD05からも若干のイネが観察されており、年代測定から同じ時期と考えられる3区溝試料4、5においてもイネが得られている。分析試料は溝より採取された土壌であることから、上記のようにイネのプラント・オパールが検出されたからといってそれが直接稲作を示すものではないが、溝周辺における稲作の可能性は考えられるであろう。また3区溝の下部試料においてイネは観察されていないことから、朝日遺跡では弥生時代中期中葉頃より少なくともイネが存在するようになったと推察される。また溝内にイネ籾殻が混入しているか否かについて、イネの穎に形成される珪酸体の破片が1個体も認められなかったことから、プラント・オパール分析からはイネ籾殻が混入している可能性は低いと推察される。

なお検出個数について、イネのプラント・オパールが試料1g当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている(藤原1984)。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。

5 朝日遺跡周辺のイネ科植物

ネザサ節型やウシクサ族が多く検出されており、ネザサ節型のササ類(ケネザサ, ゴキダケなど)やウシクサ族(ススキ, チガヤなど)が遺跡周辺の空き地や周辺森林の林縁部などの開けた日のあたるところ

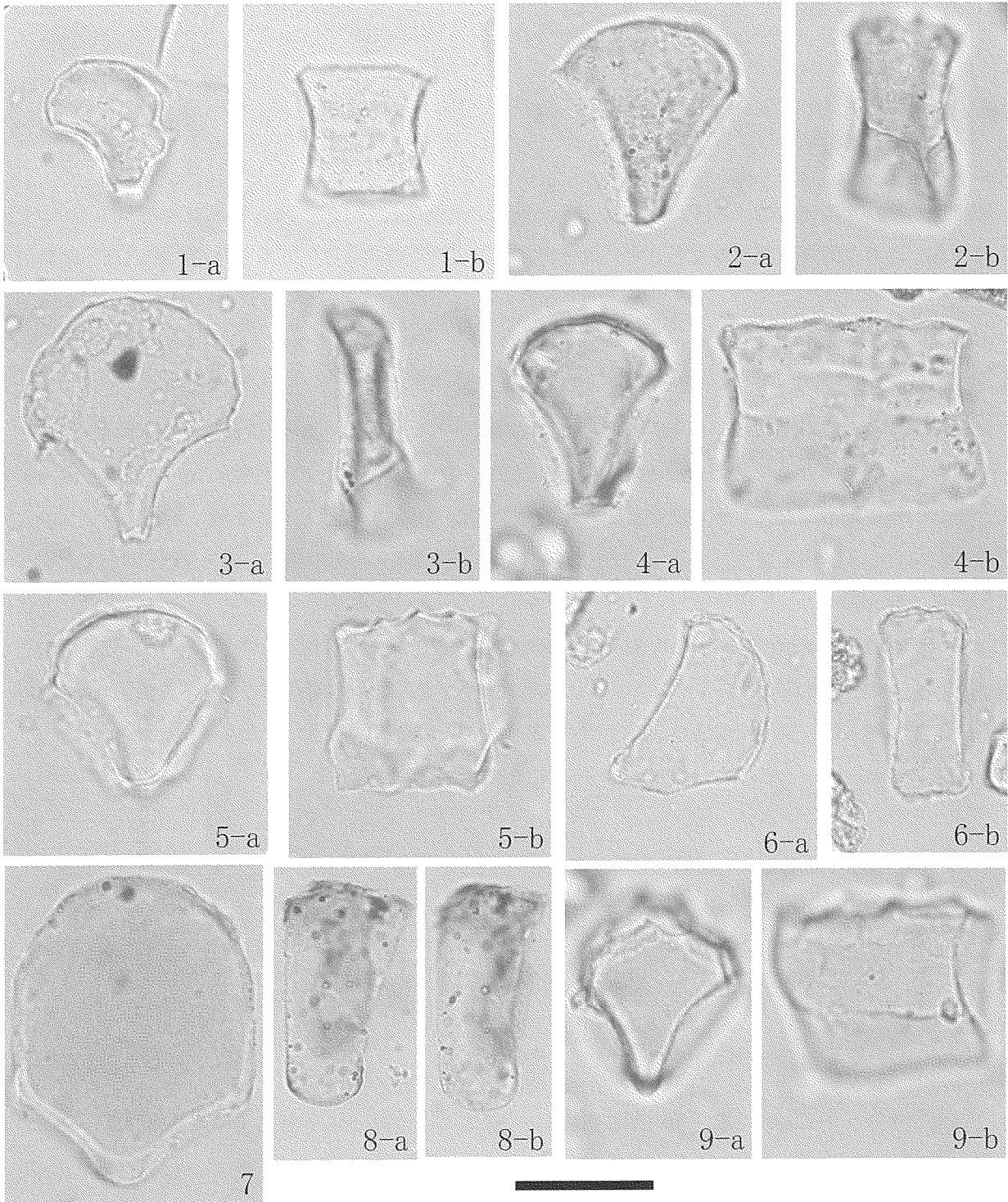
に生育していたと推測される。現在の愛知県尾張地区（名古屋市など）では丘陵のやや平坦な台状地においてススキ・ケネザサ群集が形成されており（愛知県1995）、弥生時代の朝日遺跡周辺においてもススキ・ケネザサ群集といったような草地在一部に成立していたと推測される。また3区溝においてはヨシ属やキビ族が最下部試料を除き連続して検出されており、溝内にヨシやイヌビエといった好湿性のヨシ属やキビ族が生育していたとみられる。

<引用文献>

愛知県 1995 『愛知県の植物相』南川 幸編 p.328

藤原宏志 1984 「プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—」『考古学ジャーナル』227 pp.2-7





図版 朝日遺跡のプラント・オパール (scale bar:0.03mm)

1～4: イネ (a: 断面、b: 側面)

1: 3区溝-2、2: 3区溝-4、3、4: 7区SK09

5: ネザサ節型 (a: 断面、b: 側面) 6区SD07-1

6: クマザサ属型 (a: 断面、b: 側面) 6区SD05-3

8: ウシクサ族 (断面) 7区SK09

7: ヨシ属 (断面) 3区溝-7

9: キビ族 (側面) 3区溝-5

付論 9 埋設土器内容物の分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

朝日遺跡の14次調査では、7区のP114において横位の縄文時代の埋設土器が検出された。ここでは、この土器内土壌を対象として、内容物について化学組成あるいは微細粒物の観察などの検討を行った。

2 試料と方法

試料は、埋設土器の下部埋土と上部埋土および比較試料としての周辺土壌3試料である(図版1)。試料は、典型的な部分を10g程度採取して乾燥した後、アルミナ乳鉢で粉末化した。なお、土器内試料は、土器内壁に接触した部分から採取した。試料は、塩化ビニール製リングに充填して20tonプレスして測定用試料とした。測定は、フィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置MagiX(PW2424型)を用いて、標準試料を用いないFP法(ファンダメンタルパラメータ法)で半定量分析を行った。なお、下部埋土は、遠沈管に少量を採取し精製水を加えて超音波洗浄器を用いて分散処理した。コロイド分を除去した後、スポイトで一部を採取しスライドガラスに展開し簡易プレパラートを作成した後、顕微鏡で観察した。さらに、下部埋土は、100g程度を0.5mm篩で湿式篩分けを行い粗粒物について実体顕微鏡で観察した。

表1 分析した試料とその詳細

試料	色相・明度・彩度	土性	その他
下部埋土	2.5Y 4/2暗灰黄色	シルト質粘土	浅黄色の最大7mmシルト塊含む
上部埋土	2.5Y 5/3黄褐色	シルト質粘土	浅黄色の最大5mmシルト塊含む
周辺土1	2.5Y 4/1黄灰色	シルト質粘土	浅黄色の最大15mmシルト塊含む
周辺土2	2.5Y 4/2暗灰黄色~5Y 6/3オリーブ黄色	シルト質粘土~シルト	炭化物含む
周辺土3	2.5Y 4/1黄灰色~5Y 7/3浅黄色	シルト質粘土~シルト	

3 結果および考察

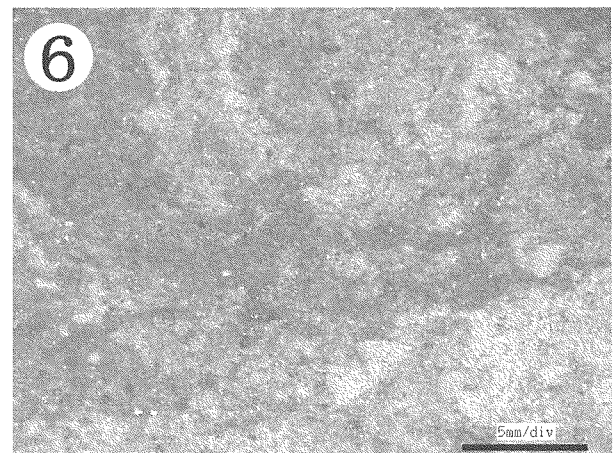
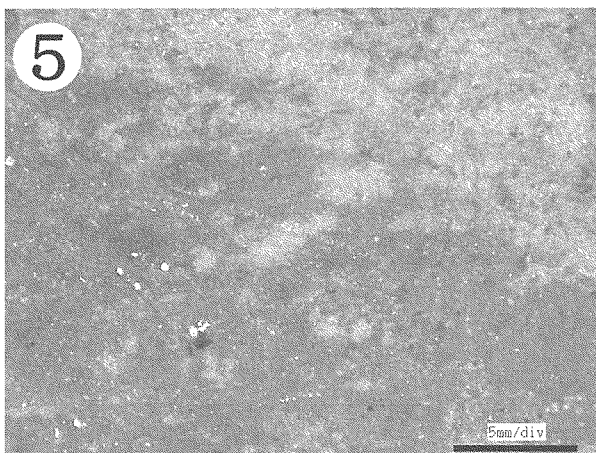
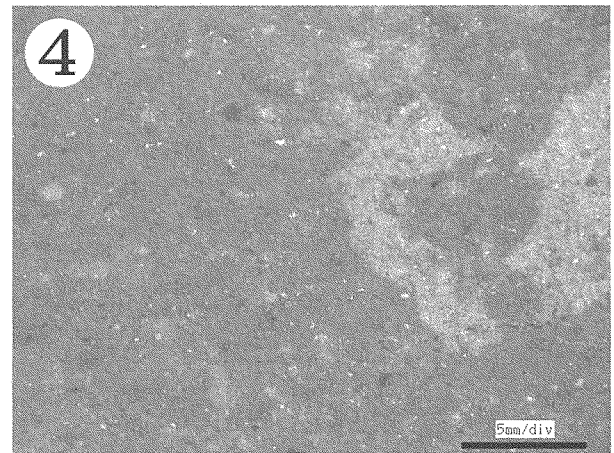
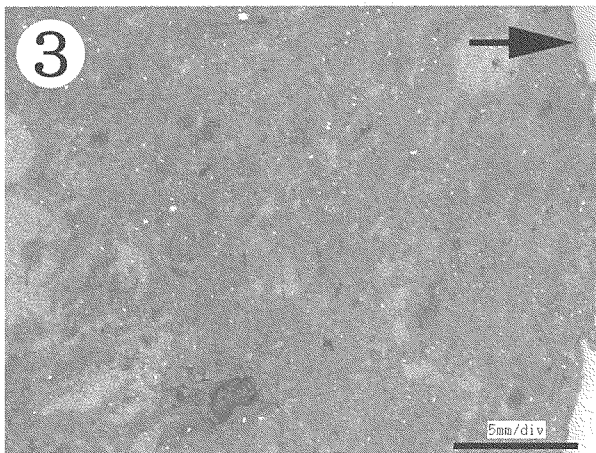
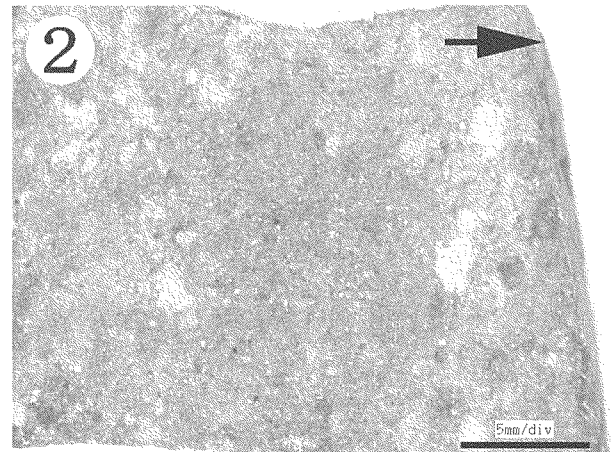
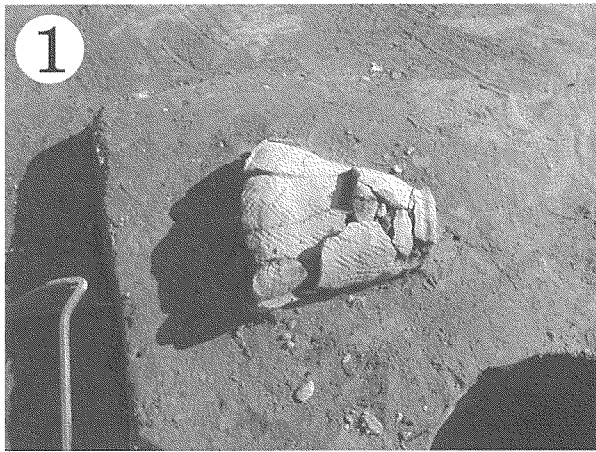
土器内埋土は、下部が暗灰黄色のシルト質粘土、上部が黄褐色のシルト質粘土であるが、共に浅黄色のシルト塊を含んでいる。こうした状況は、周辺土でもほぼ同様に観察された。

表2に蛍光X線分析による半定量分析結果を示す。全体的には、酸化ケイ素 SiO_2 が多く67.12~68.13%と高く、次いで酸化アルミニウム Al_2O_3 が19.09~19.90%が多く、その他酸化鉄 Fe_2O_3 、酸化カリウム K_2O 、酸化ナトリウム Na_2O が数%検出された。なお、骨の主成分である酸化カルシウム CaO が1.11~1.20%、酸化リンは0.23~0.37%であった。このうち、下部埋土では、周辺埋土と比べて酸化リンが高いものの、酸化カルシウムは高いとは言えない。こうしたことから、直ちに土器内埋土中に骨成分が残留しているとは言えない。

なお、下部埋土中の微細粒物の顕微鏡観察では、鉱物などのほかイネ科植物の葉身に形成される植物珪酸体化石が含まれていた。また、粗粒物の実体顕微鏡観察では、骨質物は含まれていなかった。

表2 ファンダメンタルパラメータ法による半定量分析値

試料	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	total
下部埋土	1.94	0.94	19.76	67.12	0.37	0.076	3.17	1.11	0.596	0.048	4.88	100.00
上部埋土	1.93	0.89	19.09	68.78	0.23	0.054	3.12	1.12	0.575	0.050	4.16	100.00
周辺土1	2.06	0.86	19.90	67.84	0.32	0.076	3.16	1.18	0.585	0.041	3.98	100.00
周辺土2	2.09	0.89	19.42	68.41	0.30	0.072	3.09	1.17	0.587	0.046	3.92	100.00
周辺土3	2.01	0.87	19.34	68.52	0.28	0.070	3.13	1.20	0.580	0.044	3.94	100.00
最小値	1.93	0.86	19.09	67.12	0.23	0.054	3.09	1.11	0.575	0.041	3.92	/
最大値	2.09	0.94	19.90	68.78	0.37	0.076	3.17	1.20	0.596	0.050	4.88	
平均値	2.01	0.89	19.50	68.13	0.30	0.070	3.14	1.16	0.585	0.046	4.18	
誤差	0.02	0.01	0.03	0.07	0.01	0.004	0.01	0.01	0.006	0.001	0.02	



図版1 埋設土器の出土状況と各試料の土壌試料のマイクロスコープ写真

1. 埋設土器の出土状況 2. 埋設土器内上部埋土（矢印位置が土器接触面）
3. 埋設土器内下部埋土（矢印位置が土器接触面） 4. 周辺土壌1
5. 周辺土壌2 6. 周辺土壌3

付論10 朝日遺跡（第14次）の花粉化石群集

新山雅広（パレオ・ラボ）

1 はじめに

朝日遺跡は、名古屋市西区と西春日井郡春日町・清洲町・新川町にわたる弥生時代の集落遺跡である。14次発掘調査は、名古屋市西区中沼町市営平田荘内で行われ、弥生時代中期の方形周溝墓群などが検出された。ここでは、方形周溝墓の周溝埋土などを試料とし、古植生および古環境を推定する目的で花粉化石群集の検討を行った。

2 試料

花粉化石群集の検討は、3区溝、6区SD05およびSD07、7区SD08西およびSK09より採取された合計22試料について行った。以下に、各試料の記載を示す。

3区溝（試料1～10；計10試料）：試料1は暗灰黄色シルト。試料2は黄灰色粘土質シルト。試料3は黄灰色粘土質シルトで炭化物片が混じる。試料4は黒褐色～黄灰色粘土質シルトで炭化物片が混じる。試料5は黒褐色粘土質シルトで炭化物片が混じる。試料6は黒色粘土。試料7は黒色～黒褐色粘土（粘性高い）で炭化物片が混じる。試料8は黒褐色砂混じり粘土（粘性高い）で根状遺体が混じる。試料9は黒褐色～黄灰色粗砂質粘土（粘性高い）。試料10は黒褐色～黄灰色粘土質粗砂。なお、試料4および試料8の土層は放射性炭素年代測定（AMS法）が行われた。その結果、1 σ 歴年代範囲において試料4はcal AD340-430年（95.3%）、試料8はcal BC65-AD5年（73.0%）と測定され、試料4は古墳時代前期から中期、試料8は弥生時代中期の年代であった。

6区SD05（試料05-1～5；計5試料）：試料05-1は黄灰色砂混じりシルト質粘土で褐鉄鉱が発達する。試料05-2は黒褐色粘土で砂・炭化物片が少し混じり、褐鉄鉱が発達する。試料05-3は黒褐色粘土で砂・炭化物片が少し混じり、褐鉄鉱が発達する。試料05-4は黒褐色砂混じり粘土で根状遺体が混じる。試料05-5は黒褐色砂混じり粘土。

6区SD07（試料07-1～5；計5試料）：試料07-1は黄灰色粘土で褐鉄鉱が発達する。試料07-2は黄灰色粘土で炭化物片が少し混じり、褐鉄鉱が認められる。試料07-3は黄灰色砂混じり粘土。試料07-4は黒褐色～黄灰色砂混じり粘土で根状遺体が混じる。試料07-5は黄灰色砂混じり粘土で根状遺体が混じる。

7区SD08西（1試料）：最下層下部より採取された。黒褐色砂質粘土（粘性高い）。

7区SK09（1試料）：黒色砂混じり粘土で炭化物片が混じり、褐鉄鉱が認められる。なお、本試料は約6000cm³を用いて大型植物化石の検討も試みたが、全く含まれていなかった。

3 方法

花粉化石の抽出は、試料約2～3gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）の順に物理・化学的処理を施すことによ

表1 3区溝の花粉化石産出一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
樹木											
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	-	2	2	-	1	-	-	-	-
モミ属	<i>Abies</i>	-	-	1	1	-	-	1	1	-	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	1	1	3	-	-	1	1	-	2	-
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
マツ属複雑管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	-	-	1	2	-	-	-	-	1	-
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	2	1	3	-	1	-	3	2	3	-
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	8	9	11	6	-	2	12	2	5	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	19	12	25	18	5	8	14	1	18	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T. - C.	-	1	4	3	-	-	1	-	6	-
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-
サワグルミ属	<i>Pterocarya</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	1	-	-	-	-	-	1	-	1	-
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	8	2	7	4	-	1	2	-	2	-
ハンパミ属	<i>Corylus</i>	-	-	4	-	-	-	1	-	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	4	8	6	3	-	-	2	-	-	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	9	6	7	3	-	-	-	2	4	1
ブナ属	<i>Fagus</i>	1	8	13	1	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	19	21	30	22	4	25	37	17	29	-
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	18	30	83	6	1	1	5	2	7	-
クリ属	<i>Castanea</i>	-	-	1	10	5	2	9	3	6	-
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	22	16	28	17	-	10	17	3	11	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	1	3	4	3	-	-	1	-	3	-
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	1	-	4	1	-	-	-	-	-	-
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-
ユズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	4	1	-	-	-	-	-	-	1	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	-	-	-	-	2	3	-	3	-
ブドウ属	<i>Vitis</i>	1	2	1	-	1	4	6	-	-	-
マタタビ属	<i>Actinidia</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	2	1	-	-	-	3	-	1	-
ミズキ属	<i>Cornus</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ツツジ科	Ericaceae	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ハイノキ属	<i>Symplocos</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
草本											
ガマ属	<i>Typha</i>	-	1	5	-	-	-	1	-	1	-
ガマ属-ミクリ属	<i>Typha - Sparganium</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-
ヒルムシロ属	<i>Potamogeton</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
サジオモダカ属	<i>Alisma</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	1	2	1	1	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	41	84	160	21	2	7	89	15	44	5
カヤツリグサ科	Cyperaceae	11	18	21	2	-	-	2	1	5	-
イボクサ属	<i>Aneilema</i>	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	1	-	2	-	-	-	3	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	2	4	15	1	-	1	3	-	1	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	-	1	2	-	-	1	-	-	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-
アブラナ科	Cruciferae	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
マメ科	Leguminosae	-	1	1	1	-	-	3	2	-	-
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	17	7	13	2	-	1	5	-	4	-
アカネ属-ヤエムグラ属	<i>Rubia - Galium</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	17	20	39	32	3	15	84	46	55	2
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	1	2	6	2	3	5	3	5	-
タンポポ科	Liguliflorae	1	-	-	1	1	6	8	7	6	-
シダ植物											
単条型孢子	Monolete spore	41	42	18	15	7	17	66	17	105	9
三条型孢子	Trilete spore	3	1	3	8	3	3	12	2	9	-
樹木花粉											
樹木花粉	Arboreal pollen	121	126	245	103	17	57	119	35	109	1
草本花粉	Nonarboreal pollen	93	144	265	70	8	33	208	74	124	7
シダ植物孢子	Spores	44	43	21	23	10	20	78	19	114	9
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	258	313	531	196	35	110	405	128	347	17
不明花粉											
不明花粉	Unknown pollen	26	17	21	26	16	18	42	12	31	9

T. - C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

表 2 6 区SD05・SD07、7 区SD08西・SK09の花粉化石産出一覧表

和名	学名	05-1	05-2	05-3	05-4	05-5	07-1	07-2	07-3	07-4	07-5	SD08	SK09
樹木													
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
マツ属 (不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	1
草本													
イネ科	Gramineae	-	-	2	5	5	-	2	-	-	-	-	6
カヤツリグサ科	Cyperaceae	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	5
クワ科	Moraceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	-	2	3	-	-	-	-	-	-	2
ヒルガオ属	<i>Calystegia</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
アカネ属-ヤエムグラ属	<i>Rubia - Galium</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	4	6	4	25	6	1	-	4	3	1	43	6
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
タンポポ亜科	Liguliflorae	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
シダ植物													
単葉型孢子	Monolete spore	1	-	2	1	3	7	5	4	1	-	11	1
三葉型孢子	Trilete spore	-	-	-	1	1	-	2	-	-	-	1	-
樹木花粉	Arboreal pollen	0	0	3	2	1	0	1	0	1	0	0	9
草本花粉	Nonarboreal pollen	5	6	7	35	16	1	2	4	4	1	62	8
シダ植物孢子	Spores	1	0	2	2	4	7	7	4	1	0	12	1
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	6	6	12	39	21	8	10	8	6	1	83	9
不明花粉	Unknown pollen	2	6	13	21	13	0	10	3	2	1	29	6

り行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

4 花粉化石群集の記載

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉37、草本花粉25、形態分類で示したシダ植物胞子2である。以下に、各地点の花粉化石群集を記載する。なお、3区溝以外の地点は、十分な花粉化石が産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。

3区溝（試料1～10；計10試料）：3区溝の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より2つの花粉化石群集帯を設定することができる。Ⅰ帯（試料4～10）は、樹木花粉の占める割合が下部（試料9）～中部（試料7）では30%前後と低率であるが、最上部（試料4）では50%程度にまで増加する。コナラ亜属の多産（20～30%前後）で特徴付けられ、スギ属、シイノキ属も10～20%前後で比較的高率である。他に、コウヤマキ属、クリ属が概ね10%以下で、アカガシ亜属が5%前後で出現し、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属、トチノキ属なども低率で出現する。草本花粉は、イネ科（10～20%前後）とヨモギ属（20%前後）が高率であり、ガマ属、カヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、カラマツソウ属、他のキンポウゲ科、マメ科、セリ科、他のキク亜科、タンポポ科などが低率で出現する。シダ植物胞子は単条型胞子が高率であり、下位の試料9では30%程度に達し、その後減少傾向が見られる。Ⅱ帯（試料1～3）は、樹木花粉の占める割合は40～50%程度である。アカガシ亜属（約15～34%）の急増・多産で特徴付けられるが、上位に向かって減少傾向が見られる。スギ属、コナラ亜属、シイノキ属は10～20%前後で依然として比較的高率であるが、コナラ亜属は下位帯に比べてやや減少傾向が見られる。他に、コウヤマキ属、クマシデ属－アサダ属、カバノキ属、ハンノキ属、ブナ属がやや目立ち、ツガ属、マツ属（不明）、ヤマモモ属、ニレ属－ケヤキ属、カエデ属、ブドウ属、ウコギ科などが低率で出現する。草本花粉は、イネ科が約30%に急増し多産するが、上位に向かって減少傾向が見られる。一方、ヨモギ属は6～7%程度にまで減少する。他は、カヤツリグサ科、セリ科が若干目立ち、ガマ属、ヒルムシロ属、オモダカ属、サナエタデ節－ウナギツカミ節、アカザ科－ヒユ科、アリノトウグサ属、他のキク亜科などが低率で出現する。シダ植物胞子は単条型胞子が依然として比較的高率であり、一端3%程度にまで減少するが、その後増加し約16%に達する。

6区SD05（試料05-1～5；計5試料）：樹木花粉はヤナギ属、ハンノキ属、アカガシ亜属、シイノキ属が僅かに産出した。草本花粉は、ヨモギ属が全試料から産出し、下位試料でイネ科、セリ科が産出した。また、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、ヒルガオ属、アカネ属－ヤエムグラ属、オミナエシ属、他のキク亜科、タンポポ科が僅かに産出した。

6区SD07（試料07-1～5；計5試料）：樹木花粉はツガ属、シイノキ属のみが僅かに産出した。草本花粉

は、僅かながらもヨモギ属が大半の試料で産出し、イネ科、ナデシコ科が僅かに産出した。

7区SD08西(1試料): 樹木花粉はマキ属、マツ属(不明)、スギ属、コナラ亜属、シイノキ属が僅かに産出した。草本花粉は、ヨモギ属が多産し、イネ科、カヤツリグサ科、クワ科、アカザ科-ヒユ科、セリ科、他のキク亜科、タンポポ亜科が僅かに産出した。

7区SK09(1試料): 草本花粉のみでヨモギ属、タンポポ亜科が僅かに産出した。

5 考察

十分な花粉化石を産出したのは、3区溝試料のみであった。ここでは、主に3区溝試料の花粉組成から遺跡周辺の古植生および古環境の変遷について述べる。

[3区溝I帯(試料4~10)の古植生および古環境]

森林植生については、落葉広葉樹のコナラ亜属が優占し、針葉樹のスギ属、コウヤマキ属、落葉のクリ属、常緑のシイノキ属を主要素とした混交林が成立していたと予想される。このうち、クリ属、シイノキ属は虫媒花であることから、比較的遺跡近辺に生育していたであろう。一方、草本類はイネ科、ヨモギ属、シダ植物が繁茂し、カラマツソウ属、他のキク亜科、タンポポ亜科などが混じる草地が成立していたと予想される。調査区内で検出された方形周溝墓周溝の壁面などには、当時生育していた草本類の痕跡ではないかと思われる斑紋が一面に散在していた。生育していた草本類が何であるのかを明確にするための試料は得られなかったが、周溝墓成立時期前後には花粉化石群集から見ると、イネ科、ヨモギ属、シダ植物が繁茂していたことが予想されるので、これらが生育していた痕跡を示している可能性が考えられる。また、I帯上部の試料4~6の土層は、炭化物の集積が認められ、特に年代測定用試料とした試料4の土層は、炭化物の集積が顕著な灰層であり、調査区内全域で認められた。これは、周溝墓以降の時期に調査区内に広がっていた草地が何らかの理由により、焼き払われたことを意味するのではないかと思われる。試料7以下では多産していた草本花粉が試料6で急減し、試料4で見られるようにイネ科、ヨモギ属、単条型胞子が一様に減少する傾向があるのは、焼き払われたことによる草地の減少を示唆している可能性が考えられる。なお、現段階ではイネ科花粉を属まで絞り込むことは困難であるが、プラント・オパール分析の結果を考慮すると、明らかな減少傾向が認められるのはウシクサ族であり、周溝墓成立時期前後に繁茂していたウシクサ族がその後、減少していった可能性が考えられる。

3区溝の堆積環境については、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属などの抽水植物が出現するので、水位の低い湿地ないし水溜りのような環境であったと予想される。あるいは、溝に近接した場所にそのような環境が存在していたことを意味する。しかし、I帯は花粉化石が十分に保存されていない試料も多く、産出した試料も花粉化石の保存状態が悪いものが目立ち、辛うじて保存されたように見受けられた。このことから、この時期の3区溝は、安定した滞水環境が続いていたのではなく、乾燥していた時期もあり、時にじめじめとした程度の水付きになることもあるという状況であったと考えられる。なお、方形周溝墓の6区SD05およびSD07や7区SD08 およびSK09は、花粉化石の保存状況が非常に乏しいので、水成堆積物の可能性は低く、少なくとも安定した滞水環境で堆積したものとは考え難い。

[3区溝II帯(試料1~3)の古植生および古環境]

常緑広葉樹のアカガシ亜属が急増して優占し、シイノキ属と共に照葉樹林を形成していたと予想される。

照葉樹林要素としては、ヤマモモ属なども混じっていたであろう。森林を構成する主要素は、I帯に引き続きコナラ亜属、スギ属、コウヤマキ属であったと予想されるが、コナラ亜属は幾分減少し、クリ属も殆ど見られなくなった可能性がある。これら森林には、クマシデ属ーアサダ属、カバノキ属、ハンノキ属、ブナ属などの落葉広葉樹も混じり、蔓性のブドウ属が絡み付いていたであろう。

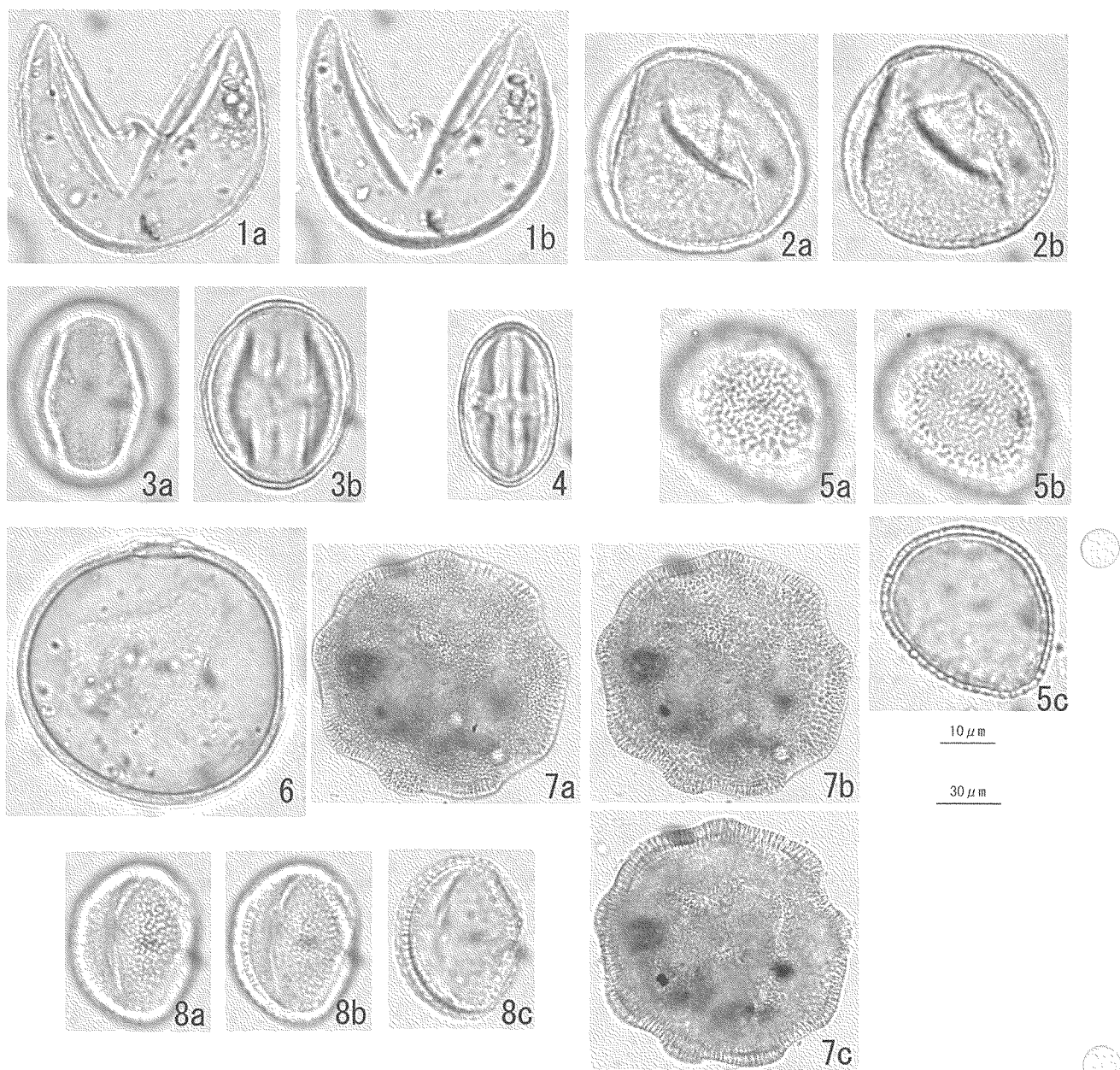
この時期の3区溝は、ガマ属、オモダカ属などが生育する水位の低い湿地ないし水溜りであり、近接した場所にそのような環境が存在していた可能性も考えられる。II帯試料の花粉化石の保存状態は良好であり、I帯の時期とは異なり、安定した滞水環境であったのだろう。なお、イネ科に増加傾向が見られるが、プラント・オパール分析では試料1、2でイネのプラント・オパールが多く検出されており、水田稲作が開始された可能性が高い。このように、今回の花粉、プラント・オパールの両分析結果を踏まえると、朝日遺跡(第14次)における明らかな水田稲作の開始時期は、試料4(古墳時代前期~中期)より後の試料2の時期以降の可能性が高いと考えられる。そして、水田の畦畔や溝の土手など、幾分乾き気味の場所には、ヨモギ属、シダ植物をはじめ、アカザ科ーヒユ科、アリノトウグサ属、他のキク亜科などが混じる比較的人間の干渉の強い草地も見られたであろう。

6 おわりに

3区溝試料の花粉化石群集から、以下のような古植生および古環境が推定された。

I帯(試料4~10)の時期には、落葉広葉樹のコナラ亜属が優占し、針葉樹のスギ属、コウヤマキ属、落葉のクリ属、常緑のシノキ属を主要素とした混交林が成立していたと予想された。方形周溝墓周溝などの付近一帯には、イネ科(ウシクサ族主体か)、ヨモギ属、シダ植物が繁茂する草地が存在していたが、この草地は後(試料4~6の時期)に焼き払われて縮小した可能性が考えられた。3区溝は安定した滞水環境ではないものの、辛うじて水付きの時期もあったが、方形周溝墓周溝などの他の遺構は乾燥した環境下であったことが予想された。

II帯(試料1~3)の時期には、アカガシ亜属が急増し、シノキ属などと共に照葉樹林を形成していたことが予想された。主要素は、引き続きコナラ亜属、スギ属、コウヤマキ属であったが、クリ属は殆ど見られなくなった可能性が考えられた。3区溝は安定した滞水環境であり、試料2の時期以降に水田稲作が開始されたと考えられた。また、ヨモギ属、シダ植物をはじめ、アリノトウグサ属などが混じる比較的人間の干渉の強い草地の存在が予想された。



図版1 産出した花粉化石(scale bar 10 μ m: 1~6, 8 30 μ m: 7)

1. スギ属、3区溝-5、PAL. MN 2255
2. コナラ属コナラ亜属、3区溝-9、PAL. MN 2257
3. コナラ属アカガシ亜属、3区溝-5、PAL. MN 2254
4. シイノキ属、3区溝-5、PAL. MN 2252
5. ガマ属、3区溝-4、PAL. MN 2256
6. イネ科、3区溝-5、PAL. MN 2253
7. ヒルガオ属、6区SD05-4、PAL. MN 2251
8. ヨモギ属、3区溝-9、PAL. MN 2258

付論11 朝日遺跡（第15次）の花粉化石群集

新山雅広（パレオ・ラボ）

1 はじめに

朝日遺跡は、名古屋市西区と西春日井郡春日町・清洲町・新川町にわたる弥生時代の集落遺跡である。14、15次発掘調査は、名古屋市西区中沼町市営平田荘内で行われ、弥生時代中期の方形周溝墓群などが検出された。ここでは、15次調査で検出された方形周溝墓の周溝埋土を試料とし、古植生および古環境を推定する目的で花粉化石群集の検討を行った。

2 試料と方法

花粉化石群集の検討は、弥生時代の方形周溝墓周溝（SD01）埋土より採取された合計4試料について行った。各試料は、試料1が灰色シルト質粘土で褐鉄鉱が発達する。試料2は黄灰色シルト質粘土で褐鉄鉱が発達する。試料3は黄灰色～暗灰黄色粘土で炭化物片が少し混じる。試料4は黄灰色砂質粘土である。

花粉化石の抽出は、試料約2～3gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート1～2枚の全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

3 花粉化石群集の記載

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉24、草本花粉12、形態分類で示したシダ植物胞子2である。試料2以外は十分な花粉化石を産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。試料2は樹木花粉の占める割合は30%程度であり、アカガシ亜属、コナラ亜属、シイノキ属、スギ属の順に10～15%前後で出現する。他に、コウヤマキ属、カバノキ属、ハンノキ属、ブナ属、クリ属、トチノキ属が5%前後で出現し、ヤマモモ属、モチノキ属、カエデ属なども低率で出現する。草本花粉はイネ科が30%程度で高率であり、カヤツリグサ科、ヨモギ属も比較的目立つ。他に、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、ヒシ属、ゴキヅル属—アマチャヅル属、他のキク亜科などが低率で出現する。シダ植物胞子は単条型胞子が10%程度で比較的目立つ。

4 考察

SD01で花粉化石が比較的多産したのは試料2のみであり、その他の試料は保存状況が悪かった。試料

表1 花粉化石産出一覧表

和名	学名	1	2	3	4
樹木					
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	1	-	-
マツ属 (不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	2	-	-
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	7	-	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	-	10	-	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.- C.	-	3	-	-
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	2	-	-
クマシデ属-アサグ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	1	2	-	-
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	-	1	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	-	5	1	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	2	8	-	-
ブナ属	<i>Fagus</i>	-	5	-	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	-	16	6	-
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	1	18	1	-
クリ属	<i>Castanea</i>	1	5	-	1
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	3	11	-	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	-	1	-	-
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	1	-	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	-	-	3	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	3	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	3	-	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	4	-	-
ツツジ科	<i>Ericaceae</i>	-	1	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	2	-	-
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	-	-	1	-

草本					
サジオモダカ属	<i>Alisma</i>	-	1	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	5	-	-
イネ科	Gramineae	16	109	3	1
カヤツリグサ科	Cyperaceae	3	33	-	-
ミスアオイ属	<i>Monochoria</i>	-	1	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	1	-	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	1	-	1
ヒシ属	<i>Trapa</i>	-	1	-	-
セリ科	Umbelliferae	2	5	-	-
ゴキヅル属-アマチャヅル属	<i>Actinostemma - Gynostemma</i>	-	1	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	4	18	2	3
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	5	1	-

シダ植物					
単条型孢子	Monolete spore	12	36	25	12
三条型孢子	Trilete spore	1	8	1	1

樹木花粉	Arboreal pollen	8	111	12	1
草本花粉	Nonarboreal pollen	25	181	6	5
シダ植物孢子	Spores	13	44	26	13
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	46	336	44	19

不明花粉	Unknown pollen	7	30	15	1

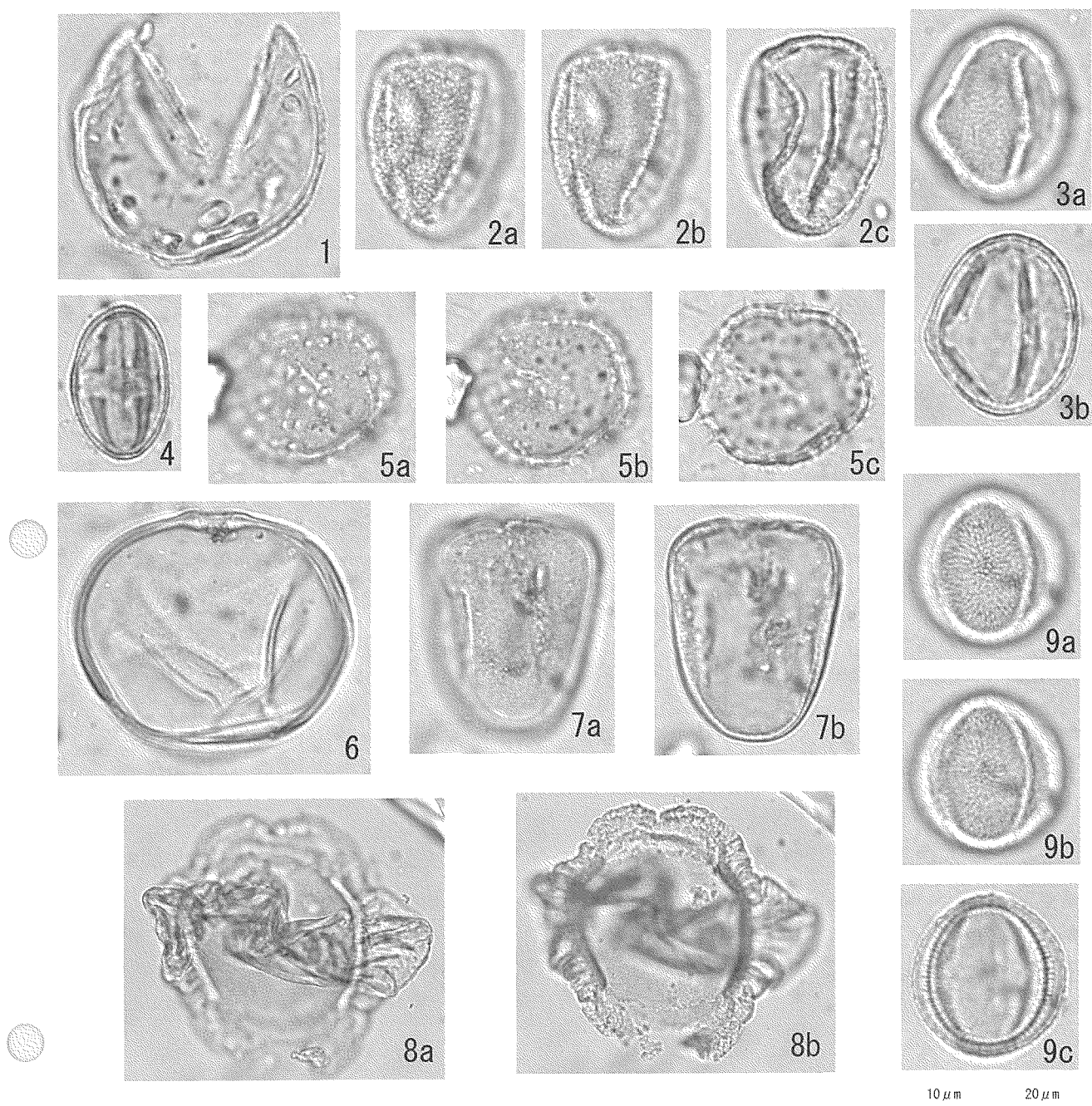
T. - C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す

2の土層は、調査区内全域で検出された灰層が狭在しており、14次調査における灰層の放射性炭素年代測定（AMS法）では、1 σ 歴年代範囲においてcal AD340-430年（95.3%）と測定され、古墳時代前期から中期の年代であった。

この時期はアカガシ亜属、シイノキ属を主とし、ヤマモモ属などが混じる照葉樹林が成立していたと予想される。主要素は、針葉樹ではスギ属、コウヤマキ属、落葉広葉樹ではコナラ亜属、ハンノキ属などであつたらう。SD01内あるいは近接した場所は、浮葉植物のヒシ属が生育するような幾分水深のある水域であり、浅い場所には抽水植物のサジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属などや水辺には蔓性のゴキヅル属—アマチャヅル属が生育していたと考えられる。多産するイネ科は属まで絞り込むことは困難であるが、比較的高率であり、いわゆる水田雑草のオモダカ属などが随伴することから、水田が存在し、イネを起源とするものを含む可能性が考えられる。また、付近の乾き気味の場所にはヨモギ属、シダ植物をはじめ、アカザ科—ヒユ科、他のキク亜科などが混じる草地も存在していたであらう。なお、試料2以外は花粉化石の保存状況が悪かつたことから、SD01は当初（試料3、4）水付きではなかつたが、一端滞水し（試料2）、再び乾燥化した（試料1）ことが予想される。

5 おわりに

SD01内の堆積物を検討した結果、試料2の時期（古墳時代前期～中期）はアカガシ亜属、シイノキ属から成る照葉樹林が成立しており、スギ属やコナラ亜属などを主要素としていたことが予想された。SD01内あるいは近接した場所は、幾分水深のある水域であり、ヒシ属やオモダカ属などが生育していたと考えられた。また、付近には水田が存在していた可能性があり、ヨモギ属などから成る草地の存在も予想された。SD01の堆積環境は、試料2の時期以外は、水付きではない可能性が高く、少なくとも安定した滞水環境ではなかつたと考えられた。



図版1 産出した花粉化石 (scale bar 10 μ m : 1~7、9 20 μ m : 8)

1. スギ属、No. 2、PAL. MN 2265
2. コナラ属コナラ亜属、No. 2、PAL. MN 2262
3. コナラ属アカガシ亜属、No. 2、PAL. MN 2266
4. シイノキ属、No. 2、PAL. MN 2259
5. オモダカ属、No. 2、PAL. MN 2260
6. イネ科、No. 2、PAL. MN 2261
7. カヤツリグサ科、No. 2、PAL. MN 2263
8. ヒシ属、No. 2、PAL. MN 2269
9. ヨモギ属、No. 2、PAL. MN 2264

報 告 書 抄 録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	埋蔵文化財調査報告書
副書名	朝日遺跡（第13・14・15次）
巻次	54
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告
シリーズ番号	69
編著者名	深澤芳樹・難波洋三・石黒立人・黒沢 浩・樋上 昇・永井宏幸・高妻洋成・降幡順子・堀木真美子 藤根 久・新山雅広・鈴木 茂・小林紘一・丹生越子・伊藤 茂・山形秀樹・Zaur Lomtavidze・Ineza Jorjoliani ／野澤則幸・伊藤正人・伊藤厚史・村木 誠・野邊地章太
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館
所在地	〒457-0026 愛知県名古屋市南区見晴町47 TEL 052-823-3200 FAX 052-823-3223
発行機関	名古屋市教育委員会
所在地	〒460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL 052-972-3268 FAX 052-972-4178
発行年月日	西暦2006（平成18）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あさひいせき 朝日遺跡	なごやしにしく 名古屋市西区 なかぬまちょう 中沼町	23100	3-4	35° 13' 27"	136° 51' 26"	13次／2004.1.5 ～2004.3.31	850㎡	市営住宅建 築関連事業
						14次／2004.5.10 ～2004.12.24	2038㎡	
						15次／2005.1.24 ～2005.3.11	200㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
朝日遺跡	集落跡	弥生時代	方形周溝墓	弥生土器、石器	13次調査
朝日遺跡	集落跡	弥生時代	方形周溝墓、竪穴住居跡	弥生土器、石器、石製銅鐸鑄型片 玉作り関連資料	14次調査
朝日遺跡	集落跡	弥生時代	方形周溝墓	弥生土器、石器	15次調査

名古屋市文化財調査報告69
 埋蔵文化財調査報告書54
 朝日遺跡（第13・14・15次）
 2006年3月31日 初版発行
 2007年3月30日 再版発行

 編集 名古屋市見晴台考古資料館
 発行 名古屋市教育委員会
 印刷 菱源株式会社

